

---

# 二度目の楽園

月原みなみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二度目の楽園

### 【Nコード】

N3284C

### 【作者名】

月原みなみ

### 【あらすじ】

ある日、六条中流は自宅の前に傷だらけで倒れていた少年・倉橋尋人を助けることになり。遙か古に滅びた異世界の民、里族の転生者によるボーイズラブ・ストーリー。同性愛要素を多分に含みますので苦手な方はご注意ください。

## 二度目の楽園 序

ふと目を覚ますと、美味しそうな珈琲の香りと遮るものがない日光とが一緒になって周囲を包み、傷ついた身体は柔らかく温かな布団の中に横たえられていた。

「……………」

見慣れない光景に少年は戸惑ったが、寝起きの頭は思うように働かず、上半身を起こすだけで精一杯だ。

改めて辺りを見渡すが、やはりこの、十帖ほどの洋室に見覚えは無い。

自分が寝かされていたベッドはモノトーンで統一されたシンプルなもの、足先の壁は半分がクローゼットの木目の扉。すぐ隣には写真関係の雑誌と、英語・仏語などの辞書が乱雑に積まれた机があり、椅子の足元には使い古された鞆が無造作に置かれていた。

南向きの窓の傍には鉄製のパソコンデスクと低めの棚。その棚の上には大小さまざまな数台のカメラが並べられ、そしてこの、ベッド側の壁一面に貼られた無数の写真。

風景画が主なようだったが、中には両親らしい高齢の男女の姿や、思わず感嘆してしまう美貌の人物も複数見られた。

「写真関係の人の部屋……………」

それも結構なお金持ち。

そうとしか考えられない広さと内容の部屋模様、少年は無意識に呟いていた。

「あ……………」

壁に貼られた写真の中の一枚に知っている人物を見つけて、少年は頬を火照らせた。

まさか。

けれど、もしもそうなら……………」

戸惑いと期待が半々に胸を占め、少年はその写真に触れようと手

を上げる。同時に腕に巻かれている包帯に気付いてハツとした。それをきっかけに自分の全身を確かめて、鈍い痛みを感じるすべての箇所、傷の状態に見合った手当てが施されていることを知った。

「まさか…先輩…？」

写真の中の“彼”。

本当に彼が手当てしてくれた本人なら…、少年はそう思うだけで心臓が爆発してしまいそんな錯覚に陥った。

顔が赤いのは自分でも解る。

自分が寝かされていたのが“彼”のベッドだと思つとそれだけで苦しくなり、少年は慌てて、けれど傷ついた身体を庇いながら静かにベッドを降りた。

手当てした上半身に着せられていたシャツは自分のものでなく、サイズが大きくて洗い立てのにおいがする。寝やすいようにと思いついてくれたのか、穿いていたジーンズも綿の部屋着に換えられており、昨夜何があつたのか考えれば考えるほど顔の火照りは熱くなる。

「わあっ…、どーしよう…」

シャツの下の腹部にも、右の素足にも清潔で白い包帯が巻かれている。

こんな怪我だらけの自分を、“彼”は…、この部屋の主はどんなふうに思つただろう。

少年は、ようやく覚醒した頭の中で昨夜の記憶を呼び出した。

どうしてすぐに思い出せなかったのか。

そう自問して、答えは難なく出された。

ここが、自分がいるべき場所とはかけ離れた穏やかな空間だからだ。

枕元に光を射した東向きの窓から外に広がるのは真っ青な秋晴れの空、そののみ。

南向きの、これから日光を取り入れる窓の向こうは色を変え始めた木々の葉と、やはり青一色の果てしない空。

地上と切り離されたように見える光景が、少年に無自覚の夢想感を与えていたのだ。

「……ここ、三階なんだ」

南側の窓から外を見下ろしてそれを知る。周囲は二階建て、もしくは平屋の一軒家ばかりが立ち並び住宅街で、一番近くの高層マンションなどは人差し指の太さ程度しかない。

「……、本当に先輩の部屋なのかな……」

何度も心の中で呟いていた問を、今度は口にして、少年は部屋を出た。扉を開けたとたんに珈琲の香りが強くなり、階下の様々な音が耳に届く。

電気音や、足音、複数の声。

途中でカーブの掛かった木目の階段をゆっくり、一段ずつ下りた少年は二階で立ち止まった。

これより下にはひっそりとした暗い雰囲気があり、空気も冷たく感じられ、生活の音はこの階からしか聞こえない。

「……」

足音を忍ばせて音のする方へ歩を進める。

テレビの、よくあるトーク番組が聞こえ、珈琲の香りはいつそう強くなって鼻先を掠める。

締め切られていなかった扉に手を掛け、緊張した面持ちで中に入った少年は、そこでピタリと足を止めた。

広いリビング。

大きなベランダ。

天井はひどく高く、リビングの端にある円状の階段は吹き抜けになった三階へとつながっていた。

リビングと、ダイニングと、そしてキッチンや和室まで遮るものは何も無く、テレビの特別番組などで紹介される有名人の豪邸に迷い込んでしまったようだ。

「……」

思わず声を漏らしてしまってから、少年は恐る恐る足を動かして

リビングの中央まで進んだ。一瞬、ここが“彼”の家だったらどうしようかと困惑していた気持ちも忘れて立ち尽くす。

その時だ。

少年の今の気持ちを正しく察した“彼”が小さく笑いながら少年の背後に現れた。

淹れたての珈琲を片手に持ち、薄青のワイシャツに濃紺のジーンズ、頭髪も服装もラフな格好の彼は、相手を落ち着かせる静かな声で話し掛けた。

「気が付いたみたいだな」

「！」

彼の方は驚かせまいと気を遣い、極力控えめに声を掛けたつもりだったが、少年の方はこの家の広さを実感してしまった後ということもあり、必要以上に体を強張らせて振り返った。

「あ…っ…」

少年は、その声を上げたきり、目を見開いて言葉を無くす。

予感的中。

ここは彼の

ろくじょうあたゐ  
六条中流の家だったのだ。

「大丈夫か？」

少年の動揺を理解しての優しい声音。

少年の怪我を手当てして自室のベッドに寝かせたのは彼こと六条中流本人だから、その怪我の理由も何となく察しが付いている。

だからこそ、せめてここにいる間だけは少年に安らいでほしいと思っただ。

「起きたら他人の家で驚いただろうけど、心配しなくていいからな。俺は六条中流。家の中には母親もいるし、おまえに危害を加えたりはしないよ」

中流の言い方から、自分が彼を警戒していると思われる事に気付いた少年は慌てて首を振った。

「ちが…っ、あの…、えっと…その、どうして僕…ここに…」

「え？」

「昨夜何があったのかは解っているんですけど、どうしてその…、六条…、さんの家に僕がいるのか…」  
「どうして…って」

少年のうるたえように首を傾げつつ、中流は手近にあったテーブルにカップを置いて言う。

「おまえが家の近くで倒れていて、このままじゃ死ぬと思った俺が部屋に運んだからだよ」

「近くで…?」

「声掛けても起きなくて、顔見知りなら家まで送ってやれたけど、家どころか名前も分からないんじゃないだろうか？ おまけにほとんど全身から血い出てるし」

体のことを言われて青くなる少年の顔色を窺いながら、中流は続ける。

「事故にでも遭ったのか？ 理由なんか知らないが寝かせてシーツに血が付くのは避けたかったから勝手に手当てしたぞ」

「あ…。ありがとうございます…。それに、ご迷惑をお掛けして本当にすみませんでした」

今にも消え入りそうな小さな声。

それでも感謝と謝罪を忘れない少年の態度に、中流はそっと微笑した。

「腹は？」

「え？」

「腹は空いていないかって。飯食う元気があるならすぐに用意するけど?」

「で、でも…」

「迷惑だと思っているなら今更だ」

非難するのとは違う陽気な物言い。

彼の人柄がにじみ出たような接し方に思わず笑みが毀れて、少年はお願いしますと頭を下げた。

「好きなところに座って待ってる」

言い置いてキッチンに戻る中流の背を、少年はじつと見つめた。

一七五前後の、高二男子の平均的背格好。少し長めの黒髪は日に当たると明るい茶に色を変え、目の色も角度によっては薄くなる。日本人のそれに比べると彫りの深い顔立ちはバランスよく整っているが、活発という印象が強くて非常に親しみやすい人物だ。

着せられた大き目のシャツが彼のものだと思い出して再び頬を赤らめ、彼に介抱されたのだという事実<sup>に</sup>鼓動が高鳴る。

彼は自分を知らない。

話したことどころか、顔を合わせたこともない。

同じ<sup>さかき</sup>榊学園の先輩後輩であつても校舎が違えば偶然に頼ることも出来なかつたから。

それでも、ずっと話してみたかつた。

今、こうして二人でいることが夢じゃないのかと思うくらい願っていた。

「…先輩……」

思わず口を付いて出た言葉は、ただの音として相手に届く。

「何か言つたか？」と、背を向けたまま尋ねる中流に、少年は「いえ」と首を振る。

「何でもないです」

「ん？」

ふと声の調子が変わつたのを不思議に思つて振り返つた中流は、今までになく穏やかな顔をしている少年に一瞬面食らつたが、ここが危険な場所じゃないと解つてもらえたなら喜ぶべきことだろう。

「ああそつだ。三時からバイト入っているんだけどさ。家に送るの、その時でいいか？」

「え……」

「またどつかの家の前で倒れられたら困るからさ」

「でもこれ以上の」

「迷惑なら今更だつて言つたら。大体、面倒だと思つたら行き倒れの身元不明人を助けるような真似はしないよ」



人によつては嫌味にしか聞こえない言葉が、中流の口から放たれると笑いを誘う呪文になる。

「それと、おまえ名前は？　いつまでも「おまえ」って言われるのが分悪いだろ」

そんなことはなかったが、少年は素直に名前を告げた。

「おまえ」と呼ばれるのは嫌ではない。

むしろ親しくなれたようで嬉しかった。

だが、名前だけでも覚えていて欲しいと、そう強く感じてしまつたから。

「尋人ひつとです。倉橋尋人くらはし」

「ヒロト…、字は？」

「えっと…、『尋』ねる『人』です」

「そっか」

頷いて、中流は用意し終えた朝食を食卓に並べた。

白いご飯と魚に味噌汁。

「ま、こんなもんだろ」

満足そうに呟いて、中流は少年に笑ってみせる。

「な、尋人」

中流に名を呼ばれて、少年は鮮やかな笑みで応えるのだった……。

## 二度目の楽園 一

榊学園は初等部から高等部までの一貫教育が取られている私立学園だ。

各等の四階建て校舎が三つと、東西に体育館が二つ。同様にグラウンドも二つあり、正門を通過してすぐの右手側には全校生徒が一度に入れる大きな講堂。

これらが広大な敷地の中に設けられている。

各学年全て四クラスで編成され、一階に一年生、二階に二年生、三階に三年生の教室。

四階には音楽室や生物室などの特別教室がある他は滅多に使われない教科ごとの教員室が並んでおり、授業の行われている日中は階下同様に賑わうのだが、放課後を迎えて生徒の半数が帰路に着くころは、四階だけが不気味な静けさに包まれ、その様子はさながら異世界のようなだった。

三つの校舎は各階同士をつなぐ渡り廊下で行き来できるようになっていて、その他に、どの等からも一階の渡り廊下を使って行けるのが全等合同の学生食堂。榊学園高等部二年四組に在籍する六条中流が頻繁に利用する昼休みの憩いの場だ。

十人近い友人達とテーブル二つを占領して昼食を取っていた彼らは、一人が自動販売機で飲み物を買ってくると言って立ち上がると、途端にブレザーのポケットから小銭を取り出し、その友人に握らせる。

「おれペットボトルのポカリ」

「コーヒーよろしく」

「じゃあ俺は牛乳な。パツクのやつ」

次々に言われるリクエストに閉口し、彼は隣に座っていた友人を強引に連れ立って席を離れた。

「飯食ってる途中に立ち上がるのは、頼んでくれて言ってるよう

なもんだろ」

「自分で自分の首絞めてやんの」

席を離れた友人の向かいに座っていた同級生が愉快そうに言い、周囲でやはり彼に小銭を握らせた少年達がコクコクと頷く。

だが中流だけはそれに同意せず。

「どうせ首を絞めるならこいつの首を絞めてやりたいけどな」と、険しい面持ちで発言した。

「同感だな」と瞬時に上がる賛同の声。

言われている本人は、何のことも分からない様子で目をぱちくりさせていた。

この中で誰よりも中流と付き合いが長く、信頼関係も深いと思われる彼、本居尚也もとおりなおやは、学校全体でも五本の指に入ると言われる抜群の運動神経、達者な口、整った外観とが男女問わず多大な人気を集めている少年だ。

この尚也と中流は初等部一年生からずっと榊学園に通っており、もう十年以上の付き合いになる、いわば親友だ。

だがどんなに親しい間柄でも、本気で絞め殺したくなるくらい憎く思える時がある。それが中流の場合は今だった。

「なんだよそれ。俺、何かしたか？」

本当に解っていないさそうな尚也に、中流は軽く息を吐いて冷めた目を向ける。

他の同級生に比べると薄い茶色の瞳。

それは、彼が北欧出身の祖母から受け継いだ色だと友人達は聞く。

「別に俺達が何かされたわけじゃないから、おまえが自覚していないくても仕方ないとは思っけどさ……」

「？」

遠まわしに責める中流の言い方が、いつもの陽気なものとは微妙に異なっていて、付き合いの長い尚也は眉を寄せた。

周囲で飲料を待っている友人達も揃って中流の言い方に頷くから、尚也はいっそう困惑した、…が。

「な〜おや!」

突然の甘い声音に、呼ばれた本人以外の全員が、がっくりと肩を落とす。

「またか…」

一人がポツリと呟き、中流は言葉もなく額を抑えた。

尚也に駆け寄り、無邪気な笑顔を浮かべたのは隣のクラスに在籍する浅見理香<sup>あさみりか</sup>。肩下までの髪をポニーテールに結び、高二にしては童顔の小柄な少女だ。

彼女からの告白を尚也が受け入れて付き合い始めたのがほんの数日前で、つまり今の彼らは一番幸せなとき。

それは中流達も重々承知しているのだが、『新婚生活が始まったばかりの二人』といった甘々の光景は、独り者の彼らには非常にうざったい。

呆れて物も言えない自分達のすぐ傍で仲睦まじい恋人同士の会話をされたのでは、首を絞め殺したくなりもするだろう。

「浅見が最初のオンナってわけでもないだろうに、よくここまで熱くなれるよな…」

「尚也は派手に見えて実は純情だから」

「イイコト教えてやるうか? 尚也って浅見に半年くらい片想いだつたらしいぜ」

「げっ。どこからの情報だよ」

「もち中流」

「はぁーん。それで幸せの絶頂か」

最も信頼度の高い人物からの情報に彼らは納得した。

熱しやすく冷めづらい尚也の性格は、この場にいる友人なら誰もが知っている。

同様に、中流の口の堅さも周知の事実だったから、その彼が親友の半年に及ぶ片思いを他人に暴露したということが、尚也の想いの巨大きさを物語っていた。

当の本人は彼らの心境など知らぬ存ぜぬで恋人との会話に興じ、

ようやく全員分の飲料を買って戻ってきた二人は、やはり尚也と理香の姿に眉を寄せ、尚也に頼まれていたコーヒーを合図も無く放り投げた。

いきなり後頭部に物が当たり、それが頼んでいたコーヒーパックだと知った尚也は顔をしかめて振り返る。

「いきなり投げないで口で言えよ」

「自慢気にイチャつくなタコ」

冷めた口調で突っぱねられて、尚也は身に覚えのない扱われ方に慥然とした。

だが理香の方は無邪気に笑う。

「クスクス。皆も早くカノジョ出来るといいのにねー」

恋人がタコと呼ばれたのを愉快そうに聞くだけでなく、朗らかな笑顔でそんなことを言うから中流は頭を抱えた。

（悪意が無いって判る分、尚更、質が悪いんだよな）と、日替わり定食のカツを食べながら思った。

親友の悩みを聞き、時には愚痴も聞いていた中流は、半年を経てようやく恋が成就した尚也を心から祝福した。これでようやく彼の悩みの種は減り、何があるうと、事態は善い方向にしか変化しないだろうと考えていた。

そしてそれは間違いでなく、二人が付き合うようになってからというもの尚也の顔から笑みが絶えることはなかったし、彼が元気なら、その活気は教室中に感染してクラスの雰囲気をも陽気にした。中流自身、親友の悩みに付き合っただけの時間が犠牲になることもなくなったのだから、この状況は喜ばしいものはずだった。…だがしかし。

尚也は理香と付き合ってから仲間内での付き合いが悪くなり、もともと人見知りせず異性とも平気で仲良くしていた理香は、こうして昼休みの学生食堂に、中流達その他大勢の友人がいると解ついても尚也に会いに来る。

その結果がこれだ。

中流も含めて、二人が付き合う以前から理香と親しかった男子さえ尚也の付き合いが悪くなったのを面白くなく感じ、彼女が現れるたびに顔を曇らせるのだ。

そろそろ何らかの形で治めなければ、そのうち尚也が輪の中から外れそうな気がして、中流は内心、気が気ではなかった。

彼女が離れて行ったら、今度こそ、このことを尚也に話そう。

そう決心した中流はスプーンを置いて機会を待つ…、つもりだったのに。

「じゃあ尚也！ 放課後、教室の前で待っているからね」

「ああ」

尚也のその返答を聞いて、中流は目を見開いた。

「約束だよ？」

「解ってるって」

そうしてにつこり笑う親友の姿が信じられず、理香が離れ、ようやくこちらに顔を戻した尚也に素早く詰め寄った。

「尚也！？」

「っ、な、何だよ中流…」

どうして彼がこんな行動に出たのか、まるで解っていない様子の尚也に、周囲の友人達が呆れている。

本人よりも第三者の方が解っているのだから、ひどい話だ。

「尚也…、おまえ救いようのないパーだね」

「はあ？」

「なんで俺らが覚えていないことを、おまえが覚えていないわけ？」

「なんでって、何かあったか？」

冗談でもふざけているわけでもなく、本当に解っていない尚也は眉を寄せて困惑している。そんな彼を優に三十秒ほど睨みつけた中流は、大きな溜息をついて視線を外した。

恋人が出来て付き合いが悪くなったのは判っていたが、まさか自分で言い出した約束まで綺麗さっぱり忘れているとは思わなかった。「長い付き合いだったけど今日で終わりだな。せいぜい浅見とよる

しくやつてる」

「え、ちよ、中流？」

尚也は冷たく言い放つ親友に戸惑い、さっさと立ち上がってその場を離れていく彼に呆然としてしまう。

しかも近くの友人達も次々と立ち上がり、ボソツと言い残して去っていく。

「六条さあ…、今日はバイト休みじゃん」

「二ヶ月振りの休みだっけ？」

「それ判った四日前に、丁度良いからって約束したよなあ、俺達と」

「勇輔ゆうすけのライブ手伝いに、今日は放課後、ライブハウスに直行するってさ」

「あ…、あっ！」

ようやく思い出して顔色を変える尚也だったが、時既に遅し。

友人達は一様に尚也に冷めた視線を投げかけてその場を離れていってしまう。

尚也も慌てて立ち上がるが、誰一人としてそんな彼のことを気にする者はいない。

「ちよ…、待て！俺が悪かった！！」

必死の聲が、学生食堂の出入り口を通っていた中流にも聞こえたが、容赦なく無視を決め込んだ。

幸せボケしている尚也には、これもいい薬になるだろう。

そもそも全員が本気でないことは、あの場にいた全員が解っていることだから。

（あんな莫迦でも幸せボケしてられるってのに！　　ったく…、不公平な世の中だよな）

高等部校舎につながる渡り廊下を歩きながら、中流は二週間前に家の前で倒れていた少年のことを思い出した。

幸せボケした親友と、あの日の少年の笑顔を脳裏に並べて、中流は苛立たしい気分で食堂を後にした。





本当なら今日の放課後は、学校が終わってすぐに駅前のライブハウスへ向かい、バンド活動をしている同級生・山根勇輔の今夜行われるライブの手伝いに友人達五名と行くはずだった中流は、よりによって言いだしっぺの親友の無責任な態度が原因で、一人帰路に付いていた。

尚也を責めるのはあの場限りにして、放課後はちゃんと全員で友人の応援に行くつもりだったのだが、すぐに許しては効果が薄い、どうせなら二、三日無視して反省させた方がいいという友人の提案を受け入れ、中流一人が帰る事になった。

全員で無視するのは気が引けるが、一番親しい中流が怒ったとあれば、その方が尚也も態度を改めるはずだという結論に達したからだ。

今頃、強引に理香との約束をキャンセルさせられた尚也は、ライブハウスで様々な脅しを掛けられているに違いない。

例えば、

「六条は尚也の顔が見たくないから帰ったんだぞ」とか。

「誠心誠意込めて謝らなかつたら、本当に絶交されるぞ」だとか…。尚也ほどでなくとも、それなりに付き合いの長い友人達だ。彼らがどんなことを尚也に吹き込むかは簡単に予想がつく。同様に、尚也の方も彼らの言葉がどこまで本当なのか見抜いてしまえるとは思うのだが。

「…そんな簡単に行くなら、今まで時間掛かってねーって……」  
呟いて特大の溜息をつく中流。

せつかくの暇な放課後。

友人達との予定を入れて楽しみにしていたのがいきなりキャンセルになってしまった彼は、ひどく時間を持て余していた。

することがなく、話す相手もないでは、溜息も出てしまうと

うものだろつ。

気が付けば彼は敷明小路ふみんこうじを歩いていた。

北の大都市と呼ばれるこの街には、観光客が必ず訪れる名所というのが数多く存在し、敷明小路もそのうちの一つだった。

身内には『寝ずの街』と称され、日中と夜間では正反対の姿を見せる歩行者天国。

衣類・食品・雑貨などあらゆる商店が立ち並び、中には映画館・ゲームセンター・FF店も複数点在している。

十月とは言え、まだ日の出ている時刻。

日中の歩行者天国は制服姿の集団やデート中の男女など多くの若者達で溢れ、陽気で弾んだ声が四方八方に飛び交っている。

中流はその中を一人で歩きながら、再び大きな溜息をついた。

(今からでもライブハウスに行くか…)

あまりにすることがなくて、やはりそうしようと考えた中流は方向転換しかけたが、ふと視界に入った中学生の集団に目を止めた。

(…あいつも、たぶん中学生だよな)

それは二週間前に家の前で倒れていたのを見つけ、怪我の手当てをしたあの少年、倉橋尋人と名乗った彼を思い出しての呟き。

名前以外は自分のことを何も語らなかった少年は普通の中学生にしか見えなかったし、中流も普通に接していた。だが実際は、遣り切れない思いでいっぱいだった。

年齢や学校を尋ねると、悲しそうな顔をして俯いてしまうのを見るたび、自分の言葉の無神経さに苛立ちながら、気にしない素振りで別の話題を降った。

質問ではない普通の会話には無邪気な表情で応え、中流の用意した簡単な朝食を嬉しそうに食べ、家の近くまで送った時には満面の笑顔で深々と頭を下げた倉橋尋人。

数少ない言葉から窺えた純真な心。

表情がくるくると変わる彼が、ここにいる間だけでも安らげたら…、中流はそう思って必死だったのだ。

何故なら彼の全身　特に衣服で隠れる、見えない部分に集中した青痣や切り傷、火傷。

中流はそれを見て直感したのだ、この少年はいじめに遭っている、と。

(…ほんとにな……。あんないい子が酷い目に遭っていて尚也が幸せの絶頂にいるなんて、世の中絶対に間違ってるぞ)

顔をしかめて内心で息巻きながら、中流はライブハウスに向かって歩き始めた。

(そういえば尚也達がいるライブハウス、尋人と別れた近所だよな) 家まで送ると言ったが断られ、ここからすぐですからと、駅の手前で彼らは別れた。尋人の去った方向からして市街にあるマンションのどれかが彼の自宅なのだろう。

(あの辺ったら校区は五條か桜木か…)

近所の中学の名を思い浮かべながら、ようやく自分が、必要以上に尋人のことを気にしていると自覚した。

知られたくなくて名前以外は明かさなかった少年だ。

あれから二週間が経って、再び会うこともなく、自分が気がしたところでどうにかなる問題ではない。

忘れてしまえばいいと思う。

忘れて欲しかったから、少年も名前以外は語ろうとしなかったのだろう。

(そうなんだけどさ…)

解ってはいるのだが、どうしても気になるのだ。

一六〇あるかないかの小さな体躯は華奢と言うよりも細すぎて、幼くて、そんな身体全体に、ひどい傷が所狭しと広がっているのを見てしまったからだろうか。

門の前で意識を失くして倒れていた少年の顔立ちは愛らしく、純真無垢な赤ん坊のような印象を受けるのに、その頬が痛々しく腫れ上がり、ベッドに運ぶために抱き上げた時には涙を零して「助けて」と呟くのを聞いてしまったからだろうか。

(なんか…、強烈だったんだよな……)

名前以外は何も知らない。

例えば学校が判って、彼がどこの誰なのか知ることが出来たとしても、自分がしてやれることなど何も無い。

何度自分に言い聞かせても、それでも尋人の無残な姿が脳裏から消えてくれないのだ。

「…家に帰って寝るか」

このままでは友人のライブの手伝いも中途半端になりそうだと判断した中流は、そう声に出して唐突に足を止めた。

このまま行けば、着くのはライブハウス。

家に帰るなら敷明小路を出なければならぬ。

さてどうしようかと悩み始めた。

と、ちよつどその時だ。

「中流さん？」

確かめるように語尾を上げた声が背後から掛けられ、中流は顔だけを後ろに向けた。

そうして誰がそこにいるのかを知って少なからず驚く。

「え…、裕幸ゆうゆき？」

「やっぱり中流さん」

年齢は一つしか違わないのに『です・ます調』で話し掛けて来たのは、中流の母方の従弟、大樹裕幸たいきだった。

「珍しいな、こんな街中で会つ」

「それは中流さんがこんな時間に外にいるからですよ」

「ああ、確かに」

「久々のお休みですか？」

「四日前にいきなりキャンセルが入ったんだ。だから仲間と予定入れているだけだ、それも急に駄目になってさ…」

中流と同様に北欧出身と言われる祖母を持つ彼は、髪も目も肌も生まれつき色素が薄く、中流の何倍も異国の血を物語る。

そしてそのすぐ後ろには、従弟の友人であり中流も顔見知りの、

ときかわたつき  
時河竜騎の姿があつた。

二人は榊学園から駅二つ離れた町にある松浦高等学校の学生服姿で、放課後を、この敷明小路で楽しんでたのだろう。

最も、竜騎の無表情に、楽しんでるという雰囲気は皆無なのだが。

「…おまえ、相変わらず感情に乏しい顔してるよなあ」  
「…」

中流が呆れたように言うのを、竜騎は無言で聞き流す。

何の感情も読み取らせまいとする、冷淡な無表情。

年齢が近く、親戚の中でも特に裕幸と親しい中流は、従弟がそんな人物と一緒にいる光景に違和感を禁じえなかつた。

「おまえらつて二人の時、どつという会話してるんだ？」

「会話、ですか？」

「おまえらが二人で話す内容つて、ちよつと想像つかないぜ？」

顔をしかめて言う中流に、裕幸はチラと竜騎を一瞥してから従兄に向き直つて苦笑めいた顔になる。

「いたつて普通の会話だと思いますよ？」

「普通ねえ…」

中流が内心で不信感を募らせているのを裕幸は察したのか、フオロ―するように言葉をつなぐ。

「竜騎と一緒にいるだけで楽しいんです、本当に」

「…ま、おまえがそう言うなら」

無愛想で、聞いても答えようとしない時河竜騎とは対照的に、常に穏やかで素直な態度を崩さない裕幸。

中流の目には、この二人が友人というのがどうにも不自然に感じられて仕方が無かつた。

高一で優に一八〇はあるだろう長身は無駄なく引き締まり、常に周囲を威嚇している鋭い目付きと固く結ばれた口元。顔の造作は恐ろしく整い、人を惹き付ける強い力を発しているように見えたが、周囲を拒絶するこの雰囲気では、女も怖がつて近付いて来なさそう

だと言うのが、中流から見た竜騎の第一印象だった。

それに比べて血の繋がった従弟は生来の性分がそのまま形になったような、万人を和ませる穏やかな空気に包まれている。

絵にすれば完璧なコントラストを描くだろう二人。

見れば見るほど正反對な気がしてくる彼らがどうして親しくなれたのか、中流は常々不思議に思っていた。

(…いい男ではあるけどな)

対照的であるからこそ、裕幸と並ぶと絵になるのは確かだ。

「親父が、二人が並んでいるのを撮らせてくれて言うのは解る気がするけどな」

中流が言うと、途端に竜騎の表情が歪み、裕幸が困ったように笑う。

「それは禁句です」

「ああ…、さてはまた迫られたな？」

言うと同時に竜騎の鋭い目が向けられたが、それを怖いとは思わない。

その程度の時間は付き合っているし、何より自分の父親に追い回されてげんなりしている竜騎の姿を見たことのある中流は、その様子を思い浮かべるだけで笑えたから。

中流の父親の名を六条至流ろくじょういたると言い、職業は写真家。

その腕は世界が認めるものであり、天才と何とかは紙一重という言葉どおりの人物であるため、狙った獲物を逃すまいとする執念は凄まじいのだ。

「ま、充分に気をつけるよ。あの親父は気に入った被写体を撮るためならどんな手でも使う変態だ。裕幸の件がいい例だしな」

意味深に告げるその真意を知るのは、おそらく世界中を探してもほんの少数。

背後で嫌な顔をする竜騎に小さく笑って、裕幸は中流に向き直った。

「いいんですか、そんなこと言って。叔父さんが口を利いてくれた

から撮影スタッフに混ざってアルバイトが出来るのに」

「それは感謝してるけど、それはそれ、これはこれだろ」

「そうですか？」

「そうなの。使えるものは親でも使えっつてな」

言っただけで笑う中流だったが、こんなことを言う彼も、本当は父親を尊敬し、父の仕事に掛ける情熱には感動もしている。

だからこそ父親と同じ写真家を志し、出版社の撮影スタッフにアルバイトとして参加し、修行も兼ねて働かせてもらっているのだ。「とにかく油断したらどんな罠を仕掛けられるか解らない。注意しろよ」

竜騎を見て愉快そうに中流が言うと、言われた本人は相変わらずの態度で聞き流すのみ。

俺に話しかけるなと言いたげなその目付きに、人間らしい会話をするにはまだ時間が必要のようだと言った中流は思った。

「で、これからどうするんだ？」

「どこかで軽く食べてから帰ります。俺は暇ですけど、竜騎はバイトがありますから」

「そっか」

「中流さんは？」

「うーん、俺も暇だし帰って寝ようかと思っただけだけど、裕幸が暇ならおまえの家に寄ってもいいかなって…、？」

竜騎が背後を振り返ったまま静止しているのに気付いて言葉を切った中流。

それに続いて裕幸も友人の様子に首を傾げた。

「竜騎？」

「…少し待っている」

竜騎は低く囁くと、外見からは想像できない静かな足取りで来た道を戻り、店と店の間から裏路地へ入っていく。

「え…、竜騎？」

裕幸が驚いて後を追う、中流も訳が分からないまま、とにかくそ

の後に続いた。

裏路地に入つてすぐ、複数の少年の声と逃げ出す足音が聞こえ、竜騎から数十秒遅れて路地に出た中流と裕幸は、少し離れた先に一人の少年が倒れているのを発見した。

「……！」

「神の制服だ」

倒れている少年が、自分と同じ神学園の制服姿と知って、中流は駆け足で近付いた。

少年は頭を庇うようにして蹲ったまま、必死に痛みをこらえている様子。

「竜騎、彼は……？」

「五人か六人の、同じ制服着た連中にやられていた。俺が声掛けたら逃げたがな」

「……よく気が付いたな、裏路地のことに」

「勘だ」

「……」

裕幸の問いかけにはきちんと文章を作って答えるくせに、中流には無愛想で簡素な一言のみ。

友人とも言い難い間柄では仕方ないかもしれないが、この差は一体、何なのだろうと無然とした中流だったが、今はそんなことよりも倒れている少年の方が気懸かりだと、気を取り直す。

「おい、大丈夫か？」

「……っ……」

「おい？」

紺のブレザーは土に塗れ、髪も制服もこれ以上ないというくらい乱れていて、どれほど酷い目に遭ったのかが容易に知れた。

同じ学園にも、こんなことをされている生徒がいたのだと思うと悲しくなる。

この少年の、この小柄な体にも、あの日の少年、倉橋尋人のような痣が広がっているのだろうか……。



「…あれ……？」

少し離れた場所で黙って少年を見守っていた裕幸と竜騎が、不意に中流の唇から毀れた疑問の声に肩を揺らす。

「どうかしたんですか……？」

裕幸が聞いてくるが、中流はそれには答えず、痛みをこらえて小刻みに震えている少年の乱れた髪に手を添える。

「…、もしかして尋人が……？」

一つの名前に、少年の肩が大きく揺れた。

「え……？」

そうしてゆつくりと顔を上げた少年は、そこにいるのが誰かを知って目を丸くした。

「…せ、せんぱい……？」

「なんだ…、おまえ榊の生徒だったのか？」

驚いているのは中流も、倉橋尋人も同じ。

どうしてこの人がここにいるのか。

そんな疑問を顔に書いて互いの顔をしばらく凝視していた二人。

そんな彼らに冷めた口調で言い放ったのは、今まで黙って見てい

た時河竜騎だ。

「いつまでそうしているつもりだ」

呆れた、労わりの感情など切片も見られない淡々とした口調。

裕幸が慌てて言葉を補足する。

「場所を移りませんか？　いつまでもここに居るわけにはいかないでしょうし、彼の怪我の手当てもした方がいいと思います」

「…」

差し出された裕幸の手を、尋人は困惑の表情で見下ろし、竜騎と中流の顔を順に見ていく。

「…立てるか？」

中流が遠慮がちに問うと、傷ついた少年は小さく、小さく頷いた。



## 二度目の楽園 三

複数の少年から暴行を受けて傷ついた尋人をどこで手当てし、どこなら着替えさせてやれるだろうと話し合った結果、中流は職権乱用を決意した。

つまり、自分の仕事場である撮影所で尋人を休ませることにしたのだ。

幸い、中流がほとんど毎日通っている撮影所は敷明小路から徒歩で五分も離れておらず、小道を南に抜けた正面の、如月出版の大きな文字が正面玄関に彫られた近代的な八階建ビル、それが彼らの到着地点だった。

近所には大手デパートの煉瓦造りの建物や、金融機関、保険会社の有名な名を掲げた高層ビルが所狭しと立ち並び、四車線の車道と両腕を広げるのが精一杯の狭い歩道は、猫一匹さえ休むゆとりが無いほど人と鉄の塊に溢れていた。

それを最上階の、全面ガラス張りになっている展望台のフロアから見下ろしていた中流は軽い息を吐いて、中央のソファに座って沈んだ顔をしている尋人に歩み寄った。

「五時半過ぎて、帰宅ラッシュだから仕方ないんだろうけどさ。あんなに人の頭だらけだと気味悪いよな」

陽気な声を作って言う中流に、尋人は恐る恐る目を向けたが、結局、何も言わずに再び俯いてしまった。

ここに来てそろそろ一時間。

怪我の手当ても着替えも済んだ尋人は、編集部の知人から裕幸が借りてきたワイシャツとジーンズを着てソファに座っていた。

どうしてもサイズの合うものがなくて大きすぎる上下を着ているせいか、実際の年齢よりもずっと幼く見えてしまう。

その彼が落ち込んだ表情で黙り込んでいるのが、中流には酷く苦痛だった。

「あー…つと、そういえば尋人、榊の生徒だったんだな。教えてくれれば学校で会いに行つたのにさ」

必要以上に明るく言つた中流だが、尋人がビクツと震えて表情を強張らせたのを見て、また言葉の選択を誤つたらしいと知る。

「…ご…ごめんなさい。こんなこと、恥ずかしくて…、先輩に知られたくなくて……」

そう、今にも泣き出しそうな声で言われては、まるで自分が彼を虐めているような氣になつた。

「いや…その、謝らなくていいんだ。ただずっと氣になつていたからさ、怪我の具合とか…」

「……すみません」

何を言つても尋人を追い詰めるだけらしいと察した中流は、小さく息を吐いて口を閉ざす。

こういう時こそ裕幸がいればいいのにと内心で呟く。

ほんの一時間前に、尋人がなるべく人に会わないよう配慮して裏口から屋内に入った彼らは、顔見知りの警備員に身分証明し、最短距離で八階に上がつて来た。

撮影関係者の中流の仕事場は五階で、そこに行つても問題はなかつただろうが本来は休みの自分。運良く個室が空いているかどうかも判らなかつたため、八階の展望室という、確実な場所を選んだのである。

昼過ぎまでは昼食を取る社員などで賑わう展望室だが、日が落ちて空が暗くなつてくると、ここを利用する社員はほとんどいない。

もっと暗くなり、夜景が綺麗に見える頃になると、また違った意味でやって来る者もいるだろうが、今の時間帯にその心配が無用なことを中流は知っていたのだ。

実際、彼らが来てから展望室にやって来た人は無く、しかも裕幸は、尋人の怪我の手当てを終えて着替えを借りてくると、竜騎がバイトに行く時間だからと言つて見送りに行つたきり、まだ戻つてこ

ない。

そんなわけで彼らは二人きりになってしまい、会話らしい会話も一度もないまま、時間だけが過ぎていくという状況の中にいるわけだ。

重苦しい沈黙は十五分が過ぎてもまだ続いた。

中流がその空気に追い詰められ、無意識に溜息をつくとき、それに気が付いた尋人は自分はどうにかしなければと思ったのだろう。

意を決したように、強張った面持ちで口を開いた。

「あ…、あの…」

微かに震えた声。

中流は不意打ちの展開に、弾かれるようにして姿勢を正す。

「どうした」

「い…いえ…、あの…」

「ん？」

「…ここ、先輩の何なんですか…？」

「ここ？」

「裏口の…、警備員さんと顔見知りみたいでしたけど…その…」

「ああ、このビルか？　ここは俺のバイト先さ」

「バイト…？」

「そ」

中流は、尋人がようやく話に乗ってくれたことを喜び、彼の質問に詳しく、またそれ以上のことも話した。

「俺は写真家志望で、ここの撮影スタッフに混じって修行中なんだ」

「写真……」

「？」

「写真、見ました…壁…、先輩の部屋の、たくさん貼ってあって…」

「見たのか」

「風景画が…、綺麗で……。さっきのあの人の写真も…」

「あの人…、って裕幸かな。あいつは従弟なんだ」

答えてから、中流はふと思いついたように意味深な笑みを浮かべる。

「尋人さ、K A R R A . H ってモデル知ってるか？」

「え…、K A R R A って…あの、天使の笑顔って、すごく話題になっている…」

「そう、その正体不明、性別すら不明の謎の天使」

楽しげに返して、中流は、フロアの端に複数並んだ自動販売機側のマガジンラックから一冊の雑誌を手に取った。

「この雑誌は知っているか？ リーヴェって業界一位のファッション雑誌」

「…名前だけ」

「写真家の六条至流は？」

「…名前、だけ」

申し訳なさそうに言う尋人に、中流はそつと微笑した。

「その六条至流ってのが俺の父親。結構売れてる写真家らしくてさ」  
実際は「売れている」どころではなく、世界的に名誉ある賞を幾つも受賞している一流の写真家だったが、そこまで説明すると、それほどの有名人を知らなかった事に尋人がまた落ち込むと考えた中流はその程度で済ませておく。

「三年くらい前に新設されたブランドがあつてさ、その撮影を依頼された親父が選んだモデルが、このK A R R A . H だったんだ」

その謎の天使、K A R R A . H が載ったページを開いて尋人に手渡す。

広げられたそのページには、薄手の衣装を纏って佇む、月色の髪の毛の美しい人。

その身体に女性特有の胸元の膨らみはなく、かといって喉元に男性特有の突起も無い。

幼い子供なのかと思えば、時折見せる表情に漂う艶めいた色香。

本人は雑誌を通してすら己の口を開くことがなく、所属事務所及び関係者も一切何も語らずの姿勢が数多くの疑惑と謎を呼び、存在

さえ疑問視されている人物だが、その謎めいた存在が人々の関心を引いて止まないのだ。

だが、それがどうしたのだろう。

中流の父親がK A R A を世に送り出したというだけの話なのだろうかと、小首を傾げた尋人は、トントンと雑誌の中のK A R A を指差し、意味深に笑む中流と目が合った。

「……………」

「これ、俺の従弟」

「」

「さっきの大樹裕幸。あいつがK A R A の正体」

「え……………」

「ナイショだけどな」

「あ。え、あ、はい……………」

どう反応していいのか、それすら判らずに動揺しているふつの尋人に、中流は笑い、雑誌をめくっていく。

「それで……………」これが兄貴の六条出流」

「……………」お兄さん」

次に開かれたページには、長い栗色の髪をかき上げ、読者に挑戦的な目を向ける青年の姿が在った。

「この間まで連ドラに出ていたから、もしかしたら見覚えがあるかもな」

中流が言うと、尋人は初めて頷いた。

「……………」でも……………」先輩とお兄さんより、お兄さんと従弟さんの方が似ているんですね」

雑誌の中のK A R A ではなく、先刻まで一緒にいた大樹裕幸の顔を思い浮かべて、尋人は言う。

栗色の髪もそうだし、肌の色もそう。

日本人のほずなのに、どこか異国の雰囲気を漂わせ、高貴な印象を纏った美貌。

それらが共通した二人の違いを上げるとするなら、兄と言われた

六条出流は、内面までが気高いことを知らしめるようで、ひどく恐ろしく感じられた。

「話し方とか、は…、先輩と従弟さんの方が似ている気がします…。何だか不思議ですね…」

「それは祖母さんの血が濃いか薄いかの違いだな」

「お祖母さん…?」

「え…つとな。祖母さんが北欧の…確かノルウェーだったと思うんだけど…、まあとにかくそっちの出身で、孫の俺達はクォーターだから、兄貴と裕幸と、裕幸の兄貴、この三人が特に祖母さんの血が濃くて、顔も似たつてわけ。…今の説明で判ったか?」

不安な面持ちで問うと、尋人が大きく頷くから、中流もホツとして続ける。

「それに少ししか受け継いでいなくても、俺の髪と目も、角度によつては色が変わるんだぞ」

「それは…、知っています」

「? 知ってる?」

「先輩…、学園で、有名人ですから…」

「俺が?」

「本居先輩の親友だって…」

その名を出されて納得する。

今は幸せボケをしていて、どうしようもない奴だが、学校全体でも五本の指に入ると言われる抜群の運動神経と多大な人気を誇っているのが本来の本居尚也だ。

彼と一番親しい中流なら、同じく知られていても不思議はない。

「俺も有名か…。ってことは、尋人は二週間前から俺が誰か解っていて、何も話さなかったってことか?」

ふと気がついて言った中流の前で、尋人は瞬時に顔を赤くし、俯いてしまった。

その様子に、また自分が言葉の選択を誤ったのだと悟った中流は自己嫌悪に自分を殴りつけたくなった。



「あ…、あの、すみませんでした。…怪我の理由とか気が付かれていますと思っただら…、知られるの恥ずかしくて…。だって虐められているなんて、情けないですし…」

「いや、いいんだ。ごめん、俺の言い方が悪い」

「え…」

「責めるつもりじゃないんだ。ただ、本当に心配だったからさ、あの後、どうしたとか。だから同じ学校だって判ってれば…って、これさっきも言ったよな。だからそうじゃなくてだな…。」

「…」

「つまり…、えつとさ…だあつ、もう何て言ったらいいのかな…っ」

また尋人が無言になってしまつては困ると思ひ、慌てて言葉を取り繕いながら頭をかき回す中流に、尋人は初めて表情を和らげた。

（お？ これはもしかするとイイ感じじゃないか）と胸中に呟く中流に、尋人は告げる。

「先輩…、ありがとうございます」

その感謝の言葉も今日初めてのこと。

まず最初に中流を襲つたのは純粹な驚き、それから、喜び。

尋人がようやく心を開いてくれたことが嬉しくて、彼の気持ちは妙に浮かれた。

それからしばらくして戻ってきた裕幸は、自分がいなかった間に尋人の表情がすっかり和らいでいるのを見て、やはり中流と同じように安堵した。

「もう少ししたら叔父さんが車で送ってくれるそうですよ」

階下で撮影をしているのだらう父親からの伝言を聞いて、中流は、尋人にも家まで送るといふ約束を取り付ける。

六条至流が仕事を終えて彼らを呼びに来るまでの十数分。

三人はその場で穏やかな時間を過ごせたのだった。

## 二度目の楽園 四

親友の幸せボケが原因でその日の予定が大きく変更し、だがそのおかげで気になっていた少年・倉橋尋人と再会できた中流は、あれから五日が経った今日この日、榊学園中等部の生徒玄関で尋人が来るのを待っていた。

授業が終わるのは中等部も高等部も同じ時間だったが、その後のSHRは、それぞれの学級事情によって大きな差が出る。

例えば最後の授業が担任の数学だった中流のクラスは、授業の最後にSHRを終えてしまい、授業終了のチャイムと同時に解散。他のどの学級よりも早く教室掃除に取り掛かった。

その一方で尋人の学級担任は、中流も中等部時代に世話になったことのある話好きで有名な高齢の女性教諭で、SHRは必ず五分以上かける人物だ。

今日は特に時間をかけているのか、中流がここに来てから早十分たかさんの後輩たちが次々と帰って行くのに、待ち人の姿は一向に見当たらない。

(また…。変な事に巻き込まれてないといいけどな…)

ふと脳裏を過ぎるのは傷だらけの尋人の姿。

最初に会ったときも、二度目の偶然の再会するときも尋人の全身が傷だらけだったことが、姿が見えないだけでも中流を不安の渦に陥れる。

(本人は大丈夫だと言って譲らないけど、こればかりはさ……)

この五日間で中流と尋人は大分親しくなることが出来、こうして中等部の生徒玄関で待つのも今日で三度目。

一人でいて乱暴な連中に絡まれるのなら「帰りは俺と一緒にいればいいだろ」と中流が自分から申し出たからだ。

以前は親友の尚也と一緒に帰っていたが、彼に浅見理香と言う恋人が出来てからはそれも無くなり、中流自身が一人で登下校するの

に退屈していたからと言うのも立派な理由で、最初は迷惑を掛けたくないと言って拒んでいた尋人も、それを聞いてようやく頷いた。(つたくな…。迷惑だと思っただけなら最初から部屋に運んだりしないっ  
ての)

苦笑いの表情で胸中に呟いた中流は、すれ違いざまに「サヨナラ先輩」と頭を下げていく中学生に軽く手を上げて応える。

中等部の玄関に高等部の先輩がいるという光景はただでさえ目立つのに、それがこの六条中流となれば尚更だった。

運動神経抜群の本居尚也の親友は有名人だと言った尋人の言葉は事実だったようで、それだけでなくとも中流の家族や親戚関係のことを知る生徒は少なくない。

彼が誰かを知っている中等部の 特に女生徒は、チラチラと彼を盗み見ては何事かを囁いて帰っていった。

気分のいいものでは決してなかったが、父親や兄の仕事関係上、見ず知らずの他人に探られるのは慣れていない。

だから中流は、それら全部を無関心に聞き流し、続々と帰って行く後輩達の中から待ち人の姿だけを探していた。

(教室まで行ったら驚くかな。いや、驚くだけならまだしも嫌がられたら困るしなあ)

尋人は目立ちたいタイプの人間ではない…と言うよりも、目立つのをひどく恐れている観がある。

それに彼がいじめに遭っているのは周知のことなのか、彼を見る目に含まれたイヤな感情や、こそこそと逃げるような態度は中流にも不愉快だ。

生徒玄関にいただけでも話題になっている彼が教室まで行ったとなれば、周囲がどんな噂を立て、尋人がどんな思いをするか。

それを思うと下手に動くわけにはいかなかった。

(待っているしかないか、やっぱ)

尋人が中等部の三年一組に在籍していることは二度目に会ったときに聞き、同時に彼に怪我を負わせているのが三年三組の滝岡と言

う男子生徒を筆頭にした七人のグループだということも判った。

判ったからにはどうにか出来ないだろうかと悩んだのだが、自分が尋人と同じクラスならともかく、学年も校舎も違ったのでは守れる範囲は限られてしまう。

にも関わらず高等部の先輩が無神経に口を出せば、それは一番恐れている形で全て尋人に返ってしまっただろう。

それを思うと、結局、尋人が無事な姿で現れるのを待っていることしか出来ないのだ。

(…俺のエゴなんだろうな……)

そして同情なのかもしれない。

それなら尋人を侮辱するのと同じだから、早々に手を引いて見て見ぬフリをする方がよっぽど親切じゃないかとも考えた。

(けど放っておけないんだ…)

その気持ちだけ。

尋人を一人にしたくない、その思いだけでこうして待っている。

「先輩？」

「つと…」

不意に呼びかけられて、中流は驚きつつ背後を振り返る。

そこにはすっかり帰り支度を整えた小柄な少年、倉橋尋人が立っていた。

制服やコートには泥の染み一つ無く、素肌の見えている顔や手足にも心配したような傷はない。

「今日も大丈夫だったみたいだな」

「はい」

五日前までの怯えた雰囲気はまるで無く、この数日ですっかり中流に親しんだ尋人は無邪気な笑顔で応える。

「彼らだって、そんな毎日、僕に構っているわけじゃないですよ」

「そっか」

少年につられるようにして微笑して見せた中流だが、内心では尋人に害を及ぼすしか能の無い滝岡たちへの怨みが膨らむ一方。

この五日間で、尋人がどんなに純真で、真つ直ぐな少年なのかを知ったから尚更だ。

「ところで何で後ろから来たんだ？ 一組の教室ならこっちの階段から下りて来るだろうと思っていたのに」

だから一組側の階段に背を向けていた中流の問いかけに、尋人はわずかに表情を曇らせる。

「その…、三組の方が先にSHRを終えていて…」

三組という学級に、中流は彼の言わんとしている事を察して眉を寄せた。

「尋人…、やつぱりあの連中に待ち伏せされていたんだろ」

「で、でも大丈夫ですよ、本当に！ 先輩が待っていてくれるって思ったら逃げ足も早くなるんです。今だって怪我一つなく来たですよっ？」

それを証明するかのように両腕でガッツポーズを作る尋人が、中流には心強い反面、ひどく哀れに思えた。

「そうだな」と返しはするものの、尋人の強がりと判るそれを素直に受け止めることは出来なかった。

例えこれが中流のエゴであったとしても。

同情から来る哀れみであったとしても、尋人を一人にはしたくない。

それだけが彼の中で明確になっている彼の意思。

「あ、先輩」

歩き出し、校舎を出た後で尋人は言う。

「本当にいいんですか？ 先輩の仕事を見学させてもらっても」

「ん。友達を見学させて欲しいって言ったら、撮影する親父が快く承諾してくれたんだから問題なし。それに裕幸も会いたいって言うていたしな」

「裕幸さんも一緒なんですか？」

「一緒っていうか…」

言いながら、意味深な笑みを浮かべる中流。

「今日はK A R A ・ Hの撮影なんだよ」

「K A R Aの…?」

聞き返す少年の表情が明るくなるのを見て中流は嬉しくなる。

尋人が笑ったり、楽しんだりしている姿を見ると、中流の心も軽くなる。

いじめられている彼が、自分の傍でだけでも元気でいてくれれば、それはひどく喜ばしいことのように感じられた。

だから中流は（これでいいんだ）と開き直る事にする。

「尋人はラッキーだよ。これがフランスに飛ぶ前の最後の仕事だからな」

「フランス…」

「行ったら一月は戻ってこないんだ。一度日本を離れたらこの時とばかりに世界各国飛び回るから、フランス行って一週間もしたら今度は所在不明だ。どっかで死んでもしばらくは判らないぞ、きつとすごいことを平然と言う中流を、尋人はわずかに気落ちした表情で見上げた。

「先輩…、そんなにお父さんと離れていて、寂しくなったりしないんですか…?」

「え?」

「いつもいる人が家にいないのって、すごく変な感じがしませんか…?」

自分を見上げる少年の目に不安や戸惑いが見え隠れしているのを知って、中流は自分がまた言葉を誤った事に気付く。

今まで尋人が安らげたのは家の中だけ。

その彼に対して、今の発言はあまりにも無神経だ。

「ああ…、まあ確かに寂しいと思うこともないわけじゃないけど、親父は写真が本当に好きでこの世界にいるわけだし…、その姿を見てきて、俺もこの道を選んだようなもんだし、邪魔なんか出来ないよ」

「…」

「それにほら、俺の親戚関係って結構近所に住んでいて仲も良いんだ、裕幸みたいに」

中流と、母方の血で繋がっている親戚関係には、大樹総合病院創立者の祖父と北欧出身の祖母、六人の伯父伯母と九人の従兄弟がいる。

これに両親と兄をプラスした全員がこの近郊に住んでいて、どの従兄弟とも年齢が近く頻繁に連絡を取り合っているから、家族と呼べる人達が本当に大勢いて、最近では父親が居ないからと言って寂しいと思うことはほとんどなくなっていた。

「やっぱ死なれたら困るけどさ。…生きているうちは楽しんで欲しいと思うわけだ」

尋人の反応を窺うようにして言った中流の前で、少年は急速に顔を赤くした。

「? どうした?」

また自分が変なことを言っただろうかと内心で焦る中流に、尋人は激しく首を振る。

「あのっ、ごめんなさい…、先輩は僕と違うのに変なこと言って…」

「…」

「…ごめんなさい」

足を止め、しゅんとうなだれてしまった尋人を、中流は本心から可愛いと思ってしまう。

謝る必要などない。

考え方が違うのは当然のことだから。

「いいから行くぞ」

立ち止まってしまった少年の頭を多少乱暴に撫で回して、中流は明るい声で言う。

「撮影準備に遅れたら給料天引きされるからな」

「先輩…」

そっと和む少年の表情は、不思議なほど中流の心を和ませた。





## 二度目の楽園 五

どこが壁でどこが床なのか、そこに人がいなければ判らなそうな真つ白の立方体が撮影の舞台。

その中央に、ブランドなど全く興味のない人間でも一度は耳にしたことがあるだろう一流の有名ブランド【bliss】の衣装を完璧に着こなした彼がいた。

否、彼は既に“彼”ではなく。

踵まで届く長い銀糸の髪。

透き通るのではないかと思うほど白く艶やかな肌。

作り物の人形のように整った容貌は、まるで呼吸すらしていないようだった。

だがその顔が、些細なことで和らぐ。

それは写真家の他愛ない一言だったり、仕草だったり。

穏やかな微笑は、ただそれだけで世界を一変させる。

男だとか、女だとか。

そういう枠で考えること自体が愚かしく思わせるその存在は、まさに天使。

「はあ……」

自分の役目を終え、従弟の撮影をじつと見守っていた中流は、すぐ側で同じように見学している尋人が感嘆の息を漏らすのを聞き、そつと微笑する。

「すごいだろ？」

「すごいです…、なんか、世界が違っつて言うのか…、すごく綺麗で…裕幸さんだって判っているのに、…全然違う感じがして…引き込まれるようで…」

撮影の邪魔にならないよう出来るだけ小声で話す二人に、傍にいたCGデザイナーの穂高ほたかが混ざってくる。

天使の笑顔としてK A R A ・ Hを世に送り出すためには、写真家・

六条至流の撮った写真を加工し、それが大樹裕幸という少年であることを悟らせないようにする職人が要る。

それがこの穂高なのだ。

KARA・Hの正体が裕幸であるということは事務所内でも極秘のことであり、撮影現場には彼らと本人、写真家・六条至流の他には、照明担当の男性と六条氏のアシスタントが一人ずついるのみ。その他の作業は出来る人間が担当することになっており、メイク等の装飾担当は全て穂高が兼任していた。

「裕幸君は特別だよ。あの子には生来の不思議なものがあるけれど、幸せそうな笑顔は何にも増して周りを和ませる。普段の穏やかさは頼り無くさえ見えるのに、ああいう格好をさせた時の彼は、まさに神秘」

穂高の言に、中流も大きく頷く。

穂高は真実を知らないし、それこそ知っているのは親族とほんの一握りの者達だけだったが、裕幸のそれは常人の目にも明らかだ。

「それを親父は見抜いた。blissに相応しいのは裕幸しかないって、あいつのお人よしな性格に付け込んで粘り勝ち。けど親父は間違つてなかった。IMが発表された後で誰もが認めただからな、blissに相応しいのは裕幸 KARA・Hだって」

「blissの意味は知っているかい？」

穂高に聞かれた尋人が左右に首を振るのを見て、中流は言った。

「【至上の幸福】って意味だよ」

何物にも代え難い幸せ。

その意味に、尋人は素直に頷けた。

「なんだか判る気がします…。どうして裕幸さんだったのか…」  
実際にこうしてその姿を見て思う。

目が離せなくなる存在感。

惹き付けられる微笑は優しく、温かく、まるで癒されるような輝き。

【至上の幸福】を形にするには裕幸でなければならぬと感じた写

真家の気持ちだが、K A R A ・ H の穏やかな美貌を通じて伝わってくる気さえした。

「…親父が裕幸を撮っている時に思ったんだ、俺も写真家になりたいって」

言葉を失くしている尋人に中流は言う。

「普通じゃ気付かない、人間の本当の姿を撮れる写真家になりたいってさ」

「先輩…」

中流の強い思いを聞いて、尋人は頬をうつすらと朱に染めた。

これとは言い切れない様々な感情を含んだ眼差しで中流を見上げ、しばらく言葉に迷っているようだった。

その間に撮影は終了し、写真家とK A R A ・ H、二人が立てる音や声以外は何もなかった空間に現実感が戻り始める。

「さあ六条君、次の撮影のために片付けを始めようか。裕幸君はとりあえず顔隠して控え室だ。急がなかったら正体がバレるぞ、バレたら仕事にならないぞ」

「…バレたら辞められますか？」

「いいよ、blissと出版社に解約料を払ってくれるなら…」

穂高と裕幸の遣り取りに、皆が笑う。

中流も失笑しながら尋人を向いた。

「少しここで待っていてくれ。次の撮影準備が終わったら家まで送るからさ」

「あ、あの…、次も裕幸さんですか？」

「いや。次は兄貴の方」

簡単に言う中流とは逆に、尋人はただ呆然としてしまう。

聞いていた事とはいえ、こう次々と中流の血縁関係の撮影が続き、そのために大勢の人間が動き回るといっては、凄いだこの話ではないように思われた。

父親は世界に認められる芸術家。

実兄と従弟は芸能人。

おまけにあの大樹総合病院の創立者が祖父で、現院長が伯父だといふのだから、こうして実感させられると自分とは住む世界が違うように感じられた。

「…すごい人なんですね、先輩で…」

尋人が心から呟く台詞に、しかし言われた当人は複雑な笑みを零す。

「すごいのは親父達で、俺はただの高校生だぜ」

「え…」

「もちろん『今は』だけだな」

十年後を楽しみにしていると言い残して、中流は自分の仕事に取り掛かるため、その場を離れていった。

その背を見送り、尋人はぎゅっと握った手を胸に当てた。

いつになく早いリズムを打つ心臓を、深呼吸と「静まれ静まれ」という念で落ち着かせようと試みながら、忙しく動き回る中流を見つめる。

「…頑張って下さいって、言いたいの…」

中流の思いを、夢を聞かされて、そう言いたかったのに言えなかった。

彼の真っ直ぐな目に見られると、どうしても言葉が出てこなくなる。

「…嫌われたくないのに…」

気付かれたくないのに、このままではそれも時間の問題だと不安になる。

中流は何も知らないから親切にしてくれている…、尋人はそれを自覚しているのに、彼の顔を見て、声を聞いていると抑えが効かなくなりそうになる。

最初に会った時。

自分の寝かされていた部屋が中流の部屋だと知った時。

放課後は待っているから一緒に帰ろうと言われた時…、尋人がど

んなに嬉しかったか中流は知らない。

何も知らないから優しく接してくれるのだ。

「気付かれちゃいけないのに……」

尋人は自分の胸に手を当てたまま大きく深呼吸をした。

気を取り直し、普通に彼と話せるように。

それだけを何度も心の中で繰り返し、自分に言い聞かせた。

「？」

それからしばらくして、不意に周囲が今までと違った雰囲気わざわめきに包まれた。

次の撮影のために続々と現場入りしている大勢のスタッフ達。

尋人もつられて無数の視線が集まる先に顔を向けた。そして

一瞬、息をするのも忘れるほどの衝撃を受ける。

「あの人……」

栗色の髪と青に近い色の目。

一八〇は優に越えた長身と均整の取れた完璧な体軀を普通じゃ絶対に着ないようなデザインの衣装で飾り、日本人なのに異国の雰囲気漂わせたその人は、肩下まで伸びた髪を後ろに結わえ、長い前髪をかき上げながらスタジオに入ってきた。

一步を進めるだけでも絵になる、誇り高い貴公子然とした美貌。

裕幸に似た外観でありながら、彼とは正反対の他を圧倒する眼差しに、尋人は無意識に後退していた。

名を六条出流。ろくじょういずる

五日前の八階の展望室で、中流から兄貴だと言われて見た雑誌の中にいた彼が、現実の存在として立っていた。

「遅れました」と、その後ろから小走りに駆けて来るのは、俳優の仕事もしている彼のマネージャーだろうか。

「先輩のお兄さん……」

中流とは似ても似つかない冷たい空気に、尋人は違和感を拭い去れない。

そのうち、出流の方が尋人の視線に気付き、不審な顔をして彼に

近付いてきた。

「っ……」

逃げ出したい衝動に駆られて、それでもその場に留まれたのは、他にも大勢の人間がいる事実と、彼が中流の兄だということを知っていたからだ。

「誰？」

顔は笑んでいたけれど、隙のない、胸の内まで見透かされそうな眼差し。

尋人は怯えながらも必死で言葉を紡ぐ。

「あ、あの……、倉橋尋人、です……」

尋人が名乗ると、出流は目を細めて少年の頭から足先までを見定める。

そうして、どう見ても中学生にしか見えない少年が怯えているのを出流も悟ったのか、わずかに目を和ませた。

それでも優しさという感情が切片も見られないのは、彼の冷たい美貌のせい。

裕幸とよく似た面差しであるのに、他者を威圧する眼差しが、いっそう彼の恐ろしさを際立たせるようだった。

「どうした？ 具合でも悪いのかい？」

「い、いえ……あの……っ」

尋人の怯えは膨らむ一方で、もう逃げ出してしまいたいのに足が動かず、どうすることも出来なくて俯いた。

先ほどまでとは異なる理由でぎゅっと握られた拳にはいやな汗が滲み、全身が小刻みに震え始める。

その時だ。

穏やかで静かな声が、恐怖のどん底にいた尋人を救い上げた。

「スタジオに入るなり見学者を怖がらせて楽しいですか、出流さん」

「っ、あ、裕幸さん……っ」

それが、メイクを落とし、着替えも終えて戻ってきた裕幸だと知り、尋人は弾かれたように彼の後ろに逃げ隠れた。

出流が怖かったという気持ちを実に行動で示されて、出流と裕幸はもちろんのこと、遠巻きに見ていたスタッフ達も失笑する。

「そんなふうには逃げられると、いくら俺でも傷つくんだけどね」

「だったらもう少し優しい顔をして話し掛けたらどうですか？ 特に尋人君みたいな初対面の相手には」

「そのつもりだったんだが…、そうは見えなかったかい？」

「貴方は普通に笑うだけじゃ怖さを増すだけですよ」

裕幸は、意味深な笑みを強める出流に強い口調で言い放ち、まだ背後で震えている尋人を振り返る。

「尋人君。そんなに怖がらなくても、彼は中流さんのお兄さんだから心配ないよ」

「…はい…」

「？ 知っていたの？」

「先輩に聞いて…」

それでも怖いと感じてしまったのは、写真で見たのとは比べ物にならない、この強烈な存在感のせいであり、よく判らない危険信号が頭の中で鳴っているせいだった。

だがこの危険信号の意味を、尋人はすぐに知ることとなる。

「その子、中流の知り合いなのか？」

出流の言い方に一際大きな不安が尋人を襲い、悪寒が背筋を駆け上る。

これは一体、何なのか。

自問自答する間にも出流に対する恐怖心は膨らむ一方で、細い手足は震え続ける。

「榊学園の後輩だそうです。撮影現場を見学してみたかったとかで、僕が叔父さんの撮影で丁度いいからって」

「なるほど」

「尋人君。出流さんは、性格は悪いけれど根は悪い人じゃないから怖がらないでも大丈夫だよ？」

「フオローになってないね」

「フォローする気はないですから」

そうしてニツコリ微笑む裕幸の本心がどこにあるのかも尋人には解らない。

出流は軽く声を立てて笑い、今しがた自分が通った出入り口から弟が戻ってくるのを見つけると声をかけた。

「中流」と。

よく通る呼び声に、呼ばれた本人は驚いた顔をして彼らに駆け寄ってきた。

「兄貴…、と尋人？ どうした？」

何やら顔色が青ざめている後輩の様子に眉を寄せた中流は、次いで裕幸、兄の出流を順に見て何かを察した様子。

「…で。尋人に何をしたんだ兄貴」と、そう来るから二人の血縁者は揃って笑った。

「解りましたか、出流さん。皆がそう思うんです」

「みたいだな。まあそれなりに自覚はしているが、弟にまで疑われるのは悲しいよ」

「はあ？ 一体何があつたんだ？」

中流は解らないまま首を傾げて尋人や裕幸に答えを求めるが、それよりも早く出流が口を挟んだ。

「ところで、そんな事よりも」

彼はくすくすと笑いながら言い、だが目には意味深な光りを含ませて中流を見た。

そして続ける。

尋人が一番聞きたくなかった言葉。

彼の本能が無自覚のまま危険信号を鳴らしていた、その理由。

「中流。突然の宗旨替えは何か理由があつてのことか？」

「っ！」

尋人の肩が大きく跳ねたのを、幸か不幸か中流は見逃した。

少年の顔色が青ざめたというより蒼白に変色するのも、まだ気付かない。



「宗旨替え…って何のだ？ 別に宗教に入った覚えなんかないけど」  
中流が顔をしかめて聞き返せば、出流はちらと尋人を一瞥した後で小さく笑う。

「ああ…それは悪かったな。俺の思い過ぎしか。…どうした裕幸？」  
「何でもありません」

かすかに目つきを鋭くして自分を見ていた裕幸を不敵な笑みであしらった出流は、次に、弟と従弟の間で小刻みに震えている少年に視線を落ち着けた。

「尋人君、だったか？」

「は、はい…」

怯えた眼差しを向ける少年を、出流にキツイ視線を送る裕幸がそつと支える。

「今度は俺の撮影も見学において。中流の友人なら歓迎するから」

「あ…、ありがとうございます…」

今にも消え入りそうな声で頭を下げた尋人は、それきり顔を上げようとしなかった。

何も解らないまま、中流は尋人の青ざめた顔色を心配そうに見つめ、裕幸がいつになく柔らかな声で話しかける。

「もう帰るんですか？」

「え、ああ。俺の仕事は終わったし、尋人もそろそろ送らないと時間かさ」

「だったら、帰る前に少しホールで休ませてあげたらどうですか？  
ずつと立ちっぱなしだったのに加えてこの人に会ったんじゃ、緊張して疲れたでしょう」

「そんな、人を化け物みたいに言わないで欲しいな」

「似たようなものですよ」

裕幸の、耳を疑うような冷めた声と敵意を顕にした表情。

常に穏やかな物腰を崩さない彼からは考えられないキツイ態度に、中流は驚きを隠せなかった。

だが、そんな冷たい態度が出流以外に向けられることはなく、尋

人や中流に対するときはいつもの穏やかな裕幸だ。

「尋人君。外で休んで、それから気を付けて帰るんだよ。…中流さん、ちゃんと送ってあげてくださいね」

後半は中流に向けて告げる裕幸を、尋人はしばらくの間、不安げに見上げていたが、相手の笑みが和らぐのを見てこくと頷く。

（なんで裕幸に…）

その一部始終を見ていた中流は、妙に面白くないものを感じていた。

「じゃあ中流さん。また今度」

「っ、え…、あ、ああ。じゃあ…行くか、尋人」

裕幸に呼びかけられ、ハッと我に返った中流は、自分が今まで何を考えていたのか気付いてうろたえた。

だがそれを悟らせまいと、尋人を促して外に出る。

兄と従弟の間に流れる不穏な空気を感じながら。

## 二度目の楽園 六

あの穏やかな従弟が、一体どういう理由で出流にだけ険のある態度を取るのだろうか。

過去を思い返してみても、あの優しい従弟は出流にだけ一線を画して付き合っていた。

裕幸には兄が一人いて、この兄・大樹裕明は出流と同じ年齢。小学校から高校を卒業するまでは同じ学校、その後も今現在までずっと親しく付き合っている間柄だ。

兄同士は仲が良く、弟同士も親しいのに、出流と裕幸だけは昔からあのままだ。

以前、興味本位で「どうして仲が悪いの」と尋ねると、出流は不敵に笑いながら、

「俺は裕幸が好きだが？」と答え、一方の裕幸は苦虫を噛み潰したような顔をして、

「嫌いじゃないからイヤなんです」と言った。結局、納得のいく答えは得られないままだ。

「あの子達は、本当は仲がいいのよ」と、そう言つて中流を尚更混乱させたのは、異国で生まれた祖母だっただろうか。

「…ほんと。何でああ仲が悪いんだか…」  
無意識に呟いてから、自分を見上げる少年の視線に気付く。

「あ、ごめん、今のは兄貴と裕幸の話しな」  
「…はい…」

尋人は掠れた声で答え、また俯いてしまった。太腿の上の手には中流が買ってきたスポーツドリンクの缶がしっかりと握られていたが、何でもいいと言われ、無難なものを選んで買ったそれは、まだ半分もなくなっていない。

中流には正確な理由など知りようがなかったが、ひどく落ち込んでいる少年は飲料を口にする元気もないらしい。

これ以上、尋人を知らない人間に会わせまいと考えた中流は、社員がとつくに帰ってしまい、静まり返った六階ホールに彼を連れてきていた。

「大丈夫か？」

問いかけると、尋人は力なく頷いてそれに応える。

だが、全く大丈夫そうに見えない様子に、中流の心はざわついた。

「…撮影見学、つまらなかつたか？」

「！ 違っ…」

思っても見なかつた相手の言葉に、尋人は慌てて首を振った。

「違います！ 楽しかつたです！！ 知らないことたくさん教えてもらえましたし、裕幸さんや…、お兄さんに…会えたのも、すごく嬉しかつたです…っ」

力説して肩を上下させる尋人の頭を、中流は複雑な表情で撫でた。

「…全然、笑わないから…、退屈して疲れたのかと思つた」

「退屈なんか…。本当にスゴク…勉強にもなりました。見学させて下さつて、ありがとうございました」

「…」

感謝されたいのではない。

中流は、尋人に喜んで欲しかつたのだ。

辛かつたり、苦しかつたり…、そんな思いをさせたくなくて、少しでも元気になってほしくて、楽しんでもらいたくて誘つたのに、今の尋人の姿を見ると 胸が痛い。

自分には尋人を微笑わせる力もないのかと、自分自身に腹が立つ。

「先輩…？」

不安げな眼差しで自分を見上げる少年の、その表情に苦しくなる。こんな顔をさせたいわけじゃ、決してなかつた。

「なんで…」

尋人の頭に置かれていた手が、その肩を引き寄せる。

もう片方の手が暖かな背を抱き締める。

少年は突然の展開に目を見開き。

「せんば……」

眩きに重なつて、無人のホールに缶の落下音が高らかに響き渡った……。

「……感謝されたくて、一緒にいるわけじゃないんだ……」

ありがとう、なんて。

そんな言葉はいらない。

欲しいのは一片の曇りもない笑顔。

幸せを感じている尋人の笑顔だけなのに。

「俺じゃ力になれないのか……？」

「せ、先輩……、っ！」

掠れた声が耳元を掠めた、その刹那。

急な力に押し返されて、中流はようやく我に帰る。

そして自分が何を仕出かしたのか自覚すると同時に、彼を押し戻した尋人の、怯えに似た表情で見る目線の先に裕幸がいるのを知つて、中流の心臓は大きく跳ねた。

「あ……、悪い」

急に居心地が悪くなって、トイレに行くと言ってその場を離れた。

「……すみません」という、裕幸の申し訳なさそうな声を聞いて。

中流が離れて、その場に残された尋人は、裕幸の目線から逃れるように顔を背け、口を閉ざした。

そんな少年を裕幸はどう思ったのか、何も言わずに近付き、足元に転がった缶を拾い上げる。

「……足元。滑らないように気を付けて」

劣るような彼の声に、尋人は無言で頷いた。

洗面所で頭から水を被った中流は、顔を上げ、雫が落ちるのも構わずに鏡の中の自分を睨み付けた。

(何を考えてるんだ、俺は…)

いくら自分の無力さに腹が立ち、自分を見失いかけていたとは言え、尋人を抱き締めるなんてどうかしている。

よりにもよって、男の彼を。

(…けど……)

けれど抱き締めた体の細さや、温もりを、無自覚であったにも関わらず中流の腕は覚えていた。

自分と同じ男だと認識するには頼りなさ過ぎる尋人の肢体。

もしもあの時、裕幸が現れず、尋人が自分を押し返したりしなかったら何をしていてか判らない。

抱き締めるだけで済んだかどうか…。

「…嘘だろ……」

思わず声に出した呟きに、いつ現れたのか、タオルを持った裕幸が微笑する。

「何が嘘なんですか？」

聴く側を落ち着かせる静かな声音だ。

突然声を掛けられても、きつと来るだろうと思っていた中流は、別段驚くことなく背後を振り返った。

「…タオルなんか、どこから持ってきた？」

「その控え室からです。大きな水音がしたので、きつとこうなっているんだろうと思いましたが…」

「そっか。…サンキュ」

弾力のある白いタオルを受け取り、頭を乱暴に拭きながら、独り言のように呟く。

「……驚いただろ」

言った言葉に、裕幸はしばらく沈黙した後で頷いた。

「そうですね…。驚かなかつたと言つたら嘘になりますけど」

「　けど？」

「出流さんじゃあるまいし、中流さんのすることには意味があると思つていますから」

裕幸の言い方に、中流は笑つてしまいそうになる。

「意味？　んなものないさ。俺だつて解つてない…。無意識にやつちまつたんだからさ…」

「それは違いますよ。無意識の行動ほど意味のあるものはありません。気が付いていないだけで、中流さんにはそうする理由があつたんですよ」

「…裕幸が言つとそれっぽく聞こえるな」

困つたように笑う中流に、裕幸も笑みを零す。

「でも間違つてはいないでしょう？　出流さんみたいに節操がないわけじゃないんですから」

「それはまあ…。けど何でそんな兄貴にだけ風当たりが強いんだ？　嫌いなわけじゃないんだろ？」

「…嫌いじゃないから嫌なんです」

以前と同じ返答をされて、これ以上は聞くだけ無駄だと悟つた中流は早々に話題を転じた。

そもそも本当に大事なのはこちらの方で、話しづらいことをはぐらかすのは卑怯者のすることだと自分自身を叱咤する。

「あの、さ…、俺が立つた後、尋人…、どうしてた？」

「何も言わずに座つていました。今はホールで一人きりですから、早く戻つてあげた方がいいと思いますよ」

「うん…」

「何か問題でも？」

「…いや。やつぱ…、あんなことした後だしさ」

中流が言いづらいなながらも白状すると、裕幸は表情を和らげた。

「悪いと思つているなら尚更です。気まずいのは尋人君も同じなんですから、中流さんがしつかりしないでどうするんです」

「けど…」

「まだ何か？」

裕幸にじつと見られて、中流はとうとう観念する。

本人には言わないが、中流は兄と同じ顔をした従弟に昔から弱かったのだ。

言葉を濁しつつも、誤魔化さずに自分の心情を吐露した。

尋人への気持ちだが、エゴなのか同情なのか、それすらも判らないままここにいること。

元気にしてやりたいのに、自分にその力がないのが悔しくて、それを自覚しても傍にいたいと思うこと。

先刻のスタジオ内、彼が裕幸の言葉に頷く姿を見ていると面白くなかったことも、躊躇いつつも正直に話した。

「俺さ…、なんか、すごい自分勝手に独占欲の強い、最低な男みたいじゃないか…？」

「」

「…裕幸？」

呼びかけられ、不審な目で見られて、絶句していた裕幸は我に返るなり勢い良く吹き出してしまった。

「！ 何だよ！」

「あた…中流さん…っ、それは…それ…っ」

「裕幸!？」

何を笑われているか判らないまま顔を赤くした中流を見て、兄が節操無しなら弟の方は天然だと、裕幸は改めて思い知って笑いが止まらない。

「いったい、なんだって言うんだよ」

「聞けば聞くほど、疑いようがない気がするんですけど…」

「？」

「それをそのまま尋人君に伝えたら笑ってくれると思いますよ？  
それも中流さんが一番望んでいる笑顔で」

裕幸の言っていることは、聞けば聞くほど理解不能だが、尋人が



笑ってくれるというフレーズには心が躍る。

「でも…、中流さんが自覚するまでは少し待った方がいいかもしれ  
ませんね」

「何だよ、そりゃ」

眉を寄せて言う中流に、裕幸は相変わらず笑いながら、とにかく  
尋人の傍へ戻るよう中流を促す。

「どうぞお幸せに」

「？」

意味が解らないまま、中流はいささか乱暴に洗面所から追い出さ  
れた。

自分が去った後で、裕幸がその背を見つめて優しげに微笑んだこ  
となど知る由もないまま。

なるべく早足でホールに戻ると、最初に、俯いたまま座っている  
少年の背が見えた。

中流は歩調をゆっくりにし、尋人の隣に立つ。

「っ、…先輩…」

当然といえば当然の、うろたえた様子の尋人に、中流はぎこちな  
く微笑んだ。

「…悪かったな、さつきは」

抱き締めた件を詫びる中流に、尋人は慌てて立ち上がり、首を振  
る。

「そんな…謝らないで下さい…、だって、僕は…」

「？ 尋人？」

「だって僕は……」

それきり言葉を切って、俯いてしまった尋人と、言葉の見つから  
ない中流の間には目に見えない気まずい空気が漂った。

「えっと、さ…、尋人…？」

相手を気遣った静かな呼び声。

反応があったのは、それから優に一分以上が経過してからだ。

「…先輩…の、お兄さんて…、どういう人なんですか…？」

「… 兄貴？」

聞き返す中流の目に、ひどく必死な様子の少年が映る。

今にも泣き出しそうなその姿に、中流は少年の質問の意図がいまいち理解できないまま答えた。

「兄貴は、一言で言うなら天才。性格悪くて女癖は最悪だけど、そういう短所を全部すっ飛ばして業界の人間を満足させる能力を持った人間だよ」

「…女性が、好きなんですか…？」

「…」

唐突な質問に虚を突かれつつ「まあそうだろうな…」と、困った顔で頷いた。

「だと思っけど…それがどうかしたのか？」

「…だったら…なんで…？」

「尋人…？」

中流は言われている意味が判らずに眉を寄せ、肩を震わせている少年に近付いて手を伸ばす。

だが尋人に触れようとした瞬間。

「触らないで下さい！」と、その手を叩き払われてしまった。

驚く彼を、尋人の潤んだ目が見上げる。

「触らないで…、も…」

「…どうした尋人。何か、兄貴に嫌なこと言われたのか？」

中流は本当に判らなかつた。

尋人の様子がおかしかったのは自分の突然の行為が原因で、出流が現れてから口数が減ったのも緊張しているからでしかないと思っている中流には知りようがない。

ただ、このままは嫌だと、それだけは痛切に思った。

こんな態度を取られて、悲しくて、腹立たしくて、理由を聞かない内は帰してなるものかと思った。

それが尋人をどれほど追い詰めるのか、それすらも解らないまま。

「尋人」

「っ、や…」

「尋人！」

嫌がる少年の手を押さえ、強い口調で呼びつける。

肩を震わせ、必死で涙をこらえる少年の姿が痛々しい。

こんな姿を見たくなくて、そんな思いをさせたくなくて、自分の傍にいたときだけでも安らいで欲しいと願っていたのに、どうして突然、こんなことになったのか。

「なに…、どうしたんだよ尋人。兄貴が何か言ったなら俺が謝る。

二度とそんなこと言わせないようにするから…」

中流が言うと、尋人は激しく首を振る。

「違うのか？ ならやっぱ俺が…」

最後まで言わせずに、それも首を振って否定する尋人。

「だったら」

「怖いんです…っ」

ようやく口を開いた尋人の第一声。

何が怖いのか、それを中流が尋ねるより早く少年は叫ぶ。

「怖いんです…！ お兄さんにバレて…っ、いつ先輩にも知られるかと思ったら怖くて…知られて嫌われるのが怖くて…っ」

「…、何が兄貴にバレたって？」

自分の兄がこの少年に何を言ったのか、全部を知っているわけではない。

従弟の撮影が終わってすぐ、自分の仕事のために外に出ていた中流は、自分が戻ってくるまでの間に彼らがどんな話をしていたかなど知るはずがない。

兄が何を言ったのか、中流が聞いたのはたった一つ。

中流。突然の宗旨替えは何か理由があつてのことか？

その、たった一つで……。

「宗旨替え……？」

「っ！！」

ふと呟いたその言葉に、尋人の表情がはっきりと変わった。

「それを知られたら俺に嫌われるって……」

中流にはまだ解っていない。

けれど尋人は、その呟きを「知られた」と判断した。

「……僕は……、僕は男の人しか好きになれないんです……っ」

「」

突然の告白に絶句した中流は、思わず尋人の腕を掴んでいた力を緩め、その隙に距離を取られる。

「そんなの気持ち悪いでしょ……？」

「ひろ……」

「嫌ですよね……、けど、僕は……」

僕は。

先輩が好きなんです……。

冷たい風に吹かれて、その肌寒さにようやく我に返った中流は、広く明るいホールに、たった一人で立ち尽くしていた。

好きだと告げて、もう会いませんと言いつつ去っていった少年の残像を見つめていた。

「……尋人……」

呟く声は虚空にかき消されて、誰の耳にも届かない。

「何……。本気で……？」

問いかけに答えてくれる誰かもいない。

応える術を持たない冷えた空気だけが、彼の傍らを静かに包んで

いた  
た  
…  
。

## 二度目の楽園 七

尋人から衝撃的な告白を聞かされた翌日。

放課後すぐにバイトのため撮影スタジオに来ていた中流は、今日数十回目になる溜息を吐いて前髪を乱暴にかき上げた。

もう片方の手には撮影に必要な小道具の入ったダンボール。

仕事をしていても、昨夜の少年の姿が脳裏に焼きついて離れなかった。

「はあ……」

続けざまの溜息に、自分自身でも嫌になる。

涙をためた目で自分を見上げ、悲痛な声で叫んだ尋人。

男しか好きになれない。

先輩が好きなんです……、知られて嫌われるのを恐れていた尋人は、いったいどんな思いでそれを口にしたのか。

「……まさか尋人がなあ……」

「昨日の子がどうかしたか？」

「!？」

突然、背後から掛けられた声に、中流は飛び跳ねそうなくらい驚いて振り返ると、そこには昨夜と同様に、不敵な笑みを覗かせた実兄・出流が立っていた。

「なっ、何でここにいるんだ？ 今日の仕事はここじゃないだろ！」

「ああ。今日の仕事はもう終わったんだ。しかも久々に家に帰れそうだから可愛い弟を迎えに来たんだよ。中流だって車があった方が楽だろう」

「……まあな。けど俺は今一番、兄貴に会いたくなかったよ」

冷たく言い放つ中流に、出流は実に楽しげな様子。

「なるほど。そろそろ宗旨替えの意味が解ったようだな」

そう、からかうように言ってくる。

「解ったから何だよ。俺が一日中ずっと溜息吐き通しなのも尋人が

学校休んだのも全部兄貴のせいだからな」

本心から言い放ち、兄を無視するように再び歩き出す中流。

出流は小さく笑ってから彼の隣に並んだ。

「そう言わないでほしいな。中流にまでそんなことを言われたら悲しいじゃないか、昨夜は裕幸にも散々怒られたんだよ?」

「裕幸に?」

「中流を見ていれば関係なんかすぐに解るはずだ。イタズラに尋人君を追い詰めるなってね」

「…その通りだろーが」

昨夜、自分達が出て行った後のスタジオで二人がそういう会話をしていたのかと納得しつつ忌々しげに言ってから、ふと気付く。

「…ってことは、裕幸も兄貴も最初から知っていたってことか?」

「ん?」

「その…、尋人が、そうだったってこと」

声量を抑えて言う中流に、出流は笑みを強めた。

「裕幸は俺が言って初めて気付いたみたいだったけどね」

「言って…って、まさかあの宗旨替えてやつか?」

「今時ああいう場面でその意味を取り違えるのは中流くらいさ」

「っ」

「宗教がどうか言われた時は中流の天然を改めて実感させられたな」

「俺が変だったのか!?!」

「素直で可愛いと言っているんだよ」

「〜っ」

どこまでが本気なのか解らない兄の発言に頭痛を覚えながら、本気にしる冗談にしる、実の弟に言う台詞ではないだろうと思う。

改めて溜息を吐き、相変わらずの笑みを崩さない出流を睨み付けた。

「大体な、顔見ただけで見抜くヤツなんかいるか? 尋人だって普通の中学生にしか見えないのに解る兄貴が一番変だろっ」

「彼だけじゃなく、見ればほぼ確実に解るけどね」

「はあ？」

「信じてないな」

「誰が信じるか」

中流が冷たく言い放つと、出流は残念だと呟いた。

「そもそもゲイなんて、そこから中にいるモンじゃないだろ」

「…なら実例を見せようか？」

「実例…、って何の？」

聞き返す中流には笑顔で応え、出流は周囲を見渡す。

しばらくそうして、ふと彼の視線が扉の開くエレベータで止まった。

そこから降りてきたのは、中流のよく知るスタッフ仲間。

機材の運搬作業を主にしている人物で、金子という名の三〇代後

半の男だ。

「彼は？」

「金子さんて、撮影スタッフの仕事をしている人だよ」

答えてから、兄の言うだろう事を察した中流は呆れた笑いを漏らす。

「金子さんがゲイだって言うなら全然ハズレ。あの人、奥さんも子供もいるぜ」

「ふーん…」

「？ あ、おい兄貴？」

急にスタスタと歩き始めた兄を、中流は慌てて追った。

出流は迷わず金子の後を追い、彼が控え室の扉をノックして入るのを見て立ち止まる。

「あれ…、今日はあの部屋…」

「だろ？」

勝ち誇ったような兄の顔に、中流は言い様の無い不快感を覚える。

「だろって何だよ！ 金子さんが今日は使っていないはずの控え室に入ってたから何だって!？」



「一般常識に疎い子はこれだから…」

「一般常識！」

控え室に入るのに何が一般常識だと嘸み付く中流を笑顔でかわし、おいでと、扉の前まで連れて行く。

「聞いてみるといい」

「…」

しばらく聞き耳を立てていた兄に呼ばれ、怪訝な顔をして見せる中流だったが、結局は言われた通りに控え室の扉に耳をつける。

「っ!？」

途端に聞こえてくるのは熱っぽい二つの声。

しかもそのどちらともが低い声で、中流は瞬時に顔を赤くし、慌てて扉から離れると、実に楽しそうに笑う兄と目が合った。

「何が聞こえた？」

「…」

「ん？」

「だ、ダメだとか…、会いたかった、とか」

「クスクス。ま、そういうことだね」

それで満足したのか、出流は何事もなかったかのような足取りで歩き出す。

それをまた中流が追い、今度は彼が兄の隣に並んだ。

「…なんで解るんだよ」

今までと違った、棘のない口調で尋ねると、出流は赤くなった弟の顔を見下ろした。

「今の金子さん、だったかい？ 彼の場合は微妙なところだ。奥さんと子供がいると言うし、そのせいだろう」

「だから何が？」

「匂いだよ」

「は？」

「尋人クンの方が分かり易いと思うけれど、あの子には男の匂いがしなかった」

出流には分かり易くとも中流にはまったくの意味不明だ。  
顔にそう書いて見上げると、出流は苦笑を交えて続ける。

「つまり俺は男が嫌いだ。俺自身が同性に嫌われる性質だからな。  
一緒に仕事をするのも嫌だし、ましてや接触して撮影なんてことにならば絶対にやらない。それは知っているだろ」

「知ってる。そのせいで撮影が滞ったことが一度や二度で済まないからな」

中流が辛辣に言い放つと、出流は顔だけで笑う。

「そう、俺は男と撮影なんて絶対に御免だが中には例外もある」

「例外って…、あ！」

気が付いた中流が思わず声を上げ、出流はそつと頷く。

「弟のおまえや、家族はまた別だが、俺が嫌な気がしないのは決まってるという系統だつてコトさ」

平然と言い放つ出流に、中流はようやく納得がいった気がした。

昔から百パーセントの確率で同性に嫌われている兄は、当然のように同性を嫌っているわけで。

その彼が初対面の少年相手に笑顔で接している「嫌がっていない」という時点で妙だと思わなければならなかったのだ。

だが同時に、もう一つの疑問が浮かぶ。

「けどさ…嫌がるなら逆じゃないのか？ 普通は自分が恋愛対象になりかねない方が…」

「好かれる分には嬉しいと思うよ。応えられはしないがね」

「でもいきなり襲われたり…」

「俺がかい？」

「…」

不敵な笑みで聞き返されて、中流は悟った。

この兄貴を抱きたいなんて男　それこそ“男”がいるはずのな  
いこと。

むしろ、そんな悪趣味なヤツは返り討ちにあって再起不能になった方がこの世の未来のためである。

そんな弟の思考を呼んでか、出流は笑いを含んで続けた。

「それに、俺の隣にはずっと同じ顔があったんだ。襲われるなら裕明の方だろ」

「…だな」

裕明というのは大樹家の長男で、出流と同じ年齢の従兄。

小学校から高校までずっと同じ学校に通っていた彼は、男が嫌いだという出流の唯一の友人でもあった。

その容貌は双子と見間違うほど出流と似ており、その分、対照的な中身が彼らの魅力を引き立てている。

「アキ兄だけだもんな、兄貴の破綻した性格に付き合ってもらえないの」

感心したように中流が言うと、出流はわずかに苦笑いの顔をして見せ、弟の頭を軽く叩く。

「破綻した性格はともかく、そういうことだよ。ま、人口過剰で男が余っている世の中だからな。金で女を買って性欲を満たすような下衆よりも、男同士だろうが愛情を持って生きられる人間の方が美しいと思わないか？」

「ふーん…」

答えながら白い目で兄を見返すと、出流は珍しく不審そうな顔をした。

彼が眉間に皺を刻んだ顔は、滅多に見られるものではない。

なんだか得をした気分になりつつ、中流は続けた。

「ってーかさ。そういう台詞は一人の女を大事にしてから言えつての」

「？」

「仕事の度、新しい女とウワサ立てられているけど、実は本命がいるんだって？」

「裕明か」

弟の発言がどこからの情報か察した出流は眉を寄せた表情のまま虚空を睨む。

「あいつは余計なことを…」

「アキ兄は心配してんだよ、このままじゃ本命に愛想尽かされるって」

「フン」

「悪ぶってさあ。で、本命って誰？ 俺の知っている人？」

これは初めて兄を言い負かせるのではないかと、目を輝かせて詰め寄る中流。

だがやはり出流の方が上手である。

「人のことより自分のことだろう？」

焦った様子もなく、いつもと変わらない不敵な笑みで中流を見下ろす。

「尋人君がそうと判ったからには、あの子に何か言われたんだろ？」

全てを見透かしているような余裕の態度に、中流は内心で舌打ちし、だがこの兄に嘘はつけないと経験上熟知しているから、半ば自棄になりながら頷いた。

「だからどうした」

「おまえがあんな素直な子の思いに気が付かないなんて妙だと思っただが、よく言う恋は盲目というヤツだったのかい？ 裕幸があの子に構うと目が釣っていたものな」

「…」

「初恋もまだってわけじゃあるまいし、女と付き合った経験もあるだろうに純情だねえ、中流は。お兄ちゃんの方が照れてしまいそうだよ」

「くっつ、だから何だった！？」

「イイ男は、自分を好いてくれる子を悲しませるものじゃないよ」  
「ようやく正面から食って掛かってきた中流に、出流は楽しそうに目を細めた。」

節操ナシの男も、実の弟に構ってもらえるのはものすごく嬉しいらしい。

「俺の見た限りじゃ、あの子は可愛くて優しい、いい子だと思うけ

どね」

「…知ってるよ、んなこと!」

そう、充分すぎるくらい判っている。

暴力に屈しず、他人に頼らず、笑顔を絶やさずに何度でも立ち上がろうとする少年の強さを、ほんの一週間程度しかかった時間の中で充分に感じてきた。

「あの子との関係を変えるなら改めて紹介において。昨日の非礼も謝罪するから」

「え…、あ、どこに行くんだよ!」

家に帰れるから迎えに来たと言っていたはずが、一人で去ろうとしている兄の背に中流は慌てて声を掛けるが、彼に戻ってくる気はなさそうだ。

しかも新しい行き先を既に決めているらしく。

「これから裕明に会って話し合う必要があるんでね」

そう言い残して見えなくなった。

本命の有無を中流が知っていたことについて話し合うのだろうと思うと、裕幸とよく似た顔立ちの裕明がひどい目に合わないよう祈るしかない。

「…ま、アキ兄なら兄貴に口で負けたりしないだろうけどさ」

そうでなければ、生まれてからずっと従兄弟関係にある二人が、友人として二十年以上も付き合っているはずがないのだ。

「…にしてもなあ……」

中流は振り返り、撮影スタッフの金子が入ったきり、まだ出てくる気配のない控え室の扉を見て大袈裟に肩をすくめる。

同性愛者の存在が広く知れ渡って久しい昨今、まさか自分のこんな傍にもいるとは思わなかったが、驚きはあっても嫌悪感というのは皆無と言ってよかった。

尋人のことも、彼自身は知られたら嫌われると思っていたらしいが、好きだと言われた中流は、その想いを、自分でも驚くくらい素直に受け止めてしまっていた。

嫌ってなどいない。  
むしろ喜ばしく思えた。

それを伝えなければと教室まで会いに行ったのに休みだと言われ、尋人が昨夜からどんな思いでいるのかと思うと心配で、不安でならなかった。

家も判らず、連絡先も知らず。

どうすることも出来なくて、また溜息が漏れる。

「明日は学校に来るだろうか……」

明日も駄目なら、土日は連休になってしまっから月曜日までこんな気持ちでいなければならず、それを考えると恐ろしくなる。

放っておきたくない。

尋人を一人にしたいくない。

いじめに遭って傷ついた少年が自分の傍でだけは安らいでほしい……、その思いがエゴなのか、同情なのか、それもまだ判別がついていなかったが、この思いが“恋”だと言われれば、それが一番素直に納得できる表現のような気がした。

今までに女の子と付き合ったことはあるし、それなりに楽しいこともあった。

異性と付き合うことに躊躇いはなかった。

ただ、『一緒にいたい』とは思っても、今のように『一人にしたい』とは思わなかっただけで。

「……ああ、そういうことか」

自嘲気味に笑って、ようやく運んでいたダンボールを所定の位置に下ろした中流は、背筋を伸ばして深呼吸をする。

裕幸も出流も言っていた。

彼らに言われたことを信じて、自分の想いを率直に言うなら、自分も尋人が好きなのだ。

だから気になった。

一人にしたくなくて、彼を傷つける連中が憎らしくて、裕幸と話しているのを見ると面白くなくて、……自分の無力さに苛立ち、尋

人を抱き締めてしまったのも、きっとそう。

「そっか…。俺って俗に言う両刀使いつてやつだったんだな」

自覚すると急に楽になって、中流自身が不思議に思うくらい肩の力が抜けた。

普通なら取り乱しそうなこの事実を素直に受け入れられるのは、周囲にいるのがあの兄だったり従弟だったりするせいかな。

それとも尋人の想いを知っていて、幸福感が上回るせいだろうか。

「…。とにかく勝負は明日だ」

そうして彼は、仕事を一秒でも早く終わらせるべく力強い足取りでスタジオへ戻るのだった。

## 二度目の楽園 八

翌日、放課後を迎えた榊学園高等部二階、二年四組の教室で帰り支度をしていた中流は、隣の席にいる親友、本居尚也に呼ばれて振り向いた。

と同時に尚也に怪訝な顔をされ、どうしたのかと思ひ中流も顔をしかめた…、つもりだったのだが。

「…今日一日、何がそんなに面白いんだ？」

「は？」

「その不気味な面はどういうつもりだって聞いてんの」

「顔？」

「…あつそ。まったく自覚ないのな」

「？」

呆れた物言いに、中流はやっぱり意味が解らず首を傾げる。

だが、いつもの彼ならそんなことを言う尚也に対し、

「浅見と付き合ってから人間狂ってるおまえに言われたくない」「くらの反論は出そうなものだが、今日はどうも妙だった。

そういう非難めいた台詞がまったく浮かんでこないばかりか、尚也の幸せさえ心から祝福したい気分なのだ。

「尚也、今日も浅見と帰るんだろ？」

「ああ、そうだけど…？」

「そつか。大事にしるよ、彼女のこと」

「」

肩をポンと叩いて、そう言い残して教室を出て行った中流の背を、これは新手の嫌がらせだろうかと胸中に不安を募らせつつ見送る尚也。

つい一週間ほど前に、恋人・浅見理香のことばかりにかまけて友人を二の次にしていたことで報復を受けていた尚也は、真面目な顔で「浅見を大事にしる」と言った中流にこそ「頭も身体も大事にし



てやれよ」と言いたい。

「悪いモンでも食ったのか…？」

それとも高熱に頭をやられたのか、もしくは持ち前の天然で真顔のギャグをかましただけなのか。

どう考えても中流らしくない今日の彼に、尚也は不安を募らせた。

「大丈夫かよ…」

もう見えない親友を心から案じて呟いた尚也は、深く深く息を吐いた。

中流は、今日一日の自分がどういう顔をしているのか、まったく自覚がなかった。

六時間の授業で一度も教科担任に指名されなかった理由も、尚也以外の友人が遠巻きに自分を噂していた理由も、中流はまったく気付いてさえいない。

まさかクラスの全員が中流の『異常さ』を怖がっていたことなど考えもしなかった。

後に一人のクラスメートが、

「浅見に告白された次の日の尚也みたいだった」と彼に言うのだが、実際、中流の今の気持ちはその日の尚也と同じだっただろう。

つまりそれだけ、今日の彼は異常なハイテンションで上機嫌、オマケに顔は緩みっぱなしという、実に危険人物的要素を備えていたのである。

それこれも、登校してきた際に偶然にも尋人の姿を見かけたから【告白された次の日の尚也】同様、今日が勝負の中流はその直後から気合充分だったからだ。

（尋人がいる）

そう思うと五十分間の授業はもどかしく、昼休みにでも中等部に行こうかと考えもしたが、尋人を見る周囲の視線を思い出してどうにかこらえた。

そうして放課後になった今、中流は喜々とした足取りで中等部の校舎に向かう。

もう帰ってしまったとは思わない。

必ず会えるという自信が彼の内にはあったから。

(ちゃんと伝えるんだ)

もし逃げられても彼の腕を掴んで引き止めて、何度でも、尋人が自分の言葉を聞き入れてくれるまで。

(おかしなもんだよな、全然抵抗がないってのも)

男の尋人相手に何を言おうとしているのかを考えても、好きになつてしまつたら仕方ないと言う気持ちの方がはるかに強い。

あの少年と一緒にいられるなら、それで良いように思えるのだ。

(尚也に言つたりしたら、まあ多少はマズイことになりそうだけど…)

あの親友は生理的にそういう話がダメらしく、以前その手の話が好きな女子生徒に中流との仲をからかわれて本気で嫌な顔をしていたのを思い出す。

中流もその時は半ば本気で引いてしまつたが、今なら冗談だと笑える気がした。

(秘密の関係つてのもなかなか…)

そうして顔をニヤケさせる中流の姿は、誰が見ても「怖い」の一言に尽きるだろう。

だが幸いにも、この中流を目にした者はいなかった。

というのも、生徒玄関に向かう途中の廊下の窓から、見逃すわけにいかない複数の人影を目にしたからだ。

「っ!？」

まさかと言う思いで窓から下を覗き込めば、微かにだが口汚く罵る声がする。

「あいつら…っ」

瞬時にして今までの情けない顔を消し、怒りを露にした中流は、階段を二段飛ばして駆け下り。

生徒玄関で靴を変えるのももどかしく、彼らの姿を見た窓の、ちようど真下にあたる一階の窓から外に飛び出した。

「！ おまえ…六条か！？」

それを真正面で目撃した高等部の教師が、見知った生徒の大胆不敵な行為に目を見開き、周囲にいた生徒達は何事だと、窓から中流の姿を目で追った。

「どけるおまえらっ、おい六条！」

そんな教師の声は大勢の生徒達にかき消され、中流は完全に無視して上靴のまま外を走る。

「こつちで間違いないはずなんだが…」

二階の窓から見て、一階の窓から飛び出すまでの間、連中がどこに消えたのかは分からない。願わくば、二階で見たその先にいてくれと心から願う。

そうでなければ間に合わない。

必死の形相で逃げていた尋人が、追っていて複数の男子生徒達に傷つけられる。

「クソツ…、尋人！！」

大声で呼びかけても返事はなく、中流は慌てて方向転換した。

こちらにいないなら、第二体育館の方かと予測して、駆け出す。

何度も少年の名を叫んで、どれくらい走った頃か。

「！ ……！！」

「」

「！」

複数の聞き取れない声が耳に飛び込んできた。

(こつちか！)

急いで声のする方へ駆け寄り寄る内に、連中の声も鮮明になって来る。

「なんだよその面は」

「まだ反抗する気か！？」

「言つたら、おまえは俺らのイヌなんだよ！ 俺らは主人だぞ！！」

「…っ…ちがっ」

「何が違う？ おまえ一人で俺らに逆らおうなんてバカじゃねえの？」

「たかが高等部のヤツと親しくなっただくらいで、てめえが俺らから逃げられるかよ」

口汚い、性根が腐っているとしか思えない連中の言葉に中流は力ツとなった。

相手が複数だとか、そんなことを考えている余裕もなかった。

「おまえら！！」

「！？」

怒鳴りつけたと同時に、六人の男子生徒が驚いた表情で振り返り、土の上に倒れこんでいた尋人の目が見開かれる。

その唇から流れる血や、汚れた制服のブレザーやシャツがひどく痛々しくて、見ているだけで中流の血は沸き立った。

「…せんば……い……？」

尋人の掠れた呟きに、六人の男子生徒はそこにいるのが誰なのか気付く。

高等部の六条だ……。

本居先輩の……。

そんな囁きが交わされ、敵意剥き出しの目が向けられた。

「ふーん……。アンタが物好きな六条センパイか……」

中流を見分するように、嫌な目付きで言うのはリーダー格の滝岡だった。

身なりは普通の高校生にしか見えないが、色が抜けたうえに無造作に伸びている髪や、だらしなく前の開いたワイシャツ、反抗的な視線、そのどれを取っても、一目で教師に煙たがれている生徒だと知れた。

その隣で偉そうな顔をして、中流と同じくらいの体格に茶髪と赤のカラーコンタクトを入れているのが益田。

後の連中は、学年の違う中流には誰が誰なのか分からないが、例外なく悪そうな顔つきだ。

「…おまえら…、いつもこんなことしているのか……」  
「センパイに關係ないでしょ」

小馬鹿にするような物言いに、中流の気分はいつそう悪くなる。  
「大体さ、センパイがこいつに構うから俺ら退屈だったんだぜ？  
人のモンに勝手に手え出さないでもらいたいんだけど」

「誰がおまえらのだつて？」

吐き捨てる様に言い、中流は尋人に一步近付く。同時にその進路を益田が遮った。

「退け」

「こいつは先輩のモンでもないじゃん？」

明らかに敵意を含んだ物言いと、仲間内の嘲笑。

キレかけた中流だが、尋人の心配そうな眼差しが寸前で正気を保たせる。

「あのさ…、俺はケンカつて好きくないんだけどさ…」

「弱いからだろ！」

「！」

直後、背後から襲いかかる拳。

突然の攻撃に、中流は一発くらいの痛みは覚悟したが、それより早く割り込んできた細い影。

「先輩に手を出すな！」

「っ！」

尋人が傷ついた体を奮い立たせ、攻撃を仕掛けた生徒の腕にしがみついていた。

「ダメ…っ！」

「尋人！」

逆上した生徒が尋人に肘鉄を食らわせ、少年の細い体が地に落ちる。

痛々しい悲鳴。

中流の平常心もはや限界。

「この…っ」

尋人を殴った生徒の肩を掴み、腹部を膝蹴りし相手の呻きが上が  
る間に、今度は別の足で益田の腕めがけて蹴りを繰り返す。

「！」

咄嗟に取った防御は、しかしほとんど役に立たず、益田は土の上  
に転った。

「あ……！」

「なっ……」

「テメエ……！」

「誰がケンカ弱いつて？」

掛かってきたもう一人の拳を難なくかわし、その腕を捻り上げて  
突き飛ばす。

「ダテに有名人の家族やってるわけじゃないんだぞ」

冗談のように告げた言葉は、だが過去の経験から放たれる自信の  
表れ。

父親や、兄、伯父の立場。

そこから発生する様々なアクシデントから十七歳の今日まで乗り  
切ってきたのは伊達ではない。

あの裕幸だって、護身術にかけては一流の腕前なのだ。

「尋人は連れて帰らせてもらおう」

「このヤロ……」

「上等だ……！」

益田が立ち上がり、怒りで真っ赤になった顔で怒鳴る。

「俺にやらせる……！」

「殺せ……！」

突き飛ばされた少年も声を張り上げ、尋人がハツとして身体を起  
こす。

「先輩、後ろ……！」

六人の内、滝岡と、別の一人を除いた四人が中流に襲いかかる。

背後を取られ、中流も「これはまずい」と思った、そのとき。

「どこに行った六条……！」

聞き慣れた男性教諭の声にその場にいた誰もが動きを止めた。

「今の声…、木田…:…?」

中流は無我夢中だったから、窓から飛び出したのを木田教諭に見つかっていたことも、何度も「待て」と怒鳴られていたことにもまったく気づいていなかった。

担当教科は生物だが、いつも白衣を着ている彼は教えている授業内容に似合わず大きな体躯と迫力のある厳つい顔をした四〇代後半の男だ。

「ヤベツ…!」

「クソ…ッ!」

「六条ここか!？」

ガサツと音がして、草木を掻き分けて現れた予想通りの人物に、尋人を痛めつけていた六人全員が逃げ出した。

「な…っ、おい貴様ら!！」

逃げていく中等部の生徒に声を荒げた後で、残った中流と、傷ついた尋人を交互に見た木田は大体の事情を察した様子。

「…:… おまえが窓から飛び出して行ったのはこれか？」

「ええ…、まあ…:」

歯切れ悪く答えると、木田は厳つい顔でじつと中流を見ている。

「…:あ…つと、先生、よくここが判りましたね。体育館の角で死角になっっているのに…:」

気まずくて口を開くと、同時に歩み寄ってきた木田が、いきなり中流の頭を平手で叩く。

だがそれは軽く掠める程度のささやかな痛み。

「センセ…:??」

「さつさと靴を履き替える。中に戻る前に靴の裏を洗って、校内を汚さないようにしる。それと、窓からは入ってくるなよ!」

「りょーかい」

叩かれた頭をさすりながら返事をする、木田は軽く笑って尋人を振り返る。

「大丈夫か？」

「え…、あ、はい……」

尋人が恐る恐る答えると、木田はもう一度、中流に向き直る。

「知り合いか？」

「そうです」

彼が頷くと、木田は目で笑い、中流にいつそう近付いて耳打ちする。

「…さっきの連中は見覚えがあるんだが、中等部の三年だな」

「知ってんですか？」

「有名だ」

忌々しそうに呟いた木田は、ポンと中流の肩を叩いて、いま来たばかりの道に戻っていった。

中流はホッと安堵の息をつくと、世話になっている生物教師に胸中で感謝し、いまだ地面に座り込んだままの尋人に手を差し出した。

「立てるか？」

「…」

「いまの、高等部の木田先生って言って、俺達の生物を教えてくださいているんだ。顔は怖いけど悪い先生じゃないよ」

戸惑っている様子の少年に説明するが、それでも尋人の表情に浮かんでいる困惑の色は薄らがない。

木田が誰か判らなくて困っていたわけじゃなさそうだと考えた中流は、自分を見る目がそうだと気付いてやっと理解する。

「…会いに行こうと思っていたら、窓から尋人が追われているのが見えてさ。思わず窓から飛び出してきた」

「…会いに…って、どうしてですか…、だって僕は…」

「尋人の気持ち嬉しかったから、昨日からずっと会いたかったんだぜ？」

差し出した手を引いて、中流は膝を折って尋人と目線の高さを合わせる。

丸く見開かれた少年の瞳を真っ直ぐに見つめた。



「嬉しかったよ」

「……って……、だって気持ち悪くないんですか……？ 僕の言ったこと  
って……、だって先輩を男の人として……僕は……」

「ああ。だから嬉しかった。俺も尋人が好きだから」

「」

「尋人が好きだから、そう伝えたくて会いに来たんだ」

これ以上ないというくらいに見開かれた目が、今度は次第に細く  
なっていく。

眉間に皺が刻まれ、その瞳自体が毀れそうなくらい潤んでいく。

「そ……な……冗談はやめ……」

「こんなことで冗談なんか言わない」

「……だって……だって先輩、恋人いたじゃないですか……ずっと、女  
の人と……」

「……よく知ってんな」

わずかに顔をしかめて言うと、少年の瞳から大粒の涙が落ちる。

「お、おい……」

「だって僕は……先輩のことずっと……、一年の時からずっと……っ」

「一年で……二年前から……！」

これには本気で驚いて、ポロポロと零れ落ちる涙を親指の平で拭  
う。

「二年も前からって……マジで……？」

「そうです……っ」

顔を赤くして、怒ったような顔をするのは照れ隠しのつもりだろ  
うか。

目をギュツと瞑るのは、それ以上涙を溢さないためなのか。

そんな尋人が愛しいと思う。

理性だとか忍耐だとか、そんな言葉は頭の中から追い出して、た  
まらない気持ちの赴くまま尋人の華奢な体を抱き締めた。

優しく、宝物を胸に隠すように包み込む。

「先輩……」

「悪かったな、二年も気付かないで」

「…」

「これからは一緒にいる。尋人を一人になんか、俺が絶対しない」

「せんば…痛っ…」

「尋人？」

力を緩めて少年の顔を見下ろすと、唇が切れて血が滲んでいた。

中流の胸に顔を埋めたまま喋ろうとしたからだろっ。そこに引きつった痛みが走ったらしい。

「大丈夫か？」

問いかける中流に、尋人は小さく頷く。

涙に濡れた頬は土で汚れ、制服のあちこちに、された仕打ちの跡が残っている。

尋人をこんな目に遭わせるあの連中をどうにかできたらと、中流は心から思った。

この少年の前から消せたらどんなにいいだろう…、それを本気で願う。

「？先輩…？」

無言になって唇の傷を見つめていた中流を、尋人が不思議そうな眼差しで見上げた。

それにそっと微笑んで、中流はゆっくりと顔を近づける…。

「先ば…」

突然のことに、尋人はどう反応すべきか判らなかった。

本当に、いきなりのこと。

キスされていると自覚した途端、尋人は顔に限らず全身が恥ずかしさで熱くなった。

だが逃げようにもこの相手から逃れる術を少年は持たない。

二度、三度と、角度を変え、強弱をつけて繰り返される穏やかな口付けを受け入れることしか考えられない。

「ん…せ、先輩…っ」

微かな隙間から声が漏れて、中流はようやく唇を離す。

だが間は取らず、いつでもキスが再開できる至近距離で中流は告げた。

「…俺が本気だって、信じてくれるか？」

「…」

「…尋人？」

返事がなくて、俯いたままの尋人の顔を覗き込んだ中流は、真っ赤な顔をして、呼吸をしているかどうかも怪しい静かな状態の彼に首を傾げる。

「どうした？」

問いかけ、熱くなった頬に触れると、尋人は恐る恐る顔を上げて中流を見た。

「？」

「せ…先輩……」

顔を赤くして、いままで触れ合っていた唇を手の甲で隠す尋人に、中流はふと思い立つ。

「…あのさ、今まで誰かと付き合った経験て…？」

最後まで言わせず、尋人は激しく首を振る。

「ならキスも初めてか……？」

時間を空けて小さく頷く尋人に、中流は先走ったかと反省する反面、なんだがひどく嬉しくなってきた。

「だって…好きですって言ったのも先輩が初めてで…っ、受け入れてもらえるなんて、そんな…奇跡みたいなこと……っ、先輩！」

尋人は仰天して声を上げるが、中流は構わず少年の細い体を抱く腕に力を込めた。

「好きだよ」

「っ…」

「奇跡じゃないんだ。これが現実だって、信じてもらうまで何度でも言っ」

「先輩…」

「尋人が好きだ」

「せ、先輩！」

焦りで震えた声上がる。

「信じるからもう止めてください…、恥ずかしくて死にそうです…」

一段と赤みの増した両頬を押さえて告げる尋人に中流は笑った。

ようやく手に入れた少年を支えて立たせながら、照れ隠しに怒った顔つきで地面を睨んでいる尋人の顎を取る。

「せ、先輩…」

「好きだよ、尋人」

「！ ……ん…」

好きだと告げるたびに真っ赤になる尋人に微笑して、中流はそっとキスをする。

慣れない少年を愛しむための、穏やかで優しい口付けを ……。

## 二度目の楽園 九

北国特有の短くて涼しい夏が終わり、街路に立ち並ぶ、もしくは住宅街を彩る木々が、もの哀しい秋の色へと姿を変えて早々に散り終えたのがおよそ一月前。

それからしばらくして大地は見渡す限りの白銀色に覆われ、人々は氷点下の日々を重ね着で過ごす日々を送っていた。……にも拘らず、中流の心には真つ青な夏空と暖かな風が途切れることがなかった。

好きです　その言葉を尋人に告げられ、応えたあの日からそろそろ二月が経とうとしている十二月初旬。

顔が緩みつぱなしだった中流の心も当時に比べれば随分と落ち着きを取り戻していたが、彼の親友、本居尚也が恋人の浅見理香と今でも新婚気分で周囲の毒気を抜いているのと同様、中流の内でも尋人への想いは「好き」から「愛しい」へと確かな成長を遂げていた。そしてそれは中流の生活にも大きな影響を及ぼし、以前に比べて何倍も充実した日々を送れるようになっていた。

「最近調子いいじゃん」

不思議そうに言ってきたのは教室で席が隣同士の同級生。

昼休みを半分過ぎたくらいの教室は生徒の数も授業中の半数。

彼らは後ろ窓側半分を占領し談笑に興じていた。

「二ヶ月くらい前は真剣に狂ったかと思っただけど安心したぜ」

尚也は中流に程近い位置にある机に座って言い、笑った。

「しっかし、尚也にそう言われるのも問題だよなあ。尚也に比べれば、まだ六条の方がマシだと思っただし」

「そーかあ？　不気味な顔ってんならどっちもどっちだと思っぞ」

「俺があんなだらしのない顔してたってのか！？」

「げっ、一ヶ月前の俺ってそんなだらしのない顔していたのか？」

尚也と中流の、微妙に異なる台詞に同級生達は大笑い。

中流も笑った。

ただ一人、尚也だけが不満そうに頬を膨らませる。

「ンだよおまえら！ 俺だって勇輔のライブの一件以来、理香にはっかかりかまけんのやめたじゃんか！ 大体なつ、俺のは狂った理由がはつきりしてるけど中流には何も無いんだぞ！？」

「え？」

「そう言やあそつだ。おまえってば問い詰めようとしてもはぐらかすばかりで、ちゃんと説明したことないよな」

「最近調子いいのも、やっぱ関係あんじゃないの？」

「ん〜」

尚也を筆頭に複数の友人達に顔を近づけられて中流は返答に困った。

「やっぱ女だろ」

「違うよ」

「マジでか？」

「マジで」

「つとかよお」

疑わしい目を向けてくる友人達に苦笑しながら、中流は嘘ではないと胸を逸らす。

恋愛成就是したが相手は尋人。

女ではないのだから嘘はついていないはずだ。

すると目の前に座っていた友人が首を傾げつつ口を開く。

「まあな…、女がいたら、あんな頻繁に中等部の後輩と一緒にいるわけないもんな」

「中等部の後輩？」

「誰だよ、それ」

聞き返すのは集まっていた同級生のうちの半分で、もう半分は同意を示すように頷いている。ちなみに尚也は知っていて「だろうなあ」と呟く側。

中流は笑みを崩さず、そのうち、事情を知っている友人の一人が

噂の後輩のことを話し出すものだから、中流も黙っていられずに口を開く。

さすがに“恋人”とは紹介出来ないが、倉橋尋人という親しい後輩がいることを隠すつもりは毛頭ないのだ。

「ちよつとした縁で知り合つてさ。尚也が浅見ばつかりで俺のこと蔑ろにしていた時期があつただろ？ その頃からな」

「ああ、それつてこの間、一緒に歩いていたら小さい奴か」

一人が言つと、それなら俺も見たぞと数人が声を上げる。

「結構可愛い子だろ、確か山川のクラスの」

「山川つて、俺らも中等部の頃に世話になつた現文の山川？」

「あいつ、HRが長くてなあ」

中流は苦笑しながら友人の台詞に頷いてみせる。

「尋人もそう言つてる。今でも相変わらずみたいだ。……つて、どうした尚也」

ふてくされた顔で、じとーっと自分を見ている尚也に声を掛けると、尚也は心底面白くなさそうに答える。

「ヒロトねえ…、ふーん、そんなに仲良くなつてんだ。へーっ」

「……」

尚也が言い終えてフンつとそつぽを向いてしまつと、静まり返つていた一同が一斉に吹き出す。

「なっ…」

「あははははっ！」

「な、お、ばっ…あははははは！」

「ツクツクツク、笑えるぞ尚也！ おまえやつぱおもしれー！」

「何がだよ！」

「おま…ツハハハハ」

「おまえなあ、ヤキモチ焼くくらいなら最初から六条のこと蔑ろにすんじゃないよ」

「ヤキモチだあ！？」

「じゃなかつたら何だつて？ なあ六条」

「クククツ、そんなに尚也に愛されていたなんて俺も知らなかったなあ」

「気色の悪い言い方すんな！」

赤くなつて怒る尚也に周囲の笑いは納まらず、中流もだんだん悪乗りしたくなつてきた。

おまけに彼の友人達はそういう冗談が大好きな、ノリのいい人格揃い。

「いやあ悪かつたな、尚也。俺はすっかりおまえに捨てられたと思つてたからさ」

「捨てたあ！？」

素つ頓狂な声を上げる尚也の肩を両隣の友人二人がポンと叩く。

「仕方ないだる尚也。いくら六条だつてあの頃のおまえの仕打ちには捨てられたと思うに決まつてるつて」

「そつだそつだ。いくら十年來の仲だつて、孤独な時に手を差し伸べられりや、そつちに傾くのは当然だろ？」

打ち合わせしたわけでもないのに全員が寄つてたかつて尚也を追い落とす方に話を運んでいくのだから、尚也をからかうのがどんなに愉快か…、もとい、尚也が日頃どれくらい友人達に慕われているのが判るといふもの。

「ちよつと待ておまえら！　なんか話が怪しくなつてないか！？」

「ごまかすなよ、おまえと六条のことは学園公認の秘密だつたんだからさ」

「はあ！？」

「まあ最初は俺らもビビツたけどさ。おまえが六条を捨てたりしなきゃ俺らは祝福してやるつもりだつたんだぜ」

「おい！　おまえら揃いも揃つて何言つてんだ！？　中流つ、おまえも何とか言え！」

「何とかつて…」

困惑したフリをしながら、中流は切ない顔うを作つて尚也の手を握る。



尚也はぎよつとして中流を凝視した。

「…ごめんな、尚也。誤解だったとはいえ、今の俺は尋人が一番大事なんだ」

「な…」

「おまえとのことは遊びじゃなかったけど…許してくれ！」

「…つ殺すぞおまえ！！」

「やめる尚也！ 男同士痴情のもつれで殺人事件なんて面白すぎる！」

「あのなあ！！」

「あははははは！！」

同級生達の、昼ドラも真つ青な素晴らしい脚本に、室内にいなから参加していなかった生徒達もとうとう爆笑を始め、やはり昼食を教室で取っていた女生徒達も遠慮なく笑っている。

妙な物語を展開させる同級生に尚也が半ば本気でキレ始め、真剣な顔を作っていた友人達大半の頬がこらえ切れない笑いに引きつってくる、あながち冗談ばかりを言っていたわけじゃない中流も我慢の限界とばかりに声を立てて笑った。

ちょうどその頃、携帯に着信があり、ざわめきの中では聴こえないと判断して離れていた友人の一人、野口健吾のくちけんじが通話を終えて戻ってきた。

誰かと話しながらもこちらの内容は聴こえていたのだろう。

「六条、よかつたら一緒に中等部に行かないか？ ここにいたら嫉妬に狂った尚也に殺されそうなんだろ？」

「野口テメエモか！？」

いいかげんにしろよと怒りに燃えた目で睨みつけながら声を張り上げる尚也に、やっぱり友人達の笑いは納まらない。

だが尚也と付き合いの長い中流は、そろそろ尚也の怒りを静めなければマズイことになるだろうという予感があった。

中等部に行く機会を逃したくないというのも本心ではあるが、自分がいなくなつた方が尚也も冷静になれるだろうと判断し、立ち上

がる。

「ああ行く。ごめんな尚也。生まれ変わったら一緒になるう」

「中流!」

「冗談だつて。おまえはこの世で一番大切な親友だよ」

「」

唐突に、今までとはまったく違う真面目な顔の中流に言われて、尚也もこれには絶句した。

そんな彼にニツと笑つて、中流は野口と共に教室を後にする。

「さすが六条…」

「尚也の扱いを心得てるな…」

尚也の両隣にいた同級生二人と同様、その場を囲っていた誰もが悠々と去つていった中流に思い思いに嘆息した。

「こういふところはやっぱりあの六条出流の弟だな」と。

## 二度目の楽園 十

「おまえって実は悪党だろう」

並んで中等部に移動することになった野口に廊下で言われて、中流は軽く笑った。

「嘘が付けないだけだって」

「そうかあ？」

信じられなさそうに答える野口。

だが中流のそれは本心だ。

嘘が付けないことを自覚しているから尋人のことを隠そうとは思わなかった。

尚也を含めた同級生のほとんどが尋人のことを知っているから特別「可愛い後輩」とのことを疑って聞かれることもない。すべてを隠すのは大変だが、親しく付き合っていることを周りが納得していれば、よっぽどの現場を見られない限り第三者の好奇心を刺激することはない。それを、中流は実兄・出流の節操のない生活から学んでいた。

「ああ、ところでなんだって中等部に行くことになったんだ？」

高等部校舎から中等部校舎への渡り廊下で中流は尋ねた。

すると野口はニツと口の端を持ち上げ、愉快そうに目を細め、中流の肩に腕を回す。

「野口？」

「へへへ、聞きたいか？」

「…」

これは聞きたくないといっても話し出す雰囲気だなと察した中流は軽く肩を竦めて先を促す。

「なんだよ、そんなイイ話なのか？」

「ふふふん」

「？　なんか不気味だな」

肩に置かれた腕を外すようにして一步遠ざかった中流は、だらしなくにやけている野口を怪訝な顔つきで見ながら、もう一度口を開く。

「何の用事があったて中等部に来たんだ？」

「実はさあ…クツクツ…」

「…？」

どうにも不気味な友人から、もう一步分の距離を取って相手の言葉を待った。

と、渡り廊下を抜けて中等部の校舎に入ると、距離的にはそんなに遠くないのに、校内の雰囲気が一変した。

生徒一人一人の体格差や環境も理由の一つだっただろうが、どことなく冷めた空気が漂っている高等部と違い、中等部は熱い活気に溢れていた。

廊下を駆け抜ける数人の男子生徒は周囲を憚らずに元気な声を上げ、廊下の一部を団体で占領して座り込みながら談笑する少女達は、たった二、三年しか変わらない中流や野口から見ても幼い。

同じ榊学園の校内でありながら、中等部の校舎に、既に中流達の居場所はなかった。

「これも歳取ったってことなのかな」

以前、そんなことを言って苦笑いしたのは尚也だったか、他の同級生だったか。

尋人と付き合うようになってから週に一度はこちらに来ている中流だが、同級生と並んで来ると、いつもとは違う、違和感のようなものが生まれた。

「クククツ…いやあ実はさ」

中流の心境を知らず、野口はようやくまともな日本語を喋りだす。自分の世界に入り込みそうになっていた中流は間一髪で我に返り、友人の顔を振り返った。

「さっきの電話なあ、これクラスの連中には内緒なんだけどさ、付き合ってる相手からの電話で」

「付き合ってたって、おまえ彼女いたの？」

初耳の話に少なからず驚いて聞き返せば、野口は照れたように頬を掻く。

「クラスの連中には内緒な。知られたら色々うるさいからさ」

「…で、俺に話してもいいのか」

「うん？ だってなんか、お仲間な気いしたからさ」

「仲間…？」

首を傾げて復唱すると、野口はニヤニヤと笑いながら中流の耳元に近づく。

「尋人クン、可愛い子じゃん？ 親しい後輩じゃなくて大事な恋人の間違いだろ」

「」

予想しなかった台詞に、中流は思わず足を止めて相手を凝視してしまった。

尋人のことを隠すつもりはなくとも、すすんで公表する気もなかったから、こういう形で不意打ちを食らうと、どう返せばいいのか、正直当惑してしまう。

「ん？ 凶星だろ」

実に楽しみに言われて、中流は友人の言葉を頭の中で整理しつつ、眉を八の字にして問いかける。

「…仲間って言ったか？」

「おお。俺の相手は男じゃないけどな。公に出来ないって意味では仲間」

「公…って」

「俺ね、松島と付き合ってたんの」

「松島…？」

松島、松島…と知り合いの「松島」を脳裏に思い浮かべながら、その中で中等部に関係ある人間を絞り込んでいくと、たった一人、スラリと背の高い女性だけが残った。

「松島…って、おまえ…」

「へへ、ナイスバディだろ」

「だろ、って…松島つつつたら数学の松島先生……」

「そうそう」

二度頷いて笑っている野口は、教室で見る彼とは別人のように明るい。

「俺さあつ、せっかく付き合ってる相手いんに誰にも話せないですっげーストレスだったの！ 解るかこの気持ち！！」

「あ、ああ……」

同意の返答はするものの、実兄やら年齢の近い従弟やらと、相談できる相手がすぐ傍にいる中流はその手のストレスを抱えたことがないし、恋人とは言えずとも尋人のことはクラスの中のみなが知っていることで、秘密にしなければならぬというプレッシャーを感じたこともない。

だがあえてそうは言わず、中流は思い掛けない告白をした同級生を眺めていた。

「そんなんでさあ。別におまえのこと共犯にしようなんて考えてないけど、おまえなら話せるかなと思ってさ。尚也の片思い期間だつて、突き放したりしないで相手になってたから」

「……」

「まあそういうこと。おまえと尋人クンのことは見ていて気付いちやっただって感じで、おまえは隠すつもりなさそうだけど、俺はとにかく誰にも言わないしさ」

言い終えて中流から腕を離れた野口は、ニカツと笑って歩き出すよう促す。

「俺が松島センセと付き合ってるってコト、誰かに知って欲しかっただけさ」

「そっか……」

野口の笑い方に曇りが無いのを見て、中流も笑った。

「…そっか。見ていて解るくらい、俺と尋人って仲良く見えるんだ」

「あつ、おまえそれは惚気か!？」

「そう聴こえるならそうだろ」

「くそ、なら俺も惚気るぞ！ さっきの電話な、弁当作ってきたから一緒に食おうって誘いだっただぜ！ 羨ましいだろ彼女の手作り弁当！！」

ムキになって言う野口に、中流は声を立てて笑った。

教室での彼は、中流や尚也が騒ぐのを見ていて時々口を挟んでくる、そんなタイプの少年だった。こんなふうに照れた顔をして自分のことを話したり、ムキになったりする野口を中流は今まで知らなかった。

「恋って偉大だ…」

「あ？ なんか言ったか？」

中流の小さな囁きを聞き逃した野口は赤い顔で聞き返すが、中流は左右に首を振る。

「なんでもない。それより弁当食うんだったら急いだ方がよくないか？ 昼休み、あと二十分くらいだぞ」

「あっ」

時間を指摘されて顔色を変えた野口は、

「また教室でな」と告げて自分の目的地に向かって駆け出した。

数学教師が恋人となれば、逢引は人気のない四階特別教室のどれかだろうと思う。

そうして中流はといえば、野口に影響されたのか、本気で尋人に会いたくなり、彼の教室がある三階へと足早に上がった。

すれ違っ後輩がペコリと頭を下げてくるのに「おう」と応え、中等部三年生の教室が並ぶ廊下に立った。

その時だ。

「倉橋！」と、愛しい少年の姓を見知らぬ誰かの声が呼んだ。

「倉橋！」と、愛しい少年の姓を見知らぬ誰かの声が呼ぶ。

一瞬、いじめグループの連中かと警戒した中流だったが、声のした方に向かい、尋人と、彼の正面に立つ二人の少年の顔を確認して一先ず胸を撫で下ろす。

尋人と話しているのは普通の格好をした、いたって普通の男子生徒だった。

「倉橋、これなんだけどさ……」

言いながら、一人の少年が尋人に一枚の紙を差し出した。

「どうする？ 出席するなら名前書いて欲しいんだけど」

「進路説明会……うん、出ようかな……」

「じゃあここに名前」

「ペン、ある？」

もう片方の少年が聞き、尋人が持っていないと答えると、すぐにボールペンを手渡す。

「ありがとう」

そう告げて、尋人は笑んだ。

彼に話しかけていた二人の少年が少なからず驚いたのを、中流はその目に捕らえた。

「……倉橋、高等部に進学するのか？ それとも外部？」

「希望は高等部だよ。今から受験勉強するのは大変だし」

冗談めかすように言う尋人は変わらない笑みを浮かべていて、話しかけている少年達は不思議そうに何度も首を傾げている。

「……なんかあったのか？」

「え？」

「いや……」

二人の少年の問いかけの意味が解らずに小首を傾げた尋人だったが、相手が再度は言いずらそうにしているのを察し、名前を書き終



えてからペンを持ち主に返した。

「ペン、ありがとう」

「…あ、ああ」

ペンを受け取って、それでもまだ不思議そうな顔をしている二人は簡単な言葉を最後に尋人と別れた。

二人は中流のいる方へ、尋人は奥へと進んでいく。

あの先は図書室だろうと判断した中流が後を追おうと足を動かしかけた時、今まで尋人と話していた少年達の声が入ってくる。

「あのウワサ、本当だったんだ。倉橋が明るくなっちゃって」

「うん…、全然暗くないじゃん。なんか…むしろすごい感じ良かったぜ？」

「普通に話せるよなあ…、なんか悪いことしてきたな、俺ら……」  
いじめグループ、滝岡や益田に目をつけられているという理由でクラスでも疎外されていた尋人。

あの二人は尋人の同級生なのだろうが、今までまともに言葉を交わしたことなくあったのだろう。

尋人と親しくすれば自分も滝岡に目をつけられる。

そんな不安があったから尋人は独りであるしかなかったのだ。

そんな環境の中で辛い思いばかりしてきた尋人は「ずっと好きだった」中流にさえ最初は陰を背負った表情しか見せなかった。

それが今はどうだろう。

同級生に笑顔を見せられる。

ありがとうと、自然に笑んで応えられる。

「尋人…」

そんな少年の変化を、成長を、中流は心から誇らしく思った。

「尋人」

図書室の扉の前。

呼びかけ、振り返った少年を、中流は引き寄せる。

「え…先輩……？」

瞬時に頬を染めて自分を見上げる尋人。

中流は今ここで少年の細い体を力いっぱいに抱き締めたいのを、  
理性を総動員して抑えた。

「よ」

笑んで声を掛けると、途端に尋人の表情も綻んだ。

こんな幸せな瞬間が愛しい。

「…あ、あの…」

「ん？」

「…退屈、じゃ…ないですか？」

「なんで」

「だって…」

「おまえの顔を見てるの楽しいよ」

「……っ」

あっさりと言うと、途端に真っ赤になる尋人の頬。

そういう変化が楽しいのだと、さすがに声には出さなかったけれど、中流はくすくすと笑いながら手を伸ばす。

「あっ……」

目に掛かる髪に触れ、指先で撫で。

そうすると尋人はわずかに身体を引く。

「先輩…っ」

「平気だよ、誰も見てない」

「でも…」

図書室の窓側の席。

図書委員が座るカウンターから微妙に隠れた場所に並んで座る彼らの周りに人影はなく、全体を見渡しても生徒の姿は数える程度。

中流は自分が中等部の生徒だった頃のことを思い出すと、昼休み

たとえば教室で仲間達と談笑したり、体育館でバスケット、校庭でサッカー、学校を抜け出して近所のコンビニに立ち読みに…などばかりで、図書室など実は一度も入ったことがなかった。

今でも大部分の生徒がそうだから、ここはこんなにも閑散としているのだろう。

だが尋人は、ここが昼休みの休息の場だという。

どこにも居られないから図書室で本を読むのだと。

今も彼の手元には読みかけの文庫が置かれている。

尋人が今日は先輩がいるならと遠慮したものを、邪魔しているのは自分だからと中流が持たせたのだ。

それで、中流が暇をしているのではないかと尋人は気にしているのだが、実際、中流は退屈などしていない。

尋人が隣にいる、それだけで中流は満足なのだから。

「…先輩…どうかしたんですか…？」

「ん？」

「だって…、なんかすごく…嬉しそうな顔しているから……」

「そりゃ、尋人と一緒にいらられるだけで嬉しいし」

「そうじゃなくて……っ」

言いながら、どんどん赤くなっていく少年の顔を見下ろして、中流は軽く笑った。

隣り合う指先で少年の髪を弄び、微笑を含んで言葉を紡ぐ。

「尋人に惚れ直したのさ」

「え…？」

「尋人を好きになって良かったなって、改めてそう思ったんだ」

「…っ」

真っ赤になって上目遣いに睨んでくる尋人の気持ちは「恥ずかしいこと言わないで下さい！」だろう。

そうと解つていても、…否、解っているからこそ中流は言つのを止められない。

「好きだよ」

「せ…っ」

「尋人が大好きだ」

「先輩…！」

恥ずかしさに真っ赤になり、目が潤んでくる少年の稚さ。  
好きな相手にこんな顔を見せられて、その気にならない男がいるはずない。

中流だって健全な十七歳の青少年で、想いの通じ合っている相手がすぐ傍らにいて、ほとんど二人きりのシチュエーション。

キスくらいしても大丈夫かな、とか。

それ以上のことを望むのも普通かもしれない。　だが中流は、

その衝動に理性という名のブレーキをかける。

今以上のことをこの少年に課してはならない、自身にそう言い聞かせて、少年の手を取り、そこに軽いキスを落として離れた。

「？　先輩…」

「そろそろチャイム鳴るし、戻るよ。いつまでもここにいたら尋人にも五限サボらせてしまいそうだしな」

苦笑いの表情で中流が言うと、尋人はあからさまに動揺し、続いて気落ちしたように俯くと、哀しげな声で謝罪の言葉を口にする。

「…ご…ごめんなさい先輩、僕…」

「？　おまえが謝ることじゃないだろ」

「でも…。でも僕が、怖がるから…」

「」

尋人の言わんとしてしていることを察し、中流は苦笑する。

「またそれを気にしてるのか？」

「だって…」

「俺は、おまえに無理させる気はないんだって、前々から言ってるだろ」

「…」

「耐えさせるなんてことしたくないんだ、絶対に」

「先輩…」

それでもまだ申し訳なさそうな目で見上げてくる少年に、中流は明るく笑ってみせる。

「そんな顔するなつて。俺だって本当に我慢出来なくなれば無理矢理でも押し倒すぜ？」

「え……」

「だから、こうやってストップ出来る間はまだ余裕つてこと。解つたな？」

確認するように聞く中流を、尋人はまだ沈痛な面持ちで見上げていた。

「でも……」と悲しげな声を出す。

「でも……先輩は僕のことを考えて、すごく幸せにしてくれているのに……僕は……」

僕は……

そうして俯き、唇を噛む。

そんな尋人に中流は軽く息を吐き、その頭を乱暴に撫で回した。「ばーか。おまえが笑っていれば、俺だって充分に幸せなんだつて」尋人が辛い目に遭う事無く、笑っていてくれれば。

自分と一緒にいることで安らいでくれるなら、それが中流にとって何よりの至福だ。

今はまだ、触れ合うことよりも。

熱を注ぐことよりも。

今まで我慢ばかりしてきた少年が笑顔を絶やさずにいってくれること、それが中流の、ただ一つの願い事。

尋人の想いを知り、中流がその想いに応えたことで、親しい先輩後輩の間柄から恋人同士へと変化した日からおよそ二ヶ月。

彼らは二人きりの時間を愛しみながらも、キス以上の行為には一度も及んでいなかった。

……否、たった一度だけ、そういう雰囲気になったことはあった

のだ。

だがその時の尋人の様子があまりに痛々しくて、中流はそれ以上に進むことが出来なかった。

尋人が滝岡達から長い間繰り返されてきた暴力が、身体的にだけではなく、精神的な面にも深い傷を作っていたことが、思い掛けない形で晒されてしまった。

尋人が行為に耐えようとする姿は、痛々しいを通り越し、あまりに残酷なものだったのだ……。

「だからキスだけで我慢してるって？」

驚いたように中流の現状を聞き返すのは、二月ぶりに休みをもらって地元に戻ってきていた兄・出流。

「せっかくの休みならカノジヨと旅行にでも行けよっ」と、散々からかわれて気分を害した中流が冷たく言い放つも、

「カノジヨと付き合うのも仕事の一環さ」とあっさり返されてしまった。

せっかくの休みなら仕事抜きで“この場所”に戻ってきたかったのだと出流は言う。

その兄の気持ちは、腑に落ちないコトが山ほどある中流にも解る気はする。

“この場所”は、家族が集まる大切な場所だから。

「中流：、健全な男子高校生がそれでいいと思うのかい？ 尋人君がおまえを好いているのが明らかなら、多少強引になってもコトに及ぶのが男の礼儀だろうに」

「それは貴方個人の考え方でしよう、出流さん」

普段の彼からはとても想像出来ないキツイ視線を向けて言うのは、出流とよく似た顔立ちの年下の従弟、大樹裕幸。

「貴方の基準で中流さんの恋愛まで図らないで下さい」

相変わらず出流にだけは険のある態度を崩さない裕幸に、言われている本人は面白そうに目元を緩ませた。

だがそうした出流より先に口を開いたのは、裕幸の隣に座っていた少女。

肩上までの髪を外巻にして揃えた少女は、中流と同じ年齢で、近所にある聖エイーナ女子高等学校の生徒会役員を務める江藤汨歌。

彼女もまた、北欧の祖母を持つ、中流の母方の従姉だった。

「それにしても驚いた。あんたってホモだったんだあ」

呆れているのか感心しているのか、すぐには判断のつかない微妙な口調で言った少女は、中流をまじまじと見て軽く息を吐く。

「出流の女遊びが激し過ぎて女性不審にでもなったの？ 兄貴が無類の女好きだと弟は男好きになっちゃうってことかしら」

「妙な言い方すんな！」

「俺は女性で遊んだことなど一度もないよ」

「へへ。じゃあ本命がいつぱいなんだあ」

思いつきり皮肉った汨歌だが、言われている本人は蚊に刺された程度のダメージすら受けやしない。

だから汨歌も、出流を話し相手にする気など毛頭なかった。

「そんなことより中流。妙な言い方って言うけど、だって付き合っている相手って男の子なんでしょ？ しかも中学生…、それって犯罪じゃないの？」

中流を見て、裕幸を見上げる。

聞かれた裕幸は困った顔を見せた後で小さく首を振った。

「問題ないんじゃないですか？ 中流さんは節度ある付き合い方をしているんですし」

「なあ？」

裕幸が庇ってくれたのが嬉しかったのか、中流は勝ったと言いたげな表情で、裕幸の隣に腰を下ろす。

裕幸を真ん中に、左に中流、右に汨歌。

たくさんの兄弟達の中でも、年齢が近いということもあって特に親しい三人が並んで座っている光景に、出流は無意識に笑みをこぼす。

そしてちょうどそのとき、居間に戻ってきた大樹家の長男・裕明ひろあきも、三人の姿を見るなり楽しげな笑みを浮かべた。

松浦市の南東、敷明小路を過ぎた向こうにある森林公園の手前、小高い丘の上に、広大な面積を擁して建っている“大樹総合病院”。今年で創立四十年を迎えるこの施設には、四方を緑に囲まれた自



然豊かな環境の中、内科・外科・小児科・産婦人科などのあらゆる医療設備と、有能かつ豊富なスタッフが揃っており、「医療は仕事ではない」という創立者のスローガンは現在でも病院の方針としてスタッフルームに掲げられているという。

この創立者の名を大樹嘉武たいきよしたけ 若き日に医学留学した先で知り合った北欧出身の女性と結婚し四人の子供を授かった人物であり、その子供達から生まれた中流にとっては祖父となる人物。

祖父母の間に生まれた子は、息子が一人、娘が三人。

長男であった大樹和弘は医者となって現在は院長の椅子を引継ぎ、実質的な病院の経営者となった。

その彼の子が、大樹裕明たいきひろあき・裕幸兄弟ひろゆき。

長女は二十二の時に江藤氏と結婚、三人の娘と息子が一人生まれ、上から順に汨羽いつは・貴宏たかひろ・歌織かおり・汨歌いつかとなる。

次女は二十五の時に六条氏と結婚、出流いずる・中流あたるという二人の息子を授かり、三女で末子の娘は二十二の時に梁瀬氏と結婚、現在は勇紀ゆうき・真澄ますみ・香澄かすみという三人の子に恵まれている。

祖母は早くに亡くなったが、今も存命の嘉武氏は大樹家で一緒に暮らし、江藤家・六条家・梁瀬家は、まるで示し合わせたかのように大樹家から車で十五分以内の近距離に家が在る。

親族の誰に何があってもすぐに駆けつけていけるように。

何かがあればすぐに手伝いにいけるように。

それを図ったわけではなかったのに、気付けばそうになっており、それが当たり前だったのだと思えるほど、大樹家の四人兄妹の仲は良く、その子供達 従兄弟関係になる十一人は本当の兄弟のように育ってきた。

何かあれば、誰もなしに大樹家に集まった。

連休が続いて暇になれば。

宿題に困って教えて欲しくなったら。

一人でいたくなくなった時にでも。

ちよつとバスに乗って JRを利用して。

歩きたければ歩いてでも、ここに来さえすれば誰かがいた。

祖父がいて、叔父や叔母がいて、従兄弟がいた。

全員が大切な家族だった。

それは、中学を卒業しても、高校を卒業して社会人になっても、成人しても変わらない。

決して頻繁にはなくとも彼らはこの家に集まるのだ。

それが、彼らにとっては何より自然なことだったから。

「ちよつと中流！ あんまり裕幸に近付かないでよね、ヘンタイが伝染るから！」

「妙な言い方するなって言ってるんだろ！ 俺はヘンタイなわけじゃないぞ」

「男が好きなんでしょ！？」

「誰がつ、俺がその気になるのは尋人だけだ」

「それでも男が好きなことには変わりないじゃないっ」

「確かに尋人は男だけど、男でも別なんだ！ 他の奴なら断然女の子の方がいいに決まってる」

「へ〜、そ〜？ やっぱり兄弟よねえ、出流が節操なしなら中流も節操なし、しかも男女どっちでもOKなんて出流の上をいくんじゃないの？」

「デメエ…っ」

「なによっ」

仲がいいのか悪いのか 他の兄弟達にしてみればケンカするほど何とやら〜なのだが、間に挟まれている裕幸の身になってみれば、そんな悠長なことを言っていていられる場合でないことに気付くはずだ。口を挟むことも出来ずに頂垂れていると、いきなり旧歌に腕をつかまれる。

「え…」

「ほら裕幸も何か言ってやりなさいよ！ このヘンタイに！」

「まだ言うっか」

「何度でも言ってるわ、へんたい、へんたい、変態！」

ここまで言われておとなしく引き下がっては男の沽券に関わる。

普段は裕幸のマイナスになることなど間違っても口にしない中流だけれど、さすがに今回はキれていた。

「ハッ、何がへんたいだ、俺がそうなら裕幸だって同じだぞ！」

「えっ」

これに反応したのは本人に加えて二人の兄貴達。

「同じって何がよ！」と、こちらも興奮している汨歌が勢いよく応戦する。

「裕幸があんたと同じわけないでしょ！？ どこをどう見たら同じだなんて言えるわけ！？ 綺麗なこの子と汚いアンタと！」

「裕幸が綺麗だってアイツはケダモノだ！」

「あいつ!?!」

「あの、二人とも……」

「時河竜騎ときがわたつきっ！」

そうして挙げられた名前に裕幸は頭を抱え、裕明と出流は数歩離れたところで吹き出し、汨歌はワナワナと震え始める。

「あいつ絶対に裕幸狙ってるぜ！」

「あ、中流さ……」

「~~~~っ、何言ってるのよ……っ、アレがそうだって裕幸があんなケダモノのこと好きなわけないでしょ!? あれは時河竜騎の片思いよ!!! そうよね裕幸！」

「ちよっ……」

「そうだと言いなさい裕幸っ、あんたまさかあのケダモノにあんなことやこんなこと許したりしてないでしょう!?!」

「え、あつ……」

「裕幸!?!」

「あの……っ」

声を荒げる汨歌の前で、じょじょに赤く染まりゆく裕幸の頬。

これには汨歌と中流が揃って顔色を変え、さすがの兄達も目を丸

くした。

「っ…ちよつと裕幸!? まさかでしょ!？」

「おまえ…、まさか本当に時河竜騎とそういつ仲なのか!？」

「そうなの!？」

「っ…」

二人の従兄妹姉に詰め寄られて、あたふたしている裕幸の顔は面白いほど赤く染まっていく。

片手の甲で口元を覆い、恥ずかしさから潤んだ瞳を縁取る長い睫毛が微かに震える。その姿のなんと初々しく愛らしいことか。

「あ、あの、何か飲み物持ってきてます…っ」

最後の逃げ道とばかりに慌しく立ち上がり、階下へと下りていく裕幸の背を、汨歌と中流は呆然と。

裕明と出流は必死に笑いを噛み殺しながら見送った。

「…なに、今の」

「…可愛過ぎだよな…」

「っ、あんた裕幸にまで欲情する気!？」

「誰がっ！ 正直な感想言っただまでだろ!？」

「ええそうねっ、あの子は誰が見たってこの世で一番可愛いわよっ、そんなの私が保証してやるわ！ だからってなんでその相手が時河竜騎なのよ、なんだってよりによってあの不良!？」

「俺が知るかっ!？」

「汨歌、言っていることが支離滅裂だよ」

クツクツクツと喉を鳴らして笑いながら、ようやく口を挟んだ裕明に続いて、出流も楽しげな表情で口を開く。

「まったく…、あんまり裕幸を虐めるんじゃないよ。おまえ達と違ってあの子は純粹なんだから」

「なに落ち着いてるわけ!？ その純粹で可愛い裕幸があこの不良に手え出されているかもしれなくて言うのに!！」

「それならそれで結構なことじゃないか。裕幸と時河君なら絵になるだろっ」

「そういう問題!?!」

「そういう問題だよ」

「出流っ」

「兄貴!?!」

「俺達が口を出さなくたって、裕幸はちゃんと解っているよ。ある意味、この中で一番大人なのはあの子だからね」

「そういうこと」

出流と裕明、二人の兄達に交互に諭されて、汨歌と中流は顔を見合わせ、口を噤んだ。

「それに、おまえ達が思う以上に、いい子だよ、時河君は」

「…」

不服そうに出流を睨みつける汨歌の隣で、中流は眉を寄せ、軽く息を吐く。

「けど、アイツって掴み所がないっつーか…なんか危険な匂いがしないか?」

「そうかな」

中流の問いかけに、出流と裕明が顔を見合わせ、何故か楽しげに笑う。

「おまえたちは地道に人を見る目を養うんだね」

「まったく」

双子でもないのに同じ顔をした年長の二人に、中流と汨歌がそれぞれに不服そうな顔を見ると、兄達はやはり楽しげに笑うのだ。

「なんなのよ、アキ兄も出流も! すっごく感じ悪いんだけどっ」

「心外だな、可愛い弟妹と一緒に過ごせるのを心から楽しんでるだけなのに」

「可愛い弟妹! そういう気色悪い言い方しないでよ、そんなだからお姉ちゃんを怒らせるの判ってる!?! 本当に嫌われるわよ!」

「歌織に嫌われるって? 汨歌、その心配は無駄だな」

「無駄! 好かれてるって自信でもあるわけ!」

「その逆だよ。嫌われていると知っているから心配いらないう

ことぞ」

「~~~~~っ！ アンタってほんつと、やっぱりどっかおかしいわ！」

そんな汨歌と出流の言い合いを端で聞きながら、そう言えば兄貴はしょつちゆう歌織ちゃんを怒らせているよなあ…と、汨歌の三つ上の姉・歌織の姿を思い浮かべる。

外見はよく似た姉妹だが、長い髪と、汨歌よりも小柄な体格で、気は強いのだが優しい性格がそれを上回るせいか、まったく知らない人間が、この元気印の汨歌と歌織姉妹を並べて見れば、歌織は随分と物静かな少女に思われるだろう。

「…」

だが、今はそんなことを考えているよりも…と階段の方に目を向けていると、裕明に呼ばれた。

「気になるなら迎えに行っておいで」と、兄や裕幸と同じ顔に言われると、中流は弱い。

「悪いと思っっているんだろ？」

「うん…」

いくら汨歌に言い返すためとはいえ、裕幸を巻き込んでしまったのはよくない。

意を決し、汨歌が今だ出流と言いつているのを一瞥すると、裕明に見送られて階下に向かうのだった。

大樹家は、とにかく広い。

中流の家もそこに広く、以前、父親が兄、どちらの関係だったかは不明だが、有名人の自宅紹介とか言うのでカメラが入った際、スタッフ一同に驚嘆されたのが記憶に新しいし、長年の付き合いである尚也も、自宅に招くたびに感動しているくらいだ。

それでも、この大樹家には及ばない。

おそらく家人でさえ部屋の総数を把握していないのではないだろうか。

閑静な住宅街から少し外れた小高い丘の上。

周りを無数の木々に囲まれた大邸宅。もちろん、このような環境にしたのには大樹家特有の、それも親族全員に関連する特別な事情があつてのものだったが。

階段を下り、長い廊下を進んだ先の居間に入ると、壁一面の硝子窓と向かい合うように置かれたソファの上、顔を隠すように横になつている裕幸の姿が在った。

「…裕幸？」

「！」

呼びかけると、弾かれるように起き上がった彼の顔は、今も赤みを帯びている。

「中流さん」

「さつきは、ごめん」

真つ直ぐに目を見て、即座に謝る中流に、裕幸はわずかに間をおいたが、すぐに笑みを浮かべて首を振る。

「いえ…、動揺した自分が恥ずかしかったですから」

「でも…ごめんな」

再度、謝って。

笑みを交わす。

それはいつもの仲直り。

「ホント悪かった。泪歌相手にムキになってさ……」

「二人とも負けず嫌いですからね」

くすくすと笑う従弟の表情に、家族への親愛の情が伺える。

その素直さが、彼ら兄弟には愛しい反面、切ないものに映る。

「何か飲みますか？」

「ん、冷たいのあるか？」

「一通り揃えてはあります」

「さすが」

二人はキッチンに移動し、裕幸はグラスを。

中流は冷蔵庫を開けてこれと思う飲料を取り出す。

家屋に見合った大きな冷蔵庫には、その外観ほど物は入っていないが、飲料と、主に従姉妹達が買って持つてくる菓子類が冷やしてある。

その中、他の何より目立つ位置に置かれたケーキの箱に目が留まる。

「あつ、このケーキ、この間OPENしたっていう駅ビルのじゃないか？」

「ええ」

答えてから、裕幸はふと小首を傾げる。

「でも珍しいですね、中流さんがそういうのに詳しいの」

「たまたま、昨日の帰りに尋人が言ってたんだ。母親が買ってきたのがすごく美味しかったって」

そこまで言つて、綻ぶ口元。

「その時のあいつの顔がさ、すっごい幸せそうで……」

当時の尋人を思い出しながら喋っているうち、横から微かな笑い声が聞こえてくる。

裕幸が、口元を押さえて肩を震わせている姿に、中流は眉を寄せ。

「……なんか可笑しいこと言ったか？」

少なからず不安になりながら声を掛けると、従弟は「いえ」と優



しい顔をする。

「ただ、本当に尋人君が好きなんだなあと思って」

「えっ…」

改めて言われると、妙に照れるのは何故だろう。

先ほどの裕幸もこうだったのかと思うと、ますます申し訳なくなってくる。

「もしよければどうぞ。歌織ちゃんが買って来てくれたんですよ」

「俺の分もあるのか？」

「歌織ちゃんは、いつだって全員の分を買って来てくれるんです。賞味期限が過ぎたって一日二日は平気だし。」

いよいよ怪しくなってきた時にはユキ君とアキ君で食べてね。

それが江藤家の次女・歌織の口癖のようなもの。

そして三日もあれば全員が一度は大樹家を訪れるだろうということを確認しているのだ。

「さすが歌織ちゃんだなあ」と、半ば感心したように呟いて箱の中の菓子に手を伸ばす。

洋菓子の甘い匂いに、我知らず笑みが毀れる。

中流よりも三つ上の歌織は保育士になるべく大学に通う従姉だが、年上であるにも拘らず「歌織ちゃん」と呼ばせるのに違和感がないのは、汨歌と似ているようで似ていない、昔から変わらずに言動の可愛いらしい少女だからだ。

「あとは出流さんの分と…」

箱の中身を確認しながら、まだ食べていない家族の顔を思い浮かべていた裕幸は、ふと気付いたように手を止める。

「汨羽さんと貴宏さんの分は持って帰っているはずだし、兄さん、

中流さん、汨歌さん、勇紀、香澄ちゃん、真澄ちゃん…、やっぱり

一つ多い…？」

「おまえは？」

「歌織ちゃんと一緒に、買って来てくれたその日に食べました」

「じゃあ時河の分じゃないか？」

「……」  
あつさりと言つと、裕幸は目を睜り、そのうち、苦笑めいた顔になる。

「……どうして、皆すぐに竜騎の分も……」

その言い方が微妙で、中流はどう返したものが躊躇いつつも口を開く。

「さつきはあんな言い方したけどさ……、俺と泪歌はともかく、兄貴達は皆、あいつのこと気に入っているみたいじゃん」

「……ええ」

「それって、喜んでいいことだと思っただけど……、さ」

「……」

「おまえ、……時河のこと、好きなんだろう……？」

恐る恐る問いかけると、裕幸の表情が苦しげに歪む。

そうして告げられる言葉は。

「……すみません」

「！　なんで謝るんだよ！」

それがイヤで。

声を張り上げて、裕幸の表情は辛そうなまま。

「なんでおまえが謝るんだよ……、そのことで誰かおまえを責めたか？　誰かおまえは間違ってるって責めたのか？」

重ねられる問いかけに、裕幸は首を振る。

それでも浮かぬ表情は、いつだって彼らを苛む壁を自覚しているから。

「……でも……、辛くなるって判っていて……自分がしなければならぬことをちゃんと解っていて……、竜騎の傍にいたいと願ってしまったんです……」

「それは……」

「……そのせいで、家族にも……、……竜騎にも、辛い思いをさせてしまっています」

「……」

そう告げて俯く姿が、無意識に尋人の姿と重なる。  
先輩は僕を大切にしてくれるのに…と、キス以上の行為を怖がる  
自身を責めた尋人。

我慢させてしまっている、なんて。

そんな誤解をされている方が、よっぽど辛いのに。

「あのさ、俺とあいつが同じだとは思わないけど…さ」

「…？」

「おまえが、傍にいたいと思うのが間違いだったって思っている方が、時河には辛いと思うぞ…？」

「…」

「一緒にいたいなら、それでいいじゃん。…まだ時間はあるんだしね」

「…中流さん…」

「少なくとも俺は、尋人が傍にいればいいと思ってる。好きな奴の特別でいられるって、こんな嬉しいことないぞ？」

相手の反応を窺うように、言葉を選びながら続ける中流に、裕幸はしばらくの間をおいて、ようやく表情を和らげる。

「…ありがとうございます」

そうして見せる笑顔が綺麗で。

それは儂いからこそ、綺麗で。

自分達が。

大樹の血が抱えている真実は、それほどに重く、残酷な未来を導くものなのだと、思い知らされる。

「何だか…中流さんにそんなことを言われるとは思いませんでした」

「人間、幸せだと余裕が生まれるもんなんだよ」

「冗談のように言って、笑い合おう。」

こんな時間が続けばいい。

どうせ変えられない未来なら、せめてもう少し、時間が欲しい。

「……裕幸」

「？」

「俺さ……、いつか、尋人に話そうと思うんだ。俺達の……“血”のこと」

「……そうですね」

「おまえのことも、話していいか……？」

問う中流に、裕幸は頷く。

「ただし、条件付きで」

「条件？」

聞き返すと、裕幸は再度、頷く。

「今年のクリスマスパーティに尋人君も招待して下さい」

「いいのか？」

パツと表情の輝く中流に、裕幸は笑う。

「“血”のことを話すなら尚更、家族に紹介しなきゃ」

大樹の祖父や、叔父、伯母。

この血に連なる家族に。

兄弟に。

「それにせつかくの特別な日、まさか家族優先で尋人君を放っておこなって問題外でしょう？」

「ああ。実はどういいう口実でそれをサボろうか考えてたんだ……」

「だと思っただよ」

「えっ」

唐突に割り込んできた声は、先刻まで二階で汨歌と言い争っていた出流だ。

「もしそうなら俺も協力してやろうと思っただけだぞね」

「協力？」

「そう、いつだったか泊まったリゾートホテルを予約しておいてやろう、とかさ」

「パツカじゃないの、今からリゾートの予約なんて取れるわけないじゃない、それもクリスマスに！」

「おや、俺に不可能があるとでも？」

「アンタはその天上天下唯我独尊な物の考え方をどうにかしなさい

よ！」

出流の脇から反論してくるのは汨歌。

その後ろには裕明の姿もある。

「汨歌。出流はやると言ったら何があるうとやってのけるよ」

「そう、それも可愛い弟の初夜のためとなれば絶対さ」

「！ だっ…俺はそんな目的で一緒に過ごすわけじゃ…！」

「中流、この期に及んでまだ二の足を踏むつもりかい？」

「その点は出流に同意してもいいかと思うのよね…、中流、アンタもしかしてインポなんじゃないの？」

「っ、汨歌デメエ！」

「なによっ変態！」

「汨歌、女の子がそんな言葉を口にするものじゃないよ…」

「……………」

居間で顔を見合わせるなり口論を始める二人を、兄達も裕幸も苦笑交じりに見つめる。

…彼ら三人が、一体いつから階下に来ていたのかは知らないが。きっと今の会話は聞かれていたのだろう。

「裕幸。おまえも時河君を誘ったらどうだい？」

「そうしなさい。きつと父さん達も喜ぶ」

「そうねっ、私もそろそろ時河と決着をつけてやるわ！ アキ兄や出流が認める時河のイイ所っていうのをこの目で確かめなきゃ！」

息巻く汨歌を前に、中流はもう少して笑い出しそうになった。

何故なら彼女の頬に微かに残る、泣いた跡。

まったく、感受性の強い従姉の本心は、きつと自分と同じ。

「今年のクリスマスは楽しくなりそうじゃん」

「ん？」

中流の呟きに、出流が答える。

応えて、微笑う。

クリスマスまであと二週間もあるのに、中流は今からその日が待ち遠しくて仕方がなかった。



## 二度目の楽園 十四

十二月二十五日　クリスマス。

その日の大樹家は、朝から慌しく時間が過ぎていた。

仕事・学校のある者はそれが終わってから大樹家に集合という予定になっていたが、前日に終業式を終えて冬休みに入っていた子供達は早速それぞれの仕事に取り掛かっていた。

夜のための御馳走を用意する主婦四人。

家の周りを囲う“もみの木”に電飾を施すのは江藤家長男・貴宏と、医大学生の裕明、今日明日は完全に休みを取っている出流。

屋内、パーティ会場となるプレイルームでクリスマスツリーの装飾を担当するのは柳瀬家の幼い三兄妹と、江藤歌織。

今日が終業式の松浦学園と聖エイナ女子高等学校に通う裕幸、泪歌の二人は昼過ぎに帰宅予定。

そして裕幸は、きつと時河竜騎と一緒に帰宅するのだろうと予想しながら、梁瀬の三兄妹と同じ榊学園に通い、昨日から冬休みに入っている六条中流は買出しの名目で恋人を迎えに行く途中だった。

尋人をクリスマスに誘うと決めた翌日、早速、尋人に話すと、彼はひどく困惑した様子だった。

それを、自分とクリスマスと一緒に過ごしたくないのだろうか。

それともやはり二人きりで過ごす計画を立て直すべきかと不安になった中流だったが、尋人の動揺はそれに対してではなく。

「家族に紹介したい」という、その言葉の持つ意味に対してのものだった。

中流は深く考えずに、付き合っている相手として家族に紹介するつもりだったのだが、尋人はそれに首を振った。

そんなことをしたら絶対に大変なことになる。

せつかくの楽しいパーティの夜を、自分のせいで台無しにしたくないと尋人は訴えたのだ。

彼があまりに必死だったから、それを聞き入れた中流だが、実を言うと残念な気持ちの方が強い。

(俺、やっぱりその辺の感覚が麻痺してんだろっちなあ…)

あの兄や従兄弟がいるから。

泪歌だってあんなふうに言いながら、結局は尋人と会っのを楽しみにしているようだったし、きっと他の家族も喜んで迎えてくれるだろう。

もちろんそう思う根底には、それなりの理由があるものの、尋人に“血”の秘密を明かせずにいる現状では彼を説得出来ない。

「いつ話すかなあ…」

話そうとは決めたけれど。

なかなか言い出すタイミングが見つけれずにいる。

「…いきなり、俺が実は宇宙人だとか言ったら冗談だと思われるよな」

宇宙人というのも、厳密に言えば違うのだが、純粋な地球人ではないのだから、それも間違いではない。

最も、自分には裕幸のような役目も、兄の出流や裕明のように特殊な能力があるわけでもない。

祖母の血をわずかしが継がなかった中流には、異郷の血を引いているという事実しか存在しない。

それでも、逃れられない血の繋がり。

隠すわけにはいかないこと。

「…ま、とりあえず今日は友達として紹介しておいて、か」

尋人に家族を知ってもらって。

きっと近い内に全てを話して、…受け入れてもらえたらと思う。

「おまえのこと、本当に好きだからさ…」

例えば未来に何が起こつても、一緒にいてくれることを願う。

倉橋尋人という少年が隣にいてくれることを、中流は心から願うのだ。



数分後、待ち合わせの場所に着いた中流は、先に来て待っていた尋人の姿を視認し。

一つ深呼吸をすると、ありったけの想いを込めて呼びかけた。

楽しい時間が過ぎるのはあつという間で。

いつしか幼い子供達の顔には眠気が漂うようになっていた。

「よっぽど楽しかったのね、随分はしゃいでいたもの」と、楽しげに呟くのは双子の母親、凧紗。

「じゃあまずは双子から部屋に運ぼうか」と幼い少女達を抱き上げて二階に上がったのは江藤家の長男・貴宏であり、それを手伝って部屋について行ったのは家人でもある大樹家の母、日向だった。

ゲームやプレゼント交換なども終えて、大人は大人、子供は子供で飲み物片手に談笑するようになってから、そろそろ一時間。

仕事に戻るといって、一滴の酒も口にすることなく早々に退場した汨羽（職業：刑事）や、明日は友人達と出掛けるために朝が早いという歌織を除いた従兄弟達全員が、中流と尋人の周りに集まっていた。

「でも驚いたよ、中流兄ちゃんが倉橋先輩と仲良かったなんて」と言うのは、同じ榊学園に通う中等部二年の勇紀だ。

「僕も驚きました…」

「俺は尋人が先輩と呼ばれた事に驚いた」

よく考えれば同じ榊学園の中等部。

高等部と違って校舎も同じなら、中流以上に勇紀の方が尋人のことを知っていて当たり前だったのに、考えもしなかったのは、中流の目には尋人一人の姿しか映っていなかったせいだろう。

「一時期、中流兄ちゃんが毎日中等部の生徒玄関に立っているって噂になってたけど、倉橋先輩のこと待ってたんだ」

「…そんな噂になってたのか？」

「っていつか、毎日玄関前に張り込んでるなんてストーカーね」

「汨歌、おまえさつきから嫌味しか言えないのか！」

「本当のコトを言っているだけでしょ！」

「そう言うんじゃないよ、中流。汨歌も複雑な心境なのさ、年齢の近いおまえと裕幸が、この日に特別な相手連れてきてしまった」

「！」

「出流、そうやって汨歌を逆撫でするようなことを言わなくても…」

「そうそう、汨歌だって好き好んで一人身でいるわけじゃないものな」

「余計なお世話よ！」

出流、裕明、そして貴宏という年長者に順番に言われて汨歌は臆を吊り上げる。

それにフオローする意図があつてか、勇紀が笑いながら口を開いた。

「でも汨歌姉ちゃんも大変だよ。こんなカツコイイ兄ちゃん達ばかりじゃ理想ばかり高くなりそうで」

「え？」

「香澄と真澄がいつも言うんだ。貴宏兄ちゃんみたいに背が高く、出流兄ちゃんみたいに才能あつて、裕明兄ちゃんみたいに頭良くて、裕幸兄ちゃんみたいに優しく、中流兄ちゃんみたいに真っ直ぐな人じゃなきゃダメだって」

「」

「それにね、最近は竜騎兄ちゃんみたいに強くなきゃダメって言うんだよ。そんな人いるわけないのにな」

あははと笑う勇紀に、言われた兄達は苦笑したり、楽しげに喉を鳴らしたり。

「それは光栄だな」

「でも、将来そんな義弟が出来たら俺はイヤだなあ…」

「同感」

「で、なんでそれに時河まで加わるわけ？」

「何を今更」

「もう兄弟も同然だろ」

「だったら勇紀、双子に言っておくんだね。これからはその理想の男性像に“尋人兄ちゃんみみたいな可愛い人”と加えて置くようになってね」

「うん！」

「兄貴、尋人は可愛いだけじゃないぞ。“芯の強い素直な人”に訂正しろ」

「くすくす、だそうだよ、勇紀」

「くくく、そんな臆面もなく惚気られたらこっちが参るな」

出流と貴宏がからかい、中流は憮然とし。

旧歌が呆れたように肩をすくめる。

と、不意に腕に加わる力に、中流は隣の尋人を見下ろした。

「？ どうした？」と、自然に問いかけるも、尋人は真っ赤にした顔を俯かせたまま、中流の腕を掴む手を震わせていた。

「尋人？」

「？ どうかしたかい？」

「あ……あの……」

「うん？」

「尋人君？」

中流も、従兄弟達の視線も彼に集中して、尚更、顔を上げられなくなった尋人は、しかし死を覚悟したような面持ちで途切れ途切れに訴える。

「あの……僕、は……」

「？」

「……僕は……ただの、後輩……で……」

特別な相手なんかじゃありません、というようにことを必死に言おうとしている尋人を、兄弟達はもちろん、中流も言葉もなく見つ

め、そのうち、気付いたように手を打った。

「あ…そっか。今日は友達として紹介するって言ってたんだっけ…」

「！先輩……っ？」

顔を真っ赤にして、責めるような目で見上げる尋人に、中流は申し訳ないと思いつつも苦笑い。

「悪い、忘れてた」

「忘れてたって…っ」

二人の遣り取りに、周囲の兄弟達はしばし沈黙。

それを最初に破るのは貴宏だった。

「…もしかして尋人君、中流との関係が知られたら大事になると心配していたのか？」

「ああ、そうなんだけど…」

貴宏に答えた中流の物言いは歯切れが悪いが、彼の意味は明確だ。

「俺は心配してないし、自慢したい方が先に立って全然気にしてなかった…」

自分の言動や態度に。

そう言う中流に、汨歌は大仰に溜息をつく。

「アンタってそういう奴よね…。言っとくけど家での常識を外でも通用するとか思っていたらそのうち酷い目に遭うわよ」

「まあまあ。中流はそういうところが素直だから可愛いんだよ。ましてや相手が俺達じゃ隠し事なんか出来るはずないね」

「可愛いとか言うなっ」

食って掛かる中流に、出流は笑う。

「そういうことだからね、尋人君」と優しく話しかけるのは大樹家長男の裕明。

「中流の家族は、みんながこんな感じだから心配しなくて大丈夫なんだよ」

「…で、でも……」

「でも何も無いの！」

強く言い切って尋人の肩に手を置くのは汨歌。

「こんなバカな弟だけど、これからも中流をよろしくね！」  
「えっ……」

「旧歌、おまえこういう時だけ年上になるなよ」

「あら、私はいつだってアンタより上よ。まったく世話の焼ける弟で疲れるったら」

「よく言うっ……」

「何よっ」

「何だよ！」

「二人とも……」

そうしていつものごとく言い争いを始めそうな二人の間に、裕幸が割って入る。

それを兄達は笑って見守る。

そんな彼らの様子に呆然と仕掛けた尋人は、ふと自分に向けられる視線に気付いて振り返った。

そこには裕幸の隣に、今まで一言も喋らずに座っている時河竜騎がいた。

「……？」

どうして見られているのだろうと不安になった頃、彼は呟く。

「…変な連中だろ」

「」

実感のこもった呟きが、彼の今までの経験から語られた言葉だと気付いて、尋人は微笑った。

本当に、変な人達。

けれど彼らの中にいる中流が、ただ一人の特別な人。

中流の家族に受け入れられた。

それをことうして実感して、心を満たす喜び。

(…先輩、大好きです………)

従姉と言い争い、従弟に落ち着くよう言われている中流の姿を見つめて、心の中に呟く。

それは尋人の。  
彼なりの、精一杯の覚悟を決めた告白だった。

## 二度目の楽園 十五

夜十一時を回って、中流と尋人は大樹家を後にし、尋人の自宅へと向かって歩いていった。

もう遅いのだし大樹家に泊まっていけばいいと皆が言ったのだが、尋人はどうしても帰らなければいけないからと断り、タクシーを呼ぶと裕幸が言えば、中流が「自分が送っていく」と申し出た。

外は雪。

厚い雪雲は、雪の輝きに照らされて幻想的な色を映し、柔らかな氷の結晶は、むしろ温かくさえ感じられた。

そんな夜道を並んで歩きながら、

「やっぱ、少しは二人で過ごしたいよな」と中流は微笑し、

「ごめんな。本当なら最初から二人で過ごすこと考えるべきなのにさ……」と申し訳なさそうに続けた。

北欧出身の祖母の影響で、クリスマスは家族が揃って過ごす日というのが習慣になっている大樹家では、祖母が亡くなった今も生前のスタイルが続けられている。

それは亡くなった祖母を悼む祖父の気持ち数が数年を経た今でも色褪せることがないためであり、家族全員がそれを受け入れているため。

だからこそ、既に社会人になった兄弟もこの日だけは一分一秒でも時間を作り、あの家に集うのだ。

恋人が出来たなら、そこから離れて予定を立てるべきだとは思っていたのに、どうしてもあの場所にいたかった。

それが当たり前前のようになってしまうことを詫びる中流に、だが尋人は首を振った。

「……よく、母が言うんです」

口を開いた尋人に、中流は耳を傾ける。

「好きになるなら家族を大切に出来る人を好きになりなさい、って」

「家族を大切に？」

「自分の家族を大切に想える人は、これから自分が作る家族のことも大事に想えるから。ちゃんと人を好きになれる人だから、って……」  
「へえ」

笑んで呟きながら、中流は尋人の手を取った。

隣り合う手と手を握り、包み込んで。

「なら、俺は合格？」

「……」

そつと頷き、尋人は足を止めた。

「尋人？」

「……」

俯き、……顔を上げて。

真つ直ぐに中流を見つめる。

「……僕……先輩が好きです」

「……」

「僕……」

唐突な告白に、わずかに目を睨りながらも、嬉しさを隠しきれない中流は距離を縮め、顔を寄せる。

「……ん……」

触れるだけの優しいキスに、尋人の頬は赤く染まる。

「俺も、尋人が好きだよ」

もう一度、唇を重ねて。

溶け合う吐息は白く色づく。

北の国では当然の雪化粧も、ヴェールのように降り続く白銀の結晶も、今だけは神秘の夜を彩った。

「……あの……」

「ん？」

「……」

尋人は言葉を詰まらせ、繋いでいるのとは逆の手で中流の上着の裾を握り、その胸に頬を寄せる。



「…どうした？」

意図のつかめない相手の動作に思わずドキッとしながら、中流は  
平静を装って声を掛けた。

「…尋人…？」

「…先輩…」

自分の胸元から、震えた声。

「先輩…僕、…嘘を、言ったんです」

「嘘…？」

「…どうしても帰らなきゃいけないなんて…嘘なんです…」

「え…？」

「ああ言ったら、先輩が「送る」って言ってくれると思って…」

「尋人」

「先輩のご両親も、お兄さんも、…裕幸さんの家に泊まるって聞いて、…先輩も、泊まるって聞いて…」

彼の自宅には、誰もいないのだと。

帰ってこないのだと、知って。

「…だから…、だから僕…」

「待て。…ちよつと待てよ、尋人」

「…先輩」

「おまえ…」

尋人、君が告げる言葉の意味は。

「…どうして、そんなことを言うんだ…？」

「…」

「俺、言ったよな？ おまえに我慢させるような真似したくないっ  
て」

「我慢なんて…っ」

「おまえが辛いのはイヤなんだ」

「辛くなんかありません」

「けど、おまえは」

「先輩が好きなんです！」

中流を遮り、叫ぶように告げられる想い。

「…先輩が…好きだから…。怖くても、ちゃんと耐えられます…」  
「だから、耐えさせたり…おまえが苦しんだりするのは、俺は…」  
「でも一度は耐えなきゃ…僕はきつと…ずっと、前に進めません…」

「…」  
「いま乗り越えなかったら…僕はずっと…先輩に守られてばかりになってしまふ気がするんです…」

「…だからって、どうして今…」

「…先輩の家族が、…お兄さんや、お姉さんが…僕のことを、受け入れてくれました…」

今まで誰にも言えなかった想い。

中流を好きだという気持ち。

同性しか好きになれない異常な自分を、どんな奇跡が起きたのか、中流は受け入れ、彼の家族は認めてくれた。

特別な相手だと、言ってくれた。

「すごく…本当に…すごく嬉しくて…」

決してありえないと思っていた夢が、こんなにも幸福な現実として存在している。

幸せすぎて。

…怖いくらいに幸せで、いつ消えてなくなってしまうもおおかしくないような、幸福。

それだけが。

「…だから…耐えられるのは…今だと思っんです…、今しか、ないって…」

「尋人…」

「先輩が好きなんです…」

それだけが、今の全て。

「…僕のことを、本当に好きだと想ってくれているなら…、大事だと言ってくれるなら…抱いて下さい…」

今日という夜に。

二人きりの、雪の夜。

「…ずるい言い方だな…」

辛そうに顔を歪めて、中流は少年の細い体を抱き締める。

「それで俺が断つたら…、どうするんだ…?」

「…もう…二度と先輩に会いません…っ」

震えた声。

消えてしまいそうな、弱弱しさ。

「バツカ…」

ぎゅっ…と震える少年を抱く腕に力を込めて、中流は囁く。

「…家まで、タクシー使うか…?」

「…歩きたい、です…」

聞いている方が辛くなる、か細い声。

「…誰にも、会いたくない…」

告げられる言葉から尋人の気持ちを察して、中流の心はわずかな痛みを覚えた…。

しんと静まり返った六条家。

あの日、出逢った朝に寝かされていたベッドに、今は二人。

雲に覆われた夜空からは止めどなく雪が降り続き、積もる雪、舞

う結晶が外界の音を遮断した。

静かな。

静かな部屋。

重なる影は密やかに。

揺れる熱は、……儂すぎて。

「…尋人、目を開ける」

「…やつ…」

「ちゃんと俺を見てろ…おまえに触れてるのが誰なのか…ちゃんと確かめるんだ…」

「っ…あつ…」

「俺は誰だ…？」

強く瞑られた瞳。

血が滲むほど噛み締められた唇。

少年の熱い頬を撫で、中流はゆっくりと語りかける。

「俺はおまえを傷つけないし、嫌がることもしない。…おまえを泣かせない」

「…っ…」

「尋人、俺は誰だ？」

語りかける。

一言、一言。

目を開けて。

見て。

その名を、呼んで。

「…ン…ぱい…」

「尋人」

「…先輩…っ……………」

そうして少年の瞳から零れ落ちる涙に、中流の胸の痛みは増す。

こんな。

……こんな尋人の姿を、誰が望む。

唇に沁えるのも精一杯の。

微かな刺激に瞳を閉ざし、闇に逃げ。

きつく結ばれた口元はわずかな声も漏らさない。

「尋人…」

ずっと謂れのない暴力を受け続け、  
耐えて。

耐えることしか出来なかった尋人にとって、  
他人の手は恐怖の象徴。  
与えられる刺激は、苦痛のみ。

それに長く耐え続けた彼には。

好きだよ、なんて。

そんな睦言も届かない ……。

「尋人…」

泣きたいのは、中流も。

こんな姿を見たくなくて。

こんな顔をさせたくなくて。

ずっと笑顔で居て欲しいと願ったのに。

「…っ」

今、ここで彼を抱いたら。

自分も彼に暴力を振るう連中と同じ。

彼を傷つける奴らと何も変わらない。

「尋人…もう…やめよう…」

「っ…先輩…！」

「いい…、こんなこと、…おまえにそんな顔させてまですることじ  
やない」

「あっ…でも…っ」

「いいんだ！」

「っ…」

遮られ、言い放たれて。

身体を震わせる少年の瞳から、今一度、毀れ落ちる涙。

「…」

それを指で拭ってやりながら、中流はそつと微笑う。

どこか歪んだ、…辛そうな笑み。

「…おまえにそんな顔されたら…俺が辛いんだ…」

「先輩…」

「抱いてる間中そんな顔されていたら…俺…、おまえを抱いたこと後悔する…」

そしてきつと、二度と触れられない。

「…俺さ、…おまえの傍にいたいんだ…」

「…え…？」

「おまえの特別でいたいし…、恋人でいたいし…、…俺と一緒にいられて幸せだ、って…そう思ってもらえる人間でいたいと思う」

それは、まだ話せない自身の血の秘密も含めて。

いつか訪れる未来の先も。

「…おまえと一緒にいたいんだよ…」

肌蹴た上着を直してやりながら、中流は真つ直ぐな言葉を伝える。  
あの日、傷の手当てのために見た体は痛々しい傷痕が所狭しと広がっており、どんな酷い目に遭ってきたかが容易に知れた。

今、熟れるように触れた体にはその名残。

青痣はほとんど消え、火傷の跡はうつすらと判別がつく程度にまで癒えている。

血を流すことはなく。

痛みに顔を顰めることも。

助けてと、眠りの中で叫ぶこともないだろう。

だが、見えない傷は残る。

心に刻まれた傷は今も尚、尋人を苦しめ、苛んでいる。

だからこそ尋人は、中流の行為にさえ耐えようとするんだ。

そうでなければ前に進めない。

中流にされることなら辛くないと告げて、今までと同様に耐える彼を抱くという行為は、その傷を決ることに他ならない。

「…おまえが、好きだよ」

「っ…僕だって…僕も先輩が好きです…」

「一緒にいたいよ」

「僕も…いたいです…っ」

「だったら…」

自分を見つめる尋人の、潤んだ瞳に微笑して、中流は告げる。

「だったら…何も今、急がなくなつて…これから時間はいっぱいあるだろ…?」

「っ…っう…」

「この二ヶ月でキスに慣れて来たようにさ、…ゆっくり進んでいくんじゃダメか?」

「先輩…っ」

「それともH抜きじゃ恋人失格か?」

からかうように言つと、尋人は何度も首を振る。

そんなことない。

そんなこと、ないです。

「先輩と一緒にいたいです…っ!」

「尋人…」

本当は怖くて。

怖かったのは、一步を踏み出せずにいることで中流に嫌われてしまつかもしれない不安。

愛想を尽かされてしまふんじゃないかという恐れ。

こんな自分でも身体は“男”だから。

中流に対して何も出来ないことが怖かった。

「…泣くな」

「だって…だって先輩ばかり優しくして…僕は何も…、先輩に何もしてあげられないのに…それでも先輩は…優しくして…っ」

「ばあか…」

泣きじゃくる少年を腕に抱き、その頬に、額に口付け、中流は囁く。

「俺を喜ばせたかったら微笑ってくれ」

「先輩……」

「俺の傍で、幸せだって、笑っていてくれ」  
願うのはただ一つ。

たった一つ。

尋人、君の笑顔だけだから ……。



## 二度目の楽園 十六

朝を迎えて、あの日のように東向きの窓から射し込む日光によって目を覚ました尋人は、やはり寝起きの頭で見慣れぬ部屋に違和感を覚え、ハッと気付くと同時に身体を起こした。

「先輩…？」

隣に姿のない彼を呼ぶと、

「ああ、気付いたか？」

すぐに優しい返事がある。

部屋を見渡し、数台の写真機が置かれている棚に腰掛けるようにしていた彼を見つけた。

「おはよう」

「え…っ、あ…お、おはようございます……」

語尾にいくにつれて声が小さくなるのに反して顔の熱は上がっていく。

胸元の開いたシャツと着崩れしたジーンズという彼の格好は、いかにもその辺にあったものを羽織っただけという感じで、妙に照れくさかった。

「おいおい」

そんな尋人の内心を察したのか、小さな写真機を持っていた中流が苦笑しながら近付いてくる。

「何もしてないんだからさ、そんな意識するなよ」

「っ、わ…判ってますけど…っ」

その返答すら動揺して声の上ずる彼を見つめて、中流は目を細めた。

「…でもまあ、おはようのキスくらいはな」

「え…っ！」

聞き返す間もなく重ねられた唇は、少しだけカサカサしていた。掠めるだけのような軽い口付けは、しかし尋人を動揺させるには

充分で。

「！先輩…っ」

潤んだ瞳で上目遣いに睨みつけると、中流は楽しげに微笑う。

「昨夜、一人で先に寝たお返しだ」

「そんな…」

「ん？」

「……っ、先輩…怒ってますか…？」

思い掛けない問いかけに目を丸くした中流だったが、尋人は真面目。

「俺がどうして怒るんだ？」

「だって…」

昨夜、自分から抱いて下さいと言っておきながら中流の優しさに甘えてしまった。

何も出来ないと思っていた尋人を、「傍で笑っていてくれればいい」なんて言葉で救い、彼の腕の中で泣き出した尋人は、極度の緊張のせいもあったのだろう、そのまま泣き疲れて眠ってしまったのだ。

その後、苦笑しつつも静かな寝息を立てる尋人に口付け、彼を抱いたまま中流も眠った。

朝になって暖房を上げに起き上がった中流は、さすがに再度ベッドに戻るのには躊躇われて写真機の手入れなどしながら尋人が目覚めるのを待っていたのだが、隣にいなかったことが尋人を不安にさせ、自分が怒っているように思わせたのかと考える中流に、少年は意外なことを言う。

「…何だか…今の先輩…少し、意地悪な気がして…」

言いながらもどんどん赤くなっていく尋人の顔色。

それをじつと見ていた中流は、尋人の言葉を反芻して気付く。

「ああ、…嬉しくてテンション上がってるせいかな」

「…っ？」

怪訝な顔をする尋人に失笑し。

「起きたら隣におまえがいるんだ。なんか嬉しいだろ、一番最初に好きな奴の顔が見れるってさ」

「カアアアツ」と、今までも真つ赤だった顔が首の下まで朱に染まり、呼吸すら止まりそうな熱。

「せつ…せ、…っ」

「尋人？」

「あの…、っ…」

「…もう一度言って欲しい？」

「！ 言わないで下さい！」

「即座に声を張り上げる尋人が、あまりに可愛らしくて。

中流は声を立てて笑い、微かに寝癖のついた髪を撫でる。

「俺の本心なのになあ」

「…や、やつぱり、今日の先輩…、…意地悪です…っ」

「んー。なんか好きな子をイジめるガキの気持ちが解る気はする」

「っ…」

くすくすと笑い、髪に添えていた手を頬に寄せる。

指先でくすぐるように。

唇を開かせて。

「…ん…っ」

ほんの少しだけ深いキス。

「…。もう少し布団の中に入ってるよ。暖房入れてきたけど、暖まるまではもうしばらく掛かるから」

「…先輩…」

「ん？」

「…先輩は、寒くないんですか…？」

「気遣う言葉に、中流はニツと不敵な笑み。

「もつと意地悪なこととしていいなら隣に入らせてもらっけどな？」

「…っ」

了承も、拒絶も出来ないと言っていてそんなことを言うてくる中

流を潤んだ瞳で睨んで、尋人は布団の中に潜り込んだ。

それを微笑で見守り、中流はベッドの隣に配置している机に腰掛け、持っていた写真機の手入れを再開した。

本体の汚れを取り、ネジやシャッターの緩みを確認し、レンズを拭く。

中流が手にしているのは、彼の両手に程よく納まった一眼レフ、Nikon FM10。

初めてのバイト代で購入した、一番最初の写真機なのだと、布団の中の尋人に語りかける。

壁に貼ってある何十枚もの写真。

そのほとんどがこれで撮ったものだった。

「……僕が、初めて先輩のことを見た日も、そのカメラを持ってました……」

「え？」

思い掛けない言葉に聞き返すと、布団の中から顔だけ出した尋人が気恥ずかしそうに微笑う。

「僕が一年で、先輩が三年生の、……中等部の陸上競技大会の時です」

「……それって、もしかして尚也がリレーのアンカーだったやつか？」

毎年五月に行われる中等部の陸上競技大会は、各学年全生徒が三種目以上・五種目以内の競技に参加し、一年から三年までの同数字学級が連合を組み勝敗を決するという、いわゆる運動会や体育祭のようなもののだが、種目に陸上競技以外がないため、そのような名称がついている。

二年前、中流達が中等部の最上級生だった年、中流は五種目に参加していたが、自分の出番以外はほとんど撮影部隊としていろんな競技を見て回っていた。

あの頃には既に写真家を志し、バイトに明け暮れて当時の恋人とも別れる寸前。だがこの写真機が手に入ったことで充実した毎日を送っていた。

親友の本居尚也が大会最大の目玉、全学年合同四百メートル・リ

レーの最終走者を務めることになり、

「俺の雄姿をしつかりと撮ってくれよ！」と頼まれた。

大会最大の目玉であり最終競技ということもあって、ほとんどの生徒がりレー・グラウンドに集まっていた。

「あんな大勢の中から俺を見つけたのか？」

「先輩、トラックの…校舎側ですつとカメラを構えていましたよね……？ ……他の撮影部が総立ちで本居先輩の三人抜きに騒いでいたのに、先輩だけ真剣な顔で…ずっと撮り続けていたんです…それがすぐく…、その……」

格好良くて…と消え入りそうな声で続けて尋人の頭が布団の中に沈んでいく。

中流は失笑し、布団の上から少年の頭をポンと叩いた。

「てことはさ、もしかして一目惚れだったんだ？」

聞く中流に、答える声はなくて。

「……さつきさあ。おまえの寝顔を撮ろうかなと思って……」

「！撮ったんですか!？」

飛び起きた尋人の目の前で、シャッター音を一つ。

微かな光りの刺激に尋人は思わず言葉を途切らせる。

「…なんてな」

「先輩!」

やっぱり今日の先輩は意地悪だと、また布団の中に隠れようとす  
る尋人だったが、布団を中流に握られて引き寄せられない。

そればかりか。

「顔を隠すなつて。せつかく一緒にいるのに顔が見れないなんて寂  
しいだろ」

「……っ」

「それにさ、俺、一枚もおまえの写真持ってないんだぞ？俺に撮  
られたくないなら、おまえが「これなら」と思つのをくれよ」

俺のならそこに貼つてあるのを好きに持っていつていいからさ、  
なんて言いながら、自分の部屋に自分が写っている写真が多く貼つ

ているはずもなく。

中流単独に至っては一枚もなかった。

だが尋人はそれを見るよりも、わずかに表情を曇らせて俯く。

「写真…なんて…しばらく撮ってません…」

「？ 今年の五月に修学旅行があったる。その時のは？」

「……」

「尋人…？」

「…修学旅行には…行ってません…」

「…」

「……どうしても、行けなくて…」

クラスには気軽に話せる相手がなく、隣にはいつだって自分を狙う目があった。

一応、見学グループには名前が記載され、旅館の部屋割りにも名前はあつたけれど、一緒の同級生がどう思っているのかは、口で言われなくとも目が語っていた。

結局、尋人は出発のその日に風邪を引いたと理由をつけて学校に残り、欠席者用の課題を提出したのだ。

「…だから、写真もないんです」

静かに語る尋人は気落ちした様子だったが、聞かされた中流は口元を押さえ、そつと呟く。

「…あのさ…、今ここで、俺が「良かった」とか言ったら…怒るか…？」

「え…？」

「だって、そしたら誰もおまえの寝顔だとか、…風呂、とか一緒にてないってことだろ？」

「えっ…」

「俺が最初ってことだろ？」

「あ…えつと…っ」

相手の言う事に動揺しながら、しかしそうして中流が浮かべている表情を見返すと、次第に自分の動揺や羞恥など、どうでもいいこ

とのように思えてきた。

「…っ、…なんか…今日の先輩は嫌いです……っ」

「ん？俺はすっごい好きなんだけど」

「だって…！」

「うん？」

にやにやと。

締まりのない中流の表情に、尋人は泣きそうになる。

……泣きたくなるくらい、幸せだった。

「旅行はさ、俺と一緒にしよう」

そう告げる中流の声音は、楽しそうで。

「修学旅行気分を味わいたかったら兄貴や裕幸や…そうだな。尚也とか誘ってもいいけどさ。まずは俺と二人でどっか出掛けよう」

そう遠くないうちに。

この冬休み中じゃ性急過ぎるけれど、次の夏休みでも、次の冬休みでも。

一緒にいられる間中、何回でも、二人きりで。

どこまで、なんて決め付けずに。

計画だっぺいらないから。

「そのうち、俺の写真が認められたら世界旅行だな。パスポート用意しておけよ」

「…でもパスポートの有効期限で五年と十年ですよね…、間に合いますか……？」

「お？言うじゃないか」

「だって使わなかったら勿体ないです」

くすくすと笑う尋人にフラッシュの光りが被る。

「…おまえがさ、俺の傍でそうやって笑ってくれていたら、何でも

叶う気がする」

「え…?」

「尋人の微笑った顔を見てるとき、すごい幸せな気分になるんだ。俺には不可能なんかないって、…そんな気になる」

「先輩…」

「おまえのためなら何だって、…ってやつかな」

くすくすと笑いながら「冗談のように言うけれど。」

それが中流の本心。

「好きだよ」

赤くなる。

恋人の顔。

「尋人、好きだよ」

「せ、先輩…」

動揺しつつも伝わってくる。

レンズの向こうの、尋人の気持ち。

父親の仕事を見て、感動した自分が志した道。

いつの日か、人間の、目に見えない心を撮れる写真家になりたいと。

想いを感じ取りたいと。

「尋人」

優しく呼びかければ。

和らぐ少年の口元。

「…僕も、先輩が大好きです…」

そうして写る。

記憶する。

愛しい少年の、最後の微笑み。





二度目の楽園 十七

「っ…はあっ…うっ…」

夜闇の中、尋人は蒼白の表情で足を動かす。

背後から複数の足音。

声がある。

追いつかれる。

「っ、逃げなきゃ…」

走って、逃げなきゃ。

…よお、倉橋。

…久々じゃん、随分元気そうだけどさ…

同じ学校だ。

同じ校区だ。

どこで遭遇してもおかしくなかなかったけれど、まさか知られているなんて思わなかった。

…驚いたぜえ、おまえってホモだったんだな…

…あのセンパイとそういう仲だった？

これ何だか判るかと、見せられたのは複数の写真だった。

あの日、クリスマスの翌日に家まで送ってもらった朝の。

別れる時に中流がキスしてくれたあの瞬間の、写真。

またバイトでしばらく忙しいけどさ、正月には一緒に初詣行くか、  
…そう言って誘ってくれた。

「先輩…っ…」

しばらく会えないけど電話はするからって、キスしてくれた、あの時の。

…この写真さ、ばら撒かれないか？

…おまえと六条センパイはホモだって学校中に知られてもいいのか？

…いい加減さ、俺達に逆らうなよ…

…おまえの主人は誰だ？

…おまえは俺らのイヌだろ…？

「…っ…………先輩…………」

逃げなきゃ。

逃げなきゃと思っても。

もう、身体はポロポロで。

どこかは折れていてもおかしくないような。  
血も、足りなくなりそうで。

…おまえホモならさ、コレ、必要ないんじゃねーの？

…それともアレか、センパイにこれ弄られて女みたいにヨガ  
ってんだ？

…気色悪いヤツ…、ケツに突っ込まれて喘いでか？

嘲りと、罵倒と。

それだけなら耐えられた。

コレ、必要ないだろうと蹴り飛ばされても。

痛みだけなら耐えられたんだ。

…体育館の裏でさ、六条に邪魔されて高等部のセンコーまで  
来た時にさ…

…滝岡だけ残ってたんだぜ、あの近くに…

尋人を追い詰める連中のリーダー格、それが滝岡。  
彼があの場合に残っていて、木田教諭がいなくなった後の二人の  
遣り取りを、一部始終見ていた。

…それでクリスマスならどうだろうって張ってりゃマジでこ  
んな写真撮れるしさ…

…変態のくせにバカじゃねーの？

全部が、彼らの思惑通りで。

今度こそ尋人が逆らえないようにと、彼らが用意したのは。

…マジ気味悪いンだけどさ…ホモのAVってケッコー金にな  
るんだってよ…

…その話したらノツてくれた奴らがいてさ…

…今、ここに向かってんだ…

滝岡もエグイこと考えるよな…、と彼らは笑って。

それでも尋人を奴隷扱いできることに満足していた。

逆らわせない。

彼らにとって、尋人の身体など鬱憤を晴らすための道具だ。

それで脅迫材料まで手に入れれば、金だって搾り取れる。

それは尋人ばかりではなく、むしろ六条中流からのもの。

彼の素性を知れば、金など幾らでも出てくると彼らは思いついた。  
たとえば汚れた尋人が中流に嫌われ捨てられたって、尋人の不幸  
は彼らを喜ばせ、問題の写真は中流の世間体のために金に化けるだ  
ろう。

そう思いついた彼らには、もはや良心など欠片も残ってはいなか  
った。

「先輩……っ！」

いつまでも奴らが来ない、そう言っただけで苛立ち始めた連中の隙をついて尋人は逃げ出した。

写真の件だとか。

身体の痛みだとか。

気に掛けることは幾らでもあつたけれど、暴力ならまだしも、この身体を肉欲によつて好きにされることだけは耐えられなかった。

「……先輩が……先輩が、守ってくれた……」

尋人が辛いのはイヤだつて。

ゆつくり慣れていけばいいつて、中流が守ってくれた体。

心の傷。

俺が最初なんだ、つて嬉しそうに言つて。

隣で微笑つてくれていれば幸せだつて、……そう言つて、笑つてくれた。

なのに、ここで別の男に好きにさせてしまったら。

「……先輩……っ！」

瞳から毀れる大粒の涙に押されるように、尋人は身体を動かす。

早く、逃げて。

ここから、離れて。

誰の手も届かないところまで、今すぐに。

「……そんなにアイツがいいのか」

「……！」

ハツと気付いた時には、もう遅かった。

絡みつく複数の腕。

助けを呼ぶ声も、遮られた。

「随分張り切っているな」

写真家の父親に話し掛けられて、中流は陽気に答える。

「早く一人前になってさ、一緒に世界を飛び回りたい奴がいるんだ」

「…それは、この間の尋人君かい？」

「ん」

臆面もなく返す息子に、六条氏は複雑な笑みを覗かせた。

「まったく…、おまえは人を見る目がありすぎて困るよ」

「は？」

「反対したくとも出来ないだろう？」

同意を求めるように言われて、中流は失笑した。

「ごめんな、孫は兄貴に期待してくれよ」

「出流にか…、願わくば孫の母親は全員同じであって欲しいな」

「はははっ」

思わず笑ってしまうと、六条氏も笑う。

冗談では済まなそうだと思いつつも、目の前の息子の幸せそうな姿に、表情は勝手に綻んだ。

外には雪が降り出し。

多くの足跡で踏み固められた地面を柔らかくに覆っていく。

それは、赤い鮮血さえ隠すように。

「マジむかつくぜ、あのガキ…」

「…どうかしたのか？」

「どうしたもクソもあるかよ、あのガキ、一度も声上げねえんだ」

「…は…？」

「俺達が二人がかりでヤツてやってんのにさ、たったの一度もだぜ？ 死人抱いてるみたいで気味悪いつたらありやしねえ」

「ケケケツ、それっておまえらが下手なだけなんじゃねーの？」

「ざけんな、俺達に掘られて啼かねえヤツなんて今までいなかったんだ」

「とにかくあのガキじゃ売り物になンねーよ。強姦、輪姦の出しがいのは嫌がつてるのにヨガってンのがウリなんだ。その気になる奴がやられてなきやシラけるだけだ」

「まあ一応言われたモンは撮っておいたけどな」

そう言つて男が滝岡に渡したのは一本のフィルム。

「こつちのビデオもいるか？ どうせ商品にやらねーし」

「ああ…」

答えて、滝岡は手の中のフィルムを転がす。

「…で、アイツは」

「さあな。死んでンじゃねーの？」

「そのまま転がしてあるよ。立てるようになれば勝手に帰るだろ。」

…とりあえず今日は、あれ以上痛めつけるなよ。初めてのセックスで俺ら相手にしたんじゃ、マジで死ぬぜ」

「初めて？」

「何言つてんだ、あいつ男いるんだぜ？」

「はあ？」

怪訝な顔をする複数の男達に、滝岡は眉を寄せた。

「…あいつ、二日前だつて男と朝帰りしてんだぜ…？」

「そおかあ？ あれはオトコ知ってる体じゃないぞ」

「」

それは、滝岡達にとって 否、滝岡にとっては予想外の事実。

思わず立ち上がり、足早に今まで男達が居座っていた部屋に立ち入れば、そこは無人。

傷ついた少年の姿は、どこにもなかった。

「悪いけど、今日は帰るよ」

そう言つて女性の唇に軽く触れるのは六条出流。

「なんだか家族の方でよくないことが起きそうだ」

「そんなこと言つて、別の女のところじゃないでしょうね…?」

「そんなに心配なら、この子かと思う女の子達全員で集まつて互いに見張つていればいい。…最も、部屋一つじゃ足りなさそうだが」

「まあっ」

ふざけないで、と苛立つ彼女を適当にあしらひ、出流はマネージヤーに適当な声をかけて自分の車に乗り込んだ。

鍵を指し、エンジンを吹かしながら、空いている手が携帯で呼び出すのは同じ年齢の従兄。

「…自分に予知系統の能力があるとは思わないが……」  
胸中にざわめく不快な感覚は、相手が出るまでの時間をひどく長く感じさせる。

……体が、重たくて。

痛みばかりが全身を支配する。

毀れ落ちる血が白い大地を赤く染め。

凍えた吐息はか細く。

もつ、涙も枯れ果てた。



「…で、どうしてあんたが時河にお弁当を持って行かなきゃならぬ  
いわけ？」

「年末は仕事だって特に忙しいのに、何も言わないと食事も取らず  
に働くんです。…せめてこれくらいさせてもらわなきゃ」

「させてもらわなきゃって何よ！」

「…俺の、自分勝手な押し付けですから」

「裕幸にお弁当作ってもらって、勝手なことするなとかアイツが言  
おうものなら余裕で百発はぶっ飛ばすわよ！」

大晦日を数日後に控えて、慌しく人が行き来する敷明小路。

さすがに二十一時を回れば出歩いている人々の様相も限られてく  
るが、その中に在って高校生の二人連れ、大樹裕幸と江藤汨歌は異  
彩を放つ。

「ホントにうちの男共ってどうなってるわけ？ 特に中流よ、中  
流！ クリスマスの夜だって尋人君を送ったらすぐに戻ってくる  
か言って結局帰ってこなかったじゃない！ 節度ある付き合いとか  
言っという何を考えてんの！？ やっぱりうちの男は他と違って紳  
士なんだわとか、実は感動してた私がバカみたいじゃない！」

「…そんなことないですよ」

「何が」

「何をするでもなく一緒に眠る夜にだって、ちゃんと想いがありま  
す。…中流さんはそういう人ですよ」

「…それはそれで問題のような気もするんだけど…」

「汨歌さん…それじゃあ中流さんにどうしろって言うんですか」

呆れた口調で言い返す裕幸に、汨歌は不満げな顔をするが、すぐ  
にハツとして目を吊り上げた。

「ちよつと！ 何をするでもなくって、なんでそんな実感込めて言  
うわけ！？」

「えっ…」

「あんた、まさか時河とそんなことしてるの！？」

足元に、街の光り。

ここがどこなのかもよく判らない。

…判らないけれど、思い出す。

八階建てビルの最上階、全面が硝子状になっていた展望室。  
夕刻の。

帰宅する人々がひしめくアスファルトを見下ろして“彼”が苦笑する。

…あんなに人の頭だらけだと気味悪いよな……

あれが、最初の言葉。

敷明小路で再会し、助けられたあの日。  
尋人、と再び名前を呼ばれたあの場所。

「先輩……」

出逢いの朝。

自分の存在を知ってもらったあの部屋で“彼”は言ってくれた。  
好きだよ、と。

一緒にいたい、と。

微笑っていてくれれば、嬉しいからと。

あの朝から奇跡の時間は始まり。

……そしてきつと、あの部屋で奇跡は終わった。

「先輩……先輩……っ」

…俺の傍で、幸せだって、笑っていてくれ……

笑っていて、って。

それだけでいいから。

それだけで“彼”も幸せになれるから。

「…ごめ…な、さい…っ…」

とうに枯れたと思っていた涙が、大粒の涙が、頬を濡らす。

「ごめんなさい…っ…ごめんなさい、先輩…っ…！」

何度、謝っても。

もう戻らない。

「僕…」

もう、二度と。

「僕…もう…微笑えません…っ…」

貴方の隣には、帰れない。

「…おまえ、うるさすぎだ…」

夜の街、汨歌の声を聞いて時河竜騎が姿を現したのは敷明小路の外れ。

「裕明、すぐに裕幸に連絡を取って辺りを捜させてくれ。俺達に近い誰かだ、嫌な予感がする…！」

車の中、猛スピードで国道を走り、松浦市に帰ってこようとしていた出流が叫ぶ。

「…つかしいなあ。この時間なら家にいるって言ってただけだな…」

敷明小路、如月出版本社ビル内。

携帯を片手に呟く中流は、壁に背を預けて、一人きり。  
静かな。

静かな、人気のないフロア。

「え……………」  
聞こえた悲鳴は、幻聴か。

「ちょっと時河、アンタいい所に現れたわ！ 今日こそは洗いざらい裕幸とのこと話してもらって……」

汨歌が竜騎の作業服の襟に掴みかかり、声を荒げたと同時。彼らの耳を劈く女性の絶叫。

「!?」

「え……………」

一人の女性が、隣の恋人らしい男にしがみついて叫ぶ。空を指差して叫んでいた。

「……い……人……………」

ざわつく敷明小路の一角。人々の視線が上空を仰ぐ。

「人が……っ……………人が飛び降りて……………！」

それからほんの一瞬後。

鈍い音が響く。

悲鳴が上がる。

「……………！！」

空中に、微かに認めた面影。

まさかと走り寄った裕幸達が目にした姿。

……………真っ赤な。

真っ赤な雪が降る。

白い雪を。

降り積もる雪を。

真っ赤な血が染めていく  
……。

## 二度目の楽園 十八

中流は何が起こったのか全く理解出来ないまま、ひどく取り乱した従姉の言葉に従って大樹総合病院に駆けつけた。

二十二時を回った病院内に人気など皆無に等しく、照明はその一角にしか付いていなかった。

外科病棟三階、手術室。

赤いランプが煌々と照る扉前方。

廊下の椅子には一組の夫婦と従姉姉達の姿がある。

「…兄貴…っ！」

そこに兄・出流の姿までが在って、中流は引きつりそうな声を上げた。

「なんで…なんで兄貴まで…っ」

「…中流」

「中流、落ち着きなさい」

脇から言葉を挟むのは大樹家長男の裕明。

そして青白い顔で椅子に座り、中流を見上げていたのは、彼に連絡した江藤汨歌だ。

「…汨歌」

「…っ」

「汨歌、…一体どうということだよ」

すぐに病院に来てと、叫ぶように言っただけの電話。

尋人君が重体なの、急いで…。

どんなに焦っていたかが顔を見ずとも伝わってくるような物言い。落ち着け、こいつは助かるから…、汨歌の言葉の合間に怒鳴るように聞こえていたのは時河竜騎の声だった気がするが、その姿はここになかった。

「なあ…汨歌、尋人が重体ってどうということだよ…っ」

「中流」

強い口調で呼びつけ、出流は背後を目で示す。

「……………」

そこにいた一組の夫婦。

おそらくは、尋人の両親だ。

「あ……………」

「詳しくは後で話す。だから今は落ち着きなさい」

「兄貴……………」

「それに」

出流はそこで言葉を切り、弟の耳元に静かに囁く。

「……………裕幸がずっと傍にいた。必ず助かる」

「……………裕幸、が……………？」

「あの子の力は、おまえだってよく知っているね……………」

いつになく優しい声で問われて、中流は素直に頷いた。

「そっか……………裕幸が……………」

少しだけホツとして、瞳を伏せる。

膝の力が抜けそうになるのをどうにかこらえて、座り込んでいる

泪歌を向く。

「……………で、その裕幸は」

「……………尋人君の手術が始まるのと同じくらいに倒れて……………そのまま気を

失ったわ。いま、空いてる病室に寝かせてる」

「大丈夫なのか」

「分かんない……………。時河も、裕幸が気絶するまでは傍にいたんだけど

……………その後、どっかに行っちゃった……………、裕幸が目を覚ましたら連絡し

るって、あの子の携帯を持って……………」

「そっか……………」

それきり、誰も何も言わない時間が過ぎていく。

沈黙の中に、壁に掛けられた時計の秒針だけが煩わしい。

時折、尋人の母親が涙をこらえるように息を吐く。

父親が落ち着かない様子で立ち上がり、また座った。

……………話に聞いていた通りの優しそうな両親だ。

校内に安らぎを得られなかった尋人が、唯一安心して過ごせた家族の空間。

尋人が、滝岡を主格とするグループの暴力に決して屈しなかったのには、家族の存在が大きかった。

(…尋人…なんでいきなり重体なんてことになるんだよ……っ)  
事故だろうか。

それとも何らかの事件に巻き込まれたのか。

詳しい事情を何も知らされていない中流にとっては、尋人の命が助かるという言葉以上に有り難いものはない。

大切なのはそのみだけれど、どうしてもこんな事態になってしまったのか知りたい気持ちは振り払えなかった。

(尋人…)

刻々と時間だけが過ぎていく。

裕明と出流は立つたまま微動だにせず、汨歌は祈るように手を合わせ瞳を伏せたきり、呼吸しているのかすら疑わしいほど静かだった。

…どれくらいそうしていた頃か。

唐突に手術中の赤い照明が切られ、まるでそれが合図だったようにその場の全員が立ち上がった。

「…」

そのまま、じっと数時間閉ざされたままの扉を見守った。

次第に扉の向こうから物音が聞こえ始め、扉が開く。

「尋人！」

数人の看護婦に支えられるように、尋人を寝かせたキャスター付のベッドが廊下に運ばれる。

そしてその後から出てくるのは数人の医師。

「尋人、尋人…っ」

取り乱したように彼の名を呼ぶ母親を、彼女の夫が支えるように肩を抱く。

「先生、うちの息子は…尋人は大丈夫なんですか！」



叫ぶように問う父親に、医師の一人が大きく頷く。

「父さん」

その医師を裕明はそう呼び。

「伯父さん、彼は…？」

低い声で問いかけたのは出流だった。

息子達に呼ばれた彼は静かに微笑み、倉橋夫妻に向き直る。

それは取り乱した二人を落ち着かせるような、医者としての信頼を裏切らない力強さ。

「手術は無事に終わりました。もう心配いりません、彼は助かります」

「…あ…っ…！！」

「脳波も神経も、今のところ異常は見られません。目を覚ました後で、もう一度、精密検査を行うことになると思いますが、恐らく心配はいらないでしょう」

あれほどの状態で身体的な後遺症一つなく生還した尋人を、後に“奇跡”だと語る者がある。

しかしそれは奇跡などではなく。

限られた者達だけが知る異郷の力が施した治癒の結果だ。

それを知っている中流たちも、実際に医師から聞かされたその言葉に安堵の表情を浮かべ、涙歌は目を涙に潤ませる。

「ありがとうございます…っ…本当にありがとうございます…！！」

何度も頭を下げ、感謝する夫妻に大樹医師は微笑し…、だがその笑みは長く続かなかつた。

「ただ、…一つ、お話ししなければならぬことがあります」

「え…」

「貴士先生」

「はい」

大樹医師の隣に佇んでいた、若い長身の医師が応える。

「恐れ入りますが、あちらの部屋へ移動して頂けますか」

「…」

貴士先生と呼ばれた医師に促され、夫妻は強張った面持ちで少し離れた一室に入っていく。

「…叔父様」

緊張した声音で呼びかけるのは旧歌。

この中で誰より早く尋人の傍に駆けつけていた彼女は、医師達が話さなければならぬと告げる内容が予測出来てしまっていた。

「……おまえ達は裕幸を休ませている部屋で待っていなさい。すぐに行くから」

優しく告げて、大樹医師は中流の頭を撫でる。

「……」

「伯父さん……？」

「……大人しく待っていなさい。いいね」

そつと微笑し、彼も、夫妻が通された部屋に向かう。

「……さあ、言われた通りに裕幸のところへ行こうか」

「あ、……うん」

伯父に向けられた表情を思い出して、彼のいる部屋から視線を外せずにいた中流を、出流がらしくなく強引な手つきで動かした。

「え、兄貴？」

「おいで」

「ん……」

背を押されるようにその場から遠ざかる中流は、……しかしその数秒後。

尋人の母親の、泣き叫ぶ声を聞いた気がした。

大樹医師が中流達の元に姿を見せたのは、それから優に三十分が経過してからだった。

時刻はとうに深夜。

窓から見下ろす光景には街灯の光り以外に目に映るものはなく、病院内はひどく静かだった。

「…待たせたね」と、少なからず憔悴した風体の大樹医師に、子供達は何も言わない。

彼はそつと微笑し、ベッドに横たわる裕幸の腕を取り、脈を計る。……大分、落ち着いているな。全身の波動にも偏りがなくなっているし、もうしばらくすれば目を覚ますだろう」

「そう…」

ほつとして呟いたのは兄の裕明。

汨歌も深く息を吐き、肩の力を抜いたようだった。

だが。

「さて…、汨歌」

「っ、は、はい…」

そう呼ばれ、彼女は再び顔を強張らせて叔父に応える。

「さつきは慌しくて、ちゃんと聞けなかったから、もう一度、詳しく話してくれるかい」

「…裕幸のこと？」

「倒れている尋人君を見つけて、真つ先に裕幸が駆け寄ったんだね？」

「うん…、血が…すぐくて…慌てた裕幸が…たぶん傷を塞ごうと思ったんだと思う」

「ん」

「でも…尋人君に触れた途端に、裕幸が叫んで…」

「え…？」

「裕幸が？」

聞き返す六条兄弟に、汨歌は辛そうに頷く。

「顔が真っ青になって…、時河がすぐに傍に寄ったの…そしたら、今度は裕幸に触った時河が…苦しそうになって…、どうしたのって近付いたら、寄るなって…裕幸に触るなって…すごい剣幕で…」

あんな二人の顔は見たことがなかったと汨歌は続ける。

裕幸など、今にも泣き叫びそうな悲痛な表情で、それでも尋人の手を離さなかった。

その裕幸を支えながら、時河竜騎は汨歌に中流を呼べと言いつつ放った。

救急車は別の人間が呼んだらしく、しばらくして鳴り出したサイレンの音に人垣は割れ、次に汨歌が連絡したのは大樹医師。

幸いにも当直で病院に残っていたのが外科の辻貴士医師だったこともあり、手術の準備はすぐに整い、救急車が病院に到着する頃には大樹医師もここにいた。

尋人がストレッチャーに乗せられ手術室に運び込まれると、途端に裕幸は倒れ、竜騎は彼の携帯を持って外に飛び出し。

それと入れ替わるように病院に着いたのが、裕明から連絡がいつていた倉橋夫妻。

出流。

最後に中流が着き、今に至る。

その一部始終を聞いて、同じ顔の裕明と出流の推測は一致した。

「……裕幸は視たのかな」

「恐らくね。…そして裕幸を通して時河君も見た…、それで外に飛び出して行ったってことは…」

「……捜してるのよ」

兄達の言を繋ぐように、汨歌が低く言い放つ。

「捜してるのよ、尋人君をあんな目に遭わせた連中を！」

彼女は見たのだ。

雪の積もったアスファルトに落下した尋人の姿。

白い大地を血に染めて。

言葉も、呼吸もなく横たわる稚い少年。

その全身を覆う傷痕。

目の下の、涙の跡。

「時河…ものすごく怒ってた…、怒るわよ…っ…裕幸だって叫ぶわ…」

尋人をあんな姿にした連中を、兄達の推測通りに二人が視たのなら。

「……そんな残酷な光景を目の当たりにしたのなら。」

「……どうということだよ……」

不意に、中流が震えた声を押し出す。

「尋人をあんな目に……って……、何だよ、それ……」

「……っ……」

中流の悲痛な声に、汨歌は唇を噛む。

裕明も出流も、適当な言葉が出てこない。

「なあっ！ どうということだよ！ 尋人が……なんであいつが手術しなきゃならないような目に遭ったんだよ！ 事故なのか！？ 何かに巻き込まれたのか！？」

叫ぶように問う中流に、大樹医師は静かに告げる。

「事故でも……巻き込まれたわけでもない」

「じゃあ何で！」

「……中流」

「なんで……っ……、なんで伯父さんも汨歌も……兄貴達もそんな顔するんだよ……っ！」

裕幸と竜騎は、何を視た？

どうして誰もが中流に明言を避けるのか。

「伯父さん……」

掴み掛かるように叫ぶ中流を、彼は真っ直ぐに見返した。

そうして、告げる。

出来ることなら一生知らせたくなかった事実。

「……尋人君は、自分から飛び降りたんだ」

「敷明小路の外れにあるビルの屋上から飛び降りた。……自分か

ら

「……っ、そんなわけない！」

「中流……」

「そんなはずないっ、アイツには自殺する理由なんか何もない……」

っ！！」

「彼はひどい暴行を受けていた」

「知ってる！」

怒鳴るように言い返した中流に、汨歌達が目を瞠った。

「知って……って」

「知ってたさ、尋人がいじめに遭っていたのは！ 裕幸も時河も知ってる、その時に尋人に会ったんだ、知らないはずないだろ！！」

知っていたのは、尋人の両親も同じ。

全身の傷痕。

一緒に暮らしていて、彼を気に掛ける存在ならあれに気付かないはずがない。

「それでもあいつ負けてなかった！ どんな暴力受けたって負けずに立ってたんだ、学校に行くのだって嫌がらないで……っ」

同級生に笑えるようにまでなっていた。

学校に行けば中流に会えたから。

両親が励ましてくれたから。

大好きな人達の想いが力強く、嬉しくて。

何かお返しがしたいと思っても、弱い自分には何も出来ないから、せめて真っ直ぐに前を向きたいと語った尋人。

そんな彼が暴力に負けて自らの命を捨てるような真似はしない。

「そんなあいつが…自殺なんかするはずないんだ……っ」

「…」

必死に叫ぶ中流を、従兄弟達はやりきれない思いで見つめ、一方の大樹医師は、わずかに首を振り、瞳を伏せた。

確かなことは判らない。

裕幸と竜騎が何を視たのかなど、想像の範疇でしかない。

だが、尋人の手術を執刀した彼だから。

その全身を診た医者としての彼だから言い切れること。

「……違っただよ、中流」

「…え…？」

「汨歌、きつとおまえの考えていることも違うんだ」

「叔父様……？」

「……彼が受けたのは、身体的な暴力だけじゃない」  
続けられる言葉に、裕明と出流が目を瞠る。

汨歌は喉の奥に悲鳴を上げ。

「

「尋人君は、……性的暴行を受けていたんだよ」

それも、複数の男から。

明かされた事実には、誰一人、言葉が見つからない。

広がる沈黙を。

「……そ、だ……」

沈黙を震わせたのは、中流の掠れた呟き。

「そんなの……嘘だ……」

「中流」

「だってあいつ……普通に触れられるのだって怖がって……っ」  
ようやく口付けに慣れてきたばかりの。

微かな愛撫にも、血が滲むほど唇を噛み締めていた尋人。

強く瞑られた瞳。

震えた体。

あんなにも怯えた姿を、いったい誰が望むものか。

「誰も……誰も見たくないだろ……？ 尋人が怖がって……泣きそう  
になって……そんな辛い……」

耐えて。

耐え続ける、残酷な、姿。

「あんな顔……させたい奴なんて、いるわけないだろ……っ」

「………《ごめんなさい 先輩》……」

「！」

「っ……」

不意に届いた声に、誰もが背後を振り返った。

ベッドの上、今まで深い眠りに落ちていた裕幸が目を覚まし、掠

れた声で呟いていた。

色素の薄い瞳から零れ落ちる大粒の涙は、果てして彼自身のものだろうか。

「…《ごめんなさい 先輩… 僕 もう 微笑えません》……………」

「…っ……………」

「……………《貴方の隣には帰れません》……………、尋人君の最後の言葉です

……………」

「裕幸……………」

「…尋人君の、最後の言葉なんです……………」

繰り返される言葉に、中流は視界を閉ざした。

「…っ……………！」

そのまま、崩れ落ちるように膝をつき、握られる拳。

誰も、何も言えない部屋。

涙だけが零れ落ちた。



二度目の楽園 十九

怒りも、悲しみも。

何もなかった。

頬を伝った涙にさえ、どんな意味があったのか判らない。

……判りたく、なかった。

静かな部屋。

真つ白なベッドに寝かされている君の寝顔は、一人きりの部屋よりも静かで。

傷らだけの身体に包帯を巻いて。

手当てをして。それは、まるであの朝と同じ光景だ。

目を覚ますと、君は戸惑いながらベッドを抜け出し、部屋を出る。居間に入り、その広さに絶句して。

声を掛けた自分に驚いた顔をして見せるんだ。

そして、そこから始まる。

名前を聞き、呼び合い。

触れ合って。

そしてきつと、決してこの日は通らずに。

「……尋人……」

傍らに眠る君。

なぜ、こんな方法しか選べなかった……？

『見つけた』

時河竜騎が、汨歌から掛けた電話の向こうで答えたのが数時間前。その手の事に詳しい奴に聞いたらすぐに判ったと、その情報元を連れて向かったのが個人経営の喫茶店だと言う。

『前々からヤバイ商売しているとは聞いてたんだけどさ』と、電話を代わって話すのが、その情報元・城島秋久。じょうじまあきひさ

汨歌相手では順序立てた説明をしようとしないうちに竜騎に呆れ、本人が電話を代わると申し出たのだ。

裕幸、竜騎が通う松浦高等学校の三年生であり、留年経験有りの彼は別の意味でも竜騎の先輩にあたる人物で、今でこそ実家の料理屋を継ぐべく改心した彼だが、現役時代の情報網は今も健在らしく、竜騎が彼にどう話したかは判らないが、どんなに簡素な説明であっても竜騎の頼みとあれば彼は動き、そしていつだって正確な情報を持って素早い対応をする男だ。

『でさ。時河はこの店の連中を残らず殺すって言うてるんだけど』  
「ええ、そう！ 一人残らず死体を残さないようにやってちょうだい！」

返す汨歌に、城島は『ははっ』と笑う。

『了解、イツカちゃんの命令とあらば仰せのままに』

「城島先輩！」

「まあ待ちなさい」

慌てた裕幸が受話器を取ろうとするが、それより早く六条出流が手を出した。

「城島君、その店の場所を教えてください。俺が行く」

「え？」

「人間にはね、死ぬより苦しい罰というのがあるんだよ」

そう告げる出流の表情には冷たい微笑。

「ところで、君が声を掛けたら何人くらい集まる？」

『今すぐなら三十から五十が限度かな』

「充分だよ。悪いがその五十人弱を今すぐにその店の周囲に集めてくれ」

『いいけど、何すんの?』

「店を壊す」

「!」

「出流!？」

「壊す、じゃ済まないかな。とりあえずやれる限りのことはやらせてもらおう」

冷徹な表情で言い切り、城島から店の場所を聞いた出流は、電話を切った後で弟妹達に告げた。

「一人一人の人生を踏み躪った連中に、今の生活を続ける価値があると思うかい?」

「…」

「俺にしてみれば、中流が泣いたというだけで奴らを殺す理由は充分だ。…だが、ここが地球上で、相手がそれでも人間だと言うならこちらも礼儀は尽くそう。それでも随分と情けを掛けているつもりだよ」

「出流…」

「愚かなのは連中だ。奴らは、この俺を怒らせた」

「おまえ達の好きにきなさい」

裕幸が目を覚ました病室で、大樹医師は言い切った。

「報道関係にも、警察関係にも既に手は回してある。尋人君のこの件に関して外部に漏れる心配はしなくていいし、これからおまえ達が何をしようとする騒ぎになることはない」

それは大樹医師本人によるものではなく。

それらの機関に多大な圧力を及ぼすことの出来る存在が、こちらに協力しているがための不正行為。

かといって、その見返りに大樹医師が支払うのは金銭でも契約でも医療行為における優遇でもない。

大樹からそれらに流れるのは月の光り。

裕幸の 白夜の。

神に等しい存在の加護であり、また相手方の手中に大樹と同じ血を継ぐ者達がいればこそ真実と認められ、可能となった利害の一致。「だから、おまえ達は思うようにしたらいい。もちろん、おまえ達自身が傷つくことのない範囲でな」

歪んだ笑みで告げた大樹医師。

その言葉を、出流は忠実に実行に移そうとしていたのだ。

「尋人…」

青白く、冷たい頬に触れて。

中流は肩を震わせた。

数時間前に裕幸が寝かされていた病室で兄達がどんな会話をしていたのかなど知らぬまま、尋人の傍らで彼の状態を見守っていた。

「…尋人……どうして…」

もう中流の隣で微笑えない。

貴方の傍には戻れない。

あの従弟がいたからこそ届いた、尋人の最後の言葉は、中流に否応なく残酷な現実を突きつけた。

それと同時に胸中を襲ったのは、どんな表現でも言い表すことの出来ない感情。

怒り、悲しみ。

絶望。

喪失。

そのどれにも当てはまるようで、当てはまらないような、……虚しい思い。

言葉になるのは、ただ一言。

尋人。

どうして。  
何故。

どうしておまえは“死”を選んだんだ…？

「俺が……、こんなことで俺が…、おまえを嫌うとも思ったのか……？」

誰よりも苦しんだおまえを。

おまえに微笑っていて欲しいと願った俺が。

「俺が…おまえを泣かせるとでも思ったかよ…っ…」

そんなわけ、ないのに。

尋人が微笑えるためなら。

安らいで、穏やかに過ごせる場所を保つためならば。

「おまえの…、おまえが望むなら、俺は何だっしてしてやれたのに…っ…！」

最後の言葉の通り、中流の傍にはいられないと言うなら、それでも良かった。

今は別れを告げる事になっても。

いつか傷ついた体が癒えて。

少しずつでも心が落ち着いて来たら。……それからでも、もう一

度、歩み寄ることは出来ただろう。

なのに、おまえは。

その未来さえ潰そうとして。

「…好きだっって言っただろ…っ…」

おまえが好きだっって。

こんな言葉、冗談でなんか言わないっって。

「一緒にいたいっって言っただろ…っ…っ！」

細い手を握り締め、中流は叫ぶ。

掠れた声。

それは激情を押さえ込んだ悲痛な叫び。

「尋人……」

握り締めた手を、頬に寄せ。

「尋人……っ」

呼びかける。

何度でも。

だからどうか戻ってきて。

傍にいられないと言っのなら。

俺と一緒にいられないと、言っのなら。

それすら、おまえの望む通りにしてやるから

「……六条さん……？」

「！」

不意に背後から声を掛けられ、中流は立ち上がって振り返り、目を見開く。

「あ……」

背後に佇んでいたのは尋人の母親。

いつからそこにいたのか、わずか数時間でやつれた観のある彼女は、優しくも淋しい笑みを浮かべていた。

「……あの……済みません、勝手に……」

本来は身内以外面会謝絶の病室。

どうしても彼の容態が気になり、中に尋人以外はいないことを知って傍についてしまったのだ。

「……済みませんでした。……ただ、どうしてもひろ……倉橋君のことが気になって……」

尋人の母親と知りながら、どうしても離したくはない掌を見つめる。

すると彼女が微かに目元を和らげた。

「……やっぱり貴方が六条中流さん？」

「え……」

「よくね、尋人が話してくれていたのよ。とつても優しい先輩と親しくなっただって」

「尋人が…？」

少なからず驚いて聞き返すと、彼女は笑みを強めた。

「以前は“大丈夫だから”って学校に行くのも強がっているのが判ってしまっただのに…、最近は本当に楽しそうだったの」

尋人が同学年の一部からいじめに遭っていることを彼女は知っていた。

辛いなら転校することも考え、それを本人に薦めもした。

だが尋人が頑として首を縦に振らず、榊学園の生徒で居続けたのだ。

それは何故か。理由は一つ。

「だから学校にお友達が出来たの？　って聞いたら、素敵な先輩がよくしてくれるって。その人のおかげで虐められることもなくなっただけ。…この子の傷、本当に消えていって…、同級生の子とも話せるようになった、って…」

「この子…本当に幸せそうに笑って話してくれました」

告げて、彼女は深く頭を下げた。

そうして中流に贈られる言葉。

「尋人を愛して下さってありがとう」

まさかあの尋人が　自分の性癖を知られることに怯えていた彼が家族には打ち明けていたのかと驚く中流に、彼女は続ける。

まるで彼の驚きの理由を見抜いたように。

「…母親ですもの。尋人の幸せそうな顔を見ていれば、普通の先輩後輩の仲間じゃないことくらい判ります」

「この子の性癖には気付いていましたから…、学校で辛い目に遭っている尋人が、これからもずっと苦しむのかと思ったら不安で仕方がなかったけれど…、貴方のような人と出逢えて、想い合えたこの子は幸せ者です」

「けど…、けど尋人を…っ、俺は守れなかった…っ」  
「いいえ」

それは違つと、彼女は首を振る。

「尋人は幸せです。…貴方は、今もそうしてこの子の手を握っていてくれるんですもの」

「…っ」

「どうかこれからも傍にいてやって下さい…、私たち親と一緒に…、違つ形で、この子の支えになってやって下さい…」

そうして再び頭を下げる彼女の頬に、大粒の涙が伝つ。

中流はそれに応えるように、尋人の手を包む力を強めた。

傍にいる。

それが尋人のためになるのなら。

傍にいて、尋人を支えられるなら。

「…尋人が好きなんです」

それは誰に恥じることもない中流の本心。

「尋人の傍にいたいんです…」

「…六条さん」

涙に濡れた頬が、柔らかな笑みに綻ぶ。

彼の想いに感謝するように、彼女は三度、頭を下げ。

「ありがとう」と、何度も繰り返した。

ありがとう、なんて。

そんな言葉が欲しくて一緒にいるわけじゃない。

欲しいのは君の笑顔、ただ一つ。

いつだって。

今だって、その願いは変わらない。

願いは、変わらない。

想いも変わらない。

けれど。



けれど、失ったものは大きすぎた。

十二月二十八日未明。

家族の見守る一室で目を覚ました尋人は、…しかし、中流と出逢  
つてからの“二年間”を失ってしまったのだ ……。

## 二度目の楽園 二十

まるで計算されたように消えてしまった二年間。

尋人は自分が病室にいる理由どころか、夜が明ければ中学一年生の陸上競技大会が始まるのだと思っていた。

中流を初めて見つめた“あの日”より前に戻ってしまった彼の記憶は、中流を「有名な先輩の友達」としか認識していなかった。

最初、それすら気付かずに自分の病室にいる彼を見て、誰かも判らずに困惑する尋人の姿は、中流にとって残酷あまりあるものだった。

六条中流を知らず。

何故、病院にいるのかも、それ以前に何があったのかも。

学校でイジメに遭っていることすら記憶にない尋人の幼い顔は、まるで見知らぬ人間のそれだった。

この日、六条中流は倉橋尋人を失った。

ずっと一緒にいたいと願った恋人に、その存在を抹消されたのである。

「君の名前は？」

「…倉橋、尋人です」

「…両親のお名前は？」

「倉橋圭一、倉橋彩子」

そんな家族の事柄から、友人知人についての問いかけ。

「日本の首都は？」

「東京、です」

一般常識。

「八×三は？」

「二十四…」

簡単な数字計算。

大樹総合病院外科病棟五階の南側に位置する個室で、精神内科医から幾つかの問題を投げ掛けられて、尋人は困惑気味に、しかし悩む様子もなく答えていった。

だがそれが年齢になり、同級生の名前を聞くに至って、表情に翳りが浮かぶ。

「前の席は吉岡君で…、隣は松宮さん、担任は阿部先生…です」

戸惑いながらも、彼自身にとっては正直に口にした名前。しかしそれは、尋人が中学一年生当時の、現実の中では二年前の同級生であり、学級担任。

彼の中の時間は、ずっと以前に巻き戻ってしまっているのだということを如実に表すものだった。

「検査の結果、神経や脳に異常と言えるものは見当たりません」

倉橋夫妻を別室に呼び、そんな検査結果を伝えたのは尋人の主治医となった辻貴士医師。

尋人の体は順調に回復に向かっており、後遺症も残らない。

この調子なら退院できる日も近いでしょうと夫妻を安堵させる一方で、少年の記憶に関しては難しい顔をして見せた。

「二年前に戻ってしまっている記憶に関しては、どうぞ説明しているものか、正直、判りません。あまりの衝撃に混乱しているだけであれば、時間を掛けて思い出す可能性は多分にあるのですが…」

それにしても、失くしたのがこの二年間限定であるという結果が貴士を悩ませた。

自分がどんな目に遭い、自ら命を投げ出そうとしたのか…、その経緯を忘れることが出来た少年は、もしかすると幸運だったのかも

しれない。

複数の同性に犯された末の投身自殺未遂、そのような過去と傷を抱えて生きていくよりは、ずっと幸せだと、語る者もあるだろう。

家族のことは解っているし。

自分のことも理解している。

少なくとも、この二年間以外のことは失っていないのだから、普段の生活に、そう支障を来たすものではないはずだ。

だが、では何故、この二年間を失う必要があったのか。

「  
…」

二年間を失うことに、どんな意味が在るのだろう。

貴士は、夫妻との話を終えて医局に戻る途中、外科受付の待合室で足を止めた。

大勢の、身体に支障を来たした患者が名前を呼ばれるのを待つているその場所に、ただ静かに座っている少年の背中が見えた。

何を待つでもなく。

…見るでもなく。

他に行き場もなくてそこに居続けるだけの彼の背が、どうにも居た堪れなかった。

意識が戻ったと連絡を受けて病室に向かった医師達は、倉橋尋人の様子が妙な事にすぐに気付いた。

今までの経験上、こういう状況で運ばれてきた患者は意識を取り戻しても朦朧としていることが多い。

言葉を発したり、焦点の合った瞳で周囲を見渡したりなど、なかなか出来ないものだ。

なのに倉橋尋人は、まるで朝が来たから目覚めただけでも言うように、病院のベッドの上にいる自分に困惑していた。

両親に、どうしてこんなところにいるのかと聞き、何があったのかと尋ね。

尋人…？

そう見開いた目で呼びかけた“彼”を、同じくらい丸くした目で

見つめ返した。

…え…あの…

驚いた表情で、言葉を探すように。  
そのうち、気付いたように声を上げた。

あの…もしかして…同じ学校の人…ですか…？

誰だっけ。

確か運動神経抜群だって有名な先輩のお友達で。

…確か…、六条先輩…？

そう告げられた瞬間の彼の表情が忘れられない。  
戸惑い、困惑、驚愕、…絶望。  
様々な感情の入り乱れた姿で立ち尽くす彼を、あの時、院長が促して外に連れ出さなければ、どうなっていたか。

…尋人…貴方、それだけなの…？

倉橋夫人の震えた問いかけと、零れ落ちた涙。

ああ、そうかと。

あの時は判った気がした。

倉橋尋人の心から、限られた時間だけが失われた理由が。

…だが、それならば何故。

何故、二年間もの長い時間を。

「……………」

何を言うことも出来ないと思っていて、それでも彼を放っておくことは出来ずに、そちらに歩み寄ろうとした貴士は、しかし同時に

彼の兄弟が近付いてきている事に気付いて再び足を止めた。

目立つ容貌を隠そうともせず、どこか厳しい顔つきの六条出流と、彼よりも幾分か柔和な印象を受けるこの病院院長の長男、大樹裕明。そしてその背後について歩いてくるのは、この病院に両親が入院している時河竜騎だ。

「……」  
彼らが来たなら、何も言えない自分が近付いたところで邪魔にしかならないだろうと踵を返した。

待合室を過ぎ、医局へと戻りながら、彼は願う。

あの切ない背中が、せめて真っ直ぐに立ち上がれるようになってくれることを。

「……神学園だと言っていたな」  
彼も、倉橋尋人も。

いつだったか、自分の三つ下の弟から聞いたことのある学園の名は、貴士にとって、ある意味、特別な意味を持つ。

もしかすると近い内に、医師としてではなく、個人として彼らと再会することがあるかもしれない。

「……」  
その時には、どうか笑い合う二人の姿が見られるように……。  
そう願いながら医局へと立ち去った。

兄の呼び声に、中流は静かに顔を上げた。

その傍に裕明と竜騎の姿があることを知り、目を眇める。

「…なんで、時河が兄貴達と…?」

裕幸もここにいるのなら、竜騎がここに居るのも理解出来る。

だが念のために彼らの背後を確かめてみても穏やかな従弟の姿は見当たらず、そのうち、

「裕幸には聞かせたくない話なんでね」と弟の心情を読み取ったような出流の言葉に小さく聞き返す。

「…話…?」

「そう。尋人君の件で黒幕がはつきりしたんだ」

「!」

出された名前に、中流は反射的に立ち上がった。

「尋人の…って、何か解ったのか!？」

「中流」

突然の大声に周囲の患者達の視線が集まり、裕明が固い声音で中流を制す。

「ここじゃ話し辛いから、外に出よう」

「…」

強い口調、決して反論を許さない従兄に中流は無言の視線で応える。

促されるように待合室を遠ざかり、彼らが向かったのは病院の第一駐車場だった。

外来客用の車が百台近く収容可能な駐車場は四方をガードレールに囲われている他、今は季節柄、排気ガスに汚れた灰褐色の雪が山になっていた。

吐息は白く色づき、厚い雲に覆われた灰色の空からは微かに降雪も認められた。

「中流、寒くないかい？」と裕明に気遣われ、本人は首を振った。寒さなんかどうでもいい、とにかく尋人の話が聞きたいのだと無言で訴えれば、隣で出流が嘆息した。

「尋人君に忘れられて、自棄になっっているんじゃないかと心配だったが、いい目をしているじゃないか」

「え……」

「その調子なら大丈夫そうだな」

「……？」

何を言わんとしているのかが読み取れずに怪訝な顔を見ると、裕明が「余計なことは言わなくていいんだ」と出流を叱る。

「話を聞いて、どうするかは中流次第だ。それでおまえがどんな判断をしても、俺達は止めも煽りもしない」

「……どういう意味だよ」

「……時河君がね、尋人君に乱暴した連中の居所を見つけてくれたんだ」

「時河が……？」

驚いて聞き返し、本人を見返すと、竜騎は彼と視線を合わせようとはせずに横を向いたまま。

「中流は、尋人君の意識が戻るまで傍にいたいだろうと思ったから、俺達で勝手に動いたんだけどね」

裕幸が一時的に寝かされていた病室で、その後、出流が何を言い出し、汨歌や松浦高校の上級生・城島も含めた一同が中流の知らない場所で何をやらかしたのか。

尋人が意識を取り戻した後も度重なるショックに茫然自失状態だった中流は何も知らされていなかったし、尋人が暴行された状況すら聞かされていないのだ。

一体、何があったのかと緊張した面持ちになる中流に、兄達は続けた。

「尋人君が目覚ます前に全部片付けてしまいたかつたんだが……」  
裕明に続いて出流が言うも、その声音はどこか不服そうで、中流



はいっそう顔を強張らせた。

「全部片付けて…って、兄貴達、何をしたんだ…？」

「…裕幸と時河君が、犯人を見たんだろ…って…話はおまえも聞いていたね」

「…ああ…」

「その連中を、時河君が探し出してくれた」

「！ それでそいつら…っ」

「出流が全員を闇に追い落とししたよ」

「…、何だ…？」

「それはもう、徹底的にね」

「……」

それがどういふことなのか、詳しく聞かなくとも実弟の中流には判る。

「心配しなくとも、全員、ちゃんと生きているよ。俺も随分と情け深い人間だからね」と囁く出流の目には、家族だからこそ判る不穏な光りが揺らいでいる。

全員が生きて、おそらくは骨の一本も折られることなく済んだであろう連中に、出流が与えたのは、生きていながら地獄のような世界に続く道。

それは人によって様々であり、出流は、その様々な闇に連中を追い落とししたのだ。

強力な癒しの能力を有する裕幸と同じ顔をし、従弟を守るべく対となる能力を持つ出流だからこそ可能だった罪悪への裁きは、もう一人の同じ顔をした能力者 出流と二つで一つの欠片を体内に併せ持つ裕明との感情の同調があつてこそ、その威力を発揮する。

今は無事に生き延び、大きな怪我一つなく助かったと思っっているかもしれない彼らは、しかし近い内に必ず思い知る。

店を潰された事に腹を立て、こちら側に復讐してやろうと考えていたとしても、それは決して現実のものにはならないし、いくら腹黒い策を練っても、実行に移すことは二度と叶わない。

連中は、生涯、光りの道を歩めはしない。

その可能性を、彼らに奪われたのだ。連中が私欲のために何人もの人々から平穏な生活を奪ったのと同様に。

「奴らはその手の映像を撮り溜めて相当額を儲けていたらしいよ」

「……」

「それを脅迫材料にされれば、今までの被害者達は連中の言いなりになるしかなかったんだろうな……。時河君が……裕幸を通して視た状況を高校の知り合いに話したら、この近郊でそんな真似しているのはそいつらだけだって言うんで、確認してみたんだが、……その通りだったというわけさ」

「……」

そして敢えて明言はしなかったけれど、尋人がされた行為も正にそれであり、脅迫の矛先は自身に留まらず、中流にも向けられていた。

どういう言葉で、何を要求されたかは本人にしか知りえないが、それが尋人を自殺に追い込むほど残酷なものであり、中流との時間を消してしまった最大の要因だと、誰もが察した。

一人一人の人生を踏み躪った者が、今まで通りの生活を続けることなど許されはしない。

出流はそう信じて疑わなかったし、それを否定しなかったから親族の誰もが彼を止めなかった。

万が一、連中が“幸福”を手に入れることがあるとすれば、それは尋人が彼らを許した時。尋人と同じ目に遭わされた多くの少年・少女達が、奴らを許した時だけだ。

「店は表向き、人気の喫茶店だったようだが……、とりあえず店自体は修復不可能なまでに潰してきたよ。倉庫の中身も、奴らがそれで儲けた金もね」

出流と裕明の交互の説明に、いつしか中流の視線は足元に固定されていた。

眉間に深い縦皺を刻み、握られた拳は微かな震えを伴いながら、

時折、わずかに上下する。

「…なら…」

兄達の話聞き終えて、中流は掠れた声を押し出す。

その唇に滲む赤色は、抑え込まれた彼の激情。

「なら…尋人の、も…」

「…」

震える中流の言葉に、だが誰一人頷かない。

しばらく沈黙した後で言葉を繋いだのは、やはりと言うべきか出流だった。

「…彼のは、連中の店にはなかったよ」

「え…？」

「連中はね。尋人君に関しては知り合いに頼まれただけだと言うんだ」

「知り、合い…？」

「そう。だから撮ったものは全て、その相手に渡した、って」

あんな商品にならないモン必要ない。

頼まれただけだからオレ達には関係ない。……出流の質問に答え

る合間に、命乞いするような勢いで捲し立てられた台詞の数々は、今、思い出しても彼らの心を苛立たせる。

「…最初に言っただろ、黒幕が判ったよって」

「黒幕…」

聞き返す中流に、複雑な沈黙。

「黒幕…って、誰だよ…」

嫌な予感を抱きながら重ねて問いかける中流に、兄達は顔を見合わせた。

「…おまえは、尋人君が学校でいじめに遭っていたのは知っていると言ったね…？」

「…、それが何…」

榊学園という校内での暴力が今回の件にどう絡むのかと、眉根を寄せた中流は、だがすぐに顔色を変えた。

「まさか……」

脳裏を過ぎる複数の少年達。

尋人に暴力を振るい、血を流させ、傷痕を残した彼らが。

「主犯の名前は、滝岡だそうだ」

「……っ」

告げられた名は、疑いようも無く中流が知る、榊学園中等部に在籍する、…尋人の同級生でもある、あの少年。

「…って…何であいつらがこんな真似…っ、最近じゃ大人しくなつて、尋人に手え出すこともなくなつてたんだぜ!？」

だからあんなに鮮明だった傷痕は癒え、笑顔は戻り、同級生ともあんなふう言葉に言葉を交わせるようになったんだ。

尋人が変わったから彼らも手を出さなくなつたんだ、と。

これで尋人を傷つける敵はいなくなつたのだと、安心すらしていたのに。

「それが何で…っ…なんで今になってこんな真似…っ!！」

自殺にまで追い込むような それも他人の手を借り、脅迫という名の鎖でつなぐような、残酷かつ卑怯な手段で尋人を傷つけた。

泣かせた。

その存在を中流から奪い取った。

「……っ」

「中流!」

刹那、駆け出そうとした彼を出流が捕まえる。

「どこに行くつもりだ」

「アイツ殴り飛ばすに決まってるだろ! 絶対許さねえ!！」

「どこにいるか判っているのか?」

「そんなもん、どうにでも探し出して」

「知っている」

中流の言を遮るように、即座に返したのは竜騎だった。

闇色の瞳に感情を抑え込んだ低い声音。

「…奴らの居場所は突き止めてある。今も城島が連中を張ってる」

「だったら教える!!」

「聞いて、どうする」

「なっ……」

「滝岡を殴って、…その後はどうする」

「……っ」

深く濃い闇色の瞳に見据えられ、中流は言葉を詰まらせた。

こんなに真っ直ぐな視線には、どんな言葉も力を持たない気がした。

滝岡という人間を許せない気持ちは本物で、この憎しみも溢れんばかりに膨れ上がっている。

見つけて、殴り飛ばして。

…そうして自分が何を仕出かすかなど、自分自身にも見当がつかない。

だが、それでも。

だからこそ。

「…っかんねーよ……」

「中流……」

「判んねえけど、このままじゃ俺の気が収まらない……っ…俺は…  
…っ」

俺は。

尋人に忘れられて。

何も出来なくて。

傍にいても、出来なくなつて。

「俺…っ……あいつを守つてやれなかつたんだぞ……っ!？」

滝岡の存在は知っていたのに。

彼が尋人を傷つけているのは、知っていたのに。

いざという時に傍にいてやれなくて。

追い込んで。

笑顔でいて欲しいと願った尋人を、死に追いやるほど泣かせてしまった。

「……」  
恋人を、分かっていたはずの危険因子に奪われ、失い、…行き場のない想いは形を変える。

「……」  
いつか“あの存在”を失うと理解せざるをえない竜騎は、その拳を握り締める。

「……敷明小路四丁目“Darker”って店だ」

「……」

「時河……」

「行け」

低く言い放つ言葉に、出流の、弟の腕を掴む手が解けた。

「……」

中流はそんな兄を見上げ、竜騎を振り返り。

示された場所へと走り出した。

ずっと目障りだったんだ。

いつだって人の目の前をつるちよろして、こっちの気分を悪くさせる。

何だっておまえは俺の視界に入ってくるんだ。

どうして、俺の見える場所でそんな顔を。

行動を。

言葉を、紡ぎ出すんだ。

…気に入らねえ……

心底、そう思った。

おまえの笑った顔も。

落ち込んだ顔も。

困ったような顔も。

何もかもが俺の中の何かを刺激して苛立たせる。

それでも勝手に視界に入ってくるおまえは、…俺に何をさせたいんだ。

…ムカつく……

マジでムカつく。

失せるよ、おまえは。

こっちが親切にそう言っただけなのに、それでもおまえは俺の視界に入り込んで。

いつだったか気付いた、おまえの目線の先。

高等部の奴を目で追って、今まで見たことのない顔だ。

すぐに判ったさ、それがどんな意味か。

おまえがホモだって。

けど口に出したくなんかなかった。

気味悪いんだって、マジで。

たまたま肩ぶつけて、

「あ、悪い」って、そんな一言で幸せそうな顔しやがって。

「中流兄ちゃん！」って、初等部のガキの声が聞こえたら弾かれた  
みたいに顔上げて。

そんなにアイツがいいか。

おまえのこと、何も知らない奴がそんなに好きかよ。

…ムカつく……

ムカつくし、気味悪いし。

イライラする。

呼びつけて殴ったら、少しはこっちを見るのか？

そうしたら俺に許しを請うたら。

泣いて謝れよ。

服従しろよ。俺がおまえを支配してやるから。

俺の言うことだけ聞いてろ。

…先輩……

おまえの主人は俺だろ。

先輩に手を出すな！

おまえは、誰の。

だって僕は…、先輩のことずっと…、一年の時からずっと

……っ……



おまえは、誰のものなんだ。

手の中のフィルムを握り潰す勢いで拳を固め、滝岡は齒軋りする。この中に残されているのは、商品にならないと言われた尋人の姿。あんなに幸せそうな顔で。

変態のくせに普通の恋人同士みたいな振りしてよろしくやっていたのは何だったんだ。

未経験で、どういうことだよ、それは。

(おまえはアイツのものになったんじゃないのか…っ?)

薄暗い、照明は点灯しているものの煙草の煙で霧がかっている店内は周囲の様子がかなり見辛くなっていた。

敷明小路四丁目“Dark er”の名で看板を上げているこの店は、知る人ぞ知る若者達の無法地帯。

昼夜では全く別の顔を持つと言われる敷明小路の中でも、四丁目の最終路から奥は昼間でも怪しい気配が充満しており、危険なクスリ等の売買も平気で行われるような場所だ。

滝岡はここであの連中と知り合い、倉橋尋人の一件を持ちかけた。どうでもいいから、俺達の言いなりにするだけの物が欲しいと話せば、お安い御用とばかりに実行に移されたのがアレだった。

別に、どんな方法でも良かったんだ。

あいつを俺達の奴隷に出来るなら。

アイツから奪えるなら。

尋人がどんなに傷つき、泣き喚いても。

「くそ…っ…」

手の中のそれを投げ捨てたい気分には駆られながら悪態をつく滝岡に、カウンター側から戻ってきた益田が卑しい笑みを覗かせている。「倉橋の家も六条の家も、誰も電話に出ないぜ」

「ははっ、どっちも居留守使ってんじゃねーの？」

「今頃泡食って逃げる算段とか練ってんじゃねーだろーな」

「無駄無駄、こっちにはアレがあるんだぜ」

言って彼らが見るのは、滝岡の手の中にあるフィルムと、足元の靴に無造作に突っ込まれているビデオテープ、数枚の写真。

「どうする、最初は幾らくらい持ってこさせる？」

「六条なら百万でもイイんじゃないの？」

「持ってそーだよな、アイツの家、見たことあるか？ こないだテレビにも映ってたけどさ」

「……」

仲間達のくだらない談笑を聞き流しながら、滝岡はふと誰かの視線に気付く。

さりげなく店内を見渡すも、充滿した紫煙と店の規模に反した大入りの客数で、その正体は見極められない。

と、また新たな客がやって来たのか、わずかに外の光りを取り入れて再び閉まる出入り口。

煙の向こう、店内を見渡すその姿に滝岡は目を瞠った。

「……」

思わず腰を浮かせ、凝視してしまう。

そんなリーダーの様子に、他の連中も気付き、視線の先を追う。

そして同じように目を見開き、立ち上がった。

今の今まで、散々に言い合っていた話題の人物の登場に、だが彼らは言葉が出なかった。

紫煙を通して映る彼の姿は、どこか恐ろしい雰囲気醸し出している。

「……六条」

滝岡が呟く。

「手の中のフィルムを拳に握りこむ。

「……」  
視線が重なり、変わる気配。

「……」

静かな足取りで彼らに近付いてくる中流の、その顔に表情はない。  
何しに来た、とも。

見つけた、とも。

互いに言うべき言葉はありながら、その必要性など有り得ず。

間近に寄った、その瞳。

刹那、繰り出した中流の拳は、容赦なく滝岡の顔を殴りつけた。

ガタンツ…激しい音がして、滝岡の体は背後にあった椅子もろともフロアに崩れ落ちた。

「デメエ…っ」

「いきなり何しやがる！」

即座に怒鳴りだすのは、滝岡の仲間達ではなく、周りの、まったく無関係な若者達。

「…新顔が、いきなりこんな真似して無事に帰れると思ってんのか……？」

凄んでくる長身の男に、だが中流は応えない。

視線はフロアに起き上がった滝岡から外すことなく、もはや、他の面子になど用はなかった。

「六条だ…」

「なんでコイツがここに…」

先刻まで好き勝手なことを言っていた彼らも、まだ呼び出してもいない六条中流が実際に目の前に現れたことに動揺を隠せず、それは滝岡も同じだった。

だが、中流の険しい表情、その瞳に宿る激しい感情の揺れに、彼らは察した。

中流は既に知っている。

自分の恋人がどんな目に遭ったかを。

「…どうして殴られたか、当然、判ってるだろ…？」

そして中流もまた、彼らの内心を正しく知りながら低く言い放った。

視線は一点、滝岡だけを見据えて。

「…」

「立てよ」

フロアに体は起こしても、立ち上がるうとはしない少年に中流は

告げる。

「立て。おまえ達が尋人にしてきた仕打ちは、こんな一発で済むもんじゃないだろ！」

「……っ……」

店内全域に響き渡る怒声に、その場の誰もが息を飲む。

こんな場所には似つかわしくない少年が一人、よりによってこの店に現れ、常連の客を殴り飛ばした。

それは、奇妙な連帯感で結ばれた同じ常連客達の感情を刺激し、数十人の猛者が中流一人の敵に回って当然の行為だった。

だが、今この場に動ける者はない。

滝岡に向かって怒声を上げる中流に、誰一人、横から口を挟むことは出来なかった。

「……」

その中に、わずか数人。

口元に薄い笑みを浮かべる者達がいたが、彼らもまた、今は行動を起こす素振りは見せない。

「立てよ滝岡！！」

「……っ……」

再度の怒りに、弾かれるように立ち上がった滝岡は相手に拳を繰り出す。

一発。

それは中流の顔を打ち、痛みを誘発し。

だが膝をつかせるには至らずに。

「……こんなじゃ、一生掛かったって尋人には勝てなかったな」  
これだけなら。

殴る、蹴る、そんな身体的に傷を残す暴力だけなら。

「あいつは絶対に負けなかったんだ……っ……っ！」

「……」

二つ目の拳を叩き払い、間を詰め、左横から振り上げる反動を生かした強烈な一撃。

「滝岡！！」

「！？」

周囲のテーブルや椅子を巻き込み、激しい音を立てて床に叩き付けられた滝岡は、低い呻きを上げて壊れた椅子の欠片に埋もれる。

「…っ…っく…あ」

「…っくしょお…」

「テメエ…っ！！」

益田と、その隣の少年の目付きが変わる。

「六条！ それ以上手え出したらこの写真ばら撒くぞ！！」

先ほどまで滝岡の足元にあった鞆の中を漁り、取り出した数枚の写真。

「いいのか！ ここでこんなモン撒かれたらテメエら一生笑いモンだぜ！！」

「…」

その写真に関して、中流は何も知らないし聞いてもない。だが写っている内容が自分と尋人の関係を示すものだろうという確信はあった。

だが中流の返答は。

「…好きにしろよ」

本心から、何が写っているようにも好きにされて構わなかった。

そんなもので、誰に笑われたって。

尋人が受けた傷に比べれば全然浅い。

彼を失った悲しみに比べれば、…むしろ二人が恋人だった証を持てるなら、こんな救われることはない。

「ばら撒きたきゃばら撒けばいい！ そんなもので俺が…っ…尋人が…！！ おまえらに屈したりなんか絶対にしない！！」

「…っ」

「くそ…っ！！」

一人の少年が中流の懐に攻め入り。

「ざけんな…だったら倉橋のビデオも売られていいのかよ！」

益田が、それが入った鞆を抱えながら声を張り上げた。

「あいつが廻えされてる映像ばら撒かれてもいいってか!? それでも平気だったのか!!」

「…っ」

掛かってきた少年を返り討ちにし、二人目に備えていた中流は、益田の発言に目を見開く。

「ふざけるな、は俺の台詞だ…どこまで腐ってんだ、おまえらは…っ!」

「黙れ!」

益田は叫び、滝岡を一瞥する。

「なあ滝岡、六条に泣いて謝らせた奴には幾らぐらい賞金やる?」

「…」

「百万プラスその賞金額…、最初はこれくらい持って来て貰おうぜ、六条の坊ちゃんにさ」

世界に認められた写真家の息子で。

六条出流の弟で。

あんな家に住む、あの大樹総合病院の親戚。

六条中流は金のなる木。

彼らの狙いは尋人が自分達に逆らえないようにすること。

中流から大金を搾り取ること。

それが本当の狙い。

「災難だよなあ、六条センパイ。あんな奴と仲良くなったばかりに俺らに金払わなきゃならないんだぜ?」

「…っ」

「ってーかさ、これも一つの商売じゃん。あいつは俺らのモンなんだから、貸して欲しかったらレンタル料払ってよ」

「っ…、そ、そうだよな…、このビデオは今まで無断でアイツ使ってた分のツケだ…全部返し切ったらセンパイにやるさ」

「…いいな、それ」

「ははっ…だったら、そのビデオの定価って幾らだよ」

嘲笑が漣のように店内に広がっていく。

「これはその最初のゲームだ。この店の全員が参加しての勝ち抜きバトル…、センパイを負かした奴には希望通りの賞金をやるよ。逆にもしセンパイが勝ったら…ご褒美にこのビデオの鑑賞会でも始めようぜ」

「…」

「へえ…?」

「面白そうじゃん」

滝岡を主格とするグループだけでなく、店内の、まったく無関係であるはずの若者達にも広がる失笑。

おおよそで百対一人の勝ち抜き戦。

ある者は骨を鳴らし、ある者は上着を脱ぐ。

獲物を見定め、翔るような何十もの視線。

「…っ…」

嘲笑と、罵倒と。

「おまえら…尋人にもそんな言い方で脅しかけたのか…っ?」  
脅して、辱めて。

逃げ道がないほど追い込んで。

「そうやって…っ!」

そうやって。

自由、想い、時間、願い。

尋人が大切にしていたもの全てを奪い取り未来を閉ざした。

その結果、誰にどれだけ迷惑を掛けるか。

…中流に、どれほどの負担が掛かるか尋人は判っていたから。

「だからあいつは死ぬしかなかったのか…っ!?」

「…」

「…何だっ…?」

激情に突き動かされるように口をついて出た言葉は、一瞬にして連中の顔から笑みを消し去った。

「…んだよ、それ」



「死ぬって…なに、あいつ…」

「…っ…」

冗談を言うような口調で少年達は口々に言う。

それは途切れた言葉。

信じないけれど。

信じたくないけれど、まさかと疑わずにはいられない。

「は…ははっ、あいつが…死んだって…?」

「冗談だろ、おい…んなバカな…」

「…っ…」

死んだ、なんて。

間違っても言われなくなかった。

尋人は生きている。

自ら投げ出そうとした命は辛うじてこの世に留まり、時間が経てば今まで通りの生活に戻るだろう。ただそこに、この二年間の記憶がないだけで。

そこに、中流の存在が有り得ないだけで。

「何とか言えよ！ アイツが…倉橋が死んだって…そんなワケ…っ」

そんなワケがないと、青い顔をするくらいなら。

「嘘だろ…っ?」

信じたくないと思うなら、最初から手を出さずにいればよかったものを　っ！

「…なんで…そんなワケないと思うんだよ…おまえら、自分達が尋人に何をしたか判ってるのか…っ?」

あんなに傷付けて、泣かせて、心にまで深い傷を刻んだ。

取り返しのつかないことを尋人に課しておきながら、それで、尋人が死んだかもしれないと疑って顔色を変えるのか。

「ふざけるな…っ、信じたくないと思うなら何であいつ自殺に追い込むような真似したんだ…っ!」

死なれては困ると言いたげな、まるで自分達が被害者になったような顔つきの少年達に、中流は叫んだ。

決して口にしたくなかった言葉。

自分がそれを声にしてしまえば現実として認めないわけにはいかなくなる、だから言いたくなかったのに。

「なんで……っ!!」

たった一人、暗闇に堕ちた君。

もう二度と中流の傍には帰れない。

二度と微笑えない、それが最後、彼は自らその命を絶とうとした。

辛うじて死は免れたけれど、その心はこの二年間を失い、昨日までの尋人は失われた。

中流は尋人を　　ずっと傍にいたいと願った、ただ一人の恋人を失った。

中流の尋人は、死んでしまったんだ。

「…ツくしよう……!!」

脇に転がったテールブルに拳を叩きつけ、その痛みを感じることもなく中流は声を張り上げた。

「返せよ……っ…死なれて困ると思うなら今すぐあいつを返せ!!」

「…!!」

「…っ……」

「返しやがれ……っ!!!!!!」

尋人の“死”を否定しない中流に、一人、また一人と少年達の顔色が変わる。

あの少年が死んだと言われれば思いつく理由などただ一つ、それを彼らは知っている。

知っていても、実際に何か起きなければ自覚することも出来なかった。

「…う…そだ…」

震える声音。

脱力し、膝から崩れ落ちる者。

益田は手にしていた写真を足元に散らばせ、手元のビデオに対する握力は弱まる。

今までの嘲笑も乱闘間際の緊張の糸も絶たれ、動揺と困惑が沈黙の中に潜む。

だが不意に、こんな連中の前で泣くものかと耐えていた中流の耳に届いたのは低い笑い声だった。

「……つくつくつく」

それはここを訪れてから絶えず聞こえていた嘲笑や失笑の類ではない。

心底、愉快そうな少年の笑い声。

「……」

「はっ……はは……はははは」

声のする方を見やると、先ほどの衝撃で転倒した椅子やテーブルに挟まれて、フロアに座り込んで俯く滝岡がいた。

その肩を震わせ、口元には明らかな笑みを湛えて滝岡は言い放つ。

「バカみてえ……死ぬンならもつと早く死んじまえば良かったんだ」

「！ おまえ……っ」

「とつとと俺の前から消えてりや、こんな面倒な真似しないで済んだんだ。人の視界でちよろちよろ動き回ってうぜえったら……これでせいせいしたぜ」

「滝岡っ！」

あまりの発言に、無意識に動いていた中流は滝岡の胸倉に掴みかかった。

だが同時。

「目障りなんだよ！！ アイツもテメエも！！」

手を叩き払われ、放たれる怒り。

「生きてたけりや俺の言うことだけ聞いてれば良かったんだっ、従順な犬になつてりや可愛がってやったさ！」

「おまえ尋人を何だと……っ」

「アイツは俺のモノだ！！」

「……」

「アイツをどうしようとか俺の勝手なんだ、あいつは俺のモノなんだ

よ！！ それをテメエが勝手に手え出して連れ回しやがって！」

「なっ……」

「ヒロトが死んだ？ 返せだ？ ハッ、くだらねえこと言ってるなよ、テメエが俺からアイツ奪うから悪いんだろ！？」

「」

「オマエが手え出すからアイツは死んだんだよ、オマエがアイツを殺したんだ！！」

「……っ！！」

中流が尋人を殺した、と。

それはあまりにも曲解し過ぎた滝岡の主張。

まるで己の罪から逃げる為に、中流こそが悪なのだと思います、我武者羅に叫んでいるかのごとく。

だがそれが事実ではないことに中流は気付いた。

自分に向けられる滝岡の憎悪の眼差しが、彼の本心を中流に悟らせてしまった。

中流が尋人に手を出したから、尋人は死んだのだと滝岡は言った。

中流が、尋人から告げられた想いに応えたのが始まり。

そうして芽生えた想いは愛情へと形を変え、その全てを欲した。

大切すぎて行動という形では応えられなかったけれど、その気持ちちは互いの中でしたっかりと通じ合い、中流は尋人を。

尋人は中流を、たった一人の恋人だと信じた。

その信じあつた想いが尋人を殺したと言つのなら。

そんな二人の絆が、滝岡にこのような手段を選ばせてしまったと言つのなら。

……それを憎んだ滝岡の本心は何だ。

導かれる答えなど、たった一つ。

「……っ……おまえ……尋人のこと……」

「！ 違うっ！」

中流が言わんとしている言葉を本能で察したのか、滝岡は遮るように声を張り上げる。

「ざけんなつ、俺はテメエ等とは違うつ、俺は違うつ！！」

「滝岡」

「俺をテメエ等みたいな変態と一緒にすんな！！俺はフツーだ！！」

「…っ」

「うざかったただけだ…っ…ム力つくんだ…、テメエなんか笑いやがって…っ…俺の言う事だけ聞いてりゃよかったのに…っ！」

自分は“普通”だと叫ぶ。

中流のように男同士で恋人になるような変態と一緒にするなど言い放ちながら、自分から離れていこうとした尋人への本音。

自分の傍にいればよかったんだ。

他の誰も見ずに、おまえの中に、他の誰も住まわせたりしなければ！

「…ンだよ、それ…っ」

自分は普通だと喚きながら、その声音に渦巻く滝岡の本音。その本性はどこにある。

おまえの何を望んでいた…？

「…“普通”って何だよ…」

「なに…？」

「…“変態”とか“普通”とか…そんなの誰が決めるんだよ…」  
善悪、正誤、光りと闇。

それは選ぶ人数によって決まるのか。

「好きな奴を傷つけて泣かせて、…っ…他人にやらせて殺すのが

“普通”か…？」

「…っ」

「好きな奴、抱き締めて守ってやりたいと思うのが“異常”なのか…？」

胸倉を掴み、持ち上げるように立ち上がらせながら、中流は押し殺した声で問いかける。

「好きなら…好きな奴なら幸せでいて欲しいと思うのが普通だろ

……っ？」

それが自分の傍でこそ幸せだと言って貰えるなら、いつまでも傍にいてやりたいと思うのが普通じゃないのか。

「好きな相手なら生きてて欲しいと思うのが本当じゃないのかよ…

…っ！！」

「……っ……！！」

尋人。

君に笑顔でいて欲しくて。

幸せだと、言っただけで。

守りたかった。

傍にいたかった。

ずっと一緒にいたかった、それが異常だと言うのならそれでいい。君と幸せになれるならそれでいい、中流はそれが“普通”に考えられた。

だって、祝福してくれるだろう人達が大勢いるから。

それを喜んでくれる人達が一番近い場所にいるから。

…だから中流にはそれが“普通”だったけれど。

「…なんで……っ」

けれど滝岡には違った。

世間一般の常識に親族の“普通”は通用しないという従姉の言葉が脳裏に蘇り、それを頭では理解していたけれど。

…けれど。

「好きなら泣かすなよ……っ」

あんなふうに、傷つけて。

未来を奪って。

「…なんでだよ……っ！！」

胸倉を掴んだ拳が震える。

その親指に、不意に零れ落ちた熱い雫。

「………滝岡あ……っ！！」

「……っ……う……っ……」

自分の涙かと思ったそれは、相手の涙。  
掴まれた胸倉を解こうとする抵抗も皆無の状態で、声もなく、歪んだ頬に涙の跡。

こんなこと、認めたくなんかなかった。  
理解したくなかった。

けれど、…この場で誰よりも…、中流よりも傷ついているのは、  
もしかすると。

「ふざけんな…っ」

不意に、様々な感情の入り乱れた　おそらくは恐怖さえも含んだ少年の声上がり、中流は何事かとそちらを振り返った。

中流と滝岡に正面を向いて立っていたのは、今まで滝岡の隣で好き放題して来ていただろっ益田。

その手には鋭利な刃物が握られ、その切っ先が狙うのは、果たしてどちらか。

「益田…何の真似だ…」

既に何かを口にする意欲さえ皆無であろう滝岡に代わって問いかけた中流に、益田は怒鳴る。

「うるせえっ！！」と顔を真っ赤にして言い放つ足元には数枚の写真と一本のビデオテープ。

「…ンなんだよ…っ…そんな理由でオレはオマエの共犯者になるのか…？」

「なに…？」

「…っ…そんなオレには関係ない理由でオレも人殺しの仲間かよ！！」

刃物を持つ両腕を小刻みに震わせて、大声を上げ相手を威嚇するような態度を取るの、益田がどれだけ怯えているのか、その程度を如実に表すものだった。

「冗談じゃねえっ、オレは関係ない！」

「益田！」

「退ける！！！」

「うわっ」

「おい止せ!!」

「殺されたくないや退ける!!」

刃物を振り回し、店の出入り口までの道を作ろうとする益田から、店内にいた客は自ら道を開け、出口へ導く。

「オレは関係ねえ…っ…関係ねえっ! アイツが死んだってオレのせいじゃねえからなっ!!」

「益田!!」

一人で逃げるなど卑怯だ、そう口々に叫んで他の三人も後を追う。関係ないなんて身勝手な台詞が許されるはずがないと、中流は叫ぼうとした。

が、それより早く。

彼らの前方を遮ったのは長身の黒い影。

「邪魔だ!!」

興奮し、ここから逃げ出すことしか頭にない益田は、邪魔者への嫌悪と苛立ちに露にし、手の中の刃物を振り上げた。

「! 時河!!」

その影の主を中流は呼ぶ。

時河竜騎、その名を呼んで逃げろと訴えた。

だが彼は動かさず、そればかりか益田を迎え撃ち。

「!!」

一瞬の交錯、飛び散った鮮血。

「…逃がすか」

低い呟きと共に、益田の体は店内中央へと蹴り戻された。



「……そろそろ、終わりにしようか」

益田が店内に蹴り戻された後、店内を覆っていたどうにもならない沈黙を破るように響いた声は、中流のよく知る男のものだった。

途端に店内がざわめき、時河竜騎の後方から現れたその人は中央へと進み出る。

「…もういいだろう、中流」

「兄貴…」

自分とは似ていない。

けれど見慣れた容貌に、何故か中流の声は震えた。

「城島君に連絡をもらってね。おまえが店内の百人相手に一触即発の雰囲気だというから駆けつけたんだが…」

言いながら店内を見渡し、その場の誰もが迂闊に動けないでいると察して微かに笑む。

「ま…、あまり心配はいらなかったかな」

最後に、今まで中流に胸倉を掴まれ立たされていた　今は力なくフロアに座り込み、下を向いたままの滝岡を一瞥し、出流はその手を中流の背に置いた。

「さあ、帰ろう。もう充分だ」

「…」

掛けられた言葉に、中流はハツとして兄の顔を見上げた。

常日頃と変わらない、自身の思惑など欠片も見せない意味深な笑みを口元に湛えた出流は、ただ一つ、その視線を中流から外さなかつた。

「…っ」

…兄貴、滝岡の言った台詞をどこから聞いていた……？

そんな疑問が濃い不安と一緒に胸中に募る。

言葉の返らない中流の心境を、出流の方は正しく理解し、言葉を

繋ぐ。

「とにかく帰ろう。あの心配なら、ほら」

出流が示すのは先ほどまで益田が立ち尽くしていた場所だった。

そこに散らばっていた写真の全てを独自の方法で集めたのは、いつ店内に入ってきて来ていたのか、出流と同じ年齢の従兄、大樹裕明。

彼は写真を綺麗に重ねて手の上に乗せると、百人以上もの視線を浴びているにも拘らず、躊躇なくそれを発火させた。

「！」

「なっ……」

驚愕と動揺のざわめきの中、裕明の手の上では写真を燃す火柱が容赦ない熱を生む。

道具も何も持たずに炎を出し、また数秒で消失したそれに、だが本人は顔色一つ変えなかった。

「今、あいつ何した……？」

「どうやって火なんか起こして……」

誰の胸中にも恐ろしい想像が沸き起ころうとしていたが、それを遮るように次に起きたのは勢いある破壊音。

一本のビデオテープを裕明から渡され素手で叩き割った時河竜騎は、やはり眉一つ動かさずに手元から垂れ下がるフィルムの帯を無造作に丸めた。

終わり近くまで集め、本体と結合している部分をぎりぎりの所で引きちぎり、歪な球体として手に持つ。

「……おい」

それを、一声掛けて放った先には出流が。

だが彼がそれを受け止めることはない。

伸ばされた手が真っ直ぐに球体に向かったと同時に、それは発火し、瞬時に灰となり、煙となって消えてしまった。

「……!?」

「何だよ今の……っ!!」

四方八方から飛ぶ声の数々を、完全に他人事のように聞き流しな

がら、裕明が出流と中流の傍に歩み寄った。

「…さて、最後にもう一つ、この店内にいる客全員の、この一時間ほどの記憶も消させてもらおうか」

出流が言い、裕明が頷く。

「君達は何も見えていないし、聞いていない」

ぐるりと周囲を優しい眼差しで見渡しながら、裕明が言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「この店に六条中流は来なかったし、もちろん俺達三人も来るはずがない。この夜、この店では何も起きていない。いつもと同じ、君達の君達らしい時間が過ぎただけだ」

言い終えるか否かの内に、店内に静かな風が吹きぬけた。

あれほどざわついていた店内は水を打ったように静まり返り、全員の視線が裕明に集中していた。

「…そして君達は、十二月二十六日から今日まで、倉橋尋人には何もしていない。彼は生きています。誰も死んでいない」

視線を、逃げようとしていた益田他三人に固定して告げる裕明の眼差しには侮蔑の感情。

「だが君達が、倉橋尋人は死んだという衝撃を忘れることは決して許さない。生涯その罪を背負え。その罪が君達を覆う限り“月の光り”は届かない」

月の光り、癒しの輝き。

それは彼ら“里界の月”を知る者達にとっての至福の形であり、それが届かないということは無限の闇を意味する。

つまり彼らの未来に幸せはないという暗示であり、能力を込めた言葉は彼らへのまじないだ。

まじないは呪いとなって彼らを“幸福”から遠ざける。

今後、彼らは決して“幸せ”にはなれないだろう。

もしも彼らが“幸せ”を掴める日が来るとすれば、それは尋人が彼らを許した時。

それ以外に、彼らの咎が清められることは有り得ない。

今、彼らが店中の若者達に　そして尋人を苦しめてきた彼らに施そうとしている術は、尋人を直接辱め、死に追いやった連中に施したものと同一の罰。

これが彼らにとつての。  
人としての。

…そして異郷に生まれた能力者としての、せめてもの復讐だ。

彼らが命を捧げたところで、尋人の心に抉られた傷が癒えることは無い。

過去の取り返しがつかないなら、その罰は未来にしかあり得ない。ならば生きて、生涯、光りの射さない路を行くがいい。

そうしていつか思い知る。

自らが奪った他人の幸せ、命の重み。

罪の深さ。

自分のしたことが、どれほど卑劣で残酷なことだったのか。

その所業がどれだけの人間を苦しめたのか。

「……そしてそれは、当然、君も同じだ」

そうして最後に見やるのは中流の傍で座り込んでいる滝岡の姿。

店内の誰の視線も裕明に集中する中で、滝岡だけは俯いたまま、術の中に囚われてはいなかった。

「ただ一つ違うのは、…君だけは今ここで起きた全てを記憶したまま、今になって自覚したその想いを背負って生きるといい」

ピクリと動く、その肩。

「今後、どう生きるかは全て君自身の選択に任せるよ。自分がどんなに愚かしい真似をしたのかは自覚出来たはずだ。わざわざ俺達が罰を下すまでもなくね」

出流は告げ、手をかざす。

「苦しむといい。その命尽きるまで」

単調な、容赦ない台詞を突きつけて、出流は裕明と視線を合わせる。

と、今度は強く吹き抜ける風。

店内の全員が、呼吸をしているかすら怪しい静寂。

「…さあ行くよ。俺達はここにいないという暗示を掛けたんだ、長居は無用だよ」

「時河君、腕は？」

裕明が出口に向かいながら問いかけると、竜騎は小さく首を振る。

「…大したことない」

単調に返すのとは対象的に、患部を圧迫している右手指の隙間から滴る出血は続く。

「…帰ったら、すぐに裕幸に診せるんだね」

自分が言ったところで素直に従うはずのないことを知っている裕明は、そんな言葉で竜騎を気遣った。

「…」

中流は、そんな遣り取りをする二人の後方から兄に促されるように出口に向かう。

振り返ると、床に投げ出された滝岡の四肢。

その片手が拳を握り、震えているのが分かった。

「……っ」

ひどく不快な感覚が全身を巡る。

苛立ち、憎悪、慟哭、…羨望…？

「なんで……っ」

中流の掠れた呟きに、しかし出流は何も応えなかった。

外に出ると同時、冬の冷たく澄んだ空気に包まれ、強い痺れのような悪寒が走る。

「おお、無事だったか」と、親しげに話し掛けてきたのは、今まで滝岡たちを見張っていた城島という男。

「ほんと、おまえらって謎が多いよなあ」

そんな軽口を叩き、竜騎や出流と二、三の言葉を交わして店内に入ってしまった彼はそれきり姿を見せることはなく。

「車を回すよ」

そう告げて離れていった裕明が戻るにはまだ早い。

竜騎と、出流の傍で。

中流の竊立ちが増す。

「…なんなんだよ、これ…」

「…」

無意識に漏れた呟きに、だが二人は応えない。

「なんで…っ…俺…なんでこんなところにいるんだ…っ？ 何にも意味なんかなかったのに…っ…結局…結局、全部が俺のせいだったのに…！」

気付かなかった滝岡の本音。

隠された言葉。

それを知ったら殴れるわけがなくて。

殴ったからといって恋人が戻るわけでもなくて。

暴露されて困るものは兄達が完全に抹消し、連中の記憶も感情も、罰すら、自分に未知の異郷の能力に頼りきり。

胸の憤りは増すばかり。

何一つ、自分の力では出来なくて。

自分に出来ることも何一つなくて。

…知り得たのは、たった一つ、己の罪。

自分がここに居る理由は、それを知るためだったのか…？

「俺の…自分のせいだったんだ…っ…俺が何も解ってなかったから尋人を泣かせたんだ…俺がちゃんと解ってたら…あいつ、きつと泣かずに済んだのに…」

解っていたら。

気付いていたら。

…尋人の想いを受け止めたりしなければ、きつと尋人は今も生きていられた。

「俺がバカみたいにあいつの傍にいたが…っ…尋人が好きだ…っ…自分のことしか考えてなかったから…っ…！」

俺の傍で、幸せだって、微笑っていてくれ……

自分の都合ばかり押し付けて。

尋人の傍にいたくて。

傍にいて欲しくて。

周りの目なんか気にも留めずに、滝岡が尋人を傷つける、その意図を考えようとしなかった。

だから滝岡はこんな行動を。

尋人を、取り返したくて。

「俺が殺した……っ」

「中流」

「俺が尋人を殺したんじゃないか……っ!!」

中流が叫んだ刹那、その頬に鋭い痛みが走った。  
肌を打つ音が響く。

足元の雪に赤い斑点。

竜騎の険しい眼差しが、中流を射抜いた。

「……これが、おまえの罪なら、あいつは死ななかった」

「」

「どうしてあいつが自分を殺したのか考えろ」

「……っ」

「どうしておまえのことだけを忘れたのか考えてみる!」

「……っ……」

初めて聞く竜騎の怒声に、中流は齒を食いしばった。

何故、尋人が自殺したのか、なんて。

どうして中流のことだけを忘れたのか、なんて。

そんなこと。

………そんな、こと。

「中流」

不意に、胸に押し付けられた茶封筒。

こんなものをどこから取り出したのか、出流は静かな口調で続けた。

「……いい笑顔だよ」

「……」

短い一言は、だが中流の胸を打つ。

取り出して見たそれは最後の写真。

あの朝、あの部屋で。

中流が撮った、尋人の最後の笑顔。

「……っ……！」

父親と同じ。

父親を越えた、写真家になる夢。

言葉を持たない画に言葉を。

心を。

想いを感じられる一枚を。

「尋人……っ」

……僕も、先輩が大好きです……

……聴こえる、君の言葉。

君の想い。

……僕 もう微笑えません……

……貴方の隣には帰れません……

微笑えないから、帰れない。

帰れないから消してしまった。

消してしまわなければ、きっと帰りたくなるから

「尋人……っ……尋人……！」

幾ら呼んでも戻らないと解っていて。



それでも呼ばずにいられなかった。  
たった一人、欲した君。

二度と逢えない、君の名前。

## 二度目の楽園 結

「貴方を忘れなければ生きられなかった尋人君を、どうか許してあげて下さい……」

あの夜、裕幸はそう語った。

敷明小路の店から大樹家に戻った中流の姿を見て、あの従弟は何を察したのか。

悪いのは自分なのだと、思い掛けない告白をしてきた。

尋人が記憶を失くしたのは自分のせい。

裕幸が “ 里界の月 ” がそれを願ったせいなのだ……。

「どういう意味だよ、それ……」

「……彼を、助けたかったんです」

どうしても尋人を死なせたくなかった。

その気持ちを生きる方向に導きたかった、だから裕幸は願った。

尋人の傷が癒えるように。

その命が戻るように。

尋人自身が生きようと思えることを。

だが目覚めた尋人は中流と出逢ってから時間を失っていた。

生きようとする意志を取り戻すのと引き換えに、中流への想いを消去させていた。

これが裕幸が願った結果なら答えは一つ。

彼が生きようと思うには、中流への想いが何より大きな障害だったのだ。

「……汚れた自分を、……自分を守ってくれていた貴方に知られたいなかつた、見られなくなかつた、……触れさせなくなかつたんだと思います」

「俺は……、俺は、尋人が俺と一緒にいたいと思ってくれてい

たら…それで…」

「ええ。…きつと貴方が本心からそう言ってくれと解っていたから…、貴方が何を犠牲にしても自分を想ってくれと信じていたから…尚更、貴方の傍にはいられなかつたんです」

「なんで…っ」

悲痛な聞き返しに、裕幸は瞳を伏せる。

微かに歪んだ表情には幾重もの想い。

「……“白夜”はいつか“黒天獅”のものになります」

「え…？」

「そうなったら、…俺は竜騎のことを忘れたいと願います……」

「裕幸……」

「心の中に彼がいたら、…彼が自分を想ってくれていることを知っているから…信じられるからこそ辛くて…。彼を、裏切った自分の巻き添えになんかしたくないと…、しちやいけないと、判つていても……」

心に彼が在ては、傍に帰りたくなるから。

だから、こつこつという結末を選んだ尋人の気持ちが解る気がするのだと裕幸は語った。

この結末こそが、尋人の、中流への想いの証だと。

…貴方を忘れなければ生きられなかつた尋人君を、どうか許してあげて下さい…

その言葉が繰り返し耳を打つ。

あの夜から、尋人の面影に重なって幾度となく繰り返される。

これが尋人の、中流への想いの証。

ならば自分はどうするべきなのか。

おまえに、どう応えてやればいい……？

忘れたことが、尋人の想い。

誰より中流を信じ、想った証。

… だったら。

俺に出来ることなんか、たった一つしかないじゃないか……。

「ありがとうございます」

どこか恐々と頭を下げる倉橋尋人に、中流は微苦笑で応える。

「あんま気にするなよ、俺がおまえを見つけたのは偶然なんだから  
さ」

陽気な物言いで返すが、それでも尋人は「はい…」と恐縮そうだ。

そんな少年を見て、中流は再度、口を開く。

「親戚が医者だしさ、事故って死にそうになってる奴を放つてはお  
けないだろ？ それも同じ学園の後輩じゃ、何かあつたら寝覚め悪  
いし。俺がおまえをみつけたのは、たまたま。おまえがこの病院に  
担ぎ込まれて助かったのは、おまえの幸運。それだけだ」

「…はい」

「まあ…記憶のこととか、いろいろ大変かもしれないけどさ。転校  
先で、また新しい思い出を作れるよ」

「…そう、ですよね」

困惑気味に。

それでも口元に微かな笑みを浮かべて応える尋人は、中流の言葉を  
素直に受け入れるようだった。

「…」

そんな尋人の姿に、中流の胸は軋んだ。

どんな嘘も、他人のフリで告げねばならないから、作られた表情を見抜かれないか不安になる。

あの日以降、尋人の両親や医師達、この一件に関わった連中の記憶操作を施した面々も加わって話し合った末、事故に遭う以前に母親の実家がある地方の中学校への転入が決まっており、転校しなくてはならなかった尋人は両親との口論から外に飛び出して走行中の車と衝突した。という経緯が本人に伝えられる事になった。

脳挫傷という重症に陥ったが、たまたまそこを通りかかった六条中流が、駆けつけた救急隊員に大樹総合病院へ行くよう指示し、彼から伯父・大樹医師への連絡で集まっていたスタッフが素早い対応をで手術を行い、結果、尋人は助かった。これが、記憶のない尋人に家族や医者話し聞かせた、事故以前の出来事だ。

この二年間の、中流との時間やいじめられていた記憶は失われても、家族や学校のことなど、日常生活に支障を来たす内容までも失ったわけではなかったから、彼は親の言葉を受け入れた。記憶は頭を打ったショックで一時的に失っただけ。

何かきつかけばあれば戻る可能性は多いにあるでしょうという医者言葉も、不安はあっても信じることにしたのだ。

尋人が生きていく限り、その記憶が永遠に戻らないことを知るの  
は、中流を含むほんの一握りの身内だけ。

…それで、充分だ。

中流は今日限りで尋人を手放す。

傍にはいられないと言いつ残した、それが尋人の最後の言葉なら、  
これ以上は苦しめたくなどないから。

「……」

だから、これが最後。

「退院ももうすぐだし、冬休みの間に引越しじゃ学校で会うことも  
ないな」

「…だと、思います」

「ん。新しい学校でも元気でやれよ」

「はい」

「……」

これが最後。

もう会わない。

もう、呼ばないから。

望まないから。

「……尋人」

だから最後に、一度だけ。

「え……？　　！　　せ、六条先輩？」

「……」

急に抱きしめられて、尋人は驚きに目を丸くする。

だが中流は、これで最後だと自身に言い聞かせ、その腕に力を込めた。

このままで言わせて。

たった一つ、告げさせて。

「……幸せに、なれ」

「……？」

「絶対、幸せになれよ」

「先輩……」

「……どこに行っても、おまえらしく微笑っている」

それだけでいいから。

君が微笑っていてくれるなら。

幸せになってくれるなら。

それが何処でだって。

誰とだって構わないから。

尋人。

どうか幸せに。

一度は死を選び、この二年間を失って帰ってきた君の明日が、消えた日々の繰り返しにならないように。

君にとっての二度目の日々に、優しい光りが溢れるように。

「…な？」

尋人。

尋人。

尋人。

尋人。

ずっと願っている。

祈っている。

たった一つ、君の笑顔が守られることを。

「……はい」

少なからず動揺した様子で、…けれど尋人は微笑した。

「本当に、ありがとうございます」

これが最後の、別れの挨拶。

中流も笑顔を作り、

「…元気だな」

その言葉を最後に、病室を出た。

「…」

閉じた扉に寄りかかり、一つ、息を吐く。

と、誰かの視線を感じて顔を上げると、そこには尋人の母親が佇

んでいた。

彼女は何も言わずに、ただ深く頭を下げた。

ありがとう。

ありがとう。

尋人を愛してくれて、ありがとう。

ありがとう、なんて。

そんな言葉が欲しくて一緒にいることを願ったんじゃない。

願ったのは、ただ一つ。

尋人、君の笑顔だけ。

尋人、君の笑顔だけ。

尋人、君の幸せだけなんだ。

「じ苦勞さん」

病院を出ようとした途中で背中を叩かれ、見上げた先には兄の笑顔。

「！ 兄貴、なんで…」

「何でも何もないのよ、さあつ、今夜は尋人君の新しい門出を祝つて焼肉パーティしましょー！！ お姉ちゃん達やアキ兄も一緒、費用はもちろん、全額出流持ちね！」

「汨歌!？」

その背後から顔を出し、中流の腕に自分の腕を絡めながらそんなことを言うのは同じ年齢の従姉、江藤汨歌だ。

しかも彼女のもう一方の腕に掴まれ、中流に苦笑めいた笑みを浮かべているのは裕幸。

「おまえら、何で…」

「ん？ もし中流が失恋の痛手で泣いていたら俺達で優しく慰めてやるうと思つたんだよ。美しい兄弟愛だ」

「はあ？」

意味深な笑みを浮かべて告げる出流に、中流は眉根を寄せて聞き返す。

と、同時に飛んでくるのは汨歌の掌。

ペシッと顔面を叩かれて、瞬時にカツとなった中流は、しかし、「アンタつてば最っ高にイイ男よ！」と突然の贅辞に言葉を詰まらせ、従姉を凝視した。

「…おまえ、何言つてんの？」

「うっさいわねっ、人が褒めてやってんだから素直に聞きなさい！」  
「褒めて、って…」



「アンタは自慢の弟なんだから幸せになれないはずないって言うてるの！ 私と出流の保証付きよ！！」

「言い放ち、「ほんと世話焼けるんだからっ」と零しながら、汨歌は中流から腕を放し、裕幸だけを連れて先へ急ぐ。

「さあ裕幸、せっかくの焼肉だもの、時河も誘っわよ」

「えっ、竜騎もですか？」

「当たり前でしょ！？ ものすっごく悔しいけど今回の時河は表彰ものよっ、このまま借り作ってるのすっごい悔しいじゃない！ 仕方ないから焼肉に誘ってやるわっ」

「…焼肉で借りを返すんですか」

「何か文句ある！？」

そんな、裕幸にまで険のある態度で接している理由は頼の赤みだろっか。

つまりは、何だ。

汨歌のあれは、彼女なりの姉弟愛。

「あのバカ女…」

中流の呟きに、出流が笑う。

「汨歌も汨歌なりに、おまえを元気付けようと必死なんだよ」

「…」

「おまえは自慢の弟で、大切な家族だから」

出流や汨歌だけじゃなく。

裕幸だけでもなくて。

「元気を出せ、とはまだ言わないけどね。時間ならいくら掛かっても構わないから立ち直りなさい。おまえを心配している人は大勢いるんだ」

「兄貴…」

「おまえは必ず幸せになれるよ」

中流が、尋人の幸せを祈るように。

君を愛する皆が、君の幸せを祈るから。

「早く来なさいよ中流も出流も！ おいていくわよ！..」

「おや、スポンサー無しにどこへ行くと言うのかな」

「だから早く来いって言うてるんでしょ！？」

泪歌と出流の言い合いに。

「中流さん」

裕幸の呼び声が重なる。

いま行く、と答え。

中流は背後に遠ざかる病院を振り返った。

これからは、遠ざかるのみの、君との距離。

けれどそれが、自分達の選択。

今はもう、祈るだけ。

「.....微笑っているよ、ずっと」

一度は死を選んだ君が、帰ってきたこの世界。

二度目の、これからの日々が、光り溢れるものとなるように

.....。

事故に遭ったショックで記憶を失くした倉橋尋人の転校と、滝岡の自主退学を関連付けて、中流達が闇に沈めた“真実”に近い噂も流れた二月。

「中流、おまえ最近、中等部行ってないみたいだけど、どうした？」

「は？」

尚也の問い掛けに、その場に集まっていた同級生達は冷めた目付きになり、中流は思わず苦笑する。

「尚也...それってマジボケ？ 例のヒロト君、こないだ転校したん

だぜ？」

「えっ」

「…あほ、浅見にばかりかまけてるから、そんな間抜けなコト聞くんだよ」

口々に言われて、半年ほど前の記憶を呼び起こした尚也は恐々と中流を見る。

「わ、悪い、俺…」

そんな尚也が可笑しくて、中流は声を立てて笑った。

「別にいいって、俺には尚也がいるからさ」

「」

中流の台詞に、尚也は絶句、周囲は失笑。

「なんだ、一緒になるのは生まれ変わったらじゃないのか？」

「そう思ってたんだけどさ…、そんなこと言ったら手遅れになりそうで」

「はははっ、尚也を巡っての三角関係かつ、応援するぞ六条！」

「俺も」

「…っ、ためえらい加減にしる！！！！」

怒鳴る尚也に、周りの笑い声は絶えない。

中流の表情からも笑みは消えない。

以前の何ら変わらない空間が、少しずつ中流の心を癒していく。

「？」

ふと、肩を叩いた同級生の手。

向けられた微かな笑み。

「野口」

「大丈夫か？」

周りには聞こえないよう気遣って掛けられた言葉に、中流は、…わずかに表情を歪めた。

「…平気だって。自分で選んだんだ」

尋人との関係を知られた、この同級生にも全てを話しているわけじゃない。

それでも、自分を気遣ってくれた野口に感謝した。

大丈夫。

立ち直れる。

自分は、ここに一人で在るわけではないから。

『六条先輩 お久しぶりです』

『突然 手紙を出してしまつて済みません』

『でもどうしても伝えたいことがあつて、母に頼んで、お世話になつた医師に六条先輩の住所を教えてくださいました』

時は流れて、春が来て。

榊学園に着任した時枝彬の登場によつて中流の周囲はいつそう騒がしくなつた。

『友達も出来ました』

『僕は元気です』

『でも時々、失くした記憶のことで不安になります』

『どうして僕は、二年間だけ忘れてしまつたのかな、つて』

郵便受けに、一通の手紙。

それは奇しくも時枝彬の本心を知つた日に届いた。

『だけど先輩の言葉を思い出すと、不思議なくらい不安がなくなり  
ます』

『幸せになれ、自分らしく微笑つてろ…、先輩のその言葉が僕を元  
気にしてくれます』

『先輩は、僕を助けてくれたのはたまたまだつて言つたけど』

『僕は、助けてくれたのが先輩で良かったつて思います』

だから伝えたかつた。

「……」  
ありがとうございます、その一言を。

心からの感謝の言葉で締めくくられた手紙を手に、中流は片腕に頭を埋めた。

ありがとうございます、なんて。

そんな一言のために、こんな手紙を。

「……」

こんな手紙で思い知らされる。

心は今もあの日のまま。

尋人、君を求めて止まないと。

ありがとうございます、なんて。

そんな言葉が欲しくて一緒にいるわけじゃない。

願ったわけでも。

祈ったわけでも。

…君から離れたわけでもない。

欲したのはただ一つ。

本当に求めていたのはそれだけ。

そのために手放した。

なのに、今でも心は叫ぶ。

決して言葉にしないと誓ったその名を ……。

了



冬の月 雪 舞い降りて (前書き)

「二度目の樂園」後の番外編。 尋人視点の短編です。

## 冬の月 雪 舞い降りて

それは、ひどく大切なもの。

大切なのに、不鮮明なもの。

事実、在った事なのかどうかすら曖昧で、それを表す言葉を、僕は知らない。

ただ大切に。

だけど遠くて。

温かいのに、名前が判らない“何か”。

どんなに悩んでも答えの出ない感情を燻らせながら、時折、夜空から降り注ぐ月の光りに思い出す姿がある。

……幸せになれ……

あの日、病院の一室で抱き締められ、告げられた。

幸せになれ。

おまえらしく微笑っている、そう言ってくれた人は、事故に遭った僕を見かけ、たまたま自分の親戚が医者だったから、そこに運んだのだと話してくれた。

両親から転校の話が聞かされ、反抗して家を飛び出し事故に遭ってしまったのだと、病院で目を覚ました僕に、両親も医師も同じ事を言う。

けれど、それが本当なら。

どうしてあの人は「幸せになれ」なんて言ったんだろう。

どうして僕は、その言葉が忘れられないんだろう。

あの人は、偶然、僕を助けてくれただけなのに。

こんなふうに、心の中にいつまでも残る。

胸に響く。



……僕を勇気付けてくれる言葉になるんだろう……？

「……六条先輩……」

深い闇色の広がる空に、穏やかに、そして強く輝く冬の月。

懐かしい土地の雪景色を思い出させる白銀の光りに、彼の人の名を呟く。

偶然、助けてくれた人。

新しい土地でも大丈夫、きっと幸せになれと送り出してくれた人。ただ、それだけの人なのに。

きつと、それだけのはずなのに。

なのに。

六条先輩、……貴方は、誰なんですか……

？

—

「ちよつと！ それはそつちじゃなくてこつち！」

「もおつ、手伝うならちゃんと確認して手伝ってよ！」

「うっせえな、文句言うなら俺ら帰るぞ！」

「邪魔されるくらいなら、いなくなってもらった方がいいかもねっ」

十二月上旬。

北風の吹きつける寒い外界とは裏腹に、暖房で充分に暖まった狭い館内で複数の男女の声が交錯する。

星和中等学校体育館。

今月二十日に、近所の子供達を招いて校内で催されるクリスマス・パーティーの準備を進めている彼らの手では、紙製の華や、輪をつなげた装飾物が長さを伸ばし、立ち作業の生徒達は看板作りに精を出す。

全校生徒数が百人にも満たない星和中学の校区では、都会で見るとようなイルミネーションも煌びやかな飾りつけもほとんどされず、冬は深い雪に覆われるのみ。

人口の半数が六十以上の年配者で、中学卒業後は地元の中小企業に就職、もしくは実家の仕事を継ぐというのが大半なこの土地で、せめてものクリスマス気分を味わおうと数年前から開催されるようになったのが、星和中学のクリスマス・パーティーだった。

近所の幼稚園児や小学生を招き、校舎全域を使ってゲームを行い、手作りの贈り物を手渡し、ミニ・コンサートを催す。

そのために今、こうして全校生徒が体育館に集まり、一丸となつて準備を進めている、……はずなのだが。

「また始まったよ、二年生」

「なんか最近、いっつもあの調子だよね」

「……」

溜息交じりに呟く三年の女生徒達の会話を横で聞きながら、倉橋尋人は辛そうな顔をした。

確かに、やり方は乱暴だが、二年の男子生徒達に手伝おうとする意欲はある。

女生徒達はせっかく作ったものを大切に扱ってもらいたいと思う、だから口調がキツくなり、そのキツさが男子生徒達の癪に障るのだろう。

どちらも準備をしようという気持ちはあるのに、本番が間近に迫っているのに準備が終わらないという現状に切羽詰っているのも一因だろう。

彼らだけでなく、体育館全体に、どこか張り詰めた雰囲気があった。

「……」

どうにかした方がいい。

口を出して反感を買ってしまうのは怖いけれど、このまま見過ごしたら絶対に後悔すると自らを奮い立たせ、尋人は立ち上がった。

「あ…あの、みんな、そんなに焦らなくても大丈夫だよ」  
不意の尋人の言葉に、一同の視線が向かい、所々で小さなざわめきが起こる。

瞬時に当人の内心には不安が募ったが、逃げてはいけないと、真つ直ぐに顔を上げた。

「まだ時間はあるんだし、みんながこうして頑張っているんだから、ちゃんと本番までには終わるよ」

「…っ、なにワケ判んねえこと言ってるんだよ！」  
即座に言い返され、思わず後退しそうになる。

その上。

「ダブリが偉そうな顔すんなっ！」

「<sup>ダブリ</sup>留年と言われ、息を呑む。」

と、直後に「いい加減にきなさいよ！」と割り込んできたのは、尋人の傍にいた三年の女子生徒だった。

「倉橋君が気を遣って励ましてくれてるっていうのに、あんたこそ何様のつもり!？」

「言っていいことと悪いことの区別もつかないの?」

三年の女子生徒が、暴言を吐いた二年の男子生徒に言い返す。

「あ…」

一年生はおろおろと端に逃げるようにして、上級生の言い争いが過ぎるのを待つしかない。

これで更に状況が悪化してしまったら、本当に準備が間に合わなくなってしまう。

どうにか止めなければと、尋人が再び口を開こうとした矢先。

「おいおい」と、暢気な声を上げたのは三年の男子生徒だった。

各学年一学級しかいないため、尋人の同級生であり、割と親しい友人でもある彼の名は菊地武人<sup>きくちたけと</sup>。

成績はともかく、陽気な性格は人当たりが良く、学年の代表的存在だ。

「そうやって市永達いちながまでカツカして二年に喧嘩吹っ掛けたら倉橋が注意した意味ねーじゃん」

「そうだけど…」

「だって倉橋君のこと…」

「倉橋はそんなの気にしねえって。な？」

聞かれて、それが先ほどの留年の話だと察し、尋人はすぐに頷いた。

「うん、全然気にしてないから…、だから、みんな、落ち着いて」  
早口に言くと、三年の女子生徒達は不承不承ながらも。

二年の男子は気まずそうに顔を背け、口を閉ざした。

「ってわけだから、とにかく準備進めようぜ？俺達のパーティー、地元のチビ共が楽しみにしてんだからさ」

「そうそう、口より先に手を動かせ」

「いま動かないヤツは本番でトナカイの役させるからな」

菊地が言い、他の三年男子達も口々に作業の再開を促した。

「…ほら、これが今日の作業内容のプリント。ちゃんと確認してよ」  
先ほどまで口調の荒かった二年の女子が、少なからず冷静に、静かに言ってプリントを差し出せば、苛立っていた少年は多少乱暴ながらもそれを受け取り、目を通す。

「倉橋君ごめんね、せっかく注意してくれたの無駄にするようなこととしちゃって…」

「ううん、そんなことないよ。それに僕の方こそ、氣遣ってくれてありがとう」

「」

ありがとう、と微笑い掛ける尋人に、少女達の顔が数秒固まる。

そうして次には小さく声を立てて笑い「倉橋君で、全然年上に見えるないよね」と呟いた。

それは決して馬鹿にしているわけではなく、彼女達なりの親愛の情。

同じ学級にいても全く違和感ない、君も大事な同級生の一人なの

だと。

外では雪が降り出し、冷気が肌を刺すようだったが、生徒達が集まる体育館には暖かな空気が戻りつつあった。

## 二

この春、星和中等学校に転校してきた尋人は、本来ならば高校受験を終え、合格した高等学校に進学するはずだった。

だが去年の冬に遭った事故で二年分の記憶を失ってしまい、家族のことや世間一般の常識的知識は無事でも、失った二年分の学力はほとんど残っていなかった。

その状態で高校受験は無理と判断した彼らは、医師の診断書も添えて星和中等学校に転入届を提出したのである。

各学年一学級しかない狭い土地の、小さな学校だ。

新顔の倉橋尋人の素性は一日と待たずに全生徒へ知れ渡り、だが同時に、田舎特有の大らかさが、そのままの尋人を受け入れたのだ。母親が生まれ育った町の、母親の母校でもある星和中学。

そこでの新しい生活は、尋人にとって、とても心地良いものだった。

「倉橋ってさ、結構、度胸あるよな」

すっかり暗くなってしまった学校からの帰り道、菊池に言われて尋人は目を丸くする。

「度胸……って、僕が？」

「ああ。いくらそう思ったからってさ、あんな大勢の前で、あれだけのこと言っつてのは結構な覚悟がいるじゃん？」

「……」

屈託のない笑顔で言われて、尋人は思わず照れてしまいそうだった。

「そんな…褒められるようなこと、していないよ」

いつもは数人で通る道を、今日は菊地と二人で帰っていた。クリスマスパーティーの準備にもそれぞれの分担というのがあり、この日はたまたま、二人が同じ頃にノルマを仕上げ、帰宅出来ることになったからだ。

「僕は…ただ、後悔したくないな…と思ったただだから」

「後悔？」

「ん…」

答え、一呼吸をおいて再び口を開く。

「菊地君も知っていることだけど、僕には二年間の記憶がなくて…」  
二年間の記憶がない　つまり、中学一年生の後半頃から記憶のない尋人にとって、自分はまだ二年生にもなっていない。

本来なら自分の方が年上であるにも関わらず、意識としては菊池達、三年の彼らの方が上級生に思えるのだ。

半年以上も同級生をしていれば慣れるものだが、それでも、自分の心は幼いまま。

同級生を呼び捨てることが、未だにどうしても出来なかった。

「二年間の記憶がなくても、家族の事とかはちゃんと覚えていたし、普通の生活に支障はないって言われたんだ。…実際、それで困ったことはないと思う…でも、困らなくても気になるんだ、失くした二年間を自分はどんな風に過ごしていたんだろうって」

「それって普通のことだろ？　俺なんか昨夜の晩飯だって何だったか思い出せなくて気になることあるぜ？」

「うん…」

菊地の例え話に苦笑して、ふと尋人の脳裏に蘇る“彼”の面影。

「…うん、そうだと思う…ただ、僕は…その二年間を…知ろうとしなかった…」

「は？」

「きつと、…たぶん、聞ける人がいたのに…確かめられなかったんだ」

「ふうん…まあ、俺なら人になんか聞かないで絶対に自分で思い出してやるって思うけどな」

おまえもそうだったんじゃないのかと問われて、肯定は出来なかった。

否定するのも違うような気がしたけれど、自分自身の力で思い出すと決意したこともない。

聞こうと思えば聞けたはずのことを、言葉にするのが躊躇われてそれは、どこか恐れるのにも似ていて。

“ありがとう”…助けてもらった感謝の気持ちを改めて告げると同時に過去を知れたらと、一度だけ手紙を送ったことがある。

だが結局は、何も聞けなかった。

「…その人に“知らない”って言われたら、どうしよう…って、そう思ったら、何も聞けなくて…：勇気を出せなかったこと、後悔しているんだ」

「……」

どこか遠くを見つめる眼差しで呟く尋人に、菊池はしばらく何事かを考えた後で、ふと口元を緩めた。

「ははあん、その相手ってもしかして、おまえのカノジョだったりすんの？」

「え……？」

カノジョ、と聞き慣れない言葉を漢字に変換し、理解するまで数十秒。

「！ちが……っ」

否定するその顔は途端に真っ赤に色づいた。

「違うよ！そんなわけないっ、その人は、偶然、僕を助けてくれた人で…っ」

偶然。

たまたま、事故に遭った自分を見かけて病院に運んでくれた人。

「偶然？ だったら知らないも何もないじゃん」

「そう…なんだけど……」

菊地の言つとおり、事故現場に居合わせ病院に運んでくれたのが偶然の出来事だったなら、知らないも何も無い。

無関係でしかない。

なのに、どうしても頭から離れない彼の言葉。

幸せになれ。

おまえらしく微笑っている、そう送り出してくれた人。

「……その人、ここに来る前に通っていた学校の先輩だったんだ」

「へえ？」

「病院で目が覚めて、運んでくれたのが先輩だって知るまで、話したこともなかった」

「なのに気になんの？」

「……どうしてだろ」

「さあ……それは俺に聞かれてもなあ」

苦笑交じりに返されて、「だよね……」と尋人も苦笑する。

自分でも判らないのだから、人に聞いて判るはずがない。

そもそも答えなど無いかもしれないのだ、本当に全てが偶然だったなら。

「……でもさ、どうしても気になるなら、本人に確かめてみりゃいいじゃん、今からでも遅くなんかないんだし」

「え……」

「前の学校の先輩ってことはさ、同じ道内だろ？ 週末にちよつと行って来るつって行けない距離じゃないんだし、ずっと悩んでるくらいなら、一度さ、ハッキリと聞いて確かめた方が楽になんじゃない？」

「……」

もう一度、あの人に会いに行く……思いもしなかった提案に、尋人はどう答えることも出来なかった。

そんな彼に何を思ったか、菊池はポツリと呟く。

「もし一人じゃ不安だったっーなら俺と一緒にいってやるしさ」

「え……？」



「だって見てみてえじゃん、倉橋がそんなふうに気にするカノジヨ」  
「かつ、彼女じゃないってば……」

「記憶ないなら、それこそ判んないじゃん、実は付き合ってた相手かもよ？ だから気になるとかさ」

「違うよ、絶対。だって六条先輩は男の人だよ？」

「男……？」

「そう、男の人」

変な勘違いしないでよと苦笑交じりに続ける尋人に、菊池は一瞬、息を呑み、

「ああ……そつか、男か。そりゃカノジヨじゃないよな」

あははは……と声を立てて笑った。

その笑い声に些細な変化があったことには気付かぬまま。

冬の月が浮かぶ闇色の空の下、二人は家路を歩いていった。

### 三

クリスマス・パーティ本番を明日に控えて、尋人は三年生の教室で数人の同級生と共に地元の子供達に贈るプレゼントの数の確認を行っていた。

「悪い、小学校の男の子と女の子の人数、もう一度教えて」

「えっと……男の子が一〇二人、女の子が八四人」

「幼稚園や保育園の人数は確認しなくていいの？」

「あ、念のため教えて」

頭上で交わされる女子生徒達の遣り取りを上の方で聞きながら、尋人は雪が舞い降りる窓の外に視線を固定したまま、手の動きを止めていた。

夕方四時を回り、既に暗くなった空。

舞い降りる雪景色。

北国に生まれ育った住人には、この季節になれば当然の光景なの

に、なぜ、ここまで目を奪われてしまうのか。  
雪降る夜空に、何か思い出でもあっただろうか……。

…どうしても気になるなら、本人に確かめてみりゃいいじ  
ゃん……

数日前の菊池の言葉が蘇る。

会いに行く……、もう一度、彼に……？

それを考えるたび、胸が締め付けられた。

会えるなら会いたいという気持ちと、会ってはいけないと、何か  
に警告されるような痛み。

確かめたいのに確かめられない、あの日の真実。

「あ！ ちょっと笹本、仕事もしないで雑誌なんか読んでないでよ

！！」

「っ……」

不意に女子生徒の怒声が飛び、自分が注意されたわけでもないの  
に、尋人は肩を震わせ我に返った。

後ろめたさから動悸が激しくなる心臓を落ち着かせようと試みな  
がら、何があつたのかと背後を振り返ると、一人の少女・市永可奈  
子が笹本と言う名の男子生徒から一冊の雑誌を奪い取るうとしてい  
るところだった。

「うわっ市永、許せ！ ほんの五分でいいから確認だけさせてくれ

！！」

「確認！？ どうせグラビアアイドルの懸賞当選発表か何かでしょ

！？」

「バカッ、俺の一生に関わる大事な発表だぞ！？」

「こんな雑誌に高校の合格発表でも載ってるっての！」

「進学なんかしねえよ、俺は家を継ぐんだからな！」

そう言えば笹本君の家が営む豆腐屋の木綿豆腐はとても美味しか  
ったなあと思いつきながら、少女が奪い取った雑誌のタイトルに目

を奪われた。

“月刊フォトグラフ”

著名な写真家の特集や、初心者への判り易い撮影アドバイス、また若い才能を開花させようと定期的に作品を公募している雑誌だ。

「…笹本君、写真家を目指しているの…？」

無意識に毀れ出た問い掛けに、言った尋人も驚いたが、言われた笹本も、周囲で聞いていた同級生達も目を丸くする。

「…笹本、そうなの？」

「おまえ写真家目指してんの！」

「っ…豆腐屋が写真撮っちゃ悪いかよ！　ってか倉橋、大きな声で言うなっ」

真っ赤になつて声を張り上げる笹本に「ご、ごめん…」と恐縮しながら、だが尋人は立ち上がり、少女に話し掛けた。

「市永さん…あの、確認だけでもさせてあげようよ…、笹本君の大事な夢なんだし…」

大事な夢　写真家。

心の奥底で何かが疼く。

尋人の真っ直ぐな眼差しに、市永可奈子は仕方ないと言いたげに雑誌を持ち主に返した。

「倉橋君に言われちゃ仕方ないわね。確認したら仕事再開してよ」

「へえ、おまえマジで写真家なるんだ」

「うっさい！」

からかわれて、怒鳴り返しながらも手は急いで新人賞発表のペーシを探す。

その様子に、教室にいる全員が注目している。

雑誌を奪い取ろうとしていた少女も同様で、誰もが笹本の結果を知りたくて集中していた。

…しばらくの沈黙。

「…うわっ……」

不意に発された低い呟きに、室内の緊迫した雰囲気が一瞬で消え

去った。

「くっそ、今回も二次予選止まりかよ〜」

「それでも二次予選まで通過したって凄いじゃん」

「…あ、それに周りの同じ予選通過者、みんな二十代とか三十代だあ」

「スゲエじゃん、十五で二次予選通過なんて」

大勢の同級生が、笹本の後ろから雑誌を覗き込み、励ます意味も兼ねて次々と声を発する。

そんな中で笹本本人は不服顔。

「スゲエもんかよ、本当に凄いのはコイツみたいな奴のこと言うんだっつーの」

そうして指差したのは、今回の新人賞に輝いた十代の少年だった。「こいつも毎回、予選通過者に名前が載ってた奴でさ、俺が勝手にライバルだと思い込んでただけだ…くっそ、やられたって感じだぜっ!」

「どれどれ、…あ、本当だ、私達と三っしか変わらないじゃない」

同じ道内の、十八歳の高校三年生。

その言葉に、少し離れた場所にいた尋人の心臓が大きく跳ねた。何故か、なんて解らない。

…解らないけれど、どうしてか判ってしまった。

「あれ?」

それを決定付けたのは、笹本のすぐ隣で雑誌を覗き込んでいた菊地だった。

「これ…六条つて…、もしかしてあの、有名な写真家の息子じゃん?」

「あ、おまえ今、親の七光りだとか思ってたろ!」

「違うのか?」

「つたりまえだ! 親の七光りだけで才能ない奴がこんな写真撮れるかよ!」

言って、笹本が広げたのは今回の入賞作が公開されたページだった

た。

カラーで、大きく印刷された一枚の写真。

そこにはある種の風が吹いていた。

山の峰からゆっくりと昇り行く朝日には熱が。

秋の彩り鮮やかな山には自然の息吹が。

たった一枚の画でしかないはずなのに、そこには命の輝きが溢れ、時間が流れていた。

「すげえ……」

「だろ！？ 去年までも、そりゃいい写真撮ってたけどここまでじゃなかったんだ！ だからライバルだと思ってたのにさあ……っ、しばらく名前見ないと思ったら今回復活して、いきなりコレだぜ！？ どこでどんな修行積んだっつーんだよ！」

心底悔しそうに告げる笹本の言葉の半分も尋人の耳には届かない。「批評つてどこ……、あ、ここか。『久々の応募で審査委員一同が驚いた。どのような経験を経たのか写真だけでなく画が持つ世界にも深みが増した。今後、どのような世界を広げていってくれるのか非常に楽しみである』……だって！」

「こつちには『寂しげで何かが足りないように感じられるが、同時にそれを必死に求める力強さが伝わる。今後の成長の中で、求めているものを見つけ出した時にどんな画を見せてくれるのか期待したい』ってさ」

「ね、この人、カツコイイの？」

「は？ 何で？」

「将来有望なカツコイイ写真家ならチェックしとこうかと思って」「ざけんな！」

不純な動機の女子生徒を一喝する笹本の隣で、しかし菊地は笑いながら、だつたら父親の六条至流の写真集を買えばいいと口を挟む。「こいつの親父さんてすごい写真家でさ、写真集も何冊も出してるんだけど、必ず最後に家族の写真を載せてるんだ」

「へえ」

「なに、おまえ詳しいじゃん」

「お袋が六条至流のファンで全部持つてるからさ。おれも何回か見たことあるし、どれがこの六条…なんだっけ、中流？ こいつかは判んねーけど、とりあえず美形揃いの一家だぜ」

それを、どこか呆れた口調で言う菊地に、件の女子生徒は乗り気だった。

「すごい写真家ってことは、しかもお金持ちだよな！ それはもうチエックしないわけにいかない！」

「私もチエックする！ この雑誌、本屋に売ってるの？」

「発売日は今月末だぞ。俺は応募して二次予選まで通過したっていうんで、特別賞でさつき家に届いたんだ」

「ああ、それでおまえ、昼休みに一度家に帰ったのか」

「そ。これが届いたらすぐ教えてくれって母親に頼んでおいたんだ」  
発表を見終わったら仕事を再開するという約束だったはずが、気付けば全員が雑誌の写真に惹きつけられ、それを撮り、受賞した撮影者・六条中流の話題で盛り上がっていた。

六条中流 “彼”の名前。

「……………」

「？ 倉橋く……倉橋君！？」

不意に女子生徒の一人が驚愕の声を上げ、皆の視線が一斉に尋人に注がれた。

「倉橋、どうしたんだよ！」

「倉橋君、なんかあったの？」

次々と掛けられる声に、尋人は何度も首を振る。

何でもない、大丈夫。

ただ、涙が止まらなかった。

#### 四

雪の降るクリスマス、十二月二十五日。

地元の子供達を招待して開催されたパーティを無事に終え、その片付けも終えて迎えた終業式。

明日から冬休みという、その日の帰り道。

尋人は数人の友人たちと下校していたが、家までの距離や方向もあり、最後には菊地と二人になっていた。

と、まるでそれを待っていたように、菊池が口を開く。

「…あのさ、前に話してた六条先輩ってさ……この間、笹本が話してた写真の、…六条中流のことなんだろう……？」

「…」

「そうじゃなかったら……それくらい気にしてる相手じゃなかったら…あんなふうに泣いたりしないよな」

決して答えを誤魔化させはしないと強う態度に、尋人は唇を噛み締めた。

嘘は言えないと解っていて、……だが、本当のこととも判らない。

六条中流が誰なのか、尋人は何も憶えていない。

ただ、その名前が。

写真が。

…夢が。

現実にあつたことかどうかすら不鮮明な、遠い“何か”を揺さ振るのだ。

「……倉橋。もしおまえが六条中流に会いに行くなら、俺も一緒についてってやるよ」

「え……？」

「だってさ、一人じゃ不安なことだってあるだろう。そういう時に支えてやるのが友達じゃん」

「菊地君……」

「だからさ…会いに行こうぜ、六条中流に」

「…」

「ずっと気にしたまま、確かめることもせずいたら、いつまでもそのままになっちまう。そんなの絶対に良くない」

「……うん」

「明日から冬休みだし」

「でも受験があるよ…菊地君だって進学希望だろ？」

「うっ」

確かに進学を希望し、受験を控えた冬休みに、そのようなことを行動に移している時間はない。

かといって、尋人に確かめることを諦めさせたくはない。

どうするのが最良なのかと一人悩み始めた菊池に、尋人はくすりと笑い、口を開いた。

まだ不安は残る。

知ることを恐れる気持ちもある。

だが菊池の言うとおり、あの日の写真の話題で自分の流した涙、その痛みの理由を自覚しなければならぬという思いは日増しに強くなっていた。

もう逃げられない。

無視出来ない。

心に燻ぶる感情の正体を知らなければ、きつと前には進めない。

「…受験が終わって、合格発表も済んだら、…春休みに、一度あの街に戻るうと思っんだ」

「それって…」

「うん。僕…もう一度、六条先輩に会ってみる」

「倉橋」

「…今は受験勉強に集中して、…春休みまでに覚悟を決めて。知りたいことを、ちゃんと六条先輩に聞けるようになるから。だから…その時には」

「俺も一緒に行くからな！」



遮るように断言する菊地に、尋人はそつと微笑した。

「……うん、その時には、お願いするよ」

「ああ、任せておけ！」

力強い菊地の言葉に、今まで出せずにはいた勇気が少しだけ芽吹いた気がした。

正体不明な心の奥底にある“何か”。

憶えてなどいないのに、忘れられない彼の言葉。

……幸せになれ……

どこにいつても。

誰と一緒に構わない。

おまえはおまえらしく、笑っている……

そしてきつと幸せになれと告げられた。

抱き締められた腕は、暖かくて。

思い出すと、切なくて。

去年のクリスマスを、自分は誰とどんな風に過ごしていたのだろう。

それ以前のように、家族でケーキとシャンパンを用意してささやかなパーティを楽しんでいたんだろうか。

その数日後に事故に遭って記憶を失くした。

二年間の何もかもを失って……それでも心に残る。

胸に響く、彼の言葉。

「……六条先輩……」

留まることなく降り積もる雪のヴェール。

その奥に、淡い月の光りが灯されて。

こんな夜に、僕は誰と何処にいたんですか……？

それを知っているのが、もしも貴方なら。

どうか教えて下さい。

この不鮮明な感情の正体を、どうか教えて。

六条先輩。

貴方は、誰なんですか ……。

了

## 時の旅人 序 本居尚也の章

ざわざわと絶え間なく広がる人々の喧騒。

『何時何分発、どこどこ行きの便をご利用のお客様は……』という具合に、便名、時間、行き先名は異なるものの、幾度も繰り返される搭乗アナウンスをBGMに、親友・六条中流ろくじょうあたるとの見送りに来ていた本居尚也もとこりなおやは不機嫌極まりない表情だった。

「このバカ！ ホント信じらんねえ！ なんでこんなイキナリの出発になるんだ！？ アフリカ行くなって話は聞いてたけど、それは四月に入ってからだって言ってたじゃねえか！」

「ああ…、まあ、最初はそのつもりだったんだけどさ…」

「だからっ、なんで予定通りじゃなくなったのかって聞いてンだろおが！ 春休み中の俺との約束はどうなる！」

「ん…：悪いとは思いつけど、それならそれで先生と二人で過ごす時間が増えるわけだし…」

「っ！…ンなの余計なお世話だっ！！！」

瞬時に顔を真っ赤に染めて言い放つ尚也に、中流と、同じく彼を見送りに来ていた先生こと時枝彬ときえだあきひらが失笑する。

「それなら、俺は六条に感謝した方がいいのかな」

「いえいえ、感謝なんてとんでもない。俺は尚也が幸せなら、それでいいんです」

中流のわざとらしい台詞に、時枝はくすくすと笑う。

「まったく六条は友達想いだな」

「でしょう？ ついでに俺は先生のこと信用しているんですから、それを裏切るような真似は絶対にしないで下さい」

「心しておくよ」

「~~~~っいい加減にしる！！！」

本人をそっちのけで、だんだんと深みに嵌まっていく二人の会話に、尚也は我慢の限界とばかりに声を荒げた。

それにぎよつとして振り返るのは、やはり彼らと同じく中流の見送りに来ていた彼の親族達。

中には尚也も面識がある、中流の両親や従兄弟の姿もあった。

「どうしたんですか？」と驚いた顔で尋ねられて、必死に取り繕う尚也を、だが中流と時枝の二人は楽しそうに見ていた。

三月下旬、正午前の新千歳空港、出発ロビー。

今日、ここから中流が出国することを尚也や彬が知らされたのは、つい一昨日のことだった。

突然で悪いけど…、そう前置きして告げられたのは、当初は来月中旬から予定していたアフリカ単身旅行の出発を早め、期間を延長するという内容。

出発を今日、帰国は四月下旬。

それは尚也にしてみれば近年稀に見る悪い知らせだった。

今日一日で十二年間通っていた榊学園を無事卒業し、尚也は地元  
の私立大学へ進学。

中流は今までアルバイトとして勤めていた出版社への就職が決まっていた。

今までの仕事に、より深く本格的に携わっていく一方、その間も写真を撮り続け、いい画が撮れば公募している賞に投稿するなどしてプロへの階段を上っていく、そういう道を中流は選んだのだ。

それに先駆け、視野を広げる為にもアフリカへ渡り未知の世界を体感したいという話は卒業式前から聞いていた。

年末に発売された某雑誌の公募で新人賞を受賞した親友の写真を見たとき、改めて彼の才能と可能性を確信し、絶対にプロになれと激励もした。

だからこそ、生活の全てが完全に違ってしまう前に、卒業旅行も兼ねて仲間達とどこか遠出をしようと思画していたのだ。

女々しいと思うけれど、思い出作りのようなことをしたいと思っただから。

なのにそれを、この親友はあっけなくぶち壊した。  
出発の予定を二週間も早め、かと言って早く帰ってくるわけでもなく。

ただでさえ五月からの中途入社（親の権力か、今までの頑張りを認められたのか、本人は否定も肯定もしないが）では、それ以後に時間が取れるかどうかも怪しい。

そんなわけで、おまえは俺のことなんかどうでもいいのか！ という尚也の怒りにつながるわけだ。

「クソ中流！ おまえ卒業してからますます性格悪くなってるじゃないか！？」

「そんなことないって」

「だったら何にでも彬を引き合いに出すのは止めるよ！」

「それは無理かな」

「っ」

「先生のことだからかう時が、一番面白い反応をしてくれるからさ」  
「~~~~~」

言い返せずに齒軋りする尚也の横で、彬は吹き出しそうになるのをこらえて、今は口元を隠し、目線をずらしている。

普段は素直じゃない尚也が、からかわれると途端にうるたえ、感情を露にする。

口では何と反論しても、その態度が時枝彬という恋人への想いを物語るのだ。

それと同時に、尚也のそういう態度が中流には嬉しかった。

好きな相手に“好き”という気持ち向けられること 大切な親友だからこそ、それを失わずに済んだことを喜びたい。

そんなこと、間違っても本人に言ったりは出来ないけれど。

「…ま、しばらく会えなくなるけど、先生と仲良くしててくれ」

「知るかつ」

「元気でな」

「再度の搭乗アナウンスに促されるように、中流は尚也にしばしの別れを告げた。」

彬とも挨拶を交わし、甥っ子との会話に興じていた母親、従兄弟達にも声を掛け、

「じゃ、行つてくる」と手を上げた。

「無茶するんじゃないよ」

「病気や怪我には充分、気をつけなさい」

「行つてらっしゃい。楽しんできてくださいね」

「ああ」

楽しんで来いと告げる従弟に、軽く手を振り、笑顔を返した中流は、最後にもう一度だけ尚也を見やった。

「…っ？」

どこか憂いを含んだ視線。

何かを言いたそうな顔。

その表情を、尚也は以前にも見たことがあつた気がする。

「中流っ」

思わず呼びかければ、周りの皆が驚いた顔をした。

「あ…、おまえ、ちゃんと帰つて来いよ！ アフリカの方が性に合つてるとか言つて帰国の日、遅らせたりするな！」

勢いに任せて言い放つた尚也に、中流は面食らい目を丸くしたが、最後には笑顔だった。

「また一ヶ月後にな！」

今度は大きく手を振り、背を向けた彼は、そうして北の大地を後にする。

「ここから東京へ。」

東京から香港を経由し、南アフリカにあるヨハネスブルクまで十三時間。

長い空路へ、彼は一人で旅立っていった。

「…」

その背を見送り、何故か胸中にざわつく不安の波。

「…どうした？」

「…いや」

怪訝な顔をした彬に覗き込まれて、尚也は小さく首を振った。

胸中の不安を説明する言葉が、今の尚也には見つけられなかったから…。

その後、中流の親戚達と挨拶し別れた尚也は、彬に促されてJRの改札口に向かった。

ここから地元まではJRを利用した方が短時間で移動できるため、彬の車は地元駅近くの駐車場に停めてきてある。

目的地までおよそ十五分。

快速に乗れば二駅の近距離だ。

「ちゃんと帰って来いなんて、そんなに六条のことが心配なのか？」

「…心配っつーか…、なんか、あいつの最後の顔が…いつもと違ったから…」

「…尚也にはそう見えたのか？」

「うーん…」

最後の、あの顔を、以前に見たのはいつだったか思い出すと不安になる。

理由など無い、ただの直感だけだ。

「…あいつ、あんまり自分のこと話したがらないだろ」

「ん？」

「俺、…中流の事、何も知らない…、何も聞かされてない」

彼の家の事情や、親兄弟、親戚の素性、…どれもこれも、全て人づてに伝わってきた噂話。 “知っていること” は全て他人から

聞かされたこと”。

中流本人からは、いつだって「俺は俺だろ」という強い一言で片付けられた。

それは否応無しに、どこか一線を画されたような疎外感を味合わされる。

「尚也……」

「どうして出発の日を早めたかだって、結局はぐらかされたままだ」それは、いつか話すと言われて、未だ聞かされない彼の過去の傷も然り。

「……俺にはしつこいくらい幸せになれって言うくせに、……自分の幸せなんかこれっぽっちも考えちゃいない」

「……」

「年末にあいつの写真が受賞したろ？ あれが原因だって本人は言ってるけど、あいつ卒業式の前にかなりの人数から告白されてるんだ。それを全部断ってさ、一人ぐらい、いい子いなかったのかって茶化したら、……さっきのあの顔で笑うんだ」

恋人はいらないと、微笑うんだ。

それが写真に集中したいという理由なら納得もするけれど、中流のその返答は違った。

彼の言葉の本意は“恋人”という存在自体を拒むもの。

本人がそう言ったわけではないけれど尚也には判る。

何故ならその笑顔は、あの日に向けられたものと酷似していただからだ。

自分が彬への気持ちと向き合えずにいた時「大切な人を失ってからは遅い」「自分の気持ちに素直になれ」と励ましてくれた。

自分と同じ過ちは犯すなと告げた、大人びた微笑み。

「……中流の奴、どうして出発の予定を早めたんだ……？」

「……」

「予定早めて、……どうしてあの顔で笑うんだよ……」

とても嫌な予感がした。



何か取り返しのつかなくなる事態が起きそうな、そんな胸騒ぎ。それきり黙りこんでしまった尚也は、駅に着いて降車し、彬に促されるようにして改札口を通り抜け、駐車場まで向かう間、ずっとその嫌な予感に考えを支配されていた。

…だから気付かなかつた。

彬の手がさりげなく自分の腰に回されていたこと。

相手に言わせれば考え事をしている尚也の足元が心配だったからということだが、ではその次の行動は何のためだっただろう。

「…、いいかげん俺が隣にいることに気付いて欲しいんだけどね」

「え……………」

耳元で。

自分の心音よりもずっと近いところで響いた甘い声にハッとし、開けた視界。

そして触れた温もり。

「あき、ら…?」

「…そこまで尚也に心配されて、…少し妬けるな」

「え…、あ、っん…………っう……………」

唐突に深くまで探るようなキスをされて、尚也は抗う間もなく追いつめられる。

「っ、彬、よせ…って…こんな場所で…っ」

「おまえが、もう他の男のことを考えないなら」

「他の男って…っ、中流は別だろ…、…っ」

「同じだよ」

尚也の気持ち、それが友情でも、一時でも独占しようというなら区別は無い。

「おまえの心も俺だけのものだ」

「彬っ、誰かに見られる……………!」

屋外の、しかも駅近くの公共駐車場という開けた場所。

近隣には図書館や市民センターがあるばかりか市営住宅も立ち並

ぶ。

どこに誰の目があるかも判らないのに。  
いつ、誰が来たっておかしくないのに。

「！」

「あ……」

その瞬間、尚也の思考は真っ白になってしまった。

真っ直ぐにぶつかった二つの瞳が他人のものだと、すぐには理解出来なかった。

彬の肩越し。

駐車場に隣接する遊歩道。

そこを歩いていて、二人の少年。

「……………っ！！」

「……！！」

一瞬にして顔色が変わったのが、尚也も、目が合った少年も互いに判った。

「？ 尚也？」

急に黙り、身動き一つしなくなった腕の中の恋人の様子を不審に思い、彬も手を止め、尚也が凝視する目線の先を見やった。

「……おっと……」

こちら側を向いて遊歩道に立ち尽くしている二人の少年。

どちらも中学生だろうか。

まだ幼さの残る顔を今は蒼白にし、尚也と同じく、こちら側を凝視していた。

見られたのか、とさして困るでもなく察した彬は、何気なく少年達に手を振った。

「っ」

それに呼応するように、ハッと我に返った少年の一人がその場から走り去り。

「え、あ、待てよ倉橋！」

もう一人の少年も彼を追って走り去った。

最初の彼はクラハシ君と言うのか…と頭の片隅で呟きながら、彬はまだ硬直している恋人を見下ろす。

「……さて、尚也」

問題は、見てしまった彼らよりも、見られてしまった尚也の方。きつとただでは済まない。

怒らせるし、もしかしすると泣かせるかもしれない。

…それを考えると、少し楽しみでもある彬だった。

## 時の旅人 序 倉橋尋人の章

「倉橋！」

背後から呼ばれているのは判るけれど、倉橋尋人は足を止めることが出来なかった。

…だつて、他人のキスシーンなんか見るのは初めてだったし。

…それが男の人同士ともなれば、テレビでだつて観たことがない。

「…っ」

心臓がばくばくしている。

急ぐ足を止めることも出来ない。

逃げ出した自分を、一緒にここまで来てくれた友人が必死に追いかけてきていると判つていても。

「おい倉橋！」

「っ、あ！」

腕を掴まれ、強引に引き寄せられた尋人は、勢い余って後方に倒れそうになった。

それをどうにか回避し、足元をふらつかせながら立ち止まると、途端に今度は激しい鼓動が耳を打つ。

「っはあ…、も、何だよイキナリ…」

「え、だ、だつて…」

「そりゃ、驚くのは、判るけど、そんな逃げるみたいに…」

速い動悸と同じく、肩で息をしながら話しかけてくる相手に、尋人は返答の仕様がなかった。

彼の言うとおり、自分は逃げた。

駅近くの公共駐車場、その敷地内でキスしている二人 二人の男性の姿を目にした途端、全身が震え出し、目が離せなくなった。理由も判らない衝撃に胸を突かれて、その人と目が合つて。

…もう一人の男の人がこちらを振り向き、手を振ってきた瞬間、

自分がものすごく卑劣なことをしてしまったような気がした。

そうしたら逃げ出さずにはいられなかった。

「まあ…悪い言い方すりゃ“のぞき”みたいなもんだから、逃げ出したくなるのも判るけどさ。元はと言えばあんな場所でイチャついてるあいづらが悪いんだし」

「…うん」

「それとも……、“男同士”ってのがイヤだった？」

「……」

友人の遠慮がちな問い掛けに、尋人はしばらく考えた後で、静かに左右に首を振った。

男同士がイヤだったわけではない。

…そうではないと思う。

確信など何もないけれど、…ただ、遠慮がちにそれを問うてくれる彼の気遣いは嬉しいと思った。

倉橋尋人は、約一年前までこの街に住んでいたが、ある事情から母の田舎へと引っ越す事になった。

それも、中学三年生の、もうすぐ高校受験という大事な時期にある。

その理由は、尋人が不慮の事故から過去二年間の記憶を失ってしまったこと。

そこには二年分の学力も含まれており、このままでは尋人の後々が心配だ。ならば別の土地でもう一度、中学三年生からやり直してみないかという両親の提案を受けてのもので、完全に二年間の記憶を失っていた尋人は素直にそれを聞き入れた。

当時の自分には両親の説明を疑う必要も、理由もなかったし、何も解らないからそうするしかなかった。

だが、時が経つにつれて記憶を失くした心に生じ始めた違和感。幾重もの喪失感。

消えた時間を取り戻したい。そう思うようになった自分に協力

を申し出てくれたのが、転入先の中学校で出会った彼、菊池武人だった。

全学年一学級しかない小さな学校だったけれど、小さいからこそ情報の伝達は早く、一つ年上の転入生、それも過去二年間の記憶を失くしているという身の上は、尋人を孤立させて然るべきものだった。

だがそれを、学校のリーダー的存在であった菊池がフォローした。尋人を仲間の輪に誘い、年の差など感じさせない、記憶の有無など考えさせない接し方で尋人の“らしさ”を出させた。

この一年、尋人が気持ち穏やかに学校に通い、この春には無事、志望校合格を決められたのも、菊池の助けがなくては実現しなかつただろう。

そうして今、こうして地元に戻ってきた尋人の隣にも彼はいた。記憶を取り戻したいと願う尋人に、もしかすると衝撃的な事実を突きつけられることも無くは無いし、それを懸念する理由が彼らには有るからだ。

“男同士”という言葉が遠慮がちに口にするのも、そのため。

『六条中流』

それは事故に遭った当時、偶然にも現場に居合わせ、親戚の病院に尋人を搬送させた人の名前。

その後、入院中の尋人の見舞いに来て「幸せになれ」という言葉を残し、去った人。

二年間の記憶を失い、何も覚えていなかった尋人に、自分はただ居合わせただけの野次馬に過ぎないと語った彼は、…ならば何故、最後に「幸せになれ」と告げたのだろう。

何故、最後の最後に、抱き締めてくれたのだろう。

去年の末、ある写真雑誌で六条中流が新人賞を受賞したのを知り、久々にその名を耳にしたとき、理由もなく涙が出た。

…涙しか、出なかった。

それをきっかけに、尋人は決意した。  
年が明けて、高校受験に無事合格して春からの進路が決まったら、  
覚悟を決めて六条中流に会いに行くこと。

そして菊池は、その途中で尋人に何かあつた時には自分が支えに  
なると断言した。

『六条中流』

彼が記憶を取り戻す最大の鍵になる。

失つた過去から逃げずに立ち向かう、その強い思いだけで、  
尋人はこの街に帰って来たのだった。

「あ…それとも、もしかしてさっきの二人、知っている奴らだった  
とか？」

「え？」

「だってここっておまえの地元だろ？ 知り合いがいたって全然お  
かしくないしさ」

「ああ…」

一瞬、菊池が何を言い出したのか飲み込めず返答に戸惑ったが、  
先刻の男同士のキスシーンのことを言われているのだと思ひ当たる。  
「…どうかな。もし知っていても、僕には記憶がないし…」

だが、そう言われて思ひ出そうとすると、最初に目が合った男の  
人の顔には見覚えのある気がしなくもない。

「なんか倉橋の態度見てたら、ただ驚いたってだけじゃなかったよ  
うな気がしたからさ」

「…そうかな」

「ああ。だつておまえ、あんまり動揺したりしないじゃん、落ち着  
いているって言うか、そういうところ大人っぽいしさ」

「そんなことないと思うけど…」

菊池の台詞に、尋人は微苦笑した。

大した事ではなくとも、褒められるのは心がくすぐったくなる。

「僕より菊池君の方が大人っぽいよ。頼りになるし、カッコイイし」  
「はあ？」

イキナリ何だと言いたげに眉を顰める彼の仕草は、照れ隠し。  
咳払いを一つして。

「変なこと言い出すなよな、それよりこれからどうするんだ？」と  
早口に返してきた。

「こつから真つ直ぐ、じいさんの家に行つちまうか？ 先に荷物だけ置いてくるとか。寄りたい所があるならそつちでもいいし。…六条中流には、明後日、会いに行くって言ってるんだろ？」

「…うん」

確認されて、尋人は気弱に頷いた。

菊池の言つとおり、六条中流には明後日の午後に会いたいから都合のいい時間を教えて欲しいという内容の手紙を、一週間以上前に送っていた。

当日までに連絡を貰えれば、こちらが都合を合わせるからと、携帯電話の番号、メールアドレスを添えて。

…だが、六条中流からの連絡はない。

まさか郵便事故が発生して手紙が着いていないのだろうか、とか。届いていても彼の目に触れていないんじゃないだろうか。

それとも無視されている……？ そんな不安ばかりが募る。

それならそれで、住所が判つていれば家を探すことは出来るのだから直接訪ねればいい、家にいないなら玄関前で待っていればいいのだと菊池は強気に言い放った。

到着したその日に会う約束をしなかったのは会う前に少しでも以前の自分自身の情報を得ておこうと思ったからで、菊池もそれに賛成してくれ、その上、こちらに滞在している期間は彼の祖父母の家で寝泊りさせてくれるという。

感謝してもしきれない。



どうしてここまでと思うくらい、菊池は尋人への協力を惜しまな  
かった。

「…菊池君は優しいね」

「ああ？」

また何を言い出すのかと眉を顰めた彼に、尋人は目を細める。

「優しいよ、ものすごく」

「やめろって」

顔を赤くして、目を逸らしながら乱暴な手つきで髪を弄んだ。

「別に優しいわけじゃねえよ。俺はただ…」

ただ。

…その後の言葉を、菊池は飲み込む。

「？」

どこか居た堪れない表情で唇を噛み締めた彼に、尋人はどうした  
のかと尋ねようとしたが、まるで先手を打つような、わざとらしい  
陽気な声に阻まれた。

「で、これからどうするんだって。どっか行きたい場所は？」

「…」

彼の態度の変わり方が気になりはしたけれど、無理に聞き出した  
くはない。

「…じゃあ、病院に行ってもいいかな」

「病院？」

「うん。…お世話になった医師せんせいに挨拶をしたいんだ」

「オッケー、じゃあその病院の名前は？ バスで行くのか？」

「うん、バスで…だいたい十五分くらいかな。大樹総合病院って言  
うんだ」

## 時の旅人 序 辻貴士の章

何かしらの予感があったわけではなかった。

ただ、病院から出る気になれなかっただけだ。

夜勤明けの疲れた体は休息を欲していたけれど、一人の部屋に帰るよりは医師達の休憩室で横になりながら、仲間の他愛ない会話に耳を貸していたかった。

だから、同僚から伝えられた思い掛けない訪問者の名前に、咄嗟の反応が出来なかった。

「貴士、お客さん」

ソファに横になっていた彼の頭を、分厚いファイルの背で遠慮なく小突きながら言う同僚を、しかめっ面で仰ぎ見た。

「…客？」

「そ。随分と可愛い客だぞ」

「可愛いつて…女の子か？」

「男の子二人。一人は見覚えがあるから、おまえの昔の患者じゃないか？」

「昔の患者ねえ…」

「名前、クラハシヒロトだってよ」

「」

クラハシヒロト 倉橋尋人。

その名前に、あの日…、一年半前のあの夜の出来事が一瞬にして蘇える。

院長に至急と呼び出され向かった手術室。

運び込まれてきた少年は傷だらけの身体を血に染めて、呼吸も心音も止まりかけていた。

自ら高所より飛び降りたと聞かされ、こんな若い少年が自殺するなど、どういう理由かと驚愕したが、その理由は目の前に横たわる体を見れば明らかだった。

…どれほど辛かっただろう。  
どんなに泣き叫んだだろう。

そしてどんなに“彼”のことを想っていたのか。

あの日“二人”の涙を見て。

死を選んだ少年と、別れを決意した少年の、二つの涙。  
貴士は胸の痛みとともに確信した。

きつと、一生この少年達のことを忘れないと。

「その子、どこ？」

「受付の前で待ってるってよ」

「ありがとう」

早口に告げ、貴士は素早く起き上がると、そのまま教えられた場所へ向かった。

今まで寝転がっていたせいで乱れた白衣を直すことにも気付かぬまま歩を進めていた。

酷い目に遭い、一度は死を選び、誰より想っていた恋人を忘れたことで二度目の生を得た倉橋尋人。

いつか、もう一度会うことが出来るなら、その時には笑顔でいて欲しいと願った。

忘れられてしまった恋人・六条中流と二人、並んで幸せな笑顔を見せてくれたらと。

(…もしかしたら)

以前、尋人から「自分を助けてくれた先輩の連絡先を知りたい」という電話があり、医院長を通して教えたことがある。

六条中流はこの病院の院長、大樹和裕氏の甥にあたり、彼ら二人の関係を少なからず理解していた院長はすぐに応えてくれたのだ。

もし、あの時から二人の交流が戻ったなら、今また、二人の幸せな時間も戻っていることだって有り得る。

記憶喪失は、何かのきっかけで改善する可能性は多分にあるのだ。だからこそ、願わずにいられなかった。

「せんせい医師」

だが、彼らの姿を目にすると同時、貴土の表情に広がったのは落胆の色。

二人の男の子だと言うから期待したのにと、彼らの来訪を伝えてくれた同僚を恨むのは筋違いだ。

だが思わずにはいられない。

何故、彼の隣に立っているのが六条中流ではないのかと。

「お久しぶりです。…お元気でしたか？」

貴土の内心を知らず、尋人は礼儀正しく頭を下げ、笑顔で声を掛けてくる。

その姿が、医師の心には痛かった。

「…久しぶりだね。君こそ元気だったかい？」

「はい。あの後、身体が痛くなったりもしませんし、…今回は、高校に合格した報告をしたかったんです」

高校合格と聞いて、今度こそ貴土の表情には笑みが浮かんだ。

「合格したんだね、おめでと。よく頑張ったね」

「ありがとうございます。医師には、どうしても自分で伝えに来た

「かつたので」

「それは嬉しいな」

はにかむような笑みの少年に、貴士も微苦笑で返す。

義理堅いというのか、わずか数週間、この病院の一室で何度か顔を合わせただけの、それも医者と患者という立場上の付き合いでしかない自分に、ここまで気を遣うのは、よく言えば尋人の長所なのだと思う。

だが同時に、それだけのためにこの街に戻ってきたのだとしたら、貴士が素直に喜ぶことは許されない。

いくら憶えていないとはいえ、記憶を失くして離れた土地は、尋人にとつてだけでなく、彼の家族や、友人、…そして誰よりも六条中流にとつては、決して歓迎できることではない。

「…、尋人君。もしかしてそれを言う為だけに、わざわざこの街まで？」

危惧し、問いかけた貴士に、一度はすぐに首を振った尋人だったが、開き掛けた口が言葉を発するには至らず、その視線は隣に佇む少年に向けられた。

「…」

「…言つておいた方がいいんじゃないか」

ポツリと少年が言う。

その表情に確かな気遣いを見て取り、貴士は知る。

この少年も、尋人を心から心配しているのだと。

「…」

自分勝手な思い込みで、随分と失礼な態度を取ってしまったことを恥じながら、その少年に向かった。

「挨拶が送れて申し訳なかった。私は尋人君の担当医だった辻貴士と言います。…君は、尋人君の新しい学校のお友達ですか」

「菊池武人といいます」

ペコリと頭を下げ、真っ直ぐ見返してくる瞳には迷いが無い。

「君は、…今の尋人君の支えなのかな」

「少しでも支えてやればいいなと思ってます」  
はつきりとした返答に笑い返す。

ああ尋人君は大丈夫だなと思った。

例えば、もしも尋人が。

「僕……、僕、記憶を取り戻したいんです」

尋人が、それを望んだとしても。

真実を知る事になったとしても、この少年は尋人を支えるだろう  
という確信にも近い予感が生まれる。

「……、記憶を……」

「はい……でも一人じゃ怖くて……、そしたら彼が、一緒に来てくれる  
って……」

「尋人君……」

少年の決意に 本心では期待していたことでも、実際にその言  
葉を彼自身の口から語られるのを、貴士は複雑な思いで受け止めた。

この少年が六条中流のことを思い出すのは喜ばしくとも、記憶を  
失くすまでの経緯を知ることが、とてつもない衝撃を伴うに違いな  
い。

辛い時、苦しい時。

誰か支えられる人物が傍に居られるなら、それに越したことはな  
い。

「……記憶を、追いかける事にしたんだね」

確認するように告げる貴士に、尋人は強く頷いた。

その瞳に迷いはない。

この少年は、きっと閉ざされた記憶の扉を押し開くだろう。

「……尋人君。もし記憶を取り戻していく過程で困ったことや……、身  
体に問題が出てきたときには、遠慮なくここにおいて」

「せんせい……」

「君は今でも私の患者だ。医者が必要になったら私を呼びなさい。  
いいかい？」

精一杯の穏やかな口調、優しい笑みで告げる貴士に、尋人はわず

かに目を見開いた後で、顔を歪めた。

まるで今にも泣き出しそうな表情に、確かに宿るのは感謝の思い。「ありがとうございます…、医師にそう言ってもらえて、すごく心強いです」

心から嬉しそうな顔をする尋人の隣で、菊池も安堵したように目を和ませ、再び頭を下げた。

彼もまた、心から尋人のことを案じているのだと思うと、やはり貴士の心には複雑な感情が渦巻く。

願うのは尋人の笑顔。

…かつての恋人を思い出し、その隣で笑んでくれること。

その気持ちは変わらないのに、…何故だろう。心には影が落ちたようだった。

尋人と菊池武人が病院を去って数時間。

空はすっかり暗くなり、道行く人の姿も皆無に等しい時間帯。

車で自宅に帰ろうとしていた貴士は、その手で携帯電話を弄んでいた。

画面を見下ろしては、それを閉じ。

メモリから弟の名前を呼び出しては、クリアにし。

“時枝彬”

両親の離婚が理由で姓は異なるが、血の繋がった実の弟である彼は、この春まで六条中流のクラス担任だった。

倉橋尋人が、友人と共にこの町に帰ってきていることを六条中流は知っているのだろうか。

…知っていて、会う覚悟は出来ているのだろうか。

「……………」

それを確認したところで、自分にはどうすることも出来ない。

無責任に関わってしまったえば、自分がどう思っているかが彼らの重荷にしかないだろう。

ましてや、彬や、彼の恋人であり中流の親友である本居尚也が、これらの事情を知っているとも限らず、不用意な発言が爆弾になる可能性だってあるのだ。

「…黙って見守るだけか」

彼らのことを思うならば、そうすることしか出来ない。

記憶を追うも、運命に立ち向かうも。

…そして未来を掴むのも彼ら自身。

彼らの選択だけしかない。

「尋人君…」

あの日、あの夜の光景が脳裏を駆け抜ける。

傷つき絶望した尋人の姿。

心砕かれた中流の姿。 恋人を手放すと決めた彼は、どれだけ

の覚悟を強いられただろう。

どうか幸せに。

どうか幸せに。

携帯電話を握り締め、貴土は切に祈った。



## 時の旅人 序 菊池武人の章

生まれ育った田舎に比べれば、あまりにささやか過ぎる星が光る。  
細い三日月。

明る過ぎる夜の街。

「……ここがおまえの地元か」

隣に布団を敷いて眠る友人に、菊池は小声で呟いた。

父方の実家がこの街にあることを話し、こちらにいる間はそこで寝泊りすればいいと提案した時、尋人は本気で驚いていた。

こんな偶然もあるんだ。

助けてもらってばかりで本当にごめんねと、苦しげに謝っていたけれど。

……偶然？

そんなわけがない。

「……おまえ、そんな素直だから……」

素直で、真つ直ぐで。

他人のことばかり気遣うような、そんな人間だから。

「あいつの癪に障ったんだろうな……」

自己中心で、他人を思い遣る気持ちなんか知らなかったあいつには、そんな尋人の存在が目障りだったに違いない。

邪魔で、憎らしくて。

同時に、…眩しくて。

「……」

菊池は尋人を起こさぬよう静かに布団を抜け出し、部屋の隅に寄せてあった鞆の中から一つの封筒を取り出した。

逆さにして振ると、一本のフィルムが掌に落ちる。

「……」

菊池に宛てられたその封書が届いたのは今から三ヶ月ほど前。

学校では全校生徒がクリスマス会の準備に追われ、クラスでは写

真家を目指す友人が応募していた新人賞の結果に大興奮していた頃だ。

差出人の欄に書かれた名は“滝岡修司”。

タキオカ シュウジ

一年半前までこの街にいた尋人が、もしも記憶を失くさなければ、その名前にどんな反応を見せるだろう。

…隣のクラスにすげえムカつく奴がいるんだ…

父方の従兄 父親の姉の子である修司からそんな話を聞いたのは三年以上も前だった。

自分の学校に気色の悪い奴がいる。

そいつは男のクセに男が好きなんだ。

二つ上の上級生が好きなこと、見ていれば判るのだと。

「…そいつが誰を好きか判るくらい…おまえはそいつを見てたんだろっが……」

家庭環境が複雑で、歳を重ねることに生活が荒れていった従兄には、きつと「他人を想う」ということが解からなかった。

…アレを家族だと思ったことなど無い…

自分の姉をアレと呼ぶ父親の言動からも、修司の母親がどんな人間で、彼女を捨てて去った男がどんな人間なのか想像はつく。

そんな壊れた“家”で育ってきた修司が感情というものを理解出来ないのは、むしろ当然の結果だったかもしれない。

だが、あの日。

…武人…オレ……

真夜中に尋ねてきた従兄は、何も語ろうとはしなかった。きつと、自分が泣いていることも自覚していなかった。

誰の名前も口にしなかった修司は、…そうしてあの日以来、姿を消してしまった。

学校を辞め、家に帰ることも無くなり、その消息は不明。もはや日本国内にいるのかも定かではない。

その修司が、約一年ぶりに寄越した便りがこれだったのだ。同封されていた書面にはただ一文。

『このフィルムを榊学園の六条中流に渡せ』

何の説明もない、頼むという一言すら添えられていない文章は、だが菊池に強い衝撃を与えた。

「六条中流」

ちようどその日、放課後の教室で耳にした名前だった。

…尋人が泣いた、名前だった。

この名が、どうしてこれほど自分の周りを飛び交うのか。

尋人も、修司も、六条中流にどのような関りがあるというのだろうか。

悩むうち、三年以上も前の従兄の話が思い出された。

…隣のクラスにすげム力つく奴がいるんだ…

記憶を失くし、榊学園から自分達の学校に転入してきた倉橋尋人。彼が記憶を失くすきっかけとなった事故と、修司が自分の前で泣いた日。

偶然と言うには重なりすぎる一致は、ただの気のせいなのか……？尋人が菊池の学級に転入してきたことなど修司は知らないと思う。ましてや、この手紙を受け取った時には、菊池自身が「六条中流」の名前に関わっているなど予測すらしなかっただろう。

「……………」

それは、確証など何も無い、ただの勘に過ぎない。

だが尋人が記憶を取り戻したいと言い出した時には、絶対に自分も同行しようと思いに決めた。

もしも尋人の“現在”が、あの従兄によってもたらされた“不幸”なら、記憶を取り戻す為の協力を自分がすべきだと思った。

この街で、倉橋尋人に。

六条中流に。

そして滝岡修司に何があったのか。

隠された真実に少しでも近付きたくて、送られてきたフィルムを現像してしまうことも考えた。

だが、…“彼ら”の涙を思うと、それだけはしてはならないように思えた。

「…会えるといいな」

会いたい人に、伝えた通りに。

尋人は、六条中流に手紙を送って以降、何の返答もないことをひどく気にしている。

「先輩は自分に会いたくないのかもしれない」と。

だが、二人の間に何もなければ、相手が会いたくないと思うわけがなく、逆を言えば、会いたくないと思わせるのは二人に繋がりがあるからだ。

向こうだってそれくらいは判っているのだから、どちらに転んでも二人が会えないはずはない。

会おうとしないなら、家に押し掛けてでも、絶対に二人を会わせてやる。

「ん…、きっと会えるさ」

静かな寝息を立てていた尋人に、やはり小声で語りかける。

手にしていたフィルムを封筒に戻し、そのまま鞆の奥底に仕舞う。それきり、菊池も休むべく布団に入るはずだった。

と、そのとき。

「…せ…ぱい…」

「？ 倉橋？」

不意に毀れた囁き…、否、囁きというよりも、今にも消え入る吐息のような儂さ。

「せんぱい……」

「……っ」

眠っているはずの瞳から零れ落ちた雫。

乾いた唇が呟くのは。

「…先輩……っ」

二粒、三粒。

目尻を濡らす涙は、あまりに悲痛な叫び。

「……倉橋」

眠っている尋人を見るのは初めてで。

誰に確かめるわけにもいかないけれど、毎晩、こんなふうに泣いていたのだろうか。

それとも、この街に戻ってきたのがきっかけで、哀しい夢を見てしまったのか。

「…夢見ながら泣くくらい、…六条中流はおまえの大事な人なんだよな……？」

尋人本人には自覚のない想い、それは失くした記憶の片鱗。

そんなのは、端から見ていた菊池の方が判っていた。

「…ごめん……っ」

友人の涙に、菊池は声を震わせながら謝罪した。

シートを握り締め、苦しげに顔を歪め。

「ごめん倉橋……っ、ごめんな……！！」

謝ることしか出来ない。

自分が尋人をこんな目に遭わせたわけではないけれど。

従兄が何を仕出かしたかなんて、今でも解っていないけれど。

「ごめん……っ……ごめん……」

眠る尋人に、何度も謝り続ける。  
この言葉が、今はまだ見ぬその人にも届くように  
……。

## 時の旅人 序 六条中流の章

「ごめんな……」

真夜中の上空、星を真横に見つめながら六条中流は呟いた。

既に日本を出て数時間、機体は香港を経由し、南アフリカのヨハネスブルクへと向かっていた。

足元には、ただ一つ機内に持ち込んだ鞆。

大事なカメラやパスポートなどの貴重品に混ざって、しわくちやの手紙が入っていた。

中流はその手紙を取り出し、見下ろす。

あの少年からの手紙は定期的に届いていたけれど、あの日、この手紙を読んだ瞬間、血が逆流するような錯覚に陥った。

…… 会いに来る。

尋人が、俺に会いに来る………！！

気付いた時には手紙を握り潰してしまっていた。

封筒は足元に落ち、全身が汗を吹く。

怖いと思った。

駄目だ、と心臓が叫んだ。

自分は、二度と尋人に会ってはいけないのだと。

「…… 情けないよな……、けど、……」

許してくれとは言えない。

謝罪の言葉も、軽すぎて言えない。

ただ、会えば、会わない以上に傷つけることだけは判っているから。<sup>5。</sup>

このバカ！ ホント信じらんねえ！ なんでこんなイキナリの出発になるんだ！？ アフリカ行くなって話は聞いてたけど、それ

は四月に入ってからだっと言ってたじゃねえか！

機内の狭い空間。

背もたれに身体を預けて目を閉じると、空港に見送りに来た親友の声が蘇えった。

尚也が怒るのも当たり前だ。

ろくな説明もせずに予定を早めた。

だが本当のことを話せば、彼の怒りは今と比べ物にならなかったはず。

何故なら自分は、逃げ出すために日本を離れたのだから。

だからっ、なんで予定通りじゃなくなったのかって聞いてンだろおが！ 春休み中の俺との約束はどうなる！

悪いことをしたと思う。

だが、理解って欲しいとも言えないから、はぐらかして別れたのだ。

どんな言葉で繕っても、自分にはあの場所から逃げることしか出来なかった。

絶対に会えない場所に居れば会わずに済む。

尋人の手紙を無視するだけでは、…自分の衝動を抑えられる自信がない。

傍に居れば、きつと抱き締めずにいられないから。

「……っ……」

おまえイキナリ予定変更なんかして、俺に見送りさせない気か？

昨夜、そんな電話を寄越してきたのは、尚也と同じく同級生だった野口健吾。



そんな緊急事態みたいにさ。ここにいたらマズイ事でも起き  
そうだな…

そう言つて笑つていた。

苦笑いの表情が容易に浮かぶ彼に、実はそうなのだと、白状して  
しまえば楽になれたかもしれない。

一番付き合いの長い尚也も知らない自分の過去を、全てではなく  
とも、尋人が中流の恋人であつたという一番重要な部分を、クラス  
では野口だけが知つていた。

見ていて気付いたのだと言い、二人の仲を応援してくれていた彼  
は、尋人との別れを決意した時も、事情は知らずとも「本当にいい  
のか？ 大丈夫か？」と気遣つてくれた。

話せば「逃げる」以外の方法を見つけてくれたかもしれない。

だが、なぜ尋人から逃げなきゃならないのかと聞かれたら答えら  
れる言葉がない。

尋人の亡くした記憶の中には、とてつもない恐怖が潜んでいるな  
どと、どうして話すことが出来るだろう。

…だから、このまま会わずに帰ってくれ……………

「…尋人…」

ひろと。

「……好きだ」

好きだよ、…今だつてこんなに。

「尋人……」

ひろと。

「好きだから……っ」

好きなんだ、あの時と変わらず。

いや、あの時よりも。

時間が経つにつれて。

…会えない時間が積み重なっていくように、この想いは深くなるばかりで。

また、その手を取ってしまったら。

触れてしまったら。

今度こそ俺はおまえを殺してしまう ……！

あの日、一年半前の冬の日。

悪いのは中流じゃないと誰もが言った。

だが尋人が自ら命を絶とうとしたのは中流を巻き込まない為にだ。中流の存在が尋人に“死”を選ばせたのだ。

“想い”なら誰にも負けないと思っていたのに“想い”だけでは何も守れないのだと思ひ知らされた。

尋人の幸せを望むなら、自分の愛し方では叶えられない。

どんなに好きでも。

…好きだからこそ、決してあの日に戻ってはならないんだ。

「……こんな想いをするのは、俺だけでいい…」

辛いのも、苦しいのも、おまえの分まで俺が引き受けるから。

「だからおまえは、そのままがいい………」

残酷な仕打ちを思い出すこともなく、おまえを苦しめることしか出来ない男のことなど忘れたままで。

おまえはおまえの未来で、幸せになってくれ。

「頼む、尋人………」

何と罵られても構わない。

再び、尋人に闇を見せるくらいなら、俺はどうなってもいい。だから尋人。

どうか。

どうかおまえだけは幸せに ……。



## 時の旅人 一

恋とか、愛とか。

“恋愛”の二文字がこんなにも苦痛なものだとは思わなかった。

好いた相手の気持ちを欲しいと願うのが恋なら、ただ一人望んだ相手が俺の隣に並ぶことは二度となく。

特別な相手を大切にしたいという決意が愛なら、俺にはもう、誰かを愛する資格がない。

……誰よりも大切にされた。

幸せに、ずっと笑っていて欲しかった。

それが唯一の祈りだったのに、実際には傷つけ、苦しませることしか出来ず。

俺が、おまえに“死”を選ばせた。

……尋人。

いまは二度目の命を生きる君よ。

もう後悔しかないけれど。

もう、遅すぎるかもしれないけれど。

今度こそ幸せになれるよう祈るから。

おまえの幸せだけを祈るから。

だから、尋人 ……。

「……」  
目覚めたばかりの瞼に、襖の向こうから射し込む薄い光りが優しい。

布団の温もりは、いつもと違い畳の匂いを含んでいる。いつものもの、自分のベッドで目を覚ます時とは異なる空間に、尋人は我知らず緊張していたのだろう。

ベッドよりも地面に近い分、意識が覚醒するまでの時間が短縮され、倉橋尋人はそつと身体を起こした。

「……」

そうして枕元に置いてあった携帯電話に手を伸ばす。

七時に合わせていたアラームより早く起きてしまった為、画面は通常の待ち受け表示のまま、寝る前の状態と変わらない。

着信の履歴にすら変化はなかった。

「先輩」

ぼつりと呟き、尋人は小さく息を吐く。

それは、この一週間、毎朝繰り返し返す動作。

昨夜こそは連絡があっただろうかと期待し、確認して気持ちが沈む。

また一日、連絡を待つだけの時間が過ぎるのかと思うと途端に切なくなってくる。

「……六条先輩」

声にしてその名を呟くと、途端に不安の波が押し寄せ、胸の奥が苦しくなる。

以前の自分が六条中流とどういう間柄だったかなど判らないが、明日、もし会えなかったらと思うと、怖い。

会おうとしないなら、家に押し掛ければいいなんて乱暴なことを菊池は言っていたけれど……。

「あ……、そうだ菊池君……」

隣に敷いてあった布団は、誰かが寝ていたとは思えない整頓され

た状態で放置され、いるはずの友人の姿はない。

「……」

尋人はしばらく考えた後で立ち上がり、その部屋を出た。

昨夜、案内されたとおりに廊下を進み、家人がいるだろう居間に向かう。

その向こうから、香ばしい匂いがした。

珈琲の匂い。

窓から漏れ入る優しい陽射し。

家人のいる居間を探して、長い廊下を歩いていった。それは、いつのことだったか。

「おはようございます」

声にしながら居間に入っていくと、菊池の祖父母がすぐに顔を向け、

「おはよう」と声を掛けてくれる。

「慣れない部屋で、ゆっくり休めましたか？」

「はい」

尋人が笑んで応えると、座椅子に座って新聞を広げたり、台所に立って朝食の用意をしていた老夫婦も嬉しそうに微笑んだ。

「武人はゴンの散歩に出ているんですよ。もう少ししたら帰ってきますから、待っていて下さいね」

この家で飼っている犬の散歩に出ているのだと教えてくれた彼女は、そうして朝食の用意を再開した。

「……」

菊池がいないのに、自分一人、この部屋で彼の帰りを待つのは、少なからず居心地が悪くて、外で菊池の帰りを待ちたいと告げると、二人も尋人の気持ちを察したのか、この時期は花が咲くにはまだ早いけれど、主人の自慢の庭を見てやって頂戴と言ってくれた。

「ありがとうございます」

そうして居間を出る尋人を、老夫婦は穏やかな表情で見送つてくれた。

玄関を出、言われた庭に回って見ると、おそらく主人の趣味なのだろつ、木製の棚に綺麗に並べられた、たくさんの盆栽。

春になればそれらを見事に彩るだろつ花の木々が庭の四方に植えられている。

辛夷に躑躅、桜、皐月。

あと二月もすれば、どんな美しい光景になることか。

「春になったら、また連れて来てもらおうかな…」

花が咲く頃、もう一度この町に。

それはきつと難しいことではない。

尋人が四月から通う事になるのは、自宅から多少離れた町の私立高校で、ここ松浦市に近い場所だ。

同じ高校に合格した菊池が、春からは祖父母と一緒に暮らすことも考えているくらいだから、帰りに立ち寄りさせてもらえばいい。

最も、地元まで帰るにはどちらも交通の便が不自由なため、泊りがけになってしまわなくもないのだけれど。

何なら一緒に寮に入るか？

以前、春からの通学に一時間以上掛かる話をしていたとき、菊池がそんなことを言い出した。

地元から松浦市までバスで四十分、松浦市から電車に乗り換え高校最寄りの駅までが十五分。

そこから更にバスで二十分行き、下車した後、五分ほど歩けばようやく学校に到着だ。

そのような辺境の地にありながらも入学希望者が絶えないのは、欧米スタイルを取り入れた独特の学習システムと、それを反映したように、学業レベルの高さが近隣の高校と比べて優秀だという事実

があるからだ。

そのため、学校側はどんな遠方からの希望者も受け入れられるよう、校舎の傍に男子女子それぞれに学生寮を設け、希望者の入寮を歓迎しているのである。

通学に片道一時間半となれば寮に入る理由は十二分にあるわけだが、尋人にはそう出来ない理由がある。

おそらく記憶喪失も要因の一つ。

母親が、それを許さないのだ。

「そんな遠くの高校を受験しなくても……」と渋る両親に、どうしてもこの高校に通いたいと望んだ尋人へ提示された条件が「自宅からの通学」だった。

寮に入ることだけは、絶対に認められなかったのだ。

「……」

尋人は朝早い空を見上げ、この街に行つて来ると告げた時の両親の顔を思い出す。

記憶を取り戻す為に……とは言わなかった。

春から通う高校で使う教科書や制服、そういったものを揃えるのと同時に交通機関にも慣れるためと説明して、ようやく三日間の外泊許可を得た。

もし、記憶を取り戻したいと告げたら、両親はどんな顔をしただろう。

ただの一度も、尋人の失くした記憶を惜しむようなことを口にしていない二人は、……頑張って思い出しなさいとは、決して言ってくれないだろう。

「……記憶を取り戻せたら、その理由も全部判るのかな……」

記憶を失くした原因が解かったら、知りたいと思うこと、全てを得られるのか。

「……」

ポケットに入れた携帯電話は、まったく変化を見せない。

あの人は、明日になったら会ってくれるのだろうか……？



「あ、倉橋？」

「！」

不安に沈みかけていた尋人を、良いタイミングで愛犬の散歩から戻ってきた菊池が救い上げる。

「はよ。まだゆっくり休んでいても良かったんだぜ？」

「うん……。なんか、目が覚めちゃったから……。おはよ」

にこつ、と無理に笑顔を作っているのが明らかな尋人の様子を見て取り、菊池は表情を歪ませた。

それは、相手に気付かせることのない些細な変化。

胸に生じるわずかな痛み。

「……まあたオマエ、後ろ向きなコト考えて落ち込んでたんだろ」  
故意的にわざとらしい声を上げて、尋人の髪を掻き乱す。

「毎回言ってるじゃん、会おうとしないなら家まで押し掛ければいいんだって！ おまえと六条中流は絶対に会えるよ」

絶対に会わせてやる、この自分が。

その瞳から、二度と哀しい涙が流れることのないように。

「だから悩むなよ、な？」

「……ん」

力強く言い切ると、尋人もはつきりと頷く。

自分の為にここまで真剣になってくれる菊池の気持ちに裏切ることの無いよう、きつと大丈夫だと自分自身に言い聞かせながら。

「じゃ、今日はどうする？ 六条中流に会う前に二年間の自分の情報を集めるってのは聞いたけど、具体的にどこらへん回るか決めてあるのか？」

愛犬の紐を、庭の所定の位置に結び直しながら問われて、尋人は「学校に行きたいんだ」と告げた。

「もう卒業式は終わっているから先輩はいないと思うけど、元の同級生はまだ学校にいるはずだから」

「ああ、なるほど」

二人は中学校の卒業式を終えて既に春休みへと入っているが、尋

人の元同級生達は、まだ三学期の途中。

高校一年生の三学期なのだ。

彼の失くした二年間を知っているだろう友人達は、学校に行けば必ず会える。

「転校前に挨拶も出来なかったから、会ったら驚かれるかもしれないけど…、でも、自分を知るためには彼らに会うのが一番だと思うんだ」

「だな」

菊池も了解し、その日の最初の行き先は決まった。

私立榊学園。

それは全ての始まりの場所　　。

## 時の旅人 二

正確には一年半でも、尋人にとっては三年以上振りに見上げる町並み。

かつては毎日のように歩いた通学路。

四季折々の光景を彩る道脇の花々は、まだ芽吹く前の、冬の眠りから目覚めたばかりのあどけなさを残していた。

「……」

「なんか思い出す？」

隣を歩く菊池の問いかけに、しかし尋人は言葉が出なかった。ずっと歩いてきたはずの道に、何故こつも戸惑うのか。

久々というだけが理由ではない。

見慣れない建物が増えたせいだけでもない。

この道を、自分は どうやって歩いていたらろう……？

「誰かと一緒だったのかも……」

「誰かつて？」

「……誰、かな……」

「……」

尋人の視線が四方を彷徨う。

それはまるで、目の前の光景から、決して見えないものを見つけ出そうとするかのように。

「……僕の家は学校から十分くらい、すごく近い場所にあつて……。友達と帰ったりすることもあつたけど、一人のことの方が多かったんだ。朝は誰より早く行ってたんだよ、人が多い時間にこの道を通るのは……なんか勿体無い気がして……」

「勿体無いって？」

「うん、……花が綺麗だし、……ほら、周りにあんまり建物が無いから、見晴らしが良くて、川沿いとか、公園の横とか……一人で歩くのが楽しかった……」

「ふうん。…そういわれてみれば、倉橋ってあんまり大勢で帰ったりしなかったよな、俺達ともさ。たまに後ろ歩いてたりしたけど…なんつーか心ここに在らず、みたいな」

「見てたんだ？」

「恥ずかしそうに。」

それでいて、どこか気まずそうに頬を赤らめた尋人。

菊池は「悪い悪い」と苦笑した。

「で？ そんなふうになんか一人で歩いてたのに、誰かと一緒にいたような気がするって？」

「あ、うん…」

尋人は、そう問いかけてくる友人に、巧くかわされたのかもしれないと思いつつも、素直に頷く。

「一人で歩くのは、何だか淋しい気がする。菊池君と、こうやって話しながら歩いているのが…何か、懐かしいんだ」

「懐かしい、か」

学校までの道。

家までの帰り道。

いつも一人で歩き慣れてきたこの道を、いつから、誰と、語りながら歩くようになったのだろう。

その相手の名を、二人は口にこそしなかったけれど、知っている。きつとその人だと、確信に近い予感。

「…あれが、榊学園の校舎だよ」

二人の少年が向かう先に見えてきた巨大な複数の建物。

小学校、中学校、高校 最長で十二年間の一貫教育制度を設けている私立榊学園は、もう、彼らの目の前だった。

尋人と菊池が学園校舎を目にしたのと同じ頃、榊学園校内では、時枝彬が、二年生の授業を終えて職員室へ戻るところだった。

今まで三年生の学級担任を務めていた彼は、教え子が卒業して以降、受け持っている二年生のクラスが無い時には代理教員として自習監督を任されたり、年度末に向けての書類整理に時間を費やしていた。

「いつそ連休を取って尚也と旅行にでも行ければいいんだけどね」とは、卒業式を目前にした恋人に、彬が半ば本音で漏らしたことが、それはもちろん「仕事に責任持ちやがれ」と厳しく却下されてしまった。

本人としては、尚也と再会し、晴れて恋人同士となれたのだから、もう教師など辞めて構わないのだが、無職の男と付き合うつもりなどないと言われては仕方がない。

そのうえ、昨日あれだけ怒らせてしまったのだから、当分の間は彼の神経を逆撫でるような言動を慎もうと思う彬だ。

(…それにしても…)

内心で呟き、彬は口元を緩める。

昨日の、見知らぬ少年二人に自分達のキスシーンを見られてしまった一件。

あの時の尚也の、何と可愛かったことか。

呆然と立ち尽くす彼を車に乗せ、彬の自宅に向かった後、尚也は当然のごとく男を責めた。

だが、尚也の言う内容をまとめれば、関係がばれて自分達が引き離されることを何より怯えていた。

皆に知られて中傷されることよりも。

彬を失うことを怖がっていたのだ。

決して尚也の傍を離れはしない。

ずっと愛していると告げ、…まあそういう展開に流れ込んだわけだが。

(まったたく…いつの間にあんなに素直に…)

自分に抱かれて感じている恋人の姿を思い出し、男の表情はいっそう緩んだ。

それは陽の高い時間に、しかも清き学び舎で聖職者がする顔ではない。

ただ一つ幸いだったのは、それを生徒が見てしまつより早く、指摘する者が現れたことだろう。

「…センセ、その顔、アブなすぎ」

心底呆れた物言いで声を掛けてきたのは、本当なら既にこの場にはいないはずの少年。

数週間前に榊学園高等部を卒業した、彬の元教え子、野口健吾だった。

「野口、どうしたんだ、学校にいるなんて」

彬が少なからず驚いて応えると、野口は苦笑して自分の顔を指差す。

「それはこつちの台詞。そういう顔するんだつたら、学校にいるべきじゃないんじゃないの？」

遠慮のないことを言う彼に、彬も苦笑するしかない。

「…そんなに問題ある顔をしていたか？」

「かなり問題アリだね、夜の恋人の顔を思い出して興奮してたって感じ」

「……………」

当たらずとも遠からず…、否、まさにその通りの指摘に、言葉が詰まってしまう。

「…おまえは腕のイイ探偵にでもなれそうだな」

「…センセ、今のはちよつと否定して欲しかったトコだけど」

本当にそんなことを考えていたのかと、野口は自分の読みの鋭さに感心するやら頭痛がするやらで眉を顰めたが、担任がこつという男だったから卒業まで楽しかったのも確かで、呆れこそすれ、軽蔑は出来なかった。

ただ、自分の読みが本当に正しければ、その相手が相手だったり

するわけで。

「はあ…まさかホントにねえ…」

そう呟く野口の言い方に、なにか深い意味を感じ取った彬だったが、それを問おうとすると、

「俺は部活の後輩に届け物があつて来たんだけどさ、それより…」  
と、逆に問われる形になつてしまった。

「センス、中流の見送りに行つたんだろ？」

「ああ。あいつ、おまえが見送りに来られなかったことを残念がつてたぞ」

「だつたらイキナリ予定を早めるなつての。俺だつて見送りに行きたかつたのにさ、急すぎて仕事のシフト変えてもらうことも出来なかつたんだぜ」

軽く息を吐いて言い放つた野口は、しかし何かを探るような視線で彬を見た。

「…で、アイツ元気そうだった？」

「？ ああ、いつもと変わらない様子だったよ。あいつらしい別れ方だった」

「そっか…」

彬の返答に、野口はどこか安堵したように笑った。

「何か心配することでもあつたのか？」

「いや。ただ、あんまり急な出発だったからさ…やっぱ気になつて。行つちまう前に会いたかつたし」

「おまえに、よろしく伝えてくれつて言つてたよ」

「そっか」

そうして野口は複雑そうな笑みを覗かせた。

中流を案じているのが明らかな表情。

元教え子のそんな姿を見ていて、彬は自分の恋人が言つていたことを思い出す。

中流は自分のことを話さない。

自分の幸せのことなど考えもしない。

いつだって他人のことばかり思い遣る六条中流は、……ならば誰になら本音を語れるのだろうか。

「野口、もしかして……」

もしかして。

おまえには、何か言い残したことがあるのか？

そう問い詰めようとした矢先、視界を横切った私服姿の少年達。

「？」

まだ春休みには早い。

卒業生にしては体つきが幼すぎる。

見慣れぬ二人連れを目に留めて、数秒後。

彼らが昨日の 自分と尚也のキスシーンを目撃した少年達だと、その外観を思い出した。

「……」

まさか尚也の不安が的中し、彬を神学園の教師だと知り、何かを言いに来たのだろうか。

それとも探りに来たのか？

「」

「……センセ？」

何かを言いかけながら、意識が自分から外れている事に気付いた野口が、彬の目線の先を追った。

そうしてそこに佇む少年二人の 少年の姿を目にして、野口の思考も停止した。

「え……？」

彬とは違う理由で、野口は自分の目を疑った。

そんなわけがなかった。

何故、あの少年がここにいる？

この土地を離れ、去っていったはずだ。

友人にあんな顔をさせて、別れを告げたのではなかったか。



「ヒロト君……」

「野口？」

教え子の呟きに、彬は再度驚き、呼びかけた。そうして彼の、どこか怒りにさえ似た感情を露にした表情に絶句する。

「野口……」

教師と、卒業し私服で校内にいた元生徒が不自然に足を止め、一点を凝視したまま立ち尽くしている。

その姿は、逆に尋人と菊池の視線を引き寄せた。

### 時の旅人 三

視線を感じて振り向くと、教師らしい男性と、まだ学生らしさの残る私服の青年が、怪訝な顔つきでこちらを見ていた。

「き、菊池君…」

「ん？」

どうしたのかと目で聞き、尋人の視線の先を追った菊池は、そこでようやく二つの視線　彬と野口に気が付いた。

「…どうしよう、何だか…睨まれてる…」

「部外者が校内にいるから不審がられてるんだろ。気にするなって、事情を話せば理解してくれるさ」

「…」

菊池はそう言っけれど、彼らの視線には穏やかでないものが感じられる。

教師と卒業生、だろうか。

以前は自分もここに通っていた。

もしかしたら面識があるのかもしれないし…、それならば、彼らにあのような目で見られる理由もあるのだろうか…？

「あ…っ」

どこかで会ったのかもしれないと、再度彼らの顔を見やった尋人はハツとする。

教師の目を引く容貌。

その、視線。

「菊池君っ、あの先生！　昨日の駅の駐車場の…っ」

「は？」

尋人の動揺振りを、最初は不審そうに見返した菊池だったが、昨日の駅の駐車場と言われてみれば、ようやく気付いた。

昨日、この街に着くなり駅近くの駐車場で目撃してしまった男同士のキスシーン。

まさかその片割れが、榊学園の教師だったとは……。

(世も末……)

内心で息を吐きながらも、菊池は彼らに向かって一礼した。

それは、彼らから声を掛けてくるきっかけを与えるため。

すると攻が奏したのか、教師の方ではなく、私服姿の卒業生が足早に歩み寄ってきた。

「野口？」

教師が彼を“野口”と呼ぶ。

尋人が、無意識に後退りした。

「在校生じゃない部外者が、こんなところまで入り込んでいいと思ってるのか？」

突然、攻撃的な口調で言い放った野口に、彬は驚いたし、菊池はムツとして彼を睨み付けた。

ましてや、射抜くような視線に見据えられた尋人は逃げ出したい衝動に駆られる。

だが、矢継ぎ早やに放たれた次の言葉が、尋人をここに留まらせた。

「君は転校して、もう榊の生徒じゃなくなっただら？」

転校したから、榊の生徒じゃなくなった。

そう言えるのは、彼が尋人を知っているからに他ならない。

「あ…あの、貴方は…僕を知っているんですか……？」

意を決して訊ねた尋人に、野口は眉根を寄せ、ただ一言。

「俺は中流のダチだからな」と言い返した。

六条中流の友人。

その言葉は、野口にしてみれば相手を威嚇する為に選んだ返答だった。

友人にあんな顔をさせ“別れ”を選ばせた尋人にとって、六条中

流の名前は禁句に近いものだろうと思っていたからだ。

だが、そうして尋人の見せた表情に、野口の方が言葉を失う。

何故、別れを選ばせた尋人の方が、そんなにも哀しい顔をするのか。

「ヒロト君…？」

「貴方、は…六条先輩のお友達で…、僕を知っているんですか…」

「本当に…？」

「ホントに…って…」

少年の真剣な眼差しが、自分が今まで思い込んでいた過去に疑問を生じさせる。

あんなにも幸せそうだった中流と尋人が“別れ”を選んだ。

「本当にいいのか」と問うた自分に「仕方ないんだ」と返した中流。尋人には引越した先で本当の幸せを見つけて欲しいと告げ、泣く代わりに微笑うことを選んだ友人。

それ以上は何も語ろうとしないから、中流が尋人に振られたのだと、…中流がまだ尋人を好きでいるのは明らかだったから、彼が一方的に振られたのだと勝手に思い込んでいたけれど。

「……ヒロト君、一つ訊いていいか？」

「はい…」

「君、どうして榊から転校していったんだ？」

まさかと疑う野口に、尋人は明かす。

「事故で、二年前からの記憶を失くしてしまっ…」

「」

二年前から　中流と付き合う以前からの記憶を、全て失くして。中流を忘れたから。

…忘れられたから、別れを選んで、あんな顔を…？

「…っ…、それで、今日は…中流に会いに来たのか？　あいつのこと、…どうして知ったんだ？」

「六条先輩は、事故に遭った僕を助けて、病院まで搬送して下さいましたんです。…命の恩人というか…」

命の恩人。

そんな嘘の過去で、騙して。

「六条先輩には、明日、お逢いしようと思っっているんです。…その前に、少しでも以前の自分のことを知っておこうと思って、学園に…」

「明日…?」

彼らの会話を黙って聞いていた杉は「明日」という言葉に首を傾げたが、野口はそれで合点がいったようだった。

「明日、会いたいです…、それ、中流に伝えてあるのか?」

「はい、…一週間くらい前に手紙で…」

「」

一週間くらい前。

それが、中流がアフリカへの出発を早めると決めた頃に一致する…」

野口も、杉も、確信する。

…っ…あのバカ…っ!

野口は胸中に叫んだ。

それが出発を早めた理由か。

日本から逃げ出した理由か。

言い様のない怒りが募る。

どうして逃げなければならぬのか。

記憶を失くして、忘れられたからなのか。

詳しいことも、正しいことも。

…中流の考えていることも、何も判らないけれど。

「…っ…、残念だけど、君、中流には会えないよ」

「え…っ」

「何でだよ…」

野口の言葉に、今度は菊池が勢い良く食って掛かった。

「会えないって何だよ！ 六条中流の方に会う気がなくなつて俺達は……」

「会う気がないとかじゃなくて、……あいつ、一ヶ月前からアフリカに行ったままなんだ」

「……！」

「……」

一ヶ月前からアフリカに。

野口のついた嘘に、……だが彬は敢えて何も言わなかった。

「だから、中流に君からの手紙は届いてないし、この街に戻ってきてることも知らないままだ」

「そんな……」

「タイミング悪かったな。帰ってくるのだから、いつになるか判らないしさ……」

「……」

目に見えて落ち込んでしまった尋人の様子に、野口は罪悪感を募らせた。

この嘘にどれだけの効果があるかは判らないが、せめて、中流が尋人から逃げたことだけは知らせずに帰したいと思った。

「君が会いに来てたこと、俺が責任持つてアイツに伝えておくよ……」

「ごめんな……」

「え、あ、いえ、貴方が悪いわけじゃ……っ」

唐突な謝罪の言葉に、尋人は慌てて顔を上げると、真っ直ぐに野口を見返した。

その視線に感じ取れる、最初とは異なる感情の色に、尋人の心には切なさが増えそうだった。

会いたい人はいない。

一月前から日本を離れていたなら、自分の手紙が彼の目に触れることは無く、……返事が来ないのも、当然だ。

「……あの、お願いします。僕が…、お礼を言いたがってたって…  
…お伝えしてください」

「ん」

「倉橋…いいのかよ、それで」

「だって…手紙も届いていなかったんじゃ仕方ないよ…。突然会いたがった僕が悪いんだし…」

「でも…」

違う　と、野口も杉も、思わず口をついて出そうになった言葉を飲み込んだ。

ここで“嘘”を壊すわけにはいかない。

尋人に申し訳ないと感じるのは本音でも、彼らは彼らなりに六条中流という人間を知っているから。

「……あの、最後に…一つ…、お聞きしてもいいですか？」

「…何かな」

「貴方は、六条先輩のお友達で…、どうして…僕のことを知っていたんですか…?」

事故に遭った尋人を、偶然助けて病院に搬送した六条中流。

そこに“偶然”以外の繋がりが存在しないなら、六条中流の友人だと言う野口が尋人を知っているのは、どういう理由か。

「……」

転校していった理由を知らなかった自分に、事故に遭った尋人を助けたと聞いたなんて嘘の上塗りを通じない。

野口は必死に頭を働かせ、もはや勢いで口を開いた。

「…二年前の体育祭だったかな…同じチームで戦ったことあっただろ」

「え…僕と、先輩がですか？」

「そ。俺と君と、中流も」

「……」

「でさ、去年の暮れに中流の写真が受賞して…って、あいつが写真家目指してるのは知ってるか？」

「……」

コクンと頷くのを確認して、続ける。

「それからしばらく、ストーカーみたいなのがついてさ……とつくに榊の生徒じゃない君がこんなところにいるから、まさかと思ったんだ」

「それで……最初、あんなに怖い顔で……？」

「ごめんな、誤解して」

「倉橋がストーカーなんかしそうに見えるかよ」

「だから、悪かったって」

無然と言い放つ菊池に、野口はもう一度謝り。

……最後に、深く頭を下げて校舎を出て行く尋人を見送った。

小さくなる二つの背中。

久方ぶりに見た、あの日の少年。

「あのバカ……っ」

今度こそ声にして中流を責める野口に、彬はようやく口を開く。

「……野口、どうしてあんな嘘を？」

「……」

「あの子……ヒロト君だったかな。……彼は、六条の何なんだ？」

「……」

逸らされない視線。

この男を、信用はしてもいいと思う。

だが、彼が尋人を知らなかったのは、中流が彼に……そして尚也にも、何も話していないからだろう。

ならば、それを自分が話していいはずはない。

「……俺からは何も話せない」

「野口」

「ただ言えるのは、……中流が救いようのないバカだったことだ……っ！」

心から悔しげに言い放つ野口の、その言葉は、



何よりも中流を気遣うように響いた……。

## 時の旅人 四

彼に会えない。

先輩は、もういない…。

六条中流には逢えないという結末が、尋人の心に重く押し掛かった。

そういう結果を、考えていなかったわけではない。

一週間以上前に出した手紙に対して、六条中流からの返答は何もなく、もしかしたら避けられているのかもしれないと不安になることもあった。

だから、故意的に無視されていたわけではないと判っただけ「良かった」と思つて良いのかもしれない。

…だが。

「倉橋、大丈夫か？」

「……うん」

隣を歩く友人に氣遣われて、すぐに頷きはするものの、その胸中が「大丈夫」でないのは見れば判る。

「……倉橋。…ほら、シヨックだったとは思うけど、…嫌われて無視されてるわけじゃなかったんだから、まだ良かったじゃん」

「………ん」

菊池も同じことを言う。

そうなんだ。

自分が来ることが伝わっていなかったなら、会えないのは仕方がない。

偶然が重なって知り合った、というだけでしかない自分が、どんなに逢いたがったところで、連絡も届かずに待っていてもらえるはずがないのだ。

「………」

「…倉橋」

仕方がないのだと思っても。

…そう割り切ろうと思えば思うほど、どうしようもなく胸が締め付けられるけれど、泣きそうな顔を菊池に見られて、尋人は潤む視界を拳で振り払った。

なんの関係もないのに、ここまで一緒に来てくれた友人に、情けない姿は見せられない。

「大丈夫。先輩に会う機会は、これからもあると思うし…高校に通うようになったら、この街は毎日来る事になるんだから。…今回は駄目だったけど、次は逢えるんだって、信じることにする」

「ああ」

強がりだと判っても、そう言っただけじゃなく、笑む尋人に、菊池も笑い返して頷く。

そつだ、逢う機会は今回だけじゃない。

尋人が逢うことを望んでいる限りは、いつだってそれを叶えることが出来る。

「…よし、じゃあ予定より少し早いけど、教科書買いに街へ出るか？」

「うん」

本当は、榊学園で元同級生達と話が出来たらと考えていたのに、六条中流と会えないのなら、それらは全て意味を持たないように思えた。

一度も振り返ることなく学園を後にし、徒歩で駅へと向かった。

その途中に通る、駅最寄の駐車場。

「あ、…そう…言えば、昨日、ここで…あの、キスしてた男の人…」  
尋人が言葉を濁しながら切り出すと、菊池も眉間に皺を寄せて肯定する。

「別に同性愛に偏見なんか持っちゃいけないけどさ、あれがまさか教

師だったとはな…。ま、相手の奴にまで学校で会わずに済んで良かったけどさ」

「うん…、でも、綺麗な人だったよね」

「は？」

菊池が怪訝な表情で聞き返すと、尋人は動揺しつつも繰り返す。

「学校で会った先生…の、こと。なんか…清潔な印象って言うのかな…」

「もしかしたら教え子に手え出してるかもしれない変態教師だぞ？」

「え…と、うん、僕の勘違いかもしれないけど、…何だか、貴土医師に似ている気がするから」

「タカシ…って、ああ、昨日の医者？」

この街に着いてすぐに訪れた大樹総合病院。

そこで尋人の担当医だったと紹介された辻貴土の、理知的で懐の大きそうな外観を思い出しながら、菊池はますます顔を歪ませた。

「あの医者との教師じゃ似ても似つかない気がするぞ」

「うん…」

菊池が心底疑わしそうに返してくるから、もともと自信があって言っていたわけじゃない尋人もつい情けない顔になる。

「そっかな…僕の気のせいだね」

「そっだそっだ。そんなこと言ったら貴土医師に失礼だぞ」

「うん…」

当人達が聞いていれば、一体どんな反応を見せるか興味深い会話をしながら、少年二人は駐車場を過ぎて駅へ向かい、教科書販売の指定店がある街まで電車で向かった。

快速に乗っておよそ十五分。

平日の昼前ということもあり、そんなに混み合っていない車内。

そこから街中へと降り立った二人は、一瞬、同時に足を止めてしまった。

「……すげえ人だな、おい」

菊池が隣で呟くことに、尋人もコクコクと頷く。

引越す以前なら何度かこの街を訪れることもあったはずだが、三年前までの記憶しか持たない体は、無意識にすくんでしまう。

週末の光景を知る者ならば、今日など実に歩きやすい街並みだったが、田舎から出てきたばかりの少年達にとっては信じ難い人の数だ。

「なんか僕：人に酔いそう」

「：だな」

二人は顔を見合わせ、そんな自分達に苦笑すると、まるで冒険を始めるような心持で足を動かす。

合格発表の後、自宅に郵送されてきた入学案内書、そこに同封されていた指定店の地図を頼りに目的地を探し始めた。

なかなか見つからないまま昼を過ぎ、腹が空いたからとファーストフード店に入り、セットメニューでエネルギー補給。

店内でもう一度地図を確認し、再び出発。

地元では考えられない店の多さに、

「教科書を買ったら少し見て回ろう」と話していた二人だが、実際に店を発見し、教科書を購入してしまうと、その重さに愕然。

余計な寄り道は断念せざるを得なかった。

そうして駅まで戻る途中。

中学を卒業したばかりという幼い少年達が、春から使う何十冊もの教科書を重たそうに抱えている姿が人目を引いたのだろうか。

「こんにちは」と妙に明るい声を掛けられた尋人が顔を向けると、マイクを持った若い女性が二人の傍に近付いてくる。

「え……」

「あ」

どこかで見覚えのある女性。

その背後には何の動物なのか判断しかねるデザインの着ぐるみ。その正体には、尋人よりも菊池の方が先に気付いた。

「倉橋、テレビテレビ」

「え？」

そう言われても、いまいち呑み込めずにいた尋人。

マイクを持つ女性はくすくすと笑いながら、

「こんにちは“2時 ステ”です」と、さすがの尋人も聞き覚えのある番組名を口にする。

“2時 ステ”と言えば昼以降の駅周辺の状況を中心に、街の人気スポットや周辺の名店紹介、または色々なお得情報を流すという、いわゆる地方番組だ。

北海道全土で放送されるため、もちろん尋人達の地元でも放送されているわけで。

もしかしたら家族や友人が目にしていないかもしれないと気づき、途端に背筋が伸びた。

「あ、あ、こんにちは」

「こんにちは」

女性は、もちろんテレビに出ているせいもあるだろうが、とても感じ良く、尋人の挨拶に何度目かになる「こんにちは」を返してくれた。

「随分重たい荷物を持っているようだけど、もしかして春からの教科書が入っているのかな？」

「は、はい」

戸惑いながらも頷くと、女性はニッコリと笑い、少し時間いいかなと訊ねてきた。

あと数分で番組が切り替わり、この周辺の状況を放送するため、その間に話を聞かせて欲しいと言うのだ。

尋人は菊池と顔を見合わせ、困った表情を浮かべるが、女性アナ

ウンサーの話術は巧みで、嫌味がなく、尋人達から自然な返答を引き出させた。

ほんの数分の中に、春から通う高校のこと、どこから来たのか、地元で待っている家族へのメッセージ……様々な内容を語ってしまった。

「ありがとう」と女性に礼を言われた後で、何を喋ったのかほとんど思い出せなかった二人。

ようやく解放されて家へと帰る途中、緊張と同じくらいの興奮で、二人は今までになく喋り捲った。

それが、後にどんな影響を及ぼすかなど、考えもしないまま。

「…今の…」

ある家屋の一室。

アパートの一室。

または、ある店の中。

特に意味もなく流れていたテレビ番組に知人が映ったのを知り、彼らは呆然と呟いた。

「今のガキ……っ」

男は歯軋りし、今見た少年の、あの日の出来事を思い出した。ようやく見つけた。

自分をこんな闇に追い落とした奴。

「テメエのせいで、あれからオレ達がどんな目に遭ったか……っ！」  
時を経て、少しは薄れたかと思いついていた憎悪が、いま再び膨らむ。

“復讐” その言葉が脳裏に燃え上がる。  
やっと見つけた報復相手に、男は力強く拳を握り締めた。

「あいつら……」

その少年の無意識の呟きを、その場の誰一人として聞きはしない。  
紫煙の燻る暗い店内。

…ただ、少年の立ち尽くす姿だけが異様だった。

「…尋人君…いつ、この街に戻って…？」

おそらく独り言だろう呟きに、隣で聞いていた彼は何の返答もし  
なかった。

ただ、アフリカへの出発を早めた六条中流の本心が見えた気がし  
た。

「……中流さん……っ」

胸が痛い。

あの夜、流れ込んできた残酷な映像が蘇える。

「……」

彼は、隣で泣きそうな顔をするその人の手を握る。  
静かに。

…静かに、包み込んだ。





## 時の旅人 五

「昨日の二人が学校に!？」

彬から、午前中の学校での話を聞き終えた尚也は、驚きのあまり大声を上げてしまった。

昨日の駅近くの駐車場で二人のキスシーンを目撃した少年達。

もしも素性が知れて大事になったら…と心配していた尚也にとつて、その話は、出来れば実現して欲しくなかった展開だ。

「…で、オマエどうしたんだよ…っ、そいつらオマエのこと知って学校に来たのか？」

不安から、思わず語尾が掠れてしまった尚也に、だが彬は苦笑する。

恋人の不安を知っているから、笑んで、それを否定した。

「俺がその場に居合わせたのは、ただの偶然だよ。あの子達は自分の元同級生に会いに来たつもりだったようだから」

「元同級生…？」

「ああ。二人の内、気弱そうな子の方を覚えてるか？」

「…俺と最初に目が合った方かな」

「ん。その子が去年まで榊の生徒だったらしい。ヒロト君と言ったかな」

「ヒロト…?」

彬が目的で学園に現れたわけではないと聞き、内心で胸を撫で下ろす尚也だったが、その名前に、ふと引っ掛かるものを感じた。

「ヒロト…?」

「尚也？」

もう一度その名前を繰り返し、首を傾げる。

「何だ…？俺、どっかで“ヒロト”って名前を聞いた覚えがある

…」

「おまえもか」

「え？」

「野口はその子を知っていたぞ」

「野口？」

思い掛けないところで友人の名前を聞き、尚也は目を丸くする。

「なんでアイツが一緒だったんだ？」

「それこそ偶然だよ。部活の後輩に届け物があったとかで榊に来ていたんだ」

「へえ……」

つい最近までは同じ教室で過ごしてきたはずなのに、卒業式を過ぎただけで高校時代が懐かしい。

あまり口数の多い方ではなかったけれど、よく一緒に行動していた野口健吾は、後輩の面倒見が良く、中等部にも頻繁に足を運んでいたことを思い出す。

「…それにしたって、なんで野口は“ヒロト”を知ってるんだろ……」

「二年前の体育祭で同じチームだったと言っていたから、尚也も同じだったんじゃないか？」

「二年前の体育祭……？」

「ああ。話を聞いていたら、そのヒロト君、一年半前に交通事故に遭ったせいで記憶を失くしてしまったんだそうだ」

「は？」

サラリと言われて、思わず流しそうになってしまった尚也は、しかしハツと我に返る。

「記憶失くしたって記憶喪失のことか！？ それって…それで何だつて学校に…っ、それが転校してつた理由か！？」

「転校？」

「そうだよ、それを俺、また知らなくて中流に……」  
中流に。

転校していったことを知らなくて。

最近、中等部に行かなくなったよな……

そんな台詞で、怒らせるかもしれない高一の三学期始め。

およそ一年半前の、あの日。

「…思い出した……」

「尚也？」

「そうだ“ヒロト”だ……そうだ……つ、中流が可愛がってた下級生の名前だよ！」

「可愛がってた？」

ようやく合点がいき、スッキリした顔で声を上げる尚也に、しかし今度は彬の方が眉を寄せる。

野口の話では、そんな特別な繋がりがあるようには思えなかったのだ。

「野口は、そのヒロト君を六条のストーカーだと勘違いしていたぞ」「ストーカー？」

「六条は、ヒロト君が事故に遭った時にたまたま居合わせただけに、親戚が医者だからって、あの大樹総合病院に搬送させて、ヒロト君の命が助かるように手を尽くしてくれたんだそうだ。こ

れはヒロト君本人から聞いた話だから本当だと思うけど、野口はそれを知らなかったから、ここ最近、六条の周りをうろついているストーカーだと勘違いしたらしい。写真が受賞してから、いろんな連中が寄ってくるって言ってたろ」

「そりゃ言ってたけど……」

いろんな連中というのは、いわゆる言い寄ってくる女、やつかみを言う同志、そういつたある意味現れて当たり前の存在のことで、もしもストーカーが存在していたなら、尚也はそんな話を聞いたことがない。

一番長く付き合ってきて、親友だと、思っているのに。

……なぜ、自分の知らないことを野口が知っているのか……それが、面白くない。

「絶っ…対に違う。ヒロトって名前、中流が可愛がってた後輩の名

前だ。それで去年の三学期が終る前に転校してっ……」

それは野口も知っているはず。

あの日、あの場には彼もいた。

「野口のヤツ……なんで、その“ヒロト”をストーカーと間違っただけ？」

「その上、六条がアフリカに出発したのは一月前だなんて嘘まで言っただろ」

「……なんで？」

「さあ。……まあ、たぶんヒロト君が一週間以上前に会いに来るって手紙を出していたにも拘らず出発した六条を庇うためだろうな」

説明しながら、彬は最後の野口の表情、その口調を思い出す。

言っている内容は厳しかったけれど、そこに含まれていたのは、明らかに中流への気遣いだった。

「……じゃあ、なんで可愛がってた後輩が会いに来るって判ってて、中流は日本を出てったんだ？」

「……何故かな」

二人は互いに顔を見合わせ、首を傾げる。

中流の急な出発と。

ヒロトの来訪。

野口の嘘。

可愛がっていた後輩が、事故現場にたまたま居合わせたただけだと教えられた六条中流は、……尚也が知る限り“ヒロト”をひどく可愛がっていた。

とても大切にしていたように思う。

そんな尚也の話に、彬はふと思いついたように口を開いた。

「……六条が、過去に“男”と何かあったのかどうか、という話だが……」

いつだったか二人で推測した、あの親友の過去。

決して語られることのない、癒えない傷。

…好きな奴に好きだって言える…こんな幸せなことないぞ…

それは。

自分との時間を失くした 記憶を失くした、ヒロトのこと……？

「…っ……あいつ、ホントに自分のこと何も話さねえ…っ」

「尚也…」

「記憶喪失だつて何だつて…っ……好きなら、言えればいいじゃないか自分はおまえの恋人なんだつて!!」

あんな顔をして、好きな相手に好きと言えることを尊ぶなら。

ヒロトを望んでいるのなら。

「なんで…っ……それで会わないためにイキナリ出発したのか!? アフリカなんか逃げたのかよ、あのバカ!!」

憤る尚也に、彬は顔つきを険しくし、あの元教え子に言われた言葉の数々を思い出す。

他人の“幸せ”を望む彼は、…もし本当に“ヒロト”が彼の恋人だったとして。

記憶を失くした恋人に、どんな“幸せ”を望むだろうか……。

「……六条は、どうして言わなかったのかな」

「何がっ」

「ヒロト君に、どうして自分達は恋人同士だったって言わなかったのかな、と思つてね」

「それはおまえ…っ」

「記憶を失くした恋人に“男同士”なんて茨の道を歩かせたくなかつたから?」

「…っ」

「あの六条が…、それに、あの六条が好きになった相手が、そんな理由で“不幸”になつたりするかな」

「…それは…」

肯定は出来ない。

それこそ、長年の付き合いが尚也に理解させる。

「……だったら、なんで何も言わないんだ……？」

好きな相手に、好きと言わずに。

卒業式前後には何人もの少女達から告白されて、それを全て断つた。

理由は「今は恋人なんかいらない」だったけれど、本音は「今は誰も好きになれない」。

その心に住めるのは、たった一人だけだから。

「……大樹総合病院か」

「え？」

「……一年半前なら、兄貴がもうあの病院に勤務していた」

「……彬、まさか……」

まさかと疑いながら、微かに期待してしまふ。

「……ん。あの兄貴が簡単に話してくれるとは思わない。それが患者のこととなれば尚更ね。兄貴がヒロト君を知っているかどうかも判らないけれど、……手掛かりがあるなら、試してみない手はないだろ  
う」

「……」

「俺も気になるよ。本当にヒロト君が六条の恋人だったなら、……野口にあんな嘘で庇われてまで、六条が逃げた理由」

「彬……」

それは、決して興味半分の提案ではなく。

ここにヒロトが来ることを知っていたながら日本を離れた中流に対して、ここで何かを知っておかなければ、後々、とてつもない後悔をしそうな気がする。

ここで何かをしなければ、何より、誰よりも中流を傷つけてしま  
う。

「……彬、頼むな」

尚也に頼まれて、彬ははっきりと頷く。

恋人の滅多にない頼み事に、あの兄への闘志が燃え上がるようだ。  
った。



## 時の旅人 六

アフリカ大陸最南端に位置し、日本国土の約2・3倍の土地を擁する南アフリカ共和国は、

第二次世界大戦後に独立し、十数年前に人種隔離政策を完全に廃止した事により、ようやく目覚めたばかりの若き国家だ。

近年では観光客も多く、グレーター・セント・ルシア湿地公園や、スタークフォンテン、スワー克蘭ズなど、広く知られた世界遺産や観光地も少なくない。

温暖な気候は暑過ぎず、寒過ぎず。

春には花が咲き乱れ、秋には紅葉。

そして何よりも、何処よりも広大で悠然とした大自然と、そこに息づく無数の動植物。

人々を魅了して止まない美しさで世界最高峰を誇る一方、この国には支配と差別の哀しい歴史が綴られてきた。

六条中流がアフリカへの渡航を決めたのは、ただの思い付きや興味本位からではない。

ずっと昔から。

…それこそ、父親の写真を目にし、画の中に風を感じ、自らも写真家を志すと決めるよりも早くから、アフリカは少年の憧れの土地であったのだ。

日本との時差、およそ七時間のこの国に、こちらの時間にして昨日の夜八時頃に入国した六条中流は、いま、ある写真家と合流していた。

佐伯幸也サエキコウヂ アフリカの大自然に魅せられ、この土地を何十年も撮り続けている彼の写真は、日本だけで十五万部を売り上げた実績を持つ。

この佐伯幸也氏が、中流の実父にして名誉ある賞を数多く受賞した世界に名だたる天才写真家・六条至流と旧知の仲だったことから、

アフリカに行く息子の面倒を見て欲しいという具合に、大人達の間で話が進んでいたからだ。

当初はこれを快く思わなかった中流だが、現実の問題として、アフリカという国の治安が良いとは決して言えない。

街中を歩いていて強盗に遭うなど珍しいことではなく、夜間に限らず白昼堂々、街中ですら起こる犯罪に、しかし周囲の人々が手を貸してくれることはほとんどない。

そのうえ“日本人はお金持ち”という誤った認識が根強いのに加え、ヨハネスブルクの犯罪率は別格だ。

アフリカ初心者の日本人が単独で乗り込めば狙われるのは必至。そこにカメラやバックパックを担いでいるのでは「襲ってください」と言っているようなものだ。

そういった事情を、いくら資料を読んで頭に入れてみても、実際に現場に立てば“知識”は何の役にも立たない。

そんな国に息子が行きたがるのを聞いて、心配しない親はいない。单身、異郷の地で撮り続けている写真家から学ぶこともある、それは必ず将来のためになる。親であり“師”でもある六条至流にそこまで言われては、中流に拒否することなど出来なかった。

そうして昨夜。

突然の予定変更にも拘らず、無理を聞き入れ、ヨハネスブルク国際空港まで迎えに来てくれた佐伯幸也氏は、だが異国に降り立ったばかりの中流に対し、歓迎の“か”の字も表しはしなかった。

その上、

「俺はガキのお守りはゴメンだ」

とりあえず助手席に座らされ、滞在先まで向かう途中の車内。

佐伯氏は中流の顔を一度も見ることなく言い放った。

「六条…、おまえの親父が面倒を見てくれと頭を下げたから迎えに来てやったまでだ。天才の父親に感謝することだな」

そう言われて、返す言葉がなかった。

結局は親の七光り。

ここまで来る渡航費も、カメラも、受賞した写真も。

技術を教わる以外は全て自分自身で積み上げてきたものでも、他人から見れば「天才・六条至流の息子」に過ぎない。

それほどまでに、父親はこの世界で偉大な存在なのだ。

「ご面倒を、お掛けします」

「全くだ」

即座に返された声音は冷淡で、わずかな感情も読み取れない。

それきり何も言えない中流に、佐伯氏は軽く息を吐き、ヨハネスブルク市内のバックパッカーに車を停めると、ここに一泊することを告げた。

「悪いと思うなら手間を掛けさせないようにしろ。明日は四時に出発する。行き先はクルーガー国立公園だ」

「え……」

出発時刻は間違いなく朝方の四時で、日本から着いたばかりの、まだ時差すら自覚出来ていない体をどれだけ休ませられるのか疑問だが、そんなことよりも、明日の行き先として告げられた場所に、中流の表情は無意識に輝いた。

クルーガー国立公園。

国の北東部・ムブマランガ州と、リンポポ・プロビンス州にまたがる一帯に広がる南アフリカ最大の観光地。

総面積約二万キロ平方メートル。

生息する動植物は世界最大。

この中、車で走れるよう設けられた舗装道路は二千キロメートルに及び、主なポイントを通過するには最低でも三日は掛かる広さだ。もちろん観光に行くわけではないが、安全を重視したうえでアフリカという国の自然に触れられるよう配慮してくれたのかもしれないと思うと、途端に心が軽くなった。

「一秒でも俺を待たせたら置いていく。分かったか」

「はい！」

今までの硬い表情はどこへやら、元気良く返事した中流に、佐伯氏は怪訝な顔をしてみせたが、それきり何も言わずに自分の部屋へと姿を消した。

中流のチエックインすら気にも留めずに。

そのときのことを思い出して、中流は我知らず苦笑する。

この国では、英語が出来ればどこでも通じると知っていたから、別段焦りもしなかったが、佐伯氏も「ここまで来るからには英語くらい喋れて当たり前」と思っていたのだろう。

数時間の仮眠を取り、四時出発ということだったため、三時半にはロビーに出た。

間違っても佐伯氏を待たすようなことはないように。

だが、にも拘らずこの三時半というのがギリギリの時刻で、この五分後には本人がロビーに現れ、出発は三時四十分に繰り上がってしまった。

どうにも食えない相手だと、中流はこのときに確信したのだった。

そうして、今。

中流の目の前には広大なサバンナが広がっている。

ヨハネスブルクから車でおよそ六時間。

クルーガー国立公園の南に位置するメルレーン・ゲートから入り、園内ほぼ中央に位置するレタバまで向かった二人は、そのキャンプ場にテントを張り、これから数日間、寝泊りする場所を確保した。

その後、

「俺は自分の予定を変えない。おまえは自分で好きにしろ」と言い残した佐伯氏は、車で出掛けてしまった。

残された中流は、多少は苛立つものもあつたが、それならそれで

と、レタバ・キャンプを見て回った。

園内の地図を手に、キャンプを離れ、サバンナを一人歩く。その途中に、何度も遭遇した野生の動物達。日本では定められた場所にしか存在しない動物達が、まるで犬猫のように木陰で昼寝し、草を食み、大地にじゃれつき、生きている。

.....

世界が、違った。

世界は無かった。

ここが、地球だ。

「……」

遙か彼方、地平線。

緩やかな弧を描く、それは地球の輪郭。

幼い頃には写真の中の画でしかなかった場所に、いま、こうして立っている。

風を感じ、熱に触れ、草木の声に耳を澄ませて命の音を聴く。

人類発祥の地と詠われ、世界最大の大自然と動植物を誇る国は、支配と差別の哀しい歴史を抱えながら“命”を輝かせている。

この美しい国に。

強い大地に。

「……おまえを連れてきたかったな……」

ぼつりと、それは無意識の想い。

中流は自嘲するように口元を歪め、感情を払うように頭を振ると、腰を落とし、写真機を構えた。

この国で撮る最初の一枚。

その一瞬を得るためなら、何時間でも待ち続ける。

そんな中流を、無言で見守る男。

佐伯幸也。

いつ戻ってきたのか、中流のすぐ傍まで近づいていた彼は、だが声を掛けることはせずに、ただ見守っていた。

中流が、彼に気付くこともない。

ファインダー越しに映る世界。

それだけが、今の彼の全てだった。

## 時の旅人 七

……が認められたら世界旅行だな。パスポート用意しておけよ……

夢の中、暖かな温もりに包まれて。

…優しい声が、聴こえた。

微笑っている。

誰が。

誰と。

僕が、微笑っていた……。

「……」

その部屋で二度目の朝を迎えた尋人は、上半身を起こすと枕元の携帯電話に手を伸ばし、表示されている日付に軽く息を吐いた。

わずかに歪む目元。

沈む気持ちは、だが昨日までの不安を併せ持つものではなく、諦めなければならぬという哀しみ。

今日こそ命の恩人だという六条中流に再会し、微かな片鱗でも構わないから、記憶を取り戻すためのきっかけを得ようと決意した。

そのために、友人である菊池までも巻き込んでこの街に帰ってきた。

…なのに結果は、六条中流には逢えないと言う受け入れ難い現実だった。

「…先輩」

携帯電話を握る手に力を込める尋人の、小さな、小さな呟きに、隣の布団で寝ていた菊池は胸を痛めた。

尋人がどんな想いでこの街に来ることを決めたのか、少なくとも他の誰より近くで見えてきた彼もまた、こんな結末は到底納得がいかない。

だが、会いに行くという手紙が届いていなかったのなら。

六条中流本人の手に渡っていないのなら、もう、…諦めるしかなかった。

「…倉橋」

「」

まだ眠っているとばかり思っていた友人に声を掛けられて、尋人は驚きに肩を震わせたけれど、自分の呟きを聞かれたという動揺はなかった。

それだけの信頼と理解を、二人は互いに寄せ合っているのだから。

「…おはよう、菊池君」

「はよ」

「昨日もだけど、早起きなんだね」

今朝も時刻はまだ六時前。

尋人は、内容こそよく憶えていないけれど、不思議と切なさを残す夢に意識の手を引かれるようにして起こされただけで、そんなことがなければまだ深い眠りの中にいる時間だ。

そんな尋人の言に、菊池は苦笑交じりに口を切る。

「早起きっつーか、家でも犬の朝の散歩は俺が当番だしさ。それに、これから高校通うようになったらもっと早起きしなきゃならないじやん。今から慣れとかないしさ」

「もっと早く…?」

思い掛けな返答に、尋人は小首を傾げた。



「でも…菊池君は、春からはお祖父さん達と一緒にこの家で暮らさんでしよう？ それなら、そんな早起しなくても…」

春からはこの家に。

尋人は両親の許可がないから寮に入ることは出来ず、地元からの通学を余儀なくされているが、菊池には高校の傍に、ちゃんとした家族の家があるのだ。

言外に、どうしてそれを考えないのかと訴える尋人に、菊池は呆れたような  
それでいて頼りがいのある“兄”のような顔をして見せた。

「バツカ。俺がここに住むようになったら、倉橋、一人であんな田舎から通う事になるじゃんか」

「僕？」

「高校を卒業する秘訣その1、長い通学時間も楽しく過ごすこと、つてな」

ニカツ、と朗らかに笑う菊池。

「  
思ってもみなかった言葉に。

…優しさに。

尋人はどう返せばいいのか混乱して。

戸惑って。

けれど胸に広がるのは確かな喜び。

「菊池君…せっかく楽に通える距離に住める家があるのに…僕なんかのために…」

「楽に通えるより、倉橋とガツコ通う方が面白そうじゃん」

「そんな…」

「いいんだって、これは俺が決めることだろ。それとも倉橋が俺のために一緒にこの家に住むか？」

「えっ…？」

尋人は、本気か冗談かも区別がつかないまま目を白黒させ、その様子に菊池はやはり楽しげに笑った。

「ま、この話は親とも話さなきゃだし、決定はまだ先だけだな。あくまで俺の希望ってこと」

「……」  
尋人が高校に設けられている寮に入れないなら、自分も地元から通うことにする。

そんな大変な内容を、彼らしい口調でさらっと言ってしまう菊池が、眩しく見える。

「カッコイイな……」

「は？」

「菊池君。すごくカッコイイ」

「……」  
繰り返し言われて。

その、あまりの内容に、カッコイイと言われたばかりの顔が情けなく茹で上がる。

「おまえっ、だからそういうことをマジな顔で言うなっての！」

「でも、本当にそう思う」

「おい……っ」

いいかげんにしてくれと枕に顔を突っ伏した菊池に、尋人はくすくすと笑いながら、やはり素直な言葉を紡ぎだす。

「……ありがとう」

「……」  
「僕のために、……いろいろ、本当にありがとう」

「……」  
素直な言葉。

真っ直ぐな眼差し。

それが、倉橋尋人の強さで、眩しさ。

ある者は惹かれ、ある者は憧れ。

またある者を嫉妬させて、狂わせた。

「……倉橋、もっと自分でモンを自覚した方がいいんじゃないの？」  
「？」

ポツリと口をついて出た言葉に、当人は首を傾げる。

その仕草が、また何とも……。

「まあなあ、寝顔なんて自分で見れるもんじゃねーし」

「寝顔……？ 僕の寝顔がどうかした？」

「すっげえ可愛いけど」

「かわ……、！」

直後、先刻の菊池よりも真っ赤になった尋人の様子に、先ほどは笑われる側だった彼が意地悪な笑みを浮かべた。

「解ったか？ そういうこと言われたら恥ずかしいだろ！」

「違う！ カッコイイとかわ……っ、か、可愛いじゃ全然違う！」

「同じ褒め言葉じゃんか」

「男に対して“可愛い”は褒め言葉じゃないよ！」

……可愛いだけじゃないぞ……

「！」

不意に、耳元を掠めるように聴こえた囁き声。

「？ 倉橋？」

思わず動きを止めた尋人に掛かる呼び声。

目の前にいるのは菊池。

中学の同級生で、これから同じ高校に通う事になる友人。

ならば、この声は。

……尋人は可愛いだけじゃないぞ。“芯の強い素直な人”に訂  
正しろ……

誰かが。

……誰かが、言ってくれた。

「…倉橋…？」

再び呼びかけられて。

まるで、それがきつかけだったように視界が揺らぐ。

どことなくぼやけて見えるのは、瞳が濡れたせいだろうか。

「……」

そんな尋人の様子をどう感じ取ったのか、菊池は静かになってしまった尋人の頭に軽く手を乗せた。

「…今日、せつかくだし映画でも観に行くか」

「…映画？」

「予定が変更になっちまって、今日なにするか決めてなかっただろ？ 地元じゃ映画なんかそうそう行けないしさ、それにアレが上映中じゃん」

「アレって？」

「あれ…んん〜タイトルが出てこないんだけどさ、人気シリーズの最新作で…」

連想ゲームのように次々と関連する事柄を並べていく菊池に、尋人も知っている映画のタイトルを次々に言っていく。

しばらくして映画名を思い出した二人は、これだけ苦労したんだから…と、それを観に出掛けることにした。

名前を思い出すのにしばらくの時間が必要なほど、実際には関心のなかった映画だが、それでほんの数時間でも現実から離れられるならと思う。

今日一日、少しでも間があれば意識が“彼”に流れていくだろうことを、尋人も菊池も自覚していたからだ。

わずかな時間でも構わない。

少しでも“六条中流”を忘れていたかった。

## 時の旅人 八

「尚也、すまない」

その日の午前中、まだ熟睡中だった尚也を起こしたのは、第一声にそれを告げる恋人・時枝彬からの電話だった。

睡眠を妨害されて苛立ちながら時間を確認すると、既に十一時に近く、自分の寝過ごしに慌てて起き上がった。

いくら春休み中とはいえ、これではあまりに怠け過ぎである。

「え、あ。彬？ 何だよイキナリ“済まない”って…」

「昨日の件だよ、兄貴に“ヒロト君”の件を確かめると言った」

「あ…ああ！ あのことが！」

昨夜の記憶を引つ張り出し、ようやく合点のいった尚也は寝癖のついた髪を乱暴に掻き回しながら続ける。

「それで“すまない”って、貴土さん、知らなかったのか？」

大樹総合病院に外科医として勤務している辻貴土。

親の離婚で名字こそ異なるが、彬と貴土は血の繋がった実の兄弟だ。

その彼が、一年半前に、勤務する病院に入院した患者のことを

それも事故により重症を負って搬送されてきたと考えられる“倉橋尋人”という少年のことを、外科医の彼が記憶している可能性は大きいと考え、確かめることにしたのだが。

「いいや、兄貴は倉橋尋人君を知っていた」

「知ってた？」

「ああ。…いや、実際には知っていたどころじゃないな、…兄貴が担当医だったんだ」

「…ってことは…」

「尋人君の手術を執刀したのも、その後の入院中の治療も、すべて兄貴が仕切っていたってことさ。そのうえ、あの人は六条のことも知っていた」

「  
」  
彬は、昨夜 尚也を家に帰した後ですぐに貴士の部屋へ向かい、  
倉橋尋人の件に触れたのだという。

“ヒロト”の名前を出した途端の反応で、兄があの子を知っている  
ことを確信した。

その子が尚也の親友である六条中流と何らかの関係があるような  
のだが、兄貴は尋人君の事故の詳細を知らないだろうか そう問  
いかけた直後、貴士は顔を歪めた。

話すことはない、彬を突き放した。

しばらくの口論の末、言い放たれた一言。

…あの二人のことはそっとしておいてやってくれ……っ！

まるで自身が傷ついたような姿で、二人のために怒鳴った。

そんな貴士の様子に、彬は何も言えなくなってしまったのだとい  
う。

「…貴士さん、何を知っているんだろう…」

不安げに呟く尚也に、彬は短く息を吐く。

「…これは俺の予感だけだね。…ヒロト君の事故が、ただの事故じ  
やないってことを、知っているんだと思うよ」

「ただの事故じゃない…？」

「兄貴が自身の手で尋人君の手術を行ったなら…それぐらい知るの  
は容易だろう」

「…だったら、ただの事故じゃなかったら、何だって言うんだ？」

何をしたら記憶を失くすなんて後遺症が出るようになるんだ？」

「それを、兄貴は隠したかった」

「……」

尚也は、貴士の普段の沈着冷静な姿を思い出しながら、その彼が、  
彬が語るほど取り乱したことに驚きを隠せない。

そこまで隠さなければならぬ事実が、中流と尋人の間にはある

のだろうか。

一年半前の事故とは、いったいどんなものだというのだろうか。

「…」

「尚也。俺は俺で、もう少し情報を集めてみるよ」

「ん…。でも、貴士さん怒らせるようなことはするなよ」

「解ってるよ」

尚也の返答に小さく笑い、彬は次の授業が始まるからと電話を切った。

通話の途絶えた携帯電話をしばらく見下ろしていた尚也は。

…次の瞬間、勢いよくベットを飛び降り、部屋を出た。

洗面所で顔を洗い、身だしなみを整え、

「ようやく起きたの？ 昼休みだからってダラダラしちゃ駄目よ」という母の小言にも適当な返事をし、起床後、わずか二十分で家を出た。

行き先は敷明小路。

一部で“寝ずの街”“不眠小路”とも呼ばれ、昼夜ではその表情を一変させる歩行者天国。

貴士から話が聞けないのなら、もう一人、真実を知っている人物がいる。

野口健吾。

中流のために嘘を吐いた元同級生。

…あの二人のことはそつとしておいてやってくれ…っ！

貴士が、そう訴えたのだとしても。

「俺だって中流のこと知りたい…っ」

知って、助けてやりたい。

…好きな奴に好きだって言える…こんな幸せなことないぞ…

そんな台詞を、あんな顔で言うような。  
……そんな、バカな親友を。

尚也が家を飛び出す前後、榊学園校内から彼に電話を掛けていた時枝彬は、携帯電話の通話を切り胸ポケットに仕舞った。

話の内容を考慮し、人気の無いところを選んで電話していた彼は、授業以外ではほとんど使用されることのない四階特別教室へ上がる階段踊り場に佇んでいた。

「さて…」

あの、良く言えば真面目、悪く言えば強情な兄の口をどう割らせようかと考えながら、次は高等部一年生の授業だと、出席簿を取りに職員室へ戻ろうとした。

その矢先。

「？」

「っ！」

「あ…」

踵を返し階段を下りたところで、こちらに背中を向けている男子生徒二人が彬の行く手を遮っていた。

しかも、彬の顔を見上げて後ろめたそうな顔をしているところを見ると、電話の内容を聞いていたのだろうか。

ふむ…と小首を傾げ、日頃の営業スマイルをしてみせる。

「どうした？ 次の授業が特別教室なら急いだ方がいいぞ？」

「えっ、え…あの…」

特別教室で授業があるからそこに立っているのではないのかと考えた彬に、二人は顔を見合わせ、何かを言いたそうにしている。

彬が急かすでもなく待っていると、まるで一大決心をしたような



顔つきで、左側に立っていた少年が口を開いた。

「あの…、いま、…悪いことだったって分かってただけけど…先生の話が聞こえちゃって…。それで…倉橋尋人って…。」

「倉橋尋人って聞こえて…、あいつが、ここに来てたって。」

まさか立ち聞きしていた少年達から“倉橋尋人”の名前が出るとは思わなかったが、その少年は元は榊学園の生徒だったのだ。

二年間の記憶を失ったために学年は異なるが、今この時期の高等部に彼を知っている生徒がいても何ら不思議はない。

「君達、倉橋尋人君を知っているのか？」

「知ってるも何も…中三の時の同級生だったし…それに…」  
「それに…？」

「…っ…あいつ、元気そうだった？ 何か言ってた？ 俺達のと恨んだりしてなかったかな…！」

「恨む…？」

この少年達が何を言っているのか理解に苦しみながら、彼らが“倉橋尋人”の何を知っているのかが聞きたかった。

事故に遭い、記憶を失い、転校して行った友人が久々にこの学園を訪れた。それを知って気遣うのは自然なことだと思うが、だとすれば、この怯えにも似た態度はどういう理由だろう。

「何か恨まれるようなことでもしたのか？」

「！ 俺達は何もしてないよ！」

即座に返されて、彬は言葉に詰まる。

「何もしてない…してないから…っ…。」

例えば、尋人がどんな目に遭っているか知っていながら何もせず  
にいたから、この少年達の、そんな心情までは読み取れずとも、  
何らかの事情で後ろめたいことがあるのだということは彬にも予想  
がかった。

「…何か、気に掛かることでもあるのか？」

「…気に掛かる…っっていうか…、だってアイツ、転校前に挨拶もな

かつたし……」

「挨拶？ ああ、それなら……」

事故に遭い、記憶喪失という後遺症を残した尋人を思い遣り、余計な負担を与えまいと家族が考慮した結果だと思いがたがるが、少年達には別の理由があるらしかった。

それは、彼らが闇に沈めた。

消して知られることのない真実に限りなく近い。

「あんな噂もあつたから……」

「噂……？」

聞き返す杉に、少年達は再び顔を見合わせる。

もう間もなく始業のベル。

「噂ってどんな内容なんだ？」

早口に問いかけた杉に、躊躇いながらも告げられた、その“噂”は……。

敷明小路に辿り着いた尚也を、バイト先のコンビニで迎える事になった野口は、だが別段、驚きもしなかった。

「そろそろ来る頃かなと思ってたよ」

どこか切なげに口元を歪めた野口は、尚也を拒みはしなかった。

「もう少しで休憩に入るから、そっちの店で待ってる」

「…わかった」

指し示されたFF店。

尚也は素直に頷き、その店で野口がやってくるのを待った。

まさかその数分後。

同じ店に倉橋尋人がやって来ることなど、知る由もなく。

## 時の旅人 九

映画を観ることにした尋人と菊池の二人は、その日の新聞で目的の上映開始時刻を確認し、敷明小路の映画館へやって来た。

余裕を持って家を出た二人は、観る前に昼食を取ろうと映画館近くのFF店に入る事にした。

そうして彼らを見つけたのだ。

「菊池君、あの人……」

こちらに横顔を向けている彼を、昨日の学園内で知り合った野口健吾だと最初に気付いたのは尋人だった。

次いで、彼と向かい合っている少年が、二人がこの街に到着したその日、駅近くの駐車場でキスしていた人物だと知り、特に菊池の方が顔を歪めた。

野口と一緒にいるということは、彼も榊学園の生徒である可能性が高く。

……とすると、予想通り、昨日の教師は生徒（しかも男子生徒）に手を出した変態教師だったということになる。

「やっぱり、貴士医師に似てるって言ったことは撤回した方がいいぞ」

「うん……」

尋人も複雑そうな表情で頷き、せめて彼らから離れた位置に座ろうと踵を返そうとした。

だがその直後。

「ヒロトのことに決まってるだろ」

確かにそう聞こえた。

野口に向かって、もう一人の彼が、その名前を口にしたので。

「……あの人達、僕のことを話しているのかな……」

ヒロトという名前が“尋人”のことだと断言は出来ない。

だが、話している人物が双方、倉橋尋人との関りを持っているな

ら、その可能性は限りなく高いだろう。

「……近く行って、聞いてみるか」

「え……でも……」

「だって気になるだろ！　もしかしたら六条中流のことだって、何か分かるかもしれないじゃん」

「……」

六条中流のことを、知れるかもしれない。

そう言われれば否とは言えなかった。

会いたかったのに、会えなくなってしまった人。

一時でも忘れたいと望み、映画を観に来たけれど。

盗み聞きが良くないことなのも分かっているけれど、…それでも、自分には知らされない何かを知れるかもしれないという誘惑には勝てなかった。

「あの野口って奴の裏に行こうぜ。あの鉢植えの影だったら隠れられる」

「……ん」

二人は静かに歩み寄り、自然を装いながら席に着いた。

野口健吾に程近い鉢植えの裏。

野口と尚也の声は、尋人、菊池の耳に鮮明に聞こえていた。

「おまえが俺に会いに来た理由って、やっぱりアノ件？」

「そうだよ、ヒロトのことに決まってるだろ」

冷たく言い放つ尚也に、野口は失笑した。

内心の憤りを隠そうともしない友人の姿が、何故だか嬉しかった。

「ヒロトのことが……」

あの少年のこと。

そしてそれは、同時に中流のことにもつながる。

「尚也。おまえ、中流からヒロトの名前って聞いたことあるか？」

「…ない」

その返答を、かなり不機嫌な口調で言い。

「俺がヒロトの名前を聞いたのは去年…一昨年のクラスで、大勢いた時に、他の連中が言ってるのを聞いたただけだ。中流から個人的に聞いたことなんか…一度もない」

「だろーなあ。おまえ、あの頃は浅見に狂ってたし」

言つと、途端にすごい目で睨まれる。

それを、やはり失笑でやり過ごして、野口は本題に入り始めた。

「…で、先生からはどこまで聞いた？」

「昨日のことなら全部。おまえが中流を庇って嘔吐いたことも聞いた」

(嘘…?)

昨日の、嘘。

その言葉に尋人と菊池は顔を見合わせた。

野口の、どの言葉が偽りだったというのだろう。

中流を庇ったとは、どういう意味なのか。

「じゃあ何だ。おまえは、俺がヒロト君に嘔吐いてまで中流を庇った理由が知りたいわけ？」

「…っ、全部だよ！ おまえが中流を庇った理由も、嘔吐いた理由も、おまえがそこまで中流のことに詳しい理由もっ、アイツの事をどこまで知っているのかもだ！」

「知りたいことを一息に言い放たれて、野口は思わず呆気に取られたが。」

「…」  
つまりは、何だ。

それを、そんな不機嫌に言い放つのは、そういうことか？

「…おまえ、もしかして俺が、おまえの知らない中流のコトを知ってるのが面白くないのか？」

「！ 違っ…！」

言葉では否定しても、瞬時に赤くなつた顔が尚也の本音。

「…っ…は…、あははははは！」

「なっ… テメエ、野口！」

「いや… だって、おまえ… っくくく、おまえ、ソレ嫉妬っつーかさ…、俺に妬いてるだけじゃん？ 親友のおまえより、俺のが詳しいから悔しいんだろ？」

「…っ」

「一緒になるのは生まれ変わってからだって言ってたじゃねーか」

「ンな昔の悪ふざけ持ち出すなっ」

「けど、それくらい中流のコト愛しちやってるんだろ？」

「妙な言い方すんなって！」

いい加減にふざけるのは止せと言い放つ尚也に、だが野口は笑いを止めない。

だって、それが尚也の本音なら。

親友なのに何も知らないことに憤慨し、知っている野口を敵視しているだけなら。

「俺、おまえに話すことなんか何も無いよ」

「！？」

「自分が中流の親友だって誇示するためだけに知りたがってるなら当然だろ。あの頃、女に狂ってたおまえは中流が辛いのに気付かなかった。中流も話さなかった、だから尚也は何も知らないんだろ？ それを、俺が勝手に話せるわけない」

「……………っ」

「知りたいんだったら聞く相手を考え直せよ」

冷淡に、鋭利な刃のように尚也の心を切りつける言葉。

尚也の気持ち全て跳ね除けて、否定して。

確かに、野口の言うことも最もだけれど。

……だけれど。

「………だったら野口……おまえ、今の中流が苦しんでるの知ってるか……っ」

「……」

「中流がっ、好きな奴に好きだっって言えないでいるの知ってるか？ 卒業式前にあれだけコクられといて全部断って！ 今は誰も好きになれないって……忘れられない奴いるって……忘れられないのに言えないって……あんな……あんなっ……泣きそうな顔で微笑う中流を見たことあるか……！？」

「……」

野口に嫉妬したのは事実だ。

自分の知らない中流のことを、普通の同級生でしかなかったはずの野口が知っている。その現実が居た堪れなかった。

自分の存在を無視されたようで腹立たしかった、それは本音だ。だが、あんな顔で笑う中流を。

好きな奴に好きだっって言える……こんな幸せなことないぞ……

そんな言葉を、あんな顔で言う中流を、どうにかして助けたいと思うのも本当。

この気持ちだけは否定させない。

「人には幸せになれって言うておいて……自分の幸せなんか考えもしない……あんなバカ……っ、どうにかして本当に笑わせてやりたいって！ 俺だっつて、そう思うくらい中流が大事なんだよ！」

「……」

中流が大事。

自分の幸せなんか考えもしないで。

いつだっつて人のために。

……尋人のために。



あんな顔で、微笑った。

泣く代わりに「大丈夫だ」と微笑った。  
それが六条中流なんだ。

「……」  
野口は小さく笑う。

そして、これが本居尚也だったんだと、苦笑う。

「……今の台詞、先生の前では言うなよ」

「……なに……？」

「今度は先生が中流に妬いて、それこそ殺人が起きかねないからな」  
「妬くつて……」

まさかと目を丸くする尚也に、野口は今までと違った笑みを作る。  
「センセ、尚也のこと独占したがりだもんな。中流のことこんなに心配してるおまえ見てるのも、相当面白くないと思うぜ」

「……！ なつ、野口、おまえ……っ」  
「ん」

自分と時枝彬の関係がバレていると察し青くなる尚也に、だが驚かせた当人は静かに笑い掛け、真っ直ぐに友人を見返す。

「秘密の恋愛には鼻が利くんだ。見てりゃ判る。自分がそうだったからだと思っけどさ」

「そう、つて……」

「俺も人に言えない恋愛してたつてこと」  
「……」

突然の告白に尚也は二の句が継げない。

だって、この友人に恋人がいるなんて。

付き合っている相手がいたなんて、それだけでも驚愕ものの告白なのに、それが人に言えない相手と聞いてしまったら、どう反応すればいいのかなど咄嗟に判るはずがない。

「人に……つて、まさかおまえも……相手……」

「勘違いするなよ、俺の相手は女だからな」

恐らく同類だと勘違いされていることを察した野口が苦笑しながら

ら続けると、尚也は一瞬、気の抜けた顔をして見せたが、では相手が女性で何故隠す必要があるのかと疑問に思う。

「…女、…で、秘密…なのか？」

「そ。何せ教師だから生徒と恋愛関係にあるなんて公にするわけにいかないだろ」

「

それを、あっけらかんと言われて。

「中等部の松島センセ。おまえだって覚えてるだろ」

「松島…って…っ、野口…っ」

脳裏に、中等部時代に世話になった数学教師がポンツと思いついで声震える。

(松島先生…！?)

そして尋人も、失われる以前の記憶に在る松島教諭の姿を思い浮かべ、思わず漏れそうになった声を押し殺した。

「おまえ、それ俺に言ってもいいのかよ！」

「もう卒業したんだし時効だろ？ それにおまえが他言しなきゃ何の問題もない」

「…そりゃ…、もちろん、誰かに言ったりはしないけど…」

自分も公には出来ない恋愛をしているのだ、それで誰かを追い詰めるような真似など決してしない。

けれど、言う言わないよりも、この同級生が中等部の　それも

一度は教科担任として世話になった人物と恋仲にあったという突然の告白に、ただただ驚くばかりだった。

「…だからさ、中流の時もそうだったんだ」

「え…？」

「今のおまえと同じってこと。尚也と先生の仲に気付いたみたいに、中流とあの子の関係も見てて気付いただけさ。中流が教えてくれたんじゃない、俺が勝手に気付いて、勝手に取引を持ちかけた。おま

えが誰と付き合っているのかは誰にも言わないから、俺が誰にも話せないでいる彼女とのコトを聞いてくれてさ」

「おまえ…」

呆れた顔で見返してくる尚也に、野口は苦笑する。

正確には、そうじゃなかった。

野口には中流の相手を公表して回る気などさらさらなかったが、一番分かりやすい説明をしようと考えると、そういう言い方が自然に出た。

「でさ、俺が惚気話しするようになったら、あいつも対抗心が燃えてきたのか、自分のことも話すようになったんだ。…だから、中流が自分の恋人のこと、どんなに好きだったかは知っているつもりなんだ」

だから、別れることになったと聞いた時は信じられなかったし。

中流の姿を見ているのは辛かったし。

誤解していたせいもあって、昨日は尋人の姿を見て怒りが募った。同時に、事情を知って、切なくなって。

…嘘を吐いてでも、庇わなければと思ったんだ。

「尚也、おまえの予想は当たりだよ」

「野口…」

「中流が、好きなのに好きだって言えない相手。今でも忘れられない恋人」

それは、たった一人。

「尋人君　中流が、たった一人大切に想っていた恋人は、あの子だ」

尋人が。

中流の、大切な。

たった一人の、恋人。

「……っ」

唐突に、尋人の瞳から零れ落ちた涙。

「……倉橋……」

そんな友人を気遣い、思わず声を漏らしてしまった菊池。

「！」

背後からの声に。

聞こえた名前に「まさか」と野口は振り返り。

「あ……っ」

尚也も、その姿を視認した。

「尋人君……」

野口の背後、鉢植えの影の席。

何も言えずに、ただ肩を震わせて涙を零す少年の姿。

野口と、尚也と。

菊池と。

尋人と。

真実の欠片の一つは、そこにあった。

## 時の旅人 十

「君と中流が付き合い始めたのが、正確にいつからなのかは知らないけど、思い当たる時期はあるんだ」

「あゝ…、もしかして、あの人格崩壊の時か？」

野口が言う内容に、尚也もすぐに思い当たる時期があった。

高等部二年時の、二学期が始まって間もない頃だったはず。

「いつもは一段高いトコから俺達のこと見てるみたいに、大人びて冷静だったアイツがさ、あの時は一日中、顔緩みっぱなしで人の話は聞いてないし、教師すらアイツ避けて通ってたんだぜ」

「マジ狂ったんじゃないかと思つたよ、俺達も」

「まさに幸せの絶頂。…結構、長い時間、一緒にいたけど、あんな中流は見たことなかった」

「…」

野口と尚也が交互に語り、頷きあう正面で、その席に座り直した尋人は、しかしうつむいたまま一言も発することは無く、だから菊池も口を挟むことが出来ずにいた。

尋人が、本当は六条中流の恋人だった。

誰よりも大切な、たった一人の存在だったのだと告げられて。

…記憶のない少年にとって、それはどれほどの衝撃を伴うものだったか。

その上、こうして告げられた新たな情報が確かなものなら。

二人が付き合い始めた時期が、本当に彼らが高二の時だったなら、その日々は丸ごと失われたことになる。

…僕は、先輩との時間を全部忘れてしまったんだ……

だから。

…だから彼は、会いに行くという手紙を受け取って、この国を離

れる事にした。

どんな方法を取っても会いに行けない場所へ、予定を早めてまで

… 僕が忘れたから…

… 先輩の存在を消してしまったから…

「… 先輩は…」

ふと呟いた尋人に、三人の視線が集まる。

呼吸しているのかどうかも疑わしかった尋人が何を言わんとしているのか、彼らは静かに待った。

「… 僕が、記憶を失くして… 先輩のことを…」

付き合っていた人のことを。

恋人を。

「先輩を忘れてしまったから…、だから… 嫌われたんでしょうか…」

「え ……」

「だから逢ってくれないのかな…? ……」

新たな涙が頬を濡らし、尋人の言葉は嗚咽に吞まれた。

「… うっ…」

「倉橋…?」

声を殺し、肩を震わせ。

俯いていた顔を、なお隠すように下げて尋人は泣いた。

「… 僕… 先輩に嫌われている事にも気付かないで…? ……」

逢いたい、なんて手紙で追い詰めた。

決して会えない場所まで去ってしまうほど、彼は自分に会いたく  
などなかったのに。

恋人を忘れた自分が、恨まれないはずなんかなかったのに…! !

「倉橋…!」

悲痛な姿を見せる尋人に、菊池は居た堪れない表情で呼び掛けた。

どんな言葉が適当なのか分からない。

慰める方法も思いつかない。

記憶を取り戻す為に、この街に戻ってきて、帰る日には全ての真実を手に行っていることを願った。

取り戻した記憶が尋人に心からの笑顔を浮かべさせると信じて、願ったのに。

最後には、こんな風に泣かすことしか出来ないなんて。

「……」

現在は所在どころか生死さえ不明の従兄が脳裏に浮かび、狭いテーブルの上で握られた拳が震えた。

菊池の目頭も熱を持つ。

そんな二人の少年達の正面で、尚也と野口も痛々しい表情をしていたが、それは胸から溢れてきた言葉。

「中流は嫌ってなんかない」

同時に。

図ったわけでもないのに、わずかな乱れも無く重なった二人の言葉。

口にした本人達が一番に驚き、互いの顔を見合わせた。

「……」

尋人と菊池が、少なからず大きくした目で尚也達を見上げる。

そんな様子に、二人はやはり揃って苦笑して。

「……真似するなよ」

「どっちが」

言い合う言葉に含まれる思い。

息の合い様。

真実は知らなくとも、尋人の失くした記憶を返すことは出来無くても、自分達にだけ伝えられる“真実”がここに在る。

「中流は、君を嫌ってなんかない」

「これだけは断言出来る。中流は絶対にヒロトを嫌ってなんかない」

「……どうして、分かるんだよ」

「判るからさ」

菊池の問い掛けに即答したのは尚也。

「何年あいつと過ごしてきたか判るか？ 十二年の付き合いは伊達じゃないんだ。…中流はヒロトを嫌ってなんかない…忘れられたことを悲しんだって、それで相手を恨むような奴じゃない」

自分がどうなったって、他人の幸せのことしか考えない。

尋人のことだって、自分が忘れられても、尋人の幸せだけを願っていたはずだ。

だって、そうでなきゃ、あんな顔で微笑わない。

あんな、泣きそうな顔で別れない。

突然の予定変更。

見送りの空港。

最後に向けられた、あの眼差し。

それは、尋人がこの街に来ることを知っていて。

…近付いてくることを判っていて、縋るように。

「俺達は“六条中流”を知ってる」

「中流は、絶対に君を嫌ったりなんかしてない、これだけは信じてくれていい」

「…」

はつきりと、迷いなく言い放つ二人を、少年達は黙って見返した。中流が尋人と会うことを望まず、この国を離れてしまっても、それが、イコール「尋人を嫌っている」という答えにはならない。

尚也も野口も、それだけは自信を持って断言できるのだ。

「…じゃあ、なんで六条中流は倉橋に会おうとしないんだよ……」

ポツリと呟く菊池に答えたのは、尚也が先だった。

「…記憶を失くしたヒロトに、おまえの恋人は“男”の自分だって言えなかったからじゃないのか？」

「…」

記憶を失くし、何もかもを忘れた尋人に、おまえは【同性と恋人同士だった】などとは。

それは尚也が彬と二人で考えた理由。

中流に限って【同性同士】が理由になるとは思えなかったが、そ



ここに自分達の知らない理由が加われれば自然な理由に成り得る。

尋人のため　そう考えることにも無理はない。

「ん…、俺もそれは考えた。何も憶えていない君に、自分達は恋人同士だったと告げて受け入れてもらえらるとはさすがに思わないだろう。…君の将来のことを考えたなら尚更だ」

次いで野口も、尚也の意見を支持するような言葉を繋ぐ。

「実際、今だつてかなり動揺しているんじゃないのかい？　自分が

…男同士の恋愛をしていたと聞かされて」

「

野口の気遣うような問い掛けに、…だが尋人は目を瞠った。

そう。

そうなんだ。

自分と六条中流が。

男同士で恋人同士だったと聞かされて。

普通じゃない関係に、動揺するのは当たり前で。

否定したくなるのが普通で。

…本当は、混乱するのが普通だと、頭では知っているのに。  
なのに。

だったら。

この心を満たす気持ちは？

鼓動の早さは？

「あ…」

毀れた呟きに、尋人は咄嗟に口元を覆った。

「尋人君？」

「ヒロト？」

野口と尚也が自分を覗き込むようにしているのが、わずかに見開かれた瞳に映る。

「あ、僕…」

僕は。

僕が、ここに来たのは。

「…先輩に…」

彼に。

「六条先輩に…会えば…解る、…かも…知れないって…」

「え？」

「倉橋…？」

「先輩に会えば…」

言葉と一緒に、頬を濡らすそれは。

「会えば解るかもって…、…どうして…どうして、こんなに、先輩に逢いたいのか……」

逢いたくて。

ただ、逢いたくて。

声が聴きたくて。

あの温もりに触れたくて。

…幸せになれ…

その言葉が、胸に響いて。

どうしてこんなに逢いたいのか。

会えば判るような気がして。

だから、逢いたくて。

逢いたくて。

「…どうして、そんなに六条中流に逢いたがるんだ…？」

「…っ」

菊池の、ある種の確信を伴った問い掛け。

忘れても。

全てが偶然だったとしても。

それでも、どうしても逢いたいと、願うほどに。

「…好き…だから……っ……」

そうして、ふたたび零れる雫。

芽生えた想い。

息吹いた言葉。

どうして気付かなかった。

どうして判らなかった。

気持ちは、いつだって彼を　六条中流を追いかけていたのに。

「逢いたいんです…っ…先輩が…っ…六条先輩が、好きなんです…」

…っ

「倉橋…」

菊池の応え。

待っていた答え。

自覚して欲しかったのは、その想い。

今度こそ忘れないでほしかった。

「…そっか…」

野口の呟き。

「そっかあ………」

腕に顔を隠すようにして毀れる言葉は、微かに震え。

「ああ……」

野口も、尚也も、深く息を吐き、乗り出していた身体を座席に委ねた。

そうして願う。

親友の“幸せ”。

尋人の想いが、その自覚が。

中流が想い人に逢える“許し”だと信じたかった　……。

## 時の旅人 一一

失った記憶。

消された時間。

事故に遭ったことすら、人から聞いて知っているとただで、時には他人事のように感じることもある。

本当は、みんなが僕をからかっているだけで。

この生活は全部が夢で。

明日の朝、目が覚めたら中学一年生の体育祭が始まるんじゃないかって。

本当は、僕は十三歳のままなんじゃないかって、今だって、そう思うんだ。

けれど、これだけは本当のこと。

十四歳、十五歳の自分が在たことは信じられなくても、貴方の特別な相手が僕だったと言われて嬉しかった。

何も思い出せないのに、貴方が他の誰でもない、僕の特別な人だったと聞かされて、嬉しかった。

何も判らなくなつて、好きになつたのは同じ人。  
やっぱり貴方だった。

……幸せになれ……

あの日の抱擁は、貴方にとっては最後の別れのつもりだったのだと、今なら判る。

何も言わずに、僕のために、たった一言で送り出してくれた。

貴方を忘れた僕を恨みもせず。

僕の幸せだけを考えてくれた。

だから、もう逃げない。

逢いたい。

いま、ものすごく貴方に会いたい……。

「こうなったら、何がなんでも中流と会わせてやるからな！」

「会わせるつつたつて、そりゃ幾らなんでも無理がないか？」

「んだと！？ おまえは会わせてやりたいくないってのか！」

「出来るもんならそうしてやりたいけどさ、中流が今どこにいるのか忘れてないか？」

「どこにいたつて呼び戻せばいいだけだ」

「アフリカから簡単に呼び戻せるわけないだろ。連絡の取りようだつてないのに」

「携帯とかさっ」

「アホ。欧米なら通じる地域もあるだろうけど、中流がいるのはアフリカだぞ？ それもサバンナだぞ？ どこに電波が通じてるって？」

「うっ……」

「……おまえはあんまり口開かない方が良くぞ、バカ丸出しだから」

野口の容赦ない台詞に、尚也は悔しさや苛立ちを感じながらも、正面に座る少年二人が、何とも言えない表情をしているのに気付いて口を噤んだ。

どうにかして中流と倉橋尋人を再会させてやりたいと思う彼らだったが、それにはアフリカという国はあまりに遠かった。

「……連絡だけでも取れば、考えようもあるんだけどな……」

野口は眉間に深い縦皺を刻み、何か方法はないだろうかと思案する。

尋人が中流に逢いたいと言う。

好きだから逢いたいのだと、そう聞かされたら絶対に会わせなければならぬ。

もう、中流にあんな顔をさせていなくても良いのだから。

「……………あの」

ふと上がった遠慮がちな声に、尚也、野口、菊池の三人は尋人を見た。

「どうした？」

「何か方法を思いついたのか？」

「あ、いえ……」

期待するような視線を三方から受けて、尋人は臆しながらも首を振った。

「いえ、そうじゃなくて……あの、……………アフリカは、…遠いですよね」

「？ そりゃあ、飛行機で十三時間だか掛かるし……」

尚也が、数分前の遣り取りなど忘れたように口を開き、中流から聞いていた飛行時間を告げると、尋人は少しだけ歪んだ笑みを浮かべた。

「…六条先輩は夢のために、…写真家っていう夢のためにアフリカ行きを決めたんですよね……？」

例えば尋人と会わないために出発の予定を早めたのだとしても、それ以前からアフリカ行きを決めていたのは、それが中流自身の夢につながっていくからだ。

「せっかく十三時間も掛けて、夢のためにアフリカに着いたのに……、たったの数日で僕なんかのために帰国させてしまったら、申し訳なくて、僕は自分が許せなくなります」

「でも」

「それに、僕…僕達は、明日には地元に戻るんです。今すぐに連絡がついても、会うことは出来ません……」

「それなら、もう二、三日くらい帰るの延期すればいいじゃん。祖父ちゃん達だって、もうしばらく泊まらせてくれって言ったら喜んで」

で……」

菊池がすぐに提案するが、尋人も迷わず首を振った。

「ダメだよ……、今回のことだって、両親は本当なら僕をこの街に行かせたくなかなかったんだ。僕の記憶のことだって、忘れたままならそれでいいって思ってる……、思い出すのを怖がっているようにも見える。もうしばらくこっちにいるって言ったら、……きつとものごく心配させることになる……」

「……」

この街に来る日、見送りに来ていた尋人の両親の姿を思い出して、菊池は「ああ……」と髪を掻き回した。

そうだ、倉橋夫妻はこの遠出を快く思っていない。

尋人の記憶が戻ることを望んではいなかった。

「……その、尋人君のご両親のことは、俺達には判らないけど……、会えないまま帰る事になって、君自身はそれでもいいのか？」

野口の問い掛け。

尋人は小さく頷く。

「今回がダメでも、次がありますから……」

「……」

逢いたい気持ちに変わりはない。

記憶が無くても、好きになった想いに偽りもない。

だから、今回はダメでも、また次の機会がある。

中流が自分の予定を終えて帰ってきてからでもいいのだ。それからでも、きつと逢うことは出来るから。

「……」

野口は軽く息を吐く。

菊池も何も言えない。

……ただ一人、尚也だけは。

「ダメだ」

「え……」

尚也だけは、それを受け入れるわけにはいかなかった。

「そんなのダメだ…っ、会いたいつて思ったんだったら…ヒロトがそう思っているんだったら、中流にいつまでもあんな顔をさせてちゃダメなんだ！」

好きな相手に好きと言えず、会いたいののに会えなくて浮かべた淋しい笑顔。

笑うなら。

微笑むなら、心から幸せだと感じて笑って欲しい。

それが出来るのはたった一人、倉橋尋人だけだから。

「だから、そうしたいのはやまやまでも連絡先が判らなきゃ帰って来いとも伝えられないだろう」

「だったら知ってそうな奴に聞く！」

「知ってそうっつたって、中流の家族は滅多に家にいることないって言うし…」

父親は天才写真家の呼び名を欲しいままにしながら世界を飛び回り、母親は彼と一緒に家を空けることがほとんど。

兄の六条至流はモデル出身の俳優として毎日過密なスケジュールをこなしているらしい。

「そんな人達にこそ、どうやって連絡取るんだよ」

「家族じゃなかったって、誰か一人くらい知ってそうな……」

【家族】と口にした拍子、脳裏に浮かんだ面影。

少年であるはずなのに少女のようで、静かに微笑う姿には不思議と癒されるその人に、尚也は、中流を見送った日の空港でも会っていた。

「あ……っ、いた！ 連絡先知ってそうな奴っ、いや絶対に知っている奴……！」

「え……」

「尚也？」

唐突に大声を上げた尚也に、尋人と菊池は面くらい、こっぴうこっぴとに慣れている野口は一人冷静に応えてみせる。

「それって誰」



「中流の従弟だよつ、松浦に通つて言つてたイトコ！ あいつン家、不気味なくらい親戚仲もいいだろ？ 中でもそのイトコとは一番親しいつて言つてた…っ」

「あー、そういえばそんなことも言つてたな」

「だろ！」

意気揚々と宣言し、これで連絡が繋がると確信した尚也は既に興奮状態。

野口は、まだ幾分か不安も拭い去れなかったが、可能性があるのならそれに賭けてみたいと思つた。

「尋人君、菊池君。君達の予定さえ問題がなければ、尚也と一緒に、その中流の従弟に会つてみないか？」

「…」

「歸つて来いとは言えなくても…、声を聞いて、話をするだけでも価値はあると思う。それこそ次の機会に繋がるように、さ」

「……倉橋」

菊池が、静かな表情で尋人を見つめる。

他に何を言うわけでもないのに、その瞳からは励ましの声が聞こえるようだった。

「尋人君」

「ヒロト！」

野口と尚也からも同様の視線を向けられて、尋人は決意する。

「…お願いします。その従弟さんに、会わせて下さい」

「よつしやつし！」

深く頭を下げた尋人に、尚也は拳を握り、菊池と野口は優しい笑みを浮かべた。

例え再会することは叶わなくとも、尋人と中流が話しを出来ること。

二人の間に何らかの光りが射し込む事を、願わずにはいられなかった。

FF店を出て、バイトの休憩時間を大幅に過ぎてしまい苦い表情をしている野口に見送られて、尋人、菊池の二人は尚也の案内で松浦高等学校へと向かうことになった。

だが、そうして別れる直前。

どこか硬い表情の野口が尋人に問いかけた。

「君、この辺に知り合いとかいるのかな。元同級生とかじゃなくて…、そうだな、例えば講義をサボった大学生風の…」

「ンだよ、それ」

唐突な野口の問い掛けに、尚也は呆れた表情で言い返し、尋人も首を傾げた。

「なんで、そんなこと聞くんだけ？」

菊池が怪訝な顔で聞き返すと、野口はいつそう声を潜めた。

「さつき。後ろに座っていた男二人が、君達のことを盗み見ていたから」

「え…」

「男二人？」

野口・尚也と、尋人・菊池は向かい合って座っていた。

少年二人の後ろにそんな男がいただろうかと考えるが、尚也にはそんな覚えがまったくない。

「あ…」

と、思い当たることでもあったのか声を上げた尋人は菊池を振り返る。

「菊池君、もしかして昨日のテレビ…とか」

「あ」

「テレビ？」

なんのことかと思う年長者二人に、昨日の街中で偶然、テレビに

出てしまったことを説明した。

「だから…もしかしたら、それに気付いた人がいて、見られていたのかも…」

「そっか」

「かもなあ」

野口と尚也がほぼ同時に頷き「またおまえは…」と顔を見合わせ苦笑する。

明日、地元に戻る少年二人が乗るJR時刻を確認し、時間が合えば見送りに行く、今日の戦況も聞きたいし…と、そんな会話を最後に彼らは別れた。

尋人、菊池、尚也の遠ざかる背を見送り、…野口は周囲を窺った。誰もいない。

自分達と同じ頃に席を立ったあの男二人の姿も、どこにもなかった……………。

他愛ないことを喋りながら、敷明小路を離れJRに乗り二駅。

松浦高等学校へ徒歩で向かいながら、

「あの…、尚也さんは…六条先輩の従弟さんとお知り合いなんですか…？」と、尋人がそんなことを尋ねてきた。

「知り合い…？」と、まあ顔見知りってトコかな」

「そんなんで、学校前で待ってるだけでちゃんと会えるのか？」

胡散臭そうに見てくる菊池にムツとする尚也だったが、その横で、尋人が友人の態度に動揺しているのが判り、深く呼吸する。

「心配しなくても、あの従弟を見逃すなんてこと絶対に有り得ない。おまえも、実際に会って見りゃすぐに判るさ」

「ふーん」

あの従弟ならば中流の連絡先を知っていると確信した尚也は、だが行ったことのある自宅に直接向かうよりも、学校前で出てくるのを待つ方法を選んだ。

現在が三学期末なら、在校生である彼が学校にいる可能性は非常に高く、また、うる覚えな道を冒険するよりも、よほど確実だと思っただ。

それに、菊池にも答えたとおり、例え何十人も生徒が一度に入りする正門前で待っていたとて、あの従弟の姿だけは見逃さない自信があったのだ。

「…けど、なんか…」

ふと菊池が小声で呟き、尚也は（今度はなんだ）と内心で表情を険しくしながら応える。

「いや…、うん。いくらアンタと六条中流が親しくたってさ、普通、従弟まで会わせたりするかな、と思って。しかも家も知ってるって言っただろ」

自分はこれから先、どんなに尋人と親しくなろうとも従兄弟と会

わせることは無い。

そこには、易々と口に出れない事情も確かにあるけれど、もしそのことがなかったとしても、従兄弟の家に連れて行くという状況は考えられない気がした。

「うーん…、まあ、アイツを俺の従兄弟の家に連れてくつてのは考え辛いけど…、中流にしたら、それが普通なんだろうーな」

言つて、苦笑を漏らした。

「アイツの家さ、祖母さんが北欧出身だとかで年中行事もあつちのスタイルに合わせることも多いんだ」

「年中行事つて言つと…、クリスマスとか？」

「そ。そのクリスマスがビックリだぜ？ 本物のもみの木をわざわざ買って来て家の中に運んで飾り付けるんだ。その下にたつくさんのプレゼント並べて、家族みんなで派手なパーティ。俺が行つた時には三十人くらいだったかな」

「三十人!？」

その人数にも驚きだが、それだけ大勢の人間が入つてパーティを催せるという“家”にも興味が湧く。

それを言つと、尚也は「そりやそうだ」としたり顔。

「中流の従兄弟の親父さん…、つまり中流の伯父さんか。あの大樹総合病院の院長だぜ？」

「」

その答えに改めて驚いて、少年二人は言葉もなかった。

大樹総合病院と言えば、尋人も長く世話になつた病院だから知らない場所ではなく、あの病院の院長と言われたら、その凄さは実感できた。

父親は天才写真家で、実兄はモデル出身の人気俳優で、伯父は病院院長。

まだ探せばとんでもない肩書きの親類縁者が出てきそうで、菊池は肌が粟立のを止められなかった。

「おい…、六条中流つて、一体何者だよ…」

思わず呟く彼に、尋人はビクリと身体を震わせ、尚也は眉間を寄せた。

「そんなの身内にいたら……」

尋人に真実を伝えず別れを決意した六条中流。

それを尚也や野口は、尋人の未来を思っただと思うと口にしたけれど、それでは男同士の恋愛関係で世間体に問題があるのは六条中流の方ではないのかと、内心で渦を巻き始めた不信任感。

尋人の手前、そのようなことを口には出せなかったけれど、本当に、このまま尋人と中流を引き合わせて大丈夫なのかと不安になる。そんな菊池の考えを、どこまで感じ取ったのか、尚也は口を開いた。

六条中流とは何者なのか、その答えを告げるため。

「…中流はバカだ」

「」

「え……」

「救いようのないバカだって、今回のことで確信した。自分の幸せを考えないってトコはマゾの気もあるんじゃないかと思うけどな」

「マゾって……」

「尚也さん……？」

思い掛けないことを言い始めた尚也に、少年二人はどう反応すべきか迷いながらも、なおも続く言葉に耳を貸す以外ない。

「おまけに秘密主義だし、どっか普通じゃねえし、俺達より全然大人だって思わせるくせして時々すげえガキだし、ムカつくし、イヤな奴だし……」

けれど。

「でも、あいつじゃなかったら十年以上も友達やってられなかった」

「」

「…中流がいなかったら、俺は、…高校卒業出来たかも判らなかった」

あの日、あの瞬間に。

時枝彬とのがあつた時に傍にいたのが、六条中流という人間でなければ、現在の自分はなかつた。

だから。

そういうことも経てきて、中流以上に幸せになつて欲しい人間を、尚也は他に誰一人知らない。

「だからヒロト。俺は絶対におまえを中流に会わせるぞ」

「尚也さん……」

「二人の詳しい事情なんか知らないけど、中流を選んだヒロトは、かなり見る目あつたと思うぜ？」

わずかに苦笑めいた表情で告げた尚也は、それきり前を向いてしまった。

彼の背中を追うようにしていた菊池と尋人は、それぞれに“六条中流”を思う。

馬鹿でマゾで秘密主義。

そんなふうにならながらも、絶対に幸せになつて欲しいと思わせる。

倉橋尋人にとって、六条中流はどんな男だつたのか。

「……」

幸せになれ、と告げられて抱き締められた日の記憶が脳裏を過ぎる。

何も言わずに。

尋人のために。

ただ、離れることを決めた彼。

もしあの時に、今の気持ちを自覚していたら、彼はどんな顔をしただろう。

……どんな言葉を返してくれただろう。

笑い返してくれただろうか。

やはり抱き締めしてくれただろうか。

彼は、自分を忘れた恋人を受け入れてくれるだろうか……。

「つ、く、倉橋……」

「あ……」

不意に呼びかけてきた菊池の声は、動揺しているのか震えていた。

「？」

そうして、自分の目がまた涙を零したのだと気づき、尋人は自嘲した。

「なんか……涙腺がかなり弱くなってる……」

「……」

尚也も背後を振り返り、じつと尋人を見ていた。

その視線に、言葉が詰まる。

息苦しいわけじゃなく、ただ、申し訳なくて。

「……忘れなくなかったな……」

「え？」

「僕……六条先輩を忘れなくなかったです……」

どんな形でもいい、せめて彼が自分の恋人だったことを憶えていられれば。

あの瞬間、この想いを自覚出来ていれば、二人は離れ離れにならなくて良かったのだろうか。

……幸せになれ……

その言葉を、別れの台詞として、尋人だけに向けられることはなかったかもしれない。

ずっと気になって。

逢いたくて。

それが「好き」という気持ちの表れだと知って。

……それが、こんなにも切なくて。

「ヒロト……」

「逢いたい……」



中流に、今すぐに逢いたい……。

大丈夫だ、と尚也が言いかけた。  
絶対に大丈夫だ、と菊池が友人の肩に手を伸ばす。  
必ず六条中流と会えるから、と尋人を励ますつもりだった二人は、  
しかし。

「その子から離れなさい!!」

「え……」

突然の少女の怒声。

突きつけられた傘の先端。

そういえば今日は夕方から雨予報だったかと暢気なことを考えている間に、尋人をその少女に奪われた。

天然がどうか微妙な髪の色、百六十前後の背丈。

全体的な細身を包む茶系のセーラー服は、尚也の記憶が正しければ、この近所にある聖エイーナ女子高等学校のものだった。

「なっ、おい!!」

「そいつに何する気だよ!!」

「何する気っ、はこっちの台詞よ! 昨日のテレビでこの子のこと知って近付いたんでしよう!? 目的はなに!!」

「目的って……、ちよっ……!!」

少女の怒りは、どうやら本気のものらしいが、尚也と菊池には全く不可解なことであったし、少女が、こちらもまた本気で庇おうとしてくれていると判る尋人は動揺を隠せない。

この少女は、誰?

「痛い目見たくなかったら大人しく退きなさい!!」

傘の先端を、よりいっそう尚也に突きつけて言い放つ。

ピンと伸ばされた腕には震えも戸惑いもなく、真っ直ぐに見据えてくる眼差しには偽りなどない。

尚也と菊池を敵視し、尋人を 泣いている尋人を庇おうと、真剣だった。

「…待った、ホント、ちょっと待て。俺らそいつを虐めてたわけじゃない…」

尋人を、中流に会わせたいと思っただけ。恋人だったはずの六条中流に。

「  
親友の名を心の中で呼んだと同時に。  
いつだったかの彼の台詞が思い出された。」

同じ年齢の従姉がいてさ……

顔を合わせるとどうしても言い合いになる。  
思い込みが激しくて扱い辛い。  
けれど、真っ直ぐなヤツ。

確かそう説明された、聖エイーナに通う従姉の名は。

「……イツカ……？」  
「！」

明らかな反応に、尚也は急いで言葉を繋ぐ。

「俺！ 中流のダチの本居尚也！ おまえにだって…去年のクリスマスに一度会ってるよな！？」

「…中流の友達？」  
怪訝な顔をする少女は、尚也の言葉を素直に信じようとはしていない。

菊池も口を開きかけ、彼女に庇われた尋人もやはり判ってもらおうべく声を掛けようとした。

そんな彼らに。

「…」  
無言で近付き、尚也に突きつけられた傘を下ろさせた長身の少年。瞬時に“黒”というイメージが出来上がる雰囲気、口を開くとすら億劫そうに見える彼は、

「…裕幸の話を聞け」と、低く少女に言い放った。

と、彼女はカツとなつて言い返す。

「そんな余裕がどこにあるの！ 尋人君が泣いてるのよ！？ 中流がないんだもの、私達が守らなきゃ誰が守るのよ！」

「だから、話を聞いてくださいと言っただんです」

そうして現れた三人目。

その姿に、菊池と尋人は言葉を失い、尚也も息を飲み込んだ。

栗色の髪に白磁の肌。

一瞬、知っている尚也でさえ性別を疑いそうになる、穏やかに整った容貌。

学校の正門前。

何人、何十人の同じ制服を着た生徒達が一斉に出てきたとて、その姿だけは見逃せない。

「……ご無沙汰しています、本居先輩」

「あ……」

中流の従弟で、大樹総合病院院長の息子。

彼らが会おうとしていた目的の人。

「……久しぶり、と言ってもいいのかな、尋人君」

「えっ……」

思いがけず名前を呼ばれて、尋人は明らかに動揺した。

そんな少年に、その人は微笑う。

それが、大樹裕幸、時河竜騎、江藤汨歌ら三人との出会い 正

確には、尋人との再会の瞬間だった。

その家の周囲には“森”と表現しても過ぎない木々の連なりがあった。

まるで家屋そのものを外界から覆い隠すように、四方に広がる緑の幕。

ただ一筋、正門へと続く道は車一台がかろうじて通れる狭さで、彼らを迷わせることなく目的地へと誘った。

何故、中流の親友が倉橋尋人と一緒にいるのかと問うた彼らに、「二人を会わせるために中流の連絡先を知りたくて裕幸を待っていた」と答えた尚也と、

「先輩に：六条先輩にどうしても会いたいです……」と訴えた尋人を、彼らはここに招いた。

木々に囲まれた家屋 紺碧の屋根と白亜の壁。左右対称に描かれた外観の、その中央に位置する正面玄関へは左右に広がる天然木の階段を上る。

大樹家本邸 親族の集まる中心地。

「冬に来た時も思ったけど……ホント森の中だよ……」

「……ってーか、この家は何だよ。どこの豪邸だ？」

居間に通された尚也と菊池がボソボソと言いつつのを横で聞きながら、尋人の意識はそこになかった。

ただ、圧倒される。

そして心の奥底が訴える。

この大きな家、広い内装。

裕幸、竜騎、汨歌を目の前にして、この部屋にいて。

心が騒ぐのは、自分がこの場所を知っているから？

「……あ、あの……」

「ん」

声を上げた尋人に、キッチンに立つ裕幸が応える。

静かで優しい、包み込まれるような微笑み。

その穏やかさに、心の中の時計がリズムを狂わせてしまいそうだ。「僕…、もしかして僕は…この…大樹さんのお家に、前にもお邪魔したことが、あるんでしょうか…」

「…」  
尋人の問い掛けに、汨歌が顔を上げた。

裕幸をじっと見たまま動かなかった彼女だが、その裕幸が小さく頷くのを確認して部屋を出て行く。

「少し、待っていて」

そつと笑んだ裕幸は、そうして手元の仕事を再開する。

部屋に流れる甘い匂いは、裕幸が作っているココアだ。

尋人が甘いココアを好きと知っているのか、それともただの偶然か。

三月末の、まだ雪も残る北国の風に当たってあれば身体も冷えただろうと、この部屋に通されてすぐ、牛乳を温めていたのだ。

「本居先輩と菊池君も、甘いので大丈夫ですか？ 珈琲や紅茶もありますか」

「」  
甘いのが苦手な尚也は、ココアの匂いにも鼻先がむずむずしていたが、自分だけ違うものを頼むのは申し訳ないと思い、それでいいと頷きかけた。

だが。

「遠慮しないで下さいね。お湯も別に沸かしていますから」

絶妙のタイミングで言われ、敵わないなと思う。

「悪い。じゃあ珈琲で…」

「はい」

尚也が頼み、裕幸が答え。

「す、すみません。俺は水でいいです」

「え？」

「甘いのも珈琲も飲めないんで…」

菊池が申し訳無さそうに、遠慮がちに言ってくる、隣で尚也が目を丸くする。

「…おまえ、珈琲もダメなの？」

「どうせガキだよっ」

恐らく親や友人達に、それで子供だからかわれたことでもあるのだろう。

ムキになって言い返す菊池に、裕幸は楽しげに笑った。

それからしばらく、誰も何も言わない。

温かな飲み物の匂いだけが鼻腔をくすぐり、木々に覆われた光景を壁一面の窓ガラスから眺めるだけ。

この家に着き、居間に通された尋人たちは、リビングのソファに座るよう促された。

今は部屋を出て行った旧歌は、ソファとテーブルの置かれる一角にだけ敷かれた肌触りの柔らかな絨毯に直接座り、竜騎はキッチン寄りに置いてある食卓の椅子の一つに腰掛けた。

まるで、それが自分達の指定席だと言うように。

「お待たせ」

しばらくして人数分のカップを手にしてキッチンから出てきた裕幸は、最初に一つ、珈琲の入ったカップを竜騎の前に置いた。

ああ、それで湯も別に沸かしていたのかと、尚也、菊池が妙に納得していると、今度は菊池の前にカップが置かれた。

「？」

「甘いのも珈琲も苦手なら、あとはこれかなと思ったんだ。好みに合わなかったら無理しないで。こっちは普通の水だよ」

言いながら差し出されたグラス。

「ありがとうございます」

礼を言い、カップを手にして口に運ぶ。

気持ちの良い微かな匂い。

ミルクティーだ。

甘くも苦くもない、菊池にとって飲みやすい絶妙の味。

「美味い……」

「それは良かった」

「あ、あ、ありがとうございます、すごく美味しいです……」

ほとんど無意識に呟いていた菊池は、ハッと我に返り慌てて頭を下げた。

裕幸は笑んで応え、尚也に珈琲を。

尋人にココアを。

そして旧歌の指定席にカップを置いたと同時に、どこからか戻ってきた彼女の腕には一冊のアルバムが抱えられていた。

自分の席に置かれたカップに笑顔を覗かせながら、

「あつたわ」と尋人が座るソファ近くの卓にそれを置いた。

「これ、一昨年のクリスマスに、この家で撮った写真が入ってるの」

「一昨年……？」

聞き返す尚也に、裕幸が頷く。

「本居先輩が去年いらして下さった時も、叔父……中流さんのお父さんや、従兄弟達が好き勝手に写真を撮っていました。……覚えていますか？」

「ああ……そういやあ、何度か撮るって言われたな……」

そして焼き増しして貰った写真が何枚か、自室の引き出しの中に入っていたかもしれない。

そう呟く尚也の隣で、尋人はじっと閉じたままのアルバムを見つめ、菊池は固い表情で口を開いた。

「去年が本居……先輩で、……一昨年は倉橋がいたんですか？」

判っていて。

それでも確認する菊池。

裕幸は頷き、アルバムを尋人の正面へ差し出した。

「」

「……君が望むなら、是非見てもらいたいと思う。本当なら焼き増しして、君にも持っていてもらいたかったものだから」

「……」

事故で記憶を失い、このようなことにならなければ、このアルバムはきつと倉橋尋人に手渡されていた。

「…ただ、見る前に、これだけは聞かせて欲しい。中流さんに会いたいと言った君は、どこまで記憶を取り戻しているの？」

裕幸の問い掛けに、

「…っ」

しかし尋人は首を振った。

「何も…何も思い出してないんです…」

「…」

「ただ、逢いたいただけなんです…」

「尋人君…」

「逢いたいんです…っ」

それしか言えない。

それだけが全てだ。

今の尋人には、幸せになれと言われ、抱き締められたことだけが

“六条中流”の記憶。

「…ごめんなさい…っ」

忘れてしまつてごめんなさい。

思い出せなくて、ごめんなさい。

それでも逢いたいなんて言つて。

中流を異国の地に追いやつてしまつて。

こんなことに、なつてしまつて。

「…っ」

本当に、自分の涙腺は壊れてしまつたんじゃないかと思う。

ぼろぼろと零れ落ちる大粒の涙は隠すことも出来ず、腿の上で握られた拳を濡らした。

自分は間違つたかもしれない。

やっぱりこんなところに来て来べきではなかったのかもしれないと、心の中、自分を責めた。

「…」



だがそんな尋人の、濡れた拳を。

不意に、温かな掌に包まれた。

「……全てを忘れたままでも、君の心は中流さんを追いかけてくれたんだね……」

静かに語られた言葉。

向けられた眼差し。

その表情に浮かぶのは、疑いようのない微笑みだった。

「……ひろ……ゆき、さん……」

だがその微笑は長くは続かず、すぐに悲しみの色を濃くする。

「……尋人君。もし……中流さんに逢えたとして……記憶を取り戻せるかどうかに関らず、……君と中流さんの間に何があったのか……伝えられる真実が、……もし、とてつもなく残酷なものだったとしても……」

深く呼吸し、裕幸は続ける。

汨歌と竜騎は、何も言わずに、誰もいない場所を見据えている。

「……中流さんがどんな選択をしても……それを受け入れることは、出来るだろうか……」

「……」

「君にその覚悟があるのなら……、それでもいいと言えるなら、中流さんに連絡を取ろう」

「え……」

「ホントか？」

「連絡取れるんですか？」

尚也と菊池が身を乗り出してくるのを、裕幸は頷くことで答えた。  
「さすがにアフリカから呼び戻すのは難しいけれど、電話で直接、話しをすることなら出来ると思います」

「……」

言い、再び尋人に視線を向ける。

「……どうする、尋人君」

真摯な眼差しに問われて、尋人の中ではたくさんの言葉が蘇った。

菊池や尚也、野口、辻貴土医師。

両親、先生、…あの日の六条中流。

たくさんの人達の姿と、言葉が一斉に思い出されて、尋人は目を閉じた。

恐れないで。

目を逸らさないで。

例え、そこにどんな残酷な結末が待っていていようと、立ち止まること、引き返すことだけはあってはならない。

「…お願いします…」

吐息のように掠れた声は、けれど尋人の確かな意志。

「お願いします…六条先輩と、話をさせてください」

ヨハネスブルクから車でおよそ六時間。

中流が南アフリカ最大の観光地でもあるクルーガー国立公園を訪れ、レタバ・キャンプに一泊した翌朝　正確には一夜を明かした、と表現するべきか。

観光目的ではないにしても、ここまで来て野生の動物達を見ないなど勿体無い、時間の許す限りアフリカの自然を体感しながら、アフリカという大地を撮り続ける男の仕事を見ていたのだと訴えた中流に、その男　佐伯幸也はあの一言を突き返した。

俺の予定を狂わせるな……

結果、佐伯幸也に同行した中流は一睡も出来なかった。

いわく、その種族によって異なりはするものの多くの動物達が動き回るのは夕方十六時頃からの夜間。

また早朝から動き出す種族も多い。

イイモノが見たけりや目を離すなど言うことで、徹夜で連れ回されたのである。

「あのオヤジ……っ」

午前八時過ぎ。

太陽もすっかり上りきり、冬へと向かう、涼すぎる風が吹く。

つい四十八時間ほど前に日本の空港を飛び立ち、香港を経由しアフリカへ入国したのが三十時間前。

それから時差に慣れる間もなく、ここ、クルーガー国立公園を訪れたかと思えばイキナリの徹夜。

それは佐伯本人も同じだろうと思うかもしれないが、中流が生まれて初めて立ったアフリカという大地に感動し、その風景をフィルムに収めていた間に、佐伯はしっかりと睡眠を取っていたのである。若いだとか、体力には自信があるだとか言ってみても睡魔には関係ない。

さすがに中流の疲労は限界だった。

「はあ……」

少しの間、眠ってしまったても平気だろうか。

佐伯はそんな自分をどうするだろう。

置いていかれるだろうか。

これだから七光りは、と蔑まれるだろうか。

それならそれでも構わないと自棄になる気持ちと、ここに来たのは自分の意志、自分の目標と言葉に責任を持ちたいという気持ち、疲労と睡魔の渦に巻き込まれていった。

「……ん……」

お世辞にも気持ち良いとは言えない、布団代わりの布切れに包ま  
りながら、目を閉じた。

どうか、このまま眠らせて。

「おい」

「……っ」

不意に背中を蹴られて、中流は無理やり意識を引き戻された。

「おい起きろ、手間掛けさせるな」

「…、佐伯さん…」

「？ 寝惚けてんのかよ」

不機嫌を露に言ってくる佐伯に、中流は内心で息を吐いた。

起きろ自分。

起き上がって、立ち上がって。

そうして相手の顔を見上げると自分を叱咤する。

「…どうしたんですか。用事あるから街行くって…」

このキャンプ場にはレストランやスーパーも揃っており、どこへ行くにしても一時間は休めると予想していたのだが…。

「その街で呼び出し食らったんだ、おまえに電話だってな」

「……電話？」

「日本から緊急らしいぞ」

思いもしなかった返答に、一瞬、その言葉自体が飲み込めなかった。

だが電話と言えば“電話”でしかなく、自分に掛けてくる相手など限られる。

「なんで…」

次第に悪い予感が胸中を占める。

わざわざアフリカまで電話してくる用事なんて何がある？

しかも、それだけの理由を彼ら家族　大樹の血は抱えている。

まさかあの従弟に何かあったのだろうか。

それとも旅先の両親、仕事中の兄の身に何か起きたのか。

「佐伯さん、電話どこですか…っ」

「街のセンターだ。…乗れ」

車を指し示されて、中流は足早に乗り込んだ。

佐伯も素早く運転席に戻り、乱暴な走り電話の繋がっているセ

ンターへ連れて行った。

車の中、中流は祈るような気持ちで拳を握り締めた。

もし裕幸に何かあったなら、どんなに悔いても悔やまれない。

旅先の両親や、兄に何かがあったとしたら、自分はどれくらい  
いのだろう。

世界中を歩き回るのが趣味と化している両親にとってはそれも本  
望なのかもしれないし、兄に至っては私生活を顧みると自業自得の  
観が強い。

嘆くのも悲しむのも彼らのためにはならないような気がして。

だからと言って、どうすればいいのか考えがまとまるはずもなく、  
街までのわずかな道程が、何時間も掛かっているように感じられ  
た。

辿り着いたセンターの受付で、英語での会話。

自分が六条中流だと名乗り、日本からの電話を繋いで欲しいと訴  
えた。

そうして数分後。

誰から、誰の知らせを受けるのかと表情を強張らせていた中流の  
耳に、静かな沈黙が届いた。

「……？」

どうしたのか。

緊急だと自分を呼び出しておきながら、あちらから一言も発さな  
いのは何故だろう。

「もしもし？」

呼びかけ、それでも続く沈黙。

誰か、と口を開き掛けたそのとき。

震えた吐息が感じられた。

「」

それは、なんの間違いか。

『先輩……』

『 …… 六条先輩 …… ? 』

焦がれて、焦がれて。  
消した想い。

これは何と言つ名が悪夢だろうか  
……。

## 時の旅人 一四

『先輩……あ、あの……倉橋尋人……です……』  
ひろと。

ああ、尋人の声だ。

間違いなく彼の声。

忘れたことなどなかった。

先輩、と遠慮がちに呼ぶ声も。

僕……と緊張気味に自分の言葉を口にする話方も。

何もかもが、切り捨てたはずの想いの中、色鮮やかに繰り返された。

夢の中、幾度も求めた、その瞬間。

『……先輩……？』

「……っ」

受話器を握り締める手が震えた。

もしその場に誰もいなければ、きっと自分は正気でいらなかっただろう。

どうして、おまえが。

どうして尋人、おまえが俺に電話なんかしてくるんだ。

電話で、そんな声を聞かせて。

切り捨てるしかなかった想い。

忘れられた悔しさ。

……死を選ばせてしまった罪。

それらを再び突きつけて。

おまえは、何を望むんだ……？

『先輩……？ 僕……倉橋尋人です……』

ああ、判ってる。

『尋人です。……先輩……？』

判ってるんだ。

だからもう、呼ばないで。

聞かせないで。

言っではならない言葉を引き出させるな。

「……かわつてくれ……」

「え……」

「他に誰かいるだろう……？ 裕幸か、兄貴か……誰かいるなら、そいつに代わつてくれ……」

「でも」

「代わつてくれ……！」

「……っ」

必死に感情を抑えながら、……それでも抑えきれない声で告げる中流に、電話の向こう、尋人が息を呑むのが判った。

自分の言葉が尋人を傷つけている。

知っている。

……だからこれ以上、近づくな。

「……中流さん」

「！」

不意に届いたのは一つ下の従弟の声。

やはりそうだった。

尋人自身が自分への連絡方法を知っているわけがないのだから、そこには必ず、自分の親族が関っているはずだった。

「……裕幸……っ、なんで……！ なんて尋人が……尋人に電話なんて……裕幸……！」

もしも、そこにいたのが兄貴でも。

両親だったとしても。

……誰であっても、知っているはずじゃないか。

判っているはず 解つてくれていたはずじゃなかったのか。



「どうして……裕幸どうして……！」

『中流さん、落ち着いてください。…辛いのは判ります。でも…尋人君の気持ちも、…彼がどんな気持ちでこの街に帰ってきたのか』  
「尋人を俺に近づけちゃいけないって…俺は二度と尋人の傍に行っちゃいけないって！ おまえだつて…っ…おまえなら、ちゃんと判つてるだろ……！？」

『……』  
判らなかつたなんて言わせない。

それこそ、裕幸ならば。

「どうしてだよ裕幸……っ！」

『……』

あの日、尋人の記憶を消したのは自分だと裕幸は言わなかつたか。尋人に生きて欲しかつたから願つたのだ、と。

尋人が生きるためには、中流への想いが何よりの障害だつたのだ、と。

だから彼らは離れた。

別れを告げて、二度と交わらない時を進んだのだ。

近付いて、…近付かれて。

万が一、あの日の記憶を取り戻すようなことになってしまったら、そのとき、尋人はどうなってしまうのか。

消さなければ生きられなかつた記憶を、もう一度得てしまったら。

その命は 心は、どうなる………？

「俺が尋人に会えるわけがないの知ってるだろ…っ…だから予定を早めたんだ…っ…、おまえなら気付いただろう…っ…っ？」

『……気付きました』

「だったら…っ…」

『中流さんの気持ちは判っていました。…でも、尋人君が貴方と話したいと言つたんです』

「……っ…」

『貴方の言葉を、貴方自身の口から聞くことを尋人君自身が望みま

した。…それなら、直接、会うことは出来なくても、せめて電話で話をさせてあげたいと思ったんです、…貴方のためにも」

「裕幸…っ」

『お願いします。話してあげて下さい…そして伝えてあげて下さい。中流さんの、今の気持ちを』

「…っ…！」

従弟の静かな声が響く。

頭では受け入れようとする。

だが、最初に聞いた尋人の声が、それを拒んだ。

…先輩…僕…尋人です…

その声が。

呼び声が。

どうしたって、声にはならない言葉を引き出させる。

「…っ…ダメなんだ…俺は…、俺には、出来ない…っ」

『中流さん…』

「俺…っ…俺は、まだ…頭では判ってたって…尋人の声を聞いたらたまらなくなる…っ」

『…』

「たまらないんだ…っ…今だって、そこにいると思うだけで…っ…あの日になんか二度と戻れるわけがないのに…戻っちゃいけないのは解ってるのに…っ…だから日本離れたのに…っ…っ…っ…！」

たまらないんだ。

…好きで。

好きで、好きで。

欲しくて。

いますぐ、抱き締めたくて。

決して、願うことすら許されないのに。

「…っ…」

会えない。  
話せない。

「俺…俺は…っ…まだ尋人を忘れられてないんだ…っ…!!」  
今も、まだ。

これからも、ずっと。

「忘れられないんだ…!!」

「!!」

中流の、悲痛とも言える叫びを。  
苦しみを。

日本で耳にしたのは誰だっただろう。

「あ、本居先輩…!!」

「中流このバカ野郎…!!!!」

唐突に乱入してきた怒声。

その主は。

「いい加減にしろよ黙って聞いてりゃ一人で辛いのが負ったみたい  
な言い方しやがって！ オマエ俺に何て言った！？ いつも偉そう  
に何言つてたんだよ…!!」

「…尚也…?」

思い掛けない相手に、どう反応すべきか戸惑った中流に、次いで  
自責しているような裕幸の声が届く。

「すみません…今の中流さんの声…こちらの全員に聞こえていた  
んです…」

「」

全員に。 尋人に。

一瞬、中流は心臓すら止まる錯覚に陥った…。

中流に会うことは出来なくても、電話で話をするくらいは出来ると言った裕幸は、それから何度か、受話器を取ったり置いたりしていた。

その間、彼が操った言語は何種類あったか。

英語は尋人の耳にもかろうじて聞き取れたが、他はまったくの理解不能。

判るのは日本語が一度も使われなかったと言うことだけだ。

(裕幸さんてスゴイ……)

天は人に二物は与えないと言うなら、目の前にいる存在は絶対に人ではありえない。……むしろ、人ではないと言われた方が素直に信じられる気がした。

「……」

それからしばらくして、

「……中流さんがつかまりました」

受話器を耳に当てたまま、そう教えてくれた裕幸の表情はどこか切なげで。

本当は繋がらなければ良かったのかな、と尋人を戸惑わせた。

手渡された受話器を握り締めて耳に当てると、今はまだ、何の応答もない。

現地のスタッフが中流を呼び出しているのだろう。

「……中流、素直に尋人君と話そうとするかしら……」

ふと汨歌がそのようなことを言い、食卓に座っていた竜騎の無表情が少し険しくなったように感じられた。

「中流の奴、ヒロトと話したからないかもしれないのか？」

「……その可能性は高いと思います」

「……」

裕幸が素直に答えると、尚也はしばらく難しい顔をしていた後で、

電話機についているスピーカー機能をONにした。

「本居先輩？」

「こつすりゃ逃がさないで済むだろ。…駄々こねるようなら俺がキ  
しる」

「…」

尚也の発言に裕幸は複雑な表情を浮かべ、汨歌が腰を浮かしかけたが、その直後に竜騎が視線を合わせ、…おそらく制止したのだから。

彼女は再び絨毯の上に座った。

それからまたしばらくして。

中流の声が届いた。

「いよいよ、実際に会うことは叶わなくとも二人の時間が重なるう  
としているのだと、その場の誰もが、それぞれの思いで見守っていた。  
た。」

だが、裕幸達の危惧は現実となり、尋人と話そうとしない中流に、  
尚也は予告していた通りにキレたのだ。

「いい加減にしるよ黙って聞いてりゃ一人で辛いのが負ったみたい  
な言い方じゃがって！ オマエ俺に何て言った！？ いつも偉そう  
に何言つてたんだよ！！」

裕幸から受話器を奪い取って怒鳴りつけた尚也。

自身を責めるように謝罪する裕幸。

そのいずれもが尋人の耳には遠かった。

…忘れられないんだ…！！

中流はそう言ってくれた。

…俺…俺は…っ…まだ尋人を忘れられてないんだ…っ…！！

話せない、たまらない。

まだ尋人を忘れられないから近づけない、…中流は確かにそう言ってくれた。

「…っ……」

話すことを拒まれたことが、奇しくも彼の本心を伝えてくれたのだ。

（先輩……っ……！）

言葉が声にならない。

ただ、胸の奥が熱かった。

「好きな奴に“好きだ”って言えるのがどんなに幸せなことかって俺に言ったのはおまえだろ！！ そのおまえが何でヒロトから逃げんだよ！！」

尋人の心中を察することもなく、尚也はなおも中流に言い募る。

「忘れられたからって何だよ！ ヒロトはおまえに会いに来たんじゃないか！」

本気で怒鳴りつける尚也に“遠慮”の二文字はなかった。

己の感情のままに吐き出される言葉は、…直前の親友の叫びを激情を、過去の中流の姿に重ねて紡がれる。

もう、あんな顔はさせたくないのだと。

尚也なりの、中流への想いの表れだった。

……だが。

「おまえの今の話し聞いたら誰だって判るっ、おまえがヒロトのと今も好きなのもロバレだろ！？」

…やめて……

「なんで好きな奴から逃げんだよ！ 一人で勝手に決めるなよ！」

…もう、やめて……

「いい加減、自分の幸せ考えろって！　ちゃんとヒロトに言えば！　ヒロトだって…っ」

「あ…！」

「汨歌さん…！」

「…！」

刹那。

広い空間に響いたのは痛々しい衝撃音。

振り上げられた少女の右手は、拳で、尚也の右頬を殴りつけていたのだ。

その音は、確実に電話の向こうにいる中流にも聞こえていただろう。

「痛…っ…！」

「汨歌さん！　いくら何でも拳で…っ」

「黙りなさい…！」

弾くように言い放った汨歌の言葉は、自分を諷めようとした裕幸に向けてのものであり、中流を追い詰める尚也に向けたもの。

「いい加減にするのはアンタでしょ！？　何も知らないくせに勝手なこと言わないで！　アンタに中流の何が判るのよ…！」

「…っ…！」

「人の気持ち考えようとしないうちに、うちの中流を罵らせたりなんかしないわ！　そんなの絶対に許したりしない…！」

仁王立ちになり、鋭い眼差しを決して尚也から逸らさずに言い放つ少女は、その瞳をわずかに揺らしていた。

潤ませるではなく、彼女もまた内面に激しい感情を抱いているからだ。

「尋人君のこと今さっき知ったようなヤツが、中流に偉そうなこと言わないで…！」

「…っ！」

「汨歌さん…！」

いくら何でも言い過ぎだと、裕幸が彼女の肩を抱く。

「…っ…だつて悔しいじゃない…っ、コイツ中流のこと何も知らないくせに中流のこと傷つけてる…！ 中流に“あの時”みたいな辛い思いさせてる…っ！」

「汨歌さん」

もう何も言わないで下さいと、その細い腕に彼女を抱き締めた。

汨歌は裕幸の胸にしがみつき、ぎゅ…っ唇を噛み締める。

そんな二人に。

「…どうせ俺は何も知らない…」

「本居先輩…」

「アイツは…っ…中流は！ 俺には何一つ話してなんかくれない…俺はいつだつて役立たずだ…っ！」

“あの時”なんて尚也は知らない。

尋人のことを知ったのも、彼らの言うとおり、この一日、二日のことで、中流の口から聞いたことなど一度もなかった。

それでも、中流にあんな顔をさせたくなくて。

尋人に忘れられて傷ついている中流に、もう一度、現在の尋人の気持ちを聞かせてやれば笑顔にしてやれるんじゃないか、って。

本当の幸せ、掴ませてやれるんじゃないか、って。

そう、思ったのに。

……そう、信じただけだったのに。

「…っ…っ…っ！」

「先輩！」

ドンツ…と叩き付けるように受話器を手放し居間を飛び出した尚也は、それきり大樹家から姿を消した。

開け放たれたままの扉を複雑な表情で見つめる菊池。

何も言えない尋人。

複雑な沈黙が降りた、その中で、食卓の椅子に座ったままだった竜騎が立ち上がり、投げ出された受話器を手に取った。



「……」  
短い息を吐く彼は「どいつもこいつもガキかよ」と言いたげな険しい表情。

「……言っとくけど！ 私は絶対に謝ったりしないわよ！ 私は悪くないでしょ！」

汨歌の可愛げの無い台詞に、竜騎は再度、息を吐き、

「……だそうだ」

受話器の向こうに話しかけた。

「……」

そうして、しばらくして聞こえてきた、苦笑い。

『ああ。……尚也に謝らなきゃならないのは俺だ……』

「なんでアンタが謝るのよ！ アンタは、それこそ何も悪くないでしょ！？」

『俺が悪い』

「中流！」

『逃げているのは俺だ』

強く言い切った中流に、尋人の顔が歪む。

それを視界の端に捉えて、竜騎は口を切った。

「……どうする。尋人と話すか」

『……』

わずかばかりの沈黙。

返答は、否だった。

『話さない。……話せない。俺には、尋人の声を聞いて、平気でいられる自信がないんだ……』

「……」

「中流さん……」

『けど……このままで、俺の声が届くなら……聞いてくれ』

「……」

聞いてくれ それは間違いなく、尋人に向けられた言葉だった。最初は、あまりの不意打ちに正気を保つのも困難だった中流だが、

そこに居るといふ覚悟が決まれば、しばらく冷静を装うことくらい可能な」はずだった。

「…尋人」

「…っ」

呼びかけられて、応えなかった。

だが声が出ない。

どうしても言葉が見つからない。

「…おまえが、何を知って、何を思い出そうとしているのかは判らないけど…、俺がおまえをどう想っているかもバレただろうけどさ…、それは全部、過去のことだ」

「え…」

「もう過去の話なんだ。いまの俺達には何の関係もない」

「でも…っ」

「尋人君」

言いかけた尋人を制し、裕幸は首を振った。

何も言っではいけない。

中流の言葉を受け入れなければならぬ。…何故だか、裕幸の無言の瞳からは、そんな言葉が聞こえてくるようだった。

「過去を振り返るな。昔に戻ったりするな。俺達がまた逢うことは二度とないから…」

決して。

絶対に、中流が尋人との再会を望むことはないから。

「…未来だけを向いて歩け」

「先輩…」

「未来で、ちゃんと、…幸せになってくれ」

「…っ…」

…幸せになれ…

それはあの日の別れの言葉。

全てを忘れ、中流との時間を閉ざしてしまった自分に向けられた、最後の想い。

「……もう……無理なんですか……？」

掠れた問い掛け。

いまの尋人の表情は、きつと中流の瞼に浮かんでいた。

『……ああ』

静かに、静かに。

『俺は、二度と尋人とは会わない。……会いたくないんだ』

「……っ」

『ごめんな、尋人……』

謝らないで。

ごめんなさいは、本当は、僕の台詞。

貴方を忘れてしまつて、ごめんなさい。

「尋人君……」

「倉橋……」

菊池と、中流の従姉弟達に囲まれて、尋人は深く頭を下げた。

竜騎の持つ受話器に向かつて、深く、長く。

「……いろいろと、ご迷惑ばかりお掛けして、済みませんでした……」

冷静を装つて語られた言葉に。

微かな吐息だけが応える。

中流と尋人、二人の想いは交錯しながらも、重なることは叶わなかったのだ……。

## 時の旅人 一六

過去の真実を知るのは、わずか一握り。

中流と、彼の親族の他には、それを起こした張本人である滝岡修司 彼だけが、記憶することを負わされたのだ。

倉橋尋人は、汚れた自分では恋人の傍にいられない 巻き添えにしたくないと考えたがゆえに自殺を図り、生きる代わりに恋人との記憶を閉ざした。

榊学園中等部で尋人に度重なる暴力を振るっていた少年達は、自分達の行いが人一人を死なせたのだと言う恐怖・後悔だけを残し、尋人が受けた行為については忘れさせられ、また直接、尋人を襲った男達も、その記憶を抹消された上で、それまでの所業を償うべく、生涯、闇の中を行くことを強いられた。

記憶を失くした尋人に“そのこと”が決して他人の口から語られることが無いよう、彼ら 大樹一族の面々は図ったのだ。そうして祈った。

中流が尋人の幸せを祈るように、彼の親族達は中流の幸せを祈っていた。

誰よりも。

何よりも。

大きく深い幸せが中流に訪れることを、皆が心から祈ったのだ……。

「俺は中流にも幸せになって欲しいだけだったんだ……！」

「尚也……」

「なのに…なのに俺…っ…もう判ンねえよ…なんだってんだアイツは…!! ヒロトのこと好きなんじゃないのかよ…っ!」

「…」  
彬の部屋。

恋人に背中から抱き締められながら、尚也はぐしゃぐしゃになった顔をなおも歪めて声を荒げた。

何度も、何度も。

頭の中で中流の言葉と汨歌の言葉が繰り返され、行き場のない怒りと悔しさが胸中で渦を巻く。

「事故って記憶失くしたって…っ…それだってヒロトは中流が好きだって言ったんじゃないか…なのになんで駄目なんだよ…っ…どうして逃げなきゃならない…!!」

「……」  
尚也の怒りに、彬は抱き締める腕に力を込めることで応えた。

尚也の気持ちも判る。

それこそ、機会されれば彬も同じ言葉を中流に向けたかもしれない。なかつた。

… 倉橋尋人の記憶が途切れた原因が、ただの事故ではなかつたのかもしれないと疑う前ならば。

「… 今日、学園で聞いたんだが…」

「… ンだよ」

「 尋人君は中等部でイジメに遭っていたらしいよ」

「 … え…?」

目を瞠って聞き返してくる尚也に、彬は固い表情のまま頷いた。

「 当時の同級生達は皆が知っていたことだそうだ。… だが尋人君を庇えば、その矛先は自分にも向いてくる… だから、誰一人、尋人君に声を掛けることすら出来なかつたそうだ」

今日の昼前に、階段の踊り場で、かつて尋人の同級生だったと名乗った少年達から聞いた話を、彬は正確に伝えた。

電話で尚也と話しながら口にした“ 尋人 ” の名前に反応した少年

達は「彼は自分達を恨んでいないだろうか」「挨拶もなく転校してしまっただけれど、今どうしているのだろうか」と、心から気に掛けているようだった。

「尋人君が転校するのと同じ時期に、イジメグループの主格だった同級生は学校を辞めた…そのせいもあって、尋人君の転校には妙な噂がつきまತ್ತつたらしい」

「噂…？」

「…つまり、尋人君の事故は、事故ではなくて自殺だったんじゃないか、ってね」

「！」

「イジメが始まったのは彼が中一の後半頃からだったそうだし、丁度、記憶が無い時期と一致するんじゃないのか？」

「…って……」

「だから？」

「…だから、中流は尋人に本心を告げられないのか？」

自殺が本当ならば、そんな酷い過去を思い出させたくないから？  
忘れた記憶の一部に、二人が付き合っていた時期が重なるのは、それが原因の一つでもあったから…？」

「…って、自殺…って、あくまで噂だろ…？ そんな…」

「だがそう考えれば、それを尋ねた時に兄貴があれほど取り乱したのも頷けるんだ…」

「…」

「何にせよ…俺達は何も知らな過ぎるんだよ…。六条の従姉が言ったことは正しい」

「…っ……」

「尚也は早まりすぎたのかもしれない…、もしかすると俺達は、決して開けてはならないパンドラの箱に触れてしまったのかもしれないな…」

「…」

三月の末、暖房器具の働きは上々で部屋の中は心地よく暖まって

いるはずなのに、不気味な寒さが全身を震わせた。

自分達は何を知らないのか。

誰が、なにを知っているのか。

二人の脳裏には、六条中流の淋しげな微笑が浮かんでいた…。

「…このまま帰っていいのか？」

菊池の問い掛けに、尋人は静かに首を振った。

「…判らない…何も考えられないよ…」

「倉橋…」

「どうしたらいいのか…何も判らない…」

菊池の祖父母の家。

二人が寝室として借りている部屋で、尋人の声は震えていた。

「先輩は…」

言いかけ、だが躊躇うように口を閉ざす。

中流の言葉が思い出される。

彼は自分を想ってくれているけれど、もう会いたくない…自分達は関係ないと、言い切った。

「…なんで…記憶がなくなっただんどう…」

「…」

「僕に…何があったのかな…」

まるで独り言のような尋人の言葉に、菊池は無意識に自分のバッグを見た。

その袋の底に、隠すように。

誰の目にも触れぬように押し込んである一本のフィルム。

どこに居るのかも不明な従兄が送って寄越したそれなら、もしかすると、尋人の身に起きた何らかの事態を教えてくれるだろうか…？

「…倉橋」

「え…？」

自分のバツクに手を伸ばす菊池。

呼ばれた尋人は答え、その視線を友人のバツクに移す。

それが、なにかと。

口を開き掛けたそのとき。

「武人」

不意に祖母が部屋を訪ねてきて、二人は弾かれるように顔を上げた。

「武人、起きてる？」

「なに祖母ちゃん」

ちよつと待つて、と尋人に手で合図しながら立ち上がった菊池は祖母の話を聞くために襖を開けた。

寝巻き姿で立っていた彼女は、妙に不安そうな顔をしている。

「どうした？」

「…あのね、外にずっと人が立っているの」

「人？」

「二人か三人…たぶん男の人よ。気のせいかしらと思っただけけれど…何だか家の中を覗き見られているようで怖くて…」

「何だよ、それ。俺ちよつと言ってくる！」

「ダメよ武人！ そんな危ない真似したらダメ！」

息巻き、外に出て行こうとした孫を必死で止めて、彼女は早口に告げた。

「そうじゃないの、そんな危ないことしないで。今、お爺ちゃんが警察に電話してくれたから、そのうち、いなくなるわ。ただ、そういう人達がいるから、絶対に外に出ちゃダメよって言いに来たの。まさか窓を開けて寝たりはしないでしょうけど…戸締りはちゃんと確認してね」

「…わかった」

不承不承ながらも頷く。



危ない、心配、そう言われてしまつては無茶するわけにはいかなかった。

「それじゃあね、おやすみなさい」

彼女は最後にそう言い、尋人にも笑んで、自分の部屋に戻つていった。

その背を見送りながら、二人はふと、昼間の野口の言葉を思い出した。

…君、この辺に知り合いとかいるのかな…

…さつき。後ろに座つていた男二人が、君たちの事を盗み見ていたから……

まさか、と思う。

「まさかね……」

実際に声にして、二人は乾いた笑いを零す。

「あ……そろそろ寝るか」

「う、うん……寝ようか……」

何となく、それが一番良いような気がして、二人は寝る準備をする。

いつもより、窓の鍵、廊下の窓にも気を配り、床に就いた。

電気の消された暗い部屋で。

何か、悪い予感がしていた ……。

過去の真実を知るのは一握り。

尋人に、尋人が忘れた過去を誰一人漏らさずに済むよう、それだ

けの能力を持つ大樹家の面々は凶った。

尋人が襲われた事実を、忘れさせることで無かったことにし、誰の口にも上らないよう施したのだ。

そうして祈った。

尋人の幸せ。

中流の幸せ。

中流の幸せ。

尋人の幸せ。

そのために、尋人が記憶を取り戻すことを願っ

たならば……？

## 時の旅人 一七

「忘れ物はない？」

菊池の祖母に声を掛けられて、尋人は手元の荷物を確かめ、部屋を見渡す。

三日間、寝泊りした部屋に片付け忘れたものがないのを確認し、「大丈夫です」と返した。

「じゃあ行くか」

菊池が言い、尋人も頷く。

二人は今日の午前中の電車で地元へ帰るのだ。

玄関を出ると、祖父が車庫から車を出している最中で、二人は堀に寄り添うようにして立つ。

その先では、祖母が近所の主婦達と立ち話をしていた。

「昨夜、変な男達がうるついでいて…」

「パトカー呼んだの、うちのお祖父ちゃんなんですけどね…」

「一晩中見回ってくれていたとか…」

「朝早くに、お巡りさんが一軒一軒回って注意するように言ってくれてるのよ…」

「何でも、お巡りさんが怪我させられたって話でね…」

「……………」

「……………」

聞こえてくる内容に、二人は顔を見合わせた。

無意識に表情が強張る。

昨夜、漠然と感じた不安が、今また胸中を襲った。

その男達は、本当に昨日のFF店で自分達を見ていた男達なのだろうか。

ならばどうして、そんな執拗に追ってくるのだろう。

「…平気さ。俺達はもう、こっからいなくなるんだし」

「…ん」

尋人を励ますように、菊池は彼の背を叩く。  
車庫から出された車に乗り込み、祖母を呼ぶ。

「これから孫達を駅まで見送りに行つて来るの……」

「また淋しくなっちゃいますね……」

行つてらっしゃい、また遊びにいらっしゃいね……、その声を掛け  
てくれる近所の主婦達に軽く会釈し、車は発進した。

得体の知れない不安を残しながらも、少年達はこの町を去るのだ  
つた。

ちょうど通勤・通学ラッシュを終えた時間帯、駅の人影はまばら  
だった。

尋人達が乗車予定の電車が到着するまで、十五分程の余裕があり、  
改札口の手前、自動販売機の前に設えられたベンチに座つて待つ事  
にした彼らは、そちらを振り向くと同時に目を丸くした。

例え人込みの中であっても、その人物には気付いただろう。

栗色の髪に白磁の肌。

その隣に、寄り添うように立つ漆黒の髪、長身の男。

「……裕幸さん」

無意識にその名を呟く尋人に、当人はそつと微笑む。

裕幸と竜騎は、静かな足取りで尋人に近付いてきた。

「今日、帰ると言っていたから、……せめて見送りぐらいはしたかつ  
たんだ」

「……」

尋人の表情がわずかに歪み、裕幸の微笑みも複雑なものに変わる。

「……」

菊池は尋人の背を押すと、気を利かせ、祖父母の腕を引いて離れ

ていった。

それを見つめ、感謝するように菊池に頭を下げた裕幸は、

「尋人君」

わずかな時間も惜しむように、少年の手を取った。

「これから、どうするかは決めた？」

「……」

静かな、それでいて暖かな眼差しに問われて、尋人は首を振った。

「判りません…何も…、まだ…」

「……中流さんのことが嫌いになった…？」

「！ そんなこと…っ」

中流を嫌うなんて、そんなことはない。

有り得ない。

…本当は、会えるのなら会いたいのだ。

好きだと言ってくれたこと。

閉ざされた時間が共に在ったこと。

全てが、今もこんなに強く心を占めているのに……！

「……」

唇を噛み締め、必死に何かを抑え込もうとしている少年。

その悲痛な姿に、裕幸は意を決する。

まだ迷いはあつたけれど。

不安、恐れは拭えないけれど。

「……」

見上げた竜騎の眼差しが逸らされることはなかったから。

失うことはない、信じられるから。

「中流さんは、きつとこんな事は望まない。君が苦しむことな

んか、…絶対に」

「……？」

「けれど…もしも君自身が記憶を取り戻すことを…、中流さんの時間を取り戻したいと望んでくれるなら…」

たとえどんな過去があろうと、それを乗り越えてくれるなら。

「君の記憶は、俺の中に在る」

「俺の言葉を理解するのは難しいと思う。けれど、君の記憶は消えたわけじゃない。君の中では閉ざされてしまっても、それは確かに在るんだ」

「裕幸さん…?」

不安と戸惑いに満ちた表情で呼ばれ、裕幸は苦しげな顔になる。

だが、その言葉は明瞭だった。

「人の心を動かすのは、人の心だ」

「…」

「心は、心でしか動かせない」

「心…」

「尋人君。君は、君の望むものを願ってごらん。君には、それを実現させられる味方がたくさんいる。俺も…俺達も、君の願いが叶うことを望んでいるんだ」

例えこの場にはいなくとも、閉ざされた時間の中、君を想う人は限らない。

「どうか信じて欲しい。君の願いは必ず叶う。心からの想いは、運命すら変えるよ」

「…」

「ね、尋人君」

裕幸の言葉を、尋人はどこまで理解出来たのか。

それは当人達にも判らなかつたけれど、少年は「ありがとう」の一言を残して去っていった。

… ありがとう…

ありがとう…

自分の中で、あらゆる言葉を呑み込もうとするかのように。

「嫌な予感がするんだ……」

「……」

「あの夜、兄さんと出流さんが施した術は遠からず解けてしまう。」

「……解くのは、記憶を取り戻したいと願う尋人君自身の“心”だ」

「……ああ」

「全てを思い出したとき、……尋人君が乗り越えてくれることを祈るしかない……」

眩き、二人は空を見上げた。

ここからならアフリカはどちらの方角か。

……中流さん、貴方は大切なことを忘れていきます……

時間を前後し、尋人と菊池の乗る電車が到着したホームの端、障害者用エレベーターの影に二人の男が佇んでいた。

発車数分前、その電車に尋人が乗るのを確認し、男達は笑んだ。

自分達も同じ電車に乗り込み、下車する駅、向かう街まで尾行する。

家突き止めれば彼らの仕事は終わりだ。

あとは最後の“お楽しみ”を待つばかり。

「行くか」

卑しい笑いをこぼし、男達は動いた。

標的より二両離れた扉から乗り込み、ゆっくり近付いていくつもりで。

だがその肩を。

「ちよつと待った」

不意に掴んだ男の手。

否、男と言うには若く、かと言って少

年の域は過ぎたであろう力強さ。

「何だテメエ」

「アンタら昨日もあの子達を尾けてたろ」

「」

言われて、男二人も気付く。

そこに現れたのが、昨日のFF店で標的と一緒にいた“野口”と呼ばれていた人物だと。

「…何の用だ」

「別に用なんかないけどさ、何となく、あの子達と同じ電車には乗って欲しくないんだ」

「…」

顔は笑っている野口だが、その眼差しは真剣だった。

そして、その真剣さが男達の不興を買う。

「…ざけんな」

「邪魔だクソが」

「！」

肩を掴む手を払い落とされ、振りあがった足が野口の腹部を狙った。

「おっと、おつかないな」

それすら軽口を叩きながら躲した野口は、尚も手を伸ばして男一人を車両から引き摺り下ろした。

「！」

「アンタも降りろよ！」

二人目の男も強引に下ろさせ、車両から遠ざける。

エレベーターの影。

ホームに佇む車掌から、その姿が隠れる場所へ。

「テメエッ！！」

同時、発車を促す笛の音。

アナウンス。

「おいヤベエぞ！」



「早く乗れ！」

「行かせるかよっ」

「ウゼエ！」

「っ！」

足首を蹴られ転倒した野口を踏みつけて車両に向かう男達。

だが野口はそれを許さず、仕返しとばかりに自分の背中を踏んだ男達の足首に腕を絡めてやった。

「！」

「なっ…！」

「言つたら、アンタらにあの子達とは同じ電車に乗って欲しくないっつな」

「…っ…」

扉が閉まり、電車は動き出す。

尋人と菊池を乗せた車両は、危険因子を残し、この街を去っていく。

「テメエ…っ！」

「覚悟出来てんだろっなあ…っ？」

凄む男達に、野口は笑う。

尋人と菊池。

あの二人に、また会えればいいなあと思いつながら。

## 時の旅人 一八

遙か彼方、地平線に重なるように浮かぶ影はトムソングゼルの細い四肢。

それより手前、伸びた草の中を掻き分けるように忍び寄るのはチーターだ。

もうすぐ陽が沈む頃。

中流は、チーターの狩りを見る機会に恵まれていた。

それを「残酷だ」とか「平気で見ていられるなんて信じられない」と非難する声もあるだろうが“生きるための姿”を目撃出来るのは非常に稀なこと。

トムソングゼルも、チーターも。

命を繋ぐために生きている。

その貴重なワンシーンを目に焼き付けられるのは、この上ない幸運だと信じている。

中流も、佐伯も一切口を開くことなく、動物達の一挙手一投足に息を呑む。

チーターが全速力で走れるのは、長くても二百メートル。狩りの成否は、ガゼルにどこまで忍び寄れるかで決まるのだ。

彼らはカメラを構え、そのファインダーから見つめる。

静かに、静かに距離を詰めるチーター。

何に気付くことなく、草を食むガゼル。

どちらも近くに群れの気配はなく、もしかするとガゼルは迷い子だったかもしれない。

陽が沈むにつれて動物達の姿は黒く塗りつぶされていくようで、チーターの黄金色の毛並みも鮮やかさを失っていく。

風に吹かれて、草が揺れて。

地平線が揺らいだ、その刹那。

「！」

気付いたのはガゼル。

大きく跳躍し、駆け出したのを、全速力のチータが追う。

「……！」

わずか二百メートルの死闘。

中流のすぐ隣で連続するシャッター音が途切れた時には、彼らの戦いも決していた。

「……」

地平線に溶け込むように消えていったガゼル。

獲物を逃したチータの後姿が、複雑な感情とともに中流の心を痛めた。

「……」

「撮ったか」

チータの姿を見つめていた中流は、唐突な問い掛けに言葉を詰まらせた。

それを佐伯は彼の返答と取り、

「目が感情に負けるようじゃ、イイ画なんか撮れないぜ」と冷たく言い放つ。

これには、どんな言い訳の仕様もなく。

「はい……」と返せば、佐伯は無感情な一瞥をくれて先を進み始めた。

「戻るぞ。出すものがあるならおまえも出しておけ」

「あ、はい」

今日の撮影はこれで終わり、キャンプに帰る。

街に寄るから、現像するフィルムがあるなら途中で出して来い……  
と言うような内容を、今のように告げる佐伯に、中流は内心で苦笑した。

「……」

「……」と軽く息を吐きながら、荷物を肩に背負い、佐伯の後を追った。

この独尊的な男の物言いにも随分慣れてきたが、その一方で、相

変わらずな態度に安心している自分がいた。

あの日　突然の日本からの電話を受けて、佐伯の目の前で取り乱したあの日から、既に二日。

傍にいた受付の職員には日本語の会話など理解出来なかった。ただろうが、佐伯には全てが筒抜けだった。

自分がどうして予定を早めてまでアフリカに来たのか。

日本に何を残してきたのか、あの電話を聞いていれば、たとえ中流の一方的な言葉しか聞いていなくとも大体の事情は知れてしまっただろう。

にも関わらず、佐伯の態度は変わらない。

叱るわけでも、蔑むわけでも、…ましてや慰めたりなどするわけもなく、相変わらずの言動で中流を振り回すのだ。

有り難いと、心から思う。

この人について写真を撮っている間は、本当は逃げてはならない事全てを忘れて、目の前の現在に集中出来るから。

(…尚也、怒ってるよな)

(…尋人、どうしてる…?)

カメラを下ろすと、そればかりが脳裏を過ぎる。

(…さっきのチータの狩り…尋人だったら…何て言ったかな…)

あの、心優しく純粋な少年なら、狙われたガゼルに。

そして獲物を逃がしたチーターに何を思うのか…。

(…アホか俺は)

そうして中流は、あまりに情けない己に自嘲せずにはいられなかった。

尋人、菊池がこの街を去った翌日の午後。  
日本。

放課後の榊学園高等部から、中等部への渡り廊下を歩く時枝彬の手には携帯電話が握られていた。

「……」

手の中でそれを弄びながら、時折、開こうと指の位置を変え、……だが何かを考えながら結局は握り直す。

電話を掛けたいのに掛けられない。

メールで済む内容ではないから、どうにか連絡を取りたいと思っても、今頃、彼 尚也がどんな気持ちでいるのかと考えれば考えるほど、自分から話を振ることが出来ずにいた。

「まさか……だったよな……」

ぼつりと呟く彬の眉間には深い皺。

脳裏には、尚也の憔悴し切った姿と、兄・貴士の苦渋の表情が蘇えった。

昨夜、尚也と二人で兄の部屋を訪ねた彬は、決して口を割らない貴士に説得を続けた。

尚也は、中流と尋人が電話で話したこと、最後まで一緒にはいなかったけれど、あの様子では二人の仲は修復されなかったことなどを説明し、「中流と尋人の力になりたい」と訴えた。

あの二人のために、どうしても真実が知りたい。

どうしても中流に幸せになつて欲しい。

……その気持ちだけで、貴士に、過去の出来事を語ってほしいと頼み込んだ。

それでも口を開くことを拒んでいた貴士は、しかし彬が生徒から聞いた「自殺説」を持ち出すと表情を一変させた。

尋人がイジメに遭っていたこと。

それを苦に自ら高所より飛び降りたこと。

決して肯定はせず。

だからといって真剣な尚也を前に否定も出来ずに、

…頼む。尚也君の気持ちも判るが……あの二人に幸せになつて欲しいのは俺も同じだ…、同じだけれど…、どうか、彼らをそつとしておいてあげてほしい……

そう言った。

…泣きながら。

あの貴士が、涙を流しながら願つたのだ。

「…つまり“自殺”が記憶を失くした本当の理由だつてことだろ…」  
肯定はされずとも、それは確信。

尋人が記憶を失くしたのは交通事故の後遺症ではなく。 。  
中流が尋人の気持ちを受け入れようとしなのは、それを思い出させたくないから。

もしかするとイジメの原因の一つには、彼ら同性同士の恋愛もあったのではないか。

「…」

だが、その奥に、更に何か大きな秘密が隠されている気がしてならない。

何故なら、あの貴士が泣いたのだ。

他人のために泣いて訴えた。

どうか彼らをそつとしておいてやってくれ……

両親の離婚ですら表情を崩すことのなかった貴士を、それほどまでに追い込む“過去”。

「…何があつたんだ、六条…」

今は異国の地にいる元教え子を思い、彬は深い息を吐いた。

しばらくして中等部の職員室に立ち寄つた彬は、二、三の所用を済ませて高等部に戻ろうとした。

が、ふと視界の端に映つた女性の姿に足を止める。

校庭に面した窓を背にしている彼女は、確か中等部の数学を担当している人物で、松島美弥子という名前だったろうか。

時々、全等合同の集会などで顔を合わせた程度だが、二十代後半とは思えない愛らしい童顔にふくよかな体つきというアンバランスな外観は、例え元教え子の男子生徒と恋仲にある彬でも気になるところだ。

「…?」

その彼女が、溜息をついている。

目線の先には閉じたままの携帯電話。

「…」

彬は、自分の手の中にある携帯電話と彼女を交互に見ながら、ふと思うことがあった。

「松島先生」

もしかして…と考えながら呼びかけると、彼女はビクリと肩を震わせ、顔を上げた。

どことなく顔色が悪く、何かに怯えているらしいのは明らかだ。

「どうしたんですか。体調が良くないなら保健室で休まれるとか…」

「い、いえ…なんでもありません。…ありがとうございます」

「しかし…」

なおも声を掛ける彬に、彼女は左右に首を振り、まるで隠すように携帯電話を手を取った。

「…」

その動作に（やっぱり…）と思う。

「原因は恋人ですか？」

「え…っ」

ギクリと目に見えて強張る彼女に、彬は「いや実はですね」と微笑んだ。

「いま、僕も恋人に連絡出来なくて悩んでいたところだったんです。もしかして僕の大切な人も、今の松島先生みたいに辛そうな顔をしているのかなと…まあ、勝手な想像ですけど、心配になってしまっ

て」

「…」

対して面識もない間柄で、ここまで私生活を明かす彬に呆然としていた松島教諭は、だが男の口調が惚気るのにも似ていると気付き、苦笑を漏らした。

「時枝先生つたら…、こんなところで恋人の話なんかして、生徒に聞かれたら大変なことになるんじゃないやありません？ 先生のファンは多いんですから」

「松島先生ほどじゃありませんよ」

「そんなこと仰って…」

くすくすと笑う彼女に、彬は最後の決め手とばかりに絶品の微笑みを浮かべた。

「ん。やっぱり先生は無理にでも笑っている方がいいですよ。周りで落ち着かない人もいるでしょうしね」

彬の台詞に、周囲で不自然に逸らされた視線が複数。

彼女自身はそれに気付かず、冗談を聞いたように笑っている。

「それに、相談事なら僕が聞きますよ？」

「それは…でも…」

「恋人とケンカして連絡が来ないとか？」

「…」

冗談めかしている彬に、だが彼女の表情は複雑に歪んだ。

「ケンカはしていない…はずなんですけど…」

「連絡が来ない？」

「…いつもの時間に電話がなくて…」

ほとんど誘導尋問のように言わされている松島教諭に、彬はそつと頷いた。

「昨夜は忙しかった、とか」

「そういう時にはメールでも、何か一言くれていたのでは…」

一晩、まったく連絡が無かったのは初めてだと。

そう、言い終えようとした矢先。

「っ」

「あ…」



松島教諭の手の中、着信の振動が起きる。

彼女は慌ててディスプレイに表示される名前を確認し、「済みません、ちょっと…」と彬を避けるように職員室を出て行った。

その表情があからさまに安堵していて。

ようやく恋人から連絡が来たらしい彼女に（考えすぎか）と、彬の口元にも笑みが浮かんだ。

そうして今度こそ高等部に戻ろうと廊下に出た彬だったが、その耳に届いたのは穏やかではない言葉。

「警察？」

「！」

松島教諭が、電話の相手に対して、そう聞き返していた。

「待ってください、この電話の持ち主…って…！あの、本当なんですか？本当に健吾なんですか！？」

（健吾…？）

聞き覚えのある名前に、彬はもう一度彼女に歩み寄る。

「松島先生、警察って…！」

廊下の角で、真っ青な顔で携帯電話を握り締めていた彼女は。

「…健吾が……！」

「！」

何故か心臓が早鐘を打つ。

その“健吾”が誰かなんて、知るはずもないのに。

「松島先生、電話を代わっても？ 失礼、私、松島の職場の同僚で時枝と申します。恐れ入りますが、もう一度ご説明願えますか？」

早口に告げた彬に、返された答え。

それは。

時の旅人 一九

尚也、急いで出て来い！ 大樹総合病院だ！

恋人である時枝彬から連絡を受けたのは、およそ三十分前。

野口が……

…野口が……っ！

「彬！」

大樹総合病院外科病棟。

元同級生・野口健吾が運び込まれたと聞いて駆けつけた集中治療室の扉の前には、自分を呼んだ時枝彬の他、野口の両親、警察関係者と見られる男が数人、…そしてつい一昨日、本人から聞かされた彼の恋人、松島美弥子の姿があった。

「っ……」

野口本人から聞いたのだから、何も悪いことはないはずなのに、真っ直ぐ相手の顔が見れない。

その上、彼女と野口の関係を知らないはずの彬が同席していることで、尚也の後ろめたさは募るばかりだ。

「尚也」

あと数歩で隣に並べる距離まで近付きながら、唐突に立ち止まった彼に、彬が硬い表情で呼びかけた。

「あ、ああ…野口は…」

「いま手当てを受けているが、……かなり危険な状態らしい」

「……っ」

声を落として告げられた内容に、尚也は息を呑む。

一体、何が起きたのか。

どうして野口が、このような目に遭ったのか。

他の人々から多少離れて、彬が尚也に語った内容はこうだった。

警察から聞かされた話によると、野口は酷い暴行を受けた状態で、

一晩、駅近くの高架下に放置されていたという。

全身に及ぶ打撲痕や裂傷。

加えて、三月末の、まだ雪も残る寒空の下で野晒しにされた体は、

昨夜の天候如何では発見された時点で死亡していてもおかしくなかった。

「誰が野口を……っ」

「……警察も動いているが、まだ何とも……。発見された時に持っていた携帯の着信履歴から松島先生に連絡が来たようなんだが……」

言いながらハツとする。

尚也も同時に顔を上げ、複雑な顔をしている相手に頷いて見せた。

二人が恋人関係にあったことは、自分も知っているのだと。

「……一応、親御さんには、警察から連絡を受けたのは俺だった事にしてある。松島先生はたまたま居合わせて、……中等部時代の担任でもあったから心配して来た、ってことにな」

「そっか……判った……、あ」

不意に治療室の扉が開き、若い長身の医師が出てきた。

「あ……！」

忙しい動きで、その場に集まった人々を見渡す彼は、尚也と彬がよく知る人物。

「兄貴……」

「貴士さん……！」

「っ、やっぱり来ていたんだな……！」

互いの視線が絡み合い、医師が出て来たことで立ち上がりかけた野口の両親に、早口に現状を説明した後、貴士は迷わず尚也達に近

付いてきた。

「貴士さん！」

「兄貴、野口の容態は……」

「まだ何とも言えん、予断を許さない状況なのは変わりない」

「早口に告げながら、貴士は尚也に顔を寄せ、低く続けた。」

「それよりも野口君は六条君を呼んでいる」

「っ？」

「意識はないのにそればかり……熱に浮かされた状態で尋人君が危ないと、何度もそればかりを……」

「ヒロト……？」

「倉橋尋人君のことか？ 彼が危ないって一体……」

「尚也君、頼む！ 尋人君を守ってやってくれ……！」

「え……？」

唐突に。

尚也の両肩を掴み、頭を下げた貴士は。

……その表情は、歪んでいた。

「野口君は暴力を受けたただけだったが、これが“あの時”と同じ連中の仕業だったら……っ……同じ連中がまた尋人君を狙っているのだとしたら、あの子は……！ もう二度とあんな目に遭わせたくないんだ……！！！」

「……」

それが、どういう意味なのか。

何が、貴士をここまで追い詰めているのか、知りたいことは山ほどあった。

「……」

だが、それはずっと考えてきたこと。

貴士が何を知っているのか。

何を隠しているのか。

……その全てが、尋人の閉ざされた過去に繋がっていく事だけは確かだから。

「…判った。ヒロトは絶対に守る」

「尚也君…」

「だから貴士さんは野口を…！」

「ああ」

約束する。

自分に出来ることなら、その約束を違えることは決してないように。

「頼んだよ、尚也君」

貴士は尚也と、そして弟・彬の肩に手を置いた。

何も話さないことを申し訳なく思いながらも、尋人と中流の未来を望む気持ちは同じ。

「よし！ じゃあ彬、俺はこれからヒロトの家に向かうから…」

「送っていく、と言いたところだが…俺はまず六条の従弟の家に行こうと思う」

「院長の息子さんのところか」

「何としてでも六条を呼び戻したい。…卑怯な手段かもしれないが、野口のこともあるからな」

「…」

一昨日の、尚也の話を聞けば、それが容易でないことは知れた。

だからと言って、これ以上、六条の不在を長引かせてはいけない

…そんな予感が胸中を占めていた。

三人は互いに頷き、貴士は治療室へ。

彬と尚也はそれぞれの目的地へと足を向けた。

その前に、彬には一つだけ、しなければならぬお節介があった。

青ざめた顔を隠すように俯き、じつと座っていた松島教諭に、

「大切な用で、出なければなりません。ここはお願いします」と声を掛けた。

そう告げて頭を下げた彬に、彼女は彼に向かって、いつそう深く頭を下げたのだった。

「ただいまー」

すっかり日の暮れた外から、母親が帰ってきた。

尋人は部屋から顔を出し、彼女が重たそうにしている買い物袋を受け取った。

「お帰り、寒くなかった？」

「寒かったわよ。また雪が降りそう」

言いながらコートの中に首を隠すという彼女の仕草に尋人は笑った。

「今日は友達と遊びに行くって言っていたのに、帰り早かったのね」

「あ、うん。皆も春からの準備で忙しいみたいで」

昨日まで、地元を離れて街に出ていた尋人と菊池。

二人から都会の話を知りたいから出て来れないかという誘いが元同級生達からあったのは今朝だった。

土産を持参し、

「久しぶり」の挨拶の代わりに「テレビ観たよ」と声を掛けられた。卒業式以来の友人達との集まりは時間を忘れさせたけれど、まだ中学校を卒業したばかりの少年少女。

それも、来週後半には新たな学び舎へと進んでいくのだ。

そう遅くまで遊んではいられない。

「そう…、尋人も来週には高校生なのね」

「ん…ようやくね」

苦笑いする尋人に、母親も静かに笑む。

同じ歳の子達から、一年待っての高校生。

それは決して短くない日々だった。

「…」

記憶を失くした二年間に何があったのか、尋人が望んだ答えは、  
久々に帰ったあの街でどれだけ手に入れられたのだろう。

昨日、母親が心配そうな顔で聞いてきた。

「何もヘンなことはなかった…?」

その問い掛けは何に起因していたのか。

自分の足で歩き、見て、聞いてきたこと。

六条中流のこと。

それは。

…教えられた記憶は、果たして望んだ答えだったのか…?」

「…」

袋から物を取り出す手が止まった。

頭の中、電話で告げられた中流の言葉が蘇る。

別れ際に告げられた裕幸の言葉が繰り返される。

……会いたい……

「っ」

鼻の奥がツンとするのを自覚し、尋人は慌てて首を振った。

母親に気付かれたら心配させる。

何か違うことを考えて気持ちを切り替えなければならない。

と、不意に鳴り出したのは電話のベル。

「お母さん、僕が出るから」

内心で安堵しながら、足早に電話の置かれている廊下に出た。

「はあ……」

途端に身を包む冷気に身体を震わせながら、受話器を取った。

「もしもし倉橋ですが、どちら様ですか?」

丁寧に応答する尋人に、相手は名乗る。

自分は本居尚也だと。

あの街の、六条中流の親友。

突然の電話に戸惑う尋人だったが、あの街で起きている騒ぎを知

らされ、言葉を失う。

「  
寒さにはなく、恐怖に身が竦んだ。

もう、逃げられない。

「……お母さん」

電話を切り、居間に戻った尋人は、台所に立つ母の背に声を掛けた。

「ん？」

静かに。

いつもと変わらない穏やかな表情で振り返った彼女は、その場に佇む尋人の姿に何を思っただろう。

彼らの時間は急速に動き出していた。



## 時の旅人 二十

例えば、それが二度と重ならない時間でも。  
戻れない場所でも。

帰れない二人でも。

「何としてでも六条を呼び戻したい」

そう言った彬の言葉を、尚也は信じる。

あの、バカだけれど最高の親友に、今度こそ逃げずに選んでほしいから。

中流の選択一つで現在が何通りにも変化することを知ってほしい。  
倉橋尋人の気持ちは、記憶を失くしてなお、向かう先を変えなかったこと。

「また何を言われたって…誰に否定されたって…俺はおまえに本当に笑って欲しいんだ…」

流れる車窓の向こうに、異国にいる親友の幻影を見ながら尚也は呟いた。

そしていま、貴士に託された願い。

倉橋尋人を守ること。

彼の言う“あの時”のことなど、まだ知る由もなく、誰も教えてはくれないけれど、あの貴士が、尋人に二度とあんな目に遭ってほしくないと訴えたのだ。

それだけで、尚也が動くには十分な理由だった。

真実を知るのは“いつか”でいい。

それでも構わないから。

「中流…、早く帰って来い……！」

「まさか君が六条の従弟だったとはね…」

兄・貴士から道を教えられ、訪れた目的地。

六条中流と連絡を取るために面会した大樹裕幸の姿に、彬は遠い面影を見出して表情を歪ませた。

「いや…いまは昔の思い出話に浸っている場合じゃないな」

「…ええ」

自嘲気味に語る彬に、裕幸も複雑な表情で頷く。

初めてこの相手に会ったのは、裕幸が十歳になるかならないかの頃だった。

そして今日が二度目 七年ぶりの再会になる。

「裕幸…」

「大丈夫」

背後から気遣うような声を掛けてくれる従姉に笑んでみせて。

「…では、時枝先生は中流さん呼び戻すために連絡を取りたいんですね」

「そうだ。これ以上、六条のいないところで何か起きるのは避けたい」

「これ以上…というと、何かあったんですか？」

「野口という六条の友人が、暴行を受けて病院に運ばれた」

「暴行…？」

その言葉に、彬の目の前にいた人々 裕幸の他には三人の少年少女が同席していた の表情が一瞬で変わった。

それは「尋人が危ない」と自分達に伝えた時の貴士の表情に重なる。

「…その野口が、意識はないのに六条の名前を呼び続けている。…尋人君が危ないと、何度も繰り返し返しているんだ」

「！ 尋人君が…！？」

「ちよつと！ それってなに…っ、その野口って子を襲ったの、尋人君を襲った連中と同じなの！？」

「え」

「汨歌さん！」

「あ…」

慌てて口元を覆うも、もう遅い。

彬には解ってしまった。

尋人も、過去に襲われていたのだということ。

野口君は暴力を受けたただけだったが…

兄のあの言葉は、尋人が受けたのは暴力だけではなかったということ。

（だから尋人君は自殺したのか…！？）

ようやく判った。

中流が逃げたのも。

尋人が限られた期間の記憶を閉ざしたのも。

貴士が、どんなに問い詰めても真実を語らなかつたのも、全てそれが理由だった。

「…っ…、だったら尚更、六条を呼び戻したい。尋人君にまた危険が迫っている。…過去と同じことを繰り返させるわけにはいかな  
い」

「判りました」

彬の言葉に、裕幸は頷いた。

同じことを繰り返させたくない。

それは、誰もが同じ思い。

裕幸は受話器を取り、二日前と同じ順序で中流の滞在している場所へと回線を繋いでいった。

五分ほど掛かって、ようやくアフリカ・クルーガー国立公園に繋がったが、そうして話す相手は六条中流ではなかった。

「え……?」

戸惑う裕幸の様子に、周りで見守っていた誰もが表情を強張らせる。

「それで中流さんは…、本当なんですか? じゃあ、もう…はい。

はい…、ええ、ありがとうございます。…失礼します」

中流と話すことなく受話器を置いた裕幸に彼らは身を乗り出した。

「いま、佐伯さんが電話に出られて…」

アフリカで中流の面倒を見ていた写真家、佐伯幸也。

彼が電話に出て裕幸に告げたのは、にわかには信じられない内容だった。

「それで、六条は…?」

「…アフリカを出たそうです」

「は?」

「今朝方、帰ったと……」

「それって……」

「六条が日本に向かっていているって…!?!?」

## 時の旅人 二一

その夜、中流は手元に広げた写真の一枚一枚に、言葉にならない声を漏らしていた。

どうしたら、こんなにも雄大な画が撮れるのだろう。

同じものを見て、同じ場所を歩いてきたはずなのに、自分が撮った写真と、佐伯が撮った写真では、写っているものの輝きの差が歴然としていた。

その差とは何だろう。

経験の深さ。

見続けてきた時間。

“命”をこれほど鮮やかに写し撮る佐伯は、その瞳で何を見るのだろうか。

「さつきから人の写真見て、何へんな声上げてんだ」

低く話しかけてくる佐伯の右手には小さなグラスが一つ。

どこから仕入れてきたのか、先ほどから日本製の焼酎を口にして  
いる彼は、程よく酔ってきているらしい。

初めて会ってから今日まで四日間。

佐伯が酒を飲んでいるのを初めて見たが、彼の酔い方は悪い方ではないらしい。

声音は低くとも、いつもの威圧的なものではなく、どこかからかうのにも似た響きを含んでいた。

恐らく、チータの狩りという珍しい光景に遭遇できたのもご機嫌の理由の一つだろうと思う。

「へんな声だつて仕方ないでしょう。こんな凄い写真見せられたら感動するしかないんですから」

「凄い写真？」

ハッ…と鼻で笑いながら、佐伯はグラスを傾ける。

「おまえだつて凄い写真で、賞、撮っていたじゃねーか」  
「え……」

まさか、あの雑誌で受賞した写真を佐伯も見たのだろうかと驚いた。

人生の半分以上をアフリカの大地で過ごしている彼は、日本にしていることなど一年の内に一週間あるかないかなのだから。

「ま、俺に言わせりゃ “まだまだ” だがな」

「……」

得意気に言い、またグラスを傾ける。

そんな男に中流は苦笑し、彼もまた手元の写真に目を落とした。

「……ま。俺の写真を凄いと思うのは、俺の写真には、おまえの写真には写らないものが在るからだろうな」

「え……」

「……なんだよ」

「いえ……」

まさか、会話を続けてくれるとは思わなかった……と正直に言うわけにもいかず、曖昧に言葉を濁した中流に、佐伯は視線をきつくしたが、軽く息を吐くと再び話し出した。

「俺にはな、どんな被写体を前にしても必ず見えるものがある。写真は嘘をつかない。カメラは俺に忠実だ。俺が見えるものはコイツらが完全に写し撮る」

「見えるもの……」

「穴空くほど見たつて、おまえにやソレは見えないぜ」

「……」

「ソレは俺にしか見えない。だから俺だけが撮れるんだ」

最もな内容に、……素直に頷くしかないのだが、それは何となく、したくなかった。

だから、

「……佐伯さんには何が見えているんですか」と問えば、男は笑った。  
「おまえ、恋人はいるのか」

「っ」

それを、一昨日のあの電話を聞いていたあんたが問うのかと苛立ちそうになった中流だが、相手は酔っ払いだと自制する。

何も応えない彼を、佐伯は笑った。

嘲うのではなく、ただ、笑ったのだ。

「言ったな。目が感情に負けるようじゃ、イイ画なんか撮れないって」

「…」

「だが感情の入ってない写真は紙切れと一緒にだ」

「」

「人間の心に訴え掛けられるのは心だけ。感動できないものを撮ったって、人を感動はさせられないだろ」

確かにそうだ。

綺麗だと思えないものを撮って人に見せても「綺麗だ」という言葉は返ってこない。

「…なら、感情に負けちゃいけないのに、どうやって感情を撮るんですか」

「俺以外の感情だ」

「…誰の？」

「……………ふっ」

再度、聞き返す中流に、佐伯の口元が綻ぶ。

「……………！」

それは中流が初めて見る表情。

こんなのは酒のせいだと自分自身に言い聞かせる。

そうでもしなければ。

……………そうとも思わなければ、この男が、まさかこんな顔を。

「決まってるだろ、大切な奴に」

こんな顔で、そんなことを言っただけなんや。

「……………っ、佐伯さんにもそんな相手がいるんですか！」

「いちゃ悪いか」

「悪いか…って、だって…」

「アンタ、恋人にもその態度なんですか…という言葉を慌てて飲み込み、無難な質問を探す。」

「…その人、アフリカの人なんですか？」

「俺が日本から搔つ攫つてきた純粋な日本人さ。今回はおまえがいるからジンバブエの部屋に置いてきた。今頃はへソ曲げてヨーロッパ辺りに家出してるかもしれんがな」

「はあ…」

ジンバブエといえば、南アフリカ共和国から北上した地域で、世界遺産“ビクトリアの滝”がある国と言えば理解しやすいだろうか。佐伯に恋人がいるというのが初耳なら、自宅がそこにあるというのも今、知つたし、その恋人が家出でヨーロッパとは…世界が違すぎる。

今度はどんな台詞で驚かされるのかと、半ば呆れていた中流に、しかし男は今度こそ中流の心臓を止めるような真似を仕出かした。

何と男は、自分のカメラを投げて寄越してきたのだ。

「ちよっ…アンタそれ！！ うわっ！！」

「うるせえな、しっかり受け取れ」

「受け取れって…っ、アンタ自分の商売道具を何だと…しかもこれ幾らすると思つて…！！」

「アホ、俺様の愛機は間違つたつて触らせねえ」

「愛機じゃなくなつて…っ、て、じゃあこれは何の…」

「遊びで撮る時用だ」

「……」

「ベッドの中でとかな」

「~~~~~」

頬を引きつらせる中流を、酔つ払いは豪快に笑い飛ばす。

（このオヤジ…っ）と内心で毒づきながらも手元のカメラだけは大切に抱えていた。

用途はともかく、佐伯が放り投げたのは十万以上する超一流ブラ



ンドの高性能機器なのだ。

ぞんざいに扱えるわけがない。

「で、…これを俺に持たせて、どうするんですか」

「アホか、カメラ持ったら撮るに決まってるんだろ」

「~~~~」

地団駄を踏みたい勢いに駆られながら、何をしようと無駄なのは判っている。

カメラを持ったなら、すべきことはただ一つ。

それは目の前の光景を撮ることだ。

…だが、いま彼らの眼前に広がるのは夜の闇。

寝泊りしているキャンプを背にサバンナを見渡すと、視界に捕らえられるものなど何一つなかった。

日本の夜とは違い、わずか一片の人工物も持たない真の闇を照らすのは月と星の淡い輝き。

これが、本来在るべき“惑星の夜”だ。

「…」

「撮れないか」

声を掛けられ、中流は頷く。

…頷くしかない。

「…闇が深くて。本当に…本当の闇の中で…確かなものがなければ何一つ捕らえられない…踏み込んではいけない…、そんな気がします」

「ああ」

佐伯は応え、グラスに残っていた少量の酒を飲み干した。

「そうだ、闇はすべてを覆う。安易に立ち入ればたちまち食われるだろうな。何一つ見えない状態で撮ったって、撮った奴を絶望に追い落とすだけだ」

「…」

「だが俺は撮れる」

「」

「俺は、この闇を好きだと言う奴を知っているからな」

「……それが、佐伯さんの大切な人　ですか」

その言葉に、佐伯はわずかに表情を崩すことで応えた。

「ファインダーの向こうには、いつだって奴の姿がある」

「……」

「俺は無心でシャッターを切るだけだ。目の前の光景に感情を持たせるのは、ファインダーの中の奴の仕事。奴が綺麗だと感じているものを撮る。残酷だと目を逸らしたがっているものを撮る。それでも目を逸らさないのはそれが真実だと知っているからだから」

「……一緒にいなくても一緒なんですね……」

「奴は俺の感情だからな」

「……」

一瞬の、どんな場面でさえ躊躇うことなくシャッターを切らなければならぬ佐伯に感情は不要のもの。

だが同時に、それは決して欠かせないもの。

佐伯に「俺の感情だ」と言わせる大切な人は、男を補う存在。

その人なら、この闇にすら形を与えてしまうのだろう。

「もしも奴が何も感じないなら、それでいいんだ」

中流の胸中での呟きを聞き取ったかのように佐伯は告げた。

「俺はそれを“虚無”と撮る。この世界にはこういう場所もあるのだと知る為に」

「……」

この男は本当に酔っているのかと疑いたくなる。

締めりの無い表情は確かに高潮しているけれど、これが酔っ払いのする話か。

「俺はな、おまえの写真を初めて見た時、俺と同じタイプだと思った。　“心”を撮れる奴だつてな」

「……」

やはり酔っている。

酔ってなきや。

「“心”の声を聴ける写真家だと思ったんだ」

「っ！」

酔っていなきゃ、こんなことは言えないだろう……？

「次に見たのが、あの雑誌に載った写真だな。前に見たのとは雰囲気違ったが、やはり好い画だと思った。…好い画だが窮屈そうだった。無理に感情を押し殺そうとして、そのクセ、必死に何かを訴えかけてくる。ああいうのはマニアにはウケるが大衆には退かれるぞ」

「…っ…余計な、お世話ですよ…っ」

それこそ必死になって虚勢を張った。

そうでもしなければ、正気すら保てないと思った。

あんまりな言葉に、精神は今にも破壊されそう。

佐伯はそれに気付いていて、それでも発される言葉に容赦はない。「おまえがマニア受けを目指すなら今のままでいい。だが俺が最初に見たあの一枚が、おまえの本当に目指すものなら、現在のおまえには二度と撮れねえぞ」

判っている。

解っているから、もう呼び起こすな。

あの日から必死に抑え込んできたものを。

「“心”の声を聴こうとしない奴に“心”は撮れない」

「…っ」

「“心”を拒む奴に夢は追えない」

「やめてくれ…っ」

「やめるかボケ」

中流の訴えを鼻で笑い飛ばし、男は一枚の写真を彼に向かって指で弾いた。

「」

視界に飛び込んできた、その写真は。

「！！！！！！」

「黙って欲しけりゃ正直に答えな。おまえの“心”はどこに置いて

きた？」

「……」

なぜ、これがここにあるのだろう。

なぜ、この写真が佐伯の手に？

「……」

それは、あの日の最後の笑顔。

“心”を撮った、最初で最後の “心”。

「……なんでアンタがこれを持ってる……？」

「親バカ親父にでも聞いてみる」

「……」

「ま。この一枚がなけりや、おまえの面倒を見てやろうなんざ思わなかつたさ。……二日前のあの電話がその子だろ。どんな事情があるかは知らんが、バカみてえに純粋なもんだから、つい虐めてやりたくなつてな」

あの父が何を思い、いつ、どこでこの写真を佐伯に渡したのかは知らない。

だがその瞬間から、この日が来ることを知っていたと言っただろうか。

……ま。この一枚がなけりや、おまえの面倒を見てやろうなんざ思わなかつたさ……

天才・六条至流に頼まれたから仕方なく世話を引き受けたと言っていたのに、本当は、面倒を見てやろうと思ってくれていたのか？

“心”の写真を見て。

あの受賞した写真を見て。

違いを知り、あの電話を聞き。

……どうにかしてやりたいと、自分を思ってくれていたというのか、この男が。

「……っ……アンタ……酔ってるよな……？」

「さあな。酒は美味いぜ」  
不敵に笑う男に、中流は無意識に苦笑した。  
もう、笑うしかなかった。

この写真があったから。

(尋人……っ！)

例えば、その手を取ることと残酷な過去を思い出してしまっても、この存在が君を苦しめてしまうのだとしても。

…それでも“心”を受け入れたなら君は笑ってくれるだろうか。  
隣で、昔のように微笑ってくれるか…？

「俺様は寛大だからな、もう一度だけ言ってやる。心を騙す奴に心は撮れない。絶対にだ」

一緒にいなくても一緒にいる。

ファインダーの向こう側、その人にだけ見える“心”の姿。

尋人。

君ならこの闇に何を思う？

この大地に、何を想う………？

東の地平線から陽が昇る。  
世界を。

生命を照らす輝きは、遮るもののない地上に無償の光りを注ぐ。  
どんな言葉も声にはならず。

けれど君は真っ直ぐに見つめるだろう。

地球が黄金に染まりゆく姿を。

朝の到来を、希望とともに迎えるだろう。

「覚悟を決めたか」

「……はい」

雲一つない空を仰ぎ、中流は佐伯に応えた。

いま撮り終えたばかりのフィルムを手の中で転がし、スツ…と男に差し出す。

「現在の俺の精一杯です。…佐伯さんに持って置いてほしい」

「ヒヨっ子が、この俺様に写真を持たせるのか」

「だって佐伯さん、俺のファンなんでしょ？」

「クソガキ」

即座に言い返されるも、昨日までのような冷たさは感じられない。だが変わったのは彼の態度ではなく、自分自身の受け止め方。

心の声を聴くのは、こんなにも簡単なことだった。

「俺、日本に帰ります」

「フン」

小馬鹿にしたような態度で、彼は中流の額に何かを突きつけた。

「…え」

「日本行きチケットだ。今日の午後発」

「午後…っ？」

これから空港に向かい、空席がなければキャンセル待ちをしてもなるべく早い便で帰るつもりでいた中流にとって、それは思い掛けない贈り物だった。

まさかと恐る恐る開いた封筒の中には、男の言う通り、確かに今日の午後発日本行きのチケット。問題は、その離陸時間。

「一時!？」

「俺は送らんとぞ、自力で帰れ」

「それは当然……って、だつて一時……！」

この国立公園から空港のあるヨハネスブルクまでは車で六時間。現在時刻は六時前。

今すぐにバスが捕まるかも不明なのに、この離陸時間は……。

「あと十五分で街の停留所からヨハネスブルクまでのバスが出るぞ」

「！」

中流の内心を読んできたか、あっさり言つてのける佐伯幸也。

「アンタ鬼かよ！」

「言つたら、ガキのお守りはゴメンだつてな」

「くっ……」

そうだ。

確かに言われた。

だつたら見ている、と内心で言い返す。

次に会う時には言葉も失くすほどの“心”を撮つて見せてやる。

「佐伯さん！」

急いで荷物をまとめ、街の停留所まで行かねばならない中流は、だがその場で自分を見送る男を振り返つた。

このアフリカの大地に立つ男。

“心”を聴く写真家。

アンタと過ごせて良かった。

「いろいろありがとうございます！ お世話になりました……！」

そうして去っていく背に、男は何も返しはしない。

ただ、笑つた。

「これでバス逃したら笑つてやるよ」

言い、空を仰いだ。

どこまでも途切れることなく続く空。

「さて」

フツ…と口元を綻ばせ、佐伯は中流を見送ったのは逆方向に歩き出した。

その先には影が一つ。

昨夜遅くの頼み事に文句を言いつつも、急ぎ、ここまで航空券を運んで来た人が、いま、男に駆け寄って来た ……。



「……お母さん」

電話を切り、居間に戻った尋人は、台所に立つ母の背に声を掛けた。

「ん？」

静かに。

いつもと変わらない穏やかな表情で振り返った彼女は、その場に佇む尋人の姿に何を思っただろう。

尋人の思いつめた様子に目を見張り、何か良からぬことが起ころうとしているのを察した。

「尋人……？」

どうしたのかと尋ねると、彼はその場から動くことなく口を切る。失くした記憶を取り戻すことを心よしとしていない彼女は、必ず何かを知っている。

全てではなくとも、何より知らなければならぬことを教えてくれるのは母親しかいないのではないかと、尋人は漠然と感じていたのだ。

「お母さん。……僕は、本当のことが知りたい」

「」

「一年前、……僕は、あの街で何をしたの……？」

「尋人……」

「あの街で何があったの」

母親の顔が青ざめていくのを見て、尋人は胸に鈍い痛みを自覚した。

だが、もう逃げられない。

真実からは逃げられない。

「菊池君と行ったあの街で、僕は男の人に尾けられていた」

「」

「それに気付いて、僕が無事に家に帰れるように、その人達を足止めしてくれた先輩が…、…先輩が、今日、病院に運ばれたんだ」

「っ…」

「殴られて、怪我をして、…それでも僕が危ないからって、必死に伝えてくれたんだって……」

「…っ……そんな…」

「…その先輩……、六条先輩の、お友達なんだ」

「」

声にならない悲鳴を聞いた気がした。

母は六条中流を知っている。

それを確信した。

「お母さん。僕は…僕を狙っているのは誰なの…?」

「…っ…ダメよ…教えられないの。…教えちゃいけないの…」

「でも」

「ダメなのよ！ そうよ、しばらくは絶対に外に出てはダメ……っ、しばらく家でおとなしく……」

「お母さん」

「二度とあんな目には遭わせない…絶対にそんなこと…っ」

「あんな目って何！」

「尋人…っ」

「お母さん、僕はもう逃げない。逃げちゃいけないんだ。野口先輩は僕のために襲われた。大変な目に遭ったのに、それでも僕が危ないって伝えてくれたんだ！ もう「思い出せないから」なんて理由で忘れた時間を見ないフリしたくない」

「…っ…」

「お願いします。お母さんの知っていることを教えてください。お願いします…！」

頭を下げ、何度も、何度も訴える尋人に。

…いつしか深く息を吐くのが聞こえた。

それは自分を落ち着かせようとする母の呼吸音。

あの日の、… あんな出来事を、本当に伝えなければならぬのか  
という、迷いと恐れ。

「…少し時間を頂戴……」

「…」

「お願い……」

頭を抱える彼女に、尋人はコクリと頷く。

「…苦しませてごめんなさい……」

その謝罪の言葉は、同時に、どんな残酷な真実があろうとも受け  
入れる　そんな少年の覚悟を思わせるものだった。

『何だって!?!』

電話の向こうから放たれた菊池の大声。

尋人は思わず受話器を耳から離してしまった。

『何で…野口サンが襲われて病院…て、それが店で俺らを見張って  
た奴らだって言うのか？　間違いないのか?』

「うん……」

それもあり、尚也が今こちらに向かっていることなども告げると、  
菊池は呻くような声を漏らした。

「…それで、僕…、どうしても本当のことが知りたくて、お母さん  
に言ったんだ、何か知っているなら教えてほしいって」

『……そしたら?』

「ん……。少し時間を頂戴……って」

『そっか……』

尋人の過去に隠された真実。

記憶を失くした本当の理由。

それを知る術は、母親の心の中。

『…』

そして、菊池の部屋にも。

「…」

菊池は自分の机の上に置かれた鞆、その中に仕舞い込んだままのフィルムを思う。

恐らく全ての元凶と思われる従兄が、六条中流に渡せという、たった一言のメッセージを添えて送ってきた。

そこに写っているものが何であるのか、菊池はずっと気になりながら、自分が勝手に現像していいものではないと自制してきた。

だが。

尋人本人が記憶を取り戻すことを望んでいる現在、その鍵を持っているかもしれない自分が、フィルムの存在を隠していいのだろうか……？

「…倉橋」

「ん？」

「……もし……」

「うん？」

「もし俺が……」

俺が。

…その後は何と言えればいい？

何を教えられるのだろう。

『菊池君？』

「…っ」

自分を友人として信じてくれている尋人。

もしも自分が、彼の従弟だったと知ったら。

前の学校で、君を虐めていた男の血縁者だと知ったら。

「…倉橋…、あの……」

あの。

「滝岡……って、覚えているか……？」

『え……？』

「！」

戸惑うような相手の声に、ハッと口を閉ざす。

「いや、何でもない！ 今の忘れてくれ！」

聞いてどうする。

自分を苦しめてきた男の名前など、聞きたいはずがないのに……

、だが。

『滝岡……って、もしかして同じクラ……えっと、一年の時に同じクラスだった滝岡修司君のことかな……』

「え……？」

『同じクラスにいたよ、滝岡君。本当は優しい、いい人なんだけど外見が恐くてよく誤解されていたよ』

「！」

いい人？

あの従兄が……？

尋人からは見えない場所で目を見開く菊池に、彼は素直に頷いた。  
『一度、あんまり良くない先輩に学校でからまれたことがあったんだけど、その時に助けてくれたんだ』

「……！」

助けた。

尋人を？

あの滝岡修司が……？

「……」

修司。

……おまえ 何やってんだよ……！

『菊池君が言う“滝岡”って、その滝岡君のこと……？』

「……あっ……いや……」

聞いてはいけないことを聞いた気がした。

知ってはならない過去を、言わせてしまった気がした。

「なんでもないんだ…、あ、悪い。いま母さんが夕食だって呼んだから」

『あ、うん、ごめんね、こんな時間に電話して』

「いや…、じゃあな」

『うん、またね』

回線の切れた電話を握り締め。

菊池は頭を抱えた。

「……………」

悩んで、悩んで、悩んで悩んで。

少年は飛ぶようにその場を離れると、机の上の鞆を手にし、部屋を出た。

「母さんっ、ちよつと友達の家に行つて来るから！」

大声で叫び、次いで携帯電話を取り出すと元同級生に電話した。

春からは自営の豆腐屋を継ぐ修行を始めるものの、写真家の夢は追いつけると語った友人。

彼の部屋には手作りの暗室があるのだ。

「もしもし俺だけどー!!」

怒鳴るように声を上げた菊池。

その頭上からは細やかな雪が落ち始めていた。

## 時の旅人 二三

「菊池君、どうしたんだろ……」

電話を置いてポツリと呟く尋人は、何となく母親のいる居間に下りる気になれず、ベッドに寝転んだが、ほぼ同時に玄関のベルが鳴ったため飛び起きた。

「尚也さん、……かな」

先ほどの電話が、既に隣町まで来ていてのものだったから、時間的にも、そろそろ着いていい頃だ。

「……どうしよう、今夜は家に泊まってもらって……」  
母親のこともある。

今は急ぐ事無く穏便に行きたいと考えながら来客を迎えた。

だが、相手は確かに本居尚也だったが、その表情は煌々としていて、一瞬、驚きと恐れで後ずさりしそうになった。

「な、尚也さん？ どうし……」

「聞いて驚け！」

開口一番でそう叫んだ尚也は、尋人の肩を掴み一息に言い放つ。

「中流が帰ってくる……！」

「」

「あいつ、アフリカから帰ってくるんだ！ もう日本に向かってるっ、さつき彬から連絡があった！」

「え……？」

「新千歳に到着が明日の昼過ぎ！ 今度こそあいつに会えるんだヒ

□ト……！」

「……うそ……」

「嘘じゃないっ、マジだつて！ これから俺と一緒にあの街、戻ろう！ これから彬が迎えに来るから、待っている間に準備済ませて……」

「ま、待ってください……！」

「え？」

「待つてください…今は…、今は、まだ、…行けません」

「！ どうして！ 中流が帰って来るんだぞ!？」

「だって…」

「だって、まだ母親と話していない。」

「彼女が抱ええてきた秘密を打ち明けてもらっていない。」

「時間が欲しいと言った母。」

「…今にも泣きそうな顔で告げられた。」

「だから待つしかない。」

「それが容易に語れることではないのだろうと察しが付く分、静かに待つことだけが自分に来ること。」

「だが、それを包み隠さず説明するわけにもいかず黙ってしまった尋人に、尚也は言い募った。」

「だって、やっと帰って来るんだぞ!？ 今までずっとオマエと会おうとしなかったアイツが、ようやく帰ってくるんだ、ヒロトに会うために! ヒロトだって会いたいって言ってたじゃないか!」

「会いたいです、六条先輩に逢いたくて…っ、そのために…、…、ただ今だけは…」

「今は。」

「母親が、苦しんでいるから、そう思う尋人は、背後の人の気配に気付く。」

「……っ」

「ここは玄関。」

「尚也が顔を合わせるなり声を張り上げたものだから、玄関で言い合っていた二人の会話は、すぐ隣、居間にいた母親の耳にも途切れることなく聞こえてしまっていただろう。」

「お母さん…」

「泣いていた。」

「お母さん…っ!」

「っ…尋人…尋人…!」



涙を流して。

膝をついて。

泣き崩れた彼女に、尋人は駆け寄った。

「尋人…お願い…っ、お願いよ…！」

「お母さん…」

尋人の腕を掴み、訴える。

行かないで、と言いたいのか。

思い出さないで、と言いたいのか。

…それとも、六条中流と会わないで、と。

「お願い尋人…！」

「…ごめんなさい…」

尋人は、無意識に呟く。

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

……… 眞実を求めるのは、悪いことですか………？

「…うん、ちょっと今日は行けそうにないから…」

倉橋家の塀の外で携帯電話を使用していた尚也。その相手は、こちらに向かつて車を走らせていた時枝彬だ。

今日中に尋人を連れて戻るのは無理だと判断した尚也は、彬に引き返してくれと連絡を入れたのだ。

「なんか…ヒロトの母さんは、ヒロトが記憶を取り戻そうとするのを良く思っていないみたいで…」

『 ああ 』

「？」

自分が「どうしてだ」と思ったことを、彬は妙に素直に受け入れている。

「…、何か…納得してる？」

『ああ』

「ああ、って何だよ」

『…………』

多少、強い口調で言い返すと、彬からは無言が返ってきた。

「オイ!？」

苛立つて言い放つと、軽く息を吐く音。

『…少し考えていた。確かに母親にしてみれば尋人君の記憶は戻らない方がいいのかもしれないな、と…』

「どういう意味だ？」

『…兄貴が言っていたことを覚えているか？』

「? ああ、ヒロトを守れって。野口を襲った連中が、またヒロトを狙っているから、って…………」

『そつだ。…………狙われているのは“また”なんだよ』

「…………それは、俺だって気付いたさ。ヒロトが前に野口と同じ目に遭わされたんだろうなって」

『兄貴はこつも云つたる、野口君は暴力を受けたただだったが、…………つて』

「…………」

『尋人君が、野口を襲った連中からされた仕打ちは…………暴力だけじゃなかったんだよ』

「…………」

それが、どういう意味なのか。

母親をあそこまで動揺させる、尋人の隠された過去とは…?

「…じゃあ…まさか…自殺の原因で…」

『…………だと思っ』

「…………っ、じゃあ…………じゃあ中流は…………っ…………それを知って…………」

『…………と、思っよ』

そうでなければ、これほど尋人との再会を避けるはずがない。  
記憶を失くしてなお自分を想ってくれた尋人を突き放し続ける理  
由。

…それは傷物になった尋人がどうこうというのではなく 中流  
がそんな理由で心を変える男でないのは充分承知している。

だから。

だからこそ判る気がした。

中流が尋人と別れた、真の想い。

「……だからって、…記憶が戻った時にヒロトがどんなに傷ついて  
も…俺は、中流とヒロトを離れたままにはしたくない」

『尚也…』

「ヒロトは中流が好きなんだ。中流だってヒロトが好きなんだ。俺  
は二人ともに幸せになって欲しい」

『…』

「二人を幸せに出来ンのは、二人だけなんだろ…？」

『……そうだよ』

「…」

返してくれた彬の声音から、笑顔なのが伝わってきて、尚也の表  
情も強張りが解ける。

『尋人君を連れて来ることが無理なら、俺が六条を乗せてそっちに  
行く。二人は必ず会えるよ』

「ん…」

『尚也、おまえはいつものおまえらしく尋人君の傍にいなさい』

「彬」

『六条の代わりに、…野口の方も、今はおまえが尋人君の支えにな  
るんだよ』

「判ってる」

囁くように答えて。

尚也は力強く頷いた。

真夜中。

客間で尚也を休ませ、尋人も自室で休むつもりだったが、あらゆることがいつまでも頭を巡り、眠れる状態ではなかった。

「……」  
水でも飲もうかと一階に下りると、ダイニングで小さな明かりが灯っている。

「……」  
足音を忍ばせ近付くと、食卓に、母親が座っていた。

「お母さん……」

「っ」  
呼びかけた尋人に、彼女は怯えるように身体を震わせながら顔を上げた。

「尋人……」

驚いていた顔が、いつしか切なげに歪められて。

「……尋人も、切なくなりながら彼女に歩み寄った。

「お母さん……眠れない……よね……」

「……貴方もでしょう？」

そう返しながら浮かべられる、無理な笑み。

それが自分のせいだと思うと、尋人の胸は痛んだ。

けれど気持ちは曲げられない。

真実から逃げたくない。

それだけは、判ってほしい。

「お母さん、ごめんなさい……、でも、僕は記憶を取り戻したいんだ。……どうしても、知らなきゃならないことなんだ……」

「……どうしても……？」

「ん……」

答え、尋人は意を決する。

最初は、決して言うまいと考えていた。

こんなこと、本当なら言うてはいけないと思う。

だが真実を求めるなら隠し事は出来ない。

これだけが、記憶を失くしても変わらなかつた本当のことだから。

「僕……」

「……」

「……僕、六条先輩が、好きなんだ……」

「……」

「先輩のことが好きで……逢いたくて……」

「尋人……」

「……ごめんなさい……」

ごめんなさい。

男の人を好きになつてしまったこと。

普通じゃない子供に育つてしまったこと。

「ごめんなさい……っ……本当に……ごめんなさい……！」

「……」

頭を下げて、何度も、何度も謝る尋人に、しばらく何も言わなかつた彼女は、不意に微かな声を漏らした。

唇から毀れるのは、安堵にも似た吐息。

「……一年半前……まだ貴方が榊学園に通つていた頃ね……、お母さん、

貴方に言ったことがあるのよ。最近、楽しそうね、って……。そしたら貴方、とても優しい先輩と仲良くなつたんだって答えたの」

「……」

「……」

「貴方が十四歳、十五歳だった頃……」

それは記憶から消えてしまった二年間の日々。

「……その頃の貴方、学校に行くのを本当に楽しそうにしていたわ」

母親だから気付いたこと。

一緒に暮らしていた彼女だから持てた確信。

……貴方が失くした時間は、きつと、六条さんを想っていた時間ね」

「……」

「……！」

あの日、病院で目覚めた尋人の記憶は、中学一年生の体育祭が始まる“朝”を最後に途切れてしまっていた。

中学一年生の体育祭。

それは尋人が中流を好きになった日。

このことを、今現在、知っているのは中流一人だけだけど、ここにも 尋人の一番近くにも、それに気付き静かに見守っている人がいた。

それからの楽しい日々 辛い日々。

乗り越えられたのは中流への想いがあったからだ。

学校に行けば会えるから。

だから、学校でどんなに苦しく辛い目に遭うと判っていても、登校を拒むことはなかった。

「…あの日、貴方に何があったのか…、それは、お母さんには言えない。貴方がそれを知る必要があるとは思わないもの」

「でも…！」

「それを貴方が知るべきかどうかを決めるのは、…六条さんの役目だと思う」

「」

「全部を知っていて…、それでも貴方を愛して、貴方のために何も言わずに別れることを決めてくれた…」

幸せになれ、そのたった一言で、自分のいない時間を歩き出した尋人を送り出してくれた人。

「素敵な人を好きになったわね」

「…っ」

「貴方は素敵な人に愛されていた…、六条さん、病院で意識が戻らない貴方の手をずっと握っていてくれたのよ」

「お母さん、知ってた…？」

「当たり前でしょう？ 私は貴方の母親よ…？」

「……っ」

そつと微笑んで。

抱き締められた腕は温かくて。

「…記憶を取り戻したいなら一つだけ約束して頂戴。六条さんと逢つて、もう一度やり直すことが出来たなら、…その時には二人で家に帰ってらっしゃい」

「お母さん…」

「今度こそ幸せになることを、二人で、私とお父さんに約束してちょうだい」

「……っ」

「…約束してくれるかい？」

「！」

不意に大きな手に頭を撫でられ、驚いて顔を上げると、父親の複雑そうな笑顔があつた。

「お父さん…！」

母だけでなく、父親も知っていたのか。

それとも母親から聞いたのか。

両親は、揃つて笑顔だつた。…複雑そうな微笑ではあつたけれど、

尋人に向けられる眼差しは広く深い温もりに溢れていた。

「…っ……約束する…」

「尋人…」

「約束する…絶対……っ！」

「…絶対だよ」

尋人と、彼を抱き締める母親を、父親が大きく広げた腕で包む。

両親の“約束”が、過去の真実を知らされたときの尋人を案じてのものだと、今の少年には知る由もない。

ただ、両親の深い愛情から得た勇氣は限りない。

それは尋人の“心”の力になつた。

## 時の旅人 二四

翌朝。

尚也と尋人は、母親に見送られて倉橋家を後にした。

さすがに日中は杉も仕事があり、迎えには来れないため、二人は電車でK市に戻るようになった。

今日、中流が帰ってくる。

二人はようやく再会出来る。

「あいつの飛行機が新千歳に着くのは昼過ぎだし、時間あるようなら野口の見舞いに行くか」

そんな尚也の提案に、尋人は即座に頷いた。

まだ意識が戻ったという連絡はなかったが、自分のせいで負傷させてしまった野口に、せめて直接の言葉で謝りたかった。

「……」

他愛ないお喋りをしながら、尚也と二人、地元を離れた尋人だったが、一つ、気懸かりもあった。

今朝、K市に行くことを菊池にも報告しようとして連絡を入れたのだが、何回電話をしてもまるで繋がらないのだ。

昨夜の、彼らしくない態度も気になった。

(…滝岡君がどうかしたのかな…)

尋人は昨夜の電話での会話を思い出しながら小首を傾げる。

菊池は、何を求めているのだろうか…？

その頃の菊池は、実は尋人よりも一足早く街に出ていた。



数日前にも訪れたK市を過ぎ、その先の北の大都会・S市へ。その足取りに迷いはなく、ただ足早に目的地を目指していた。S市の観光地として名高い【大通】と平行し、数区を離れて無数の商店が建ち並び歩行者天国“敷明小路”。

(くそ……！)

背負っていた鞆。

その肩紐を握り締める。

中には、財布などの他に小さめの茶封筒が押し込まれていた。

封筒の中身は写真。

昨晚、写真家を目指す友人に方法を教えてもらい、彼自身の手で現像した十数枚のそれは、従兄から送られてきたフィルムの中身。

あの日の 誰もが尋人に語ろうとしない、失くした記憶の悪夢だった。

(なんでこんなこと……何でこんなことしたんだよ修司……！)

これを従兄が持っていたのは、彼が関っているからに違いなく。

あの頃の彼は尋人を虐めていた張本人だ。

「……っ」

これを、六条中流に渡せという一文だけを添えて送ってきた彼の意図は何だ。

六条中流を、尋人の恋人だった男と知っているのメッセージか。知っているのか。

六条中流も。

彼も、この事実を知っているのか……？

(ばか野郎……なんて事しやがったんだおまえ……！！)

……本当は優しい、いい人なんだけど外見が恐くてよく誤解されていたよ……

尋人にそう思われていたことなど、きつと知らずにいた。

自分が、倉橋尋人という同級生をどう思っているのかすら気付か

なかった彼は、決して取り返しのつかない最低な真似をしでかしていた。

（俺は許さない……っ）

尋人が全てを忘れてしまっても、菊池は、自分だけは絶対に従兄を許さないと決意した。

本人を見つけ出し、この写真を突きつけて、尋人に土下座して謝らせてやる。

それが無理ならば、自分が報復してやる。

その強い気持ちで、彼は敷明小路を目指していたのだ。

尋人が以前に住んでいた街。

その近辺で、そういう連中がいるのは敷明小路だという情報は前から知っていた。

所在不明の従兄だけれど、ここに来れば何らかの情報を得られるかもしれないと思っただのだ。

（絶対に見つけ出してやる……！）

敷明小路に辿り着くと、早速、従兄の情報を求めて動き出した。

この辺りで滝岡修司という名前は聞かないだろうかと声を掛け、本人の写真を出しては見覚えがないかと聞きまわった。

だが有力な情報は何一つ得られず。

そればかりか、一度は避けた危機を呼び戻してしまった。

「おい、タキオカシユウジ探してるって？」

「！」

背後から声を掛けられ、振り返ると、そこには二人の男が立っていた。

大学生風の、そこそこに長身で、遊び慣れている雰囲気。

菊池にとっては見知らぬ男達だが、彼らは菊池の顔をまじまじと見て表情を変えた。

こいつだ、…とその瞳が告げた。

「！」

菊池が、その変化を目にするまで警戒しなかったのは仕方がない。彼らは、いつだって菊池達の背後から彼らの動向を見張っていたのだから。

「……！！」

「おとなしくしろよ、言うこと聞けば手荒な真似はせずにてやる」

「おまえら……っ……っ……っもしかして倉橋の……っ」

「俺らは何も知らねえヨ。そのクラハシ？ そいつを攫って来いって言われただけだからな」

「誰からだよ……！！」

「だから知らねえって。とにかく俺らはクラハシさえ連れて行けば金貰えんだ。おまえには、呼び出す餌になつてもらおうぜ」

「誰がそんなこと……！！」

「大人しくすりゃ手荒な真似はしない、って言ったよな？」

「……っ……」

尋人を庇って、野口が暴行を受けたという報せを、今更ながらに思い出した。

自分の愚かさを悔やみながら、腹部に当てられたナイフの切っ先に、一筋の赤い液体が流れた。

どうして今までそれを忘れていたのか、思い出した現在でも解らない。

最初に感じたのは違和感。

自分達は、もっと楽に生活していたはずだと思った。

仲間達と始めた“闇商売”は思いのほか巧くいつていたはずだし、毎日毎日、金のためと思わなければ投げ出しなくなるような注文メ

ールを処理し、銀行で記帳するたび振り込まれている金額に笑った。  
誰が泣こうが喚こうが。

それで誰の人生を狂わせようが。

俺達はそれが楽しかった。

たった一度の人生だ。

自分が楽しまなかつたら損だろう。

なのに、これは何だ。

俺達の“店”はどこにいった？

売り上げは？

客の 否、それよりも“商品”達のリストはどこに消えたんだ

……？

一度きりの“商品”になった奴もいれば何度も呼び出しイイ金づ  
るになった“商品”もいた。

リストがなくなつて思い出せる連中もいて当然なのに、何故か、

誰一人として思い出すことが出来なかった。

自分達の記憶に愕然として。

仕方ないから新しい“商品”を手に入れようとすると片っ端から

失敗する。

一度は警察沙汰にまでなり危うくブタ箱行きだ。

…何もかもが巧くいかない。

何もかもを失って。

……なんで俺達は楽になれないんだ…？

その答えを得たのは、あの日のテレビ。

昼過ぎの番組に映ったガキの姿に、いきなり閃いた。

こいつだ、と思った。

そいつだけを思い出した。

このガキを犯れなんて依頼さえ来なければ、俺達は今も楽に暮らせていたはずだと、思い出した。

「クラハシヒロトと、タキオカシユウジ」

男は呟き、菊池の鞆から取った茶封筒、その中に入っていた十数枚の写真を眺めながら嘲笑した。

「…そうだよ、こいつらだ。こいつらのせいだ……っ」

「おいエータ。これ」

相棒が投げて寄越したのは、やはり少年の鞆から取った携帯電話。菊池は両手を縛られ、ガムテープで口を塞がれた状態で、冷たいフロアの上に放置されていた。

意識はあり、必死に声を上げようとするが、それもくぐもった呻きにしかならなかった。

「クラハシヒロトの番号、入ってる」

「OK」

時刻は午前十一時。

尋人と尚也がK市に戻って来る。

中流の乗った、東京・羽田発の飛行機が新千歳に到着するまで、あと一時間。

## 時の旅人 二五

それは悪夢の再来か。

未来への道標か。

望む明日は“幸せ”だけ。

誰と進むかを知るのは“心”だけ。

その電話が鳴ったのは十一時を過ぎた頃。

尚也と二人、松浦駅に降り立った尋人はコートのポケットに入れた携帯電話の振動で着信に気付き、表示された名前が“菊池武人”であることに安堵した。

「菊池君です」

言うところ、尚也も「そっか」と笑い、ようやく連絡が取れる事にホツとした様子だった。

だが実際に聞こえてきたのは、友人のものとは似ても似つかない男の低い声。

「クラハシヒロトだな？」

聞いてくる声には不気味な笑いが混じる。

瞬時に顔を強張らせた尋人の異変に気付いた尚也は、足を止めて様子を伺っていた。

「この電話のガキを預かってる。返して欲しけりや今すぐに敷明小路に来い。場所はオマエがよく知っている場所だ、あの日の続きをしようぜ？」

「あの日の続き…？」

何を言われているのか理解出来ずに聞き返すと、男は笑った。

「心配すんな、今度は声我慢なんか出来ねえくらいイイ思いさせてやるよ」

「な…にを……」

「ヒロト？」

青ざめた顔の尋人に、尚也は眉根を寄せた。

「何を…言っているんですか……………何を貴方と…っ…」

「！」

瞬間、尚也の中で何かが弾けた。

「おい！」

尋人から携帯電話を奪い取り、途端に怒鳴りつけた。

「おまえら野口をやった連中か！」

『誰だてめえ』

「誰だろうと関係ない！俺が聞いてンだろ！？野口をやったの

はおまえらか！！」

『ノグチなんか知らねえなあ…、俺らがヤツたのは、そこにいるク

ラハシヒロトだぜ？』

「……………」

笑っている。

電話の向こうの男達は、それを楽しんでいる。

「ふざけんな！！」

「尚也さん…？」

「いい加減にしろ！二度とヒロトに近付くな、こいつは全部忘れ

てるんだ、もうオマエらとは関係ない！！」

『忘れてる…？』

一瞬の沈黙。

直後。

『あはははははっ！！』

「……………」

『ははっ、忘れてるって！？そりゃいい、俺らの人生ダメにしといて忘れてるってか！？だったら尚更そのガキ連れてこいよ、俺らが思い出させてやるから！』

「…下種が…っ…………どっちが人の人生滅茶苦茶にしてンだよ！！」

おまえのらせいでヒロト達がどんなに苦しんだと思っただよ！！」

親友が　中流が、どんな思いで今までの月日を過ごしてきたか。  
「絶対にヒロトは行かせない！　二度とおまえらの好きにさせるか  
！！」

『だったら、この菊池ってガキが代わりになるぜ』

「　！」

『今すぐに可愛がつてやる。それがイヤならヒロトを連れて来い』

「卑怯だぞ……！」

『ハッ。いいからヒロトを連れて今すぐに敷明小路二丁目のJES  
Sって店まで来い』

「ちょ……っ」

言い返すまもなく切られた電話。

「くそっ……！」

吐き捨て、空を睨み付けた尚也は、尋人の震えた手に腕を握られ  
て、ようやく我に返った。

「あ……」

「なお……や……さん……今の、電話の、…男の人……」

「ヒロト……」

「今の人が……言ったこと……」

思い出そうとしても思い出せない。

気付くことを恐怖が拒む。

「…僕は、何をしたんですか……」

「…っ」

「皆は…、尚也さんは、何を知っているんですか……っ！？」

菊池は、どうして自分達よりも早く、この街に来ていたのだろう。

尚也は、どうして今の電話を理解して、怒ったのだろう。

両親は、どうして知っていることを話してくれなかったのだろう。

中流は、どうして何も言わずに別れを告げたのか。

「僕はどうして記憶を失くしたんですか……！！」



「…っ…！！」

尚也は尋人に携帯電話を返すと、強引に腕を引き、今降りたばかりのホームとは逆方向に連れて行く。

「ヒロト、おまえはすぐに家に帰れ」

「え…」

「中流は、必ず会いに行く。今日は無理でも、きっとすぐに会いに行く。だから駅から出ずに、すぐに家に帰れ」

「そんな…っ…それじゃあ菊池君が…！」

「菊池は俺が助けに行く」

「だって！ それじゃあ今度は尚也さんが」

「俺はいいんだ！」

「良くなかないです！ 尚也さんに何かあったらご家族や彬先生がどんなに悲しむと」

「同じだろ！？ ヒロトに何かあったら悲しむ人が大勢いる！ 親だって菊池だって…っ…中流だって！ また泣かなきゃならなくなる！ 俺はっ、もう二度とあいつにヒロトを失わせたくないんだ…！！」

「…！！」

ようやく逢えるのに。

閉ざされた時間が開いて。

置き去りにされた時間に呼ばれて。

やっと、二人の時が重なるうとしていっているのに。

「俺は中流に救われた。あいつがいたから好きな男と一緒にいられる…っ…、だったら今度は俺があいつの力になる番だ」

「…っ」

「だから帰れ。心配すんな、野口と一緒に次の日には見つかって病院でまた会えるさ」

尋人が行けばどうなるのか明らかでも、尚也が行けば、それだけで済む。

身体につけられた傷なら、時間が経てば綺麗に消せる。

「いいな、俺の言うこと聞けよ？」

強い口調で言い聞かせる尚也に、これ以上は逆らっても無理だと判断した尋人は、唇を噛みしめながらも、コクンと小さく頷いた。

「…わかりました」

少年の答えを聞き、尚也は満足したように笑った。

「また会おうな」

今度は、中流も一緒に。

そうして走り去って行く尚也を見送り、尋人は顔を伏せた。

このまま帰れと尚也は言う。

言うことを聞けば、今度は必ず中流と会えるから、と。

「……………っ！」

だからって、出来ない。

そんなことは、出来やしない。

「これは僕がしなきゃいけないことだ…！」

尋人は尚也から返された携帯電話を握り締め、菊池の番号に掛けた。

どうか電源が切られていませんように。

男達が自分の話を聞いてくれますように。

コール三回。

電話は繋がった。

「…貴方達の言うことを聞きます。だから、行き先を変えて下さい。僕一人で行きますから ……」

## 時の旅人 二六

K市から敷明小路のあるS市まで快速電車を使えば十五分。新千歳空港から、同じくS市までは三十分。

中流が新千歳空港に着いたのは、尋人が尚也の乗った電車を見送り、十分後の快速電車に乗った後だった。

空港の地下にあるJR駅から快速に乗った中流は、電車が動き出してから車内の公衆電話を使い、大樹家に電話した。

自分の携帯電話は自宅の机の上に置いて来ている為、電話番号を暗記しているのは自分の家と従弟の自宅番号だけだった。

（どうすっかな…、電話帳が何かで尚也の自宅番号を調べてもらって、おばさんに携帯番号を聞くか…それとも学校に電話して時枝先生に連絡取るのが先か…）

先日の電話で、あんな別れ方をしている友人だ。

長い付き合いから、今も怒っている可能性は限りなく高く、なるべく穏便に話が出来る場を持ちたかった。

だが、そんなことを考えていた中流に、電話に出た従弟は最悪な現状を知らせた。

野口が襲われ入院中であること。

尋人が狙われていること。

今日、中流が帰ってくることを前もって知っていたから、尚也が尋人を迎えに行ったのだが、昨夜からまったく連絡がないこと。

「裕幸、尚也の携帯番号知ってるか!？」

「判ります、念のために聞いておきました…」

そうして教えられた番号を腕に書き、急いで掛け直した。

「尚也…っ」

出てくれ、頼むから繋がってくれと念じながら相手が出るのを待っていた。

十数回目のコール。

『誰だ忙しい時に!!』

繋がったと思った途端にそのように怒鳴り返されて、とりあえず電話に出られる状態だと安堵した。

「悪い、俺だ」

『俺!? 俺って誰だよつ、ふざけてンなら切るぞ!』

「待てよ尚也、俺だって、中流」

『中流!?』

恐らく公衆電話からの着信だったこともあり、彼曰く「忙しい時の電話を煩わしく思っていたのだろう。」

『中流、おまえ今まで何してたんだよ! つとにふざけんな!!』

「悪い、それは後でちゃんと謝る。おまえの説教もちゃんと聞く。」

…だから…」

だから、おまえが迎えに行ったという尋人はそこにいるのかと、問いかけようとするより早く。

『それより今マジで忙しいんだ、おまえ今どこだよ!』

「空港から電車に乗った。いま…千歳を過ぎたところ」

『じゃああと十分もしないでK駅だよな、だったら、もしかしたらまだ駅にヒロトがいるかもしれない! いたら、今度こそちゃんと捕まえておけ!!』

「駅?」

『野口の話、聞いたか?』

「ああ。いま、従弟に先に電話して」

『その野口を襲った連中、今度はヒロトを呼び出した』

「!」

『菊池を攫って脅迫して来たんだ、無事に帰して欲しけりや来いてな!』

「それで…つ…それで尋人は…!」

『駅に置いて来た。すぐに家に帰れつて。おまえが行くことないつて説得したんだ』

だから、今の時間から尋人の地元に戻る電車が来るまで、しばらく

く待つはずだ。

うまくいけば中流と尋人は駅で会える。

そう告げる尚也に、だが中流の顔からは一斉に血の気が引いた。

「尚也…その菊池って、…もしかして尋人の…友達、か…？」

『ああ、転向した先の同級生だって言ってた。だから俺が必ず助けるって約束してきた』

「…おまえが行ったら…っ…今度はおまえが野口と同じ目に…っ  
！」

『かもな。けど俺が行けばそれで済む。野口と同じだ。殴られて蹴られて…は、するだろうけど、それ以上のことはない』

「尚也…」

親友の言葉の裏に伏せられた意味を、中流は否がおうにも察してしまった。

「尚也…おまえ、知ってるのか…っ？」

あの日の尋人に起きたこと。

中流が彼を受け入れられなかった本当の理由。

『…もしかしたら、あいつらの電話のせいでヒロトも薄々気付いちまったかもしれない』

「…っ…」

『けど…だから尚更、ヒロトには行かせられないだろ？俺だって

……相手が彬だったって…、そんなこと、思い出したくないんだからな…！』

「尚也…」

だからって。

そのために、尚也を犠牲になど出来るわけがない。

「尚也、おまえ今どこだ？」

『敷明小路に入った。そろそろ着くから、電話切るぞ』

「待て！おまえだって行くことない、俺が行くからおまえは引き返せ！」

『！バカか！？おまえはヒロトだけ守ってりゃいいだろ…！』

「俺は尋人を守れなかつたんだ！」

「!?!」

「あの日…俺は尋人を守れなかつた…っ…………だから失つたんだ」

『中流』

「頼む。だつたら尋人の友達を守つてやりたい…その菊池も、尚也も…傷つけば尋人が苦しむ事になるんだ…！」

誰が傷ついても、尋人は自分のせいだと自身を責める。

彼のことから分かる。

「あ…………！」

そつだ。

尋人は、自分のために他人が傷つくことなど決して望まない。

「尚也っ、連中が来いつて指定してきた場所はどこだ!?!」

『場所? JESSSって店…敷明小路の二丁目にあるつて聞いたけ

ど…』

「っ…………」

その店の名前には聞き覚えがあつた。

あの夜、兄達が徹底的に破壊した店。

…尋人を乱暴した連中が経営し、裏で闇の商売をしていた奴らの本拠地だ。

「! 尚也、その店はもうない！」

『何だつて!?!』

「その店はもうない…奴ら、その近くに現れた尋人を連れ去る気だつたんじゃないか…!?!」

『そんな…それじゃあ俺が来ても…』

顔の知られていない尚也が近付いても、敵は決して動きを見せないだろう。

現に、こつして周囲を見渡してもそれらしい動きを見せる人物はいない。

『くそつ…………!』

そもそも、自分のために誰かを犠牲にすることなど望まない尋人

が、尚也に説得されて黙って自宅に戻るだろうか。

「…っ、尚也、一度切るぞ」

『中流？ おい』

中流は言ったが早い尚也の反応を待たずに電話を切ると、急いで背負った鞆から一通の封筒を取り出した。

多少の皺を刻んだそれは、尋人から送られてきた手紙。

連絡が欲しいと、文末には電話番号が記されている。

「尋人……！」

番号を押す指先が震えた。

天に縋るような気持ちで、尋人が出ることを祈った。

人は、それを運命と呼ぶのだろうか。

なにを絆と詠うのだろうか。

「シユウ、さっきオマエ探してるガキがうるついでだよ」

「…」

「知らないって無視してきたけどさ、なんか オマエに似てたなあ…もしかしたら兄弟とかなんじゃない？ いいねえ、探してくれる家族がいるなんてさ」

話しかけてくる同居人に視線だけで応え、言葉を返すことはない。同居人と言っても、この辺一体に集まる似た者同志。帰る家もなく、たまたま同じ場所で寝起きするようになっただけの間柄だ。

「しっかし、最近、人捜しが流行ってるのかね。この間も…なんだっけ、クワバラヒロシ…じゃねーし、…ああ、ヒロトだ、ヒロト。その情報持ってないかって、エータさんとこの連中が嗅ぎ回ってたしよ」

「」

「まあ、今じゃエータさんも大して力ないし、適当に流しといたけ

どね。いちいち知るかつての」  
続けて出された、同居人の曖昧な記憶の中の名前に。  
そしてエータの名前に。  
彼は手を止めた。  
一瞬、息も止まった。

静かに、静かに。  
時の歯車は動き出す。  
旅人達に道を示す。

「……………はい」  
「！ 尋人か！？」  
「……………」

電話の向こうで、少年が息を呑むのが判った。  
…ああ、尋人だ。  
間違いなく彼だ。

「尋人…俺だ」  
「……………先輩……………？」  
「尋人……………」

声にならない声が。  
伝えたいのに伝えられない言葉が。  
顔の見えない、息遣いだけが伝わる電話の向こう、確かに互いの  
想いは感じられた。

「……………」  
「……………あ……………」  
好きだよ。



誰より、何より。  
求めていたのは君だけ。

傍にいて欲しかったのは、たった一人。

叶うならば時を止めて。

このまま、二人にして欲しい。

ようやく触れた心の距離。

もう、決して手放したくはないんだ。

「…行くな尋人」

「え…」

「俺が行くから、おまえは今すぐに家に戻れ…、連中にどこに呼び出されたのか教えてくれ。俺が、ちゃんとおまえの友達を連れて戻るから…っ、だから尋人、おまえはすぐに戻ってくれ…っ！」

「先輩…」

中流の必死の訴えに心は揺れた。

このまま彼の言う通りに引き返して、彼に菊池を助けてもらって、今度こそ再会出来るなら、それは何て幸せなことだろう。

例えそれが病院のベッドの上でも。

身代わりに傷ついた身体でも。

自分は幸せだと、微笑えるだろうか…？

「…先輩…、もし…もし僕が、失くした記憶を思い出しても…、いつか、会って話しが出来ますか…？」

「尋人？」

「僕が…、…僕が、一度死ぬ前の僕に戻っても…」

「…っ」

「それでも、…僕達はもう一度、逢えますか…？」

「尋人…！」

君が何に気付こうと。

何を、知ろうとも。

「当たり前だろ……っ？ 俺はおまえに会うために帰ってきたんだ……、今度こそ尋人とちゃんと向き合うために帰ってきたんだからな……！」

「……ありがとうございます。僕も……先輩に逢いたいです。……その時には、菊池君を紹介しますね……」

「尋人っ」

「今から彼を迎えに行きます。これは……これだけは僕の役目なんです」

「尋人やめろ！ 戻って来るんだ……！」

「僕のせいで誰かが傷つくのは絶対に嫌なんです。菊池君も、尚也さんも、……先輩が、傷つけられるのも」

「尋人……！」

あの夜が蘇える。

中流の想いを信じていたからこそ。

……誰より深く想っていたからこそ、汚れた自分で中流を縛りたくないからと自ら命を絶った尋人。

いま再び、彼は一人で傷を背負おうとしている。

中流が 菊池が。

尚也が。

自分のために傷つくことも辞さない覚悟だと知っているからこそ、自分一人で背負うことを決意してしまった。

だがそれは違う。

君を想うからこそ。

君が想ってくれるからこそ。

「俺はおまえを守りたいんだ……！」

もう、二度と失わないために。

「頼む…っ…俺に守らせてくれ…、尋人、今度こそ、おまえを抱き締めさせてくれ…！」

『先輩…』

「尋人、頼むから…っ…頼むから…！」

『…ごめんなさい』

「尋人…！」

切れた電話に、中流は叫んだ。

どこにいる。

おまえはいま、どこにいる

…！！

## 時の旅人 二七

「っ」

「大人しくしろよ」

乱暴に背中を押され、突き飛ばされた先にはアスファルトの地面。廃墟になって久しいらしく、寂れた雰囲気は、決して清潔とは言えない状態と相まって非常に陰鬱としていた。

中流との電話を切った尋人は、そのとき既に目的地の近くまで来ていた。

中流の声を聞いたせいで、泣き出しそうになるのを必死に我慢し、このビルにやってきた。

何年も放置されているのか、正面玄関は一応の立ち入り禁止処置が施されていたが、裏口に施錠はされていなかった。

階段を上がり、指定された五階まで上がったところで、背後から誰かに口を覆われた。

「一人だな」

低い問い掛けに頷くと、その男は尋人を中に押し込み、その部屋に突き飛ばしたのだ。

「よお、ご無沙汰だな。…っつか、覚えてないんだっけ？」

「…」

警戒を強め、精一杯睨み付けた尋人に男は笑う。

「くっくっくっ…、忘れたなんてつれないよなあ？俺はおまえの初めてのオトコだぜ？」

「…っ」

「この場所であんなに可愛がってやったのによお。…ホントに全部忘れてんのか？」

距離を詰めてくる男から逃げるように、尋人は一歩ずつ後ずさりする。

この男の言っていることは判らない。

記憶もない。

だが言い様のない恐怖が全身を駆け抜けた。

「実は俺達もさ、最近まで何で自分達の商売がダメになったか全然、判ってなかったんだ。けど何日か前、テレビでオマエらを見てイキナリ思い出した。俺らがダメになったのはオマエのせいだ、ってな」

「…っ」

「オマエらのせいでダメになったんだ。だったら俺達は、あの夜からやり直してやる」

「！」

伸びてきた男の腕から逃れて、尋人は壁伝いに距離を取る。

「何も覚えていないけどっ、僕は貴方達に何をしたんですか！ 商売を駄目にしたってどういう意味なんですか！？」

「聞きたいのはそれだけか？ 順番に答えてやるから、聞きたいことは今の内に全部言えや、チャンスはこれっきりだぜ？」

「…っ」

警戒する尋人を追い詰めて楽しんでいるかのように、男の表情からは笑みが消えない。

それがなおも尋人の恐怖心を煽った。

「… 商売… って、何ですか」

「あとは？」

「あの夜からやり直すって…、電話で言ってた、思い出させてやる… って、どついう意味ですか？」

「次は？」

「…っ… 菊池君はどこですか！」

「ハッ」

鼻で笑われ。

途端に今までとは比べ物にならない速さで距離を詰められた。

「やっ…、…！」

腕を取られ、吐息が掛かるほどの至近距離。

「今のが最後の質問でいいな？」

決して反論はさせない調子で言い放ち、男は出入り口の向こうに声を上げた。

「おい、そのガキ連れて来い！」

「……！」

耳に届いた複数の足音。

四、五人の男とともに、その先頭を歩かされていた菊池は背中を手首を縛られ、口にはガムテープが貼られていた。

「菊池君……！」

「んんんっ……！」

くぐもつた呻き声にしかないが、菊池もきつと尋人の名を呼んだはずだ。

「まず最後の質問から答えてやる。おまえが探しているガキはここにいる。これからおまえと二人、俺達の“商品”になってもらうぜ」

「商品……？」

「俺達の“商売”ってのはいわゆる裏ビデオさ。顔出し無修正の“商品”で好き放題ヤツてるVHSやDVDを作って売ってる。世の中“変態”ってのは多いからな、俺達の商売は大成功してたんだ」

「んんんっ！ んんんむう……！」

「黙れガキ！」

それ以上、尋人にそんな話を聞かせるなと叫びたい菊池は、だが思いは言葉にならず、話の邪魔をするなと腹部に強烈な一撃を受けて痛みに顔を歪めた。

「っ……！」

「菊池君……！」

「おっと……！」

友人に駆け寄ろうとした尋人を、男は笑んだまま取り押さえた。

「その大成功していた商売が、あの日、オマエを“商品”に選んだせいで大失敗だ」

「……」

「何でかは、これも忘れちゃったけどな。オマエのせいで何かが狂ったのは間違いないんだ。でなきゃオマエのことだけ思い出すなんてあると思うか？」

「そんなこと…っ」

「そんなこと。」

「知るはずがない。」

こうして話を聞かされたって、彼らの言うことは理解出来なかった。

「だから、オマエのせいでダメになった商売なら、今度はオマエで再起してやる」

「……！」

「オトモダチと一緒になら心強いだろうが？」

「やつ…！ 今の…っ、そんなの……！ 僕は悪いことなんか何もしてない！ 間違っているのは貴方達じゃないか！！ なのにこんな真似…っ、菊池君まで巻き込むなんて…！」

「うるせえよ」

「…！」

「弱え奴は俺達の言うこと聞いて、素直で従順な“商品”になつてりゃいいんだ。そうすりゃ少しは役に立つってもんだろ」

「気持ちいい思ってたって、させてやってんだ。悪いことばかりじゃないよな？」

「モノが売れりゃ、それなりの金だってくれてやるし、ギブ&テイクってやつじゃん？」

次々と上がる男達の嘲笑と侮蔑の声。

「それに安心しろよ、このガキ使うのだって、オマエのダチだからって理由だけじゃねえ」

「え…」

「このガキ、俺達にオマエを犯れって言ってきたタキオカに似てんだよ」

「…」

「…っ」  
タキオカ 滝岡修司。

… 滝岡… っ て、覚えているか…？

昨晚の菊池の電話。

彼が。

あの、優しい人と記憶している元同級生が、自分に何をしたと…  
…？

「本人の行方が知れないんじゃないや仕方ねえ。顔の似たこのガキなら多少のウサ晴らしにはなるだろっとな」

「…っ…！」

「今ので全部の質問に答えたよな？」

「あ…！」

「さあ、あの日の続きを始めようぜ」

「新しい門出だ、せいぜい楽しもうぜ」

「やだ…っ…！」

「んんんんっ」

「菊池君…！」

腕を引かれ、倒され。

硬いアスファルトの冷ややかさが背筋を震わせる。

「放して…！」

「そうさ、せいぜい抵抗してくれよ。あの日みたいに無抵抗じゃ楽しみも半減だ」

「…！？」

「声だつて我慢すんなよ。二人で足りなきゃ三人、四人で可愛がつてやるからよ」

無抵抗…？

こんなことをされて、自分は何の抵抗もしなかった…？

「しっかり撮れよ」



「任せとけて」

カメラを用意されて。

男達に組み敷かれて。

「クククツ…、オマエも、まあカワイソウではあるよな」

「…っ」

「滝岡の奴、オマエが他の男のモンになったと思ひ込んでただか  
らな」

「…！」

「好きな子イジメるってな、ガキでもねえのにバカかよ」

虐め。 滝岡修司が？

他の男。 六条中流のこと？

この硬いアスファルトの上で。

この男達に組み敷かれて。 無抵抗で。

…クククツ…同級生に売られた気持ちってどんなだよ……………

「…っ」

…可愛がってやるからイイ声聞かせてくれな…、オマエの男  
にもちゃんと届けてやるからよ…

…オイ鳴けよ少しは…面白味ないぜえ？

…ざけんな抵抗もナシかよ、俺ら和姦してんじゃねえんだぜ？

……ンだよ、俺らが抱いてンのは死体か？

…いい加減にしろよ……っ…このクソガキが！！

「あ…っ」

頭の中。

蘇える声はいつものもの。

あの日の あの夜の。

男達の罵倒。

階下には同級生がいた。

男達の蹂躪が終るのを今か今かと待っていた。  
笑いながら。

隠れながら。

…僕の抵抗する姿を。

…僕の抵抗する声を。

…男達に蹂躪されてよがる声を、階下で笑いながら待っていた同級生。

「あ…っ…ああああああっ！！！！」

「！！」

「！？？」

「や…っ…やだ…僕は…！！！！」

「…っ…なんだよこのガキ、イキナリ…！！」

「気でも狂ったか！？」

「オイ！？？」

(倉橋…っ！！！)

菊池もまた男に組み敷かれながら、縛られて抵抗できない状態であるにも関わらず、突如叫んだ尋人に目を見開いた。

「やだ…っ…僕は…僕は…！！！！」

…逃げれば逃げるほど。

嫌がれば嫌がるほど。

叫べば、叫ぶほど。

彼らが喜ぶのは判っていた。

それを楽しんでいるのは判っていた。

だったら、好きにすればいい。

我慢することは慣れている。

慣れている。

…痛みだけなら、幾らだって耐えられたんだ……

…尋人……

その声さえ、聞こえなければ。

…尋人、好きだよ……

その人さえ、いなければ。

……俺の傍で、幸せだって、微笑っていてくれ……

僕を愛してくれる。

愛してくれている。

僕がどんな目に遭っても、どんな姿になっても。

先輩は変わらずに僕を好きでいてくれる　それが信じられるよ

うな。

そんな“好きな人”の存在さえなければ、僕はきつと我慢して生きていけた。

おまえになんか二度と会いたくないと言って別れてくれる人だったら“自殺”しようなんて思わなかった　……！！

「倉橋！！」

「……」

不意に菊池の声がした。

突然、叫び出した尋人をどうにかしろとでも言われたのか、口のガムテープを取られた彼は必死の形相で友人の名を呼んでいた。

「倉橋……　倉橋……！！」

自分も大変な時に、それでも他人の心配をしてくれる友人。

「……お願い、です……　菊池君を放して下さい……」

「倉橋！？」

「僕は何をされても構いません…、貴方達の言うとおりにします。だから……だから菊池君だけは放して下さい……っ」

「何バカ言ってるんだよ！ 倉橋！ おまえはこれから六条中流に会って！ 今度こそ一緒に……っ」

「会えないよ……っ」

「なんで……」

「会えないんだ……！！」

なにもかもを思い出してしまった。

六条中流に、どれほど愛されていたか知ってしまった。

「もう……会えない……っ」

「倉橋……！！」

尋人の目尻から流れた涙に、菊地の胸は軋む。

自分が軽率な行動に出たばかりに、ようやく恋人と逢えるはずだった尋人を傷つける。

泣かせてしまう。

「くそ……っ……！！」

「いいがけんにしろよガキども」

「何がキクチは放せだ、オマエらは二人とも“商品”なんだよ！」

「放せ下種！ その腐った根性、どうにかしやがれ！！ 倉

橋、おまえも抵抗しろよ！！ 逃げるよ……！！」

「……もう……いいんだ……」

抵抗なんて意味がない。

我慢して。

耐えて。

過ぎるのを待つだけ。

「倉橋……！！」

「もういい……、もう、どうなったって……この人達に何をされたって、僕は何とも思わない……」

「……！！」

「……っ……ふざけんなよガキ……っ！！」

「倉橋！」

尋人に馬乗りになっていた男の、振りあがった手は拳を握り、少年の顔面、目掛けて振り下ろされた。

それでも逃げようとしないう尋人に、菊地が叫び。

そうした次の瞬間。

「！！！」

「あ……っ」

「なっ……」

男の背後に、息を切らし、青ざめた顔をした見慣れぬ男が現れた。尋人を殴ろうとした男の拳を背後から掴んで止め。

「菊地の言う通りだ……っ、その腐った根性どうにかしろよ下種野郎

……っ！」

「……あ……」

「……六条中流……？」

菊地の、信じられないものを見るような眼差しでの問い掛けに、中流の応えは、尋人を組み敷く男への強烈な一撃だった。

## 時の旅人 二八

尋人は、どこに呼び出されたと誰かに言うことはなかった。だが、尚也は最初の電話を聞いていた。

尋人に掛かってきた電話に、少年が聞き返していたこと。

…あの日の続き………？

あの日の続き。

その意味を、中流は知りたくなくとも気付いてしまった。

全ての成功を失った連中が、もう一度、栄光を取り戻す為に始めるなら、あの夜、尋人を自殺に追い込んだ場所でしかありえない。

何か手掛かりはないかと、尚也に改めて電話し聞き出した情報から、ここだと確信した中流は走った。

尋人のことだけを想い、走った。

「菊地の言うとおり…、その腐った根性どうにかしろよ下種野郎…  
…っ！」

怒鳴り、尋人を組み敷く男に強烈な拳を振り下ろして殴り倒すと、すぐに尋人を抱き起こし、その腕に抱き締めた。

「…っ…」

衣服は乱れ、ところどころに擦り傷や殴られた痕はあったが、…  
間に合った。

今度こそ、間に合った。

「尋人…っ！」

「……………」

強く、強く抱き寄せて。

一つ、深い息を吐いた。

そうして顔を上げ、今度は菊地を押し倒している男に言い放つ。

「放せ」

「……」

「そつちの男も！ 今すぐに菊池を放せ！！」

五人を相手に凄む中流だったが、数にしても体格にしても、自身の不利は否めない。

ましてや尋人と菊地、二人の少年は絶好の人質だった。

相手もそれを判っているから、菊地から手を離そうとはしなかった。

「この人数見て言ってるのか？ 痛い目、見たくなきゃさっさと失せろよ、それとも見学してくのか？」

一人の男が言って嘲笑すると、それは連中の中に漣のように広がっていく。

中流を無謀でバカな奴だと罵倒する。

だが、本当の愚か者はどちらか。

「俺が一人で乗り込んでくると思うか？」

「なに……？」

「おまえらみたいな卑怯者が何人もいるって判ってて一人で来ると本気で思ったのか？ いくら俺だって、そこまで命知らずじゃない」

「そういうこと。ココの一族に声掛けられたら、集まる連中って半端じゃないよ？」

「……」

中流の言葉を補うように、その声は突如割り込んできた。

「その節はどおもお。 つつって憶えてる？ お店の再建はまっ

たく進んでないようですケドね、エータさん」

「……っ！？」

楽しげな笑いを交えて言うのは、城島という青年。

中流の従弟・大樹裕幸の学校の先輩であり、あの日、中流の兄達とともに三十人前後の仲間を引きつれ、男たちの店を再建不可能なまでに叩き壊してきた人物だ。

と言つても、エータ達本人に覚えはない。

そのときの記憶は、ある種の呪いによって全て忘れさせられてい

るのだから。

あれだけ酷い目に遭ったんだからショックで記憶ないかもね……、何食わぬ顔で城島にそんなことを言ったのは中流の実兄・出流だった。

そして今、建物の内外に集まった兵は十数人。

尚也から情報を得た中流は、すぐに裕幸に連絡を取り、誰かすぐに敷明小路に来て手を貸してくれる人物はいるだろうかと尋ねた。さすがに複数の男たち相手に、そのうえ尋人と菊地を人質同然に取られている状況で勝てるとは思わないし、自分のために誰かが傷つくことなど決して望まない尋人に、殴り合う場面は、出来ることなら見せたくなかった。

そうして集まったのが彼ら。

あの夜も力を貸してくれた城島達が、何も聞かずに協力を承諾してくれたのだ。

「エータさんね、敵に回した相手が悪かったんだよ」

「ンだと……っ!？」

「ま。悪いことはしないにこしたこともないけどさ」

「はっ、今は腑抜けたみたいだがオマエにそんなことが言えるか！

? 城島!! オマエらだって何して生きてきた!？」

「ん〜、それ言われると何だねえ」

クスクスと笑う城島は、前に出ようとした中流を制し、ウィンク一つ。

「あの連中は俺達に任せなさいって。こっちはこっちのやり方があんの。アタっちが関るこっちゃないよ」

“アタっち”って誰のことだ……と頭の片隅で思いながらも、暢気に笑っている城島の、瞳の奥に見え隠れする不穏な気配を感じ取って、素直に聞き入れる。

任せると言うなら任せよう。

それを、彼らが望むなら。

「とりあえずね、その可愛い子二人、解放してくれる? エータさ



ん、まさか俺達全員相手にして勝てるなんて思わないよね？」

「……」

「せっかくの機会だし、こっちはこっちで決着つけようよ。その方がまだ生き残れる可能性あるしさ」

「……どういう意味だ……っ！」

「言ったでしょ。敵に回した相手が悪かった、って。アンタだって【大樹】の名前くらい知ってるよね？ 商売してんなら【大樹】にもれなくついてくる二大財閥だって知ってるでしょ？」

「……」

「クラハシヒロトの恋人が誰なのか　アタっちのバックに誰がいるのか、もう少し調べておいた方がヨカッタよね？」

「まさか……」

「この人【大樹】のお坊ちやまだよ？」

驚愕し、目を見開く連中に、城島は薄く笑う。

「ね？ “商売” 巧く行かなくなるわけだね」

「……っ」

「あ……」

唐突に、菊地を押さえ込んでいた力が緩み、男達は放心したように、その場に座り込んでしまった。

自分達が何を敵に回したのか、彼らはようやく思い知ったのだ。

「じゃ、行こうか」

ニッコリと笑った城島は、仲間に合図し、五人の男達をそれぞれに抱えて、その部屋を順に後にした。

残るのは尋人と菊地と。

中流と、城島。

「……連れてってどうするんだ？」

止める気はなくとも、多少不安も残る中流が城島に尋ねると、やはり彼は笑う。

「言ったでしょ？ アタっちは関ることじゃないよって。心配しなくても流血騒ぎにはしないさ。……まあ、ちよっとは自分達が今までし

てきたことを実体験して貰おうかな、と思うけど」

「実体験……」

「そ。二度とこんな商売に手え出せないように脅迫材料くらいは取っところと思うんだ。…いざとなったら、現像はアタっちにお願いするからね」

「…見るに耐えないものは持って来ないでくれ」

「あははは、それ俺達も見たくないよお」

じゃあね、と手を振って、仲間達の後を追う城島。

この建物を出るのではなく、階段を上がって行く彼らは、この上階で何を仕出かすつもりなのか。

「…菊地、大丈夫か？」

「あ、…ああ」

菊地もようやく自分の足で立ち上がり、脱がされ掛けた衣服を整える。

「悪かったな、遅くなって」

「いや、それより、なんで俺のこと……」

「尚也に聞いた。この場所も、尚也から教えてもらったようなもん  
だ」

「…さっきの人達は？」

「従弟…裕幸や時河に会ったんだよな？ あいつらの学校の先輩だった人達だ。あいつらのこと気に入ってるみたいで何かと協力してくれるんだ。今もたまたま敷明小路にいたからって、近くにいた仲間を呼び集めて来てくれた。…もう、大丈夫だ」

答えて、中流は尋人を見る。

腕の中。

「尋人…、大丈夫か」

一言も発さない少年は。

…ようやく、この腕に抱き締められた恋人は。

「……っ…放して下さい……」

「尋人？」

「放して…っ！」

「…っ、おい！」

自分を突き飛ばし、逃げようとする尋人を。

腕を振り解き、遠ざかろうとする彼を、中流は慌てて追いかけ、その腕を取り押さえる。

「尋人！？」

「放して下さいっ、もう…っ……………もう呼ばないで…っ」

「… どうして…っ」

「どうして！？ だって…っ……………だって、じゃあどうして僕は生き  
ているんですかー！！」

「！？」

「僕は死ななきゃならなかった！ いなくななきゃダメだった！」

「なんで…っ」

「僕がいたら先輩が犠牲になる！」

「…！」

「先輩が守ってくれたもの…っ……………大切にしてくれたもの…っ、僕  
は自分で守れなかった……………！！」

あの夜。

中流が想い、慈しんでくれた気持ち。

大切に抱き締めてくれた心。

中流に伝えられるようになる前に、何一つ残らず壊れてしま  
った。

自分のものなのに、自分自身が守れなかった。

「貴方が僕を嫌ってくれる人なら良かったんです…っ……………こんなふ  
うに汚くなってしまった僕から顔を背けて離れていってくれるなら  
……………っ…先輩に大事に想われるのに相応しい人を見つけてくれたら  
……………、そしたら…っ」

「バカ言っつな！」

中流は尋人の腕を引き、真正面から少年の目を見て怒鳴った。

「なんでそれで俺が犠牲になるんだ！ おまえを好きでいるのはそ

んなに悪いことか!? 尋人と一緒にいたいと思うのが、そんなに悪いことか!!

「僕は貴方の傍にいられない……っ……」

「尋人!」

「僕だけ“幸せ”だって貴方の隣で微笑ったりなんか出来ない……っ……!」

…俺の隣で、幸せだって、微笑ってくれ……

中流はそう言ってくれた。

自分は中流のために何も出来ないと泣いた尋人に、彼はそう言うて。

自分の隣で“幸せだ”と微笑ってくれるなら、それだけで自分も幸せだからと、微笑った。

だけど、こんなことになってしまった。

中流が守った“尋人”はいなくなつて。

…それでも「好きだ」と言ってもらえたら、僕は幸せだけだ……

…変わってしまった僕が貴方の隣で微笑つて……それでも貴方を“幸せ”に出来るんですか……? ?

「僕は、先輩が守ってくれた“尋人”じゃないんです……っ……“尋人

”じゃない……!」

「……っ」

「僕は“尋人”じゃない……っ……!」

どんな言葉も。

想いも。

中流から注がれるべき“尋人”は、こんな汚い自分であつてはならないから。

「……んでだよ……」

泣き出す尋人に、中流もまた顔を歪めた。  
どうしてそんなことを言う。

…なぜ、自分は尋人にこんなことを言わせているのだろう。

辛いし、痛い。

けれど同時に、尋人から初めて「好きだ」と言われた日を思い出した。

目に涙を浮かべて、同性しか好きになれない自分を恥じながら去ろうとした。

「好きなんです」と言いながら。

こんなに、全身で中流を好きだと叫んでいるのに、自分は貴方に相応しくないと逃げたがる。

…変わっていない。

君は、あの頃と何も変わっていない……！

「おまえが尋人じゃなかったら、尋人はどこにいるんだ」

「…っ…死にました…、あの晩、死んだんです…っ」

「死んでなんかない。尋人は生きてる。…ここにいる」

「違います…っ…僕は尋人じゃ…」

「おまえが尋人じゃなかったら抱きしめたいなんて思わない」

「…！」

「今、俺が何を考えてるか判るか？ 抱き締めて、キスして、今度こそ二度と離れていかないように俺に縛り付けたいって思ってる」

「…っ…」

「尋人にしか、そんなことは思わないよ」

「…アンタ、それはどうかと思うぞ…」

遠慮がちに口を挟む菊地に、中流は笑う。

「黙ってるよ、正直、おまえは気に食わないんだ。俺と一緒にいられなかった時間、尋人とずっと一緒にいたんだからな」

「…けど話した内容は半分、アンタのことだったよ」

「き、菊地君…！」

苦笑交じりの菊地に、尋人は動揺し、中流は笑顔になる。

「尋人、俺はおまえの“心”が好きなんだ。どんな暴力にも屈しない真っ直ぐな心、いつだって人を思う心、素直な心、意地っ張り強情で、臆病だけど、…ちゃんと前を向いて行こうとする心」

一緒に過ごした時間は半年に満たなくても、いろいろな君を見てきた。

感じてきた。

毎日、どんどん好きになっていった。

「…あいつらが、おまえに何したって、心は変わってないだろ？」  
「…っ」

「それとも心も変わったか？ 困っている人を見たら放っておけるのか？ 家族なんかどうでもよくなったか？ 嫌な事があつたら投げ出すようになったか？ 六条中流のことなんか嫌いになったか…？」

「…ずるい…っ」  
「ん？」

「先輩…すごく意地悪なことをしてます…っ」  
「最後に会った日も、俺にそう言ってたな」  
「…っ」

…今日の先輩、何だかすごく意地悪です……

それは、大好きな君への愛情の裏返し。

「好きだ」

「先輩…っ」

「尋人が好きだ」

「……！」

「好きだよ。もう、尋人のいない時間は耐えられないんだ。…一緒に時間に帰ろう。また俺と付き合おう。ここから二人でやり直そう」

「…っ…っ…」

…今度こそ幸せになることを、二人で、私とお父さんに約束してちょうだい……

不意に蘇える母の言葉。

……六条さんと逢って、もう一度やり直すことが出来たなら、…その時には二人で家に帰ってらっしゃい……

両親との約束。

二人は“六条中流”を知っていたから、複雑な心境ながらも、そう言って送り出してくれたのだろうか。

「先輩…っ…」

僕でいいんですか。

……こんな僕で、先輩は幸せになれますか…？

その答が、この腕なら。

抱き締められた温もりなら。

「すぎ、です………」

「尋人」

「先輩と一緒にいたい……！」

「…お帰り」

「っ…っ…っ…っ…」

「お帰り尋人…っ！」

抱き合う二人。

流れる涙と、毀れる笑顔。

あの日から分かれてしまった道。

それぞれの時間を、それぞれに旅しながら、随分遠回りをしてしまったけれど、辿り着いた場所は間違いではなかったと信じている。

こうして二人、もう一度、出逢えたから。

「……」

抱き合う二人に、微笑して。

菊地はその場を静かに後にする。

そういえばあの連中は、城島達に連れられて上に行っただけ  
…と思いながら、階段を見上げた少年は、今頃そこを上って行く細  
身の少年の背中を見た。

「……！」

まさかと思った。

だが、その後姿は。

「修司！？」

「」

ふと彼の足が止まる。

だが振り返ることなく、また上って行く。

「修司！ おまえ修司だろ！？」

追いかけると、相手は歩調を速め。

ざわざわと騒がしい部屋を目指して走り出した。

「おい……！」

刹那、少年が上着のポケットから取り出したのはナイフ。

「修司……！」

菊地の大声に、城島達も顔を上げ、だが何が起ころうとしている  
のかなど判らず、動くに動けなかった。

その隙を、滝岡修司は迷わず駆け抜け、たった一人の男を目指し



て突き進む。

「…っ！ 修司止める！！」

彼の先にはエータ。

彼らの商売の中心人物で。

あの夜、尋人を辱めた張本人。

「修司 ……！！！！」

菊地の叫びなど、何の意味も成さず。

修司が握っていたナイフは男の胸部を突き刺した。

「おい！？」

「マジかよ、なんで！？」

「ちよっ…救急車！」

「おまえ…！」

血を吐く男を、少年は見下ろす。

周囲のざわめきも、動揺も。

少年には聞こえていない。

「修司！」

菊地が怒鳴る。

肩を掴む。

返された言葉は、…だが彼の独り言か。

「償い方なんか…知るか…」

「修司…」

サイレンが響く。

内も、外も。

何事かと人が集う。

「滝岡…っ！？」

「…滝岡君…！？」

中流と、尋人が、その名を呼んだ。

少年は一度だけ足を止めたが。

…振り返ることなく警察車両に乗ってしまった。

彼は、そのまま二人の前から去っていった……。

## 時の旅人 終

四日後　　。

空は晴れ。

四月初め。

内地ではとうに桜花爛漫、めつきり春めいているというのに、北の大地では雪が残り、桜の開花にもまだ遠い。

それでも、肌寒さを残す風には大地の匂いが混じるようになり、道行く人々の服装も随分と軽いものに変化していた。

高校の入学式まであと三日と迫ったこの日、菊地武人はS市の警察署を訪れていた。

受付で名乗り、しばらく待つように言われてロビーの出窓から外を眺めていると、

「いらっしやい」

そう、若い女性に声を掛けられた。

「菊地君、だね。私が江藤汨羽　六条中流の従姉だ」

「菊地武人です。…今日は、お世話になります」

頭を下げると、彼女は薄く笑う。

「気にすることはない。君はうちの弟のために身体を張ってくれたんだ。これくらい容易い御用だよ」

女性の割りにサバサバした口調の彼女は、一七〇以上の長身を無駄にせず、背筋と同様にスラリと伸びた手足が非常に美しく見えた。腰に届くのではないかと思われる長い髪は後ろで一つに結わえられ、

見るからにデキる女性といった感じだ。

彼女が、六条中流の従姉。

この警察署に彼女がいると聞いて、菊地は一つだけお願いしたいことがあるのだと、彼らに頭を下げたのだ。

「この部屋で待っていてくれ。　　すぐに来る」

「はい。　　本当に、無理を言っつて済みませんでした…。　　本当なら会えるはずなのに」

「言っただろう。君は中流のために身体を張ってくれたんだ、これくらいは易いものだ」と

言っつて、彼女は笑う。

そうして部屋を出て行った。

「…」

従兄　あの日、人を刺し、傷害容疑で警官に連れて行かれた滝岡修司は、四日経つた今もこの警察署で留置されている。

幸い、刺された男の傷は致命傷に至らず、搬送先の病院で意識を取り戻し、順調に回復に向かっているのだが、滝岡は事情聴取に一切何も語ろうとせず、担当刑事を困らせているというのだ。

刺された側が告訴はしないと断言した（正確には断言“されられた”のだが、これに関して菊地には知らされていない）以上、彼が罪に問われることはなく、いつでも釈放が可能だというのに、滝岡がただ一度だけ告げたのは、自分を罪人にして欲しいという一言だった。

その彼と話がしたいと、菊地は頼んだ。

どうしても、本人の口から聞きたいことがある。

確かめたいことがある。

……訴えた菊地に、大樹家はすぐに動き出したのだ。

コンコン、と扉が叩かれる。

入ってきたのは若い男と、彼に伴われた滝岡修司。

「…本当に二人きりにして大丈夫ですか？」

男は、一番後ろに立っていた江藤汨羽に問い掛け、彼女が頷くと、  
渋々納得して見せた。

「十五分だけだよ、十五分」

男は念を押すように繰り返し、部屋を出て行く。

逆に江藤汨羽は、

「……ゆっくり話さない」と穏やかに笑んで去っていった。

恐らく、扉のすぐ向こうには、あの男の刑事が立っているのかもしれないが、それでも良かった。

「……」

修司と話す場が持てた　それだけで、充分だ。

窓際に立つ菊地は、扉のすぐ脇に佇んだまま顔を上げようともしない従兄を見る。

一年半前に見たときよりも、少し髪が伸びただろうか。

背も、少し高くなったかな。

……その“心”には、なにを思っているのだろうか。

「……あのエータって奴、かなり回復してきたってさ」

「……」

「修司、おまえもちゃんと刑事さんに事情を話して……早く出て来い」

「……」

「本当は、人を刺すのは悪いことだし、こんな言い方は間違っていると思うけど……あの男を刺したからって、俺はおまえを責めないよ」

「……」

「……」

何を言っても、滝岡は微動だにしない。

返事もない。

「……」

菊地は軽く息を吐き、仕方ないと、話し始めた。

「……俺がここに来たのは、修司にどうしても確かめたいことがあるからだ。三つだけ、質問させて欲しい」

「……」  
「一つ目は、あのフィルムのこと」

「……」  
「どうして俺のところへ送ってきた？ 六条中流に渡せ、なんてメッセージ付きで」

菊地の、ストレートな問い掛けに、だが本人は何も言わない。  
指先一つ、動かない。

「……二つ目。なんで、あの男を刺した？」

「……」  
「……三つ目。これは、無言もOKの返事だと取るから、そのつもりで聞けよ。先の二つの質問の答えを、俺が勝手に考えて、決めて勝手に倉橋尋人に話してもいいか？」

「……」  
このとき、初めて滝岡の顔が強張った。

倉橋尋人の名前に、微かだが反応を見せた。

だが結局は無言のまま。

菊地は、宣言どおり、それを彼の答えと取る。

「……俺、おまえが俺のところへフィルムを送ってきたのは、たぶん、そんなの受け取るのが俺しかいなかったからだろうと思ってる。まさか、俺のクラスに倉橋が転校してくるなんて思わなかっただろうし、何も知らない俺なら『たく修司の奴、なんでこんなに人使い荒いんだ！』とか文句言いながらも六条中流を探して渡しに行くって思ってたんだろ？ だって……倉橋が転校して来なかったら、俺はきっとそうしてたって、自分で思うから」

「……」  
「六条中流に渡せって言ったのは、……自分じゃ処分出来なかったからだ」

「……」  
「自分で処分するってことは、……自分がした悪いことを、なかったことにするみたいで出来なかった。……違うか？」

「……」  
「六条中流に渡したら、あの人はきつと修司を憎んだ。…そうすること、自分の罪をあの人にも覚えていて欲しかったんじゃないのか？」

「……」  
「まだ無言？」

苦笑交じりに問う菊地に、やはり滝岡は何も語らず。

仕方ないと、二つ目の質問の答えも話し始めた。

「あのエータって奴、刺した後…、修司、償い方なんか知らないって言ったよな」

「……」  
「あいつが、二度と倉橋の前に現れないように、……殺すつもりだった？」

「……」  
「無言は肯定と取るぞ」

言っても、やはり無言の滝岡に、菊地は息を吐いた。

「判った、そういうふうの説明するよ、皆には」

「……」  
「俺さ、…どうしても、おまえが救いようのない悪人だと思えないんだ。…倉橋が、修司に助けてもらったことがあるって言うの聞いて、ますます、そう思った。修司は、…本当はそんなに悪い奴じゃない、って」

「……」  
「開いていた手が拳を握り、…唇はきつく結ばれる。」

「…何か言いたいことがあるのは明らかなのに、それでも君は、何も語ろうとしないのか。」

「…例のフィルムは、六条中流が処分したよ」

「……」  
「…修司が帰ってくるの、待つてからな」

そうして、菊地は従兄の横を通り過ぎ、扉ノブに手を掛けた。

もつ話すことは何もない。

相手に話す気もないのなら、自分の用件は済んだのだ。

帰ろう、と扉を押し開けかけて。

しかし途中で手を止めた。

「……最後に一つだけ、言っておかなきゃならないこと、あった」

「……」

「俺、修司が倉橋を好きになった理由、何となく判る」

「……」

「やっぱり俺達、血い繋がってるよ。こういうところ、似てんのかもしれない……すごい複雑だし、…なんか納得もしたくないけど」

「……」

「倉橋、六条中流とヨリ戻したよ。毎日すげえ幸せなの、見てて丸判り。いい加減、腹立ってくるくらい」

「……」

「…倉橋は、ちゃんと笑ってるよ」

「………」

「じゃな」

言い終えて、一息ついてから扉を開けた。

もうここに来ることはないだろうと思いつつ、その部屋を遠ざかるうとした。

が、不意に声が聞こえる。

菊地への応えなのか。

それとも独り言なのか。

「…俺はクスだ」

「……」

「人のために出来ることなんか何もないし、…しようとも思わねえ。全部、自分のためにしたことだ」

「修司……」

「…アイツが誰とどうなるうが関係ない。俺には…関係ない」

「……」



「俺は、俺のしたいようにしただけだ」

「……そっか」

応える菊地の口元には、自身にも解らないけれど、笑みが浮かぶ。「うん…、わかった。……早く出て来いよ」

もう返事がないのは判っていて、それでも一言告げたくて。

思ったより遠く離れて自分達の話が終るのを待ってくれていた二人の刑事に頭を下げ、汨羽に改めて感謝の言葉を告げると、警察署を後にした。

外に出ると、肌寒くも優しい春の風。

菊地の心にも優しい風が吹く。

「さあて、引越しの準備でもするか！」

あの町から祖父母の家へ。

入学式まで、あと三日だ。

「で？」

「で！」

聞き返してくる野口に、尚也は力任せにリンゴの皮を剥きながらキツと空を見据えた。

「あの幸せボケした二重人格変態オヤジ系バカアホ野郎ときたら…  
っ」

「…幸せボケした二重人格系変態オヤジ…何だって？」

「二重人格変態系クソバカオヤジ！」

「…なんか変わってないか？」

「いんだよ、そこは問題じゃねえんだから！」

「あ、そう。…しかし、そのリンゴの皮むきは問題だと思っぞ？」

どっちが皮で実なんだか判りゃしねー。おまえの皮むきはリンゴと

の力比べかよ」

「人に剥かせといて文句か!? 食べたいなら自分でやればいいだろ!」

「だって俺、手、使えないし」

「カノジヨにやってもらえば!？」

「美弥、仕事じゃん。彬先生と同じなんだから」

「だったら食うな!」

「昨日、中流はそりゃ見事な包丁捌きでリンゴを剥いて行ったぞ」

「おまえの怪我は中流のせいなんだから、中流が剥くのは当然だ!」

心底苛立たしげに言い放つ尚也に、野口は笑いを噛み殺すのに苦勞する。

何だかんだと言いながら、結局、尚也の怒りの原因は、ようやくアフリカから帰って来た親友が、恋人最優先で自分を構ってくれないのが悔しいだけなのだから。

それにしてもいい天気だな、と病室の窓から空を眺めて、野口は笑む。

この、大樹総合病院外科病棟の一室で目を覚ましたのは二日前。視界が開けた途端に飛び込んできた両親の姿に驚いて。

すぐに恋人の松島美弥子の顔が見れた事に安堵し。

心配させたよな、悪い事をしてしまったな…と思っていたら、

「野口?」

控えめな声で呼ばれた。

「…野口さん…」

今にも泣きそうなのその声は、もしかしての、予想通りの人物だった。

咄嗟には信じられなかった。

けれど、ずっと、並んで歩いてくれることを願っていた二人の顔が揃っているのを見て、不覚にも涙がこぼれた。

…お帰り…

ようやくアフリカから戻ってきた中流への言葉か。

中流の隣に、ようやく立つてくれた尋人への言葉か。

二人が一緒にいるのを知って、全部が無事に終わったのだと、野口は勝手に解釈した。そしてそれは、あながち間違ってもいなかったのだ。

「しっかしさあ、尚也」

「ああ？」

「…」

何ともガラの悪い返事の仕方に苦笑しつつ、続ける。

「今からそんな不機嫌になつて、これから大丈夫なのか？」

「…どういう意味だよ」

「だってさ、もし本当にソレが実現しちゃったら、中流は当然、朝から晩まで恋人最優先。おまえは大学生で中流は社会人、生活時間だつて違つてくるし、ますます構ってもらえなくなるだろ」

「っ、構ってもらえなくなるって何だよ！」

「だって、今だつてそれで怒つてンじゃん」

「俺はそんなガキじゃない！！」

怒鳴る尚也に、いや全く以つて子供だろ…とツツコミを入れたい気分になる。

「尚也、ほんつと中流が好きだな」

「っ！好きって何だよ、俺は…！」

「ふうん、尚也は本当は六条が好きだったのか…」

「！」

「あ」

唐突に、何の前触れもなく割り込んできた三つ目の声に、二人は同時にドアを振り返った。

立っていたのは長身の男が二人と、大きな花束を抱えた女性が一  
人。

彬と、貴土と、松島美弥子の来訪に、まず野口の顔が緩んだ。

「尚也、そこどける。美弥、ここ座って」

「！ おまえも恋人優先か！？」

「当たり前じゃん、いまの俺は美弥の機嫌直すのに必死なんだ」

とんでもない無茶をし、散々、心配を掛けさせた野口に対し、松島美弥子は本気で怒った。

感情的に怒鳴り散らすということはなく、静かに、静かに、野口を圧迫するオーラは凄まじいものがあり、またその一方で、彼女が声を殺して泣いていたのも知っているから、野口は彼女への罪滅ぼしに、本当に必死だったのだ。

「ささ、座って座って。尚也、お茶」

「何だよ、その扱いは！！」

二人の遠慮のない言い合いに、大人たちはくすくすと楽しげに笑った。

「いいわ健吾。先にこのお花を生けてくるから、まだ本居君にゆっくりしてもらって」

「いやいや、ゆっくりなんかさせられないなあ」

「！ なっ…」

彬が言い、人前であることすら憚らずに尚也を背後から抱きすくめた。

「彬！ 何して…っ」

「何して、はこちらの台詞だな。何やら聞き捨てならない話を聞いた気がするが？」

「っ！ なんも悪い話なんかしてない！」

「ほう、尚也は浮気を良い事だと思っっているわけだ」

「う、浮気！？ ンだよそれ！ 中流の話をしてただけだろ！？」

「…まさかまさかと心配してはいたけれど、まさかそこまで六条を想っていたとはね…」

「だから何なんだよそれは！ おまえは俺がダチと遊ぶのもダメだっつか！」

「心の狭い男は嫌われるぞ」

「そつだそつだ!」

貴士の合いの手を、これ幸いとばかりに活用した尚也に、だが彬は今まで以上にぎゅっつと恋人を抱き締める。

「俺もたまには尚也の最優先になりたいんだけどね」

「! 俺がいつおまえを二の次にしたよ!」

たまには、の一言にムツとして勢い任せに言い放つ。

「

と、一瞬の沈黙。

そして笑顔。

「へー!」

「そーなの!」

「…そうか、俺は余計なことを言ったかな」

野口、美弥子、貴士がそれぞれに口元を緩めて呟く。

彼らが何にそんな反応をして見せるのか、まったく気付いていない尚也の背後。

恋人を抱き締める男は至福の表情だった。

「どっちもどっち、おまえだって中流のこと言えないだろ」

「だから何が!」

「…おまえ、天然だね」

「ンだと!」?

「そこが尚也の可愛いところさ」

「~~~~っ、なんかおまえらすぐえム力つくんだけど!」

言い合っ彼らに、美弥子は笑う。

貴士も声を立てて笑いながら、いま、この空間があることを心から嬉しく思う。

四日前、まだ意識の戻らない野口の見舞いに現れたのは、あの日、別々の道を歩み始めるしかなかった少年達。

…記憶、取り戻しました……

そう語った少年は、隣に立つ恋人の手を握り、…その温もりに守られているようだった。

ようやく祈りは届いた。

願いは叶った。

この二人は乗り越えられたのだと、あまりの嬉しさに、泣きたくなかった。

おめでとう。

お帰り、…どんな言葉も相応しいようで、相応しくないようで、言えなくて。

何故か口をついて出た言葉は「ありがとう」だった。

野口があのような状態で病院に運ばれてきて、何が起きているのか、どうなってしまうのか不安だった貴士には、現在、この喜び溢れる空間があるのは彼ら二人が幸せになってくれたからだと思っている。

人間の幸せは、人間を幸せにする。

だから人間は幸せにならなければならない。

「……そういえば、今日だったかな」

野口の体調を診ながら話しかけると、彼もまた嬉しそうに頷いた。

「あいつ、最後まで背広着ていくべきかどうか悩んでましたよ」

「まるでご両親に結婚の許可を貰いに行くみたいだな」

「実際、その心境じゃないんですか？」

「からかうように。」

「けれど嬉しそうに。」

「俺、中流のあの顔が見たかったんだ」

笑う野口に、貴士は頷く。

尚也も杉も、気持ちはきつと同じ。

あの、幸せな二人が見たかった。

「…やっぱり背広の方が良かったんじゃないか？」

「そんなことありません！ 普通でいいんですっ」

「けど、二人で幸せになるって約束しに行くんだぞ？ 言わば『結婚を前提にお付き合いさせて下さい』ってご両親に挨拶するも同然なのに、普段着ってのは…」

「け…っ！？ け、けこ…結婚て…！」

途端に真っ赤になつて狼狽する尋人を、可愛いと思う。

可愛くて。

愛しくて。

たった一人の特別な人。

この日、中流と尋人は、二人で電車を乗り継ぎながら倉橋家のある町を訪れた。

尋人にとっては四日振りの帰宅。

記憶を取り戻し、一応の決着がついた後も、野口の容態が心配だったり、滝岡修司の一件もあつたりなどして忙しい時間が続いた。

そのため、尋人もK市に留まつていたのだが、それ以上に、中流と過ごす時間を一分一秒でも延ばしたくて、自宅に帰ると言い出せずにはいたのだ。

四日前の両親への電話で、記憶を取り戻したことで、六条中流のこと、菊地のこと、滝岡のこと…一時間以上も受話器を握りながら今までの経緯を話し、少なくとも二、三日はK市を離れられないと、外泊の許可を求めた尋人に、

「ゆっくりしておいで」と言ってくれた両親。

だが、それも四日を越えてはさすがに申し訳ないと判断した中流が、一緒に家に帰ろうと切り出した。

それも、二人で過ごす未来のために。

「あ、あの、両親にはけっ、けっ、結婚、とか…っ、言わないで下さいね…！」

「…ダメか？」

「だ…だつて、そんな…だつて…」

「ああ、心配しなくて大丈夫だぞ、純白のウェディングドレス着せたりはしないから」

「！ それは心配してません！」

「冗談だよ」

「…っ」

あつさり言い返されて、尋人は中流を睨んだ。

「先輩…っ、どうしてそんなに意地悪なんですか…っ？」

「ん？」

クスクスと笑いながら、恥ずかしがりながら怒っている恋人の手を握る。

「先輩…っ」

「いろんな尋人の表情が見たいんだ」

「」

「一緒にいられなかった時間の分も、…尋人のいろんな顔、いろんな声、…いろんな尋人が知りたい」

「…っ」

「好きだから触れていたいし」

「先輩…」

「…好きだから、放したくない」

「」

不意に降りてきた唇が、尋人の唇に掠めるように触れて、去る。クスクス…と緩む口元。

尋人は頬の高まる熱を自覚した。

「…っ…誰かに見られたら…っ」

「いいよ、俺は幸せだ」



「…っ」

頬だけじゃなく、目頭も熱くなる。

たった一言で、なんでこんなに、…幸せな気持ちになるのだろう。どうして、こんなに好きな人を忘れていられたのだろう。

悔しい。

好きだったから忘れてしまったのだとしても、一緒にいられなかった取り戻せない時間が、何よりも悔しかった。

「…」

だから、これからは一緒に。

時間の許す限り、たった一度の日々を共有出来るように。

「高校の入学式は三日後か。…イキナリ引越すことにしたから、かなり慌しくなるな」

「…構わないです。自宅までそう遠いわけじゃないし、必要なものだけ持って行って、…足りないものは、週末に取りに戻ります」

「ご両親、本当に許してくれるかな」

「…たぶん。電話では、反対はしていませんでしたし、…先輩の家が一番安全だって、思ってくれています」

…一番“安全”ねえ…

それは少々責任が重いな…と胸中に呟きながらも、隣を歩く尋人を見て、その言葉は飲み込んだ。

三日後から高校生になる尋人の進学先を聞いたとき、中流は自分の耳を疑った。

何故ならそれは、自分の住む街からでもバスに乗って三十分は掛かる遠方の高校で、尋人の自宅からでは二時間近くの道程だ。

確か寮があったと思ひ出し、入寮するのかと尋ねれば答えは否。

どうしてそんな遠い場所に進学を決めたのかと尋ねると、その学校の教育システムに惹かれたからだと言う。

入寮は両親が認めない。

自宅から通うか、もしくは菊地の祖父母の家に厄介になるか…という話を聞いて、中流は、ならば自分の家に住めばいいと考えた。

そうすれば、菊地が暮らすようになる祖父母の家にも近いし、学校に通うのも楽だろう。

その上で尋人と中流、二人が一緒にいられる時間が増えるなら、当然、大歓迎だ。

尋人も、最初こそ戸惑っていたものの、今は中流と暮らすことを望み、両親との電話での話し合いを経て、この案は順調に実現に向かっていった。

二人、一緒に暮らす。

それは春から高校生と言う新生活を控えた尋人に、二重の期待と不安を抱かせた。

…そう。

期待ばかりではなく、不安も確かにあった。

何もかもが良い事ばかりではない。

今だって、尋人の心には傷が残る。

中流の傍にるのが自分でいいのかと怖くなる。

それでも、隣には中流がいる。

彼と一緒にいてくれることは、何があるかと信じられるから。

「一緒に暮らそうな」

そう言って、中流は笑う。

「いつか一緒にアフリカに行こう」

どうしても会わせたい人がいると、楽しみに笑う。

貴方を失くしていた時間。

君がいなかった時間。

たくさんの人に助けられた。

たくさんの人に守られた。

たくさんのお力を借りながら、ようやく重なった二人の時間。幸せにならなければ罰が当たる。

「尋人」

君の名を呼ぶたび。

たくさんの人の声が聴こえる。

「先輩」

君にそう呼ばれるたび、たくさんの人に想われている事を知る。

親父

兄貴

尚也

先生

野口

裕幸

時河

汨歌

佐伯さん

ありがとう

どんな言葉も足りないくらい感謝してる。

菊地

滝岡

…二人の関係を聞いたときには驚いたけれど、二人がいなければ現在がなかったのも事実。

複雑なものもあるけれど、…やっぱり、感謝するしかない。

おまえたちがいてくれて良かったよ。

おまえたちがくれた現在だから。

時は巡る。

風のように。

想いのように。

行き先未定の旅人を乗せ。

限らない明日を探しに行く。

例えばどんなに哀しい涙が毀れても、君が教えてくれるんだ。  
生きる喜び。  
生きる幸せ。

君とだから知れるもの。

「尋人」

「はい？」

「絶対、幸せにするから」

「」

「俺を好きになったこと、絶対に後悔なんかさせない」  
真っ直ぐに見つめて告げる。

今はまだ、これが精一杯の誓い。

「好きだぞ、尋人」

「…っ」

泣きそうな顔になって。

でも、微笑って。

「大好きです…」

そうして、抱き締め合える君とだから知れるもの。

T  
H  
E  
  
E  
N  
D

## 春

—

春、四月。

本州では桜の開花が宣言され、お花見シーズン真っ盛りという時期が来ていても、北の大地は、まだまだ雪景色。

一日の平均気温は上がっていたが、窓から見る外の風景は冬そのものだ。

かといって、北海道だけ暦が三月で止まってしまっはすもなく、あちらが四月なら、こちらも四月。

年度は変わり、卒業生が新入生、新社会人として新たな生活に臨むと時を同じくし、彼らの新しい生活も始まっていた。

倉橋尋人、十六歳。

同じ歳の子らより一年遅く、第一志望だった鳴恭高校への進学を決めた少年は、姿見の前で、着用した制服に不備がないかどうかを最終確認すると、机の上に用意してあった鞆を手に部屋を出た。

「あ……」

扉を開けると同時に鼻腔を擽るのは珈琲の独特の香り。

いつもと変わらないそれが、尋人の表情を緩ませる。

「先輩、もう起きてる」

腕時計で時刻を確認すると七時十分前。

今朝は一緒に朝食を取れそうだと、尋人の足は歩調を速めた。

と、階段踊り場に着くと同時、その横の扉が急に開く。

「っ」

慌てて立ち止まった尋人に、そこ　洗面所から出てきた女性も多少驚きつつ、しかし相手の顔を見てにっこりと微笑んだ。

その表情が尋人をドキリとさせる。

大好きな人に良く似た穏やかな笑顔。

六条風紗。

少年の一番大切に。

一番大好きな六条中流の、母親。

「お、おはようございます」

「おはよう尋人君」

真つ直ぐに伸びた髪を簡素に結わえた彼女は、服装もシンプルな部屋着で、いま起きたばかりなのだろう。

リビングから薫る珈琲の匂いに口元を綻ばせながら、

「そんなに急がなくても中流はいなくならないから、階段はゆっくり下りてらっしゃい」

「え、あ……はい……」

途端に真つ赤になり、俯きがちに應える少年に、六条母は楽しげだった。

尋人が六条家に居候するようになってから、今日で三日目。

まだ慣れるには早いと知りつつも、ちょっとした発言にも初々しい反応を見せてくれる尋人が、彼女には可愛くて仕方がない。

「昨夜はゆっくり眠れた？」

「はい」

「何か不便なことがあったら、遠慮なく言って頂戴ね」

「ありがとうございます」

尋人がペコリと頭を下げると、

「どういたしました」と彼女は笑う。

そうして二人揃ってリビングに姿を現すと、既に食卓についていた六条家の大黒柱、写真家の六条至流氏に「おはよう」と声を掛けられ、キッチンから珈琲カップを片手に持った六条家の長男、出流が、それに続く。

「おはよう尋人君」

「おはようございます」

元気に応えると、直後にキッチンの奥が騒がしくなる。

一際大きな物音が、何か重たい物を落としたときの衝撃に似てい

た。

「大丈夫かい？」

出流がカップを持ったままキッチンに戻ろうとすると、それを遮るように顔を出したのは、六条家の最後の一人。

「おう尋人、おはよ」

「おはようございます…あ、あの…いまスゴイ音が…」

「ああ、平気平気。空の鍋をひっくり返したただけだからさ」

陽気に返す彼に、家族は一様に呆れ顔。

「何をそんなに慌てるんだか」

「少し遅れたからって尋人君がいなくなるわけじゃなし」

「まあ、似たもの夫婦ってことね」

楽しいな笑いを含みながら言う母親に、尋人は真っ赤になり、父と兄は小さく吹き出す。

中流は一人、話に入れずにきよとんとしていたが、

「中流、私にも珈琲ちょうだい」

母親の催促に、首を傾げつつも動き出した。

「ああ。尋人はホットミルクだろ？」

「お願いします」

すぐに用意するから待っていると告げて、中流が再びキッチンに戻ると、一方で、食卓についた家族は揃って尋人の世話を焼きたがる。

「尋人君、今朝はパンにするかい？ 和食が良ければすぐに中流に作らせるけれど」

「いつ、いえ、パンがいいです」

「そう？ 一枚でいいかしら」

「あの、僕、自分で…」

「あら、私のも一緒に焼くんだから、遠慮しなくていいのよ」

「でも…」

「ジャムは何か好きだい？ 苺、ハスカップ、ママレードやリンゴもあるが」



次々に言われて、尋人が戸惑っていると、母親の珈琲、尋人のホットミルクを作り終えた中流が苦笑交じりにやって来る。

「母さん、珈琲。　　しっかし、何だって今朝は皆して尋人の世話を焼きたがるかな。尋人が困ってンだろ？　ほら」

暖かなミルクの入ったカップを手渡されたことと、中流の姿に、尋人はようやく笑むことが出来た。

「ありがとうございます」  
「どう致しまして」

そつと笑んで、中流も自分のカップを手に食卓につくと、それを待っていたように出流が口を切った。

「何で、と言われてもね。しばらく可愛い弟に会えない日が続くと思うと、今朝は構わずにいられないんだよ」

「え…、しばらく逢えない…ですか？」

驚く尋人の横で、中流は、いま思い出したような顔になる。

「そつか…、兄貴の撮影、今日からだって言っていたよな。　　つてことは、もしかして親父達の出発も今日か？」

「忘れていたのか？」

「行くのは覚えていたけど、今日からだっていうのは忘れてた」

「おまえらしいというか…、尋人君が来ることばかり気になって、私達の予定など頭の隅にも置いてなかったらう」

「まさにその通り」

「あんたって子は…」

呆れる両親と、失笑する兄を前に、中流は「悪い悪い」と苦笑いだ。

「帰ってくるのがいつだっけ？」

「まだ未定。撮影が順調であれば二週間くらいで戻れると思うが」

「私達の帰国も未定だ」

「それは知ってる」

一月の予定が半年になった前例を体験している中流は、最初から両親の帰国予定日など考えていないのだ。

「じゃあ、少なくとも二週間は尋人と二人ってことか」

「え……」

「そういうことだね」

「だからって悪いコトしちや駄目よ」

「解ってる」

「いい子にしていたらお土産いっぱい買って来るから、ね？ 尋人君」

「は、はいっ……」

何でもないことのように語り合う六条家の面々を前に、尋人の心中だけは穏やかではいられない。

六条家に居候して、三日。

わずか三日で中流と二人きりの夜が来る。

「……」

尋人の胸中の不安を知るのは、実は、ここにいない彼の友人一人だけだった。

## 二

鳴恭高校の入学式が六日に行われ、尋人が六条家で暮らすようになったのも六日から。

めまぐるしいほど慌しく過ぎ去った日々の中で、ほとんど勢いで決めてしまった居候の件は、しかし両家の親公認のもと、問題なく準備が進められ、今日に至っている。

中流の両親、兄が、仕事の関係上、家を留守にしがちなことは聞いていたし、この三日間、尋人が少しでも早く六条家に慣れてくれるようにと考え、家族が揃っていたことも、中流に聞いて知っていた。

彼らが尋人を歓迎しているのは、彼らの言動の端々から感じられ、それだけで、どれほど感謝しても足りないと思う。

何より、離れ離れだった中流と尋人の時間を埋めようと、当人達と同じ思いでいてくれることが嬉しかった

だが。

「なんで、そんな困るワケ？ 居候って言うより半同棲だったのは、一緒に暮らすようになる前から解ってたんだろ？」

鳴恭高校一年一組の教室で、菊地は呆れた顔つきで言う。

「親いなくなつてラッキー、くらい思つてもいいと思つぜ、俺は」

「そんな…、そんな風には、思えないよ」

机に突つ伏して応える尋人に、菊地は眉間に皺を寄せながら、短く息を吐いた。

「ったく…、ほんと、なんでそんなに悩んでばかりなのかね、倉橋は」

「…」

菊地の、決して優しいとは言えない口調での問い掛けに、尋人は返せる答えが見つからなかった。

一緒に登校するため、待ち合わせていた駅構内で顔を合わせるなり、尋人の様子が妙な事に気付いた菊地は、すぐに、その理由を話せと迫った。

電車の中では他人の耳があるからと、教室に入るまで返答を焦らした尋人だったが、そうして聞かされた理由が、

「今夜から先輩と家に二人きりで…」では、尋人と先輩こと六条中流の関係を知っている菊地にしてみれば、惚気以外の何物でもなかった。

まだ入学したてで、席が出席番号順になっている教室で、幸いにも同じクラスの前後席になった菊地と倉橋。

それも廊下側一番後ろの席という好位置で、尋人の口も幾らか滑らかに言葉を紡いだが、それでも、なぜ困るのかという質問には明確な答えを出せないようだった。

机に突っ伏したまま黙り込んでいる尋人に、菊地は再度、嘆息し、言葉を選びながら口を開く。

「…倉橋と六条中流は、ちゃんとした恋人同士で、どっちの両親もそれを了解していて一緒に暮らすの許可したんだろ？ 俺には何の問題もないように見えるけどな」

「…」  
「…」  
「……ってか、倉橋が榊学園にいた頃にも付き合ってた期間があつて、なのに未だにキス止まりだつてことの方が、俺には不思議でならんけど」

「…っ」  
肩を弾ませて上げた顔　その困り果てた尋人の表情に、菊地は大きく溜息をついた。

ふとしたきっかけで、尋人と中流の二人がキスまでしか進んでいない関係だと知った時の衝撃を思い出すと苦いものが胸中に広がる。単純に驚いたのもあった。

だがその一方で、何故かホツとしたような、…嬉しいような、そんな気持ちが生じたのも事実で、菊地としては、それを思い出してしまう、こういった内容の話は、出来ればしたくないのだ。

しかし尋人が困っているのを見れば、無視も出来ない。  
自分で自分を追い込むのを自覚しながら、今日も尋人の専属カウンセラーである。

「前にも言っただけさ、六条中流は、本当におまえの事が大事なんだつて。だから、おまえが嫌がることは絶対にしない」

「……普通の男なら我慢できないって、菊池君が以前に言ったのに…」

「…それは、…それだ」  
「…」

しまった、という顔をする菊地に、尋人の顔は複雑に歪む。  
そんな親友に、こんなんじゃないダメだと、尋人は自分を叱咤した。  
いつからか相談役になつてしまった彼にも、随分と迷惑を掛けて

いることを申し訳なく思う。

自分が覚悟を決めてしまえば何の問題もなくなるのに、…怖がつて、過去に囚われてばかりいるから周りに迷惑を掛ける。

家族が同じ屋内にいたと思えば、それを案じることも、悩むこともなかったけれど、それは中流の家族を逃げ場所に行っているのと同じ事。

そんなのは、中流にも、彼の家族に対しても失礼だ。

「…いつまでも逃げていたらダメだよな」

「逃げるとか、そういう問題でもない気がするけど」

「…」

明らかに落ち込んでいる尋人の頭の上で、菊地は右手を弾ませた。

「あんまり悩むと禿るぞ」

「…うん」

冗談か、本気か。

沈んだ表情のまま、無理に笑顔を作る尋人が、菊池には非常に痛々しく感じられた。

この春から勤務している如月出版の、本社ビル六階、総合事務課の一角で書類の整理をしている六条中流だったが、その脳内には、もはや今夜のことしかなかった。

もちろん、この三日間、尋人のことを考えて家族全員が揃っていたのは解っているのだが、ようやく恋人として自分の隣に帰ってきてくれた尋人と、人目を憚らずに、もっと傍にいたいのは隠し切れない欲求だった。

（今日の夕飯はどうするか…、尋人、意外に和食派だからな）

魚か、肉か。

そんなことを考えるだけで顔が緩む。

この三日間は、下手に近付くと抱き締めたい衝動に駆られるのは

必至で、恥ずかしがりやの尋人のことを思うと、一緒にキッチンに立つなど考えることも出来なかったが、今日からは違う。

後に帰れば、尋人が出迎えられる。

先に着いたなら、食事の支度をしながら尋人の帰りを待とう。

二人きりの家で。

それは正しく。

「新婚だな……」

思わず声に出してしまった中流の表情は、もし両親が見たなら「あんたつて子は……」と泣きたくなるだろう、だらしなさ。

これが兄・出流ならば、

「本当におまえは素直で可愛い弟だよ」と、いつもの笑顔で、一瞬にして中流の浮かれようを抑え込んだかもしれない。

だが、その誰もがここにはおらず、中流のその顔を見たのは、数人の同僚のみ。

中でも、話しかけてくる怖いもの知らずは一人しかいなかった。

「おまえ、大丈夫か？」

「え……、ああ、お疲れ様です」

「お疲れ……」

夢の世界から自分を引き戻した相手を仕事の先輩だと認識した中流は、何事もなかったように挨拶する。

「大丈夫かって、何かあったんですか？」

「何かあったのは、おまえの頭だと思うけど」

「はい？」

「……おまえ、かなり怖かったよ」

「？」

よく解らずに、だが「怖かった」という表現を「不機嫌に見えた」と解釈した中流は、

「そんなことないですよ」と、相手にしてみれば、かなりズレた返答をする。

「いま、すつげえ幸せなんですから、機嫌悪くなったりするわけな

「いじゃないですか」

「ふう…ん、幸せね。今夜は彼女とデートか？」

「そんなところです」

「いいねえ」

相変わらず、緩みつぱなしの顔の中流に、先輩社員は失笑だ。

「ま、避妊だけはちゃんとしておけよ、おまえ、まだ若いんだから」

「あ、と思った。」

先輩社員の、その台詞はそうだけれど。

それよりも。

「そんな、ことよりも。」

三

「…」

陽は沈み、辺りがだんだんと薄暗くなる頃になって六条家に帰宅した尋人は、だが家屋の前で立ち止まり、深呼吸を繰り返した。

「よしっ」

意を決し、玄関の扉に手を掛けた。

鍵が開いている。

もう、中流が帰ってきているのだ。

「早い…」

ポツリと呟き、靴を脱ぐ前に「ただいま」と声を上げた。

最初は抵抗のあったその言葉も、中流と、彼の家族のおかげで、今は自然と出るようになった。

行って来ます、行ってらっしゃい。

ただいま、お帰りなさい。

それは家族の絆を深める言葉。

「おお、お帰り」

「あ……」

てつきり居間か自分の部屋に居ると思っていた中流が、朝に彼の母親と衝突しそうになった場所　洗面所から出てきて、少なからず驚く。

「た、ただいま、帰りました……」

「おう。お帰り」

まさか、ここで顔を合わせるとは思わなかったせいで、緊張した面持ちになる尋人。

中流もそんな少年の心情を察してか、くすりと笑んで、もう一度、その言葉を返した。

「結構、遅かったな。もう部活動が始まってるのか？」

「いえ……今日は見学だけ。菊池君といろんな部活を見てまわっていたので」

「へえ。面白そうなのあったか？　　っていうか、どの部活に入るか決めてるのか？」

「まだはつきりとは……あ、重いですよ」

答えながら、洗面所から出てきた中流が抱えているものによつやく気がつく。

彼は、大量の洗い終えた洗濯物を持っていたのだ。

「ああ、重くはないんだ。母さんもやつぱり主婦だよな、旅行行く前に一通りの仕事はやっていってくれたみたいでさ」

「それ、畳むんですよね？　手伝います」

「サンキュ。じゃあ、まず着替えてこいよ。リビングで待ってるから」

「はい」

元気良く返事をして階段を駆け上がって行く尋人を見送り、中流は息を吐く。

家に帰る前に、それに気付いて良かった。

先輩社員の一言がきっかけで思い出した。

中流自身は、単純に二人きりになれることを喜んでいただけで、



尋人がそれだけで済むはずのないことを。

きつと、必要以上の不安を抱えているだろうことを。

「ふー」

とりあえず出迎えは成功かな、と彼が安堵して笑んでいることに、少年は気付かない。

（良かった…先輩と普通に喋れる）

そうして部屋に戻り、制服から私服に着替える尋人も、胸中に咳く。

既にここは、二人きりの空間。

どんなに緊張してしまおうかと思っただけで、普通に話せた。

中流の顔が見られる。

「大丈夫…」

姿見の中の自分に言い聞かせるように呟くと、早速、リビングに向かう。

時間は五時半過ぎ。

夕食の準備もしなければならない。

「先輩…」

リビングの扉を開けながら声を掛けた尋人を、先に洗濯物を畳み始めていた中流は笑顔で迎える。

今日から留守にする両親と兄。

彼らのシーツ等の寝具も洗濯し、乾燥機にいれていっていたらしく、中流はそういった大物を片付けていた。

「すごい、いっぱいありますね」

「多く見えるのは、シーツとか大きいものが多いからだよ。そっちの小物、頼んでもいいか？」

「はいっ」

「母さん、乾燥機と、ボイラー室で洗濯物を乾かしてた。今日一日で何回、洗濯機を回したんだか」

そう言って苦笑する中流の表情に、何故かドキリとする。

もう見慣れてもいい姿なのに。

家の中に二人きりのせいだろうか。

中流が、ひどく大人に見える。

「さて…、俺は風呂掃除してくるから、あと五分くらい経ったら炊飯器のスイッチ入れておいてくれ」

「はい、…でもお風呂掃除も僕が…」

「いま帰ってきたばかりなんだから、少し休めよ。何でも気を遣って自分がやるうとしていたら保たないぞ」

「はい…」

「けど、夕飯は一緒に作ろうな」

「！ はい！」

沈みかけた尋人の表情が、一緒に作ろうという一言で輝くのを見て、中流も笑った。

尋人のそういう表情が好きだと思う。

尋人が笑っていてくれることが、中流にとって何よりも大切なこと。

「飯と風呂と、どっちが先だ？ 俺は寝る前に入る方だけど」

「尋人の家も薄味なんだな、同じで嬉しい。けど外食の時って困るだろう、料理屋の味って大衆向きだから濃い目だもんな」

「この時間はどんなテレビ見てる？ 俺？ 俺はあんまりテレビ観ないんだ。親や兄貴がいれば別だけど、この家に一人になる時は、大概、裕幸の家で世話になってたりするし…そうだなあ…この家に一人になるつつつたら試験前とかくらいかな…」

話をする。

リビングのソファに並んで座って、テレビは一応、尋人が毎週観ているクイズ番組に合わせたけれど、二人、いろいろな話をする。

「部活は、最初は図書館に入るつもりだったんです。榊学園でもそうだったから…、でもいろんな部活を見て回っていたら、その…写真部もあって…、僕も少しでも知識を持てたら先輩の気持ちを共有出来るかな、って」

「菊池君は陸上部に入るって言ってました。中学の時もそうだったんですよ、全道入賞したくらい早いんです」

「そう、学校の先輩にすごく面白い人がいて…」

たくさん言葉を交わす。

離れていた時間に、変わってしまったこと、変わらなかったこと。これからの時間のこと。

どんな些細なことも逃さずに、聞く。

君の言葉。

君の声。

ここにいる、自分一人のために語られる言葉を。

そうして時間が経つ。

気が付けば、テレビの放送番組はドラマ番組に変わっていて、中流は壁に掛かっている時計で時間を確認した。

十時三十分。

まだ、寝るには早い時間帯だけれど。

「これ、何のドラマですか？」

「さあ…俺、あんまりドラマって見ないから…」

答え、しばらくの間、二人はテレビドラマのストーリーを追っていた。

時期的に、連続ドラマが始まるには早いだろっから、単発の二時

間ドラマだろう。

だとすると放送開始は九時が基本だろうから、あと三十分もしないで完結するということだ。

「あ……」

ふと、役者の台詞が、中流の記憶に触れた。

今のは一時期流行した物語の、確か本の帯にも載った名台詞だ。

「これ、雪村佐奈果の『家路』だ」

「家路？」

「簡単に言えば、主人公が自分の帰る家を見つける話さ。結構悲惨な境遇で育ってきた主人公は他人を信じることが出来ないんだけど、一人の男と出会って、自分の居場所を見つけるとって……」

そう、そして最後に主人公は男と結ばれ、ハッピーエンドになるのだが。

「……」

中流の脳は、その内容を正しく記憶していた。

そして番組も、その内容を忠実に映像化させていた。

「……」

あんまり面白くないから番組変えるか、と。

中流がその台詞を思いつくまでに時間が掛かりすぎた。

いま正にクライマックス、テレビ画面は、主人公と男が結ばれる濃厚なラブシーンを映し出していた。

「……！」

カアツ……と瞬時に赤くなる尋人の顔。

中流が、尋人を怯えさせないよう彼なりに考えて作り出していたその場の雰囲気、一瞬で崩れる。

尋人の中から引いていた緊張が、高波の如く一気に押し寄せてきた。

「……っ」

「尋人……」

「あ、あの……僕、そろそろ……っ」

休みますと、立ち上がった尋人だったが、動揺と緊張が足を震わせていた。

「尋人っ」

立ち上がるなり、よろけた少年を、中流がすかさず抱きとめようと腕を伸ばした。

だが身体に触れると同時。

「やっ……！」

「」

腕を拒まれ、逃げられる。

「あ……っ……」

逃げた尋人が、青ざめた顔になる。

「」

「あの……先輩……っ」

「……早く休め」

「……っ」

一言を残して、中流はその場を立ち去った。

それ切り振り返ることもなく。

「先輩……っ」

取り返しのつかないことをしてしまった、と後悔しても、もう遅い。

尋人は、中流を呼び止めることは出来なかった。

#### 四

「参ったなあ……」

尋人がその手のことに怯えているのは判っていた。

過去のこともある。

尋人が、未だ、中流の隣にいるのが自分でいいのかと不安に思っていることも知っていた。

だから、中流は何度も伝えてきた。

尋人が好きだ、と。

傍にいて、微笑っていてくれるなら、それだけで自分も幸せなのだから、と。

「……」

その言葉にも、気持ちにも、偽りはないけれど、あのように拒まれるのは、さすがに傷つく。

「……俺、そんなに怖いかあ……？」

湯船に浸かりながら呟いて、中流は泣きたい気分だった。

この家で、中流と一緒に暮らす事になった日から、この部屋が尋人の部屋になった。

中流の部屋の、すぐ隣。

もともとは客室で、ベッドだけしかなかったその部屋に、尋人が暮らすと決まってから、中流の両親は大喜びで家具一式を買い揃えてくれたのだという。

「大事なお嫁さんだもの」と中流の母親は笑顔で言う。

「尋人君も、私達を家族だと思ってくれると嬉しいね」と中流の父親は微笑んでくれた。

彼らが、本当に。

心から。

歓迎してくれていると解るから、尋人は尚更怖くなるのだ。

本当に自分でいいのだろうか。

自分が中流の隣にいていいのだろうか。

幸せを自覚すれがするほど怖くなる。

いつまで、これが続くのかと。

何故なら、幸せはいつか途切れることを、尋人は知ってしまったているから。

「っ……」

階段を上がってくる足音が聞こえる。

風呂から上がった中流が、休む為に自室に入る。

「……」

静かに、まるで眠っている尋人を起こさないよう気遣うように、微かな物音しか立てず閉じられた、彼の部屋の扉。

いま、この壁の向こうに、中流がいる。

「先輩……」

怒っているだろうか。…決まっている、怒らせたのは自分だ。

あんなふうに、中流の腕を拒んだ。

逃げてしまった。

…嫌われないわけがない。

「先輩……っ……先輩……うっ」

二人を遮る壁に手を添え、呼ぶ唇に、涙が落ちる。

「先輩……ごめんなさい……、ごめんなさい……嫌われないで下さい……っ

…嫌わ……な……で……」

声が詰まる。

声の代わりに、涙が毀れる。

次から次へと、呼吸すら乱して。

ごめんなさい。

嫌わないで。

同じ言葉ばかりが、壊れた機械の如く繰り返す。

まるで、それしか言葉を知らないように。

「ごめんなさい……先輩……嫌われないで……先輩……っ……」

どれだけ繰り返し返せば、彼の心に、伝わるのか。

「……バカだな」

「……」

不意に、背後から彼の声。

驚き、振り返ると、開いた扉隣に佇む中流の姿。

「っ……せ、先輩………?」

「ああ、俺だよ」

「…うっ…」

「俺しかないだろ…」

「先輩…っ」

どうしてここにいるのか。

いつの間に、この部屋にいたのか。

解らないことだらけでも、中流が、もう怒っていないことだけは解った。

「先輩…っ…」

嬉しいのか、それとも情けない自分が腹立たしいのか、表情を歪めて立ち上がることも出来ない尋人に、中流は苦笑して近付き、柔らかな髪に触れる。

「ほんと、バカだ…、っつかズルイよ、壁越しに泣くなんてさ」

「え…」

「そんな厚い壁じゃないんだから、聞こえないはずないだろ」

「…っ」

その指摘に、尋人は顔を真っ赤にした。

「あつ、え…あの、僕、そんなつもりじゃ…」

狼狽し、しどろもどろになる尋人に、中流は「冗談だよ」と笑った。

「たまたま聞こえただけだ。」

尋人が意図的にそれをするなんて、誰も思わない。

「…怒つて、ないんですか…?」

「ないよ。…まあ、尋人に信用されてないのには傷ついたけど」

「っ、僕…」

「ごめん、違うな。ちゃんと話そうとしなかった俺が悪い」

「先輩…?」

涙で濡れた瞳を丸くして見上げてくる尋人に、中流は微苦笑した。深呼吸を一つして、尋人を優しく抱き締めた。

「…あのさ、別に疚しい気持ちがあるわけじゃなくて、純粹に、質



問として聞きたい」

「…何ですか？」

「尋人、俺とエッチしたい？」

「っ！ えっ…」

「ああ、だから質問として、正直に答えてくれればいい」

「…あの…」

「俺としたい？」

耳まで真っ赤になって困った顔をする尋人を、しかし中流は、真面目な顔を見つめた。

正直に答えればいいと、中流は言う。

その意図は尋人には解らなかったけれど、いま、素直な気持ちを伝えなければならぬことは解る。

「…」

しかし中流の顔を見つめて告げるのは心苦しくて、尋人は視線を逸らし、彼に背中を預ける格好で口を開いた。

「…先輩のことは好きです。大好きで…本当に、大好きです…」

「ん」

「…けど…」

言い辛い言葉を、だが中流は静かに待った。

尋人自身がそれを言葉に出来るまで。

「けど…それは、怖いです…まだ、怖くて…」

「うん」

中流は応え、尋人を抱き締める腕に力を込めた。

「俺も、まだ尋人としていたいとは思わない」

「え…？」

「だからって好きじゃないとか、そんな誤解するなよ。そうじゃないかな…、まだ“その時”じゃないんだ」

「“その時”…」

「そういうのって、タイミングじゃないか。例えば出逢いにしても、タイミングが合う、合わないで、友達になったり、通りすがりの他

人になつたりすると思う。タイミングが合つて親しくなることを、縁があるって言うと思うんだ、俺は」

「…」  
中流の言葉を、尋人は、一つ一つ理解しようとして心の中で反芻した。「タイミングが良く合うかどうかで、相性が好いって言ったり、悪いって言ったりさ。…好き合つていても、タイミングが合わなければ恋人同士にはなれないし」

「長く続かなかつたりする」

「先輩…」

驚いたように見上げてくる尋人に、中流は微笑う。

「俺は、…尋人が好きだから、こうして二人きりでいたら、そういう気にもなるけど、まだダメだつて思う。解るんだ、いまはまだ“その時”じゃないつて」

「…」

「いま、尋人に聞いて、尋人が怖がつっていると解つた。…俺の…この場合、本能つて言うのかな…それが正しかったと解つた。いつ“その時”だと思つかは、まだ判らないけど、少なくとも今現在の俺達は合つてゐることだろ？」

「先輩…」

「俺達、相性好いぞ、絶対」

「…」

屈託なく笑う中流に、尋人は泣きたくなる。

否、涙は勝手に溢れ出た。

「先輩…優し過ぎます…」

「尋人に嫌われたくないだけだ」

「…」

しがみついてくる尋人を、しっかりと抱き締め囁く。

「…信用してくれたならさ、一緒に寝てもいいか」

コクコクと尋人は何度も頷く。

家に二人きり。

壁一枚挟んで隣の部屋。

わざとらしく別々の部屋で眠るなんて、それこそ、気になって眠れない。

「好きだよ」

「大好きです…っ」

想いをぶつけて、笑顔を見合わせて。

キスをする。

ありつたけの想いで包み込む。

出逢いの春。

始まりの春。

春にもいろいろあるけれど、彼らの春は、新たな幸せへの出発地点。

相も変わらずな二人だけけれど。

これからも、どうぞ宜しくお願い致します ……。

## 余話

「裕幸！ 俺は本当につ、心からっ、本っ気で感謝する！ 今ほど変な血い引いていて良かったと思っただ事はない！」

「変な血、って…」

「だってそうだろ、これがなかったら人間の性欲を封じるなんてこと出来ないだろっ、出来なかつたら俺は確実に尋人に嫌われた！」

中流の真剣な演説に、裕幸は苦笑い、汨歌は呆れて溜息だ。

昨日、先輩社員に言われた一言がきっかけで、その危険性に気付いた中流は、仕事を終えてすぐに大樹家を訪れた。

尋人を怖がらせたくない、傷つけたくない。

けれど、自分もまだ大人ではないから、力を貸してくれと頭を下げた中流に、裕幸は、すぐにある種の呪いを施した。

それは尋人の気持ちに連動した封じの術。

そして、それが早速役に立ったことを、中流は先のように報告しに来たのだった。

たまたまここを訪れていた汨歌も加わって、春先の大樹家は非常に賑やかだ。

「これだから男って…理性で抑えなさいよ、それくらい」

「アホかつ、健全な男が好きで奴と二人きりになって何もせずにいられると思うか!? しかもそれが二週間も続くんだぞつ、それだけの理性があつたら俺は仏様だ!」

「アンタのその威張り方が一番ヘン!!」

言い合い、唸りながら睨みあう中流と汨歌に、裕幸は苦笑いの表情で口を開いた。

「中流さんのその封印は、尋人君の気持ちしが固まったら自然と解けますから、それまでは純粋な恋愛を楽しんでくださいね」

「サンキュ」

「サンキュ、じゃないでしょ? ほんつとに、何がタイミングよ。

思いつ切り尋人君に嘘ついてるくせに」

「タイミングの話は嘘じゃなく俺の持論だつ、尋人がまだその気になれないのも解ってた、だから裕幸に頼みに来たんだろ!?!」

「だったら性欲も自力で抑え込みなさいって言ってるの!」

「出来るわけねえだろ、こっちはとつくに暴走寸前なんだから!」

「つ」

「…中流、それは自信満々に言う台詞じゃないだろう」

「あ…」

いまりビングに姿を現した大樹家長男・裕明の冷静な突っ込みに、我に返った中流は、しまったと思う。

ぐるりと見渡せば、裕幸は頭を抱え、泪歌は絶句し、しかも二人とも耳まで真っ赤である。

「わ、悪い……」

「いえ……」

「まあ、中流が必死で大切な子の心を守ろうとしているのは伝わったけれどね」

「ははは……」

今更、恥ずかしくなってきた中流は、腰を落とし、裕幸が淹れてくれた珈琲に口をつけた。

ようやく落ち着く気になったらしい彼に、裕明がクスツツと笑いながら、言葉を続けた。

「ところで、いつ尋人君に俺達の血の話をするかは、決めているのかい？」

「え……、ああ……話す気ではいるけど……これもタイミングかな、と思つて」

「……時期を見過ぎてばかりいる男も情けないわよ」

「解つてるっ。……けど、やっぱり、こういふ話をするにも“今だ”と思つ時があると思つし」

「そうですね」

「そのタイミングを見計らう才は、一族の中でも中流がずば抜けているのは事実だ」

「……ありがとう」

褒めてくれた事に礼を言い、そして、どこかいたずらっ子の笑顔になる。

「けど、尋人は絶対に驚くよなあ」

「驚くだろうね」

「そりゃそうよ。宇宙人一家なんて普通じゃないだし、何より、尋人君が望めば中流との子供が出来るなんて、地球の男同士の関係じ

「や考えられないんだから」

子供が出来る それは地球の女性がそうであるように胎内に命を育むのとは異なり、彼らの体内に流れる血の源 里界特有の方法になるが、それでも、二人の間に子供を誕生させることは可能なのだ。

裕幸だけが知っていたその術は、ある夜、六条至流氏が酒に酔って大樹家の家長にこぼした一言をきっかけに、親族皆の知るところとなった。

出流はああだし、孫を抱き締めるのは夢のまた夢になってしまったと、ほぼ諦めていた六条の両親は、これを聞いて生き返った。

結果、中流が誰より大切だと、憚らず言い切る尋人を心から歓迎出来たのも、また事実。

「まあ…やっぱり親には心配掛けてたんだなと思うと…申し訳なかったな」

ポツリと零した時の中流の表情を、裕幸は忘れない。  
だからこそ、是が非でも、中流と尋人には幸せになってもらいたい。

「俺は、いつ“その時”が来ても構いませんから、どうか、尋人君を大切にして下さい」

「もちろん」

そうして、心から笑ってくれる中流が、裕幸の救いになる。

どんな術もその手にある。

“白夜”と言う名の、里界の月、癒しの守護者 その魂を継いだ者が可能にする奇跡には、それ相応の代償があることを、誰一人、気付かずにおいてと、裕幸は願う。

知らなくていい。

ただ、笑っていて。

その笑顔が救いになる。

その笑顔だけが、限りある自由を生きる裕幸の、たった一つの願  
いだから。

了

**貴方の翼が堕ちても 序（前書き）**

今回の話は恋愛面よりもファンタジー面重視になっています。



## 貴方の翼が堕ちても 序

こんな人生の、何を惜しむことがあるだろうか。

こんな命の、何を。

心の傷は目に見えないと言っけれど、俺の傷は、広がり過ぎて、もう見えない。

夜の闇すら覆うような森の木々。

人影どころか虫の声すら聞こえない道なき道を、塩木衛しおき まもるはふらつきながら進んでいた。

一步を踏み出すたび、体重を乗せた足が土に沈む。

目の前が揺れ、喉奥から臓物が押し上げられてくるようだ。

生温い風が身体に絡み付き、己の呼吸音だけが異常なほど響いて聞こえた。

「…も…お…なに…も…惜…し…ない…」

掠れた声を漏らす唇は蒼紫色に変色しており、よく見れば顔全体に、そして衣服で隠れた細身の身体全体に、無数の青痣が広がっているのだ。

痣ばかりではない。

目の下から顎にかけて、くつきりと浮かび上がる筋は涙の跡。

サイズの合わない上着の袖下に力なく伸びた手首、足首には、紐状のもので縛られていた跡が残り、足首にはどこからともなく伝い落ちてきた血液が流れ、地面を覆う草木に点々とその存在を残してきていた。

「…っ…」

普通であれば十分も掛からずに抜けられる森を、その何倍もの時間掛けて抜けた。

同時、眼前に広がるのは闇夜の海。

少年は砂浜に足を踏み出したが、今までと一変した足元の感触に

ふらつき、倒れた。

自分の呼吸音しかなかった世界に、波の音が襲い掛かる。

「……………っ……！」

立ち上がった。

息絶える間際の虫のように手足をもたつかせて、それでも何とか立ち上がった衛は、よろけながらも砂浜を渡る。

海に手を伸ばして。

足が飛沫を上げ、服が濡れ、水圧に行く手を阻まれても、海に向かって手を伸ばし、進み続けた。

「……っは……………っ……あ……う……ふ……」

もう、何も惜しいものなどないのだ。

己の命すら。

「うっ……ぶあ……っ……………は……」

息が苦しい　当然だ、それを自分が選んだ。

歩き辛い　当たり前だ、ここは人間が歩く場所じゃない。

だったら、ここを歩く自分は、なに。

「っう……ぶあ……………っ……………！！……」

爪先で立つても、波は頭を越えていく。

開いた口に塩水が流し込まれ、次第に歩いては先へ進めなくなってくる。

それでも延ばした爪先が、唐突に攣った。

足指、足首、ふくらはぎまでを襲った強烈な痛みが全身を駆け抜け、彼の動きを縛り付ける。

「……………っ……」

寄せる波が彼を覆う。

彼の最後の気泡すら、白波が飲み込んだ。

地面を離れ、掴むものなくなった海で彼は漂う。

……………っ……

海面に映り揺らぐ月が、彼がこの世で見た最後の光り。

そして、海の上。

獣の舌なめずりが、彼がこの世で聞いた最後の音だった

……。

貴方の翼が堕ちても 一

朝六時。

倉橋尋人は、首から提げていた携帯電話のバイブレーションで目を覚ました。

胸元に来る振動に、違和感というか、驚きに似たものはあり、爽快というのには程遠い目覚めではあったものの、枕元にセットされた目覚まし時計より一時間も早く起きたことが嬉しかった。

（よおっし！）…と小さくガッツポーズを作った尋人は、次いで、自分のすぐ隣に視線を移した。

そこに、まだ静かな寝息を立てている六条中流を確かめて、ますます嬉しくなる。

夏休みに入って一週間。

ようやく中流より先に起きることが出来た。

（良かった…、今日こそ僕が先輩の朝ごはんを作れるんだ）

この一週間、目覚まし時計は変わらず七時に鳴っているのに、中流は必ずその三十分前に起きて、朝食の準備を済ませてしまう。

そうして目覚まし時計が鳴る、ほんの数秒前に部屋に帰ってくると、珈琲の匂いを纏いながら尋人に朝の挨拶をしてくるのである。

朝、目覚めてすぐに大好きな人の顔が見られるのは、この上ない幸せだと思う。

だが、してもらえばかりではダメなのだ。

隣で眠る恋人の、無防備な寝顔に顔を緩めながら、尋人は静かに動き出す。

（そお…っと…そお…っと…）

自分に言い聞かせるように胸中で繰り返しながら、中流を起こさないよう気遣ってベッドを抜け出し、抜き足差し足で部屋を出た。

扉の開閉にも最大限の気を遣い、中から中流が起きた気配がないのを確かめると、気持ち足早に階段を下りていく。

この六条家に住み始めて早四ヶ月。

キッチンで朝食の準備をするくらいはお手の物。

場合によっては、六条家の主婦でありながら留守にしがちな中流の母親よりも、この家の中身に詳しい程だ。

だが、やはり中流には敵わない。

尋人のいなくなったベッドの中。

声を殺して笑っている彼が、尋人を起こした振動によって同じく起きてしまっていた事を全く気付かせなかったのだから。

「先輩、おはようございます」

淹れたたの珈琲の香りを纏った尋人が、中流を起こすべく寝室に戻ってきたのは、昨日まで彼が起きていた六時半より少し前。

尋人が戻ってくるのをベッドで横になったまま待っていた中流は、扉の向こうに相手の気配が近付いてきたのを察して寝たフリをする。

「先輩、朝ですよ」

いつもとは逆に自分が中流を起こす側にいるのがよほど嬉しいのか、尋人の声は弾んでいた。

そんな彼があまりに可愛くて、つい顔が緩んでしまいそうだったが、必死に寝顔を作った。

「先輩」

まだ起きない中流の傍まで寄ると、両手で中流の腕を掴んで揺する。

さすがにここまでされれば起きて不思議はないだろう。

昨日までの尋人を思い出しながら“起きたばかり”を装って目を開けた。

「…おお…おはよ…。今朝は早いな…」

「はい！ 今朝は僕がご飯を作りました」

「 珈琲も入ってる」

「もちろん。先輩の好きなブルマンですよ、水も粉の量も…たぶん先輩の好み通りになってます」

「うん、匂いで判る」

返して、尋人の顔に手を伸ばし。

「え…」

手で、前からその後頭部を包むようにし、そのまま尋人の頭を自分の口元に引き寄せた。

「！ せ、先輩…っ」

「尋人、珈琲の匂いする」

珈琲メーカーではなく、自分の手で豆を挽き、一杯分ずつ湯を注いでいくという六条家こだわりの方法だからこそ、支度を終えて寝室に戻ってきた尋人の髪は残り香を纏っているのだ。

だが、中流は珈琲の匂いを嗅いでいるだけかもしれないが、抱き締められるような格好で嗅がれている方はたまったものではなかった。

中流がいつも珈琲の匂いをさせて自分を起こしに来る理由を今更ながらに察して、尋人は顔を真っ赤に染めていた。

「あ…あの、先輩、…その…」

「ん？」

「その…もう、起きませんか…？ 珈琲も冷めちゃいますし…」

「ああ…」

動揺を隠せず、目を逸らして言う尋人を見やりながら、中流はくすつと笑った。

「よしっ。じゃあ尋人が作ってくれた朝飯を食いに起きるか」

恥ずかしがる尋人を抱き込んでいた腕をさりげなく解き、身体を起こしながら言うと、数秒前まではまともに喋ることも出来なかった尋人の表情がパツと輝いた。

「はい！」と勢い良く立ち上がった少年は、中流がベッドから起き上がるのを待って彼の腕を掴んだ。

「今朝は和食なんです。大根と揚げのお味噌汁、先輩、好きですね？」

「ああ。尋人の美味い味噌汁が朝から飲めるなんて有り難い」

「あとお魚とお浸し…。漬物も、作ってみました」

「漬物？」

「うちで…お父さんがお酒のおつまみにしていたものなんですけど、キュウリと梅干に塩と鰹節をまぶして良く揉んだもの…。夏には梅干がいいかな、と思ったんです」

「うんうん、梅干は大事だ」

寢室を出て、そんな会話をしながら一階に続く階段を下りていた二人は、尋人の手と、中流の腕で繋がっていたけれど、先に顔を洗ってくる中流が言ったため、そこで一時、別れることになった。  
「すぐ行くから」

そう言い残して、尋人に先に食卓に着いているよう促した中流は、だがすぐに彼の隣に戻ってくる。

「先輩？」

「忘れ物した」

キツチンに入ろうとしていた尋人の腕を取った中流に、何を忘れたのかと聞こうとした少年。

その唇が、瞬時に奪われる。

触れるだけの、優しく、甘い、モーニング・キス。

「」

「やっぱ、おはようのキスは基本だろ？」

「~~~~~」

基本で何の基本ですか！…とは言い返せない。

それを言う前に当の本人は「じゃ、また後でな」と洗面所に消えてしまったし、尋人自身の言い返す声が出てこない。

中流に奪われたのは、朝一の唇ばかりではなかったようだ。

「先輩って…っ…………」

寢室で抱き締められた時よりも顔を真っ赤にした尋人は、足早に

キッチンに入る。

一緒に暮らし始めて早四ヶ月。

尋人が夏休みに入ってから「朝はゆっくり眠っている」と毎朝、朝食の準備をしてもらってばかり。

今朝になって、ようやく自分が中流のために食事を用意出来たと思っただのに。

「…はぁ…もう…」

本当に。

なんて幸せな朝だろうか。



## 貴方の翼が堕ちても 二

尋人が六条家に居候にきて四ヶ月。

留守にしがちな家族のおかげで、ほぼ同棲生活が続いている二人は、相も変わらず健全で純粹そのものの生活を送っていた。

同じベッドで寄り添って眠る夜も、キス以上の行為に及ぶことはなく、時に尋人は申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまつのだが、中流にしてみれば何のその。

いまだ自分の 自分達親族の体内に流れる異郷の血の秘密を明かせずにいるため、尋人に詳しく説明することは出来ないけれど、中流には恋人の気持ちと連動したある種の呪いが施されているのだ。尋人がそれを望まない限り、中流は決して何も求めない。

それが、過去に深く傷ついてきた少年を守り、癒すための必要最低限な方法だと思つからだ。

結果、おままごことのような恋愛関係を続けている二人は、しかし幸せ以外の何物でもない。

「じゃ、行つて来る」

すっかり出勤準備を整えた中流を玄関で見送る尋人は、いつものことなのに幼い顔を赤く染める。

「行つてらっしゃい」と告げながら鞆を差し出す姿は、まさに新婚夫婦の朝の光景だ。

「今日、菊地と会うんだろ？ 家のことはいいから楽しんで来いよ」「はい」

尋人が、今日は友人の菊地武人と出掛けると聞いていた中流は、毎日家の仕事を完璧にこなしてくれる少年が慌しくならないよう気遣つた。

「でも、夕飯までには帰ってきます。先輩、今夜は何かいいですか？」

「…」

その気遣いを知りながらも、自分と過ごす時間を大切に考えてくれる尋人に、中流は口元を綻ばせた。

「だから、俺のこともいいって。たまには菊地と時間を気にしないで楽しんで来い」

「でも…」

「な。そうでなきゃ、そろそろ菊地が拗ねるぞ」

「え？」

「友達は大それた事だろ？」

「」

「じゃあな、行ってきます」

「え、あ、はい、行ってらっしゃい…」

頬に軽いキス。

優しい笑顔。

そうして家を出て行く中流を見送った後で、少年は頭を掻いた。

「…菊池君が拗ねるって、どういうことだろう」

中流の言うことがいまいち飲み込めずに小首を傾げた尋人は、だ  
が気を取り直す。

まずは朝食で使った食器を洗い、洗濯機を回しながら部屋の掃除  
見上げる空が青いなら、家中の窓を開けて空気の入れ替えもした  
い。

「今日も暑くなるかな」

あ、宿題もあつたんだと胸中に呟きながら動き出す。

時刻は八時ちょうどを指していた。

\*\*\*

六条家は最寄りの駅まで徒歩で二十分程の場所にあり、友人の菊  
地武人の家は駅を挟んで三十分ほど。

だから二人は、朝の駅で待ち合わせして一緒に学校に通うのが日  
課であり、休みに会う日も同じく駅で待ち合わせしてJRを利用し

街に出るのだ。

「菊池君」

平日の朝と同じく、駅構内、券売機のちょうど真正面に位置する石柱に寄りかかって待っていた友人を呼びながら近付くと、彼は身体を起こして尋人を迎えた。

「よ。一週間振り」

「元気だった？」

「とりあえずな」

互いに笑んで交わされる言葉に、一週間振りの違和感など微塵もない。

「じゃ。行くか」

「うん」

早速歩き出した二人は、券売機で目的地までの切符を買って改札を抜けていった。

この日、二人は学校から出された夏休みの課題の一つである自由作品のために、北海道立図書館へ行く事にしていたので。

自由作品は創作・研究・裁縫・工作その他諸々、自分の好きなものを一つ提出すれば良いため、ほとんどの生徒達は自分の得意なものを制作する。

だが菊地にはこれといって作りたいものも研究したいものもなく、悩んでいたところ、尋人が自分の自由作品のための調べ物をするのに図書館に行きたいと言ったため、今回の遠出が決まったのである。

「けど…倉橋の自由作品だったら図書館で調べなくたって、六条中流に聞けばすぐ解るんじゃないのか？」

今更、六条先輩とも、中流さんとも呼べずフルネームでその名を出す菊地に苦笑しながら、尋人は小さく首を振った。

「うん…先輩に聞けばすぐ解ると思うけど、これは僕の課題だし、ちゃんと勉強して覚えたいんだ」

「ふうん。真面目っつーか…よく疲れないな」

「疲れないよ。だって好きなことだもん」

「あつそ」

なんだか惚気を聞いているような気分で息を吐いた。

尋人は“絆”をテーマに、これと感じる写真を集めて自分なりの感想をつけたアルバムを作りたいたいのだという。

見る人に“絆”の尊さが伝わるような、そんなアルバムを、自身自身で。

そして、出来ればそれを一番最初に中流に見て欲しくて、今はまだ、こういうことをしたいという話さえしていない。

「最後のページには自分の写真も入れたいんだ。…せっかく写真部に入ったし」

「いいんじゃないねえ？」

「そっかな」

照れたように笑う尋人に、菊地は再度息を吐く。

それは一つ前とは違った、少し長い吐息だった。

道立図書館は、尋人達の最寄りの駅から一度電車を乗り変えて行ける駅近くにある。

周りには高校や大学、その他の教育施設が密集しているうえ、夏場は深い緑がその周囲を覆っている。

国道が走り、土地的には随分と拓けた場所なのだが、教育施設等一つ一つの敷地が恐ろしいほど広いこともあって、一見、山奥に迷い込んだような錯覚に陥った。

「図書館の看板、あんなに近くにあるのに…」

「俺達、やっぱり田舎者だよな…」

少年達は小さく呟いて互いに顔を見合わせると、自嘲するように笑い合った。

「ま、いいや。行くか」

「うん」

駅を出ると、二人は案内板に従い図書館へ向かった。

図書館に着いたのが十一時過ぎ。

それから三時間ほど館内で各々の目的のために動いていた二人だったが、身体が空腹を訴えたのと、菊地が、周囲が本ばかりという慣れない環境に耐え切れなくなっていたこともあり、尋人は気に入った写真集を三冊借りて図書館を後にした。

どこかでご飯を食べようと言いながら、JRで乗り換えの駅まで出た二人は、そこでFF店に入った。

好きなものを注文して席に着くが、外の天気は最高で、まるで彼らを誘うように外に設えられたパラソルの下に二人分の席が空いている。

結局、外で食べようと言う事になり、バーガーとポテト、ドリンクが乗ったトレイを持って外に出た。

気温は二十五度を優に超えているだろう。

夏の陽射しは熱く、空気も纏わりつくような感じがしたが、これも一時のことと、北国の短い夏を思えば嬉しい陽気である。

「あー、腹減った」

声を上げ、大きな口を空けて大胆にバーガーを頬張った菊地に笑いながら、尋人も口をつける。

数時間振りに喉を通る飲料は、身体の隅々に染み渡るようだった。平日だが夏休み中ということもあって、周囲には中高校生と思われる男女が多い。

四人くらの小学生がリュックを背負って駅に走っていく姿。

ベビーカーを押して歩く夫婦。

腕を組んだ恋人達。

平和そのものの夏の景色に、尋人は知らず口元を綻ばせた。

こつこつのもいいな、と思う。

心が温かくなる。

「……？」

だが、駅の正面で気持ちの良い水飛沫を上げる噴水の傍に、三人

の大学生風の男達がいることに気付くと同時、何か不穏なものが尋人を震わせた。

一人は長髪を後ろで一つに結わえ、浅黒の肌、黒のタンクトップ。筋肉のついた腕は男の力強さを示すようだ。

二人目は、縁無しとはいえ眼鏡をしているせいか知的な印象を受ける青年だ。ボーダーのワイシャツの下は決してひ弱には見えないが、隣の長髪の男とは雰囲気の違いすぎる気がした。

そしてそれをいっそう強く思わせるのが三人目の男。

彼も眼鏡をかけているが、こちらは非常に根暗な雰囲気が高く、夏の青空にも歓迎されない淀んだ空気を纏っていた。丸まった背中には古びたリュック。

「……」

変だ、と尋人の心が叫ぶ。

怖いと、叫ぶ。

「……」

「倉橋？」

一点を見つめたまま顔色が青ざめてきた尋人に気付いた菊地が表情を険しくする。

それと同時に。

「危ない！！」

叫んだのは尋人か。

菊地か。

他に気付いた人間がいたのか。

駅前の国道から一台のトラックが曲がってきた。

人が集まる駅前の噴水広場に、大型車が速度を緩めることなく突き進む。

「逃げる！！」

叫んだ。

怒鳴った。

そして悲鳴に掻き消された。

「倉橋！」

「あ……っ！」

トラックは、もう間近。

ガシヤ

……………ン……………ッ！！

パラソルが薙ぎ倒される。

FF店のウィンドウが破壊される。

平和そのものの夏の景色は、一瞬で惨劇へと変わってしまった  
……。

### 貴方の翼が堕ちても 三

六条中流は走った。

周囲の様相などには目もくれず、ただひたすらに目的地へ向かって走り続けた。

それは、いつかと同じ姿。

あの日の悪夢を思い起こさせる。

「……」

電話で呼び出されて駆けつけた大樹総合病院。

手術中の赤いランプ。

再会した恋人は、包帯を巻かれた痛々しい姿で言った。  
何も、覚えていないのだと。

\*\*\*

「よし。とりあえずこれで様子を見るしかないけれど……。痛み止めの薬も出しておくから、病むようなら我慢せずに飲むんだよ」「はい」

ギプスでしっかりと固定された右腕を三角巾で首から吊られた尋人は、辛そうな顔をしている外科医氏・辻貴士に出来る限りの笑顔を浮かべて見せた。

「ありがとうございます。……また、お世話になってしまって」「……いや」

尋人の笑顔につられるように、貴士も笑んで見せるが、その表情は決して晴れてはいなかった。

今日の昼過ぎに、突如鳴り出した緊急連絡は、大樹総合病院付属救急医療センターへのヘルプを要請するものだった。

病院から、車で三十分程の距離にある駅前で、暴走したトラックにより子供二名を含む六人が重傷、十人以上が軽傷を負い、助けを



求めているという。

貴士達数人の医師が救急病棟に駆けつけた時には泣き喚く子供達をあやす母親の姿や、真っ青な顔で座り込んでいる女子高生達が廊下に何人もおり、その中に、貴士が良く知る彼らがいたのだ。

有りえない方向を向いた腕を押さえて顔を歪めていた尋人と、彼に付き添う菊地武人が。

幸い、菊地は軽度の切り傷と打ち身だけで済み、尋人の骨折した右腕には全治二ヶ月という診断結果が下された。

あの事故に巻き込まれて骨折だけで済んだのは運が良かったと尋人は言うけれど、こうして彼を診た貴士にとっては、少年の運が良いとはどうしても思えない。

かといって、君は運が悪いとも言えず曖昧に微笑むと、尋人も困った顔をして見せた。

午後三時前に事故は、駅前の噴水を破壊し、その後、走行進路の一直線上にあったFF店に突っ込むことで、ようやく車輪を止めた。そのため、重軽傷者のほとんどは店内にいた客で、外にいた尋人が重症者のリストに名を連ねることになったのは、菊地曰く「あの直前にぼうつとしていたからだ」そうだし、事情を聞いて回っていた警察官に言わせれば「もう少し早く逃げられていれば良かったね」である。

だが、尋人はそれを聞きながらも周囲を気にせずにはいられなかった。

あのトラックは真っ直ぐに噴水に向かって突進し、それを破壊してFF店に激突したのだ。

あのとき、噴水の前には奇妙な取り合わせの三人の男達がいた。だが警察が事情を聞いて回っているその場に彼らの姿はなく、大樹総合病院の救急センターにも彼らは運ばれてきていなかった。

どこか別の病院に搬送されたのかと思い、ここ以外の病院名を貴士に教えてもらおうとしたのだが、ここ以外にはないという簡単な答えしか返されず、尋人はあの三人を完全に見失ってしまった。

彼らの所在を突き止めたとして、それがどうかしたのかと問われれば、答えは出ない。

ただ、どこか違和感のある三人組に感じた強い恐怖は、只事ではないように思う。

何か悪いことが起こりそうな、…そんな、嫌な予感がするのだ。

「…尋人君？」

「あ、はい」

自分の考えに没頭していた尋人だが、貴士の怪訝そうな声に呼ばれてハッと我に返る。

「どうしたんだい？ 何か悩み事があるなら、僕でよければ相談に乗るよ」

「い、いえ…悩み事…とかでは、ないですから」  
「そう？」

コクンと頷く尋人を、貴士はまだ心配そうな顔で見ている。と、その時だ。

控えめなノックの後に顔を見せたのは、尋人と一緒に事故に遭遇した菊地武人。

怪我の程度は軽いからと治療が後回しになり、今ようやく終えて尋人を探しにきた菊地は、顔の二箇所がガーゼを当てられ、半袖の下には包帯が見え隠れしていた。

「菊地君、大丈夫？」

「ああ、俺は全然平気。この包帯だって湿布巻いているだけで、二、三日もすれば取っていいってさ」

「そっか…」

菊地の具合が軽いことを確認して安堵する尋人だったが、彼の三角巾で吊られた腕を見た菊地は対照的に顔色を曇らせた。

「…ごめんな、ちゃんと守ってやれなくて」

「え？」

低く、小さく囁かれた言葉は、尋人の耳には届かない。

しかしそれを聞き返すより早く、今度はノックも無しに開いた戸

の奥から現れた姿に、尋人と菊地、貴士、三人は三様の表情で一瞬だけ呼吸も忘れる。

可哀相なくらい息を乱して、戸口から中を食い入るように見つめる眼差し。

「、せ、先輩…？」

「六条君…」

「六条中流…」

やはり三人が三様の呼び方で彼の名を口にしたが、六条中流の視線はただ一点、尋人にだけ向けられていた。

そして尋人も彼の視線に気付き、吊った腕を隠してしまいたいと思っただ。

「あ…先輩、あの…これは…」

また心配を掛けてしまう。それは嫌だと思っ尋人だったが、次の瞬間、中流は迷わず彼を抱き締めていた。

「！」

人が見ているだとか。

ここが外だとか考えることも無く。

「先輩…？」

「っ」

自分をそう呼ぶ恋人を、強く、強く抱き締めた。

「…っ…俺のこと…解るんだよな…？」

「え…？」

「…何も忘れてないよな…？」

「」

最初は悩んだ言葉の意味。

だが気付いた、彼の気持ち。

「あ…っ…忘れてなんかいいです…ちゃんと解っています…」

「尋人…」

「ごめんなさい…先輩…心配掛けて、ごめんなさい…」

あの、冬の日。

電話で病院に呼び出された中流を待つていたのは絶望への入口。受け入れたくは無実を受け入れるしかなかった尋人の言葉。大切な存在を守れずに、失ってしまう恐怖を、ずっと胸の内に抱えながら走ってきたのだろう。

今こうして尋人の声を聞くまで。

それを思うと、尋人はますます申し訳ない気持ちになった。

「腕…痛むか？」

身体を離し、尋人の吊られた腕を見下ろした中流が問うことに「平気です」と首を振った。

「貴士医師がちゃんと手当してくれまし…菊地君が、僕をトラックの前から逃がしてくれたから」

「そっか…」

尋人の怪我は、菊地がトラックの前から腕を引いて逃がした後、倒れてきたパラスルに強打されて負ったものなのだ。

「ありがとな、菊地」

中流は菊地に頭を下げ、次いで貴士にも腰を折る。

「お世話になりました」

「」

その、あまりにも自然に告げられた言葉に、貴士は思わず頬を緩め、菊地は軽く嘆息した。

何と言おうか、どうしようか。

心配するだけ無駄というものではないだろうか。

「くれぐれもお大事に」

貴士が告げると、中流は再度、頭を下げ、少年達を連れ立って治療室を後にした。

「ところで、どうしておまえが迎えに来るんだ？」

まだ明るい空の下、駐車場に向かっていた中流の背中に、菊地が尋ねた。

尋人が六条家で暮らすことが正式に決まってから教習所に通い始めた中流は、まだ免許を取得して三ヶ月の若葉ドライバーなのだが、安全第一の運転技術は、助手席に最も多く乗る尋人が安心してられる腕前だ。

今日も、これから中流の運転で菊地を家に送るつもりなのだが、その前に一箇所、寄らなければならぬ場所があった。

だからこそ、中流が彼ら二人を迎えに来たのだ。

それをどう切り出そうかと迷いながら、静かに口を開いた。

「伯父さん…病院の院長やってる裕幸の親父さんから連絡があったんだ。俺が迎えに来いって」

菊地は、尋人と同じく、学校に通いやすいという理由で祖父母の家に居候している。

菊地が事故に巻き込まれて病院にいるからなどと連絡を入れれば、慌てて迎えに来る老夫婦の方が危険だからと、それらしい理由をつけて説明する中流に、だが菊地の表情は険しい。

しかし中流の方も自分が迎えに来た本当の理由を語るわけにはいかず、わざと声の調子を弾ませた。

「それにな、裕幸がおまえ達のことを心配していて、無事な姿を見せに来てくれって言うんだ」

「裕幸さんが？」

菊地は二度。

尋人は何度か会っている中流の従弟・大樹裕幸の名に、二人は揃って驚いた顔をした。

「伯父さん、連絡くれる時に俺の携帯番号を知らないからって、裕幸に聞いたみたいなんだ。そしたら裕幸も、おまえ達のこと酷く心配しているって言うからさ。…事故に巻き込まれるなんて大変な目に遭った後で申し訳ないとは思っただけど…、裕幸に顔見せて、安心させてやってくれないか？」

「はい…」

「…まあ、そういうことなら…」

そう言われれば少年達に断る理由などない。

こうして、二人は大樹家に向かうことを了承したのだ。

「…」

中流には、本当の理由は言えない。

まさか。

二人に妖魔の気配が纏わりついているから裕幸に視てもらおう、など。

自分達、大樹の血に流れる秘密を明かせないでいる中流には、決して口に出るなかつた。

## 貴方の翼が堕ちても 四

中流の母親の実家である大樹家には、一族だけが知る秘密がある。中流の祖父、大樹嘉武氏の結婚した女性が異世界の血を継ぐ人物だったことから、その子供達には特殊な能力が受け継がれていたのだ。

この世には“妖”と呼ばれる魔物が存在し、大樹家はそれらを種類に応じて“妖魔”“妖獣”と呼んでいた。

“妖魔”は気体状の妖で、人の心に住み憑き人間の生気を食らうもの。

“妖獣”は獣の姿で人の血肉を食らうもの。

そしてこれ等を退治する力が、大樹家に受け継がれた能力なのだ。

\*\*\*

菊地は二度目。

尋人は何度目かの訪問になる大樹家は、病院から車で二十分ほど南下したところにある。

住宅街から多少離れ、雑木林を挟んだ小高い丘の上に建った西洋風の白亜の館がそれだ。

正門を抜け、家屋の脇に駐車用に造られたアスファルト上に車を停めた中流は、尋人と菊地、二人を促して玄関に向かった。

だが、その手が呼び鈴に届くより早く、勢いよく開け放たれた玄関の戸。

「え」

「！」

「」

そこから現れた大樹裕幸は、不安に揺らいだ目を少年達に向けて固まってしまった。

「  
「つ……？」  
「……………」

他の誰でもない、今まで冷静で穏やかな姿しか見たことのなかった裕幸の、こんな姿に、少年達はもちろんのこと血縁である中流も言葉が出なかった。

しばらくの沈黙が続く。

「……あ……………」

裕幸の表情の強張りが解けると、それだけで空気が一変した。

深く息を吐くと同時に力が抜けたのか、途端に穏やかな笑顔を覗かせた従弟に、少年達はもちろんのこと、見慣れているはずの中流でさえ顔が赤くなる。

「ひ、裕幸……？」

「ああ……済みません。尋人君と菊地君が、思っていたより元気そうなので安心しました……父さんから話を聞いた時には、心臓が止まるかと思いましたが」

静かに語ってから、尋人の吊られた右腕に視線を落とす。

「骨折だなんて……大変な目に遭ったね」

「い、いえ……これくらいは全然……」

裕幸の眼差しは、ただ見られているだけでも少年達の胸を高鳴らせる。

全体的に色素が薄い印象を受ける大樹裕幸は、人形のように整った顔立ちと華奢な体躯も合わさって、その存在自体がひどく儂いものに感じられる人物だ。

そのために性別の判断すら難しく、中流から従弟だと聞いている尋人や菊地でさえ、目の前の人物が“男”だと完全に信じているわけではない。

それほど、裕幸からは性的なものが一切感じられないのだ。

そんな、聖域を形にしたような美貌の人に見つめられて、心臓が騒がない者などいるわけがない。



「…この人には、何度会っても緊張しそうな気がするぞ」

「僕は毎回緊張してる…」

小声で言い合う少年達の会話を知ってか知らずか、裕幸は中流と二、三の言葉を交わした後で二人を屋内に招き入れた。

「いつまでも外で、ごめんね。どうぞ入って。事故に巻き込まれるなんて普通のことじゃないんだし…、少し家で休んでいって」

「はい」

「お邪魔します…」

「尋人君はカフェ・オレでいいかな？ 菊池君は？ 甘くないのがいいんだったよね…アイス・ティーにしようか」

いつもと変わらない穏やかな声に誘われて、尋人と菊池は大樹家に案内される。

裕幸が彼らに何を出そうかと考えているのを聞きながら、前回、ここを訪れた時に飲ませてもらった味を思い出した二人は、あれをもう一度飲めるのだという期待に表情を輝かせたのだった。

「…中流さん」

尋人と菊池をリビングで休ませている間、中流と裕幸は二階のホールに上がっていた。

小声で話しながら見下ろす先には、天井が三階まで吹き抜けになっているリビングの少年達。

いま、彼らの正面に座って話し相手をしているのは裕幸の母親である。

「今回はともかく、いつまでも尋人君に“大樹”の秘密を隠し通すことは出来ないと思いますよ？」

「解ってる。…だけど、…まだ言えないんだ…」

「本当のことを話しても、彼はちゃんと理解してくれるのでは…？」

「ああ……………」

「……………だったら」

「いや。けど……、尋人は、優しすぎるから……」

「……」

「優しすぎるから……言えないんだ……」

辛そうに、顔を歪めて言う中流を見ると、自分が口出しできることではないのだと裕幸に思わせた。

「……。……そうですね。……とりあえず、父さんの心配が杞憂で安心しました」

言つと、中流も大きく息を吐く。

「……ほんと、こっちは真剣に焦ったんだぞ、伯父さんから尋人に妖の気が纏わりついていいるなんて言われて……」

驚かせないで欲しいと真剣に願う中流だったが、病院に妖の気配を感じて探っていたところに、それを身に纏った尋人達を発見してしまった大樹医師の驚きは中流以上だっただろう。

裕幸には及ばずとも、大樹に流れる異郷の血を濃く受け継いでいる大樹医師は、敵対する魔物の気配を感じ取る為の五感が鋭い。

それを知っているからこそ、尋人が妖の気を纏っていると感じた子供達は気が気ではなかったのだが、今回に限って言えば、五感が鋭過ぎたが故に、尋人に纏わり着いていた気に気付いてしまったわけ、それが甥っ子の大切な相手であると思えばこそ、心配して彼らに連絡をしてきたのだ。

「俺達の傍にいれば、妖に狙われても不思議はないからな……本当に、尋人が狙われていたらどうしようかと思っただ……」

「ええ。……でも、今回は安心して下さい。あの気は、事故に遭った直前に狙われている人が尋人君の傍にいたために、その残り香のようなものをつけてきてしまっただけですから」

「……そう聞くと複雑だな。尋人が無事でも、他に狙われている奴は確実にいるってことだろ……？」

「そのことについては、俺達が調べて解決します」

だから無茶なこととはしないで下さいと、言い聞かせるように返してくる従弟に、中流は微苦笑で応えた。

「解ってる。こつから先には、俺は一切口出ししない。…俺には、妖と戦うなんて出来ないからな…」

「中流さん」

戦えないことを、悪いことのように言う中流に、裕幸は静かに首を振った。

「そんなふうには言わないで下さい。中流さんには中流さんの力があ  
るんです。そしてその力は、貴方が最も大切だと想う人のために使  
ってください」

「…」

「それこそが、俺の願いです」

「……っ」

そうして裕幸の優美な顔に浮かぶ微笑は心からの自然な表情。

この従弟の願いは本当にそれだけなのだと思ってしまうから、中  
流の胸中には遣り切れない思いが募るのだ。

大樹の血に連なる者として。

異郷の血を継ぐ者の一人として。

だが、持ち得なかった戦う為の能力。

ほんの少し他人より勘が鋭いからといって、それが何の役に立つ  
のか。

人の気持ちに敏感だからといって、それが誰かを救うことがあっ  
ただろうか。

…あつたかもしれない。

少なくとも、尋人を今以上に傷つけることはなかった。

誰より愛しい人の心を守ることが出来ていると、信じたい。

けれども、この力で裕幸を守れなければ何の意味もないと思うの  
は、恐らく、異郷の血故なのだろう。

兄・出流のように戦う能力が欲しかった。

守る能力が欲しかった。

そう思わない日は無い。

近い将来、一族のために裕幸を失う日が来ると知ってから、それ

を願わない日はなかったんだ。

「……裕幸。学校、楽しいか？」

「ええ」

「時河、元気にしてるか？」

「ええ」

裕幸が唯一心を開いた“他人”である時河竜騎の無愛想な顔を思い出しながら、彼ほど“元氣”という状態が解り辛い男もいないと気付くけれど、迷わずに肯定してくる裕幸の表情が変わらないから、そうなのだろうと信じられる。

「時河に、…近い内に会おうって、伝えておいてくれ」

「必ず」

美しい従弟の微笑みが、辛い。

辛いけれど、優しくて。

優しくて、綺麗過ぎて。

泣きたくなる。

自分達に、あとどれくらいの時間が残されているのかは誰にも解らない。

否、その日が来たと気付いた時には、もう遅いだろう。

その時が訪れれば、裕幸は誰にも言わずに姿を消すから。

きっと「また明日」と笑いながら、次の日には消えてしまっているんだ。

\*\*\*

「先輩！」

「六条中流！」

「？　っ！」

ハッと我に帰ると同時、目の前に飛び込んできた光景に、中流は

慌ててブレーキを踏んだ。

「ヤバっ……！」

「っ……！」

「……！」

自分が運転中であることを完全に忘れていた中流は、もう少して、前方の信号待ちしている車に追突してしまうところだった。

「っ……はぁ……ごめん……」

「先輩……」

「まったく……運転中に考え事なんかするなよ危ねえな……！」

「……… 本当だ……悪かった………」

「……」

深く息を吐き、気を取り直すように前を向いた中流は、信号が青に変わるのを待って、硬い表情で運転を再開した。

菊地は、まだ不安そうな顔をしていたが、とりあえず座席に腰を下ろし、尋人も助手席に大人しく座っている。

それでも、中流が運転中に考え事で意識を飛ばしてしまったという、らしくないことに不安は拭えず、何度も中流を見遣った。

幸い、それ以降は比較的安全に車を走らせ、菊地の祖父母の家にも無事に辿り着いた。

車を降りた少年が、

「おまえン家までも気を付けて帰れよ！」と強気に言うと、中流は素直に頷いた。

「……」

それがまた、中流らしくないと、尋人は思った。

六条家に着き、一階の駐車スペースに車を停めると、その奥の扉から円形階段を上って二階より上の生活スペースに入る。

いつもなら靴は手に持って玄関に戻すのだが、中流はそれもせず、黙って部屋へ上がっていった。

「……」  
その背中を追いかける尋人は、泣きたいくらいの胸の痛みを顔を歪める。

「……っ……先輩……!」

「え……、え？ 尋人……?」

唐突に背中に抱きつかれて、中流は目を見開いた。

何故、尋人がこのような行動に出たのか咄嗟には理解出来なかったのだ。

「ど、どうした？ おまえ……泣いてる?」

相手が驚いて聞いてくることに、少年は激しく首を振った。

泣いてなどいない。

……泣きたくはなつたけれど、でも、泣きたくないから。

「尋人……?」

「……先輩……ごめんなさい……」

「え……?」

「……心配、掛けて……ごめんなさい。だから怒ってるんですよ……?」

「怒って……? 俺が……? なんて?」

「だって……裕幸さんの家を出てから……さっきの車の中でも……一度も僕に話し掛けてくれない……」

「……」

三角巾で吊つた右腕を庇いながら、左手でしっかりと自分の背を掴む少年の歪んだ表情に、中流はようやく自分の不甲斐無さを自覚した。

何て馬鹿なのだろう。

いくら裕幸のことで落ち込んでしまったとはいえ、それで尋人を不安にさせるなど、それでなくとも、あのような事故の後で気持ちが悪く不安定になっているのだ。

そんな状態の尋人を悲しませるなど、絶対にあってはならなかったのに。

「…ごめん……、尋人、ごめん…」

「先輩…」

中流は身体の向きを変えると、真正面から少年の細い身体を抱き締めた。

腕を圧迫しないよう、全体を包み込むように優しく。

「…」

それだけで、尋人の不安は解れていく。

「ごめん…」

繰り返されるその言葉と共に、中流は尋人の唇に触れた。

それは、本当に触れるだけのもので、どちらかの熱を煽ることはない。

だが、穏やかな接触は、男としての、尋人への精一杯の思いだった。

「ちよつと…いろいろとあって、さ」

「いろいろ…？」

「そ。いろいろ…」

答えて。

けれど、本当のことは言えなくて。

「…おまえは、ずっと俺の傍にいてくれ…」

「先輩…？」

「…俺を、一人にはしないでくれ…な」

「…」

抱き締められて告げられる言葉は、あまりに痛々しくて。

尋人は、片腕しかないけれど、精一杯の力で中流を抱き返した。

「…傍にいさせて下さい…」

「…」

互いの温もりと、鼓動を分け合いながら、中流は思った。

いつそ、このまま時が止まってしまえばいいのにと…。





## 貴方の翼が堕ちても 五

七時過ぎに自分が用意した夕食を食べ終えた中流は、箸を置いた後で、まだ食べている尋人に話し掛けた。

「食事終わって、少し休んだら、先に風呂入れよ」

「でも後片付けが」

「片腕じゃ大変だろ。当分は俺が…」

そこまで言いかけた中流だったが、骨折した腕で湯船につかつてはならないことを思い出した。

「そっか…けど日中にあの暑さで風呂入れないのはキツイよな…シヤワーなら構わないかな…」

だがシヤワーだけで入ったとして、片腕ではそれも大変なことはないだろうか。

「…？」

しばらく悩んだ末、中流は尋人を見返す。

役得と言えば役得だ。

「尋人、俺がシヤワー入れてやる」

「待ってください！ 今日くらい入らなくても平気ですから！」

「汗かいて気持ち悪くないのか？ それに事故に巻き込まれて土埃だつて浴びただろうし」

「…でもいいです！ 我慢します！」

「尋人」

真っ赤になつて居間の隅に逃げ込んだ尋人は、とにかく中流に捕まらないよう必死だった。

彼の言うとおり、汗もかいたし土埃も被った。

シヤワーに入って頭や身体を洗いたいのはやまやまだが、かといつて中流に入れられるとあつては拒まないわけにいかないのだ。

「……」

よっぽど恥ずかしいのだろうと、中流にもそんな相手の気持ちは判った。

だが、彼にもここで退けない理由がある。

「尋人…、おまえの部屋のシーツ、昨日変えたばかりなんだぞ」

「え……」

「枕カバーもだし、布団だって干したばかりのふわふわだ。それをたった一日で汚す気か？」

「そ、そんな…」

「そもそも、その服だって一人じゃ脱げないだろ？ それともハサミで切るのか？」

「~~~~っ」

「俺が手伝うなら一緒だ。ついでにシャワー浴びてサッサと洗って綺麗になるうぜ？ 俺は誓って疚しいことはしないから」

「……っ」

「俺を信じろって」

その言葉は、裏を返せば「俺が信じられないか？」と言っているも同然。

それでも「嫌だ」と言おうものなら、中流の想いすら拒んでしまうことになりかねない。

「な。尋人」

差し出された手を払うことなど出来るはずがなくて、尋人はとうとう中流に捕まったのだった。

脱衣所で最初に解かれたのは肩から提げた三角巾だった。

次いで上着を脱がされ、腕に大きなビニールの袋を被せられた。

最後に下を降ろされそうになって、流石にそれは自分で脱ぐと言  
い張った。

中流に、先に浴室に入ってくれるよう頼み、下着も取ってから腰

にタオルを巻くつもりだったのだが、片手ではタオルを結べないことに気付き、泣きたくなる。

「~~~~っ」

どうしてこんなことになるのか。

なんで腕を骨折なんてしてしまったのか。

本当に泣きそうになりながら、ビニールの巻かれた右腕でタオルを押さえるようにして浴室の戸を開けた。

もう、なるようにしかならない。

「」

Tシャツと下着だけを身につけた中流は、浴槽の縁に座って尋人が来るのを待っていたが、実際に下肢にタオル一枚だけの尋人の姿を見て、すぐには言葉が出てこなかったらしい。

「……」

「……っ……」

互いに見合ったままの沈黙は、ほんのわずかのことだったが、それを数分間も続けたような気になりながら、中流は慌てて尋人を手招きした。

「尋人、ここ座れ。先に頭洗う」

「……はい……」

今にも消え入りそうな小声で答える少年に、中流は思わず苦笑いしてしまう。

気持ちは判る。

だが「何もしない」という自分の言葉は信じて欲しいと思った。

「ここ座って、背中倒せ。俺の脚を背もたれにしてさ」

「足を……?」

「そ。床屋とかと同じ体勢で洗った方が楽だろ? 腕にもお湯掛からないで済むし」

なるほどと思いながら、言われた通りに中流の脚を背もたれにして身体を傾けた。

当然、床屋の椅子のような心地よさはないし、少なからず尋人自

身の腰にも負担は掛かるけれど、何分も同じ体勢を強いることはなかったし、頭を現れる手際の良さは、正直に言って気持ち良かった。「…先輩、人の頭を洗うの、慣れてるんですか？」

「うん？ 慣れてるっつーか…昔は裕幸と一緒に風呂入ったりして洗ってやってたからな」

「裕幸さん、と？」

「たまに汨歌も一緒になると、どっちが裕幸の頭洗ってやるんだってケンカになってさ…、俺らがいつまでもケンカしているもんだから、あいつがのぼせて倒れて、家族中大騒ぎになったこともある。」

「…って、本当に昔の話だぞ？ 幼稚園の時とかさ」

「はい」

解っていますと小さく笑う尋人に、中流はほっとした。

少年が緊張しているのが伝わってくるから、彼の笑顔を見ると救われる気持ちになる。

中流は喋った。

実の兄弟のように育ってきた従兄弟が多いため、風呂というキーワードから探せば様々な記憶が次から次へと思い出されたし、恥をかいたものなら、尋人を笑わせる丁度いいネタになったからだ。

そして尋人も、髪を洗われながら瞳を閉じていると、自分がほとんど全裸に近い状態であることを忘れてしまう。

中流が普段と変わらない調子なのも大きかった。

微温湯で濡らしたタオルで丁寧に顔を拭かれるのも心地良くて、自然と笑みが毀れた。

だがそれも、ここまで。

いざ身体を洗うとなると、途端に尋人の身体が強張る。

「尋人。そんな緊張するなって…」

「はい…判っている…です…けど…」

「…」

必要以上に固くなった身体が、可哀相だと思う。

だから、さっさと洗って、この場から解放してやりたいと思った。

だからそれは、本当に。

嘘ではなくて。

たまたまの、。

「？ 尋人、これ虫刺されか？」

「虫、刺され…？」

首筋の、赤い腫れ。

「…」

泡のついたうなじに、滑る指先。

「…」

「え…」

その時の、少年の身体の反応に気付いてしまった。

やばい、と思う。

「あ…悪い、後で薬塗っておこうな」

「…は…はい…」

震える声が。

俯いた表情が。 熱い。

「…」

中流は息を呑んだ。

途端に、これは非常に危険な状況だと悟らないわけにはいかなかった。

中流は急いで身体を洗ってやり、それは尋人に見ればビックリするほど適当な手つきだったけれど、今ばかりはそれが有り難い。前も、可能な限り素早く手短に終わらせて洗い流した。

その間、わずか一分足らずだ。

「…」

「あ…」

中流は急いで立ち上がると、脱衣所のカゴから新しいバスタオルを手に取り、尋人の頭に被せる。

「わっ…」

わしゃわしゃと髪を拭き、身体の水気を取ると、浴室を追い出し

て用意していた浴衣を着せる。

「え、え。先輩？」

「一番楽だろ」

言葉少なに返して帯を締め。

「髪、後で乾かす、居間で待ってる」

言い終えると、一人で浴室に戻り戸を閉めた。

「？」

「……っ」

戸を挟んで内と外。

尋人は戸惑いながらも、下着をつけていないことに気付いて、慌てて動き出した。

一方の中流は、浴室にしゃがみ込み、本日二度目の、己の不甲斐無さに落胆した。

「俺、バカだ……」

乱暴に髪を掻き回しながら独り呟く。

「浴衣つて……コンチクショー……っ……」

とてもじゃないけれど、今夜は一緒に眠れそうにない。

だって。

まさか。

この自分よりも先に、尋人の方があんな顔を見せるなんて、考えてもみなかったんだ。

あんな顔。

「好きだ」と言葉で伝えられるよりもク。

「あ……クソッ！　なんでアイツあんなに可愛いかなあっ」

中流にとっては切実な悩み。

しかし端から見れば単なる惚気。

贅沢過ぎる悩みである。



## 貴方の翼が堕ちても 六

好きな人に触れられて、平気でいられる自信など、あるわけがない。

過去は、現在もこの心を苛んでいるけれど、中流に向かう想いに嘘はないから、反応してしまうだろう身体を見られることが怖かった。

「……………」

この夜、尋人は久々に一人で眠る。

事故の話を聞いて仕事を途中で放り投げてきた中流は、持ち帰った仕事を済ませてから休むと言ったからだ。

一人で眠るベッドは広すぎて、淋しいと思う。

けれど今夜は、これで良かった。

浴室で触れられた感触は二、三時間で拭われるものではないし、もし隣に彼がいれば、何が起きてしまうか判らない。

それほど、尋人の身体は今もあの時の熱さを鮮明に覚えているのだ。

尋人、これ虫刺されか……………？

他意無くうなじに触れた指先。

なのに、首筋をなぞる熱。

「……………」

尋人は布団の中で身体を丸め、左手でうなじを押さえる。

「僕…変だ……………」

あれほど行為を怖がり、ずっと中流に我慢を強いているのは自分なのに。

それは恐怖の象徴だったはずなのに。

何故、感じてしまったのか。



「……………」  
触れられるのは怖い。  
けれど感じてしまう。

だって、中流は大切な、大好きな恋人だから。

「……………」

変だ、と思った。

今の自分の気持ちを追えば追うほど、その中の矛盾が浮き彫りになる。

解らなくなる。

「僕……………」

僕が怖いのは、一体、なに……………？

中流ではない。

彼が傍に居てくれると安心する。

抱き締められると嬉しいし、キスされると、ドキドキした分だけ幸せな気持ちでいっぱいになる。

触れられるのは、もっとドキドキして。

もっと幸せな気持ちになる。

中流との行為に恐怖などあるわけがないのに。

解っているのに。

だったら、怖いと感じるのは、何に対してなのか。

「……………」

考えようとすると、直後に脳裏を過ぎるのはあの日の男達。

押さえ付けられ、自由を奪われて、耐えるしか出来なかった夜。

「先輩……………」

丸くした体をいっそう縮めて布団の中に潜り込む。

怖かった。

それが、怖かった。

けれど。

……尋人……

「……」

中流の声に救われる。

彼の隣にはいられないと、一度は死んだ尋人の想い。

取り戻した記憶と共に、もう一度帰ることを許された想い。

彼がいるからこそ、ここにいる自分なら、中流に対して“怖い”  
と感ずるわけがなかった。

だから。

だから。

\*\*\*

闇夜を走るのは誰？  
追いかけるのは？

叫ぶ。

何かを。

憎む。

誰を。

それは、獣。

\*\*\*

「つ、……！！」

遙か遠く、光りが見えた。

「尋人！」

力強い呼び声に、尋人の意識が引つ張られる。

「おい尋人！ しっかりしろ！」

「…っ…！」

ハツとして、中流の声をそれと認識すると同時、全身を覆つ痺れと、強い吐き気。

「…っ…せ…ぱい…」

「尋人！？ おい大丈夫か！？」

「っ…は…」

「は？」

「吐き…そ…」

「！ ちょっと待て！」

言うなり、中流は布団を剥いで少年の細い身体を抱き上げると二階の洗面所に飛び込んだ。

「ほら、もう我慢しないでいいぞ？ 尋人？」

「…っ…！」

蛇口から勢いよく放出される水の音。

自分を支える中流の力強い腕と、温もりと、彼の匂い。

五感が得る現実の感覚に、次第に身体の痺れも吐き気も薄れていった。

「尋人…どうした？ 腕…のせいかな？」

骨折したことにより、発熱などで体調を崩すこともあるようだが、それにしても尋人の不調には尋常でないものを感じた。

何しろ、酷く魔されている声がして彼の部屋に入ったのだから。

「…おまえ、魔されていたから起こしちまったけど…、悪い夢でも見てたのか？」

「…っ…う…」

「尋人」

背中をさすってやりながら、辛そうに顔を歪めている中流に、尋

人は力なく頷いて見せた。

「…イヤな…夢を…」

「うん」

「…人が…殺される夢…」

「何だつて？」

「獣…襲われて…」

「」

「…見たこと…ない…獣で…」

尋人の説明に、中流の目が見開かれていくのを、幸か不幸か少年は気付かなかつた。

「…の…男の、人…、事故…時に…見た人…」

「尋人…」

「あの人…殺され…っ…」

駅の正面。

水飛沫を上げる噴水の傍。

そこにたっていた三人の大学生風の男達、その中の一人が獣に襲われていた。

眼鏡をかけ、丸まった背中に古びたりユックを背負っていた男だ。何度も後ろを振り返りながら、必死の形相で逃げていたのに、逃げ切れなかつた。

彼が、獣に噛み砕かれる瞬間。

獣の滑る牙と、滴り落ちる血の匂いまでが漂ってくるようだった。

「尋人…」

「なんで殺され…あの人…っなんで…」

「尋人…！」

痺れも吐き気も治まってきている一方で真っ青な顔の尋人を、中流は強く抱き締めた。

「そんなの夢だ！ ただの夢だ…誰も死んだりしてない…っ」

「…っ…」

「誰も死んでない…！」

「先輩……」

尋人は、自分を包んでくれる温もりにしがみ付きながら、込み上げて来る涙を必死に堪えていた。

「……怖かった……」

「ああ……でも、夢だから……」

中流はなおも腕に力を込めて繰り返す。

「そんなのは、ただの夢だから……!!」

\*\*\*

その深夜。

怯える尋人をどうにか寝かしつけた中流は、部屋の外で従弟に電話をしていた。

自分の予想が外れていなければ、あの従弟はきつとまだ起きている。

出来れば、自分の予想など当たって欲しくはなかったけれど、裕幸はコール二回で出てしまった。

『中流さん？ どうしたんですか、こんな時間に』

「……おまえこそ、なんでこんな時間まで起きてるんだ」

『それは……』

言葉を濁す従弟に、中流は自嘲した。

バカだ。

これ以上のことには口出ししないと云ったばかりなのに。

「……裕幸。尋人がマズイものを見た」

『尋人君が？』

「見たことのない獣に人が殺される夢だ」

『……』

「それも、今日の事故の時に見た男だって言うんだ。裕幸。……何があった……?」

中流の問い掛けに、裕幸はしばらく言葉を探しているようだった。兄弟相手に嘘がつけないことは解っているから、なるべく刺激の少ない言葉を選ぼうとしていたのだろう。

『……妖獣です。人を襲いました』

『……それで』

『襲われた大学生は…亡くなりました。男性です』

『……』

『妖獣は、いま兄さん達が追っています。人を襲っていないながらもほとんど死臭を感じさせないので発見するのは難しいと思います』

『……そうか』

『中流さん、大丈夫ですか？』

『ああ…』

大丈夫かと問われて、頷くけれど、その力の無さは裕幸の不安を煽るだけだった。

『中流さん、明日、そちらにお邪魔してもいいですか？』

『…おまえが…？』

『ええ。父さんが感じた妖の気のこともありますし…、もし尋人君の視た通りのが実際に起きたのだとしたら、彼の視たものを確認したいんです』

『……解った』

『ただ、忘れないで下さい。尋人君が妖に狙われているわけではありません。それは確かなんです。……信じてください』

『解ってる』

それには即答し、彼らは電話を切った。

明日来ると言うのなら、他の話はその時でいい。

『……』

中流は、電話を手に持ったままその場に崩れ落ちた。

『…っ……なんで…』

尋人が妖の夢を見た。

その意図するところに、中流はとてつもない不安を禁じ得なかつ

た。

## 貴方の翼が堕ちても 七

「はい。済みません、そういうことなんで休ませてください。はい。

はい、失礼します」

会社への電話を終えて受話器を置くと、背後から尋人の小さな声が届く。

「ごめんなさい…僕のせいで…」

「気にするな」

今にも泣きそうな顔をする少年に、中流は薄く笑って、その頭を撫でてやる。

「俺がそうしたいから休むんだ。おまえのせいなんかじゃないよ」

「…済みません」

「詫びられるよりは感謝されたいかな？」

おどけた口調で言う中流に、尋人は虚をつかれるが、すぐに相手の気持ちを察する。

「……ありがとうございます」

そうして向ける笑みに、返される笑み。

彼らが過ごす部屋には、中流の希望でテレビが付けられない代わりに、尋人の好きなミュージシャン“レジェンド”の曲が流れていた。

中流が家の仕事をしている間、最初は気を遣っていた尋人も「大人しく座っている」という恋人の命令に従って、居間のソファで本を読んでいたのだが、それを読み終えた、ちょうどその時。

まるでタイミングを計ったかのように鳴らされた来客のベル。

「悪い。出てくれるか？」

「はい」

浴室の方から聞こえてくる声に即座に応えて、尋人は動いた。



「はい、どちら様ですか？」

インターホンで声を掛けると、返って来たのは思い掛けない人の声。

『おはよう、尋人君』

その穏やかに、優しく響く声は、間違いなく大樹裕幸、その人だ。「先輩、裕幸さんです！ 開けますね！」

言いが早いか、素足で玄関に立つと、手早く鍵を外して戸を開けた。

「おはようございます！」

「おはよう」

顔を見合わせて、もう一度朝の挨拶。

「今日はどうしたんですか？ 先輩に御用ですか？」

「今日は尋人君に用があつて来たんだ」

「僕に？」

「ん。それで…中に入れてもらつてもいいかな」

「！ あ、はい、もちろんです！」

済みませんでしたと謝りながら裕幸を部屋に招き入れると、中流も浴室の掃除を終えて居間に戻ってきたところだった。

「よっ。朝から悪いな」

「いいえ。早い時間の方が、こちら都合が良いですから」

言い合う二人は、その距離を詰めると、小声で何かを囁いた。

裕幸が告げると、途端に中流の表情が歪む。

中流が返すと、裕幸の表情が曇る。

二人の、二人にしか判らない遣り取りに小首を傾げた尋人は、同時に胸に生じる鈍い痛みを自覚してしまった。

「…」

中流と裕幸は従兄弟同士。

実の兄弟のように育ってきた彼らの仲の良さは、それこそ最初から解っていることなのに。

「……………」

バカだなあ…と尋人は自分のことを思う。

こんなことで、中流から忘れられているように感じてしまうなんて。

「出流さんは帰って来たがっついていましたけど、中流さんに邪魔者扱いされるのは哀しいからって家に泊まって行きましたよ」

「そりゃ賢明な判断だ」

どう話が続いていったのか、中流の言い捨てるような台詞に裕幸が笑って、二人の話は済んだようだった。

中流は珈琲を淹れてくると言ってキッチンに入っていく。

「座って待っててくれ」

リビングのソファを指して言う彼の後に、尋人は慌てて裕幸に座るよう促した。

淋しいと感じている気持ち。

裕幸に対して、…嫉妬にも似た気持ちを抱いていることを気付かされたくなかった。

「どうぞ座ってください。僕、先輩のお手伝いして来ます」

「あ、尋人君」

キッチンに向かおうとした少年だったが、しかし裕幸の穏やかな声に呼び止められる。

「片腕じゃ大変だよ。中流さんは、そんな君に仕事を手伝わせる人じゃないから」

「あ…」

「ね？」

だから隣に座ってと言われれば、尋人には拒む理由がなかった。

骨折したこの腕では、確かに中流が働かせてくれるわけがない。

やっぱり裕幸は中流のことを解っているのだと思いきらされたように、俯く少年に、裕幸は苦笑交じりに微笑んだ。

全てを見抜いているような、穏やかな眼差しと共に。

裕幸が、昨夜の夢で自分が魔されていたことを知っているのだと尋人が知ったのは、それからすぐだった。

そして、そんな尋人を心配した中流が裕幸を呼んだのだと言うことも知る。

「俺と話していると気持ちが悪くつて言ってくれる人が多いんだ。だから、尋人君の役に立てるんじゃないかなと思って」

そう説明する裕幸の言葉には、尋人も素直に頷けた。

どんな人が裕幸に話すことで救われているかは解らないが“聖域”を形にしたような裕幸の存在は、ただそれだけで相対する側の心を落ち着かせてしまうだろう。

「だから、尋人君には辛いことかもしれないけれど話してくれるかい？ 君が、昨日の事故の時に見た三人の男の人達のこと」

「…あの人達のこと？」

「昨夜の夢 ひどく怖い夢だったと聞いているけれど、昼間に実際に見た人が夢で殺されるなんて不気味だろうし、…俺、実は夢占いが得意なんだ」

「」

「っ」

隣で中流が吹き出しそうになったのが解った。

慌ててこらえたようだったが、裕幸が夢占いを得意としているのは本当の話だろうか。

「だから、まずは昼間に見た人達のことを教えて欲しいんだ。どんな服装だったとか、特徴とか…、なるべく詳しく」

「特徴、ですか…？」

夢占いに、何故、昼間のことまで知る必要があるのかと疑問に思ったが、そう言うのも憚られて駅前の光景を思い浮かべた。

と同時に裕幸に手を握られて、一瞬、そちらに意識が引き戻されるが、向けられる真っ直ぐな瞳を見返すと、不思議なほど澄んだ気持ちで、記憶はあの場所での光景を蘇えらせていった。

尋人は語る。

駅前の噴水広場。

四人くらいの小学生がリュックを背負って駅に走っていく姿。ベビーカーを押して歩く夫婦。

腕を組んだ恋人達。

噴水の前の、三人の大学生。

「……」

一人は長髪を後ろで一つに結わえ、浅黒の肌に黒のタンクトップ。二人目は、眼鏡をかけた知的な青年だ。

そして、三人目。

根暗な雰囲気が高く、淀んだ空気を纏い、丸まった背中には古びたリュック。

夢の中、獣に殺された彼。

「尋人君。夢で見た獣のことも覚えているかな」

「え……」

「色は、何色だった？」

「色……」

問われて、思い出そうとすると、途端に背筋が寒くなり身体は震えた。

だが今までよりも強く握られた掌が、まるで守られているようで、尋人は勇気を出す。

思い出す。

「色は…黒っぽかったです…黒じゃないんだけど…」

「姿は？ 犬に似ているとか、鳥に似ているとか」

「…犬…でもすごく大きかったです。虎とか…そういう感じでした」

「そう…、ありがとう」

思い出せる限りの映像を思い浮かべて答えた尋人に、裕幸は優しい笑みで礼を言う。

これが夢占いなら、礼を言うべきは自分のはずなのに違和感を覚えたが、まだ占ってもらう前に感謝するのも奇妙な話だしと、複雑な気持ちで、居心地が悪くなる。

「あ、あの…裕幸さん。夢占いの結果…、どうですか…？」

「うん…ちよつと難しいけど…、尋人君、噴水の前の男の人達に“怖い”と感じたりしなかつた？」

「はい、ありがとうございます。」

裕幸の指摘にハツとする。  
「思いました！ だって全然雰囲気の違いで…三人で…何か、変だつたから…」

「その“怖い”っていう記憶が、事故のショックと重なって怖い夢になったんじゃないかと思うよ。事故なんて滅多に遭遇するものではないから、気持ちが不安定になるのも当然だし、あまり気にしない方がいいかもね」

「そうなんだ…」

「まあ、素人の夢占いだから、どこまで当たっているかは自信ないけれど」

苦笑いの表情で言う裕幸に、尋人は左右に首を振った。

「裕幸さんに言われたら、その通りって気がします。…なんか、安心しました」

言いながら安堵の息を吐く尋人に、中流も表情を和らげ、裕幸と笑顔を見合わせた。

「それに“死”の夢は大半が良い事の前兆だと言われているんだ。尋人君にも、きっと近い内に良い事があるよ」

「はい、ありがとうございます」  
ペコリと頭を下げると、裕幸の笑顔はいつそう優しくなる。

尋人の内の不安を完全に消し去ってしまうだけでなく、その心を暖かなもので満たしてくれるような、美しい笑顔。

やっぱりこの人は何かが違うと、尋人は尊敬にも似た気持ちで裕幸を見返した。

それからしばらく六条家で尋人との会話を楽しんでいた裕幸だっ

だが、昼前には用事があるからと立ち上がった。

だが、その直後。

「そういえば兄さんが、中流さんから佐伯さんの写真集を借りてきてくれて言っていたんですが」

「佐伯さんの？ だったら何冊があるけど……どれだ？」

「……何て言うタイトルだったかな。写真を見たので表紙は覚えているんですが……」

「だったら部屋に行くか？ 直接見たほうが間違いないだろ」

中流とそのような話をして、二人で中流の部屋へ上がっていった。尋人は、その間に珈琲カップなどを片付けてしまおうと動き始めたが、自分の夏休みの研究課題を思い出し、中流が持っている写真集というのに興味を惹かれる。

頼めば自分にも見せてくれるだろうかと思い、片手ながらも急いでカップを流し台下げて階段を上っていった尋人は、しかし聞こえてきた声に足を止める。

「……から、念のために中流さんにも見てもらいたいです。………  
どうですか？ 見覚えのある人達ですか？」

「……いや、見たことない」

「そうですか。……後で竜騎や、城島先輩達にも確認してみます」

「城島にも？ ……あ。だったら使っていないカメラあるぞ？ まさかあいつらにもこの方法で見せるわけにはいかないだろ」

「そうですね。……ポラロイド、使えますか？」

「ああ、問題ない」

写真集を借りているという会話では、決してなかった。

見覚えがあるとか、ないとか。

見せるとか、方法がどうだとか。

「……？」

それ以上、中流の部屋に近付くことも、離れることも出来ずに、悪いことと知りつつ二人の会話を盗み聞く結果になってしまった尋人は、すぐに自分の行為を後悔した。

「…それにしても困りましたね…、まさか尋人君が、昨夜の状況をあれほど正確に夢に見ているなんて…」

「…間違いないのか？」

「…残念ながら、尋人君が見たのは間違いなく妖獣です。殺された男性も同じですし…、恐らく妖獣の形態も尋人君が見たままでしょう。…死臭がせずに追跡出来なかった俺達にはとても貴重な情報になりますけど…」

「…なんで尋人が妖獣なんか夢に見るんだ…っ…？」

「……解りません」

「裕幸…」

「すみません。けれど…本当に、狙われているわけでもない尋人君が妖獣の夢を見るなんて、通常では考えられないことなんです。…人を食らった獣から死臭が感じられないというのも異常ですし…、今回のこれは、一筋縄ではいかない事態だとしか言いようがありません」

「…」

「…まだ話せないという中流さんの気持ちも解りますが、…尋人君には、一日も早く話した方がいいような気がします」

「……」

「夢も、二度、三度と続くかもしれない。少なくともこの男性には、一緒にいた友人が二人いるんですから」

「……解ってる。…けど…」

「中流さん…」

「解ってるけど…、…尋人には話したくないんだ…っ…」

中流の悲痛な声に圧されるように。

「…っ…」

尋人は足音を立てぬよう、息さえ殺しながら下がっていった。階段から足を外し、倒れこむようにリビングのソファに座った。それきり、焦点すら定まらない。

「…先輩……？」

いまの会話を、どう捉えればいだろう。

あの二人の会話の意味は？

…解らない。

解らないけれど、解るのは。

…尋人には話したくないんだ……っ……

解るのは、中流は尋人に話したくないのだということ。  
それだけだ。



## 貴方の翼が堕ちても 八

何となくではあったが、中流の家族に秘密がありそうなことには  
気付いていた。

中流本人もそうだけれど、兄の出流や、従兄弟の大樹兄弟には“  
不思議”が漂っていたし、身近に接して知れば知るほど、彼らが“  
普通”だとは思えなくなっていた。

それでも、何かあるなら、いつかは中流が話してくれるだろうと  
思っていたし、隠し事などないのだと、信じたかったのだ。

…尋人には話したくないんだ……っ……

だから、盗み聞きという形で聞いてしまった中流の言葉は、尋人  
の心を苛んだ。

その上、死臭だとか、狙われているだとか。

昨夜の状況。

殺された男性。

あと二人。

「……っ……」

ヨウジユウ、とは何か。

彼らはどんな秘密を持っているのだろう。

中流は何を隠している？

怖い想像ばかりが膨らんで、尋人は中流の顔が見られない。

裕幸が帰って、六条家に二人になってしまってから、少年は自分  
の部屋に閉じこもったきりだ。

いつもならば、一分、一秒だって惜しむように中流との時間を持  
つ尋人の、そんな様子に、だが中流は「今は顔を見せない方が良さ  
そうだ」という直感で、部屋に近付くことはなかった。

中流にとって、正しい予測は出来なくとも外れることの無い直感

だけが、彼の秘密を裏付けているのだから。

そうして、同じ家にいながら互いの目に触れない時間が続く。気晴らしにと開いた課題が進む気配も一向になく机に突っ伏していた尋人は、不意に鳴り出した携帯電話に慌てて手を伸ばした。

もしかして中流だろうかと胸が騒いだが、着信表示には友人、菊地武人の名前。

「菊池君…?」

心なしか安堵の表情で通話ボタンを押すと、途端に友人の聞き慣れた声が飛び込んできた。

「倉橋！ 数学の課題っ、一八ページの問四！ 答え教えてくれ！」

「え…課題？ 数学…って」

言われたことを復唱しながら机の上から数学の課題を探し始めるが、今まさに手元に広げているのがそうだと気づき、一人きりの部屋で恥ずかしくなる。

「うん…数学の一八ページの…」

「問四！」

菊地の指定した課題を探すためにページを戻す。

夏休みの後半には皆で旅行に行こうという計画があるため、課題は早め早めに終わらせるのが中流との約束だったこともあり、一八ページ目まではかなり戻らなければならなかった。

「…」

旅行…行けるかな、と思わず自分の考えに沈みそうになった尋人は、

「倉橋、見つかったか？もしかして、まだそこまでやってない？」

菊地の早口に我に返り、慌てて一八ページを開いた。

「あつたよ、一八ページの問四」

「じゃあ答え！」

「答え…って、でも自分でやらなきゃ意味ないと…」

「ここまでは自力でやったんだ！この問題だけ解ンねーんだ、一問くらいいいだろ!？」

「…でも、この前の問題が出来たんだつたら問四も簡単…」

『はあ？』

「だってこの問題、考え方まるつきり同じだよ？ 単位を揃えたら前の問題と同じ公式に当てはめるだけ…」

『』

「…もしかして、単位を揃えるの忘れてない？」

『今やってるっ！』

ムキになって言い返してくる友人がおかしくて、つい笑ってしまった。

「菊地君らしいっていうか、らしくないっていうか…」

『笑うなっ、集中出来ねえ！』

「ごめん、ごめん」

照れた友人に怒鳴られ、尋人は口を閉ざして笑いを噛み殺した。

だが、三十秒ほどで聞こえてきたのは、

『…んだよこれ、簡単じゃねーか』という不貞腐れた声。

また怒られると解っていないながらも、込み上げて来た笑いは抑えられなかった。

『おまえ笑い過ぎっ』

「だって…だって菊池君…っ…」

「ああもう切るぞ、用無くなったから！」

電話の向こうでは、きつと真つ赤な顔をしているのだろうということが容易に想像出来てしまい、可笑しかったのと。

…中流のことで沈んでいた気持ちが、少しだけ浮上したことが、有り難かった。

思えば、自分が落ち込んでいる時にはいつだって菊地が励ましてくれている気がする。

「待って菊池君、…あのさ…、今から遊びに行ってもいいかな？」

『、俺はいいけど、大丈夫なのか？』

「大丈夫…って？」

『おまえンとこの過保護キング。怪我した倉橋が外出するのOK出

すか？」

「あ……」

自分の怪我のために仕事を休んでくれた中流を避けることを、申し訳ないと思う。

だが、今は平気な顔をして中流の傍にすることが出来ない。

「……大丈夫。じゃあ、今から行くから」

「おう」

相手の返答を待つて電話を切った尋人は、カモフラージュのために課題を鞆に入れると、それを持って部屋を出た。

「……先輩」

居間で新聞を広げていた中流は、部屋から出てきた尋人に表情を和らげたが、彼が鞆を持っているのを見て小首を傾げた。

「出掛けるのか」

「はい。菊地君のところに行つて来ます。課題、一緒にやろうと思つて」

「そつか。じゃあ菊地の家まで送る」

「いえつ、いいです、外歩きたいし」

「けどその腕じゃ何かあつた時に……」

「何もないですよ、菊池君の家まで何時間も掛かるわけじゃないですから」

「けど……」

本人に言えずとも、今は尋人を一人にしたくない中流は、彼が一人で外出するということをまだ渋っていた。

そしてそれは、中流が知らないだけで、尋人には気付かれている。どうしても一人で行かせたくないなら理由を話してくれればいいのにと、少年の内側に募る負の感情。

先輩はズルイ……、そう思うと、胸に苦いものが広がっていく。

「……本当に大丈夫ですから。……それとも、僕が一人じゃそんなに心配ですか？」

「……」

いつにない冷めた物言いに、中流は目を丸くする。

それを直視できずに踵を返すと、それきり、足早に玄関を飛び出した。

後ろは振り返らない。

いま、中流がどんな表情をしているかなど知りたくなかったから。

「先輩のバカ……」

追いかけてくる気配もない。

少年は掠れた声で呟くと、幾種もの複雑な感情が入り混じった息を吐き出した。

それから数十分後。

尋人を迎えた菊地は、彼の態度がどことなくおかしいことに、すぐに気付いた。

だが同時に、それを知られたくなさそうであることも気付いてしまったから、出かけた言葉を飲み込んだ。

尋人のこの表情は、以前にも見たことがあった。

記憶を失くして、苦しんでいた頃。

何も解らずに、六条中流の名前を閉ざされた時間の中で追っていた時の、切ないもの。

…六条中流と何があった……？

声に出したくて。

けれど言えない、問い掛け。

尋人が鞆の中に課題を入れてきたと知り、ならばそれを終らせようと提案した。

課題をやつていれば、その間は、何があつても尋人にそんな顔をさせずに済むと思ったから、菊地にはそれしか出来なかったのだ。



## 貴方の翼が墮ちても 九

夜の七時を回って、外は次第に闇に支配されようとしていた。

菊地の祖母の言葉に甘えて夕食もご馳走になった尋人は、今まで以上に中流の顔が見辛くなっていた。

だが、これ以上、菊池家に居座ってはこちらの家人に迷惑を掛けてしまうし、本格的に暗くなってから帰ると言い出せば、恐らく菊地は泊まっていけと言うだろう。

そう言われて、断り切れる自信はない。

このまま一晩、中流の顔を見ずに過ごしてしまつては、ますます彼の顔が見られなくなってしまつだろうに。

「……」

それだけは駄目だと己を叱咤し、尋人は立ち上がった。

「そろそろ帰るね」

告げると、菊地はわずかに顔を歪めた。

「こんな時間になって大丈夫か？ いくら夏だつてすぐに暗くなるし……、帰るのなら六条中流に迎えに来てもらつとかさ……」

「うづん。歩いて帰れるよ」

歩きながら、中流に会う覚悟を決めたいと思う尋人に、菊地はますます顔を歪めた。

彼自身、言わないと決めていたけれど、もはや我慢も限界。

どんなに尋人が言い繕おうとも、菊地の目は誤魔化されない。

「倉橋、……おまえ、もしかして六条中流と何かあったのか？」

「え……」

「今日のおまえ、すごいヘンだぜ？」

「……」

菊地の言葉に、どこが？ とは返せない。

嘘はつけない、そう思つたら口を閉ざす他なかった。

「うちに来るつて言つた時もそうだし、一緒に課題やつてる時だつ

て、おまえ無理に平気なフリしてンの見え見えなんだけど」

「…そんなに、無理してるように見えた？」

「ああ」

間髪を入れない菊地の返答には、苦笑するしかない。

「…どうして菊地君には、何でも解つちやうのかな…」

落ち込んでいる時に励ましてくれたり。

欲しい言葉をくれたり。

「解つちまうんだからしゃーねえだろう」

ぶつきらぼうに言い返してくる、その態度も有り難い。

「あいつとケンカしたのか？」

「…ううん。ケンカなんて…」

ケンカの方がまだ良かったと思う。

こんなのは、まるで騙し合いだ。

知っていると言えればいいのに、話したくないと、それを拒んだ

中流の言葉が本心であると解るから、知らないフリ。

今まで誰より傍にいと信じていた分だけ、気持ちの通じない現

在がこんなにも哀しい。

「…ケンカじゃないんだ…ただ…少し、先輩の顔…見れないだけで

…」

「…アイツの家に帰り辛いんだったら、俺ンちにとま…」

「それはダメ！」

「倉橋？」

「それは…言わないで」

「…」

言われたら、断り切れる自信がない。

だから最後まで言わせずに遮った。

「…今日、菊池君のところを逃げ場所みたいにしちゃって…ごめん。

それだけでも甘え過ぎなのに、もうこれ以上は…」

「甘えればいいだろ？ 俺は全然構わないんだし…！」

声を荒げる菊地に、尋人は強く首を振った。



それは出来ない。

そこまで弱くなれない。

「これ以上、甘えたら…本当に、先輩の顔を見られなくなるから」

「」

「それはイヤなんだ。…先輩の隣に帰れなくなるのは…それだけは、もう…」

中流のいない日々の悲しみは、もう二度と抱きたくない。その思いを今更再確認して、ようやく気付く。

そうだ、それだけは絶対に繰り返したくない。

「」

離れたくないなら、やるべきことは一つ。

最初から決まっていたはずだ。

「…いつも、菊池君には助けってもらってばかりで…ごめんね。それに、ありがとう」

「倉橋…」

「菊地君と話していたら…、不思議なんだけど、先輩と話す勇気が湧いてきた気がする。…先輩と一緒にいられなくなるのはイヤなんだから…、だったら、ちゃんと話せばいいんだよね」

「…」

「また、教えてもらった」

「…倉橋…」

「ありがとう」

向けられる笑顔に、笑い返す。

「…巧く笑えているだろうかと、不安になりながら。」

「じゃ、またね」

「ああ。気を付けて、帰れよ」

応えて、遠ざかる姿を見送る。

決して届かない場所に帰る背中。

「…ったく……」

菊地は深く息を吐くと、その場にしゃがみ込んだ。

「だから…恨みたくなんだる修司…」  
いまはどこにいるのか。

傷害の罪で警察に連れて行かれた従兄を思い出しながら、菊池は自嘲した。

恨めるなら恨んでしまいたい。

そんなこと、決して出来ないと解っているから尚更に。

尋人に出逢うきっかけをくれたのは、他の誰でもない、彼だから。

「……俺も早くコイビト欲しい……」

泣きたくなるような細かい声は、しかし今夜は、薄闇に紛れて掻き消されるだけだった。

「そつだ…ちゃんと先輩に聞こう」

覚悟を決めた尋人の足取りは速かった。

本人が話したからないことでも、彼の傍にいるためなら、無理やりでも聞き出そう。

中流の顔が見たい。

声が聞きたい。

彼の抱えているものを、ちゃんと知りたい。

そつと決めたら、迷う時間も惜しかった。

尋人は折れた腕を庇いながらも小走りに六条家への道を進む。

まずは何を話そう。

裕幸との話を盗み聞いてしまったことを最初に謝ったら、順番に質問する。

昨日の事故の時に見かけた三人組のこと。

夢に見た獣。

…あの男の人が、どうなったのか。

「…」

恐ろしい答えが待っているだろうことも、気付いている。

だから教えて欲しい。

自分が何を見てしまったのか。

「もう…逃げない…」

絶対に逃げない。

中流からも。

現実からも。

「先輩…！」

先ほどまでの怖れが嘘のように、今の尋人は中流に会いたい気持ちでいっぱいだった。

だから家路を急いだけれど、夜の闇は彼の帰宅を待たずに外界を支配する。

まだ月も揚げない。

星の灯火もささやかな、夜の時間。

「何時だろ…」

ポケットの携帯電話を取り出して時間を確かめようと足を止めた直後だ。

「…？」

何故か感じた違和感。

辺りは住宅街。

どの家にも明かりが点いていたし、家族揃って夕食を取る光景も数多く見られただろう。

そんな閑静な住宅街の一角から。

「！」

不意に、薄闇を劈く男の叫び。

「え…」

それを尋人が聞いてしまったのは何の因果か。

「たっ…助けてくれ…っ…！！ ギャあああああ！！！！！」

「っ！？」

悲鳴に続く、有り得ない轟音に、尋人は体を竦ませた。

咄嗟に周囲を見渡すも、他に人影は無い。

何故、誰も家から飛び出してこない？

あんな悲鳴、只事ではないのに。

あんな音、何かが発射したかと思ってもいいはずなのに、どうして誰一人近づいてこないのか。

「……」

何を見たわけでもないのに怖くなる。

「え……！」

鼻先を掠めた鉄臭さ。

嫌な予感がした。

近づいてはいけなさと、頭の奥で警鐘が鳴る。

……ダメだと判っていたのに、足が向かってしまった理由など、尋人には解らない。

解らないまま、見てしまった。

「………っ!!」

獣だ。

夢に見た、あの獣だった。

黒ではないのに、闇に染まる暗い色。

滑る牙に、今は肉を啜え。

「……」

肉を。人の腕を。

「ひっ……っ!!」

叫びよりも激しく、強く、腹の底から込み上げて来る不快感が少  
年に嘔吐させた。

そればかりか、獣の足元。

壊れた人形のように捨てられたそれは、今まで生きていたはずの  
人間の胴体。

「っ……っ……」

もう何も映さないだろうに、大きく見開かれた瞳が尋人を真っ直  
ぐに向いている。

真っ赤な身体。

血に染まり、噛み砕かれた四肢を投げ出して。

「あ……ああつ……あ……つう……あ……」

なぜ、こんなこと。

……なぜ、知っている。

その男は、昨日の男。

「ああつ……！！！！」

また殺された。

昨日の事故、駅前の噴水広場。

あの場所にいた男が、また一人、殺された。

獣に。

夢に見た、この獣に。

「ああ……あつ……なんで………なんで……！！」

もはや思考も乱れ、言葉すら選べない尋人を視界に入れた獣は、

男の腕を吐き捨て、ゆっくりと近付いてきた。

「……！！」

血を滴らせる口元には、肉食動物に良く似た鋭利な牙。

虎のようだと思ったけれど、虎よりもよほど凶悪で残忍な容貌だ。

闇色の毛並みは固く、不揃い。

巨大な手足がアスファルトを蹴る。

「……っあ……あつ……」

助けてとも叫べずに、震える足を後ろに下げるが、それも崩れて

体は倒れる。

「……っ」

獣が笑った気がした。

自分も食べられるのかと、頭の中が真っ白になる。

(……先輩………！)

最後に彼と会いたかったと胸中に叫び、もう最期だと、せめても  
の抵抗に、頭を腕で覆った。

だが、そんな彼に下ろされたのは獣の牙ではなかった。

……オマエ……俺ト……同ジ……

降ったのは言葉。

そして、血の雫。

…オマエ 俺ト 同ジ……

獣は繰り返し、消えた。

「……っ！」

風に吹かれた塵のように、一瞬でその場から消え去った。

## 貴方の翼が堕ちても 十

獣は、同じだと言った。

尋人を、自分と同じだと言って消えた。

「……」

意味が解らない。

何をどうしたらいいのかも分からない。

無残に食い散らかされた、人間であったはずの肉の塊を前にして、冷静に考えることなど出来るわけがなかった。

同じ、とは何が。

自分が獣と同じとは、どういう意味だ。

「あ……っ……や……っ……」

助けて。

助けてと全身が叫ぶ。

もう獣はいない。

それでも、どうかこの場から連れ出して欲しい。

「先輩……っ……！」

必死の叫び。

それに応えたのは、尋人が求めた彼ではなかったけれど、救い人は確かに彼の声を聞いていた。

「参ったね……、まさか人間が残っているなんて」

「……！」

言っている内容ほど深刻ではなさそうな声音で、その男は近付いてきた。

「ん？ ああ、君は六条少年の“追憶の君”か。　そうか、だから俺の境界が弾けなかったのかもね。大丈夫？」

陽気に笑う男は、一八〇は優にあるだろう長身を屈めて、尋人と距離を縮めた。

夜の闇にも明るい栗色の髪と、同性でも見惚れてしまう魅惑的な

美貌。

尋人はこの男を知らない。

だが、男は尋人を知っている。

「…あ…貴方は…」

「ああ、そう言えば俺とは“初めまして”だったっけ？ どうもこんばんは。ワタクシ文月佳一と申しまして、裕幸君の担任の先生です」

「」

「信じてない？ 本当に松浦高校の教師なのよ？ あとは…そうだなあ。時枝先生とは大の仲良しだし、出流君と裕明君には多少嫌われ気味だけど、そうそう、短い期間ではあるけど中流君の家庭教師してたこともあるね。残念ながら勉強以外のコトは教えてあげられなかったけどさ」

次から次へと出てくる聞き慣れた名前と、この男の独特の言い回しが、人の屍を目前にしているという恐ろしい現実から尋人の意識を逸らし、気持ちを落ち着かせていった。

その上、彼の位置は尋人の視界からちょうどそれらを隠しており、尋人は男の顔だけを見ていれば良かった。

「多少、性格に難有りとは良く言われるけれど、敵じゃないから安心してくれる？」

小首を傾げて聞いてくる男に、戸惑いはあつたものの、コクコクと頷くことで応えた。

本人が言うように性格に難があるうと、このような状況に在ながら口調が暢気であろうとも、目の前の男が唯一の味方であることは信じられた。

悪い人ではない、それは尋人の直感。

そんな気持ちが出来たのか、文月佳一はそつと微笑むと、辺りをぐるりと見渡した。

「さて、…誰が近いかな」

低く呟き、何かも見つけたように変化する表情。



「フフ。なんてタイムリーな」

面白そうに言うと、次いでポケットから携帯電話を取り出し、ボタンを押す。

しばらくして繋がったのか、佳一はますます楽しげな顔になった。

「やあ、元気かい？ まさか俺からの電話に素直に応じてくれるとは思わなかったよ。 ああ、そう言わないでくれなにか？ 君に嫌われるのは僕だって心が痛む。用も無しに君の邪魔をするわけがないだろ？」

「そうだよ、君に迎えに来て欲しい子がいるんだ。君が一番近い、五分も掛からずに着くよ、幸町の三丁目だ。 誰

つて、六条少年の“追憶の君”と言えば通じるかい？ あ、誤解しないでくれ、誓って手は出していないから。妖獣の気配がしたから

結界を張ったんだが、この子も一緒に困ってしまったんだ。逆に妖獣には逃げられるし参ったね

「ふふふ、携帯はこのまま繋いでおいた方がいい。何せ結界の中だ。君は自力じゃ入って来れないだろ？」

「そう怒らないでくれ、君を想って言っているんだから。もう喋るなって？ 相変わらず酷なことを言うねえ、可愛い教え子と話せる貴重な時間なのに」

その台詞に相手はどう反応したのか、佳一の表情がますます緩んでくる。

「その通りをまつすぐおいで。信号で右。 そりゃ解るよ、君の気を読むくらいわけないんだから。 ははは、また怒ったのかい？」

「本当に君は可愛いな っ…、とうとう切られたか」  
くすくすと笑う男は、切れた電話をしまつと、片手を胸の高さまで上げて指を動かしている。

そこにどういう意図があるのか尋人には全くの不明だが、彼の指の動きには一定の規則があるのは見ていて解った。

「結界の中だと言ったのに電話を切られてしまったからね。あの子を招き寄せているのさ」

尋人の視線を感じて、そう説明する佳一は、

しばらくして「ほら、来た」と、尋人の背後を指した。

誰が来たのかと振り返った尋人は、同時に目を見開いた。

不機嫌極まりない表情で近付いてくるのは、時河竜騎、その人だったのだ。

「…竜騎さん…なんで…」

「…」

尋人の掠れた呟きに、一時は顔を向けた竜騎だったが、次いでしやがんでいる佳一の奥に散在しているものの光景に顔を歪め、そのままの表情で睨まれた佳一は、軽く肩を竦めた。

まるで無言の内に竜騎の言葉を聞き取ったように。

「俺のせいではないと思うよ。俺はいつもと全く同じ要領で結界を張ったんだ。本当なら妖獣のみを取り囲んで、無関係の人間は一切隔離していた」

「…だが巻き込んだ」

「だから、俺のせいじゃないと思うよ、って」

「…」

感情の乏しい瞳で見据える竜騎と、笑顔で受け流す佳一。

二人の仲が悪い　もとい、竜騎が佳一を好ましく思っていないのは尋人の目にも明らかだった。

もちろん、佳一もそれを知っていて、だからこそ竜騎を構いたくて仕方がないのか。

「まあ、ここで俺達が言い合ったところで何の意味もないんだ。時河、君はこの子を裕幸君の家まで送ってくれ」

「…」

「まさか、この俺の頼み事を断つたりはしないだろう？」

にこやかに告げる男とは対照的に、竜騎の顔は更に歪んでいった。きつと、佳一の頼み事など聞きたくないに違いない。

それでも、すぐに断らないのは、相手が尋人であり、行き先が裕幸の家だからだ。

「俺はこの後始末があるから離れられないが、いつまでも尋人君をこんな場所に置いておきたくはないだろう？　それに、裕幸君に

会う口実をわざわざ作ってあげるんだ、これを無駄にする手はない  
と思わないか？」

「……」  
ダメ押しをしてくる佳一に対して、竜騎はただ一度、軽い息を吐  
くと、尋人の目が決して男の背後に向かないよう勢い良く自分の方  
へ引き起こした。

「行くぞ」

「え……あ、あの……」

「行きなさい。ここは君が在ていい世界ではないから」

「」  
ヒラヒラと手を振る佳一の言葉に重なるように思い浮かんだのは、  
何故か中流の姿だった。

「……」

無言の竜騎に、決して後ろを振り向かないよう腕を引かれて歩き  
出した尋人は、それからしばらくして聞こえてきた水の流れる音に  
ドキツとした。

全てを押し流すような激しい流れ。

それは、尋人までも押し流すように、いつまでも耳から離れな  
かった。

尋人が竜騎に連れられて大樹家に向かう途中の小道で、彼らの傍に車が停まった。

慌しく下りて来たのは裕幸。

運転席には、彼の兄・裕明の姿がある。

「尋人君……！」

佳一からある程度の事情を聞いて彼を迎えに来たのだろう。

「尋人君……っ」

辛そうな顔で、裕幸の細い手が尋人の顔を包むと、その説明の仕様が温もりに、現実が襲い掛かり泣きたくなる。

思い出される。

自分が、何を見てしまったのか。

「……っ……い……裕幸、さん……っ」

「……っ……ごめんね……」

頭上から降る言葉。

抱き締められて、鼻腔をくすぐる甘い匂い。

「ごめん……ごめんね……尋人君……っ」

「……っ……」

何度も、何度も謝られて、尋人は裕幸の袖を濡らす。止めどない涙で濡らした。

\*\*\*

住宅街から多少離れた土地に広がる森の奥に、一軒だけ立つ西洋風の邸、それが大樹家だ。

夜闇に覆われたこの時間帯、周囲を照らすのは夜空に瞬く星の灯火と、ようやく東の空に浮かんだ十六夜の月。

にも関わらず、この微かな光りの中、大樹家ははっきりとその存在

を誇っていた。

今までにも何度か訪れたことのある家屋は、だが今夜は別世界。尋人は黙って座っていることしか出来なかった。

閉じられた扉の向こうでは、十分ほど前にやってきた中流と、最後に現れた文月佳一が、この家の兄弟と真剣な面持ちで話し合っている。

「……」

それがどのような内容なのか、空間を隔たれている尋人には知る術がない。

そんな彼の傍には、竜騎がいる。

ここに尋人を連れてきたのが竜騎なら、隣の話し合いには彼も加わるべきではないかと疑問に思ったが、数分前にそれを聞いた尋人に、竜騎は低く、ただ一言を返しただけだった。

「……俺は関係ない」

「……」

関係ない 何に？ とは聞けなかったけれど。

これは大樹家と文月佳一にしか関りのないことなのだとなつたと納得するしかなかった。

無言の時を過ごす尋人達の部屋。

隣の喧騒はまるで聞こえてこなかった。

\*\*\*

「そんなのは俺達の勝手な事情だ！ 尋人はまったく関係ないんだぞ！？」

「解ってるよ。だが見てしまった以上は、それなりの判断を下す必要がある」

「そんなもの！ あんたがちゃんと結界を張っていれば防げたことだろうが！」

「まあ…それは確かに、俺に不手際があったとも言えるけれど」

尋人と竜騎を待たせている部屋の隣。

裕幸の能力によって完全に囲まれた空間の中で憤りを露にする中流を前に、佳一は眉を顰めながら続けた。

「でもね、俺の結界はいつもと全く同じ要領で張ったんだし、水の力も脆くなつてはいなかった。ということは、尋人君を弾けなかった原因は俺以外のところにあるんじゃないのかな」

「けど尋人が狙われてるんじゃないってことは裕幸が確認した！

アンタは裕幸を疑うつもりか！？」

「まさか。他の誰を疑っても、白夜だけは疑う理由がないよ」

「だったら……っ」

「何も原因が俺にないなら尋人君にあると決まったわけじゃない。

あの場所には、妖獣もいれば、殺された男もいた」

「」

「むしろ原因ならアチラ側にあると考えた方が自然だと思うけれど？」

どこか意味深な口調で返す男に、中流は言葉を詰まらせ、大樹兄弟と、もう一人同席している六条家の長男・出流が短い息を吐き出した。

「……っ……それにしたって、尋人を結界に囲んでアンタと遭遇させたのはアンタ自身だろ！？ そのアンタに尋人をどうするかなんて決められたくない！ 尋人は里族じゃないんだからな！」

「だが君は里族だろ、六条中流」

「」

「尋人君は君が選んだ相手だ。里族の伴侶となるなら、それは俺の配下につくということだろ？」

「けど尋人は……！」

「同じことを言わせないでくれるかい？ 俺は、君の何だっけ？」

「……っ……！」

物言いはくだけている。

その表情も笑顔だ。

だが強烈な力を持つ言葉は中流から言葉を奪う。  
無視し続けたいと願う現実を突きつけた。

「ん？」

そんな相手の反応に気を良くし、笑んだ口元をさらに緩め、重ねて問う。

「俺が誰だか、答えられない？」

「っ……」

他の誰かが、力ない息を吐き出し、しばらくの沈黙の後、声を上げたのは裕幸だった。

「文月先生。中流さんにそのような言い方は止めて下さい。それに最初の話しに戻りますが貴方に尋人君の処遇を決定されるわけにはいきません。尋人君には、まだ里界の話はしていないのですから」「へえ？」

その答えが意外だったように佳一はその場の面々を見渡した。

「里界の話をしていないって？ あの子を伴侶に選んでおきなगरा？ それを君達全員が認めているのに？」

「…尋人君はまだ高校生です。それに、中流さんがまだ話せないと言うなら、周囲がそれを強要することなど出来ません」

「確かにそれは正論だろうけれど。…君の意思なのかい、白夜」

「ええ」

「ふうん？」

樂しげな物言いで、佳一は続けた。

「まあ…君がそう言うならこの件は保留にしよう。あの子が里族になるとまだ決まったわけではないなら、今回の判断は君に一任するさ」

「俺は中流さんの意思を尊重します」

「…仕方ないね。それが白夜の意思なら」

裕幸をあえて白夜と呼び、それを強調する男の言動は、中流を筆頭に兄達にも不快感を募らせる。

もちろん佳一はそれを知っていて、煽っているのだ。

「とりあえず、こうして関った以上は、成り行きだけは見守らせてもらうよ。…万が一にでも俺の能力が必要になれば遠慮なく頼みにおいで」

「ありがとうございます」

「じゃあね」

片手を上げてその場から去ろうとした佳一は、だが唐突に呼び止められる。

「文月さん」

声を掛けたのは中流の兄・出流だった。

「先ほどの貴方の間に答えますよ。“貴方は俺達の神だ”とね。…だが忘れるな、貴方は神である前に他人。俺達の弟を貶めて、ただで済むとは思わない方がいい」

出流の言葉を、佳一は笑う。

「怖いねえ。何をしても構わないけれど、くれぐれも白夜を泣かすことだけはしないでくれよ？」

「肝に銘じておきましょう」

低い返答と楽しげな含み笑い。

そうして佳一は姿を消した。

「くそっ…！」

悔しい思いと共に殴りつけられた壁が泣き、出流と裕明の良く似た声が重なる。

「裕幸、アレはさっさともう一度生まれ変わらせた方が今後のためだ」

一字一句違わない兄達の台詞に、裕幸が困ったように笑った。

だが、いつまでもそうしているわけにはいかない。

「…」

このままでいいはずがないことを、もはや中流も理解せざるをえない。

「…」

「…」



兄達と、裕幸の視線を一身に受けていた中流は、それでもしばらく口を開くことが出来ない。

誰も、何も言わない沈黙。

けれどこの沈黙は、答えを急かすことも責めることもない。

静かに待つだけの、心地良いとさえ思える静寂。

しばらくして中流が出した答え、それは。

\*\*\*

どれくらい時間が過ぎただろう。

尋人が落ち着かない気持ちで、誰かが扉を開けてくれるのを待つ一方で、やはり竜騎は無表情のまま、ただ黙って尋人の傍に座っていた。

「……」

聞きたいことは山のようにある。

隣の部屋でされている会話の詳細もそうだし、あの獣のこと、夢のこと。

竜騎のことも、教えて欲しいと思う。

今度こそ話して欲しいと思う。

「……」

だが、尋人を散々に焦らし、待たせた扉がようやく開けられた時、姿を見せたのは、裕幸一人だけだった。

「…随分待たせてしまって、ごめんね」

「裕幸さん……」

童話などでよく見かける天の御遣いを実体化させたように綺麗な顔を、今は淋しげに歪めている裕幸は、尋人の傍で膝を折ると、いよいよ話が聞けるかもしれないことに緊張していた彼の手を握った。「…最初に謝らせて欲しい。…今回のこと、ちゃんとした説明も出せずに、巻き込んでしまって、本当に、ごめんなさい」

「え…えっ、裕幸さん…？」

深々と頭を下げる相手に、尋人は動揺を隠せない。

まさか裕幸に謝られるなど、思ってもみなかった、

「そんな…裕幸さんが謝ることなんて…」

「……いや、謝らなければいけないんだ。特に、もう一つの理由で」

「もう一つ…?」

聞き返す尋人に、裕幸は頷く。

「…俺は…君を巻き込んで、こんなことになってしまったのに…、  
なのに、それでも君に、君が知りたいと思うことを話すことが出来  
ない」

「え…」

「ごめん。…俺は、君に何も話せないんだ。あの獣のことも、夢の  
ことも…今夜のことも、何も」

「どうして…!」

思わず声を荒げると、裕幸は申し訳無さそうに目を伏せた。

竜騎だけが、眉一つ動かさない。

「なんでですか? どうして何も教えてくれないんですか? 僕だ

って…何も知らない僕だって、何かあるのはもう解ってるのに…!」

「うん…、でも話せない。中流さんがそれを望んでいないから」

「! だったら先輩に聞きます! 僕が直接聞きますから…!」

「中流さんは帰った」

「」

「君をうちに泊まらせてくれと言って、帰ったんだ。出流さんと一  
緒に」

「…っ…どうして…っ…」

どうして。

どうして。

「なんでですか…っ!?!」

中流の気持ちだが、解らない。

解らなくなる。

いままでの彼の言葉も、何もかも。

「ごめんね……」

「……」

聞きたくない。

そんな言葉が、裕幸から聞きたいわけじゃない。

だけど、本当に聞きたいことも。

聞かせて欲しい人も、ここにはいない。

「……うっ……」

裕幸の言葉を拒むように、何度も左右に首を振り続ける尋人を、

その場に居た二人はただ見つめる。

「……」

見つめて、泣きそうになる裕幸の肩に、竜騎の固い手が触れた。

どうして中流は何も話してくれないのか。

彼が何を隠しているのか。

…何一つ知ることが出来ないまま、中流は尋人の前から姿を消した。

あんな場面に遭遇し、怖がらなかつたはずのない恋人を抱き締めることも、顔を見せることさえないまま、中流は尋人を大樹家に残して去ってしまったのだ。

もちろん大樹家が今の尋人にとってはどこよりも 自分の傍よりも安全な場所だからという“理由”はあった。

しかし結果しか知らされずに、誰よりも信じ、想う相手にこのような態度を取られたということが、どれほど尋人を悲しませたか。

ガチャ…と遠慮がちな音がして、尋人を休ませた部屋から裕幸が出てくると、その正面ホールのソファで休んでいた竜騎は顔を上げた、

「…」  
「…」

視線が重なり、声には出さずとも伝わる言葉。

「…うん。尋人君、ようやく眠ってくれたよ」

裕幸が言い、ベランダに向かって歩を進めると、竜騎も立ち上がり、その後に続いた。

陽当たりを考えて設計された邸は、いま、明かりの消えた屋内に月影を敷く。

闇に灯る仄かな光りは心安らげる癒しの静寂 それにちなんで

“里界の月”と謳われ。夜も太陽を沈ませない“白夜”の名を持つ精霊。

その魂を継いだ裕幸は、ひどく哀しげな表情で十六夜の月を仰ぎ見た。

「……どんなに気が昂ぶっていても、俺の……“白夜”の力に触れたらすぐに心安らぐはずなのに……。……だけど尋人君は、ずっと泣いていた。……中流さんを信じる事が出来なくて、泣いていた……。……聖霊の力なんて、人の心の前には無力なんだよ……。……」

「……」  
そうして見せる、自嘲気味な笑み。

竜騎は何も言わずに聞いている。

「……それに、中流さんが尋人君に本当のことを話せないのは、……たぶん、俺のせい……」

裕幸の脳裏に思い浮かぶのは、傷ついた顔をした従兄の姿。

「……なんで俺には、おまえを守れる能力がないのかな……」

何の力も持たない両手を見つめて悔しそうに呟いた。

「……なんで俺は……。……おまえに護られてばかりなのかな……」

そんなことはないと言っても、顔を歪めて聞き入れようとはしなかった。

大樹の血を引きながら、裕幸や、兄達のような能力を持たない身体を悔やんでいた。

「中流さんは……。……優し過ぎるんだ」

「……」  
「……本当は、中流さんには……。……何も知られちゃいけなかったんだと思う……。……」

「裕幸」

「……」

後ろから腕に伸びてきて竜騎の手を避け、距離を取る。

「…ごめん竜騎…」

「…」

こんなこと、何の意味も持たないのは判っている。  
自分がそれを決めたからといって中流と尋人の間に生じた溝が埋まるわけでは決してない。

けれど、堪らなかつた。

自分の存在が、大切な従兄の。

大好きな人達の枷になっていることが。

「竜騎…」

もう、全部忘れてしまおうか。

自分の存在が悲しむ人を増やすなら、現在しがみ付いている全て  
のものを解放して。

竜騎を、解放して。

地球人として生きるのか。

里族として故郷に戻るのか。

中流だけじゃなく、大樹の血に連なる家族、兄弟たち皆の未来へ  
の方向性を定めることが、白夜の魂を継いだ己のなすべきことでは  
ないのか？

「…っ…」

だって、どう言い繕おうとも、これは間違いだ。

白夜が、人間としての時間を少しでも長く維持したいと願うこと  
など許されない。

白夜は 裕幸は黒天獅に選ばれた贄、それは生まれる前から定  
められていた、裕幸の役目なのだから。

「…竜騎…」

考えて、考えて。

悩んで。

裕幸は顔を歪める。

その手に掴まれた腕を、竜騎は引いた。

「…っ…」

その力に負けて抱き寄せられ、重なる影。

「竜騎……っ」

「……考えるな」

「」

腕の中、竜騎の瞳を見上げた。

深い闇色の、他に翳りも光りも持たない双眸。

そこに映るのは、裕幸だけだ。

「」

「」

絡む視線は、言葉よりも雄弁に想いを語る。

決して叶わぬ幻だと、知っていても。

「許せ」

静かな言葉に、重なる唇。

それ以上にはなれない哀しい触れ合いは、彼らの傷を深めるだけ。

「……っ……」

いつか白夜は黒天獅のものになる。

それは決して変えられない未来。

けれど、それでも願ってしまふ。

願わずにはいられない。

……傍にいたい……

……まだ、一緒にいたい……

その、たった一つの想いを。

\*\*\*

六条家のリビングで、中流は何もかも拒むように頭を抱えていた。

世界はすっかり深夜を迎え、外界には不気味なほどの静寂が広がっている。

今夜はもう休んだ方がいいと、共に帰ってきた兄・出流に奨められたのが三時間前。

その間に、久々に実家に帰ってきた出流が何をしたかなど知りたいたとも思わないけれど、兄があちらに帰ることなく、今もこの家にいるということが、沈んでいく一方の中流の気持ちをギリギリの所で抑える唯一の光りだった。

「……」

お休みを言って部屋に入った中流は、しかし眠れるはずもなく、兄が寝静まった頃を見計らって居間に下りてきた。

電気もつけず、暗い部屋のソファに沈み込んだ中流は、ただ、頭を抱える。

何を考えればいいのかも解らない。

「……」

解らない。

答えようと思えば簡単すぎる答えが目の前にある、それは確かなのに、中流はそれには手を伸ばしたくなかった。

尋人に全てを話す。

それだけは絶対に出来ないから。

「尋人……」

きつと泣いている。

傷ついている。

自分のせいで。

「尋人……！」

解っているのに。

悪いのは自分なのに、それでも、自分の身に流れる血の秘密は語れない。

「……言えるわけない……」

言えない。



だって。

「俺にそんな資格ない……っ」

何を以って資格とするのか。

否、そもそも資格など存在しないだろう。

それでも中流には話せない。

その資格がない。

もしも自分に、兄達のような能力があれば違ったかもしれないけれど。

「っ……なんで……俺は……っ……俺は聞いているだけなんだよ……、なんで護られてばかりなんだよ……！」

……同じことを言わせないでくれるかい？　俺は、君の何だっけ？

「なんであんな奴に好き放題言われて……っ」

……俺は中流さんの意思を尊重します……

「裕幸に庇われて……っ……」

……貴方は俺達の神だ……

「神なんて……っ」

この血に連なる者の神。

今は眠りし故郷の主、里界神。

そして、彼らは。

「なんで……っ……なんで裕幸を贄にするような奴に言い返せないんだよ……っ……」

里界神は、里界復活のために白夜を黒天獅の贄にすることを決めた。

大樹家の大事な弟を奪うのは彼らなのに、己が里族の血が神に逆らうことを拒むのだ。

「くそ……っ」

だから、もし黒天獅が現れて裕幸を奪いに来ても、この身体はそれを阻止することが出来ない。

神と黒天獅の契約に、里族の血が介入させないからだ。

「クソ………ッ！」

何も出来ない。

護ってやれない。

そればかりか、自分ばかりが守られている。

大切な恋人と幸せな時間を過ごせるように。

誰にも邪魔されないように。

「……っ」

護られてばかりだ。

裕幸が誰と共に在ることを望んでいるのか知っていないながら。

それが決して叶わぬ幻だと、知っていながら、

「俺は何もしてやれないのに………！！」

そんな自分が、尋人に何と説明出来るだろう。

あの獣は裕幸たちが戦っている相手で。

裕幸たちは、宇宙にある故郷を復活させる為に戦っていて。

裕幸は特別な存在で。

いつか、ここからいなくなる。

そのとき、中流は……？

「………！！」

裕幸の言葉が蘇る。

尋人と二人、幸せになつて欲しい。

それが自分の望みだと、静かに微笑んだ綺麗な存在。

中流が、尋人と幸せになること。

それが裕幸の望みだから俺達は必ず幸せになろう、とでも言えばいいのか？

自分達だけは幸せに？

裕幸を、神様の言うとおりに犠牲にして？

「ふざけんな……っ！！！！」

そんなことが出来るものか。

尋人に、そんな話が出るものか。

だったら裕幸の 白夜の役目だけは秘密にしておけばいいのか？  
裕幸が現実になくなる、その日まで。

「っ」

その日まで、尋人を騙して……？

「違う……っ！！」

こんな、普通ではない血と世界の話を信じて欲しいと願うなら、そこにはわずかな嘘もあつてはならないのだ。

だから言えない。

まだ。

どう話せばいいのか、中流には適当な言葉がまったく思いつかないから。

「尋人……っ」

泣いている顔が浮かぶ。

自分が傷つけた、大切な恋人。

すまない、と胸中に謝ることしか、いまは出来ない。  
前に進めない。

……それを、黙って見逃すはずのない人物がここにいたのは、幸か否か。

「……おまえが裕幸に負い目を感じる心情は解らないでもないけれど」

「！」

「それで大切な人を悲しませるのは感心しないね。…頼むから、お兄ちゃんを失望させないでくれ」

「…」  
玄関に続く扉に寄り掛かって立つ出流は、いつからそこにいたのか、普段とは異なる笑みを浮かべて弟を見つめていた。

「ついでに言わせて貰えば、俺を甘く見るんじゃないよ?」

「兄貴…」

掠れた呼びかけに、出流は目を細める。

「おまえは、裕幸のために何も出来ないと思っっているんだね。…確かに、おまえにはあの子を護ることなど出来ないし、幸せにするなんて不可能に近い」

「…」

「けれど、あの子を不幸にすることは、おまえにも出来るんだよ」

「…」

出流の言葉に、中流は息を呑んだ。

それを理解は出来なかったが、何か鈍くも巨大な凶器で襲われたような。

…そんな、気持ちの悪い痛みが体内に広がる。

「もう一度言っから、よく聞きなさい。失望させないでくれ。俺や、

裕幸を」

「…」

目を見開く弟に、出流は小さく笑う。

「おやすみ」

そうして立ち去った姿は闇の中へ。

残された中流も、同じに。

深夜の静寂は、もう誰にも破られなかった。

「それで何で私のところに来るのかしらね！」

来客ベルに応じて戸を開けた江藤汨歌は、ともすればそのまま戸を叩き返しそうな勢いで目の前の意外な来訪者、六条中流に言い放った。

「言っておくけど、こっちだって暇じゃないの！ 惚気に来ただけとか、くだらない弱音吐きに來ただけなら今スグに帰った方が身のためよ！？」

無遠慮に怒鳴り散らした彼女は、だが明らかに気落ちした様子の中流を拒みはしなかった。

「……」  
扉を開け放したまま戸口を離れていく彼女の背中に微かに表情を緩めて、中流は、

「お邪魔します……」と言いながら部屋へと入っていった。

寝ずの街とも称される敷明小路から一町南に向かった先の四階建てビル、その三階にテナントしている探偵事務所。

ここが、汨歌のアルバイト先なのである。

五人分のデスクが並んだフロアを抜けた先の衝立の奥。

所員が依頼人から内容の説明を受けたりする場所に中流を通し、汨歌は飲み物を持ってくるからと給湯室に姿を消した。

「おお？ 珍しいお客さんじゃん」

「この所長・篠宮元旦しのみや げんたんが陽気な声を掛けてくる。

「どうしたのさ、君が一人でイツカちゃんに会いに来るなんて」

「はあ……ちよつと色々あつて……」

「ふうん？」

意味深な相槌を打つ篠宮だが、それ以上の追及はしてこない。

この男も、実を言えば里界の関係者なのだ。

だから事情有る大樹家のことに深入りしないのが身のためだと知

っているのだろう。

「じゃあ俺も少し出てこようか。まあゆっくりしていいよ」

「…済みません」

「なんの、なんの」

言つて、篠宮はデスクに置いてあつた煙草の箱をポケットにしまい、片手を振りながら事務所を出て行つた。

それと入れ替わるように戻ってきた汨歌は、上司の気遣いに、ほんの少しだけ眉を顰め、中流の前に茶を差し出した。

「…いい？ くだらない用事だつたら容赦なく叩き出すからね」

「…わかつてる。…裕幸の、ことなんだ」

「裕幸の名前に、汨歌は少し驚いた顔をした後で中流の正面に座つた。

どうやら彼の話を聞く気になつたらしがつた。

\*\*\*

尋人は小さめの花束を抱えて、昨日の現場へと足を運んでいた。

どう考えても通常のものではない異形の獣と、駅前の噴水広場で一度だけ見た男の…獣に襲われて無残な姿へと変わり果てた姿を見てしまった住宅街の一角。

「…」

文月佳一に救われ、竜騎によって遠ざけられたその場所には、もう何も残っていなかった。

昨夜、この場所に、あのような凄惨な光景が広がっていたなど、何も知らなければ想像も出来ない。

それくらい普通の時間がここには流れていた。

「嘘、みたいだ…」

尋人はあの場所に花束を置き、手を合わせる。

ここで確かに亡くなった人がいたのに、それを知るのは自分が置いた花束一つ。

それ以外には、本当に、ここには何もなかったかのようだ。

「……」

それでは、亡くなったあの男性の存在は、どこに消えてしまったのだろう。

「……あれは…何だったんですか…」

誰も、何も教えてくれない。

中流が何も話そうとしない。

「先輩…」

昨夜、自分に声を掛けるどころか顔すら見せずに去ってしまった。彼がどれほど自分を想ってくれているか知っている。

どんなに大事に思われているかも、解っている。

だからこそ、中流が何も話さないのには理由があるのだろう…と、そこまでは納得できるけれど。

「どうしてですか…先輩…」

話せない理由がある？

では、その理由とはどんなもの？

原因はどちらにある。

彼に？

それとも、自分に…？

…オマエ 俺ト 同じ…

「……！」

瞬間、背筋を強烈な震えが走った。

あの獣の言葉を思い出す。

自分は同じ。

「…っ…」

あの、獣と。

「ああっ……あ……！」

怖い。

何がなんて判らないけれど、堪らなく怖かった。

身体を丸め、自分で自分を抱き締めるようにして蹲る尋人は震えていた。

怖くて、震えが止まらなかった。

「先輩……」

会いたい。

いま、誰よりも彼に会いたい。

「……夏とはいえ身体が冷えるよ」

「！」

背後から掛けられた声に驚いて顔を上げると、切なげに顔を歪めた裕幸が立っていた。

「……裕幸さん……」

「帰ろう。ここの風は人間の身体には辛いと思う。長くいるものじゃないよ」

「……」

裕幸の真っ直ぐな瞳に促されて、尋人は立ち上がった。

「……どうして、ここに……」

「……君の居場所はすぐに判るんだ。……中流さんから君を守るように頼まれているから」

「先輩から……？」

確認するように聞くと、裕幸は静かに頷いた。

中流が望まないならば裕幸には何も話せない。

だが、尋人の気持ちも判るから何もかもを隠すことは難しい。

「……」

裕幸は微かに表情を和らげて口を切った。

そうして歩き出す先は大樹家。

尋人は、しばらくの間、大樹家に寝泊りすることになっているの



だ。

「……中流さんは、まだ何も話せないと言うけれど、今の尋人君には俺の傍が何処より安全だと思っから家に泊めるように言っただ。あの人は…隠し事はしていても、君のことを一番に考えているよ」

「……」

本当に一番に考えてくれているのなら、全部を話して欲しい…、それが自分の我儘だとは思っても、抑えきれない本音。

「……どうして…先輩は何の説明もなく…僕を裕幸さんの家に…？ 裕幸さんの傍が安全って、どういう意味なんですか…？」

不貞腐れたような物言いになってしまった尋人を、だが裕幸は責めたりなどしない。

「……どう言えばいいのか難しいけれど…、俺の周りに悪いものは近付いて来られないんだ」

「…それって…？」

「うん、…守ってくれる人がたくさん在るから、かな」

「昨夜の…あの獣みたいなものから、ですか…？」

「ん」

応えて、裕幸は空を仰いだ。

まるで遠く彼方から適当な言葉を見つけ出そうとするかのように。

「……中流さんは、君にはまだ何も話せないって言っている。……」

「ただ、いつか本当のことを話してもいいだろうか、って…相談を受けたことがあるよ」

「え…」

「俺よりも、君の方がよく知っているとと思うけど…、……中流さんは、優し過ぎる人なんだ」

「はい…」

「優し過ぎて、人のことばかり想って…そうして損をする人なんだよ。誤解、されたりとかね」

「…はい」

何となく判る気がして、尋人の口元に苦い笑みが浮かぶ。

「それに真つ直ぐで、…それが不器用で、時々とても辛い思いをしている……尋人君、君を失った時のように」

「  
驚きに見開いた目で裕幸を見上げると、その人は淋しげに微笑んだ。

「……中流さんは、二度と君を失いたくないんだ。だから話せないと言う……、君を失くすことが怖いのに、…俺達一族の抱えているものは、君を遠ざけてしまう可能性があるから」

「そんな…！」

自分が中流の傍を離れるなんてありえない、そう言いかけて。

だが、自分が彼らの抱えている秘密を何も知らないと思いつく。

あの獣や、殺された男性。

夢。

不思議な能力。

秘密の片鱗には触れていても、その核心には触れさせてもらえない。  
い。

そこに二人の間を裂くものが存在するからこそ、中流はそこから自分を遠ざけようとしているのだと、それに気付いて、尋人の言葉は途切れた。

そして裕幸にもそれは伝わる。

同時に、何も知らずに「そんなことはない」なんて言葉を言わなかった尋人の気持ちの正直さが有り難かった。

「…俺達の抱えているものは…正直、大きすぎる。…俺がこんなことを言うのは…本当は許されないけれど……」

「…裕幸さん……？」

「ごめん。……ごめん」

呼びかける尋人に、裕幸は謝る。

何にとは限らずに、何もかもに。

「…ごめんね、今のは忘れて」

「裕幸さん……」

「覚えておいて欲しいのは…中流さんが君に何も話さないのは、君を失いたくないからだったこと」

「…」  
「君の傍にいたいから、まだ話せずにいるだけなんだ。それを忘れないで」

告げて、裕幸は微笑む。

……無理に、辛そうに。

だけど嘘じゃなく。

「俺は、君と中流さんが二人で幸せになってくれることを願っているから、……中流さんの幸せを、祈るから…ね」

「裕幸さん…」

その辛そうな笑みの理由が知りたかった。

けれど、聞けない。

いつも優しく、温かな気持ち伝わる裕幸が今はとても哀しい存在に見えて、掛けるべき言葉も見つからなかった。

幸せになってくれなければ困るとも聞こえるその表情に、尋人は、何故だか無性に泣きたくなった。

\*\*\*

「裕幸が俺達の幸せ願ってくれているのは判る……でも、それじゃあ裕幸自身の幸せはどうするんだ？ あいつの幸せは誰が守ってやるんだよ…っ…その方法も見つからない内に俺が尋人に全部話せると思うか？ そしたら俺は…っ…俺は、尋人になんて説明すればいいんだよ……！」

必死に訴える中流の言葉を、汨歌は黙って聞いていた。

決して口を挟むことも、相槌すら打つことなく、ただ静かに。

「俺には力なんかない。兄貴達みたいに妖と戦う術もない…だけどこの身体に流れている血は、裕幸の幸せを願うことすら許してくれない……そんな俺が…俺が、尋人に何をしてやれる……っ？」

力を持たない自分達。

何も出来ない、異界の血だけが流れる体。

一族の中、能力を持つのは出流と裕明の二人だけ。

その他は二人の母親も、姉兄も、誰も戦う為の能力を持たない。

中流のこの葛藤は、その皆が抱く、同じ思いだった。

「けど兄貴は言うんだ…俺には裕幸を守ることでも幸せにすることも出来ないけど不幸にすることは出来る、って…それは判る。俺がこれで悩んで尋人と距離を置いていたら…それが自分のせいだって裕幸が悲しむのは解ってるんだ！ だけど…でも…なんで自分だけ幸せになろうなんて思えるんだよ…！」  
そう。

昨夜の兄の言うことも理解は出来た。

裕幸を悲しませることは、何の力も持たない自分にも簡単に出来ることなのだ。

けれど、それでも。

判っていても。

判らなくて。

思い浮かんだのは、いつも裕幸と三人、たくさんの時間を共有してきた同じ歳の従姉だったのだ。

「笑いたきゃ笑えよ…情けないって嘲笑われても仕方ない…自分でも情けないし、バカだって判ってる…けど…っ…」

「…いくら私だって、今のアンタをバカだとは思わないわよ」  
「泣歌…」

力が無いと嘆きたいのは彼女も同じ。

いつか裕幸が自分達の前から消えてしまっ…それを知っていても何も出来ない事に歯痒い思いをしているのは、彼女だって同じだ。

ただ、自分のこととなると悩むしか出来ないのに、人を見ていると気付くことがあるのは何故だろう。

こんな簡単なことにどうして気付かないのかと怒りたくなる、その矛盾が、悔しかった。

「……出流が言ったのは正しいと思うけど、私は、アンタにも裕幸を幸せにすることって簡単に出来ると思う」

「え……」

「さつさと尋人君に全部話して、本当の意味で恋人になっちゃえば？　それで「俺幸せだ」って裕幸に言っつてやりなさい。そしたらあの子、満面の笑顔になるわよ「良かった」ってね」

「」

「だってあの子、アンタのこと大好きなもの」

「……でも裕幸は……」

「幸せだつて色々あるでしょ？　幸せ感じてる証拠が笑顔なら、裕幸を笑顔にさせればいいのよ、その方法なら私達が一番知っているじゃない！」

「……」

「あの子が笑顔になるの、決まっつて私達が楽しい時よ」

「泣歌……」

「あの子はね！　……っ……裕幸は、それこそ本当のバカなのよ！　他人の幸せで自分が幸せになれる子なの！　それしか自分の幸せは無いんだつて思い込んでいる大馬鹿者なのよ！！」

「だから！　それじゃ裕幸自身の幸せはどうなるんだつつてんだろ！？」

「あんたやつぱりバカ！？　だからあの子の傍には時河がいるんじゃないよ！？」

「」

「あの子はね！　私達のこと好きなのと同じくらい時河のこと好きなの！　そうよ同じくらいね！　私達が幸せなのも大事だけど、同じくらい時河も幸せじゃなきゃダメなの！　でも時河が幸せになるには裕幸が幸せじゃなきゃダメなの！　どついうコトか判る！？」

「……裕幸が幸せになるには時河が幸せじゃなきゃならなくて、時河が幸せになるには裕幸が幸せじゃなきゃダメ……？」

「そお！　二人して幸せじゃなきゃ、二人とも幸せじゃないの！」

どっちか幸せに出来るのはどっちかだけなのよ！！ そんな都合のいい相手が裕幸の傍にいるの！ ぶっちゃけアキ兄も出流も時河利用するために裕幸の傍にいるの許してるのよ！！」

「利用」なんて物騒なことを言い放った汨歌に、中流は絶句しかけたが、あながち彼女の思い込みだとは思えない。

なんの能力も持たないどころか。

一族とはなんの関係もない存在。

大樹家の秘密を知り、裕幸が一族の贄であると知り、いつか黒天獅のものになると、そこまで知っていたながら、何も求めず裕幸の傍に居続ける人間。

けれど。

だからこそ。

なんの関りもない人間だから、一族の者には出来ないことが竜騎には出来る。

一族が逆らえない神の契約に、竜騎だけは手を出すことが可能なのだ。

「わかった！？ 裕幸には時河がいるの！ アンタに尋人君がいて何が悪いのよ！ 何を遠慮する必要があるわけ？ どうせ遠慮するんだったら私に遠慮しなさいよね！」

「……」  
自ら痛いところを突いて言い放つ汨歌に、中流は一瞬だけ呆気に取られたものの、次には思わず笑ってしまった。

「……」

なんて汨歌らしい言い分だろう。

…なんて、頼もしい家族だろう。

「……裕幸、幸せになれるんだな…？」

「そんなの時河に言いなさいよ。言っとくけど時河をその気にさせるのは私達の仕事よ。時河も相当のバカだから無駄に理性強いしね」

うら若き乙女とは思えない発言をする汨歌に、もう一度笑って、中流は立ち上がった。

「サンキュ。少し気い晴れた。……尋人に会う勇氣も出た気がする」

「あっそ」

「余裕ついでに、おまえにも早くイイ男が現れるの祈ってやるからな」

「余計なお世話よ!」

言い返してくる、彼女らしい態度に、中流の表情は自然と和らぐ。普段は口やかましい従姉くらいにしか思えないけれど、今日、彼女のところに来たのは正解だった。

何だかんだと言いながら、やっぱり血の繋がりは尊いものだと思う。

「じゃ、帰るな」

「お気をつけて」

フンツとそつぽを向きながら応える彼女に笑って、中流は事務所を後にしようとした。

と、同時に飛び込んだのは若い所員。

「所長! ……って、あ、失礼」

中流とぶつかりそうになって慌てて進路を開けた所員は遠回りして事務所に入り、室内を見渡した、

「汨歌ちゃん、所長は?」

「そろそろ帰ってくると思いますけど」

「あ、ほんと? 参ったなあ…これ急ぎだと思っただけど…」

慌てている所員は、手にしていた書類をどっにかしようとしながら落ち着かない様子で頭をかき回した。

同時、手が震えていたせいもあるのか、持っていた書類が床に散らばる。

「あ!」

「もうっ!」

慌てる所員と、苛立つ汨歌に混ざって、中流も落ちた紙片を拾い

集めようとした。

「」

だが、紙片にクリップで留められた男の写真に目を見張る。その顔には見覚えがあったのだ。

「だから、念のために中流さんにも見てもらいたいです。…」

「………どうです？ 見覚えのある人達ですか………？」

同時に蘇える裕幸の言葉。

その男は、尋人が噴水前で見た男達の中の一人だった。

「！ おいつ、この男どうしたんだ！？」

「中流？」

「え…ああ、その男は依頼人の息子さんの友人で…」

「ちよつと！」

仕事の内容を部外者に話すなど汨歌は声を荒げたが、中流にはそんなこと聞こえていない。

ここに手掛かりがある、それは中流の直感だった。



## 貴方の翼が堕ちても 十四

旧歌がアルバイトとして勤めている探偵事務所を訪れた依頼人は塩木しおきといい、依頼内容は行方不明になってしまった息子・衛まてるを探し出すことだった。

この依頼を受けた事務所の青年が調べた内容を、偶然とはいえ中流が目にしたことは、尋人に関する妖の正体を探るうえで非常に重要な意味を持つ。

何故なら事務所側が調べた息子・衛の交友関係により浮上し、入手された写真に写っていた男達は、二日前の駅前の事故の時に噴水前で見かけた三人の男達であり、尋人が夢に見た、現場を目撃した、異形の獣に襲われていた男達であり、大樹家の者達が敵とする妖に喰われた人間に違いなかったのだから。

\*\*\*

「はい、お疲れ様」

大樹家の母・日向に髪を拭かれて、尋人は丁寧に頭を下げた。

骨折した腕では入浴もままならないだろうと、彼女が全部手伝ってくれたのである。

「ありがとうございます。…ご迷惑ばかりお掛けして…」

「あら、迷惑だなんて思わないで？ 裕明も裕幸も、もうあまり世話を焼かせてくれないんだもの。久しぶりに子供と一緒に風呂に入れたようで楽しかったわ」

につこりと微笑む彼女に、尋人は何と返事するのも躊躇われて顔を赤くした。

もうすぐ五十になる彼女は、しかし大樹兄弟の母親だけあって綺麗な顔立ちをしており、実年齢など想像もさせない愛らしい人物だ。

もとは大樹総合病院で働く看護婦だったそうで、怪我人の入浴を手伝うのも慣れていた。

「私は夕飯の支度を始めるから、あと何か困ったことがあれば裕幸に言っつてね」

「はい。…でも、何か僕にも手伝えることがあれば…」

「いつも早矢さんのお手伝いしているんでしょう？ 怪我をした時くらいは人に甘えちゃいなさいな」

「…はい…」

申し訳無さそうに俯く尋人に、彼女はそっと笑って浴室を後にした。

尋人も、いつまでもそこにいるわけにはいかず自分に用意された二階の部屋が上がっていったが、不意に呼び鈴が鳴らされた。

「？」

誰か来客があったのか。

応答くらいは自分にも出来るかもしれないと思ったが、尋人が階段を下りるより早く裕明がそれに答えた。

大樹家の長男は居間にいたのだろうか。

来客が誰なのかを、既に判っているような口ぶりだった。

「はいはい、昨日の今日でどうしたのかな」

「アキ兄！ 大発見！！」

「っ…」

裕明に返された声、それは中流のもの。

尋人はドキツとし、慌てて階段を上りきった。

「…っ…」

会いたい、…けれど怖い。

何も話してくれない中流と平気なフリをして顔を合わせられる自信が、いまの尋人にはなかった。

「あ…あのさ、尋人は…」

中流の、途端に小さくなった声が言う。

「尋人君なら母さんがお風呂に入れてるよ」

「そっか…。あ、ところでこれなんだけど…」

そうして中流は持ってきたものを裕明に手渡して二人一緒にリビングへと移動していった。

「…」  
中流が自分を気にしてくれている事に、複雑な気持ちで胸を過ぎる。

彼がなんの為に大樹家を訪れたのか知りたい。

中流は優し過ぎるから尋人に何も話せないのだと、昼間の、裕幸の言葉が思い出される。

中流が望まないことを知りたいと思うのはいけないことだろうか。例えばそれが、中流と尋人の間を裂く内容だったとしても。…尋人は何も知らなかったとしても、この気持ちの中流から離れるわけではないと言いたいのに。

「…」  
尋人は悩んだ末、自分の部屋には戻らずに二階のホールに足音を忍ばせながら近付いた。

大樹家の屋内は不思議な造りになっていて、わざわざそう見せずとも十分に大きな邸なのに、よりいっそう空間を広く見せる技法が用いられている。

リビングの天井が三階まで吹き抜けになっているのもその一つで、二階ホールからは居間の光景が見下ろせるようになっていたのだ。

尋人は、しかし姿が見られては怒られるかもしれないと考え、壁に隠れるようにしてホールに座った。

「この写真は？」

「旧歌のバイト先の事務所、あそこで貰ってきた」

「…奪ってきたんじゃないんだね？」

「……………まあ、そうと言わないこともないかもしれない…」

「まったく…」

裕明の呆れた笑い。

二人の会話が聞こえてくる。

ここにいれば、彼らが何を話しても聞くことが出来るだろう  
そう思っていたら。

「！」  
背後からフリースの温かな上着を掛けられた。

「あ…裕…」

驚いて顔を上げると、裕幸が口元に人差し指を立てて微笑んでいる。

静かに、ということだろう。

お風呂上りにそんな格好では、身体が冷えてしまい、くしゃみでもしてしまったら盗み聞きがばれてしまう　そう言ってくれているのか、ここで聞いていることを許してくれたような、そんな微笑み。

「…」

中流と尋人、二人が幸せになっけてくれることが自分の望みだからと告げた裕幸の、この気持ちに、尋人は頭を下げた。

そうして静かな足取りで裕幸が階段を下りていくと、

「ああ。呼ばなくても来たね」と声を掛けたのは裕明。

「随分焦った様子の中流さんの気が感じられましたから」

裕幸が柔らかな口調で返す。

そんなことも判るのかと、尋人が驚いていると、

「ここに来る前に兄貴にも連絡つけたから、そろそろ来ると思うんだ」

「…だね、来たようだよ」

中流が言い、裕明が笑う。

同時、

「仕事中の人間に呼び出しを掛けなくて欲しいね」と、どこからか出流が現れて尋人をいっそう驚かせた。

「それで、仕事の方は大丈夫なのかい？」

「風蓮に代わらせた。雑誌の取材くらいなら身代わりでも問題ないな」

「それはタイミングが良かったじゃないか」

「まったくだね」

年長者の言い合いに、

「あ、あのさ…それで、兄貴にも来てもらった理由なんだけ…」と、中流は後ろめたそうに話題を逸らさせ、裕幸は声を殺しながら笑っていた。

どこまでも謎の深まる人達だと、尋人が混乱する頭を必死に落착かせようとしていることなど知る由もなく、中流は六枚の写真を兄弟達の前に広げていった。

その内の二枚は大学のサークルか何かの集合写真で、他の四枚は、四人の男の顔写真だった。

少年と青年の間を彷徨う微妙な年頃の四人は一見してみればあまり共通点の無さそうな外観だ。

だがそれらを目にした兄弟達の表情は途端に険しいものになる。

中流は一枚、一枚を指差して話し始めた。

「二日前…尋人が夢で獣に襲われたのを見てしまったのが、この少し暗い雰囲気のある谷俊介たにしゅんすけ…間違いないよな？」

確認した先は裕幸だ。

「…そうですね。尋人君の夢を探った時に見た顔です」

「うん。…そして昨日、……尋人が目の前で見てしまったのが柴田しばた航太郎こうたろうだ」

「確かに。文月サンに見せられたのはこの顔だったな」

「…それに、もう一人、この男…」

裕幸は、眼鏡を掛けたインテリ風の男の写真を指差して言う。

「この人と、妖に襲われた二人の男性。尋人君が噴水前で見かけたのはこの三人です」

「ああ。俺も裕幸にあの場面を見せてもらってなかったら気付かなかった。そいつは松本孝雄まつもと・たかお。この三人で間違いないよな？」

中流の再確認に、裕幸は間違いないと頷く。

そして、最後の一枚。

外観をいじることに興味がないのか、素朴というよりも地味な印象を与える容貌は、だがどこにでもいる普通の少年だ。

「…まあ、眼鏡を取れば人目を引きそうではあるかな」

出流が他意無く言うのと、裕明がほんの少しだけ眉を寄せる。

「出流がそう言うつてことは、何か感じるものでも？」

「まあね。でもまずは中流の調査報告を聞こうじゃないか」

そうして弟の話を促した。

「じゃあ…まずこの四人目。名前は塩木衛しおき・まもるって言って、この四人は大学の英会話サークルで一緒だったらしい。でも一週間くらい前から衛が行方不明になっていて、こいつの母親が、汨歌がバイトしている探偵事務所に、息子を探してくれって依頼に来たんだ」

「警察には行かなかったのか？」

「行ったらしいけど、本気で探してくれそうにないつて。息子は大学生で、まだ一週間だし…何つーか、家族の関係もあんまり良くなかったみたいだ」

「と言うと？」

「依頼した母親、本当の母親じゃないんだ。父親が二年前に再婚したらしくて、折り合いは良くなかったんだつてさ」

「なるほど」

確かに、昨今の若者ならば家に帰らずとも友人の家を泊まり歩いていることも考えられるし、家族間の関係がうまくいってなければ連絡がないのも、特に不審なことではない。

何より塩木衛が男なら、警察も「そんなに心配することはない」と思うだろう。

「で…まあ俺達は妖のこと知っているからなんだけど…衛の友人の、谷俊介、柴田航太郎、この二人も行方不明になっているつてことで探偵事務所の方も関連有りつて判断して情報を集め始めていたんだ。最後の一人、松本孝雄は塩木衛の幼馴染で、谷と柴田は高校からの同級生。四人は大学の同じサークルに入ってから親しく付き合うようになったらしい」

そうして何人かが一緒に映っているもう二枚の写真を示した。

英会話サークルと言っただけあって、写真にはネイティブスピーカらしい風貌の大人達も一緒に写っている。

その周りで、楽しげに笑っている何人もの学生。

四人の彼ら。

「塩木衛の行方不明から始まり、彼に関連する男達が妖の被害に遭う、か…」

「一番単純なのは衛が彼らに恨みを持っていて妖に魅入れ彼らを殺す、つてところだけねど」

「それはどうか」

裕明の推測に、出流が意味深な笑みを添えて口を挟む。

「まあ、妖が彼らを襲う理由はそれが妥当だろうが、恨む理由はそう単純じゃないかもしれないよ」

「というと？」

「この塩木衛君、幼馴染君とは恋人同士だったんじゃないかな。…まあ恋人ではなかったかもしれないけれど、身体の関係はあっただろうね」

「…は？」

出流の台詞に、中流は一瞬言葉も忘れて彼を見返し、裕幸も言葉を詰まらせたようだったが、誰より付き合いの長い裕明だけは軽く頭を押さえただけで相手の言葉を受け入れられたらしい。

「それは…また匂いか何かかい？」

「そんなところかな」

「なんで写真だけで判るんだ!？」

「簡単。この塩木君も松本君も女性に興味を持つ顔をしていないんだ。幼馴染って非常に近い位置に自分と同じ嗜好の人間がいたとしたら、二人が関係を持つのは非常に簡単なことだと思うけれど？」

「だから! なんで写真見ただけで…!」

「それが俺だからだよ」

「」

あつさり、はつきり。

何の迷いもなく言い切った兄に、中流は頭痛を覚える。

階段の上で盗み聞きしていた尋人も、呆気にとられて頭の中がクラクラしてきた。

「…まあ、出流のこの類の勘は間違いないだろうから、そうなんだろうね、きつと…」

裕明が中流の気持ちを思い遣りながら遠慮がちに言う。

「じゃあ出流、他の二人はどうだろう。何か感じるものは？」

「さて…、この浅黒い肌の男…柴田と言ったかい？ こっちはただのバカだと思いが…谷の方は良くないな」

「良くないとは？」

「闇を背負っていそつだ」

「闇を…」

「……そうですね。この谷さんと言う人…良くないものを持っています」

裕幸も、出流の感じたものを肯定して表情を曇らせた。

考えてみれば、最初に襲われた谷俊介。

通常、妖魔が人を食らえば死臭を纏い、里族に見つけられないはずがないものを、いまだ所在すら掴めずにいるのが事実。

妖だけでなく闇の気配をも取り入れたのだとしたら、…それはとてもなく危険なことだ。

「それは、俺達の手じゃ気配を追えなくなるわけだな…」

「文月サンの結界に捕えられなかったのも頷ける。俺達の力は、あくまでも妖に重点を置いてるんだから」

一つ一つ、疑問だった事項の答えが見えてくる。

なんの確証もない推論だとて、一つ一つの根拠が明確になれば、それは限りなく事実に近いのだ。

「…中流さん、この写真はしばらくお借りしても大丈夫ですか？」

「ああ、たぶん大丈夫。…裕幸が後で泣歌に電話一本入れてくれれば……きつと…」



「判りました」

中流の微妙な言い回しに、ある程度の事情を察した裕幸は苦笑交じりに応えた。

「だったらこの件は全面的にこちら側でやるからと元旦さんに話をしよう。これに本当に闇に属する物が関わっているなら元旦さんにも手の施しようがないだろう」

「そう、ですね。…だったら、まずは行方不明になった塩木衛さんの所在を突き止めましょう。…せっかいですから文月先生に協力してもらって」

「あいつに!？」

「先生の能力に頼るのが一番の近道ですよ」

「けど…」

あいつの協力だけは得たくないという中流の気持ちは、出流や裕明も十分に理解していた。

だが、裕幸が言うことも最も。

「……今回は仕方ないんじゃないか？ この妖は尋人君にも何かしらの影響を及ぼしているわけだし、さっさと解決させるに越したことは無いさ」

「……」

尋人の名を出されては仕方が無い。

不承不承ながらも、塩木衛の所在を、裕幸が文月佳一に頼んで突き止めてもらうことに決まった。

「あとは松本孝雄だけだ…」

「それは俺が会いに行く」

「中流が？」

「俺にだってそれくらい出来る。……今回は特に、これくらいはやらなきゃ…」

「中流さん？」

思いつめた顔をしていた中流だけれど、裕幸に呼び掛けられて、一度だけ深呼吸をした後に意を決して顔を上げた。

「裕幸。俺、…この件が片付いたら尋人に全部話す」

「兄弟達が、彼の突然の決意に目を丸くしたのと同様、二階ホールの尋人も驚いた。」

「なんか…もう遅すぎる気もするけど…俺はバカだから…何でもタイミングだ、なんて言っつて、…あいつを失うかもしれないって可能性から逃げていただけだ…」

「中流さん…」

「違う。」

「本当は、彼が尋人に全てを話せずにいる理由がそれだけではないことを皆が知っている。」

「中流の図るタイミング　いわゆる直感が持つ正当率も承知している。」

「…それでも、ただ彼の言葉を聞いた。」

「だから、今回のことに決着つけて、尋人に危険が及ぶ心配なくなつて、一緒に家に帰れるようになったら全部話す。…全部話して、それでもあいつが俺の傍にいるって決めてくれたら…、…そしたら、喜んでくれるか？」

「それを聞く。」

「確かめたい。」

「言葉で聴きたい。」

「尋人が本当の意味で家族になったら…、裕幸、喜んでくれるか…」

「…?」

「もちろんです」

「その答えが。」

「中流さんが尋人君と幸せになってくれること、それは俺の願いです」

「その言葉が、欲しかった。」

「……っ」

「同時に尋人の欲しい言葉。」

信じた想い。

話してくれる、今度こそ。

「あ……」

嬉しくて。

心が温かくなって。

だが冷えた爪先から震えが来た。

何故こんな時に思ってみても、もはや遅すぎる。

「っ……」

だめだ、くしゃみをしたら気付かれてしまう。

そうと解っていても。

「っ……う……くしゅんっ！」

「!?!」

リビングの彼らは、上方から聞こえてきたくしゃみに驚いて顔を上げた。否、驚いたのは中流だけだ。

二階のホールに隠れている少年がいること、出流も裕明も最初から気付いていた。

裕幸が、靴下も渡しておくべきだったかと少なからず申し訳ない気持ちになりかけたが……。

「……尋人！ もう少し待っていてくれるか！」

そこに向けて、中流が言う。

「これが終わったらちゃんと話す。全部、おまえの知りたいことは話すから……だから、もう少しだけ待っていてくれ！」

「っ……」

真っ直ぐな言葉。

嘘偽りの無い、尋人にだけ向けられた本当の言葉。

「はい……」

泣きそうになりながら、それでも出来る限り大きな声で答えた。

まだ顔は見せられないけれど。

……立ち上がれないけれど。

「はい……っ……待っています……!」

尋人の返答に、空気が和らぐ。  
優しくなる。

それは、家族の気持ちが一つになったからだ。

貴方の翼が堕ちても 十五

「ふうん、この少年の所在を突き止めればいいんだね？」

大樹家に呼び出された文月佳一は、庭で裕幸の話聞き、塩木衛の写真を手に意味深に微笑んだ。

「ま、せっかく白夜が頼ってくれたのだし、御期待に添えるよう努力しようか」

次いで佳一が短い呪文を口にすると、腕に一羽の鳥が現れる。

まるで水が形を成したような、氷細工のように透明で煌びやかな、水神の使い。

「今回は人探しだよ」

語りかけると同時、鳥は空気に溶けた。

それは大地に。

風に。

空に散らばり、世界を駆ける。

海へ。

河へ。

湖へ。

神の探し物を伝え、答えを運び、彼らの見たものを流し込む。

「…恐らく海を越えてはいないと思うけれど、しばらく待っていてくれるかい？」

そう言つて微笑む水神の意識は、既に水の中。

普段、どれほど人の反感を買う物言いを繰り返していようと、この存在は間違いない神なのだ。

\*\*\*

庭に立つ文月佳一と裕幸の姿を、二階の自分のために用意された部屋の窓から見つめていた尋人は、しばらくしてから短い息を吐き出し、窓辺を離れた。

「……」  
待っていて欲しいと中流に言われ、尋人はそれを受け入れた。

確かに待っていると言束したけれど、……ただ待っているだけでいいのかという不安を抑えきれない。

「僕は見ているのに……」  
能力を持っている彼らが見つけれずにいる獣を実際に目にしてるのは自分だけ。

それは自分だけが出来るといふことではないのだろうか。

「……僕には何が出来るんだろう……」

眩き、白い布に覆われた腕を庇いながらベッドに横になる。

柔らかで暖かな感触。

尋人はそつと息を吐きながら目を閉じた。

\*\*\*

中流は旧歌のアルバイト先である探偵事務所です。仕入れた情報を頼りに、塩木衛以下四名が通う大学に足を運び、唯一、手掛かりとなりそうな人物・松本孝雄を探し始めていた。

親友・尚也の通っている大学と同じならば他にも手はあつただろうが、生憎、この大学に知り合いは在籍していない。

多少、不審人物の観はあるが学校の外で学生を捕まえて聞くしかなく、なるべく話しが聞きやすそうな人物を選んで声を掛けていった。

だがすぐに松本孝雄の知人と接触出来るわけもなく、十人を越え

ても有力な情報は得られない。

「参ったな……」

このままでは教師が出てくるかもしれないと考えた中流は、幸いにも道路を挟んで正面に小さな喫茶店があることに気付き、その窓辺の席で様子を見る事にした。

探偵事務所から他にも借りてきた写真を参考に、そこにいる顔が出てくるのを待とうと考えたのだ。

時刻はまだ昼過ぎ。

これからもチャンスはたくさんあるはずだ。

「よっし、いつでも出て来い」

個人的には特等席と思える場所で珈琲を注文した中流は、先に精算を済ませてからカップに口をつけた。

一口飲み。

「……」

尋人が淹れてくれる珈琲が飲みたいなどと内心に呟く。

そのためにも、出来れば今日中に松本孝雄と接触したい、中流は心からそう祈った。

\*\*\*

……オマエ 俺ト 同ジ……

あの異形の獣はそう言った。

恐らく、現場を目撃してしまった尋人を始末する余裕もあつただろうに、そう告げて姿を消してしまった、鋼の毛並み、牙という凶器に血を滴らせた妖と呼ばれる獣。

……俺ト 同ジ……

尋人を殺せる余裕を持ちながら。  
何もせずに。

そう告げて消え去った。

「何が、…同じなの……？」

尋人は胸中に呟く。

ここはどこだろう。

どこに迷い込んでしまったのだろう。

周りには誰もいない。

あれほど傍にいてくれた中流の存在も感じられない。

ただ暗くて。

暗くて。

…淋しい闇ばかりが広がる此処は、一体どこなのだろうか。

そんな疑問もあつたけれど、しかし言葉になるのは獣の言つことに  
応えるもの。

同じだと言つた妖。

そう言つて、尋人を殺さなかつた獣。

では、少年と獣は何が同じだったというのだろうか。

……同じ……

「何が……？」

……俺ト……同じ……

「何が同じなの……」

何度も何度も繰り返される同じ言葉。

いや、繰り返しているのは尋人自身……？

彼の言葉が、彼の記憶に繰り返しているだけなのかもしれない。

「っ……僕と……君は……」



君、は。

「何が同じなの……？」

荒い息遣い。

止めどなく落ちる涙。

滴る血液。

痛かった。

苦しかった。

「……」

辛かった。

怖かった。

「あ……っ……」

泣いた。

叫んだ。

助ケテ……っ！！

「！！」

ハッとして身体を起こす。

「っ……」

眠っていた？

今のは夢？

「っあ……は……はあっ……」

尋人は荒い息をつく。

呼吸が静まらない。

心臓が、……痛い。

「……いまの……っ！！」

尋人はベッドから降りると駆け足で部屋を飛び出した。

二階ホール。

「もう死んでいるよ」

居間から文月佳一の声がした。

「…残念だけれど、塩木衛はもう死んでいた…一週間ほど前に海に沈んで、その屍を妖獣に喰われている。しかも、その後の妖獣を追跡したら何とまあ…闇の魔物に憑かれた少年を吸収して変化してしまっているじゃないか。あれじゃあ普段通りの俺の結果じゃ留めておけなかったのも頷ける。あれは里界の能力だけじゃ探せないし倒せないよ」

「…闇の魔物に憑かれていたのは谷俊介に間違いありませんか？」

「そ」

「…そうですね」

「あとはアレだね。闇狩一族に協力頼むわけにもいかないし、多少乱暴になるけれど俺が抹消してやるしかないんじゃない？」

「…先生には可能ですか？」

「当然。俺は神様だよ？ 塩木君と、谷君と、…柴田君だったかな？ 三つの魂をごっちゃにしてしまっけどね」

「ごっちゃに…？」

それは、三つ全部まとめてしまうということ…？

「…っ……………！」

尋人の心臓が締め付けられる。

ダメだ。

絶対にダメだ。

何故かなんて説明できないけれど、そんなことは絶対にさせてはならないと気付いてしまった尋人は、まるで逃げるように外へ飛び出した。

「！ 尋人君…？」

先ほどまで部屋で眠っていた気配。

佳一の搜索结果に気を取られていたために裕幸すら気付くことが

出来なかった。

「尋人君！！」

慌てて玄関に出る裕幸に、さすがの佳一も目を丸くした。

佳一が驚くほど慌てて動いても、外に飛び出していった尋人を捕まえることは出来なかった。

「尋人君！」

少年を追って自分も外に出ようとした裕幸だったが、佳一に腕を取られて、尋人を見失ってしまう。

「先生！」

「緊急だろうと、君を外に出すわけにはいかないんだよ。この邸を無人には出来ない」

「」

「自覚していないわけではないだろう“白夜”」

「……」

「尋人君は俺が追うよ」

静かで、それでいて楽しげな佳一に、裕幸は戸惑いの表情のまま、だが素直に頷いた。

「しかし、何をあんなに慌てているのか……」

裕幸を屋内に戻した佳一は、ぽつりと呟いた後、尋人の気配を追って動き出した。

貴方の翼が堕ちても 十六

不思議だった。

尋人は自分がどこに向かっているかを知らない。

どこに向かえばいいのかも、知っているはずがなかった。

だが、向かう先に何かがあるのかは知っている。

だから足は迷わず進んでいく。

まるでそこだけが尋人という体から独立しているかのように、戸惑う少年を先へ先へと連れて行くのだ。

同時に、尋人の心に何度も繰り返し響く警鐘。

ダメだ、絶対にダメだと何かが叫ぶ。

…何が……？

判らない。

「……」

何も判らないのに、ダメだと叫んでいるものは、……誰の心？  
走る尋人の呼吸は荒い。

荒い息遣い。

痛む腕。

流れる汗。

止めどなく落ちる涙。

滴る血液。

痛かった。

苦しかった。

辛かった。

怖かった。

怖かった。  
「っ……」

オマエ 俺ト 同ジ……

「……！！」  
蘇える獣の声。

……蘇える、過去の恐怖。

「あっ……！！」

同じ。

何が。

「……！！」

直後、眼前に開けた光景。

川土手にあるサイクリングロード、いまは人気のない直線道路。  
いたのは、川岸に佇む男一人。

「ダメだ……！！」

叫んだ尋人に、振り返った男。

松本孝雄。

「ダメ、逃げて……っ」

「……？」

松本孝雄は眉を顰めた。

どこからともなく走ってきた少年に逃げると言われても伝わるはずがない。  
それを知っているのは、彼だけ。

「ダメだ……！！」

尋人は走って土手を下りると迷わず松本の背中を押しした。

「え……ちよっ……！！」

松本は叫んだが、重力には逆らえずに尋人共々川に落ちた。

「……！！」

激しい水音を立てながら、必死に手足をばたつかせて身体を起す。

「なっ…なんだおまえ……！」

何て事をしてくれるんだと怒鳴りかけた松本は、だが。

「ダメだ…っ…もうこれ以上、ひとを傷つけちゃダメだ！」

自分を川に突き落とし、自らもずぶ濡れになった少年が、こちらに背中を向けて叫んでいる姿に戸惑う。

なにか起きたのか。

「…え…っ………！？」

なにか、いる…？

「あ…わっ…！」

先ほどまで自分の立っていた場所に、獣がいた。

「……！」

鋼の毛並み、鋭い牙と爪。

不穏な唸り声を上げながら、こちらを見据える、その姿は、いまだかつて見たことのない不気味なものだった。

「ばっ…化け物………！」

「あ……！」

松本は逃げ出した。

川の中、走ることもままならないのは解り切っているはずなのに、獣と尋人、双方に背中を向けて逃げ出す。

同時、獣は跳躍する。

松本の背中目掛けて飛び掛る。

「ダメ……！」

尋人は腕を伸ばした。

走って、腕を伸ばして松本の背中を掴み、強引に引っ張る。

「！」

バシャン！ と再び水飛沫が上がって松本は川の中。

尋人は彼を背後に庇って叫んだ。

「お願いだからもうやめて！ この人を殺したって何にもならない

「!!」

.....

「っ……」

獣の四肢は、水面に浮かぶ。

まるで地面に立つのと同様、水上でもまったく沈むことがない。

「……うっ……」

やはり自然な生物ではないのだと、改めて思い知らされながら、だが尋人は逃げられない。

この獣に、松本孝雄を殺させるわけにはいかなかった。

「……お願いだよ……もう止めよう……?」

尋人の言葉に、獣は唸る。

深い闇色の双眸が少年を見据える。

「こんなことしたって……何もならないじゃないか……そんなの、君が一番知っているはずだ」

君が。

………君、が。

「この人を傷つけたら、君も傷つく。君が傷つくんだ!! だから

………っ………だから……!!」

もう人を襲うのは止めてと訴える。

それと同時に気付いた。

否、とうに気付いていたのに自覚できなかったものを、ようやく自分の中に見つけることが出来たと言っべきか。

見えた。

読めた。

この獣の　塩木衛の、悲しみ。

………ナゼ　邪魔ヲ　スル………

「！」  
獣が問う。

……ナゼ 邪魔ヲ スル……

……コレハ 復讐……

……衛ノ 復讐……

「衛……？」

松本が呟いた。

その、しばらく顔を合わせることもなかった幼馴染の名を。

…ソイツ デ 最後ダ……

…衛ノ 復讐ハ 終ワル……

…ナノニ ナゼ 邪魔ヲ スル……

「だって復讐なんて……っ」

…オマエ ニハ 解ル……

「！」

尋人は目を見開く。

獣は、笑う。

…解ル ハズ ダ……

…オマエハ 俺ト 同ジ……

…同ジ 傷ヲ 持ツ 者ヨ……



貴方の翼が堕ちても 十七

痛かった。

苦しかった。

辛かった。

怖かった。

泣いた。

叫んだ。

…助ケテ……………！

届かなかった叫び。

流された悲鳴。

何故？

どうして、こんなことになったの……………？

判らない。

解りたくない。

もう、死んでしまいたい……………！！

「あつ」

流れ込んでくる獣の記憶

否、これは塩木衛の記憶か。

同じ過去。

同じ傷。

これは復讐。

おまえには解るはずだと、獣は言う。

「……っ……！」

同じ傷。

そう、それを尋人は知っている。

あの時の恐怖は忘れられない。

辛さも、痛みも、忘れられるはずがない。

だけれど。

… 尋人 …

それでも、自分を愛してくれる人がいる。

望んでくれる人がいる。

確かに死にたいと願ったこともある。

だが自分を大切に想ってくれている人が大勢いることを尋人は知った。

だから、ここに戻ってきた。

だから、自分を想ってくれる人達のために生きたいと。

… 嘘ツキ …

「！」

獣は囁く。

闇の魔物は、それを見逃さない。

… オマエ 綺麗事バカリ …

… 負ノ感情 見ナイ フリ …

… 負ノ本音 隠シタ …

「そんなこと……っ……」

言い返そうとした尋人に、獣は囁き続ける。

魔物は獲物を逃がさない。

尋人の思いを綺麗事だと否定し、隠したままだと言い切る負の感情を曝け出させようとする。

「…っ」

負の感情。

負の本音。

それは。

…殺シタイ ト 思ワナカッタカ…

「…っ…!？」

…殺シタイ ト 思ワナイカ…

…憎イ ト…

…恨メシイ ト…

…復讐ノ チカラ 望マナイカ…

「僕は…っ」

…憎ク ナイカ…

…許セナイ ダロウ…

…オマエ ヲ 汚シタ 奴ラ…

…裏切ツタ 奴ラ…

…助ケニ 来ナカッタ 奴ラ…

そんな…先輩達のこと恨んだりなんか…!

…先輩…

「…っ」

…オマエノ恋人…  
…助ケニ来ナカッタ恋人…  
…オマエ叫ンデイタノニ…  
…苦シンデイタノニ…  
…助ケテクレナカッタ裏切り者…

「違っ…っ!!」

違っ、そんなことはありえない。

「…っ」

違っ。

違っ。

…違っのに。

なぜ、涙が溢れるのか。

…俺二八 見エル…

…解ル オマエノ心…

…ダカラ 触レ ラレル 怖イ…

「…っ」

…ダカラ 抱カレ ラレ ナイ…

「…っ…!!」

違っのに。

絶対に違っのに。

どうして、声が出ない…？

…殺シタイ ト 思ワナイカ…

…憎イ ト…

…恨メシイト…

…復讐ノチカラ 望マナイカ…

…俺八 オマエ ニ チカラ アゲ ラ レル…

「…っあ…」

響く声。

囁くチカラ。

心が支配されていく

… タ ス ケ テ …

「はいはい」

「！」

声。

不意に身体が軽くなり、獣と尋人の間を流れる川の水が、敵を威嚇するように細かく震え始めた。

…ナニ…

…オマエ 何者 ダ …

「生憎、闇の魔物に名乗る名は持ち合わせていないんだ。本来、出逢うべきじゃない間柄だからね」

そう言っ て笑むのは文月佳一。

実を言えば五分以上前から傍近くまで来ていたのだが、妖と闇の魔物が吸収し合うなどと通常では考えられない現象を目の前にして、しばらく様子を見ていたのだ。

さすがにこれ以上おいては尋人の身が危ういと判断し姿を現した水神だったが、その眼差しはまだ興味深そうに魔物を見つめていた。元来、相容れぬはずの間柄。

人の負の感情に付け入り人を狂わせるのが妖ならば、人の負の感情に呼ばれて狂気と化すのが闇の魔物。

佳一たち里界の敵はあくまでも妖のみ。

闇の魔物は闇狩一族の獲物だ。

「さて…元は妖だったものの今じゃそれを支配するのは闇の力…、俺達里族が手を出してもいいのか迷うところだね」

言いながら左手を前に出した。

その手が水面に映ると、まるで印を組むような形になる。

「ま、乗りかかった船か。多少乱暴になるけれど勘弁してもらおう」

「！」

直後、川の水が獣を縛る。

………！

「…っ」

目の前の光景に、尋人は大樹家の居間での会話を思い出した。乱暴になっていいなら抹消できる。

三つの魂をごっちゃにして

「ダメです先生…っ！」

「！」

尋人は川を走り佳一の手を隠す。

「尋人君？」

「みんな一緒に消したりしないで下さい…っ…せめてあの人だけは…っ…！」

「あの人…？」

…ウオオオオオオ…ッ…

「っ！手を離さない、あの獣は今ここで」

「ダメです！ぜんぶ一緒なんて絶対にダメです…っ…！」

「あ…っ」

二人が言い合っている間に、獣は咆哮して力を放ち、水の鎖を断ち切って逃げ出した。

川の中、呆然としている松本孝雄を一度だけ振り返り、獣は空中へと姿を消した。

尋人はそれを見上げて顔を歪ませ、佳一は深々と息を吐いた。

「…尋人君、君って子は…」

「ごめんなさい、でも…っ…でもあの人だけは…っ」

「…憑かれる前に割って入ったつもりだったけれど、どうやら妖に感情移入してしまったようだね。……なにか痛いところでも突かれたかい？」

尋人の目が見開かれる。

心臓が大きく跳ねた。

感情移入？

違う。

痛いところを、突かれたから？

「…っ…」

隠していた本音。

見ないフリ。

… 助けケテ クレナカッタ 裏切り者…

「違う…っ！」

「尋人君？」

「僕…っ……僕……！！！」

「！」

「違う、そんなことない、先輩……先輩……！！」

「尋人君！？」

突如、叫び出した尋人に、佳一は眉を顰めながらその身体を支えた。

尋人が妖と接触したのは確かだ。

だが憑かれたわけではないし、佳一が知る限り、この少年に魔物に付け入られる要素は見当たらない。

「違うんです……っ……違う……っ恨んでなんか……っ……憎んでなんか……！！」

「尋人君……」

少年の混乱の理由が解らない。

だが、いま確かに尋人の気は乱れていた。

そして、川の中の松本孝雄

「衛……」

呟かれる名前。

その名を呼ぶのは、いつ以来だったか。



貴方の翼が堕ちても 十八

あの時、僕は何を考えていたんだろう。

何を、思っていたんだろう。

……何も考えられなかったと、思っていた。

耐えていればいつかは終る。

いまはただ、ただ、我慢して。

全てが終わったら消えてしまおう……そう思っていたと、……思っていたんだ。

先輩が守ってくれた自分の身体を、自分が守れなかったことが悔しくて。

こんな身体、……それでも先輩は抱き締めてくれるって判っていて、だから消えるしかなくて、飛び降りたんだ。

なのに。

なのに。

なのに。

……本当は、恨んでいた……？

助けてって叫んだのに。

心の中、何度も「先輩、助けて」と叫んだのに、それを受け止めてくれなかったこと、……僕は、恨んでいたんだろうか……？

だから、抱いてもらえない？

抱かれることが出来ない？

好きなのに。

大好きなのに、触れられるのが怖いのは、原因は、自分でも気付かなかった憎しみがあつたから……？

そうなの？  
違う…？

僕は先輩を。  
本当は、。

\*\*\*

「クソツ…」

大樹家の居間で中流が悔しい思いを吐き出す。  
大学の前で松本孝雄を探していたのに、どういう運の悪さか、本人どころかその知人にも会えず、しかも本人は川土手に立っているところを妖獣に見つかり殺されかけ、それを庇ったのが尋人だという。

これほど自分を愚かしいと思える展開が他にあるだろうか。  
そのうえ尋人は大きなショックを受けたと聞く。

詳しいことは本人が話さないから知りようもないけれど、それが  
尚更、中流が自分自身を責める要因でもあった。

守りたいと思うのに守れない。

大事な時に、救えない。

「…っ…」

これではあの時と同じ。

中流は、また尋人を失うのか…？

「そんなこと…っ…」

絶対にあつてはならない。

失いたくない。

それだけが、いまの中流の願い。

「…中流さん」

従弟に呼ばれて顔を上げると、川でびしょ濡れになった身体を、裕幸の手を借りて風呂で温めてきた尋人が居間に入ってくるころだった。

「いま、松本さんも二階の浴室から出てくると思いますが、…もう少し待っていてください。…ところで文月先生は」

「庭…、逃げた獣の行方を追ってみるって、庭で能力使ってる」  
「…そうですね」

応えながら、尋人をソファに座らせた裕幸は佳一を呼びに庭へ出ようとした。

だが、尋人がその腕を取る。

「？ 尋人君…？」

「…ごめんなさい…でも…ここに居てください…」

「尋人君…」

いまは中流と二人にしないで欲しい…そう声に出しては言えなかったが、裕幸には伝わったのだろう。

「…中流さん。すみませんが先生を呼んでください」

「あ、ああ」

裕幸に言われて、中流が庭に出る。

心のなか、ほっと安堵の息を吐く尋人に、裕幸は淋しげに微笑み、それきり、何かを問うことはなかった。

それからしばらくして、二階の浴室から出た松本孝雄を、大樹家の長男・裕明が居間へと連れてきた頃、それを見計らったように庭から中流と佳一が戻ってきた。

さすがに今回は出流を呼び戻せなかったが、松本孝雄を含む当事者が顔を揃えた大樹家の居間。

最初に口を切ったのは、当然と言うべきか里界神である一族の主・文月佳一だった。

「結論から言う。自殺した塩木衛の屍を喰らい、闇の魔物に憑かれ

ていた谷俊介を喰らい、一昨夜に柴田航太郎を喰らったのは、あの獣で間違いないよ」

「！ なんだよそれ…！」

直後、声を張り上げたのは松本孝雄、その人だった。

「衛が自殺？ 谷と柴田が…何だった？ さっきの獣がどう関係するんだ!？」

「塩木さんは一週間ほど前に海で亡くなれました」

佳一の後に裕幸が口を挟み、松本のため、分かり易く説明している。

「そして三日前の夜には谷さんが。その翌日には柴田さん。谷さんと柴田さんは、…妖と呼ばれる、俗に言う怪物に殺されました。一時間くらい前に貴方を襲った不気味な獣、あれが、それです」

「な、…んだって…？」

「その化け物は人の憎しみに反応するもの。…塩木さんは自殺でした。それも、谷さんと柴田さん…そして恐らくは、貴方を恨んで」

「…っ」

裕幸の言葉に、松本はあからさまに顔色を変えた。

当然だ。

「…思い当たることがあるのでしょうか？」

「…っ」

松本は誰とも視線を合わさないよう下を向いた。

だが、現在この場に、松本のそのような態度を許す者はいない。

決して逸らされない幾つもの視線は、無言の圧力となって松本の口を開かせた。

川では獣のことが優先され、まじまじと見ることはなかったけれど、いま風呂で身だしなみを整えてきた松本は、いかにも神経質そうな、インテリの雰囲気を漂わせた男だった。

眼鏡の奥、人には言えない秘密を持ちながら、そうとは決して悟らせない瞳は何かを直視することなどないのだろう。

誤魔化して、騙して。

虚像を象って生きてきたというような印象を受ける。

「君が塩木君と関係を持っていたのは知っている。だから下手な隠し事はしないでくれ」

佳一にそう促されて、松本は低い声で話し出した。

「俺達…、俺と、衛は…別に付き合っているわけじゃない。ただ、たまたま…幼馴染で気心も知れているし…、遊びの延長、…みたいな感じなんだ。二人とも本気じゃない、本当にただの…、セフレ…って言うか…そういう関係なんだよ。…先月の初めに…それが谷と柴田にバレた。恋人じゃないなら別にいいだろ、って…。あいつら、衛とやらせろって言うって来たんだ。俺は…最初はどうかと思っただけど…、谷の方が…なんか危ない感じで…、別に好きでもない俺とヤツてるんだから、谷と柴田が相手したって、衛もそんな気にしないだろう、って…そう思ってた…」

言葉を選ぶように、時には声を掠らせて語る松本に、裕明は静かに息を吐き、裕幸は顔を歪めて腿の上の手を握り締めた。

佳一が、

「…だから二人に塩木君を差し出した？」

そう返すと、松本は途端に顔を真っ赤にして立ち上がった。

「…って…！ 全部遊びなんだ…！ 俺とだって遊びだ、衛はヤツてくれるなら誰だっていい…！ そういう奴なんだ！ だから平気だと…っ…だから…っ」

言い返して、震える声。

興奮しながら、悪いのは自分ではないと言い放つ。

「イヤなら…っ…好きでもない奴にやられるのいやなら最初からしなきゃいい話だろ！？ あいつ言ったんだぞ！？ 別に構わな…って！ 誰が相手でも同じだって！ あいつがそう言ったから…！！」

「塩木君の強がりやを鵜呑みにした、ってわけか」

「…っ!？」

強がりと表現した佳一を、松本は睨み返す。

「何も知らないくせに……!」

言い返す。

それは。

「…あの人……悲しんでいました……」

「!？」

不意に声を発したのは、今まで俯いたきりの尋人だった。

尋人だけが目にした獣。

夢にまで見た光景。

「尋人君……？」

裕幸の気遣うような声音に、だが尋人は首を振る。

違う、自分はこの存在に気遣ってもらえるような人間ではない。  
なぜなら自分は。

……オマエ 俺ト 同ジ……

自分は、獣と同じ傷を知るから。

その思いを、知っているから。

「…塩木さん…悲しんでいました…憎むより、恨むより、…っ…悲し  
しみの方がずっと強かった…」

「尋人……？」

「塩木さん恨んでいます…っ…谷さんと柴田さんのこと憎んで…松本  
さんのこと、恨んでる…、でも、恨むのは、好きだったから……」

「…」

「尋人君……？」

「好きだから裏切られたって泣いていた…っ」

「…っ…おまえなんか何が判る…っ」

「判るっ…判るんです…っ…」  
松本に返す。

胸の奥から溢れる感情の痛み。

「だって…っ…だって思ったんだ…なんで助けしてくれないの、って…っ…っ…！」

「尋人、くん…？」

裕幸はハツとした。

尋人の言葉が続くにつれて、そこには尋人のものではない気が纏う。

「僕も思ったんだ…っ…っ…どうして助けに来てくれないんだろうっって

…っ…！」

「…！」

どうして？

… オマエ 叫ンデ イタノニ…

… 苦シンデ イタ ノニ…

… 助ケテ クレナカッタ 裏切り者…

どうして。

どうして…、仕方ないこと、判っていても。

どうしようもないこともあると、判っていても。

だんだん。

だんだん、解らなくなる。

… ダカラ 抱カレ レ ラレ ナイ…

「…っ…先輩…！」

「…っ」

「先輩…どうして…っ…！」

「ひろ、と…」

ドウシテ ！

「チッ」

不意に佳一が動いた。

軽い舌打ちと、重い手刀。

「っ、先生……！」

「参ったな……」

佳一にしては珍しく困り果てた様子で呟いた。

「……妖に感情移入しているっばいとは思ったけど……、まさか闇の魔物との同化がここまで厄介なものとは……」

佳一の腕の中、気を失わされて倒れた尋人を彼らは囲む。

「……憑かれたかな」

訳が判らずに立ち尽くす松本も、彼らの傍。

ただ一人、近付くことの出来なかった中流は、……泣いていた。



貴方の翼が堕ちても 十九

「…、憑かれたかな」

意識を失った尋人を抱えて、佳一が低く呟く。

中流は泣いていた。

気を失った恋人に近付くことも出来ずに立ち尽くしたまま。

「中流」

そんな彼に裕明が近付く。

「中流、しつかりしなさい」

「…っ…アキ兄…」

裕明に言われて、何度も何度も涙を拭うけれど、止まらない。

どうして助けてくれなかったのか、その言葉が胸に刺さる。

今のは妖に言わされたただけだ、とは誰一人言えないのだ。

…言えるわけがない。

あのとぎ。

どうして気付かなかったのか。

どうして救えなかったのか。そう自分を責める中流を皆が見

てきた。

中流自身が自ら責めることを、尋人が責めないなんて誰に言えるだろう。

そのうえ妖に憑かれたなどと、こんな惨いことがあるだろうか。

「ぐめ…っ…」

無意識に口をついて出る謝罪の言葉は、尋人へか、家族へなのか。

裕幸は従兄の姿に顔を歪め、次いで佳一を見上げた。

憑かれただろうかと彼は言った。

しかしそうでないことに裕幸は気付いたのだ。尋人に触れると同時に流れ込んできた彼の記憶、その内面。答えはようやく彼らの前に出された。

「先生、尋人君は憑かれてはいません」

「……根拠は」

裕幸の　白夜の言葉を疑うことは里界神にも出来ない。  
故に根拠を尋ねた。

「尋人君からは妖の気も魔物の気も感じられません」

「だとすれば、いまの台詞は尋人君自身の言葉ということになるよ？」

中流を恨んでいるという言葉。

どうして助けてくれなかったのかと、責めた言葉。

「……」

彼らは息を呑む。

「白夜。君にはどう見える？」

重ねて問いかけられて、裕幸は深く呼吸する。

言葉を落ち着ける。

情報を組み立てる。

「……なぜ、先生の結界から妖が逃げられたのか。兄さんや出流さんに追跡出来なかったのか、それは妖が魔物と同化したからという理由で納得出来ます。では、尋人君が谷俊介の襲われた現場を夢で見た理由は何でしょうか」

「理由？」

「柴田航太郎の現場に居合わせたのは」

「……そして今日、松本孝雄の居場所を知り、獣から庇えたのは何故か、つて？」

佳一が言う。

裕幸の言葉を補足するように。  
付け足すように。

「答えは？」

最後の問い。

欲しいのは、その答え。

「尋人君が、塩木衛だからです」

「な……んだって……？」

「正確には、尋人君の中に塩木君の魂が入り込んでいるから、です……」

それでも裕幸の説明は、彼らを納得させるには不十分だ。

だが推測ならば可能。

「……まさか、妖、魔物に続いて人間の霊魂まで関連してくるんじゃないだろうね」

それこそ里族の管轄外だと眉を顰める佳一に、裕幸は苦い顔をして言葉を繋ぐ。

「最初のトラックの暴走事故、あれも妖の仕業でした。そこで尋人君が妖の残り香を纏ってきたことは、中流さんも覚えていますよね？」

「っあ、ああ」

あの事故があつた日、大樹医師から中流にあつた電話を思い出す。尋人から妖の気配がする。

狙われているのかもしれない、だから裕幸に視てもらおうようにと。「俺は、近くに狙われている人がいたから尋人君も巻き込まれたのだと判断しました。実際、そこには狙われている松本さん達がいたんですから。……けれど、事故のあと、松本さんたちは病院にいなかった。……それは何故ですか」

最後は松本孝雄に問いかける。

「なぜ、つて……」

松本は本気でうるたえ、返す言葉を見つけれられない。

裕幸の言う内容がまったく理解出来なかったのだ。

「え……、なに……事故……？」

「松本君？」

「事故、つて……なに……？」

トラックの暴走事故。

駅前の噴水広場、巻き込まれた尋人が骨折した騒動を、彼は知らない。

「…松本さんは言いました、谷さんは危ない感じがした、と…恐らく、谷さんは随分長い間、闇の魔物と同化していたんじゃないでしょうか」

「…松本君。谷俊介に危ない感じがし出したのはいつ頃からだい？」  
「え…って…、最初から…なんかオタクっぽいつていうか…言うこともいつも怪しかったし…、それに付き合ってる柴田もかなり変な奴で…」

「つまり、君たちが知り合う春以前からということだね」

「はあ…と複数の溜息が重なる。」

谷俊介がなぜ闇の魔物に憑かれたのか、それは彼らの知るところではない。

判るのは、闇の魔物に憑かれた人間が長い間放置されていたという危険な現実だ。

「…その近くにいた柴田もかなり毒に当てられていたのかな」

「恐らく。その魔物の毒は、多かれ少なかれ松本さんと塩木君にも影響を及ぼしていたでしょう」

「…ああ、なるほどね」

佳一が頷く。

影響が及べば負の感情が肥大する。

肥大した悪感情は彼らの関係を擦れさせていっただろう。

「その塩木さんが、三人を恨んで海に身を投げ、妖と同化した」

「闇の毒に当てられていた塩木衛を喰らった妖は、闇の気配に疎くなる。なんせ自分の中にもそれがあるんだからね」

「逆に、谷は自分の魔物の気配には敏感だ。狙われていると判って妖を罠に掛けた。それがあのトラックの暴走事故。魔物がそこに罠を仕掛けたのは、…里族の気があったからです」

「里族」

彼らは尋人を見つめ、中流を見る。

里族の気。

中流の。

裕幸の。

裕明の。

出流の。

…何も知らずとも傍にいただけで影響は受けるもの。

塩木衛や、松本孝雄が闇の魔物の影響を受けていくと同様、尋人は里族の中で、常にその気を受けていたのだ。

「魔物は考えたでしょう。里族の目の前で妖が騒ぎを起せば妖は確実に消滅させられる。そうすれば自分が狙われることもなくなる」と

「だが尋人君は、気を纏っていただけの普通の人間。妖を狩るなんて出来るはずがない。そうして今度は、消滅させられなかった妖が尋人君を未熟な里族だと勘違いした？」

「だと思いません。魔物の罠にかかり、復讐を果たせなかった妖は、魔物に対抗出来る力を得る為に里族　そう思い込んでしまった尋人君の身体に憑いた。だが妖本人では仲間：俺達に気付かれて扱われる。だから塩木君の魂なんです」

「…まったく知能犯だな。人間の魂なんてそれこそ俺達には気付かれない。妖はうまく里族の力を利用しながら塩木君の復讐を果たそうとしたわけだ」

「最初、谷さんを襲った時には、おそらく相手にしてみれば不意打ちだったでしょう。塩木さんの魂を外した妖からは自分の匂いが薄く、近付かれても気付かなかった。それで一人目の復讐は果たせたけれど、逆に、塩木君の魂を外していた妖にとって、谷さんの中にいた闇の魔物は制御不能だったんです」

結果、妖の主導権は谷が握った。

闇の魔物と妖という二種の能力を得た新たな獣は、谷の意のまま動き出す。

柴田航太郎を襲ったのは、自分だけが死んだのでは割りに合わない

いとも思った為か。

松本孝雄を襲ったのも似たような理由だろうが、その真偽は本人に確認しない限り、推論のままだ。

その一方で、魂だけが外された塩木衛は、尋人の中で妖の動向を見続けていた。

自分の復讐を果たそうとしてくれた妖が魔物に乗っ取られるのを知り、気が気ではなかったと思う。

どうにかして救いたいと思っっている矢先に耳に入った佳一の言葉。全部まとめてでなければ抹消できる。

自分のせいで苦しんでいる妖を、自分を汚した連中と同じ扱いで消されてしまうことなど絶対に許せなかっただろう。

「尋人君に確認してみなければ、断言は出来ません。でも、尋人君が松本さんのいる場所を知っていたこと、獣を庇ったこと…、たぶんトラックの暴走事故の時から、尋人君は違和感か何かを感じていたはずですよ」

説明を受けて、彼らの各々の中で情報を整理する。

「……じゃあ…さっきの尋人の言葉は…」

「……おそらくは、塩木君の本音…、それに、……同じ、経験を持つ傷が…尋人君を…彼を、混乱させて、自分の気持ちだと思っってしまったんじゃないかと……」

「……」

「……」

裕幸の答えは、だが「良かった」なんて間違っても口に出させない。

絶対に違うとは言えないからだ。

本当には尋人は中流を恨んでいないなんて、それは彼らが勝手に決めて思い込めることではない。

「……………」

沈んだ空気。

重たい沈黙。

それを破るのは、やはりというべきか佳一だった。

「なににせよ、尋人君の中にいるのが人である塩木衛の魂なら、妖を消した後にでも霊能者を呼んで祓ってもらえばいいわけだ」

「けれど塩木君が妖の解放を望んでいるのなら、それを叶えない限り成仏はしてくれません」

「そこまで面倒を見る気はないよ？ こっちも妖と魔物の二重奏なんて経験がないんだ。余計な気を回していたら、こちらが危ない」

「……でも、もしその妖を解放して味方につけられたら……、里界にとっては有益ですね」

「」

不意に口を挟んだ裕明は、まるで出流のような笑みを浮かべていた。

「文月さん。俺達は心を持てる妖がいることを知っています」

「…詩貴のことか」

「ええ。塩木君の魂は尋人君の中にある。尋人君と塩木君の心は限りなく近い場所で同調している。加えてあの妖は、塩木君が解放して欲しいと願いたくなる妖です。今後、尋人君が俺達里族の一員となるのであれば、少なくとも一体の式が必要になる、…このような事態に陥ったことは、むしろ幸運だと思っべきじゃありませんか？」

「…塩木衛という式を尋人君につけるかい？」

「俺的な意見ですが、松本君にも償って欲しいと思うんですよ」

「っ、俺…？」

突然、名前を出されて怯える松本に、裕明は軽く頷いた。

「犠牲者は減らせる限り減らすべきだと思います」

「…」

大樹兄弟の視線を一身に受けて、佳一は深々と息を吐いた。

「まったく参るね…」

呆れた呟き。

それは、里界神が彼らの意思を尊重すると頷いたも同じだった。

\*\*\*

いつだって、互いに互いを想い過ぎて、すれ違ってきた二人。

最初は名前しか伝えてこなかった尋人。

二度目の再会で自分達が同じ学校だったことを知り、事情を知り、中流は尋人の笑顔が見たいと思った。

尋人の笑顔にホツとする自分に気付いた。

同性しか好きになれない、それを知られたら嫌われると恐れていた尋人は、だが中流への想いを抑えきれずに絶縁覚悟で告白し、これが巡り合わせというものなのか、中流も尋人への想いを自覚した。これが恋なのだ、と。

幸せな時間があった。

楽しい時間があった。

あの夜の、悲惨な悪夢。

突然の別れ。

再会。

再生。

新しい日々。

好きだ、と。

誰に憚ることなく伝え合える時間を手に入れたと、…それはただの思い込み？

尋人の心には、今もまだあの夜の傷は深く刻まれたままだった…

…？

… 助ケテ クレナカッタ 裏切り者…



塩木衛に同調し、尋人が漏らした言葉。

どうして助けてくれなかったのか。

叫んでいたのに。

あんなに呼んでいたのに。

「先輩…どうして…!!」

どうして。

…そんなこと、中流が聞きたい。

なぜ助けられなかった。

なぜ、…助けられない。

「…俺…今回も…何も出来ないのか…？」

「」

「今回も見ているだけか…っ？」

声を震わせ、憤る中流。

裕幸は彼の手に、手を重ねる。

「…中流さん。貴方は…自分と、…いえ」

「裕幸？」

「」

それしか、ない。

「…一つ、提案が…」

「え…？」

「…、尋人君に全て話す覚悟は決まっただんですよね…？」

「」

見返す瞳。

それは、裕幸のものではなく。

## 貴方の翼が堕ちても 二十

翌朝。

どうしようもなくなった時には里界神の独断で消滅させる　それ  
を条件に彼らは大樹家の庭に出た。

尋人、中流、大樹兄弟、文月佳一、そして松本孝雄。

「松本君。少し冷たいだろうけれど我慢してもらおうよ」

「はい……」

佳一に言われ、松本孝雄は素直に頷いた。

まだあの獣が幼馴染だということ、仲間二人が既に死んでいるこ  
とも受け入れられずにいる彼だったが、昨日の話し合いの場において、  
ここで自分の意見など何の意味も持たないということとは解っていた。  
言われるがままに佳一の前に立ち、促されるまま目を閉じた。

「！」

直後、全身を包む水の膜。

「……っ？」

苦しくはない。

むしろ守られてでもいるかのように暖かく柔らかな感触。

不意に背後をトンツと押され。

「！」

突如、目の前に人型が飛び出した。

「六条君、それが松本孝雄の影人形だ。どこでもいいから触れてご  
覧」

「……」

佳一に言われた中流が、人の形を成した水の肩部分に触れた。

同時、人型は肩から一瞬にして形を失い、後には水滴すら残らな  
かった。

「これで、妖の目には君が松本孝雄に見える事になる」

「！」

その説明に目を見開いたのは尋人。

「え…それって、先輩を身代わりにするってことですか…？」

微かに語尾が震える尋人に、彼の傍に寄り添っていた裕幸は小さく頷いた。

「中流さんが望んだんだ」

「……！」

彼自身が望んだことだと聞かされ、それは自分のせいだろうか、尋人の顔が青くなる。

あんなことを言ってしまったから？

「…っ」

あんな、ことを。

「尋人君」

「！」

不意に裕幸に手を握られ、ハツとする。

「…気持ちを落ち着けて。…中流さんを、信じて」

「……」

「大丈夫。誰ひとり、君が悲しむことは望んでいないから……」  
優しい笑顔。

…それでいて、淋しげな。

「先輩…」

見守るしかない彼らの想い。

祈り。

「じゃあ結界を貼るから、その後は絶対に声を出さないこと。六条君、君はあれを呼び出すんだ」

「…判ってる」

「期待しているよ」

そうして、辺りは水神により創られた異空間へと変化していった。これから中流は、松本孝雄の気を放つことで彼を狙う獣を誘き出すのだ。

気の放ち方は従兄弟から習った。

コツもつかんだ。

獣を呼ぶことは出来ると思う。

問題はその後 同化した二種の魔物から妖だけを解放できるか否か。

だからこそ、誘き出すコツは掴んだと言えど中流の表情は硬い。決して気は抜けないのだ。

しばらく、ただ無言の時間が過ぎて行く。

結界の中央で静かに佇む中流の姿を、皆がただ見守る時間。

静かに。

静かに、過ぎて行く。

「…？」

不意に訪れた変化。

風に混じる匂い。

「あ…っ！」

それと気付いた瞬間、中流は 妖には松本孝雄にしか見えない彼が吹き飛んだ。

「！ あっ…！？」

思わず声を上げそうになった尋人の口を手で覆った裕幸は、目で「静かに」と訴えた。

松本孝雄も同じように声を上げたが、それは彼を覆う水の膜に吸収されて外部に漏れ聞こえることはなかった。

「っ痛…！」

腹から走る激痛。

流れ出る血液。

中流は起き上がり、痛む腹を手で押さえる。

それと前後して響く音は力が大気中を駆け抜けるもの。



「…っ」

余計なお世話だと目で返し、中流は獣と向き合う。  
ここからが勝負だ。

鋼の毛並み、自分の血を滴らせた巨大な爪。

深い闇色の双眸でこちらを見据える、もとはヒトであったものの  
成れの果て。

「…っ…谷、なんだろ…？」

中流は語りかけた。

松本孝雄になりきったつもりで、その中にいるであろう友人へ。

「なあ…声聞かせるよ…喋れるんだろ…？」

…話シ テ ドウナル…

「！」

…話ス 意味 ナイ…

「意味がないかどうかは話してみなきゃ判らないだろ！？なんで  
おまえが闇の魔物なんか捕まったのか、とか…そついの判らな  
きゃ、おまえ助けてやることも出来ない！」

…助ケ ル…

助ケ ル ッテ 何ダ …

俺八 トテモ 楽シイ …

「！」

…楽シイ…

コノ チカラ 欲シ カッタ…

コノ チカラ 俺 無敵…

俺 妖モ 喰工夕…

「…谷…！」

「…：…まったく…：これでもまだ闇の魔物と妖を分離させるなんて無茶を言うのかい？」

「…！」

後半は皆に聞こえるほど大きな声で言った佳一に、周囲は耳を疑う。

同時、今まで以上の能力が獣を縛る。

… ナニ コレ ハ ナニ…：…！

「おいっ」

中流が怒鳴るが、佳一は何のその。

「悪いが状況が変わった」

「いまさら何を言ってるんだ！」

「尋人君を見てごらん」

「…！？」

言われ、まさかと振り返った先、裕幸に支えられながら尋人が地面に蹲っていた。何故と驚くのはほんの一瞬。尋人の中には塩木衛がいて、塩木衛は妖と繋がっている。その妖が闇の魔物の中に居れば、近づけば近づくほど影響は強まり、呪は器となっている尋人を苦しめるのだ。

「尋人…！」

「君の気持ちも判るが、もうどうしようもない。このまま妖の苦しみを、塩木君を通して尋人君が感じていたら、彼の精神の方が病んでしまうよ」

「けど…っ」

「ついでに言わせてもらえば、俺の力も無尽蔵じゃない」

「…！」

「先生…？」

裕幸が聞き返す。

佳一は、それでも余裕の笑み。

「これは結構な力が必要のようだ。尋人君は助かるんだから、それで満足してくれ」

「あつ…」

言い放ち、素早く切られる印。

描かれる光りの輪。

水の鳥。

「破邪」

神の能力により動きを封じられていた獣に逃げる術はない。

その力は、確実に獣の急所をとらえるはずだった。

「！」

「なっ…」

その瞬間、その場の誰もが自分の目を疑った。

迸る鮮血。

凍る呼吸。

「…っ中流さん…！」

裕幸が叫ぶ。

走る。

獣の手前、それを庇うように腕を広げ、撃たれた中流。  
水神の結界の中、尋人の絶叫が響いた。



貴方の翼が堕ちても 二二

里族の血が流れる。  
獣の毛に落ちる。

オオ……ッ……ウオオオオオオ……！

咆哮。

それは里界神から逃れようとするためであり。  
里族の血を振り払おうとするためであり。  
何より。

……ナゼ ナゼ ナゼ ……  
……孝雄 ナゼ オマエ ガ ……

松本孝雄が自分を庇った。

実際には中流だけけれど、魔物の目には、それは松本孝雄でしかない  
く、それが、獣の中核である谷俊介の内部を震撼させた。

「あ……あああつ……先輩………！」  
尋人が叫ぶ。

そして、内部の塩木衛も。

「先輩………！」

………！  
叫ぶ。

空気が張り詰める。

「中流さん……！」

裕幸が駆け寄った。

「なんてバカな真似を……！」

佳一が舌打ちしてそれに続く。

「中流さん！ 中流さん！！」

「中流！」

裕明の声も重なる。

「いま治癒を……！」

裕幸の叫ぶような声を、だが中流の手が制した。

「……っ……ユキ……血……」

「中流さん！？」

「……俺、の……里族の……血……」

「……！！」

掠れ、今にも消えてしまいそうな中流の言葉を、だが裕幸は正確にとらえた。

なんてことをと責める気持ちもある。

……本当は、もっと別の形で成したかった。

だがそれが中流の望みで、これを教えたのが裕幸自身である以上、それを実現させないわけにはいかなかった。

「……っ……先生、白夜の気を取ってください」

「え？」

「白夜の気を中流さんの血と混ぜて、先生の水で人型を……！」

「まさか器かい？」

「そうです」

「……ほんとバカだね。器程度、指先からの一滴二滴で足りるものを……」

馬鹿だと言いながら、佳一は真剣な表情で即座に動いた。

水を呼び人型を成す。

「……っ」

獣に飛び散った中流の血、そこから都合の良い場所を選び、印を為す。

器となる人型に混ぜられた血。

獣に散った血。

こうなったら血で血を喚んでしまえと、多少強引なことだとは自

覚しながら佳一は決めた。

「先輩…っ」

駆け寄り、泣きながら呼ぶ尋人に、中流は笑う。

「…も…ぜったい…傷つけさせないから…」

「え…?」

「おまえ…俺が…守るから…」

「」

守るといふ。

中流の血が。

「トウ ガン ビ シン シュ ケン キョウ ワン」

佳一の声が空間を渡る。

「松本！ 塩木衛を思い出せ！！」

「！」

突如怒鳴られて、松本は混乱する。

だが拒否など出来るわけがない。

「おまえの幼馴染だ！ ずっと抱いてきた体だ！ 思い出せ！！」

切羽詰った佳一の、口調すらガラリと変わった物言いに動揺は隠

せない。

だが目を瞑り、必死に思い出した。

少しクセのかかった茶の髪。

きつめの瞳。

薄い唇。

猫みたいに気まぐれな性格で、細いしなやかな四肢が、そのライ

ンが、 綺麗で。

「シ フク ビ ソク コウ シュ シ！」

佳一の呪が終る。

ウオオオオオオオオオオ！！！！

直後、獣は叫ぶ。

叫ぶ。

ナゼ ……！  
ナゼ 邪魔 ヲ ……！  
ナゼ 孝雄 ……！

「！ 谷…っ」

水の結界の中、松本は齒噛みした。

ナゼ 庇ウ ……！  
ナゼ 守ル ……！  
ナゼ 救ウ ……！！！！

「…っ」

谷俊介を核とする魔物の叫びは、魔物を庇って倒れた、中流が扮する松本孝雄に向けられたもの。

自分にじゃない。

自分は、…逃げただけだ。

ナゼ オマエ 俺 ……！  
衛 殺シ タ 俺 ……！  
衛 俺 殺 シ タ ……！

「違う…っ…衛を死なせたのは俺だ……！」  
何も解っていないかった、自分なんだ。  
衛は言うんだ。

「仕方ない」って。

幼馴染だし、困ってるなら相手してやるって。  
だけど気分ノツた時だけって約束で。  
それ以外はいつも冷めた目で自分を見ていた。

…だから、ベッドの中でだけは熱い目をしているのが嬉しくて。  
うかれて。

谷に言われて。

言われたって衛に言ったら。

別に構わないって。

誰が相手でも同じだって、衛が言ったから。

「…バカな俺がそれ信じたから……!!」

素直じゃなかっただけ、なんて。

そんなこと知らなくて。

谷に憑いていた闇の魔物の余波だったとか、そんなの他人のせい  
にしているだけで。

もっと早く。

もっと素直に。

…それで傷ついたって。

自分の気持ち。

衛の気持ち、真っ直ぐに見ていれば良かったのに。

「…っ……」

たった一人、結界に守られて。

一人、安全な場所で。

松本は膝をつく。

悔しくて情けなくて、…怖くて。

孝雄 ……!

「その“孝雄”の血に命じる」

佳一は言い放つ。

“孝雄”に扮した中流の血を媒介に。

「妖の名を教えろ」

ウオオオオオ……ッ……!

「……全員に教えるなんて言わない。君を守ろうとした塩木君に教えればいい」

オオオオオ……ッ……

衛……

衛 二 妖ノ 名 ……

「!」

不意に尋人の背筋を駆け抜けた震え。

決して不快ではなかったそれは、尋人の中の塩木衛が妖の名を受け取った証。

「……尋人君、この器に触れなさい」

「え……」

先ほどの裕幸が言い、佳一の水が成した人型のそれ。

「塩木君、この水の器が君だ」

「……」

「塩木君、君の身体だ」

佳一に促されて、尋人の手が触れる。

衛の意識が触れる。

………

妖の名。

オオオオオオオ………!

「あ……」

尋人は不可解な感覚に声を上げた。

それは塩木衛の魂が尋人から抜けたせい。

里族の、中流の血がそれを喚ぶ。

「！」

刹那、水の人型は、塩木衛の姿に。

獣は、谷俊介に。

「……申し訳ないが、俺達には闇の魔物の正しい消し方は判らない。せめて来世は人として生まれ変わるよう祈るよ」

オオオオオオ ……

ウオオオオ ……

オオ ……

佳一の手カラがそれを砕く。

ほんの一瞬。

たった一度の閃光。

後には、何も残らない。

そして新しく生まれ変わった、その存在は。

「……塩木君」

「……」

その瞳が開く。

周りを見る。

「君は、もう人には戻れない。妖に堕ちてしまったからには、里族に仕えるか、抹消されるかのどちらかだ」

「……」

「俺はどちらでも構わないけれど、君を生かせという意見が多くてね。……どちらを選ぶかは君に任せるよ。……それくらいの判断は出来るだろう？」

「…」

佳一の言葉を、妖は反芻する。  
生きる。

死ぬ。

妖の中の、塩木衛。

「…里族に仕えたら、あの男に復讐出来るか」

水の結界の中、崩れ落ちている松本を見て言う。

「復讐とは？ 食い殺すというなら抹消だが？」

「違う。殴る」

「殴る？」

「殴る。人として。…衛が、そう言っている」

「ふうん？」

塩木衛の姿をした妖に、佳一は「おもしろい」と思った。

「いいだろう。里族の駒になるなら幾らでも殴らせてあげるよ」

「…了解した」

「では、自分の主人も判るね？」

「ああ」

問うと、妖は倒れている中流に近付き、膝を折った。

「血の主よ、我が名は流焰<sup>りゅうえん</sup>。私は貴方の式となる。貴方に仕え、貴

方の命の影となる」

「…っ…そっか…」

「！先輩…っ…」

このような惨い姿になって以降、ようやく聞けた中流の声に尋人は真っ青な顔を近づけた。

そんな尋人に、中流は笑いかける。

「流焰……っ…おまえに、守って欲しいのは、こいつだ…」

「！先輩…？」

「何者からも守ってやってくれ…、絶対に…もう二度と傷つかないように…」

「了解した。主の命に従い、私はこの者を守る」



妖の誓いに、だが尋人の表情はみるみるうちに歪んでいった。

「そんな…そんなこと…イヤです…先輩…死んじゃうなんてイヤです…っ」

血だらけの中流に、尋人は繰り返した。

「死ぬなんてダメです…っ…そんなの…僕…！」

「」

「」

ぼろぼろと涙を零しながら訴える尋人に、周囲の彼らは一瞬動きを止めた。それから顔を見合わせて、失笑する。

「……ああ、まあ、確かに中流のこの姿は今にも死にそうだけど」

「尋人君、心配しなくても中流さんは死なないよ」

「え…っ、でもこんなに血が…！」

「うん、血はひどいけど、もう傷は塞がっているから」

「え…？」

顔を歪めて、また状況を把握し切れていない様子の尋人に、中流も苦しいのをこらえて笑った。

「…裕幸…尋人の腕…」

「そうですね」

中流の提案に頷き、尋人の骨折した腕に触れる。

それからわずか数秒。

「…え…？」

それがはつきりと感じられたわけではない。

だが、腕の中の違和感に目を見開く。

「家に戻ったら、ギプスを取ろうね」

「俺達一族の秘密も話さなきゃ」

「」

呆然とする尋人。

苦笑する中流や、裕幸、裕明。

「…君も、ああいつぶつにもう一度笑える日が来るかな」

水の結界を解き、松本孝雄を外に出す。

「…俺…死んだほうが楽だった…」

低い咳きに、佳一は笑う。

「そうだよ、死ぬほど楽なことはないさ。だから生きるんだ」

「…」

「人間なんてバカばかりなんだよ。誰もが自分が一番で、人を簡単に傷つける。自分の本音も隠して楽な方へ行きたがる。…だけどね、どんな罪を犯しても、いつかまた、ああいうふうには笑えるんだ、心掛けしただい。それが人間だ」

「…」

地面に落ちる、大粒の雫。

松本孝雄は、これからが償いの日々。

「さあ、帰ろうか」

中流が初めて自分の身体に流れる血の秘密を知ったのは八歳の時  
裕幸の七歳の誕生日だった。

大樹家に親族全員が集まり、その中央に座していた祖母の姿は今  
でも鮮明に思い出すことが出来る。

北欧出身者の彼女は、だが流暢な日本語で遠い昔に眠りについた  
古の故郷・里界の昔話をして聞かせたのだ。

人間の手には決して掴むことの出来ない宇宙。

蒼き生命の惑星“地球”が属する太陽系を遙かに過ぎ去り、幾つ  
もの銀河系を越えた更に向こう “里界”<sup>りかい</sup> はあった。

巨大な大陸がそのまま惑星から抉り取られて天に昇ったかのごと  
く下部に厚い土の層を抱えて浮遊する世界は、透明な膜状の球体に  
包まれることで大気を持ち、地球と同等の自然と命を育てていた。

かつては地球人であった者達が集められたとも言われるその世界  
には四人の神が存在し、自然の力を己の能力とする戦士達が暮らし  
ていた。

彼等はその能力と、この世界から遙か彼方に位置する地球とを一  
瞬で行き来する独特の技法を用い、地球に存在する“妖”という名  
の有害物から地球人を守ることを使命としていたのだ。

それが、あの日。  
里界は滅びた。

妖は里界の中枢を破壊し、四人の神を三人までも討ち、戦士達を  
絶滅させた。

廃墟と、屍だけが連なるその地に残されたのは、たった二つの命  
だけ。

四人の神のなかでただ一人の女神・風の擁<sup>よう</sup>と、もとは敵方の将で

ありながらそちらを裏切り里界側に与した獣・黒天獅こくてんし。

彼らは消滅間近の里界で契約を交わした。

このまま里界を消されてしまうわけにはいかない、里界を再生させて次こそ妖を抹消しなければ、遠からず地球が滅ぼされてしまう。それを回避するためにも里界再生の“鍵”を黒天獅に預け、来るべき時に復活の力を解放させる。

その代わり、黒天獅には神が望みのものを与えると。

「私はこの地に残り、出来る限り里界の命を永らえましょう。貴方達が帰るその日まで、私はここで待ち続けます」

「解った。…だが里界のための“鍵”：無償で俺が預かるとは思っまい」

「無論。貴方が“鍵”を引き受けてくれるのなら、望みのものを与えましょう」

「では、……おまえたちの“月”を望む」

「白夜びやくを…？」

「あれ以外は要らぬ」

「……………」

突きつけられた望みに、女神はしばらく応えなかった。

だが、今はこの地の再生が最優先事項だと、脳裏に浮かぶ“里界の月” “白夜”の面影を追い払った。

その望みに応えると返した女神に、黒天獅は「ならば」と里界の鍵を受け取った。

そうして里界は、黒天獅が“鍵”を解放するまでの永い時間を女神と共に待ち続けることとなったのだ。

常に里界神の傍に控えていた癒しの精霊。

“里界の月”と呼ばれた美しい存在。

その転生が大樹裕幸であることを、祖母は静かに語り聞かせた。

俄かには信じ難い 信じたくは無いそれを、だが彼らは受け入れないわけにはいかなかった。

男としての証も、女としての証も持たない無性の体。  
全身に纏う精霊の気。

眞実、裕幸は白夜の転生。

ならば裕幸こそが、里界神によって黒天獅に捧げられた里界復活の為の褒賞。

本人の意思など聞く余地も無く、近い将来、裕幸という存在が失われることを、そうして彼らは知ることとなったのだ。

あの日、祖母がそれら全ての眞実を明かしたのは、恐らく自身の死期が近いことを知っていたからだと思う。

彼女は最後に言ったのだ。

裕幸を守ってあげて、と。

それから十年。

大樹家には裕幸「白夜を守るといふ他に、地球に転生した里界人を探し集めるといふ役目があり、彼らはこれを実行してきた。

文月佳一、篠宮元旦、彼らがそうして集った仲間。

また里界復活を妨害しようと、白夜を狙う妖も後を絶たず、能力を持つ者達の身は常に戦いの中にあつた。

近頃は白夜自身の力が上がっている為か、裕幸を狙う妖も少なくなり、一見平穏な時間が流れているように見える。

だが、白夜の力が上がっているということは時が満ちている証。  
遠からず、黒天獅は現れる。

里界復活のため、贄である白夜を手に入れるために。

その時、家族はどうするだろう。

裕幸は、誰にも知られず姿を消すのだろうか。

一度は全てを諦めて黒天獅を待つだけの日々を送っていたこともある。

時河竜騎と出逢い、彼のために再び人間の世界で過ごすことを決めたけれど、それでも黒天獅のものになるという未来を拒もうとはしない。

むしろ、竜騎への想いに苦しめば苦しむほど、裕幸はますます黒天獅の迎えを求める。

叶わぬ想いなら、いつそこで断ち切ってしまっただけでほしいと。

裕幸が望まないのなら、家族全員、黒天獅を迎え撃つ。家族はそのつもりでも、裕幸はそれこそを望まない。

だから何をすることも出来ない。

いまだその気配すら感じさせない黒天獅の存在を、一族は様々な思いで待つしかないのだ……。

\*\*\*

「…これが、俺達の秘密」

すべてを話すと約束し、二人きりで落ち着いて話したいと望んだ中流は、大樹家二階の、尋人が使っている部屋で話し始めた。

あれほどの血を流した体は今すぐにも休息を欲していたけれど、自分達の秘密を語る機会もいましかない。

もうこれ以上の時間、尋人に隠し続けることはしたくなかったのだ。

「…」

「ごめんな、…ずっと、隠したままで」

中流が言っと、尋人は左右に激しく首を振った。

違う。

謝って欲しいわけじゃない。

「…裕幸さん…いなくなっちゃうんですか…?」

「……」  
「…っ」

うんとも違うとも言えない中流は、泣き出しそうになる尋人を抱き締めた。

骨折していた腕は既に完治している。

裕明に丁寧に外されたギプスの後には以前と変わらない細い腕。

包帯で覆っていたのもわずか数日では日焼けに差が出るということともなかった。

「……」

裕幸によって癒された腕を撫で、中流は静かに告げる。

「ごめん…泣かせたいわけじゃないんだ…そんなつもり…なくて…」  
けれど、それはどうしようもなく。

「裕幸…俺達に、幸せになってくれ、って言うんだ…」

「」

「俺と、尋人が、…二人で幸せになってくれたら嬉しいって、…笑う」

「…先輩…っ…」

尋人の脳裏に、いつかの裕幸の笑顔が思い出された。

優しい。

淋しい、綺麗な笑顔。

「裕幸さん…!」

それが、定められた未来に向かう存在の心からの祈り。

「……裕幸のために、笑ってくれな」  
「…っ」

「あいつが笑顔でいられるように…俺達が幸せになるんだ…、だつてさ、あいつ俺達のこと大好きだからさ…」

いつかの従姉の言葉。

みんなの想い。

「大切な相手の幸せ…大事だろ」

「っ…はい……」

「こんな…めちゃくちな一族だけ…これからも傍にいてくれるか…?」

「こんな、哀しい未来を待つ自分達だけだ。」

「俺と…生きてくれるか…?」

「先輩…っ……」

「答える代わりに、抱き締める。」

「もう離さないという気持ちを入れて強く、強く。」

「人の幸せは人のため。」

「大切な、君のため。」



松本孝雄は自宅へと帰っていった。

塩木衛の魂を抱えた妖と共に。

中流は兄達から「柳沼詩貴」という名の妖の話を知っていた。稀にはあるけれど、妖が喰らった人間の心を得ることがあるのだと。

今回、塩木衛を喰らった妖は、彼が庇うような妖だった。

ならば可能性を信じてみたい、そう思ったのだ。

塩木衛の姿を器にした妖が、その中にある魂と心を育てて塩木衛になれるなら、是が非でもそうなってほしい。

そしてその手伝いが松本孝雄の償いだ。

妖は、衛の望み通り、里界神の立会いの下で松本孝雄を殴り飛ばした。

そうして「すっかりした」と無表情で言う妖と、なんとも言えない顔をした松本、二人の姿に佳一は大笑いしていた。

失わせた命。

未来。

二人で取り戻して行ってほしいと思う。

塩木衛を心配して探している家族のため。

彼自身のため。

そして松本孝雄、彼のためにも。

また妖は尋人と契約し、彼の式となった。

四六時中一緒にいるわけではないけれど、尋人に何かあれば即座に駆けつけられるようになっていく。

こうして、少しずつ。

少しずつ。

今回の騒動も落ち着きを取り戻して行く。

\*\*\*

「じゃあ俺も帰るよ」

そう言っただけで立ち上がった佳一を見送りに玄関外までついていった裕幸は、邸を出た彼の背に声を掛けた。

「…もう少し、休んでいかなくて大丈夫ですか？ まだ身体は回復していないはずですよ」

「おや、気付いていたかい？」

「戦う以外のことなら、先生より“白夜”の方が力は上ですよ」

「確かにね。さっきの空間にしても大分、君の力に助けられた」

答え、佳一は裕幸に近寄る。

「心配してくれるなら、力の補充をさせてもらいたいな」

「え…！」

直後、佳一の顔がすぐ目の前。

唇に吐息。

「ちよっ…！」

止めてくださいと思いつ切り腕を伸ばして相手を遠ざければ、佳一は楽しそうに笑う。

「“里界の月”は癒しの名。なのに里界神の求めを拒むのかい？」

「それとこれとは…っ」

「時河とはするのになえ」

「…っ…！？」

途端に真っ赤になる裕幸に、佳一はやはり笑っている。

「ああいうことは部屋の奥でするんだね。窓辺なんて俺の散歩コースからバッチリ丸見えだよ」

「…っ…」

散歩コースと囁く佳一を睨むと、その表情が微かに変わった。

ただからかうだけのものから、無言で圧力を掛けるように、笑んではいても、眼差しから光りが薄らぐ。

「…俺はね、君が白夜であつても黒天獅のために貞操を守る必要なんてまるでないと思つている。前世の記憶なんて大層なものを取り戻してないから無責任なことが言えるのかもしれないけれど、黒天獅は味方を裏切つた妖に過ぎないんだ。風の女神を通して白夜を手に入れたからと言つて、君が自分の心を騙すことはない。……時が来た時に黒天獅の手を取りさえすれば、今は何をしたらって構わないんだよ」

言い、首に掛けていたロケット式のペンダントを外すと、裕幸の前に差し出した。

「！」

それを見た裕幸は息を呑む。

あまりにも懐かしい。

切ない、あの人の形見。

「正巳は君の幸せを願っていたよ」

正巳 市原正巳。

その名前に、裕幸の胸は締め付けられる。

「…尋人君のために、アフリカから六条君を呼び戻そうとして、彬に会つたそうだね」

「…っ」

「彬の奴、君が元気そうで安心したと言つていた」

「先生…もう…」

「俺も君のことは気に入っている。だから幸せになつて欲しいと言つ君の家族の気持ちも判る。……だけど俺は、俺自身の幸せの方が大事なんだ」

ロケットを握り締めて男は言い切る。

「俺は正巳を取り戻したい」

「……先生……」

「そのためには里界を復活させる以外にない。君の家族がそれを拒

み、…君が君自身の幸せを望んでも、俺は黒天獅に君を渡す。邪魔をする者がいれば容赦はしない」

「……誰にも邪魔などさせません」

低く言い切る裕幸に、佳一は目を細める。

「俺は、俺の意志で黒天獅の贄になる。風の女神との約束は、ここにあります」

自らの胸に触れて言い切る裕幸。

…その心にどれだけの悲しみがあるうとも、この存在を黒天獅に捧げることは、佳一と裕幸、双方が一致する未来の姿。

「……それを聞いて安心したよ」

佳一は口ケツトをしまい、微笑う。

「残り時間は少ない。くれぐれも後悔のないように」

「…」

そうして去っていく佳一に、裕幸は無言で頭を下げた。 否、

それは佳一ではなく、彼が今も想い続け、裕幸が今も忘れられない市原正巳、その人に。

それからしばらく、裕幸はその場を動けなかった。

沈む気持ちを風に流してしまいたかった。

ふと、玄関の戸が開いたのはどれくらいの時間が過ぎてからか。

顔を見せたのは、六条中流と倉橋尋人だった。

「裕幸、まだ外にいたのか？」

中流が驚いたように聞いてくる。

「裕幸さん…っ…手、すごく冷たいですよ!!」

いつからいたという問い掛けに、尋人が裕幸の手を取って声を上げる。

どれくらいの間、外にいたかは判らないけれど、…人に会うのがひどく久しぶりのように思えた。

「…済みません。少し…ぼっつとしていて…」

苦笑いを浮かべて返す裕幸に、二人は怪訝な顔をした。

おかしいと思う。

大丈夫かな、と思う。

そして心配になる。

「二人は、帰るんですか？」

「あ、ああ。今日からはもう俺んちで…いつまでも無人じゃ家が泣くから」

「ですね」

返し、二人を交互に見やる。

…自然な空気。

優しい風。

この二人には、もう何の心配も要らなさそうだとホツとする。

「そうだ、さっき兄貴に電話して、俺とアキ兄で事の顛末は話しておいたからな。裕幸と話せないの残念そうにしていたから後でまた電話してやってくれ」

「はい」

そつと笑んで答えてから自分が二人の通り道を塞いでいる事に気が付き、そつと身体を移動する。

「…気を付けて帰ってくださいね。特に中流さん、あれだけ血を流したんですから無理は禁物ですよ」

「ああ、判ってる」

「大丈夫です！ 今日からはもう腕も使えますし、今までの分を取り返すつもりで僕が動きますから」

「そうだね」

頑張つて、そう言い掛けた裕幸だったが、それよりも早く、尋人が言う。

「また、遊びに来ますね。待っていてください」

「」

「…待っていてくれますよね？」

探るような眼差し。

期待を込めての問い掛け。

裕幸は微笑う。

優しい従兄の、優しい恋人のために。

「待っているよ。いつでも遊びにおいで」  
裕幸の答えに尋人は嬉しそうに頷いた。

わずか数日振りだというのに、中流と二人で過ごす六条家はひどく懐かしく感じられた。

時折、血が足りないせいでクラクラするという中流を居間のソファに座らせたまま、腕も完治した尋人は今までの倍も一人で動いて夕食の支度から後片付けまで済ませた。

「尋人、少し休んだらどうだ？」

居間から声を掛けられる。

夕食の準備、それ以前から 帰宅してすぐといってもいいだろうか。

部屋の掃除や洗濯などで休まず動き回っている尋人を、中流は手が出せない分、気になって仕方がなかったのだ。

そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、まずは「はい」と答える尋人だったけれど、いま大人しく中流の近くに座っている勇気がない。

相手の気持ちを读めていないのは中流も同様。

尋人には、まだ解決していない問題が一つあったのだ。

「……」

さすがにこれ以上動いているのは、中流から逃げているみたいだからと覚悟を決めた尋人は、お茶を持って居間に入る。

「先輩、…トマトジュースの方がいいですか？」

「え？」

差し出された湯のみを見て、尋人の言葉の意味を察し、笑ってしまふ。

「いや、お茶がいい」

「はい」

尋人もクスリと笑って、中流の傍に腰を下ろした。

…だが。

「……」  
「……」  
改めて並んで座っても、互いに最初の一言が出てこない。

「……」  
「……」  
ズズツ…と茶をすすする音がして。

また沈黙が来て。

「……… あ、あの…おかわりでも…」と立ち上がりかけた尋人を、中流が慌てて掴んだ。

「尋人」

「え……」

「あ、いや…えっと…」

顔を見合わせて。

……しばらく見合わせて。

先に吹いたのはどちらだろう。

「っ、くっ、くっくく」

「せ、先輩…ひど…」

「いや、別におまえの顔見て笑ったわけじゃ…」

「でもそんな感じでした！」

「尋人が笑うからだよ」

「先輩の方が先です」

「いーや、尋人だ」

「先輩です！」

強く言い張る尋人に、今度は「あはは」と声を立てて笑って、中流は頭を掻く。

「…なんか、互いに遠慮しているみたいで変な感じだな…」

「遠慮…？」

「ああ。でもいいや、聞くわ」

「聞く、って…」

「おまえ、なにか俺に聞きたいことあるんだろ？」



「何か落ち着かないみたいだし、俺のこと避けてるっぽいし…、それ、尋人が俺に聞きたいことがあるんだけど聞けない時の癖だ」

「そう、ですか…？」

「そ。最初に、妖のこと黙ってた時だってそうだったろ」

「あ…」

そう言われてみれば部屋に閉じこもって中流を避けていたなと思  
い出す。

けれど、あれは隠し事されたことに怒っていたせいもあるのだから、今回と同じではないと思う。

しかし聞きたいことがあるのは本当のこと。

訂正するのも妙な気がしたため、尋人は素直にその場に座り直した。

「……先輩」

「ん？」

「あの……、あの、悲しませちゃうかも……しれないんですけど……」

「うん？」

「……僕……」

「尋人？」

「……僕、先輩のこと、恨んでいたと思いますか……？」

「」

ようやく言った後で、尋人は目をきつく閉ざした。

膝の上、握られた拳は怖くて震える。

それがずっと気になっていた。

あのときの、違うと思ったのに湧き出てきた不安や悲しみの正体は、塩木衛の魂が中に入っていて同調したせいだと説明してもらったけれど、本当にそれだけだったのか尋人には判断がつかない。

同じ目に遭った人が憎んだというのなら、自分だって憎んでいたかもしれない。

…彼のようになっていたのかもしれない。

自分はその感情に蓋をし、目隠しをして見ないフリをし続けてきただけで、本当は、そういつた汚い感情が自分の中にはたくさん存在していて、それが原因で中流に何も出来ないなら、それは、いつまでも誤魔化してはならないことだと思った。

これを解消しなければ、これからずっと中流に触れてもらうことは叶わない気がしたのだ。

そう思い、意を決して告げた言葉。

だが聞かされた中流は首を傾げた。

「尋人、なんでソレ、疑問形なんだ？」

「え…？」

「尋人が俺を恨んでいたかどうかなんて俺には判らないよ。…確かにあの時、どうして助けてくれなかったのかって聞かれて、すげえショックは受けたけど…」

「あ…」

そう言つて、あの時のことを思い出したのか顔を歪める中流の、その頬に触れる。

涙は落ちていない。

けれど今にも泣きそうな顔を、包んであげたくて。

「…俺には何の能力もないし、妖や、魔物、人の靈魂…どんなものが憑いた時に、どう影響するかなんて、さっぱりだ。あの時のあの言葉が尋人の本音なのかも判らない。…ただ、恨まれて当然だとは思つた」

「え…？」

「おまえが助けてくれつて俺を呼んでいるのに気付かなかつた…助けられなかつた…俺はそれずっと後悔して来た。こんな血が流れていたつて、一番大切な奴を守れないんじゃない意味なんかないつて…かなり参つたよ。…でも、今は、尋人はここに居てくれるから…」

「先輩…」

「あの時は憎まれても、恨まれても当然だった。…おまえのこと守つてやりたいのに、いつも空回りで、今回も思いつ切り巻き込んで

… ホント俺はしょーもないのに、それでも、尋人は傍にいてくれる。  
… 血の話して、一族の話もして、… それでも俺と一緒に生きるって  
言ってくれた、おまえのその気持ちが一番だ。って俺は思う」

「はい」

「今も恨まれたり、憎まれたりしているなら根本から考え直さなきゃだけど…」

「そんなことないです！」

「… っつて尋人が言うんだから、さ。いま一緒にいるのが幸せなら、それが正しいんだよ」

「はい… っ」

ぎゅっ… と抱き締めあつて、二人の顔には笑顔。

大好きな人がこんな近くに在ってくれることへの感謝と幸福を噛み締める。

「… あ、でも、じゃあ何で…」

「え？」

「！ い、いえ、何でもないです！」

聞き返した途端に顔を真っ赤にして否定する尋人に、中流は意地悪な笑みを作る。

「なんだ？ 隠し事はナシだぞ？」

「隠し… そんなんじゃ… ！」

「じゃあなに？」

「何でも… っ」

「ひろと」

「ひっ、ひえんひゃい… っ」

「言えよ」

頬をつままれ、ぐにぐにされて、痛くはないのに泣きそうになる。

「ひどいです先輩… っ」

「尋人が素直じゃないから」

「素直に言える話じゃないです」

「どんな話だ」

「だから…っ…その…」  
「ん？」

聞くまで絶対に引かないという中流の態度。

尋人は本当に泣きたくなって、顔は真っ赤に。

声は掠れて。

「……………だから…それが…原因じゃ…なかったら……………  
……………なんで先輩と……………え…エッチ…出来ないのかな、って……………」

「言われたことがすぐには脳に伝わらない。」

いや、脳には伝わったかもしれないのだが、うまく伝達されて来なかった。

「は？」

しばらくしてようやく聞き返せた中流に、尋人はヤケになりそう  
だ。

「だってあの魔物が言っていたんですっ、心の底では恨んでいるか  
らとか、そういうこと…だから、…………っ」

「……………だから…？」

「だから…っ！」

真っ赤な顔で。

泣きそうな目で。

つまりは何だ、そういうことか？

「……………尋人、おまえ俺としたいの？」

「……………！」

ただでさえ赤かった顔がなお赤く。

潤んだ瞳は、なお潤んで。

「……………なんてイキナリ……………って、だっていつから!？」  
こちら、わざわざ一族の力で性欲を抑え込んでいたのだ。

尋人がその気になっていたら、今までの我慢は何だったのか。

だからといってそれを本人に聞くのもどうかと思うが、素直な尋  
人は、素直に答える。

「……お……お風呂……で……首……の……」  
「首？」

「……っ……夜……寝れなくて……」

「……」  
「そ、その後……怖い夢とか、見て……先輩と離れて……なんか……その……」

「……」  
「なんか、その。」

「……っ」

中流は息を吐き出した。

長く、長く、息を吐く。

「せ、先輩……？」

呼んでくる瞳の稚さ。

愛しい感情が溢れ出る。

ドキリとして、好きだ、と改めて思う。

「……おまえがその気になったなら、我慢するのちめるぞ……？」

「え、あ……」

「抱くぞ？」

「……」

低い囁きに、咄嗟には答えられずにいると、待ちかねたように唇が重ねられた。

「んっ……」

ほんの少しの驚き。

……けれど逃げない。

受け止める。

その、熱を。

「……怖い記憶なんて、俺が上書きしてやる」

「……はい……」

「ずっと一緒だ」

「はい……っ……」

口付けは甘く深く。  
睦言は密やかに。  
熱い指先、熱い唇に熟れる身体。  
もう、貴方しか見えない。

「……っ」

「……？ 先輩……？」

不意に止まった動き。  
辛そうな顔。

尋人の上に倒れこんで、どうにもその様子がおかしい。

「先輩……？」

呼びかける尋人に、中流は泣きそうな声で言う。

「……… 血、足りねえ………」

「……」

血、足りない。  
当然だ。

傷口は塞いでも流れ出た血までは戻せない。

里界人の血は輸血も出来ない。

クラクラするとさつきから言っていたのだ。

そんな身体で興奮するような真似は出来るはずがない。

「くそぉ……っ」

「……っ、あははははは」

「笑うなっ」

「だって先輩……っ……だって………！」

珍しく大笑いする尋人に、いつしか中流もつられて笑い出す。

「もう寝る」

「それがいいです。早く身体回復させて下さい」

「……… 今度こそ、だからな」

「はい！」

二人の言葉に伴う笑顔。

もう大丈夫。

今度こそ。

今度こそ、ここからが二人の幸せへのスタート地点。

## 貴方の翼が堕ちても 結

憎しみ、なんて根深いものじゃなかった。  
つまらなかつただけ。

何か面白いものになりたかつただけ。

“自分”を変えられるなら、きつと、なんでも良かったんだ。

望んで。

望んで。

周りで人が消える。

騒ぎが起こる。

“誰”がやったかなんて知らない。

ただ楽しかった。

それが“俺”が求めて得た変化だったから。

人が消え。

物が壊れ。

友人が狂っていく。

それも楽しかった。

“普通”じゃないのが最高だった。

衛をヤツてやろうと思ったのも暇潰し。

松本の妙に冷めたところが気に食わなくて、からかってやるつもりだった。

そしたら衛の方が気に食わなくなった。

冷めた眼。

バカにした眼。

気に入らなくて、何度も、何度も、松本の知らないところでも滅茶苦茶にしてやったら衛は死んだ。



化け物と一つになって“俺”はそれも吸収して今までより面白い力を手に入れた。

柴田も仲間にした。

楽しかった。

人間でいるより、全然。

人を襲った。

妖は逃げたがった。

“俺”は放さなかった。

だって、それが楽しかったから。

\*\*\*

「

流焔は目を閉じる。

心の奥、里族により一つにされた人間の魂を見る。

「……………何を泣く」

泣いている声がする。

これは何だ。

激怒、憎悪、悔恨、…哀惜…？

自分を汚し死に追いやった者の死に涙するのか？

自分を売った者を許したかと思えば、そんな奴の為にも悲しむと？

「人間の感情は判らない…」

呟く妖を「衛」と呼ぶ声。

現れたのは人の母親。

「衛、これ直しておいたから持っていきなさいね」

「

母親は言い、ボタンを付け直したシャツを置いていく。

流焔はそれを手に取り、心の奥底へ問いかける。

「……ありがとう、と言えればいいのか」

問い掛けに、心が震えた。

…笑った？

「…いまのは笑うところなのか？」

また、笑う。

人間の感情などまったく判らないと妖は思う。

だが、気分は悪くなかった。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3284c/>

---

二度目の楽園

2010年10月8日13時27分発行